

魔法少女リリカルなのはZ

りおんざーど

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世で何をするでもなく無気力に過ごしてきた少年は望んだ世界に転生した後どう過ごしていくのか。

力をどう使っていくのか。

思いつきで書き投稿しました。

クソみたいな駄文で、文法も何もかも滅茶苦茶。

それでも、妄想が止まらないのでそれを文章にすることにしました。

思いつきなのでプロットもなく、適当です。

目次

転生期	
転生	1
回想そして	39
転生者同士の和解	74
無印編	
なのは、魔法との出会い	100
ジュエルシード、封印!!	131
プールで封印 更なる高みへ	173
街で発動!? 大きな樹が出て大混乱	219
もう2人の魔法使い登場 猫屋敷での	244
初邂逅	244
なのは敗北 海鳴温泉で魔法戦闘	275
街中での強制発動 暴走するジュエルシード	301
謎の組織登場 介入、時空管理局	330
アースラで模擬戦 謎の管理局員	353
俺は究極生命体 スタンドさえも使用可能	375
海上での決戦 最後のジュエルシード	399
仲直り 大きな犬って、アルフさん?	399

明かされる真実
あれっ…俺は？

428

過去を取り戻す プレシアの悲痛な叫

456

び

何とか決着 消えるアカマタ、そして

485

俺

ただいま皆 帰ってきた保和歩栄

536

空白期間

俺 管理局に入ります

界王界で大試合 あの世一武道会に参

加だ

570

なる名前を！

593

王の財宝へゲート・オブ・バビロンの
秘密 その先には神の宮殿

なんとビックリ 地下には既に住人が

615

A's編

新たな戦い 襲撃されるなのは

640

破れる結界 そして、なのはがっ！

661

歴戦の勇士ギル・グレアム登場 これ

からに向けての前準備

帰ってきた2機の相棒達 叫べ、新た

715

強大な龍の力 異様な結界内戦闘

788

闇の書の呪い 愛する家族の為に

838

次元世界の記憶が眠る場所 超規模

データベース 無限書庫

867

黒き龍の力の暴走 斬り裂け！ コラ

プサー！

910

無限書庫での調査 判明する闇の書の

呪い

938

無慈悲な募集 繰り返された悲劇

982

振るわれる闇の書の力 流す涙は主の

為に

闇からの脱出 祝福の風を起こせ

1069

闇の書の闇を破壊しろ 喰らえっトリ

ブルブレイカー!!

1113

地球と月での同時戦闘 鉄の鼠は予想

以上に強かった

1150

月の裏側での激闘 叫び覚醒する力

1178

倒せ、鉄鼠を！ 初めての元気玉

1207

夜天の書に残されたバグを消去しろ

戻る平和と未来への不安

1243

編 THE BATTLE OF ACES

魔導騎士を目指して はやての魔法特

訓

1288

転生期

転生

時刻は12時間表示にして午前2時。草木も眠る丑三つ時というものだ。

窓の外は、チカチカと点滅している街灯以外の光源は存在せず、真つ暗だ。家の前の道路には乗用車が走っているのか、時々エンジンや排気音などが聞こえてくる。その他にも、夜遅くまで遊んでいるであろう学生達のはしゃぐ声も、静かな夜の街の中を一的に騒がしていく。それ以外は特にこれといって無く、実に静かなものだ。

電気も付いていない暗い部屋の中で、俺はパソコンを起動してアニメを見ている。

大音量にしている所為なのか、繋いであるヘッドホンからは小さく音が漏れだしてしまっている。一瞬だけヘッドホンを耳元から離してみても、聞取り難いとても小さな音が聞こえてくるだけだ。上手く聞き取れない程の音量なので、別段気にする程の事でもないだろう。

明るく光を放っているモニターに映っている映像は、次々と、目まぐるしいスピードで変わっていく。いや、聞こえてくると言える程の音ではない。

そのアニメには、数えきれないほど沢山の美少女キャラクター達が出てきており、主

人公と思われる男の子が囲まれて、彼等は実に楽しそうにして青春を謳歌している。

「ハハッ」

それを見て、静かな部屋の中を乾いた笑いが木霊していく。その空虚な音は、広い部屋の中を反響していき、自分がたった一人である事を思い出させてくる。そして、その事を思い出してしまう回数だけ自分というものが嫌になっっていくのだ。

「はあ……」

アニメというものは、見ている分には面白い。そうではあるのだが、そうであると同時にたったそれだけでもあるのだ。楽しさを感じる事は出来るのだが、それもそういった事をしている時間だけの出来事である。刹那的に、瞬間的に、一時的に、その場だけを楽しむことは出来る。繰り返すが、たったそれだけの事なのだ。

それが終わると自分は何をしているのだろうなどという疑問が出て来る。

そうしていると同じようにこのままでは駄目じゃないかという焦燥感や焦りなどを感じ始めて、それらが頭の中で一杯になる。そしてそれが徐々に大きくなり、潰れそうな程の強い不安感が襲ってくるのだ。

それらから必死に逃げるかの様に、また別のアニメの鑑賞やゲームをプレイしたりしてそういった現実から目を背けて、一時的であろうとなかろうと逃避行動を選択するのだ。

「……頭痛てえな」

酷くガンガンとした痛みが頭を襲う。

此処最近、ずっとと言っても良いくらいの頻度で起きている。割れてしまうのとはと思ってしまう程の大きな痛みが疾走り、ズキズキと痛みがするのだ。まるで何かに、荒縄の様なものに締め付けられているみたいに。

頭痛薬を飲んだとしても大した効果は無く、意味は存在しない。寝る事でしか和らげず、俺にはそうして痛みを引かせる事しか出来ないし、知らない。

だが、身体があげているそういつた大きな悲鳴を無視しながら、アニメを見るという行為を続ける。

頭が痛いから寝たいという欲求よりも、今の俺にはアニメを見たいという欲望の方が強い。

毎日の事なので、ある程度の痛みであるのなら我慢をする事が出来るので、そのままでいるのだ。

「……つまらない」

小さな声で、自分にしか聞こえてこない程の大きさの声で、ボソツと呟く。

何度も繰り返し返すが、アニメというのは面白いものなのだ。

——どう面白いのか？ などと聞かれたとしても上手に答える事が俺には出来

ないだろう。

やりたい事も無く、何かをしようという意欲も意思も無い。

する事が、出来る事が他に無いのだからアニメを見たり、ゲームで遊んだりしているのだから。惰性で行なっているそれには、大した理由も意味も存在はせず、目の前に繰り広げられているそれら全てが何の面白みもない茶番の様なものに思える。一時的に盛り上がりはしたとしても、結果的にはその時だけのものであり、熱が冷めると同時にどうしてこんなものになんて思ってしまう事は毎日の様にあるのだ。

「喉渇いたな」

今見ているアニメには、携帯電話片手に持ちながらジュースを飲んでいるキャラクターが映し出されている。

それに影響を受け、感化されたのか。それとも乾燥していて密閉された部屋という空間に長時間居続けた事が原因なのだろうか。どうやら俺の身体は、水分を欲しているようだ。

言葉に出してしまう程のその強い要求を呑むために、俺は1階にある台所へと向かう事にした。

出口である扉へ向かい、部屋の外に出る。

外の空間は、実に静かなもので、肌に当たる空気が軽く、とても冷たく感じられる。部

屋の中で温風機の電源を入れていたからなのか、そう思われた。

家族はグッスリとして、寝静まっている。

時折聞こえてくるのは、父親の大きないびきくらいだろう。仕事による疲れが大量に残っているみたいだ。

寝ている皆を起こしてしまわない様に、そうして目を覚まさしてしまわない様にと出来るだけ音を立てない様に、そつと細心の注意を払いながらゆつくりと階段を降りていく。

「ごんだけ大きいんだよ」

1階である下に降りても、父親のいびきは、はつきりと、鮮明に耳に届いた。

台所に着くと、自分が普段使用している専用のコップを食器棚から取り出す。

隣に置いてある母親の使っているコップと当たってしまい、カチャリと軽い音が鳴り響いた。

水道の蛇口を軽く捻り、そこから吐出される水道水の中に入れていく。目安ではあるのだが、ある程度の水を入れると、蛇口からの流水を止めて、電子レンジの中に入れる。

「これくらい時間で良いかな……？」

ボタンを押して設定した時間は1分50秒だ。

自分は猫舌なのだが、熱いものは飲むことが出来る。だが、嫌なのだ。かといって逆

にぬるすぎるのもまた、同じように嫌いなのだ。少しずつ温めて調節していくしかないだろう。

ボタンを押して温めている間に俺は、トイレに向かい用を足す。窓から見える月が綺麗に光っていて、少しの間、俺はポツポツと見惚れてしまう。

終わると洗面所に移動し、手を洗う。

その時に、ふと鏡に写る自分の顔が目に入った。見たくもないのだが、それをじっと見てしまう。

——ああ、なんて顔なのだろうか。

汚けがらしいと同時に汚きたならしい。見るに堪えない程だ2日前から剃っていない為に無精髭が乱雑に生えており、顔の至るところには膿が出来ている

肌はカサカサと乾燥しており、頭髪には数本と言えない程の無数の髪の毛が白く変色してしまっている。頭皮のカサつきが原因なのか、フケが大量に発生していて、肩に乗っているそれがやけに目立ってしまった。口を開くと八重歯があり、上手に歯磨きが出来ていないが為に歯垢がたくさん残っている。歯茎も見ていられないくらいに膿んでいて、もうどうしようもない程の状態だ。そして、目が死んでいる。死んだ魚の様でもあり、ドブ川のように腐った色をしているのだ。

鏡に映っている嫌いな自分自身の顔を見ていると、台所からピーピーといった電子レ

ンジによる電子音が鳴っているのが聞こえてくる。

どうやら指定した時間が経過して、温め終わったみたいだ。

十分に温められたであろうコップを取り出して、お湯の中に粉末を一匙分入れ、スプーンを手に取り、円を描くように回して混ぜる。ある程度、それが溶けたのを確認すると、口元にそれを持っていく。

インスタントコーヒーが持っている独特の匂いが鼻を打つ。

ゆっくりと口に含み、渴いている喉を少しずつ潤していく。

「温かい……」

どうやら俺にとつては運良く、ちょうど良いくらいに温められていた様だ。

ゴクゴクと喉を鳴らしながら食道を流れていくそれは、確実に水分の補給を実現し、身体中に、その温かさは染み渡っていく。そしてそれは冷えている俺の身体の温度をジーンワリと上昇させていった。

飲み終わった後のコップを流し台へと置き、水を張る。

一時停止をしているアニメの続きを見る為に、ゆっくりとした足取りで階段へと向かう。

この時もまた、音を立てないように静かに登っていく。ギシギシといった音が鳴ってしまうが、爪先からかかとへとという順番でゆっくりと段に足をつけていく。その登り方

により、先程まで鳴っていた音は、ただ登っているだけの時と比べてより小さくなる。

「え!？」

登っている最中に、突然だが目眩がした。頭がクラツとする。

謎の浮遊感を感じ、そのまま頭の方から登ってきた1階の方へと身体が静かに落ちていく。

落ちきつてしまう迄の、それまでの時間がとても長く感じられる。

感じるだろうと予想出来る強い痛みは、おそらく一瞬だけだろう。

「(……死ぬのか?)」

——自分はこのまま1階の床へと落下して、死んでしまう。

ただ階段から転げ落ちてしまうだけの筈なのに、何故かそんな事を自然と理解する事が出来てしまった。

落ちていく自分には、周りのものはゆっくりと見えている。落ちていくスピードがやけに遅く感じるのだ。

碌に動けもしないのに、必死に身体を動かそうと試してみるが、動かす事はもちろん無理であり、その間の時間が刹那的であり無限の様に思われる。

その間には、考える事が、考えてしまう事が沢山出てきてしまう。

「(ああ、そうか……)」

思い返してみると、総じてつまらない人生だった。此れといって何の面白みもないのだ。

何をするでもなく、何かを行い、何かを残したという訳でもない。ただ日々をダラダラと、のらりくらりとして、両親や祖父母の脛を噛りながら暮らしているだけ。

しなければいけない事なんていうのは沢山あるくせに、やる気も無く、意欲も無く、やりたい事も無く、アニメを見たりゲームをしたりしているだけのタダ飯ぐらいのプー太郎。

そんな自分自身という存在が嫌で、嫌で仕方が無い。変わらないと駄目だとは思えるのだが、それでも変わろうという意思が湧き出てこない。それがもどかしくて、とても悔しい気持ちを抱え生きていく。

常に、毎日の様に自分を責め立てて、自分という存在に対して否定をし続ける。

人生のうちで1回きりであり、最大の逃避行動出る自殺。そんな事を考えてみるも、一般的に知られている勇氣とはまた違った方向性の、それを実行するだけの間違った勇氣を振り絞る事すらも出来ずに、毎日を、そういった日々を過ごしていく。

そうでなくても毎日のように自分に自分の事を生きているだけ無駄、生きている理由も価値も無い、死んだ方が良いなんて思っているのだ。

両親や祖父母などの家族、親戚や友達に多数の知り合い達。沢山の人達に大きな迷惑

死んだ後に、自分はどうなってしまうのか。死後には天国や地獄のどちらに逝ってしまふのか。そしてそもそも、そんなものは存在しているのかどうか。

「(ま、地獄だろうな)」

そして、まだ見ていないアニメが、見直したいアニメが、していないゲームが、したいゲームが、読んでいない漫画やライトノベルが存在する事。

そういったサブカルチャー的なものの事ばかりを考えてしまい、頭のなかを占めていく。

「(最後の最後にこれかよ……)」

自嘲する。ただただ自分の考えている事、考えてしまう事に対して嘲笑わらえてしまう。

最後の最後まで、今から死んでしまうというその最期の時まで自分という存在はクズの部類に入っている、属している人間だったのだから。何処までも自身の持つ煩惱にまみれた存在なのだから。

ヒンヤリと冷えている床に頭が勢いよくぶつかる。

身体と頭の位置が本来とは逆であり、首に存在している骨が頭部の重さに耐え切れずにグキツという音を立てながら折れてしまう。

「(俺ってほんとバカ)」

薄れていく意識の中で、最期の最期まで自分自身という存在を許す事が出来ずに、責

め立てる事しか出来なかった。

目の前が一瞬にして真つ暗になる。そして2階の方からドタドタとした音が、両親の慌てふためく声が小さく反響しながら聞こえて、次第にそれが遠くへと消えていった。

気が付くと、其処は真つ白な空間だった。

白く、とても白く、純白であり、目が痛くなる程の白い光を放っている場所だ。ただただそう表現をする事しか出来ない。上手く表せる言葉というものが浮かんで来ないのだ。

此処は何処なのだろうか、自分はどうなってしまうのだろうかというそんなありきたりで平凡であろう疑問が、沢山頭のなかをグルグルと駆けまわっていく。

意識が思考という名前の海を泳いでいると、強烈な閃光が疾走り、急に目の前がより明るくなった。

明るくなったというのには語弊があるかもしれない。その光は、もともと其処に存在していて、それを認識出来るようになっただけなのだから。

他の場所と比べて見ると分かるのだが、それは少しもやがかかったような感じをしている。そして、この空間が空間な為に、光っているという事を何とか認識出来るという

だけなのだが。

そして目の前に居るそれは意思を持っている。意志があるのだ。それはものでは無く、何かしらの存在だと、自分よりも遥かに上位の存在だという事が当たり前のようにごく自然と理解をする事が出来たのだ。

「(そうか……)」

そして俺は、自分が死んだという事を知り、悟った。

知ったというのとは少し違うだろう。決して知らなかった訳では無いのだから。ただ、知っているつもりであって、認識をしているつもりであっただけなのだ。

そう。あくまでも、つもりでいるというだけだったのだ。

目の前に居るそれにより、俺は、自身の意思など関係は無く、否応無しに、強制的に、そして自然に、よりはっきりと完全に理解をさせられた。

自分がどうなってしまったのかを。

死んだという事を。

家族を、両親や祖父母達を残して、先に逝ってしまったという事を。

「(くそつ……畜生……。……ちくしょう……)」

酷く後悔をした。強く懺悔をした。凄く涙を流した。

あの時にああすれば良かった、この時にこうしておけば。何故、あんな事をしてし

まったり、言ってしまったりしたのか。

そんな事が頭のなかを占めていく。

自分という、取り返しの出来ない事をしでかしてしまった存在を呪ってしまう程に。

どうしようもないと、時既に遅しなのだという事を理解が出来ているからこそなのか。余計にそれら全ての事が凄く辛く、申し訳無く感じられてしまう。

今の俺には目という部位は存在していない筈なのに、目の前の存在を確かに認識していて、そういつた考えなどに対して涙に似た何か流れ零れ落ちていく。

存在はしていない筈なのに、そういつた気持ちが原因で、小刻みに、時折身体らしきものが大きく震えてしまう。

「(……なんだ?)」

そうしていると目の前の光は、頭に、魂に直接何かを語りかけてきているかの様な気がした。

それはとても自分の知っている言葉とは呼べるものでは無い。いや、ヒトの持つ言語とは全くの別のものなのだろう。

だがそうであっても、それは確かに何かを告げている事だけは理解が出来る。

泣いている子供に対してするのと同じように、何処までも優しく。怖がって不安に震えている人に対し、もう大丈夫だよとも言い聞かせ安心させる様に。

何故かそれが、どの様な意味を持っているのかを理解する事が出来る。

「(あああ……)」

それにより、俺のなかに存在していた何かが、重い何かがスッポリと抜け落ちていく。黒く淀み、歪み、濁りきっていて重い何かが。実際にそんなものに重さは存在しないが、確かにそう感じられ、同時に、心がとても安らいだ。

そうしてその光の存在はまた、俺に告げる。

「(転生……?)」

仏教などにより、よく知れ渡っている輪廻転生の事なのだろうか。もしそうなのであれば、来世はどういったものに生まれ変わってしまうのか。

だが、その疑問は目の前の存在により見事に否定される。

「神様転生」というものらしい。そう聞こえた。そう感じ取れたのだ。

その言葉を受けて、俺は歓喜した。喜びに打ち震えた。

前世での俺は、アニメやゲーム、漫画、ライトノベル以外にも暇つぶしの手段が欲しいと思ひ、その手段の一つとして読んでいたネット小説。

その中でも、俺は特に転生ものを頻繁に、好き好んで読んでいた。特に神様転生というジャンルのものを、だ。

簡単に、そして身も蓋も無い自己解釈による勝手な説明をしてしまうと、人間による

手前勝手な妄想ではあるのだが、神を名乗る謎の存在の手により、特典という名前の特殊能力を貰って、そして前世の記憶を保ったままでヒトに転生するというものだ。そして一言で神様転生と言ってもいろいろなパターンがある。神の失敗により死んだという解釈や死んでいなくても神に選ばれて転生をするなどの豊富なパターンが存在している。

こうありたい、こういう存在で居たい、こうしたい、こんな事がしたい。読んでいると、自分にはその作品にそういう思いが詰まっている様に感じられた。

その気持ちをも、オリジナルの主人公に行わせているだろうと思える作品が沢山あった様な気がする。

俺はそれを読んで、想像し、妄想し、強く願った。望んだ。自分にもこんな事が起きれば良いのに、こんな力を持っていれば、こんな事が出来ればなど。

それが実現するのだ。叶ってしまったのだ。喜ばずにはいられない。

そして目の前の存在は、どんな世界でも、どのような力でも構わないと、そう告げた。そのように、光は語りかけてくる。

それにより更に、俺の心は舞い上がった。好きな力を使える様になる、好きな世界で好きな事が、好きな様に、好きなだけ出来る事に。

自分に対して、あまりにも好待遇であり、都合が良すぎる展開に、恐怖を感じている

と同時に、どの様な願いにするのかを思い出していた。

死ぬ前の生活において、あらかじめ考えて、妄想をしていたものを望み、要求をした。それは、快く承諾をされて、転生の準備がなされる。

「——あれ？」

意識が、自分というものが薄くなつていく様な気がする。

全てが、真つ白だった世界が黒く、真つ黒に染まつていく。深く、深く、谷底へと、奈落の底へと落ちて行くかの様な、落下をしている様な錯覚が感じられる。

意識が完全に消えかかるその前に、目の前の光である存在は、ヒトのようなカタチをしている様に見える、感じられた。

そして、俺の意識はテレビの電源を切ると同じように、線が千切れてしまうかの様にしてプツンと途切れた。

淡く、薄い光を感じる。人工的に造り出された光だろうか。

コポコポといった液体が立てるであろう音が耳元で鳴っている。今の俺は、何かしらの液体の中にも居るのだろうか。

「……………」

「………」

自分の前には誰かが、2人ほどの人物が並び、話しているのが聞こえてくる。

水や、それとは別の何かを挟んでいるのが原因なのか、上手く会話を聞き取る事が出来ないのか、何を言っているのかがよく分からない。そもそも、それは自分が知っている言語なのか、自分の知識内に存在している言葉なのかどうか分からないのだから。

だが、その言葉はどのような意味を持っているのか、どういう気持で話しているのかは、何となくだが理解をする事が、想像する事が出来る。

何処か喜んでいるかの様に感じられるのだ。何か嬉しい事があったのか、欲しいものでも手に入れる事が出来たのか、目標にしていたものが達成できたのか。それは、小さな子供が欲しいと思っていた、新しく発売されたであろう新品のおもちゃを買っても貰えた時のように弾んでいて、純粋な喜びという感情を感じ、想像させてくる。

少し、気になったので、眼を開いてみる。慣れていない所為なのか、光がやけに眩しく感じられ、開けた目は一瞬で細くなってしまう。

「………」

目の前に立っている、1人のヒトは俺に向かって何かを言っている様だ。

相変わらず何を言っているのか聞き取れずに、困惑をしてしまう。

だがそうであっても、その言葉が、それがどのような意味をしているのか、どういっ

た気持ちで喋っているのかという事のだいたいを察し、理解をする事が出来た。

——誕生、おめでとう。

——生まれてきてくれて、ありがとう

と。

意識が覚醒していく。

自分の身体は、今の俺はどうやら何かしらの液体に包まれている様だ。

口元にはマスク型の人工呼吸器が付いている。

俺が今居る此処は、まるで母親の胎内であるかの様に、不思議と謎の安らぎを与えてくる。

「(それよりも、状況の確認をしないと)」

眼を開くと、水が目のかなかに入ってくるが、そんな事は気にせずに、周囲を見渡しみる。

目の前には、ガラスのように透明で、頑丈な何かがあり、水が漏れないようにと塞ぎ、中と外の空間とを遮っている。ガラスの外側には黒い膜が張られているのか、目の前は真つ暗であり、外の様子を確認する事が出来ない。

「(とにかく此処から出てみないと、な)」

自然と自分には何が出来るのか、自分はどのような力を持っているのか、そしてどの様にすればその力を扱う事が出来るのかが理解出来た。

意識を集中させていくと、自身のなかに、何か温かいものが存在しているという事を感じ取る事が出来る。そして、それをどのように操作すれば、どういった事が起きてしまうかという事もまた、しっかりと理解出来る。

「（これが“気”、なのか……？）」

自身の思う様に、その理解をしている方法で、身体の内側に存在している温かい体内エネルギーである気を、周囲へと一気に開放し、爆発をさせる。

その爆発の結果、自分の身体を包んでいた液体は一滴も残さずに蒸発し、それが入っていた容器が、口元にあつた呼吸器も一緒に粉々になり、飛び散っていく。

「うっ……」

支えるものが無くなった事により、身体は重力に従い、引かれているかの様にしてドーンという大きな音を立てながら、床に向かって倒れてしまう。

直ぐに立ち上がり、切れて血が流れている口元を手で拭いながら、大きく周囲を見渡してみる。

「此処は、研究所か何か、か……？」

声が、しっかりと出る事に安心し、再び周りの確認をする。

辺りはとても静かで、ヒトやその他の動物を始めとした生命体の気配というものが、一切も感じる取る事が出来ない。

その代わりといつてはなんなのだが、何かしらの機械群がズラアツと目の前に並び存在している。ウインウインといった機械音が鳴っているところから判断すると、正常に起動し、動いている様だ。

「……………」

手を握り閉めて、そして開いてみる。それを3度ほど繰り返していく。

次に、身体に異常が無いのかどうか、どの様な感じなのかを知る為に、目を閉じて、意識を集中させていく。

五体は満足で、生涯一切病気になる事の無い恒常的健康体。

身体には、細胞と一緒に、ナノマシンが使用されている。それにより回復能力は、常人を遥かに凌いでいる。その為に、怪我をしたとしても、ものの数秒ほどで綺麗に塞がってしまい、同じ方法では、同じ様な事では怪我をしない様になるという耐性の様なものが身に付く。

“リンカーコア”にも異常は見受けられない。

尻尾にも、何の問題も存在はしていない。

そう、俺の身体には尻尾があるのだ。それは毛に覆われている事でフサフサとした感

触をしている。見た目を言葉にしてみると、猿の尻尾の様な感じだ。

「問題は無いみたいだな」

自身の身体の確認を終える。

これといった異常も無く、一安心というものだ。

気になる事といってしまえば、転生前と現在である転生後の違いだ。

尻尾が存在していて、声と身長の変化だ。

声の方は転生前と比べて、小さな子ども特有の甲高さに加えて、落ち着いた感じをした声と言えるだろう。まあ、主観によるものなのだが。前世とは違って、滑舌も良く、しっかりと喋る事が出来ている様な気もする。まあ、これは主観によるものだが。

そして、身長の方だ。こちらは、前世と比べて、格段に低くなっている。転生時のサーブスの様なものなのかどうかは分からないが、前世の時の半分くらいの目線の高さだ。

「はあ……」

ふと、破壊したあとの生体ポッドのような何かに使われていたであろう耐水圧ガラスの破片が気になり、そちらに目を向けてみる。

目にしたそれを疑うようにして瞬きをし、大きく瞳を見開く。そこには、信じたくないものが映っていたからだ。

映っているのは当然ながら自分の姿だ。前世時の、見るに耐えられない程の醜悪な姿

とは違い、やけに整った顔立ちをしている。これは良いだろう。ブサイクよりもイケメンだという方が気持ち的にもプラスに働く。加えて、前世で少なからず顔に関してはコンプレックスがあつたのだから。

だが、髪の毛は綺麗な金色をしていて、瞳はオッドアイだった。左は紅玉ロートで、右が翡翠グリュールの虹彩異色をしているのだ。

この姿は、この世界において、重大な位置に存在しているキャラクターの特徴とほぼほぼ合致している。

これは自身が望んで、頼みには入れてはいないものだ。頼んだ覚えの無いものなのだ。

「マジかよ……」

これには、流石に驚き、血の気が引くかのような錯覚を感じ取る。

「かのじよ聖王」の血を引いてしまっているのは、ほとんどの確率で……いや、確定といつても良いのかもしれない。

「面倒なことになるだろうな……ここは、変身『魔法』を使うべきか……」

体内のリンカーコアを動かして大気中の『魔力素』を取り込み、その『魔力』を回転させていく。

身体の周りを、カイゼル・ファルベ『虹色の光』が発生し、空間内を明るく照らしていく。

「よし、取り敢えずこれで良いだろう」

光は一瞬にして消え失せ、再び部屋は薄暗くなる。気持ち切り替えていく。

此処がどのような目的で造られた施設なのか、本当に誰も居ないのかを調べる為に、この建築物の中を風潰しにして探索をする事にした。

「ずっと続いているのか……？」

決意をして、部屋を出てからどれくらいの間が経過したのだろうか。

この建物はどのような構造をしているのか分からないが為に、今が何処なのか、どのような場所に居るのかを判断をする事が出来ないのだ。

最初に居た部屋から出て、左の方へと向かって道なりに歩いてはいるのだが、同じ様で一向に代わり映えないその景色に対し、この廊下は延々と続いているのではないのだろうかといった不安が襲い掛かり、嫌気が差してくる。

「本当に誰も居ないのか……」

どれだけ歩いてみても、見かけたドアを開けて部屋に入ってみても、中にはヒトも他の動物も存在はせず、これといって目に止まるようなものも置かれてはいない。

ただただ、それを繰り返していく度に、大きくガツカリとした気持ちになり、肩をションボリと下げる事の繰り返しだけなのだ。

「あー！」

半ば諦めながらも暫くの間を歩いていると、目の前には大きなドアがあつた。どうやら、この方向ではそれが最後のドアであり、行き止まりでもある様だ。

「出口か何かなのか……」

近づいてみるとそれは自動ドアだったのか、センサーに引つかかつて、音が鳴り、ひとりでに半分に割れて、それが両端へとスライドをしていく。

部屋の中には、無数の机と、その上にはパソコンが設置されているだけだ。あとは、遠くにもまた、入ってきた方のもものよりも数倍程も大きなドアらしきものがあるだけだった。

パソコンは長時間動いているのか、カタカタと大きな音を鳴らしながらモニターを光らせている。

室温は高く、パソコンが放つ熱によるものなのか、室内はとても熱く感じる。

「調べてみるか」

先程まで覗いていた殆どの部屋には、調べる必要のありそうなものはこれといって無く、見て回るだけの行動を繰り返していただけだった。

強いて挙げるのであれば、ちょうど良いくらいの大きさをした上下セットの服を見つけて着用しているくらいだ。

だが、今回の部屋には運良く起動しているパソコンが置かれている。

調べてみる事ですか、この施設に関する情報、そしてそれを始めとしたこの世界の情報を知ることとは出来ないであろう。

この世界に存在しているパソコンなどの操作方法や規格などは、前世で使用していたものとは全くの別物と考えても良いだろう。だが、それがどうしてなのかは理解する事が出来ないのだが、それを当たり前のように操作をする事が出来た。

いや、知っているのだ。あらかじめ、そういった知識をインプットされていたのかどうかは自分ではあずかり知らぬ事なのだが、その機械に関する知識を本棚から自然と引つ張りだす事が出来た。

カチカチといった音を鳴らしながら、素早く机の上に映しだされているキーボードを叩き、タイプピングをしていく。

そうして、そこからこの施設の事、この世界の、この時代におけるある程度の情報を探し出し、得る事が出来た。

先ず、この世界は俺の望んだ通りに「魔法少女リリカルなのはシリーズ」というアニメの世界似た世界から分岐して、誕生した「並行世界」の1つだ。

今居るこの世界。いや、星は現地名でいう地球。//第97管理外世界//だ。年代の方は西暦2003年。//新暦//にしてみると63年であり、1月2日だ。

「原作介入するか、しないでいいか。どうしようかな……」

希望通りの世界である事に安堵をしながらも、この先の事を考えると頭を抱えそうになつてしまう。

この世界は、アニメでの世界と同じ様に事件などが起きて進んでいくだろう。

それに対して、自分から進んで、頭を突っ込んでいくのか。それとも、逃げ腰でひっそりと暮らしていくのかの2つの選択肢が浮かんでくる。

どちらにしても聖王かのじよの血を引いているのだから、巻き込まれてしまう可能性は大いに存在しているだろう。

「はあ……」

そんな事を考えてしまう。そして、大きな溜め息が零れ出る。それは、自分以外存在はせずに居る空間内を、パソコンの音と一緒に鳴り響く。

「あれ？」

パソコンをある程度触り終えて、その横に何かが置かれている事に気が付く。それは、腕輪のようなものだった。丁度、自分の腕にぴったりと合わさるかの様な大きさだ。

「『デバイス』か？」

その腕輪には、いろいろなボタンが存在している。そして調べてみると、それは本当にデバイスだった。

デバイスというのは、「魔導師」が魔法を行使する際に使用する杖の様なものだ。魔法を使う時に補助として用いる道具というだけなので、あからさまに杖の様な形をしていなくても問題無いのだ。さらに、それを使わなくても魔法は行使する事が出来る。繰り返すが、あくまでも補助道具なのだ。そして、それは「魔法プログラム」を保存しておくハードディスクの様な機能を持っている。魔法の他にも、いろいろなものを量子変換して収納する事も出来る。有り体に言ってしまうと便利アイテムのようなものだ。

「ほう……」

どうやら、これは「ストレージデバイス」の様だ。しかも大容量の。

中にはキャッシュカードが2枚に、鍵などが入っている。

さらに触つてみると、空間上にモニターの様なものが出現する。それには厚さというもの無く、このデバイスから映しだされている様だ。そして、その「空間モニター」には何処かの住所や座標が表示されている。

「この施設に居た『違法魔導師』の仮住居の様なものか？ 使わせて貰おうかな」

前世で教育を受けて、培ってきた良心が痛む。

だが、この世界で生活をしていく為の基点である場所が無いのだから仕方がないだろう。

入室して来た時に、視界にドカツと入ってきて、奥に存在している大きなドアの方へと向かう。それもまた、自動ドアであったのか勝手に開いた。

「……………夜か」

開いた扉の向こうは外に繋がっていた。

空は吸い込まれそうになる程に暗く、草木が生い茂っていて、月の光が僅かにだが周囲を優しく照らしている。

空気は少しばかり不味く感じられる。大気などが廃棄汚染などの所為なのか汚れているが、それ程気にする必要も無いだろう。ヒトが、動物や植物が繁殖して、元気に生きていくのだから。

その他には、草や樹の葉のものか青々しい匂いが、腐葉土特有の匂いが鼻につく。

「良かった……満月」じゃなくて」

今日の空を照らしているのは三日月だ。

その事に大きく安堵をしながら、このままでは不味いであろうと思い、
“稀少技能”である“スキルメイカー”を使用する。

創りだすスキルは1つだ。

好きな時に全“次元世界”に存在している情報の中から任意に好きな部分の情報を引き出して閲覧する能力。

意識は、深く沈んでいく。周りから発せられている音や空気の流れ、匂いなどといった五感に関するものが、一時的ではあるが消失する。

「ふむ……」

閉じていた目を開けて、深呼吸をする。

山の空気は、木が光合成をしても、それが追いついていないからか、少し不味く感じた。

「近くには、不法投棄でもされたゴミがあるとか……。無いな……」

引き出して閲覧した情報によれば、俺以外の“転生者”が多数存在している様だ。

彼等、もしくは彼女等全員が、友好的な性格をしているとは限らない。出来得る限りだが、距離を取って、様子を窺っておくべきだろうか。

聖王かのじよの血を引いているという証拠を隠蔽する為に、変身魔法を使用し続けているのだ。近くに居るといっただけでも、たちまちのうちにその魔力は感知されてしまい、俺が転生者であるという事に気付かれてしまうかもしれない。いや、近くでは無くとも優れたデバイスの補助があれば、その転生者などの魔導師が優秀であり秀でた実力を持つているとすると、直ぐに感知されバレてしまうだろう。

「ホントどうしよう……」

考えれば考える程に、マイナスの方へと、消極的な方へと傾いてしまう。

それに、この身体は小学生程の肉体年齢をしているのだ。このままだと、小学校に通う必要が出て来るだろう。

変身魔法をもう一度発動して、大人の姿になってしまおうというのなら問題は無く、良いのかもしれない。

だが、この身体は、現在の状態だと子供の肉体なので、長時間の行動を取る事は出来ないであろう。

どちらにしても詰んでいるであろう。そういった理由から、大人しく小学校に通った方が良いのかもしれない。

だが、その前には戸籍を作りだす必要があるだろう。今の俺にはそういったものが無い子供の不審者であり、不法入国者のようなものなのだから。

そういった事に、強く頭を抱えたいくなる。

そうしてまた、この状況を打破すべく、意識を集中させていく。

創りだすのは1つのスキルだ。

どのような状況や環境であろうとも謎や疑問を瞬間的に、その時に適した答えというものを出し出す事の出来る能力だ。

「これで良いかな……」

スキルを創りだし、少し考え込む。

戸籍をどの様にするのか、そして小学校に通うのかどうかを。

そうして、スキルの効果により結論が導き出される。

心が痛むが、暗示魔法などといったものを使用して戸籍を作り出して、改竄をする事になった。

「取り敢えず、此処から離れないと、な……」

後ろを振り返って見てみると、その人工物はかなりの大きさを誇っていた。成長し生い茂っている木々により隠れてはいるのだが、ヒトに見つかっていないという現状が不思議なくらいだ。

今のところは問題無いのかもしれないが、いつかに目の前に存在している建築物が誰かに見つかり、知られたりする訳にはいかない。この施設には、データだけではあるが、あまり良いと言えるようなものは無いのだから。

「フン……」

掌に気を集中させて、目の見えるかたちでエネルギー化させる。それは、ブオンブオンという音を放ちながら、月よりも強く、ハッキリと明るく輝いている。

そして、それを目の前に建っている建築物に向けて放つ。

エネルギー弾だ。

その破壊力は凄まじいもので、目前に存在していた建物を一瞬のうちにして粉々にし、跡形も無く消し飛ばした。

「どれだけ気を集中させるかで威力も変わる…意外と難しいな」
大きく舞い上がっている土埃の中で、独り言葉にする。

少しでもミスを起こして、間違ってしまったえば目も当てられない事態になっていただろう。一面が更地になってしまったり、周囲に存在している木々が意味もなく折れて、倒れてしまったりと。

ヒトが、それに気が付いて、近付いて来る可能性もあったのだ。

そして、さらに最悪のケースがある。大地が大きく削れて、地割れが発生して裂け、大地震の後とでもいうくらいに酷く凄惨な被害が出ていたかもしれない。そうなっていた筈だ。

幸いにも、大きな被害を出すことも無く、無事に破壊をする事が出来た。

少し歩いていると、横から強烈な異臭が流れてきているのに気が付く。それは鼻につき、表情は瞬きをする暇もなく歪んでしまう。

「……………本当にあったよ」

そちらの方へと、嫌々なのだが、好奇心の方が強いが為に向かうと、大量のゴミが捨てられていた。

生ゴミによるものなのか、他のものも混じる事で、その場所からはこの世のものとは思いたくない程の強烈な匂いが流出し、漂っている。

ヒトが歩いているだろう道が見付からないので、獣道を歩いていると美味しくないと感じていた空気が、更に強くなり、かなり不味く感じ始めたのだ。そして、鼻を摘みたくなる程の匂いもまた、して来たのだ。

気の所為だと言いつつも聞かせながら進んでいると、この場所へと辿り着いたのだ。

「何でこんな場所に捨てているんだ？」

周りの木は、少し腐っている様に思える。其処にある木々からは、本来生命体であるならば、微弱であろうとも放っている筈の生命エネルギーである気が、他の木々よりも非常に弱く感じられるのだ。

右手の人差し指と中指を合わせて、勢い良く上げる。

すると、クンツといった感じにして、不法投棄をされている大量のゴミの塊が一瞬で跡形もなく完全消滅する。

「フンツ……………道理で空気が不味い訳だ」

カツとなつてやった……後悔はしていないといった感じで、俺の顔は今、清々しい程に良く朗らかな笑顔をしているかもしれない。

消し飛ばしたのは良いのだが、それでも溜まっていた空気は相変わらず不味く感じ、その匂いが原因で、目には大粒の涙が溜まっている。

空気とは、無理に手を加えなくても流れていくものだ。このまま放置しておいても、そのうちに匂いはマシになるだろう。

「ま、根本的な解決にはなつてないが、な……」

ゴミを処理した後にもう暫く歩いていると、目の前には住宅街が入り、広がっていく。施設から抜け出し、1時間程度歩く事で、ようやく文明人の居るべき空間らしい場所へと辿り着いたのだ。

近くにコンビニなどのATMが存在している場所を探す。すれ違う人々が、なにか嫌なものをみたかの様に顔を顰めている。

考える必要も無く、その事に関する答えは導き出された。

臭いだ。俺の身体から自身の意思とは関係無く悪臭が放たれているのだ。

さつき、不法投棄されていたゴミの集合場所に居たのだから、その臭いが染み付いて

いるのだろう。

「しまったな……」

人目が無いであろう場所を探し、その物陰へと移動をする。

気を少しばかり体外へと開放し、微かに感じる程度の強さをした風を起こす。魔力の方もまた、同時に使用してデバイスに記録されている消臭魔法を発動させる。

使つておいてなんなのだが、どうしてこのような魔法がインプットされているのだろうかと疑問に感じてしまう。

そして、もう一度だけ魔法を使用して成人したて程度の大人の姿へと変身する。設定年齢は20歳だ。これで現在の20時という遅い時間に出歩いていても、それ程不審に思われる事は無いだろう。

其処から、もう少しだけ歩いていると右手側前方に、コンビニがあるのに気が付く。

俺は駆け入るかの様に、走りだした。

店の中に入ると同時に、その系列のコンビニ特有の入店音が鳴り響く。

店員による「いらつしやいませえ」といった気怠そうな声を気にする事もなく聞き流し、ATMが何処にあるかを探す為に、周囲を見渡す。

意外と直ぐ側で、出入口の左手の方に設置されていた。灯台下暗しとなつて探し続ける事にならなくて良かったというものだ。

「えつと……」

装着しているデバイスからキャッシュカードを出す。

そのままではもちろん突然何も無い空間から出現したかの様に見えるであろうと思
い、ズボンのポケットの中に展開して、そこから取り出すのだ。

パスワードの方は4桁であり、施設内で、デバイスを弄っている時に空間モニターに
表示されていたので、それを見て覚えている。

手に持っているカードをATMに通して、タッチ画面にあるボタンを押していく。

「(ダニイ!?)」

声には出さないようにと細心の気を配りながら口を強く閉じ、目を見開き驚く。

開いた口が閉じない。

画面に映し出されている金額の桁が可怪しいのだ。0が15個、それ以上もある。

千兆円は確かに入っていて、それ以上は数えようという気持ちが出ない。

だが何かを買うでもなく、ただただ無意味にこの場に居続けているのには、仕事をし
ている店員の邪魔をしそうで、申し訳なくもあり、居心地が凄く悪く感じられる。

俺は、そそくさといった感じに出入口へと向かう。

店員の「有り難う御座いましたあ」という言葉が後ろから聞こえ、自動ドアにより遮
られた。

「まさか、これ程のものとは、な……」

デバイスの中には10枚ほどの枚数の万札が入っている。財布というものを所持していないのだから仕方が無いだろう。

ポケットの中に入れていければ良いのではと思ひもするが、スリに遭ってしまう可能性も存在している。もし、そうなってしまえば目も当てられない。

そして時は流れる。

「今日は皆さんに新しい友だちを、転校生を紹介します。入ってきて良いですよ」

西暦2004年、新暦にして64年の5月17日。海鳴市にある『私立聖祥大附属小学校』。

俺は予定通りに転校生として潜り込むことに成功する。

「はじめまして、『保和歩^{ホッパロン}栄』です。よろしくお願ひします」

回想そして

「はじめまして、保和歩栄ホワブロンです。よろしくお願いします」

保和歩栄。

それが今世での俺の名前だ。読み方はカタカナにするとホワブロンになる。

特典には「サイヤ人」としての力を望み、それが叶えられたのだ。そして、サイヤ人らしい名前にしようと必死に頭を捻って考えだした結果がこの名前だ。

自己紹介をすると同時にだが、目の前で静かに座っている生徒達を見ていく。

パツと見てみると、異常というものなどは存在していないと思える様なクラスだ。ただ深く考えずに見た場合は、そして大人しくして、学生生活を送るのであればだが。

ジツと生徒達を見ている俺の姿は、目の前の皆にとつては多分だが緊張しているのだろうと解釈してくれていると、そう思いたいものだ。

「それじゃあ、ブロン君。あそこの空いている席に座つてくれるかな？」

沈黙に耐えかねたのか、このクラスの教師は窓際にある空席の場所を指差して移動を促してくる。

俺はその言葉に従って、その席へと向かい歩き出す。

歩き、移動をする度に、すれ違つていく生徒達は珍動物でも見るかの様に凝視をしてくる。

まあ、それは仕方がない事なのかもしれない。

ただでさえ転校生というものは珍しい存在だ。況してや他の学校と比べて、この聖祥大学附属の小学校では希少種といった程に珍しいものなのだから。

そして予想通りというべきなのか、何といつて表現をすれば良いのだろうか。その子ども達の中には小学生では無さそうな雰囲気を放ち、おおよそ出せないであろう表情をしている男子生徒が2人居た。

1人は平々凡々と言つて良いようだ。大人しそうで、黒髪に黒目の少年だ。その瞳はどこかしつかりとしていて、芯が通つて綺麗な輝きを放っている。

もう1人の方は銀色でサラサラとした感じの髪をした少年だ。そして、彼の瞳は槍の先端部であるかの様に鋭い。周りの女子を見る目がいやらしく、男子に対しては敵意というものが丸出しである様に思える。だが彼のその様子には、何処か違和感のような何かを感じる。

「(どうせ魔法で姿を変えているのは気付いているだろうし……あちらから来るのを待つかな)」

「それじゃ、授業を始めるわね」

席に着くと同時に、先生はチョークを手に取り黒板に文字を書いていく。

手にしていたランドセルを横に置き、そこからこの授業に対応している教科書とノートに、筆箱を取り出ししていく。

言われたページを開き、黒板に書かれていく文字をメモしていく。

前世でも習った事があるだろう内容なので、それほど苦労もなく理解をする事が出来る。逆に、それが原因で退屈にも感じられる。

「(今となつては簡単に出来るが、最初の頃は大変だったな……)」
などと、鉛筆でノートに文字を書きながら少し目を瞑る。

去年の事が今でも直ぐに、昨日の出来事であるかの様に思い出す事が出来る。

ATMからお金を引き出した後にコンビニから出た俺は、デバイスに示されていた住所を思い出し、その場所に向かった。

先ほど居たコンビニからはそれ程距離という距離は無く、10数分程度歩けば簡単に着いてしまう程に近かった。

街灯の光、ビル等から発せられている光、コンビニなどの店から出ている光、住宅から漏れ出ている暖かな光。街には沢山の明かりが灯っていて、安心感を与えてくる。人

工的な光ではあるが、前世での生活で馴染み深いものを感じてホツとしているのだ。

「此処が、俺の家か……」

目の前には2階建ての一軒家が建っている。それ程大きくもなく、小さくもない。何の変哲も無いであろう住宅だ。

周りの家からは明かりが出ているのだが、この家からは出ていない。

「当たり前か……」

違法魔導師と思われる存在はあの施設を研究の為で、この家を仮拠点のように扱っていたのだろうか。

そんな事を妄想しながら右手を差し出して、俺はドアにある取手を掴み、家に入ろうとする。

「……え？」

可怪しい。何かが変わだ。鍵は確かに差し込んで回し、解錠をした筈なのだ。

そうである筈なのに、一向に開こうとしないのだ。

手元をよくよく見てみると、その手は取手部分を強く握り潰していた。

「あれ……？ 嘘、だろ……」

身体的な力を上手くコントロールする事が出来ていないのか。

それは綺麗に、そして見事に潰れてしまっていた。拉げた上に、千切れてしまってい

る。完全に、完璧に取り返しつかない程に壊してしまっているのだ。

「(やっちまった……ああ、やっちまった。どうすれば……)」

唇が真っ青に、顔色は徐々にではあるが土気色へと変化していく。

無断での借用とはいえ、自分の所有物でも無いものを、他人の家を壊してしまったのだ。

その認めたくない事実から、現実から目を背けてしまいたいという強い欲求が出て来る。

だがそんな事はもちろん出来ずに、自身を強く責めてしまう。

——もう少し力を弱めて握るといふ事は出来なかつたのか、と。

「落ち着け、K O O L になれ。……素数を数えよう……素数は1と自分の数でしか割ることの出来ない孤独な数字……私に勇気を与えてくれる……」

——2……3……5……7……11……13……17……19……

心のなかで数え上げていき、深呼吸をする。息を強く吸い、大きく吐き出す。

肩は上下して、白い息が吐出される。

「不思議なものだな……。まさか本当に落ち着くとは……」

先程まで心のなかに救っていた自責の念は消えるということは無いのだが、確実に小さく、そして大人しくなる。面白い程に落ち着き、乱れていた心は徐々にだが冷静さを

取り戻していく。

「あー！ こういう時は業者にでも頼めば良いのか」

「これでもう大丈夫です。他に何かありましたら此方に連絡の方を……」

差し出された名刺を受け取る。

目の前でにこやかな笑顔を浮かべている業者の人間。

暗示がしっかりと効いているのか、想像していたそれ以上に親身になって対応をしてくれる。

何も無いよりは、機械的なものよりは余程良いのかもかもしれないのだが、少しばかり気持ちが悪く感じられる。それ程の懇切丁寧なのだ。

仕事を終えて帰っていくその人を見送り、見えなくなった途端に俺は細心の注意を払いながらドアを開く。また壊してしまわない様に。

現在の時間は午前10時だ。

昨夜は外で過ごすのが嫌なので、この家の中の座標を割り出して、其処に転移をする事の中に入って寝たのだ。中からならば開ける事は出来るが、外からは出来ないというのは非常に困ってしまう。

青年の姿へと変身をして、業者へと連絡をしていたのだ。開いたドアを潜り、玄関に出る。

家の中はとても綺麗なもので、掃除がなされているのか生活感と清潔感がある。

「誰か生活をしているのか……？」

ヒトの気配というものが一切感じられないのに、そういった事実がある事に首を大きく傾げる。

何処に何があるのか、どのような設備があり、どのようにして使うのかを理解する必要がある。

俺は先ず、近くにあった台所から見ていく事にした。

3 槽式の流し台に換気設備。

加熱調理機器であるコンロや食器洗い機に冷蔵庫などの必需品が揃えられている。

食器棚には沢山の皿に、加えてコップ。スプーンやフォーク、箸なども入っている。

冷蔵庫の中は空っぽで、食材を買い揃えて、備蓄していく必要があるだろう。

次にリビングだ。

薄型で大きなテレビに、大きな机。そしてガラス製の引き戸がある。その引き戸を開くと小さな庭が目に入る。これは玄関の横にある空間だ。

洗面所には大きな鏡が設置されていて、上半身をしっかりと映しだしてくれている。

電気を付ける事も出来て、歯磨きや身嗜みの整えをしたりするのに重宝するだろう。風呂場に敷かれている床はタイルで、和洋折衷で深く広い浴槽が置かれている。

その大ききの為に入れるお湯の量によっては、首の辺りまで浸かる事も、足を思いきり伸ばす事も出来るだろう。

玄関の目と鼻の先にある階段を登れば2階へと行く事が出来る。

2階は特にこれといって目に付くものは存在していなかった。

どの部屋を見てもベッドと机しか置かれていないのだ。

「さて、と。食事にでもするか……」

いろいろな家の中を見て回っていると、時間というものはあつという間に過ぎていく。時計を見してみると時間は午後6時に、言い換えると18時になっていた。

沈んでいく太陽が放っている光が、窓から家の中に差し込んできている。

「(だけど料理とか一切と言っても良いくらいした事無いな。どうしよう……)」

前世では、食事などの準備はすべて親任せにしていた。

20歳を過ぎていて、いい年をしているにも関わらず、一人暮らしをする訳でもなく、何をするでもなくただ無作為に日々を過ごしていた所為なのだろうか。

全くと言ってそうだった知識などは持ちあわせてはいないのだ。

料理をしたというのは、前世での中学生の頃に家庭科の授業であつた調理実習の時く

らいだろうか。

今の俺には料理が出来ないのだ。

ならば、出来るようになってしまえば良い。

意識を集中させて、「レアスキル」を発動させる。

閲覧し、記録する情報は4つだ。

1つ。この世界に存在する料理のレシピ全てに関する知識。

2つ。基本的な作り方に加えて、簡単なアレンジの仕方。

3つ。材料が足りない時に使える代用の野菜などに関する知識。

そして4つ。栄養バランスに関する知識。

創りだすのは1つのスキルだ

知識内に存在している料理を失敗する事も無く、調理出来るだけの手腕と技術。

「冷蔵庫には何も入ってないよな……買いに行くしかないか」

スキルの創造を終え、意識は再び思考を始める。

その言葉通りに、冷蔵庫の中には野菜などの食べ物と呼べるものが1つも保存されていないのだ。

「何を作るのかも考えないといけないし……」

この家の鍵を閉め、外に出る。

太陽はその姿の殆どを地平線の向こう側へと隠して、夕焼け空から夜空へと変わろうとしていた。

お惣菜のコーナーでは独特なBGMが流れている。

時間が時間なのか、その場に置かれている商品の殆どは値引きのシールが貼られている。
た。

だが、これといって食べたいと思えるものが見付からない。

「お菓子か……」

歩いているとチョコレートやおかきなどが並べられている場所に出る。いろいろなお菓子が置かれていて、俺は思わず食玩の方を見てしまう。

「(前世では、少ないお金でおもちや目当てにして買っていったな……)」

手にしている買い物かごを地面に引き摺りながら歩いて行く。その中には気に入つた食玩とジュースだ。

「あとは夕食の分と保存しておく分だな」

そう言いながら野菜が置かれているコーナーを指す。

包装されて棚に置かれている野菜を眺めていると、横や後ろの方から「あら、お遣

いかしら。偉いわね〜」などといった言葉が聞こえてくる。

それを聞いて、今の俺の姿を思い出した。小学生の低学年と同じ年令の姿と身長をしてるのだ。

幸いにもこの時間帯だと学校の授業も終了していて、外を出歩いても問題は無い時間だ。

「(しまった……。変身魔法を使うのを忘れていた。後の祭りだけど、高校生くらいに姿に変身しておけば……)」

悔やんでも仕方が無いとはいえ、それでも悔やんでしまうのもまた人間というものなのだろう。

俺はそう思いながらも、気持ちを切り替え、周りの視線と言葉を気にしながら今日の晩御飯の事を考えていく。

「人参にじゃがいも、タマネギか……」

目の前に存在している野菜を手に取り、数秒程考える。これらの野菜はいろいろな料理に使う事が出来るのだ。どう料理をするのか。何が食べたいのかを。

その野菜をかごの中に放り込んでいき、レトルト食品などが置かれているコーナーへ移動する。

並べられているものの中から中辛と記載されているカレールーを掴み、インスタン

コーヒーと一緒にかごに入れる。

その他にも牛乳や食パンなどが入っていて、重量はともではないが小学生の力では持ち上げるのに一苦労なほどだ。

だが、今の俺は魔法で身体能力を強化している為か、それほど苦に感じはしない。ズリズリと引き摺りながらレジへと移動し、上の台へと乗せる。

その光景に、店員や買い物客を始めとした周囲の人々はひどく目を丸くしていた。

買い物物を済ませ、帰宅する。

商品を沢山入れて膨らんでいる買い物袋を台所の机と置く。

「検索を始めよう。キーワードはカレーライス、レシピ……」

意識を深くまで潜らせて、集中していく。外から聞こえてくる車が通る音などは耳に入ってこなくなる。

手には一冊の分厚い本が握られていて、それは開かれている。だがそのページには何も書かれてはおらず、真っ白だった。

「なるほど、こうして作っていくのか」

開いている本を見つめながら頷き、材料を用意していく。じゃがいも、人参、タマネ

ギ、牛肉、カレールー。カレーを創りだすのに使う、実にオーソドックスな食材だ。

実際のところ、本には何も記載はされていない。だが、スキルメイカーで創り出した能力の効果のお陰で、文字が書かれているように調べた情報が見えるのだ。他のヒトには見えることの無い文字が、俺の瞳には映し出されているのだ。

「これで、完成かな……」

検索した情報を参考にして、出来上がった。

カレーからはスパイスの香りが漂ってきて、部屋に充満していく。

食器棚から取り出した皿に、よそっていく。

そうしているとチンツと軽快な音になり、トースターから良い具合に焼けてトーストになったパンになった。

カレーライスにしたかったのだが、生憎と米の方は買っていなかったので諦めるしかなかった。

コップの中に牛乳を注いでいく。

「この世の全ての食材に感謝をこめていただきます」

手を合わせて、食事の挨拶をする。

手に持っているスプーンでカレーのルーを少し掬い、口に持っていく。

鼻の近くに持って来ている所為なのか、スパイスの香りがより強くなっていき、鼻孔をくすぐる。

「はむ……」

口の中を程好い辛味が広がっていく。どうやら無事に、上手く作る事が出来たみたいだ。

カレーライスの方が食べ慣れている。というよりもルーだけだはなく御飯と一緒に食べていることの方が圧倒的に多いからなのか、大きな違和感がある。

「というか、調理している時にでも少しずつ味見すれば良かっただけなんだよなあ……」

そうは言ってみるが、始めての1人での料理だったのだ。それに強く集中していたのだから、それを忘れていて。そんな事を考える余裕すらも無かったのだから仕方が無いだろう。

横に置いてあるパンを手に取り、それを千切る。その千切ったパンの一欠片を、カレーに付けて口に運ぶ。

カレーのルーが付いているその部分は少しフニャツとした感じだ。其処以外の付いていない箇所はトーストの焼けた部分で、サクツとした感じをしている。カレーパンと

はまた違った味と食感をしている。

また、スプーンで掬って食べる。その中には一口サイズの野菜も入っていて、調理時よりも小さくなっているような気がする。熱によって溶けてし、崩れてしまったのだろうか。時間をもう少しだけでも掛けていればより小さくなっていったのかもしれないが、それを待つだけの忍耐力は俺には無く、止めてしまったのだ。

「だがこれで良い。これで良いんだ……」

コップへと手を伸ばして、牛乳をゴクつと喉を鳴らしながら飲んでいく。カレーが出来るまでの間だが冷蔵庫の中に入れていたからか、冷えている。

それが、カレーの辛さで温められた身体を急速に冷ましていく。それでも少し、口の中には辛さが残っている。

「久し振りに感じるな。カレーを食べて、牛乳を飲むのが……」

——こんなにも幸せを感じさせるなんて。

ジンワリといった感じに涙が滲み出てくる。溢れるほどに溢れ出て来そうになる。

実際のところ感覚的にはそれ程の時間は経過していない筈であるのに、かなりの時間が過ぎ去っているかのように思えてしまう。

スキルのお陰で失敗をする事も無く料理をする事が出来るのだが、それはとても難しいものだ。これ程に大変で面倒なことを母さんは毎日の様にしてきたのかを100%

では無いが、理解する事が今ならば出来る。同時に、そのことに対して自然と深く感謝をしていた。

食べ物に対して、それをつくりだす大地に、それを育むのを手伝っている農家達に。そして何よりも、料理をしてくれていた母さんに対して。

両目からはポタポタと大粒の涙が大量に出て、カレーに落ちていく。

口に運ぶと、実際はそんな事などはない筈なのだがとても、とてもしよっぱく感じられた。

皿洗いというのは、料理と同じで全くした事が無かった。これもまた、家庭科の調理実習時にしてみた時以来だ。した事が殆ど無いので、割らないようにとしつかり気をつけながら入念にこすり洗っていく。だが洗剤を買うのを忘れていたので、綺麗に洗える様になるのは後日になってしまいうだろう。

「こんなものかな」

そう言い、全ての食器を水洗いし終えて手を止める。

季節は冬だ。だからなのか、水で濡れている手はとても冷たく感じられる。悴んでもいて、上手く動かす事が出来ない。

「そういえば、ずっと感じていたけど……」

この「海鳴市」には魔力というものを持つているだろう存在はゴロゴロと無数に存在している。数にすると318人くらいだろうか。今は世界中のあちこちから感じられる。しかも、その感じている魔力の殆どがかなり大きなものだ。その存在が魔力と同時放っている気もまた巨大だ。転生直後の時はそれよりも多く、ざっと7708人くらいは居た筈だ。

「転生者同士で潰し合っているのか……？」

感じている大きな魔力は別々の場所に、最低でも2つ程が同じに存在している。そして、不思議なことに片方が小さくなり、消えていつているのだ。お互いに攻撃をし合って、殺しあつてもいるのだろうか。大きな力が爆発的に大きくなったかと思えば、一気に小さくなって嘘みたいに消えていく。残っている方もまた、余力が少ないのか魔力と気がかなり小さくなっている。そして、それは別の大きな魔力に消されていく。

「(自称「オリ主^{オリシユ}」といでもいう奴らの仕業か……)」

彼等にも魔力を探知する能力はあるだろう。

強く大きな魔法というのを使っていないが、姿を変えるのには行使しているのだ。

その微細な魔力を感じするほどの転生者が居るかもしれない。自身には無くても、デバイスなどの道具による補助で気が付いても可怪しくはないのだ。

「はあ……」

考えただけでも憂鬱な気分になってしまい、大きな溜め息を吐いてしまう。

溜め息を吐く度に幸せというものが逃げていくというが、それは本当なのだろうか。

「早速か……この考え自体がフラグだったか」

大きな魔力を放っている存在が此方へと、俺に向かって移動をして来ているのが感じられる。十中八九、それは転生者で間違いが無いだろう。

無断で借りているとはいえ、手に入れたばかりの自宅を壊してしまう訳にはいかな

い。

俺は急ぎ、鍵閉めなどの戸締まりをして外に出る。

走って移動をしているのだが、あちらも同じ方向へ。確実に追い掛けて来ている。接敵してしまうのも時間の問題だろう。

「何!？」

別方向からもまた同じ様に魔力が此方へと向かって近付いて来る。

それに対して俺は思わず大きく舌打ちをしてしまう。

転生者と思しき存在と戦うのはこれが始めてであり、苦戦をしそうなのだ。それが2人も同時にだというのなら余計にだ。それに此方は転生が完了して1日も経過をしていない。自身の持つ力を完全にコントロールが出来ていないのだから完全に不利な

状況だろう。

「このままじゃ不味いな……」

走っている道路から進路をずらして公園へと向かう。

空には月が浮かんでいるのか、地上を照らしている。街灯の光もあるので、とても明るいものだ。

だが、明かりが照らされていない場所も確かに存在していて、その影になっている上に海に面している場所で一旦止まる。

全身の気をコントロールしながら体外へと徐々に放出していく。

身体はスウツといった感じに宙へ浮かび、海に向かい飛行する。

相手の方も飛行魔法などを使っているのか、建物などを気にする事もなく移動して、確実に距離が縮まっている。

「此処らで良いだろう」

ある程度飛んで、海上の途中で停止する。

この場所ならばそれほど人的被害や物理的被害という者は発生する事は無いだろう。強いて挙げるとするならば、海中で生きている魚などの生物たちに甚大な被害が出るかもしれないというくらいか。後は、そう……津波が発生するなどだろう。

話を通じる善良な存在なら良いのだがと考えていると相手側の一人が到着する。魔

力の移動を感知していたから分かってはいたが、もう一人も別方向から飛んで来る。

前者の方の見た目で一番最初に目には入ってくるのは鮮やかなほどに綺麗な金髪だ。目付きは鋭く、斬れ味の鋭い抜身のナイフの様だ。何処か危うさというものが感じさせ
てくる。

後者であるもう一人の方もまた、同じ様に金髪をしている。前髪が長く、目が隠れているのが原因か、何を考えているのかが想像出来ない。

「殺してやる、邪魔なモブ共は全員……」

「えつと……君の邪魔なんてしないから、手を引いてくれないかな？」

予想通りというか何と云うのだろうか。刃のような目をしている少年は、自分が世界の中心にして廻っているのだと思い、そう豪語している様な存在に思える。

だが、そんな彼の様子には、何処か違和感がある。

彼の魔力が大きく変動していく。

頭以外の部分が光りだす。そして、その光が晴れた後には、金色の鎧を装着している彼の姿があつた。

「『バリアジャケット』か……」

バリアジャケットとは読んで字の如く防護をしてくれる服だ。いろいろな衝撃から、環境から自身の持つ魔力が保つ限り、ある程度は身を守ってくれる特殊なフィールドを

形成している。

俺の提案は、その防護服であるバリアジャケットの展開により、バツサリといった感じに言葉も無く断られてしまうかたちに。

強い緊張が疾走る。

——此処は既に戦場であり、殺し合いをする為の場所なのだ。

そういった事をしたくはないのに、何故か理解し、悟ってしまった。

鋭い目をした少年が、剣の形をしたデバイスを展開して突っ込んで来る。

「——おっと」

剣を大きく上から下へと向けて振りかざしてくるのを、横に身体をズラして避けてみせる。

目の前に居る彼の動きはとても速いと言えるレベルなのだろう。

だが、そんな彼の動きがとても遅く見えてしまう。そう感じてしまうのだ。

避けられたのを見て、彼はもう一度、その剣を振るう。

空気は切り裂かれ、邪魔な相手である俺に向かつて一刀両断しようと言わんばかりの勢いで斬り掛かってくる。

俺は、右手に気を集中させて、同じ剣のような形をしたエネルギーの塊を創りだす。

それで、次々と来る斬撃をいなしていく。

「クソッ」

なかなか斬る事が出来ない事に対して、苛立ちを募らせていく彼。表情は大きく歪んでしまっている。

近くに居る事で、彼の金髪はより綺麗に見える。

そして、可怪しな事に気が付く。目が紅いのだ。充血をしているかの様な程に深い赤色であり、虚ろな瞳をしているのだ。

彼の動きには、怖い程の気持ちに乗っている。だが、動きがぎこちない。まるで、何かに操られているかの様にだ。

「……………」

もう一人の方の少年は、一步も動こうとはしていない。ただジツとこちらを見つめているだけだ。まるでこの戦闘が終わるまで手は出さないとでも言う様に。そんな彼の様子は、とても不気味なものに感じられる。何を考えているかが分からないというのは、其れだけでこれ程に迄恐怖を与えてくるのか。

「(速めにケリをつけるかな……。時間も遅い。早く寝たいしな)」

ジツと見てきている彼がいつ介入してくるかも想像が出来ない。常に身構えておかないといけなくなる。

それよりも先に、目の前の刀を振り回している少年を倒してしまった方が速いだろ

う。

そして何よりも此方には経験というものが全くと言って良いくらいに無いのだ。自身の持つ特典の力を振るう事も初めてだと言っていていくくらいであり、多対一や長時間の戦闘などは無理であろう。だからこそ短期決戦に出るべきなのだ。

放出している気を一基に増大させ、横に振られた剣を避け、懐に潜り込む。

「ハアツ!!」

彼の、その御腹に気を込めた気合をぶつけ、吹き飛ばす。距離は一瞬にして、最初に出会った時の2倍ほどにも離れる。

「ダリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤアアアアアアツ!!!」

気を両手の平に集めていく。その集めた大量の気を、吹き飛ばした彼に向けて高速で放っていく。

連続して飛んで行く無数のエネルギー弾は、彼等の目では追う事も、対応をする事も出来ない程のスピードであり、次々と命中していく。

その威力は大地を削り、山を砕く程のものだ。

それは、彼の身体を同じように削っていく、粉々にして、跡形も無く消し飛ばす。そして其処に居た彼は寒空の下で、そのDNAの一片も残さず完全消滅した。

「あとは……」

残っているのは、ずっと見ているだけだった少年一人だ。

彼は変わった様子もなく、此方を静かに見つめてきているだけだ。それが、正体不明の強い不安と恐怖を感じさせ、増幅させていく。

「おい！ 用件が無いのなら帰らせて貰うけど」

その言葉に反応したのか、彼の表情は変化する。

にこやかで、人を惹きつける笑顔をしている。やけに整った顔をしており、同姓であるのだが、その顔に見惚れてしまう。

それなのに、そんな表情であるにも関わらず、その顔には造り物であるかの様な違和感を、不気味さを感じさせてくる。怪しくあり、妖しくもあり、危ういようは雰囲気を感じ、醸し出しているのだ。

「なんだ……?」

「フツ」

彼は口を大きく歪ませて、此方を見て嗤う。すると同時に彼の姿は、その場所から消え失せる。

「クソ!!」

予備動作も無しにかなりのスピードで突っ込み、飛んで来る彼の動きに意表を突かれてしまい、此方の対応が遅れてしまう。

何処から出したのか、手にしたナイフが俺の顔を掠めていく。

その腕の動きはヒトが簡単になせる様なものではない。骨も、関節などの身体構造が無視しているかの様にジグザグとし動きをしている。曲がらないであろう方向に曲がったりしているのだ。

斬られて、パラパラと離れていく数本の髪の毛が変色していく。黒色から白色へと変わっていくのだ。そして、跡形も無く消滅していった。

「——何?」

身の危険を感じて、回避という行動を選択していなかったらどうなっていただろうか。避けた事は正解だった様だ。

彼の顔は、先程見せたものと比べ、大きく変化して、その表情は大きく歪んでいた。笑顔であるというのには何の変わりもない。だが、喜びによるものなのか。それとも歓びなのか。はたまた悦びなのかは分からないが、酷くとても歪んでしまっている。

そして嬉々とした感じに、止まる事無く次々と攻撃をしてくる。その様は、まるで望んでいた強敵に会えたとてもいうかの様に。

「危ねっ!」

必死に避けようと動くが、その理解も予想もする事が出来ない相手の能力に対して、恐怖を抱いてしまっているのか身体が上手く動かない。

その次々と迫り来るナイフによる攻撃は服を斬り刻んでいく。

「波っ!!」

気を開放して、彼を吹き飛ばす。

近くでそのナイフを振り回されると困るのだ。

少しでも掠つてしまうとどうなるのか。気にはなるのだが、試そうという気持ちは出て来ない。後が無くなってしまう様な気がするのだ。

「さて、どうするか……」

口にするまでもなく決まっている。早々に終わらせて、グツスリと寝たいのだ。

前世では平気だったのに対し、今世では肉体年齢が若いからなのか、夜遅くになると急激に、強力な眠気に襲われてしまうのだ。

健全な生活を送ることが出来る。そう言ってしまったえば良いことなのかもしれない。

だが、したい事が出来る時間が限られるのだ。だからこそ時間を大切に、有意義に過ごしてみたいものだ。

「悪いが、終わらさせて貰う」

俺はそう言いながら、先の彼を倒した時と同じ様に右手に気を集中させていく。集まっていくその気は、ヒトという存在を簡単に壊し、殺せてしまう様なものなのかという疑問を感じさせてしまう程に温かい。

「——波アア!!!」

集めたその気を一気に開放する。掌を砲身の様に見立てて、光線の様にして一直線に、目の前に居る金髪の少年へと向かっていく。その光は、彼の身体を包み込み、潰していく。ゆつくりとだが、確実に、原子レベルに分解していき、溶ける様に消滅させていく。

自身の生命が消失して死ぬという事に恐怖を抱くべき場面である筈なのだが、そんな状況にも関わらず、彼は大いに満足そうに顔を綻ばせながら消えていく。

「終わった、か……。あ、あ、ああ……。ああ、あ……」

戦いが終わり安堵をすると同時に、急に恐怖というものが自身に強く襲い掛かって来る。ヒトを殺してしまった事に、殺した事に。消し去った事に。そして何よりも、自分に対して戸惑いと強い恐怖を抱き、感じていた。

「(殺ってしまった……。本当に……。? 生命を、奪ってしまった……。!?)」

その事実は現実はどうしようもない程に重く、心のなかにズシンとのしかかって来る。

奪ってしまったのだ、命を。彼等の命を、だ。

そうしないと、そうしていない他無かった。

そうでもしないと殺されていたのは自分の方だ。

それであつても、そう言い聞かせても、心のなかに存在している重い何かは居座り続ける。

そして、自分の持っている力の強さ。それがどういったものなのか。そのこわさを知った。

それと同時に、それらの気持ち以上に気付いてしまった。

その殺し合いをしていた時に、彼と同じ様に笑っていた事に。心が踊っていた事に気が付いたのだ。

サイヤ人の血というものがそうさせた。そう言つてしまえば片がつく上に、どれだけ楽になるだろうか。

だけど、そういった風に割り切るといふ事は出来ず、俺は呆然として立ち尽くし、恐怖に震えるしかなかった。

「……………」

ふと自分の手を、手の平を目にしてみる。それが、真つ赤な血によつて塗れているかの様に見えてしまい、更に強く自身を責め立てて来る。

「うわああああああアア!!」

大きな叫びとともに、髪は逆立ち、緑かかった金色の光を放ち始める。その光は、月以外の光源が存在せず、真つ暗な海上を真昼の様にも明るく照らす。

瞳からは次々と涙が溢れ出て、天を仰ぎ見て、獣の如く、ただただ悲しみと恐怖、そして怒りにより、寒空の下で吠え続ける事しか出来なかった。

どれくらいの時間をこの夜空の下で、じっとしていたのだろうか。

鳥肌が立ってしまっている。寒さによるものなのか、恐怖によるもののかは、今のは俺には考え、判断をする事が出来ない。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

呼吸音と心臓の脈打っている鼓動音がはつきりと聞こえて、やけにうるさく感じられる。

息は、低い気温によって白く目に見えるカタチで吐出されていく。

「取り敢えず……帰ろう。寝て、明日になれば……」

自身の乱れている心を落ち着かせる様に、そう言い聞かせる様に声に出す。

それが現実からの逃避行動であるという事を理解しながらも、そう呟いて、自宅への方角に向けて、飛んで行く。

冬の夜空で吹いている風は、肌を切り裂くかと思えてしまうとても冷たく感じられた。

目の前には暗闇が広がっている。何も見えない、感じる事すらも出来ない程の深淵だ。

突然、視力が奪われてしまうのではないかと思ってしまう程の強烈な光が迸る。

そして、何処からともなく聞いた覚えのある声が聞こえてくる。

「……お前の所為だ」

「お前が殺^やったんだ……」

「お前の所為で死んだんだ！」

「お前が俺達を殺したんだ!!」

閉じていた目を開いてみると、見覚えのある少年が2人佇んでいた。

その2人の身体は大きく欠損していて、片腕に片足、頭部の半分が失われている。綺麗だった金髪は見事に汚れていて、その上にはベツトリと鮮やかな程の赤さをしている血が付いている。

その2人は此方を見つめながら言葉を口に出していく。まるで、それが呪詛の様に、そして自分という存在を責めて、否定をしてきているかの様に感じられた。

「ああああああああああああああああ!!」

大きな声を、悲鳴をあげると同時に目を覚ます。

自分以外は誰も居ないその部屋の中で、その叫びは大きく反響し、耳のなかで木霊していく。

「知らない天井だ……いや、俺の家か」

悪夢を見てしまった所為なのか、身体は汗でビツシヨリと濡れていてとても気持ちが悪
い。

カチツカチツと一定間隔で時計の秒針が時間を刻みながら動いている。表示されて
いる時刻を見てみると、17時を過ぎたところだった。

どうやら7時間以上も寝てしまっていた様だ。

窓からは、オレンジ色に光り輝く太陽の光が差し込んで来ている。

「もう一度……もう一度、シャワーでも浴びよう」

金色に光り逆立っていた髪は、いつの間にか変身魔法使用時のものである黒色の髪へ
と戻っていた。

戸締まりをして、外をブラブラと出歩く。

フラフラとした足取りで、ボーっとしながら歩いていると人気の無い公園に辿り着いた。この時間帯だと、遊んでいたであろう子ども達は帰宅をし始めている。その為に、元気にはしやぎ回る子ども達の姿は、もう此処には無い。

「はあ……」

大きな溜め息が零れ出てしまう。

目を閉じると、それだけであるのに、夢で見た彼等の姿が浮かび上がる。

その姿を思い出す度に、吐き気が起き、胃がキリキリと痛み始める。

「可笑しいな……病気になる筈のない身体なのに……」

目尻には大きな涙が溜まっている。それは、次第に溢れ出て、ポタポタと地面に落ちていく。

「俺が……俺が……」

自身を責め立てていると、横に誰かが座るのが感じられた。

その人も同じ様に、大きな溜め息を零す。

彼の手には2つの缶コーヒ―が握られていて、その内の1つを「飲むか?」と言って、俺に向かって差し出してくる。

「頂きます……」

本来ならば、普段の俺ならば見知らぬヒトから何かを貰うという行動は良くないと、自身を咎め、断っていただろう。

だが、今の俺にはそんな事を考える余裕も無く、気にする事も無く、そのまま受け取る。

タブに指を掛けて、蓋を開ける。開くと同時に、缶コーヒー特有の甘ったるい匂いが鼻に向かい漂ってくる。

「ゴクゴクゴク……」

隣に居るおじさんとほぼ同時に、喉を鳴らしながら飲んでいく。

「ハハツ、ハハハハハハハ」

思わず、笑ってしまう。しかも隣に座っている彼も一緒に、だ。

同じタイミングで笑った事で、より一層大きく口を広げて笑う。

どうでも良い事なのに。

いや、どうでも良い事だからなのだろうか。

それがとても面白く、大切に、貴重で、尊く感じられて、自身の意志とは関係なく、また涙が溢れ出てくる。

「強くなりたくない……」

2度とこのような気持ちを抱かずに済む様に、他の誰かにもさせない様に。

その為にも、もつともつと修行をしいていかなないといけないだろう。見上げた空は、涙で滲んでいる。だが、それはとても綺麗なオレンジ色の夕暮れで、清々しいものに感じられた。

「あの時は後悔するしか、懺悔するしかなかったな……」
同じヒトという存在を殺してしまった事に負の感情を抱き、感じる事しか出来なかった。

時間が経つに連れて、それらに関する記憶も、感情も薄まっていった。

それでも、時々ではあるが、思い出したかのように夢を見ってしまうのだ。その都度、心のなかで謝りはするのだが、それだけでは無い。

その度に強く思うのだ。

——すまない。そして、ありがとう。と。

食事などで食べているものは当たり前となっている。なんとなしに、なんとなくで生命とは尊いものだと思っていた。漠然と理解をしているつもりだったのだ。だが、これを通して、あの出来事のお陰で命の重さというものを実際に感じる事が出来た、知る事が出来たのだ。

「今となつては、大切な思い出であり、体験だな……」
鉛筆を手のなかで回しながら、誰に言うでもなく、聞き取れない程の小さな声でそう
呟く。

チャイムが鳴り響くと同時に、授業は終了。

そして、生徒たちが集まり、質問攻めにしてきた。

転生者同士の和解

休み時間になり、生徒たちが集まり質問をしてくる。

何処の学校から転校して来たのか、前の学校ではどういった事をしていたのか、何が好きなのかなどなど。そういった沢山の質問が全方向から聞こえてくる。

転校生という存在はとても珍しいもので、クラスメイトである彼等は小さな瞳を興味という名前の光でランランと輝かせ、新しい仲間である俺を映している。

彼等の、彼女等の質問に対して、あらかじめ考えておいた答えを使用して、適当に応え、受け流し、あしらっていく。

それでも絶える事が無いと思えてしまう程の数の質問の嵐が襲って来る。それらはまるで言葉のマシンガンの様だ。

次々と聞こえてくるその質問は、聞き取る事が難しく感じられる。

だが、マルチタスクを使用して、それぞれに意識を割いてみれば、難無く応答していく事が出来るのだ。

それと同時に、周囲を見渡してみる。

隙間からチラツと見えたが、確かに予想通りと言うべきなのか、やけに整った容姿を

している男子生徒が居る。銀髪でオッドアイといった見た目をしているのだ。それと同時に、ワザとなのかは知らないが、膨大な魔力を抑えずに居て、常に放出している。周囲の生徒たちで作られている壁により、しっかりと見据え、注視する事は出来ない。だが、ハッキリとその大きな魔力を感じ取る事が出来る。

教室の外では、他のクラスの生徒達が集まって来ている。そして、この部屋の中を覗いてきている。

「うん、そうなんだよ。……（これは転生者確定だな……難癖を付けられなければ良いんだが）」

周りから押し寄せて来る質問に焦る事無く対応をしていると、何やら前世で嫌という程に読んできたものに似たやりとりが耳に入ってくる。

「おーい、嫁達!!」

「嫁じゃ無いって言ってるでしょ!!」

「相変わらず、アリサはツンデレだな」

「止めろ。嫌がつているじゃないか」

「ああ？ うるせえぞ、モブの癖に」

少女等を嫁だと言っているのは、先程から魔力を放出し続けている少年。

止める様にと言っているのは、自己紹介の時に真っ先に視界の中心に入って来た黒髪

の少年だ。

テンプレート過ぎて、何故だか涙が出てきそうになる。これは一種の感動というものだろうか。

この事から察するに、銀色の少年は「踏み台」と言う存在で、黒髪の少年の方こそがオリ主という存在なのだろうか。

出来得る限りではあるが、関り合いはしたくない。

だが、その願いは叶わずに、絡まれてしまうんだろうなと思える。覚悟をしておく必要があるだろう。

チャイムが鳴り、次の授業が始まる。

皆が、自身の席へと着いていく。

そんななかで転生者と思しき2人の少年はしっかりと椅子に座っているのだが、睨み合っている所為なのか、教室内の空気はギスギスとしていて、とても重く感じられる。

午前中の授業は終了し、昼御飯の時間になる。

周囲の生徒たちは、それぞれにグループを作り、弁当を広げて食べている。中には、弁当を持って教室から出て行く生徒も複数人居る。

「今頃、母さん達はどうしているかな……?」

前世で小学生だった頃は弁当ではなくて、給食だった。そして、弁当が必要な時は母親が料理し、用意をしてくれていたのだ。そう考えてみるととても恵まれた環境で過ごしてきたのだろう。思い出して、ホロリと涙がこぼれそうになる。

「俺って、こんなに涙腺が弱い……脆かったっけ……?」

泣きそうになるのをグツと堪えていると、横の方から少女が近付いて来る。

とても嫌な予感がするのだが、無視をする訳にもいかない。恐る恐るだが、彼女の方へと、ゆっくりと顔を向ける。

「あの……お昼、一緒にどうかかな?」

其処には、茶色の髪をツインテールにまとめた可愛らしい女の子が居た。

「(やっぱりな……)」

「突然でごめんなさい。私、高町なのは……なのはって呼んで」

彼女の姿には、ひどく見覚えのある特徴が多数存在していた。

そう……前世の知識内に存在している魔法少女リリカルなのは。その原作とでも言えるアニメの主人公なのだ。

同じ学校に入って、偶然か転生者としての宿命なのか同じクラスになってしまったのだ。このクラスの教室へと入室をした時にでも、こうなってしまう事は考え、想定をし

ておくべきだっただろう。

「ブロンだ。よろしく」

「それで、お昼の方だけ……」

おそらく、転校初日なので緊張をしているかとも思い、馴染める様にと善意をもって来てくれたのだろう。

これを断るのは、流石に気が引けてしまう。

「構わないよ。僕で良ければ……君が良いのであればけどね」

「よかった。それじゃ、行こう」

これで確実に、否応なく転生者だろう彼等に絡まれてしまうだろう。

弾む彼女の声とは正反対に、俺の気持ちはただただ深く沈み、ブルーな気持ちになっ
ていた。

だが、哀しいかな……前世での記憶の為に、「ゆ、ゆーっ、ユアアーツ!! ユアアーツ!!」
や「世界一かわいいよ」などと心の中で大きく叫んでしまっていた。

屋上へと向かい。皆が手にしているそれぞれの弁当を広げていく。

「紹介するね。こちら、友達のアリサ・バニングスちゃん」

「よろしく。アリサで良いわ」

「よろしく頼む」

どこか照れていながらも、何事も無いかの様に装っている感じに挨拶をしてくれる彼女。見た目としては、綺麗な金髪をしていて、活発そうな女の子だ。強気でグイグイと引つ張っていくタイプの様な感じを与えてくる。こちらと同じ様に前世での記憶の所為なのか、「くぎゅううううううー！」と大きな声で叫びたい心を必死に隠して、こちらも手を差し出して、握手をする。

「こちら、〃月村すず〃 かちゃん」

「よろしくね。私の方もすずかで良いよ」

「よろしく」

彼女の見た目は紫色の髪をしていて、こちらもまた綺麗な感じだ。アリスの方とは違い、大人しそうで、物腰が柔らかく、そして人当たりの良い感じをしている。大和撫子の様に、一線引いて行動をするタイプだろうか。

「こちら、〃上条雄介〃君」

「よろしく。僕の事は雄介で良いよ」

「こちらこそよろしく。なら、俺の事はブロンとでも呼んでくれ」

銀髪の少年といろいろと盛り上がっていたもう一人の方の少年だ。見た目としては黒髪黒目をしていて、落ち着いた感じをしている。正しく日本人の男の子とでも言っても良い様な容姿だ。高町なのは達と一緒に行動をしているのだ。そこから考えると、早計

かもしれないが、転生者の1人だと思える。

自己紹介を終え、仲良く食べ様とするその時。其処に不穏な影が忍び寄る。

「おーい、嫁達。一緒に食べるぞ」

俺が勝手に踏み台転生者だと予想している少年が、銀色の髪を風に靡かせながら近付いて来る。

彼の登場により、高町なのはを始めとした彼女等は、あからさまにして嫌そうな表情になる。

「うん……」

嫌ではあるが、仕方が無い……といった諦めた感じで、彼の言葉を受け入れ、承諾をする彼女等。

それにより、次第に空気が重く鋭いものへと変化していく。

「どけ、モブ」

彼は、彼女等の様子を気にした風を見せる事もなく、涼し気な顔をしながらズカズカと入り込んでくる。

その彼の言葉の語気はとても強く、それと同時にひどく冷たいものだ。

視線は鋭く、俺を貫いてくるかの様な錯覚を感じさせてくる。

「(……これが、小学生のする顔なのか?)」

「聞こえているのか？」

そんな高圧的であり、喧嘩腰な態度を取っている彼に向かい、アリサ・バニングスは強く発言をする。

「ちよつと待ちなさいよ。私達と一緒に食べようつて誘つたんだから別に良いでしょ！」

「そうなのか？」

俺を睨みながらも、高町なのはや月村すずかに確認をするかの様に質問をする。

「うん……そうだよ。私から言い出したの」

「ダメかな……？」

上目遣いで、彼に対して話をしていく彼女達。

俺は勘違いをしましてしまっているのか、彼女等の瞳は小動物のもののようにウルウルとしている様な気がする。

「……仕方無いな」

彼女達は自分の嫁だと豪語しているからこそだろうか。彼は、その言葉を信じて、深く追求をする事も無く、ドカッと彼女等の横に座る。其処が自分の指定席であり定位置だとしても言わんばかりに。

「俺の名前は『神威志蓮』だ」

「知っているかもしれないが、保和歩栄だ」

握手はせずに、敵意を剥き出しにしながら自己紹介をしてくる。

彼は、こちらには興味が無いのか……というよりも、高町なのは達を凝視している。その顔はニヤけていて、気持ちの悪い感じだ。スタイルが良く、整った顔をしているが為に、余計に残念で、より気持ちの悪いものに感じられた。

もしかすると前世での俺も、顔は兎も角として表情は同じ様な感じだったのかもしれない。

「(転生した初日に襲って来た奴らと比べると大分とマシだな。……道具として、彼女達を扱っていないのも鑑みて……というか、こんな事を考えてしまっている自分がホントに嫌になるな……)」

「じゃ、お昼御飯を食べようか」

彼に警戒をしている俺の気持ちを知ってか知らずか、雄介のその一言で、それぞれが御飯の入っている弁当を取り出して、蓋を開いていく。

俺も同じ様に自分の弁当箱の蓋を取り、開く。

中に入っているのは、実に一般出的なものだろう。ウインナーに、たまご焼き。鶏の唐揚げに、ほうれん草のおひたしなどだ。

「美味しそうだね」

「ありがとう。それなりに考えて入れたからな」

「作ってもらったのを自分で入れたんだ。偉いじゃん」

「違うよ。自分で一から料理したんだ」

「……ふええ!?!」

「!?!?!」

その俺の言葉を聞いて、目を丸くする彼女達。

だが神威の方は、相変わらず気にしたといった様子を見せず、彼女達の方をじつと見ながら食事をしている。

小学生で料理をして、弁当を作るといふのはなかなか大変で、そういった事をして
いる子供は少ない筈だ。

驚いてしまうというのは仕方が無い事なのだろう。

「どうした? 鳩が豆鉄砲を喰らった様な顔をしてるぞ」

「ブロン君……。これ、1人で作ってたって本当? お母さんは?」

流石に、1人で暮らしているなんて馬鹿正直に答える訳にはいかないだろう。同情を
して欲しいという訳では無いし、そのままを説明すると面倒な事になってしまうだろう
から。

あらかじめ用意をしておいた回答を口にする事にした。

「母さんは仕事で朝早くから出かける事が多いんだ。だから、1人でも御飯を作れる様になって休みの日に教えてくれてき……幼稚園児の頃に、御飯を作るのを手伝ったりしていたからレシピも覚えているし」

「へえー」

「幼稚園児の頃について。刃物とか危ないじゃないの!」

驚く声を見無視して、箸で唐揚げをつまんで口へと運ぶ。

出来たてという訳では無いが、ジューワツとした肉汁が出て、衣の部分がカリツとしている。

ある程度は作り慣れたであろう料理を食べながら、この先にどうなるのか、どうするのかを考えていた。

取り敢えずは、神威によるチクチクと突き刺さるかの様な視線をどのようにして耐えるか。そして、慣れていくのを目標にするべきだろう。

放課後になり、殆どの生徒は帰宅をしていつている。

それは、高町なのはを始めとした3人の少女たちも同じだ。彼女等は塾があるからと言って、走る様にして教室を出て行ったのだ。

そんなこんなで、今の教室には殆ど生徒は居ない。誰も居ないとも言つて構わないかもしれない。

否、誰も居ないというのは違うだろう。俺の目の前には、2人の少年が居る。上条雄介と神威志蓮の2人だ。その2人と俺を合わせた合計3人が教室の中に残っているのだ。

「結界か……」

どちらの転生者が魔法を使ったのだろうか。

世界は、元居た場所から切り離されて、別の空間になつてしまった。景色や、その場に置かれているものは変わらない。だが、先程の教室とは違う異質な空間なのは確かなのだ。

そして、この世界には3人しか居ない。居る事が出来ないのだ。術者によつて選定された者以外は、基本的には居る事が出来ないのだから。

「二応聞くけどさ……君、転生者だよな？」

落ち着いた感じの声を出して、雄介は確認をするかのように質問をしてくる。あくまでも確認の為に、そして気付いているぞ、誤魔化し切れていないぞと言わんばかりに。

「ああ」

顔を上下に振り、肯定の意を示す。別に否定をする様な理由なんてものは無いのだ。

「なのは達にどうこうしようってつもりなら」

彼等2人の目は槍の様に鋭くなり、僅かではあるが俺に対しての敵意が漏れだしてきている。

「そんな気は無いよ……さらさら無いよ……全く無いよ。一片も無い」

志蓮の大きな声での言葉に対し、俺はただ否定をする。

「原作に関わる気は……?」

「自分から進んでする気なんていうのは全くと言ってても良いくらいに無い……巻き込まれたりほしくない限りだけどね……」

自分から何かをしたとかしようなんていった考えは全くと言って良いくらいに存在していない。今のところはただただ平穩無事にいきたいのだ。

保和歩栄は静かに暮らしたい。ただそれだけなのだ。

雄介の出した問いに対する答えを聞いて安心をしたのか、彼等はハアアといった感じに大きな溜め息を吐く。

互いの間を走っていた緊張は解け、彼等の瞳には優しい光が宿っていた。

「それじゃあ……改めて、上条雄介だ」

握手を、そして2度目の自己紹介をしていく。

俺達3人の間には、既に敵意というものは無くなっている。そして何故なのか、旧知

の間柄であるかの様に、親し気に言葉を交わしていた。

「神威志蓮だ。昼間はすまなかつたな」

神威の、その言葉は別に問題は無い。

だが、彼の態度がいきなりに軟化して、戸惑ってしまふ。そうであるのだが、その事に対して予想外だと感じている自分と、予想通りだと感じている2人の自分が居た。

感じていた疑問、そして妙な違和感の正体に気が付き、理解をする事が出来たのだから。

「俺は踏み台を演じているんだ。理由は何と無くだけどき……言ってみれば楽しそうだから、かな」

彼の言葉を聞いて、理解をした。

気持ちを理解するという事は出来ないが、そういうものだと理解し、納得をする事が出来たのだ。

前世で読んでいたネット小説にも、そういった自ら進んで演じているオリ主達が少なからず居たのだという事を思い出す。

「やっぱりか……。どこか不自然だとおもっていたんだよな」

「バレてたのか……」

「俺は『滅竜魔法』全般を使う事が出来るんだ」

唐突に雄介は、自身の持つ力を説明し始める。

「何故、話すんだ？」

「今の転生者の数は、少ない。仲良く、協力しあって生きていくべきだと俺は考えてるんだ。1年前の様な事は勘弁願いたいからな」

暗い顔をして、重い声を出してくる雄介。

彼等もまた、自分と同じ様に、転生者同士で殺し合っていたのだろうか。

「そうだな……だけど、話したら話したで、利用されてпойされたり、弱点を突かれて終わってしまうかもしれないけどな」

そうなのだ。

志蓮の言う通りであり、そうなっても可怪しくは無いのだ。そうなる可能性の方が大きいのだ。

だが、それを理解した上で話してくれたというのなら、それに応えるべきなのではないのだろうか。

「俺の力は、踏み台らしく、ゲート・オブ・パビロン “王の財宝” と アンリミテッドブレイドワークス “無限の剣製” だ。本来なら、能力

だけだから何も出す事も、“投影” をする事も出来ないけど……特典でいろいろと付け足して、出来る様になつてる。因みに、“固有結界” の方はデバイスが無いと展開出来ないから」

「俺は……」

2人が、自身の持っている力を話してくれたのだ。自分も隠さずに話をするべきなのだろう。

だがそれであっても、そう思っている口を開く事が出来ない。出来ないのだ。

「話したくないのなら別に……」

言い淀んでいる俺に、雄介と志蓮は気を遣い、話さなくても良いと言ってくれた。

その言葉に甘え、従い、話さないというのも良いのかもしれない。だが、そうじゃない。それではダメだろう。

彼等の信頼を裏切ってしまう訳にはいかなないのだ。

「大丈夫だ。俺の力は……」

黙っているより、話してしまっただ方が大分と良い結果になるだろう。悪い結果になつたとしても、それはそれだ。運が悪かった。そう思えば良いだけなのだ。

「俺は、サイヤ人だ。たぶんだけど、聖王の血も引いている……」

そう言つて、変身魔法を一時的ではあるが解除する。

彼等には、金髪に紅と翠ロトクリューンの虹彩異色、猿の尻尾が見えている筈だ。

口を開いてみると、次々と言葉が外に出て行く。

その聖王の血を引いているという事、自分がクローンであるという事が原因となつ

て、*“聖王のゆりかご”*などに利用されてしまう可能性がある事。

そして何よりも彼女が生まれてこなくなってしまう可能性が発生している事。

サイヤ人という存在は、星や世界を簡単に破壊する事が出来る程の力を持っている。修行をする事で、誰にでもそういった事が出来る様になる。

だがその力は、*“時空管理局”*にとっては*“ロストログア”*と同等、もしくはそれ以上の脅威になり得るものなのだ。

「という訳だ……」

説明を終えると、そこには何とも言えない微妙な空気が漂っていた。

だが、お互いの事を少しだが知る事が出来て、ほんの数歩ではあるが歩み寄れた様な気がした。

「さて、と……」

そう言いながら雄介は、*“封時結界”*を解除する。それにより周りの色は元に戻っていく。

窓の外は暗く、月の光がほんのりと優しく教室の中に射し込んで来ている。

結界内でも同じ様な変化はあった筈なのだが、会話に夢中になっていた所為なのか気が付かなかった。

「もうこんな時間か」

「解散かな」

「気を付けて」

そんな短い言葉でやり取りをして、学校から出てそれぞれの自宅へと向かう。

教室には鍵が掛けられていたのだが、魔法で学校の敷地外へと転移をしたのだ。

背中を見せながら歩いて行く彼等の姿を見送っていると疑問が浮かんでくる。皆にはちやんと家族が居るのかどうかを。

前世での家族の事を想いながら、帰路へと向かって歩を進めていく。

夜風が吹いていて、頬を優しく撫でていく。それがとても心地良く感じて、思わず顔が緩んでしまう。

「午後9時か……もし家族が居るとしたら、遅くまで出歩いていた事を叱られるだろうな。……彼奴等には、今世での家族は居るのだろうか……？」

教室内で確認をした時の時間は午後8時30分だった。

本当に長い時間を話して過ごしていたのだと実感する。

それだけ楽しむ事が出来たのだ。

それだけ安心をしたのだ。

自分だけでは無かったのだ。

「……………」

時間が時間なので、人通りというものがとても少なく感じられる。

もし、不審者が出てきたとしても大丈夫だろう。今の俺には撃退をする事が出来るだけの力を所持しているのだから。だが逆に、やりすぎてしまわないかが心配だ。

「ただいま」

自宅へと辿り着き、家の中に入る。

もちろん誰か他のヒトが居るといふ訳では無いのだから、とても静かに感じられる。自分の呼吸音と歩く時に発生する音がやけに響き、ハッキリと聞こえてくる。

「なんだか寂しいな……………」

家族というものの事を考えていた所為なのか、その孤独さがとても強く感じられる。

「『自動人形』みたいなのを創ろうかな」

帰宅した時に、家の中に自分以外の誰かが居るといふだけでも、随分と楽な気持ちになるかもしれない上に、和らぐかもしれないのだ。

だが、より一層強い孤独感が襲って来てしまう可能性もあるのだが。

「止そう……………所詮は人形だ。人工知能などみたいなのを積み重ねれば良いのかもしれないけど面倒だ。つくるのに成功したとしても、制作費に維持費、それに時間がどれだけ掛

かるか……」

当分の間は独りなのだと思うと、辛くはある。辛くはあるのだが、我慢をする事は出来る。精神年齢的には既に20を超えているのだから。1人でアパート暮らしをしている様なものだと思うってしまえば、大分と楽なものになる。

もう、子供では無いのだ。肉体に精神が引つ張られてしまっていると思う時もあるが、大丈夫だろう。

「そうだー」

「こんな感じかな……?」

地下24階に存在している広い空間。そこは、普段修行用に使っている場所だ。

小学校に転校を済ませる、手続きが完了する迄の間、この家の増築をしていたのだ。地下25階までを追加していたのだ。

その開けた空間である修行室は、かなりの広さを誇っている。小学校の運動場の26倍程の広さだ。高さの方は、更にその広さの26倍だ。近所どころか、町全体の地下とでも言っても良いくらいだろう。

そして、この空間はスキルメイカーで創り出した能力の効果で補強をしているのだ。

それにより、どのような力や衝撃などが発生したとしても、凹んだり壊れたりとする事は一切無い程の頑丈さを誇っている。例え、惑星破壊規模の力であろうとも、だ。

そしてどの様な事になろうと地上には、地中にも何の影響も出ない。

「はああああああああ!!」

自身のなかに存在している気をコントロールし、調整をしていく。

気と魔力が分裂し、もう1人の自分が出現するのを感じる。そうとしか、言葉にする事が出来ない。

どうやら、苦戦をしながらも分身体を1体作りだすという事に成功をした様だ。

「ふう……」

ドツと強い疲れが襲ってきたのか、大きな溜息が溢れ出てしまう。

額には大粒の汗が幾つも流れており、床にポタポタと落ちていく。

「理解してたつもりだけど、難しいな。だけど……感じは、掴んだ」

—— “四身の拳”。

漫画、そしてアニメの “ドラゴンボール” で “天津飯” というキャラクターが、 “孫悟空” というキャラクターに対して使っていた技の1つだ。

その技は、4人の分身をつくりだして戦うというもの。

だがその技にも弱点はあり、自身の持つ気によるパワーとスピードがそれぞれの分身

に配分され、分身1人分の戦闘能力は4分の1に激減してしまうのだ。

俺は、そこから元々の力と速さを保った分身をつくりだして、戦える様になる事を目標にしているのだ。

“セル”というキャラクターがテレビアニメで使ったものと同じものだ。

言い換えて説明をすると、“NARUTO―ナルト―”に出てきた“影分身”の様なものだ。

さらにその影分身は、強い衝撃を受けても消えない仕様のもの。

「すう……。はあああああああ!!!」

大きく深呼吸をして、再び意識を集中させながら気を開放していく。

気の開放により、周囲には強烈な風が発生して、髪が強く靡いている。室内の空気が揺れ、大きな音が発生して、反響していく。まるでその場に、局所的で小さな台風が発生した様だ。

「はああああああああつ!!!」

自身の身体が、意識が4人に分裂したのを感じる。

お互いに、自身の身体を見ている。思わず見つめ合ってしまう。

「ヒャッホッーッ!!!」

目標を達成した事に対するその喜びで、勢い良く、天井スレスレまで思い切りにジャ

ンプをしてしまう。1体の分身体はガッツポーズを、もう一体の方はバンザイを、最後の1体は大きな笑い声をあげている。

それぞれの分身体にはしつかりと気と魔力が存在している。しかも、それは4分の1にはなっていないのだ。分身を創りだす前の大きさと同等なのだ。そして稀少技能であるスキルメイカーも、それぞれが使う事も出来る。

意識を集中させてみると、その4つの分身体はスウーっといった感じをして、オリジナルである俺の身体に重なる様にして消えていく。

「それじゃあ、この要領で スーパーサイヤジン 超サイヤ人”状態の分身を……」

実際のところ、出来るかどうかはやってみなければ分からない。どうなるか、そしてどれほどの負荷が掛かるのかなんていうのは未知数なのだ。

再度、意識を集中させていく。

気を高め、凝縮していく。限界まで収縮したそれを昇華させていく。

「はあああああああ!!」

その気を、気合を込めながら爆発的に開放して、コントローロールする。

髪の毛が逆立ち金色に光り輝き、瞳の色は緑色へと変わる。その身体のうちからは、抑えられない程の大きな気が溢れ出ていて、黄金のオーラとなって身体を覆っている。

膨大な気は光となり、修行室全体を明滅しながら照らしている。

「ふうく……。この変化にも慣れたものだな」

転生をしたあの日、その翌日での出来事が切っ掛けで超サイヤ人スーパーサイヤジンに覚醒し、変身をする事が出来る様になったのだ。

そして、必死に修行をする事で、自身の意志でごく自然に変身をし、その状態を保つ事が出来るという地点にまで辿り着いた。

「さてと……」

目を閉じ、気を高めていく。

そして、先程の時と同じ様に自身という存在が分裂して増えるのを感じる。

眼を開くと、其処には金色の光を纏いながら逆立った金髪をしている3人の自分が居た。

「……よし」

それぞれの気が元々の50倍に跳ね上がっている。更に気だけでなく、魔力もまた膨れ上がり巨大なものになっている。

各分身体は高速で修行室内を飛び回ったりをしてみる。移動をする度に大きな風切り音が聞こえ、突風が発生するが、目では姿を追う事が出来ない。

それを確認し終わると同時に、思わずガッツポーズを取ってしまう。

「名前は……考えるのが面倒だな」

ただでさえ自分にはネーミングセンスのネという文字や、その欠片すらも所持していないのだ。名前を決めるとなると、頭が痛くなってしまう。

「面倒だ……『真・四身の拳』で良いか」

瞬きをすると同時に解除して、分身体を消す。空間を強く照らしていた3つの光源は消え失せ、1つだけが残った。

「これで問題は解消出来たか」

この技の開発成功により、いろいろな事が出来る様になった筈だ。

例えば学校に登校をしている間に、分身体であるもう1人の俺が家事洗濯をしたり、買い物をしたりとする事が出来る。

修行にも応用する事が出来るだろう。今の所4人の分身体をつくりだせるのだ。ならば、修行効率は4倍以上に跳ね上がるだろう。分身体との組手をしたりと、修行方法のバリエーションも増加したのだ。

これより速く、より強く、より高みへと昇り、向かう事が出来る様になるだろう。

「時間か……」

ピピピと腕輪から電子音が鳴り響く。表示されている時計の針は0時ちようどを指している。

あれほどの巨大な気を開放したというのにも関わらず、このデバイスは壊れてはいな

い。

「作った奴が凄いのか、素材が良いのか」

スーパースァイヤジン

超サイヤ人状態を解除して、シャワーを浴びる。

疲れが溜まっていたのか、パジャマに着替え終えると、ベッドへと倒れ込んでしまう。
目蓋が重く、俺の意識は暗闇へと落ちていった。

そして、西暦2005年、新暦65年の4月。

原作で言うところの1期が始まるうとしていた。

無印編

なのは、魔法との出会い

森の中なのだろうか。

訂正しよう、公園だ。

生い茂った木々の間には人工的に造られた道が存在していて、其処は並木道なのだろう。

そして其処には小学生くらいの年齢であろう男の子一人の姿があつた。何処かの民族衣装の様な服を着ていて、赤く球体の宝石に似た何かを手にかけている。

彼は何かを探しているのか辺りをひたすらに見渡している。

焦っているのか、額には汗が流れていた。

「……………」

そんな少年を、草むらからそつと見ているものが居る。

その存在にはカタチというものがこれといって決まってはおらず、常に変化し、流動をしている。変わらないのは、その不気味に光っている赤い瞳の様なものだけだ。

動いた。

その謎の存在は、少年に向かつて跳んで行く。まるで飢えた肉食の猛獣が草食動物である獲物を狙って捕らえようとしているかの様に速く鋭い動きをしている。

「妙なる響き、光となれ。許されざるものを封印の輪に。『ジュエルシード』封印つ
!!」

それを予期していたのか——彼は慌てる事もなく、静かに呪文を呟いていく。

宝石を握っている方の手を前にかざし、目の前に跳び出して来たその存在へと向け
る。

彼の手の先には、緑色に光り輝く円形の魔法陣の様なものが見え隠れしている。

その光は、木々により暗い影を落ととしている周囲を月明かりよりも強く照らしてい
く。

黒い影である謎の存在はその魔法陣に向かつて、出していたスピードを保ったままで
勢い良くぶつかり、散らばっていく。

彼の宣言通りの封印は完了されず、黒い影は四方に飛び散って移動をしていく。まる
で、その場から逃げていくかの様に。

「逃しちゃった……追いかけ……なく、ちゃ……」

そう言いながら、少年は力無く地面に倒れ込んでしまう。

握っていた赤い宝石には紐が付けられているが、手からコロコロと零れ出てしま

う。

「誰か、僕の声を聞いて、力を貸して……魔法の……力を……」

そのまま、小さな身体は眩い光に包まれていく。

その光が晴れた後にはヒトの子では無く、イタチの様な小動物の姿があるだけだった。

「始まったか……ああ、始まつちまつた……」

自宅の就寝用にと決めた部屋である自室の中で、俺は誰に言うでもなく、ただそう呟いた。

つい先日にも、微弱ながらも“次元震”が起きたのだ。

次元震とは次元世界レベルで起こる災害の1つだ。

そして、次元世界というのは異世界などを含んだ世界の上位構造。

そしてその次元震の直後に、大きな魔力の塊が21個も此処海鳴市へと落ちてきた。世界と世界の間である次元空間を超えて転移してきたのだ。

そして、その後追う様にしてもう1つの魔力が。その魔力の発信源には気も同時に存在していて、感じる事が出来た。その事からヒトか、何かしらの生命体だという事だけ

は理解し判断をする事が出来る。

そして、無作為に放たれた魔法による念話だ。

21個の大きな魔力の塊は、十中八九ジュエルシードだろう。

これらの事からすると概ね原作通りに時間が進んでいつている、出来事が起こっているという事が分かった。

「雄介や志蓮は介入するのかな……」

時刻は午前5時だ。

ベッドから出て、洗顔をする。

冷たい水がパシヤリと顔に当たり、重い目蓋を、目をパツチリと開かせ、頭が覚醒をする。

そして、腕に装着しているデバイスを操作してバリアジャケットを展開する。

展開したバリアジャケットの見た目は実に地味なものだ。何せ、ジャージなのだから。

格好良いのを着たいとは思いますが、そういったものをつくりだすセンスは俺には無く、泣く泣く上下共に黒色のジャージにしたのだ。

地下にある修行室へと、エレベーターを使用して移動する。

電気を付けると、目の前にはただっ広い空間がある。

「はあああああああああ!!!」

その空間の真中へと移動をして、気を開放すると同時に、その空間は大きく揺れ始める。大きな地震が起きている時と同じ程の大きさの揺れ具合だ。

左手に装着している腕輪型のデバイスには1000という数字が表示されている。

これは、自身に掛かっている重力を1000倍に引き上げているという事を表している。

そんな高重力下という環境であろうとも、修行の成果が出ているのか難無く、不自由無く身体を自在に動かす事が出来る。

「だりやりやりやりやりや……だりやあああああ!!!」

勢い良く突き出していく腕の動きによって手は槍や刀の様に鋭くなり、空気を切り裂いていく。

既に目視ではその動きを追う事などが出来る範囲を大きく超えていて、無数の残像が走っているのを確認出来るだけ。辛うじて腕だと判断をする事が出来る程度だ。

「よし。組手だな」

「ああ」

真・四身の拳でつくりだした3体の分身体と向かい合う。

見つめ合っているのはほんの一瞬だけであり、姿が消え失せる。

「おらあああああつ!!」
分身の1体の顔を強く殴る。

すると、その分身体は壁の方へと吹き飛ばされていく。だが、その壁に打つかる前に身体を回転させ体勢を立直おしながらも壁を地面に見立てて、此方へとかなりのスピードで跳んで来る。

相手はその分身体だけ無い。

もう2体の分身体は左右から手を伸ばし、殴りかかってくる。

それに慌てる事無く落ち着いて、身体をずらしていく事で、最小限の動きをしながら回避をしていく。全身に気を巡らせて、分身体が放っている気を追っているので、対応をする事など造作も無い。

左右、そして前方からのパンチとキックが顔や腹、足へと向かって飛んで来る。

「はああああああああああああつ!!」

気合砲で、その3体の分身体を吹き飛ばし、それぞれに向かつて掌から気弾を打ち込んでいく。命中したのか、大きな爆風と煙が発生する。

だが、それ程大きなダメージは受けていないだろう。分身体に宿っている気は健在であり、言う程小さくはなっていないのだから。

「流石に、こんな短時間で決着はつかないよな……」

この間の出来事は、一分も経過などはしていないのだ。当にほんの一瞬の攻防である。

「「「はあああああああああああああああああああつ!!!」」」

分身体を含め、俺は気を増大させ超サイヤ人へと変身をするスーパーサイヤジン!!!!!

先程のエネルギー弾の爆発によるものよりも大きな風が空間内を疾走りまわる。

修行室に設置されているライトよりも、より強く明るい光が身体の内から出ている。

「行くぜ……」

最早、目で追う事などは不可能だろうスピードで攻撃をし、防御や回避をしていく。

空中でぶつかり合う度に、大きな衝撃が発生する。此処が地上なのだとしたら、大地

が捲れ上がっていたかもしれない。ぶつかり合う都度に発生する衝撃と音は巨大なもので、限られた空間を大きく震わせていく。

その鋭い攻撃は、ある程度のダメージは耐え得る筈のバリアジャケットを易易と削

り、千切り取っていく。

この空間は、他の場所と、地上や地中と繋がっていると同時に、繋がってはいない。大

地を割り、砕いてしまう程の威力を誇る衝撃などを吸収し、緩和していく。その為に、外

である空間には何の影響も出ないのだ。

「「「かー」」」

「めー」

「はー」

「めー」

「二」波あああああああああああああああつ!!!!!!
「二」

両掌から放たれる膨大なエネルギーの塊は大きく、広大ではあるが限られた広さであるこの空間を強く照らし、その場を支配していく。

その耳の鼓膜を破るかと思えてしまう程の轟音が身体中を強く叩いていき、狂風は気でコーティングをしている堅い肌をゴリゴリと削っていきながら擦り傷を次々と生み出していく。

「自分の分身とはいえ、これは参ったな……」

音と風は治まり、光が消えていく。

そして目の前には、自身と同じ様に両足を床に付けて立っている3体の分身体が居た。

ピピッとデバイスからアラームである軽快な電子音が鳴り始める。

「もう時間か」

真・四身の拳を解いて、深く息を吐く。

大きく身体を動かしていた為に、ドクドクどいった心臓の鼓動は通常時よりも速く強

い。広く静かな空間の所為なのか、その音をハッキリと感じ取る事が出来る。

デバイス进行操作して、自身に掛けている1000倍の重力を解除し、時計を表示する。その針は午前6時を指していた。

「今日の午前における修行はこれにて終わり……だな」

今の俺は超サイヤ人^{スーパーサイヤジン}の特徴である金髪では無く、黒色の頭髪だ。

浴室で、シャワーを浴びる。

ノズルから吹き出てくるお湯はとても心地が良く、修行による汗を綺麗に洗い流してくれた。

だが、出来たばかりである擦り傷がしみ、鈍く強い痛みが疾走る。

身体に出来ている傷は、ナノマシンによる再生力をも越える程のものだ。常人よりも遥かに優れた再生能力を誇ってはいるが、完全に塞がるには時間が掛かるだろう。傷は再生をしている途中でもあり、直視をするのにはそれなりの覚悟が必要なものだ。

「ツ!! これだけの傷、誤魔化すのは難しいな……虐待だとか思われても困るし、変身魔法で消しておくか」

浴室から出ると、制服に着替え、朝食と弁当の準備をする。

「朝御飯はいつも通りにトーストで良いかな……弁当はどうしようかな……？」
本来サイヤ人というものは戦闘民族だ。

戦うという事を生業としているが為に、エネルギーを大量に消費する。故に大食漢なのだ。だが、俺の身体は人工的に造られていて弄られていたからなのか。それ程に迄エネルギーの消費をする事も無く、少食で済んでいる。それでも前世と比べると、2倍以上は食べる様になった。

稀少技能を使用して料理のレシピや栄養バランスについての知識を得たが、結局のところ料理という料理をしたのは転生をした翌日だけだ。面倒臭くなってしなくなってしまうのだ。そんな面倒な事を毎日の様に行なっていた母親の凄さと偉大さが身に沁みってくる。

いろいろとしていると、時刻は午前7時25分になる。そろそろバスが来る時間だろう。

「行ってきます」

分身体を2体程残して、外に出る。

皿を洗ったりしているのか、家の中からは水の流れている音が外に漏れでていた。

「おはよう。なのは、雄介」

「おはよう」

「おはようなの、ブロン君」

元氣良く挨拶をする。1日の始まりなのだ。不貞腐れて暗く過ごすよりも、景氣良く楽しくいききたいものだ。

そうしていると、バスが来た。

俺達の通っている私立の学園であり、附属の小学校なのだ。送迎のバスがあり、登下校時に利用をする事が出来る。

前世ではこういった体験も想像すらもした事などは無かったので、初めての時は少なからず興奮をしたものだ。

「おはよう。アリサ、すずか」

「おはよう」

バスの中に入ると、後ろの席に座っている2人の少女の姿が目に入ってくる。

昨日と同じ様に、朝の挨拶をしながら彼女等の方へと移動をし、近くの座席へと座る。

そして他愛もない会話を広げていく一方で、俺達転生者である2人は“念話”で密かに会話をしていた。

『気付いたか?』

『ああ……始まったみたいだな』

マルチタスクを使用し、なのは達との会話、そして雄介との念話といった感じで、同時に別々の事をこなしていく。

マルチタスクというのは基本的にパソコンのものと同じ様なものだ。複数の思考行動と魔法処理を並列で行う技能。ヒトにはこういった並列処理は向いてはいなくて、作業効率は大きく低下してしまう。だが、リンカーコアを所持しているヒトはそのデメリットが働かない。というよりも働き難い特異性がある。だからこそ、飛行魔法を使用しながら、他の魔法を使う事が出来るのだ。

念話というのは、伝えたい事を伝えたい相手にだけ、どれだけ離れていようとも言葉を伝える事が出来る魔法の一種だ。

これらは魔導師としては基本中の基本の魔法と技術なのだが、使えるのであればとても便利なものだ。習得しておいて損は無いと言って良いだろう。

「……………」

走っていたバスが停止し、ウィーンといった音を鳴らしながらドアが開く。

生徒達は、そのドアを潜り外へと出て行く。俺も同じ様に外へと出て、前を向く。目の前には校門が存在している。着いたのだ、学校に。

俺達は他愛も無い会話が続けながら、教室へと歩き続けた。

「将来か……」

昼休みには屋上で集まって昼食を摂るのが日課となっている。

外だという事もあり、時々吹いてくる風が頬を撫でていき、心地良く感じられる。

「アリサちゃんとすずかちゃん……もう結構、決まってるんだよね？」

「家は、お父さんもお母さんも会社経営だし。いっぱい勉強して、ちゃんと後を継がなきゃ……ぐらいだけど……」

「私は機械系が好きだから、工学系で専門職が良いかなと思ってるけど……」

なのはの質問に、それぞれが持っている将来の地図を広げながら口にしていく。

言葉にはしたが、それはあくまでも予定の様なもの。今のところそういった考えをしているというものだろう。

「そっか……2人とも凄いいよね。ブロン君は？」

「未定だな」

自宅警備員だなんていうのは、この空気だと口が避けてしまっても言えないだろう。

介入するかすらも決めかねていて、漠然と静かに過ごしたいと思っただけなのだから、将来も何もないだろう。

それに、小学生が将来のプランというものを考えて組み立てていくというのには少し無理があるだろう。そう思っていたが、彼女等にとってはその様な事は無いらしい。

「でも、なのはは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

「うーん、それも将来のヴィジョンの1つではあるんだけど……」

アリサのその言葉に、なのはは頷きながらも、何かが違うと言いた気な様子を見せている。

「驚いた……」

「何に？」

「なのはがヴィジョンなんていう言葉を知っているなんて……」

「にやあああ!!」

茶化す雄介に、猫の様に叫びながら怒るのは。両手をグーにして雄介を叩いているが、微笑ましい光景でありポカポカといった擬音が似合いそうだ。

「したい事は他に何かある様な気もするんだけど、まだそれが何なのかハッキリしないんだ……わたし、特技も取り柄も特に無いし……」

「バカちゃん!!」 自分からそういう事言うんじゃないの」

自己を否定的に捉えてネガティブな発言をするなのはに、アリサはレモンを彼女に向けて投げつけながらキツめの言葉を言う。

「そうだよ。なのはちゃんにしか出来ない事、きつとあるよ」

「確かにそうだな。だがな、アリサよ」

「何よ……?」

アリサとすずかの言葉に同意をしながら、雄介は少し眉間に皺を寄せて、口調が強くなる。

「食べ物投げたりと、粗末に扱うのはダメじゃないか」

「あ……」

彼の瞳を見るとわかるのだが、実際にはそれ程怒ってはいない。

だが、なのはの事を思つての言動ではあると理解はしていても、見過ごせなかったの
であろう。レモンを投げるといふ行動が。

アリサは素直に謝ると同時に、再び騒がしく盛り上がっていく。

「……………」

そんななかで、志蓮は彼女等を見ながら黙り込み、モクモクと食事をしていた。

夕方になり、学校も終わって下校中だ。

夕焼けによる陽光が公園を優しく照らしている。

「今日のすずか…ドッジボール、凄かったよね」

「うん、格好良かったよね」

「そんな事無いよ」

アリサの発言になのはは同意し、それに対してすずかは照れながらも否定をする。

「流石は俺の嫁だな」

「嫁はともかくとして、確かに凄かったな」

志蓮の言葉をスルーして、雄介は彼女等の会話に入っていく。

雄介にも言われた事により、すずかの顔は赤くなり、先程よりも照れてしまっている。踏み台を演じているという事を知ってからなのか、彼の行動と彼女等の反応が面白くあり、微笑ましく感じる。

時には、腹を抱えて笑い転げそうになる時もあるのだ。

「Be quiet!!」

ワンワンと吠えている散歩中の犬に対し、アリサはそれに噛み付く様に大きな声を出して対抗をする。

それに驚いたのか、負けを悟ったのか。吠えていた犬は一気に大人しくなり、頭を垂れる。

そんなペットの様子を見て、飼い主の人は首を傾げていた。

暫く歩いてみると、目の前に並木道が出て来て、続いている。

其処を指差して、アリサは言った。

「ああ、こつちこつち。此処を通るのが塾への近道なんだ。……ちよつと道悪いけど

」

アリサの言葉に導かれる様に、俺達は足を進めていく。

木々の枝々により出来た隙間を夕方特有の陽の陽光が射し込んできて、程良い明るさを与えてくれている。

『ブロン、此処って……』

『お前の考えている通りだと思う。彼奴が居る場所だな……多分……』

俺と雄介は念話で、この場所についての確認をする。

横を見てみると、なのははこの場所に見覚えがあるのか、ソワソワとしていて何だか様子がおかしい。

「どうしたの、なのは？」

「大丈夫……？」

その様子を見て心配し声をかけるアリサとすずかに大丈夫だと応えるなのは。

『……助けて』

「ふえ？」

だがそこに、頭の中で聞き覚えの無い他人の、少年の声が響き渡る。何とも言えない妙な感覚だ。

その声に対し、なのはは思わず進めていた足をピタツと止めてしまう。

『……ファミチキください』

『此奴、直接脳内につ……!?!』

「なのは？」

「今、何か聞こえなかった？」

『来たぞ、雄介』

『そのようだな、ブロン』

目と目で通じ合うとう訳では無いのだが、俺と雄介はアイコンタクトをしながら念話で会話をする。

因みに、なのはに聞こえているそれは無作為に飛ばされているものだ。

俺達が使っている念話はチャンネルを絞って、特定の人物……要するに俺からすると雄介だけへ、雄介からすると俺だけに向かって念話を飛ばしているのだ。

「何が……？」

「何か声みたいな……」

「別に」

「聞こえなかったかな……」

アリサとすずかが気づかないのは仕方が無いだろう。彼女等2人の体内にはリンカーコアが存在していないのだから。

なのはは、それでもその声が気になるのか周囲を見渡していく。

本来ならば、木々の葉が擦れて聞こえてくるざわめき程度だと考えて、済ましていただろう。

だが、なのはにとつてそれは、頭に、脳内に直接語りかけてくるものなのだ。無視をするなんていう事は出来ないだろう。

そんななのはの様子を見て、アリサとすずかの2人も同じ様に周囲を用心深く見渡していく。

『助けて』

声とする。これで2回目だ。

なのはは、その声のする方へと駆け出していく。それが、其処が何処なのかという事を理解しているかの様に。

「多分、こっちの方から……あつ！」

ある程度走っていると、目の前には小さな動物が居た。その動物はうずくまっていた。

駆け寄ると同時に、なのはの気配に気が付いたのか、顔を上げる動物。だが、その様子は何処か弱々しい。

そしてその動物の首の辺りには、赤い宝石の様な玉の首飾りがあった。

「どうしたのよ、なのは……急に走りだして」

「見て。動物……怪我してるみたい」

追いついた俺達は、なのはが抱きあげているその動物の存在に気が付く。

すずかの言葉通りで、その小動物は怪我をしている。

致命傷では無いがそれであっても怪我をしているという事に変わりは無く、かなり衰弱をしている。

「うん、どうしよう……」

「動物病院へ行くべきだろう」

極めて冷静に、落ち着いた感じに雄介は言う。

その言葉に、アリサは持っている携帯電話で執事である鮫島さんに連絡をして、動物病院を探させる。

「淫獣……」

志蓮がボソツと小さな声で言っている様だが、無視をする雄介。

幸いにもものは達には聞こえていない様だ。

『それは、あくまでも二次創作で言われていただけのものだから……』

「鮫島」さんからの連絡が来て、動物病院の場所が判明する。

俺達は、その教えて貰った場所にある病院へと、急いで走りだした。

「怪我はそんなに深く無いけど、随分と衰弱してるみたいね。きつと、ずっと一人ぼっちだったんじゃないかな」

その言葉に安心をするなのは達3人娘。

連絡も、予約もしていなかった筈なのだが、快く診察をして貰えた事に感謝だ。だが、もしかすると鮫島さんがこの「榎原動物病院」に予約をしておいてくれたのかもしれない。

「先生。これってフェレットですよ？ 何処かのペットなんでしょうか……？」

「二目でフェレットだと分かるなんて凄いな」

「フェレットなのかな……？ 変わった種類だけど……それに、この首輪に付いているのは寶石なのかな？」

『デバイスなんだよなあ……』

俺と志蓮にだけ聞こえる様にと、念話をしてくる雄介。

先生が手を差し伸べると同時に、横たわっていたフェレットは目を覚ます。

「起きた……」

フェレットは周囲を見た渡して、なのはへと目を向ける。

「なのは。見てるよ」

「うん。えつと……ええつと……」

どうして良いのかが分からないが、取り敢えず恐る恐ると手を差し伸ばしていくのは。

そんななのはの行動に対して、フェレットはペロツと小さな舌で指先を舐める。

その行動に驚きはするが、反応を返してくれる程度に元気になったのを見て嬉しかったのか、3人娘は顔を綻ばせていく。

その一方で志蓮は、強く、キツく、威嚇をするかの様にして睨みつけている。

「暫く安静にした方が良さそうだから、取り敢えず明日まで預かっておこうか？」

「はい、お願いします」

先生のその言葉に、俺達は元気良く応え、甘える事にした。

「そろそろ行かないと遅れてしまうぞ」

「やばっ！ 塾の時間」

俺と雄介と志蓮は行かないが、なのはとすずかとアリサは塾に行かないといけない時

間になっていた。

「それじゃ、院長先生。明日、また来ます」

手を振りながら動物病院を後にし、先を急ぐ彼女等。

背中に背負っているランドセルが、走っている彼女等の動きとシンクロして上下に激しく揺れ動いていた。

夜。

良い子はそろそろ布団の中でグッスリと眠りに入る時間帯だ。

そんな時間に、自身の持つ携帯電話へとなのはからの一斉送信によるメールが送られて来て、着信をする。

「なになに……フェレットは預かる事が出来る様になった、か……」

そのメールに記載されている内容の確認を済ませると同時だろうか。無差別に飛ばされているであろう念話が頭の中に届いてくる。

『聞こえますか？ 僕の声が聞こえる貴方、お願いです。僕に少しだけ力を貸して下さい』

意識そのものに直接語りかけてくるその声は、どこか緊張感を、そして緊迫感を感じ

させてくる。

『お願い、僕のところへ。時間が、危険が……もう……』

そこで念話が途切れてしまう。だがそこに、入れ替わる様にして雄介からの念話が届く。

『始まったけど……。どうする？』

その質問に対して、俺は前に答えたものと同じ回答をする。

『様子見かな……。俺から介入するつもりは無いし。危なそうなら、俺も出るけどな……』

『分かった。僕は行くよ』

念話による会話を中断する。

雄介の気が、先程の念話の発信源である榎原動物病院に向けて移動していくのが感じられる。

そこになのはの気も、そして志蓮の気も移動をしている事に気が付く。

「(イレギュラーである俺達転生者の存在により、何かしらの変化が起きてなければ良
いんだけど……)」

こういつた考えなどをフラグだと言うのだろうか。だが嫌な予感は、考えは全くと言つて良いくらいに、一向に頭から離れなかった。

無差別に飛ばされていた念話を受け取り、家から無断で抜けだしたなのは。

その発信場所である動物病院に到着すると同時に封時結界が展開される。

「また、この音?」

展開される時に鳴る、その聞きなれない音に対し、なのはは耳を押さえる。

気が付くと、窓から逃げ出したのか、夕方に預けていた筈のフェレットが走っていた。処置の際に使われた包帯が巻かれているのだから、その時のフェレットで間違いは無いだろう。

「あ、あれは」

走るフェレットに対し、何かが追いかけている。その何かは勢いがあり過ぎたのか、そのまま敷地内にある木にぶつかってしまふ。

フェレットは何かそれを回避する事が出来たのか、回避時にジャンプした勢いのままでなのはの方へと跳ぶ。

跳び込んできたフェレットを受け止めて、抱きしめるなのは。

「何々? 一体何?」

「来て………くれたの?」

そのフェレットの言葉に慌てふためいてしまうのは。言葉を、日本語を話すフェレットが目の前に存在しているのだから、それは仕方が無い事なのかもしれない。

「■■■■■■■■■■!!!」

木にぶつかっていたその何か——形を持たない存在——は低く、そして大きく深い唸り声をあげる。その声により、病院などの建物にある窓ガラスが次々と割れていつてしまふ。

其処から、フェレットを抱えたままで逃げ出す様に走りだして、離れていくのは。この状況を説明して貰う様になのははフェレットに対し。走りながら問いかける。

「その……何が何だか分からないけど、一体何なの？ 何が起きてるの？」

「君には資質がある。僕に少しだけ力を貸して」

「資質？」

「僕はある探しものの為に此処では無い世界から来ました。でも、僕一人の力では思いを遂げられないかもしれない。だけど、迷惑だとは分かっているんですが、資質を持った人に協力して欲しくて」

そう言いながらなのはの腕の中から飛び出し、道路に降り立つフェレット。なのはの方へと顔を向けながら、再度口を開く。

「御礼はします、必ずします。僕の持っている力を貴女に使って欲しいんです。僕の

力を、魔法の力を」

「魔法？」

突然の事に、言葉に戸惑いを隠せないでいるなのは。

だがそれと同時に、困っている誰かを放ってはいられない自分も存在している事に気が付く。

そこに、空から先程の謎の存在が迫り、落ちて来る。

「^{ゲット・オブ・バビロン}王の財宝!!」

何かが、その言葉と同時に、謎の存在に降り注ぎ、貫いていく。

「無事か!? なのは!!」

「志蓮君!」

その彼の姿を見て、金色に光り輝いている鎧を装着している事に、彼の使っている不思議な力に驚き、戸惑うよりも先に助かったのだという安心感を感じた。

「淫獣……早くなのはに、^{レイジングハート}を渡すんだっ!! 俺が時間をk——」
全てを言い終える前に、謎の存在の攻撃により、彼は遥か遠くへと吹き飛ばされてしまった。
まう。

その言葉にする事が出来ない何とも呆気無い退場は、なのは達に一瞬だけとはいえ、時間が止まった様な錯覚を与えた。

「……どうすれば良いの?」

「これを」

気を取り直してそう言いながら、フェレットは首輪に付けていた赤い球体の宝石を口で啜え、なのはへと差し出す。

「(暖かい)」

その宝石は何か熱を放っているかの様に、彼女自身のなかに存在している何かと共鳴をし、共振をしている様に震え、光り輝いている。

「それを手に、目を閉じ、心を済ませて、僕の言う通りに繰り返して」
覚悟を決めて目を閉じ、そしてその紅玉を強く握り締める。

「良い? いくよ」

「うん」

「我、使命を受けし者なり」

「われ、使命を受けし者なり」

その言葉に、呪文に反応をするかの様に、手の中にあるその宝石はより強く輝きを放っていく。

謎の存在である黒い影は、待つという事などはもちろん無く、突っ込んで来る。

「契約のもと、その力を解き放て」

「えっと……契約のもと、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「〴〵風は空に、星は天に、輝く光はこの胸に〴〵」

「〴〵そして不屈の心は〴〵」

不思議な事に頭の中に知らない筈のワードが頭に浮かび、なのはは自然とその呪文を口にしていった。

「〴〵この胸に。この手に魔法を。レイジングハート、セットアップ〴〵!!」

【Stand by ready set up.】

大きなピンク色のの光がなのはを中心にして広がり、包み込んでいく。天を貫いて、上空に存在している雲を突き破り、それは強烈な光を放っている。暗い結界内を、その魔力は強く辺りを照らしている。

「なんて魔力だ……」

その光は魔力そのものであり、なのはの、彼女の保有している魔力の多さを物語り、証明している様だ。

突っ込んで来ていた黒い影は、その光り輝く膨大な魔力に跳ね返され、吹き飛ばされる。

「落ち着いてイメージして。君の魔法を制御する魔法の杖を……そして、君の身を守

る強い衣服の姿を」

「そんな、急に言われても。……えっと……えっと」

戸惑いと焦りを同時に感じてはいるが、その気持を抑え、目を瞑って意識を集中させていく。

先ずは杖の方だ。白い部分を基軸にして、上の先端部分が黄色、赤い玉が存在していて、下部の方はピンク色。それは何処か、ファンタジーの世界に出て来る魔法使いの手にしている杖よりも、SFの世界に出て来る兵器の様に機械的な印象を与えてくる。

次に衣服の方だ。こちらも杖と同じ様に白色を基調としている。青色の裾に、赤い宝石の装飾、そして胸元には赤いリボンがある。

「取り敢えず……。これでー」

赤い宝石であるレイジングハートに口吻をして、手の平にのせる。そして着ている服が、上着が、そして下着が分解されていく。玉の部分であるレイジングハートが大きくなり、それを中心にして杖が虎竹されていく。何処からともなく部品が出現し、想像した通りの杖が出現した。分解された服の変わりに、白色のバリアジャケットが構築されていき、なのはを包んでいく。そのバリアジャケットの見た目は、自身が通っている小学校の制服の影響を強く受けているのが見受けられる。

「……成功だ」

なのはのその姿を見て、フェレットは安心をし、一息を吐く。

「ふえ？ ふええ?!? うそ？ な、何なのこれ？」

自身の姿が変わったという、その事に驚き、戸惑う暇を感じる暇も無く、その黒い影はなのはに襲い掛かって来た。

女に向かって急速に落ちてきた。

「Protection」

「んっ……んん……んんん……っ！」

杖の先端分に存在している赤い球体が発光し、光が放たれる。その放たれた光は、なのはの前方に薄い壁の様なものを創りだし、展開をした。

その壁は薄く見えるが、かなり強固なものようだ。

壁に阻まれ、自身で生み出した速さにより発生した衝撃で、影は破片となり、四散し、それぞれが民家の塀や道路に突き刺さっていく。その中の1つが電信柱に刺さり、電灯を大きく明滅させながら前に設置されている塀に向かい倒れてしまう。

「ええ………、ふえええ……!!」

日常生活の中では見る事が出来ないであろうその光景に対し、なのはは目を大きく見開いて戸惑う事しか出来ない。

「僕等の魔法は、発動体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。そして、その方式を発動させる為に必要なのは術者の精神エネルギーです」

腕の中に居るフェレットの話を聞きながら、背後に存在している影に注意を払いながら、破壊されたその場所から離れていく。

飛び散った影は、少しずつではあるが元に戻ろうとしている。

貫かれ、破られてしまう。

「きゃああつ!!」

破られてしまったその衝撃により、なのはの小さな身体は地面に強く打ち付けられ、彼女は数回程大きくバウンドをしながら道路を転がってしまう。

「う、うう……」

そのダメージにより身体はフラフラと、足はガクガクと震え、上手く立ち上がるといふ事が出来ない。

そんななのはの目の前には思念体が居て、彼女に追い打ちを掛けるかの様にして迫ってくる。

そんな状況と状態の中で、なのはの心には先程まで感じてはいなかった筈の恐怖というものが押し寄せてくる。

「誰か……助けて……。雄介君……。ブロン君……。……」

今のなのはに、高町なのはに出来る事は、目を閉じてただただ祈り続ける事だけだった。

「火竜の咆哮」つ!!」

思念体に向けて、膨大な熱量を誇る巨大な炎を辺り、焼いていく。ボウボウと燃える思念体は、身体を捻じり、振って必死に身体を動かして身を焼き続けている火を振り払

おうとする。

「無事か……なのはや？」

聞こえてくるその声は、純粋になのはの無事を確認しようとする優しいものだった。

「ゆう、すけくん……？」

「あいよ」

なのはの、彼女のぼやけている視界に映っているのは小さい頃から一緒に居た幼馴染みの姿だった。

その後姿は、燃え盛る炎に照らされている。

「貴方は……？」

「今は、そんな事なんてどうでも良い……」

フェレットが言ったその言葉を聞き流し、雄介は目の前の思念体を睨みつける。

雄介の目には、倒れている幼馴染みとその原因をつくりだしたであろう思念体しか入ってはいない。

「先ずは此奴をぶっ飛ばす!!」

その言葉には、彼の目には強い意志が存在している。大事な幼馴染みを、高町なのは

「“火竜の鉄拳”っ!!!」

雄介は拳に炎を纏わせて、強力なパンチを打ち付ける。その攻撃は見事にヒットし、思念体を吹き飛ばし、数メートル程もの距離を移動させる。

道路である大地を強く蹴り、跳びかかりながら次の攻撃へと移る。

「“火竜の鉤爪”!!」

炎を纏わせたその足で、思念体を上空へと高く蹴り飛ばす。空へと飛ばされてしまった思念体は、何の抵抗をする事もなく、そのままの状態で廻られ続け、落ちていく。

「可怪しい……」

その思念体の様子を見て、フェレットは訝しむ。

そう、可怪しいのだ。

暴走をしている思念体が、抵抗という抵抗をする事もなく、ただただ受け身でいると
う事が信じられないのだ。

「……………」

隣で座っている彼女、なのはと呼ばれた少女を横目にし、戦闘をしている少年の方へと心配をしながら目を向ける。

「何も無ければ良いけど……」

フェレットが呟いたその言葉は暗い空へと吸い込まれていく。

「此奴、効いてないのか……?」

これと言つて、何の反応も見せずに殴られ続けている思念体を目にし、苛立ちを募らせていく雄介。

思念体のその様子はまるで好機を狙っているかの様でいて、何かを学んでいるかの様にも感じられる。

「(気にはなるが)。……このまま終わらせる」

雄介は心の中に巢食っている懸念を振り払つて、思念体へと突つ込んでいく。

「火竜の」

炎を拳に纏わせ、殴りにかかる。

殴つて殴つて動きを封じ込め、封印をする。今の彼にはその事しか頭の中には無い。

「——何っ!?!」

殴りにかかったその拳は、スルリと避けられてしまう。

その思念体の持つ目は紅く不気味に光り、口は大きく裂ける。まるで雄介の攻撃など防御をする必要が無いと言つて嘲笑っている様だ。

「くそっ……もう一回だ」

偶然だと自身へと言い聞かせ、再度突つ込んで行く雄介。だが、その拳は尽く躲されていく。

が聞こえて来る。

「あの野郎……」

立ち上がり、雄介は思わず悪態をついてしまう。彼の瞳は死んではおらず、闘士はただ失われてはいない。だが思念体に対し、構える事はせず、ただ腕を組むだけだった。

「だけど、どうするか……今の俺には勝てないし。(……こんな事なら、イメージトレニングでもしとくんだったな……)」

「あの……。動きを封じてさえくれれば、封印が出来るのですが……」

なのはとフェレットは、立ち上がった雄介の側へと移動をする。

そんな彼等の行動を、思念体はただじっと見つめていた。

「だけど、その動きを封じるっているのが出来ないんだよなあ……。彼奴、動きが速くてよ」

瞳を見る限りでは闘志は失われてはいないのだが、雄介の言葉には何処か諦めとうものが感じられる。

そんな雄介の弱気な言葉に、なのはとフェレットはシユンとしてしまう。

「そう言えば、志蓮の奴は……?」

「助けには来てくれたんだけど、あっちの方に吹き飛ばされていったの……」

彼の無事を祈りながらも、飛んでいった方向を指さすなのは。

「そっか……仕方ない。助っ人、呼ぶしかないかな……」

「助っ人ですか？」

フェレットの質問を聞き流し、雄介は意識の一部を念話の方へと向けていく。

思念体は此方の様子を伺っているのか、全く動こうとはしていない。

『もしもし、ブロン……？』

『なんだあ……？』

『ボスケテ』

「しよすがねえな……」

念話を終える事もなく呼び出した瞬間に、雄介達の目の間に1人の少年は到着をした。黒いジャージを着た男の子だ。

「ブロン君……？」

「そうだ」

戸惑っているのには対し、俺は応える。

目の前にはジュエルシードの暴走により出てきた思念体、後ろにはなのはに雄介、そして「ユーノ・スクライア」だと思われるフェレットだ。

「早速だけど、彼奴の動きを止めてくれるかな」

「貸し1つ……」

「分かってるよ」

「あの……」

「どうした？」

「失礼な事だとは理解しているんですが、貴方からは魔力と呼べる程の魔力を感じる事が出来ません……2人からは膨大な魔力を感じ取る事が出来るんですが……」

フェレットのその声には期待と同時に、不安を抱いているという事を俺に理解させてきた。

「言いたい事は何と無くだけど理解出来る……ま、見ておくと良いき。魔法だけが全てでは無いって事をさ」

そう言いながら、思念体へと目を向ける。

身体が固定化されていない為に流動をしているが、目と口はしっかりと存在している。そして、その紅く不気味な両目は静かに此方を見ている。

「何だ……? 此方が動くのを、戦闘態勢に入るのを待っていてくれるのか……? 随分と律儀で、紳士的じゃないか……。 (やつぱりこうなったか……こうなつてしまふという予想はしてたけど、避けられなかったのかな……)」

そういった考え自体がフラグそのものなのか。前世からのものを含めて、日頃の行いが悪かったのか。考えれば考える程に、ネガティブな方向へと気持ちいが傾いていく。

「（その疑問は今置いておくか）。……今は、目の前の此奴をどうするか。行くぞ……」

「——えっ!?!」

その一瞬の出来事になのはとフェレットは目を大きく見開いてしまう。

息を吐くとうい一秒にも満たない間にして、思念体の直ぐ側である前に移動をしていったのだから。

「■■■■?」

そんな不思議な現象に、思念体の方も彼女等と同じ様に驚きを隠せないでいる様だ。

「え? え? 何が起こったの?」

「どういう事なんですか?」

「高速で移動をしただけだよ。……目では捕捉出来ない程の速さで動いたんだ。光速じみた速さでね……」

実際のところ、雄介自身にも理解をする事は出来ていない。だが、そういった解釈をし、表現をもって説明をする事しか出来ないのだ。

そんな説明を受けても、なのはとフェレットは、やはり信じられない様だった。

取り、思念体に当たって、10メートル近くもその場所から吹き飛ばす。

「存外にしぶといな……」

吹き飛んだ思念体の身体は所々欠けているが、1秒も経たずして再生を済ませてしま
う。

「動きが……」

「さつきよりも遅くなっている……?」

再生を続けながら闘っている思念体の動きは、雄介との戦闘時と比べて格段に遅く、
ゆっくりとしたものになっていた。

「……そうか!! 魔力が減っているんだ」

「どういう事?」

「思念体は、ジュエルシードに内包された魔力が暴走したものだ。なら、再生するのに
も、ジュエルシードの中の魔力を消費する。魔力とはエネルギーそのものだ。だから、
消費された分だけ」

「これなら……」

「おらあああああつ!!!」

力を込め、蹴り飛ばす。思念体はコンクリートの道路を削りながら、ブロック塀を壊
しながら遠くへと飛ばされていく。

思念体は、その与えられた大きなダメージにより、度重なる再生で沢山の魔力を消費した事により動く事が出来ないでいる。カタチを保っているので精一杯なのだろう。

「今なら」

フェレットのその言葉になのはは頷いて、頭のなかに浮かんでいた呪文を唱えていく。

「リリカル・マジカル」……封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード……ジュエルシード封印!!」

【Sealing mode” set up】

レイジングハートから発せられたその言葉に従うかの様に杖は大きく姿を変えていく。杖上部に存在しているピンク色の部分から魔力で出来た光の翼が発生した。

そして、杖の先端部分から魔力系が飛び出し、思念体を縛り上げる。

その思念体の頭の部分なのだろうか。そこにはXXIというローマ数字が浮き出てくる。

【Stand by ready】

「リリカル・マジカル……ジュエルシード、シリアル21……封印!!」

【Sealing】

その言葉が告げられるとまた杖からは無数の光が発生して、それは縛り上げられてい

「あ、あれ……? 終わったの?」

「はい、貴女達のおかげで……ありがとう」

そう言い、崩れた瓦礫の上でドサツと倒れてしまうフェレット。

衰弱しきっていた昼間と比べ随分とましになったが、病み上がりなのは確かで、フェレットはそのまま意識を失ってしまう。

「ちよつと、大丈夫? ねえ?」

「そのフェレットを連れて、此処から離れるぞ」

「ブロンの言う通りだ」

「どうして……?」

思念体を倒して、暴走したジュエルシードを封印。

事態が何とか収まった事に安心は出来るが、此処に居続けるというのは非常に不味い選択だと言えるだろう。

「聞こえないのか?」

まだ離れているからか、しっかりと聞き取る事が出来ない。だが、確かにピーポーピーポーといったサイレンの音が鳴り、段々と近付いて来ているのが感じられる。

フェレットが展開したであろう結界は、そのフェレットが気絶をした事により、解除されている。

結界により、人的被害というのは出ていないが、物理的被害は出ているのだ。それに
対し、近隣住民の誰かが通報をしたのだろう。

「も、もしかしたら……私達、此処に居ると大変あれなのは……」

「全く以て」

「その通り」

その言葉を聞いて、漸く事態が飲み込めたのか慌て出すなのは。

「撤収！」

「と、取り敢えず……ご、ごめんなさうい」

謝罪をしながらも、フェレットを抱きかかえてその場を後にするなのは。俺と雄介も
また、その後を追いかけるかたちで走りだした。

人っ子一人すらも居ない静かな公園に逃げ着き、俺達は一息を吐く。
息を切らしているのはをベンチに座らせ、俺達は深呼吸をして落ち着きを取り戻
す。

「すみません……」

「あ、起こしちゃった？ ごめんね、乱暴で……怪我、痛くない？」

目を覚ますと同時に謝罪をしてきたフェレットに対し、優しく声を掛けるのは。

「怪我は平気です……もう殆ど治ってるから」

小さな身体を震わせて、自ら包帯を解いてくフェレット。怪我が治っているという事を見せる為なのだろうが、随分と器用なものだ。

「ほんとだ……怪我の傷が殆ど消えてる……凄い」

包帯を解いたフェレットを抱き上げ、所々怪我をしていたであろう箇所を確かめていくのは。

「助けてくれたお陰で、残ってる魔力を治療に回せました」

「よく分かんないけど、そうなんだ……ね、自己紹介して良い？」

「あ、うん」

「えへん。私、高町なのは。小学3年生。家族とか仲良しの友達のはって呼ぶよ」

「僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だからユーノが名前です」

「ユーノ君か……可愛い名前だね」

そのなののは言葉に照れたのか、下を向くユーノ。

『ユーノがヒトの男の子だって気付いてないみたいだな……』

『その様だ』

2人の自己紹介を見て、此方も同じ様にして自身の名前を口にする。

「僕の名前は上条雄介。雄介で良いよ」

「保和歩栄だ。ブロンで良い」

「そう言えば志蓮君は？」

「彼奴なら無事だと思うよ」

「そっか」

なんと淡白で、おぎなりであり、冷たい会話なのだろうか。自分で言っておきながらも、その言葉に、自分がどれだけは相手に対して興味が無いのかというものが感じられた。

「すみません……貴女を……」

「なのはだよ」

謝るユーノを抱き上げながらも、もう一度自身の名前を言うなのは。

「なのはさんを、皆さんを巻き込んでしまいました……」

「あ、その……」

そのユーノの謝罪の言葉に対し、なのはは戸惑いながらも笑顔で応える。

「たぶん……私、平気。あ、そうだ。ユーノ君、怪我をしてるんだし、此処じゃ落ち着かないよね……取り敢えず、私の家に行きましょう。後の事はそれから……ね……？」

なのはの言ったその言葉に、ユーノは頷く。

高町家。

静かに足を進め、なのはの家の近くへと歩いて行く。

だが其処には、待ち構えていたのか、見覚えのある青年の姿があった。

「おかえり……」

その青年の言葉に、ピクツと竦ませ小さな身体をより小さくするのは。彼女の足はピクピクと震えてしまっている。

「お、お兄ちゃん……」

なのはの兄の『高町恭也』さんだ。自爆をしたり、突拍子も無く何かを始めようと言い出したり、強制的に自害させられたりしそうな声をしている青年だ。スラリとしている上に、体格も良い。

「こんな時間に何処にお出掛けだ？」

なのはが出て行くところを見かけたのか、彼女の事を相当に心配していたみたいだ。

「あの、その……えっと、えっと……」

「すみません、僕達が連れだして」

「ほう……」

応えに窮しているのには対し、雄介は助け舟を出そうとするが失敗してしまう。

恭也さんの目が細く、鋭くなる。気の所為かもしれないが、少なからず殺気も感じられ、冷や汗が流れそうになってしまう。

「あら、可愛い〜」

「お、お姉ちゃん?」

そんな重い空気の中に、救いの手が差し出される。

「高町美由希」さん。なのはのお姉さんだ。眼鏡を掛けていて、三つ編みをしている。

「あら……なんか元気無いわね。貴女達はこの子の事が心配で様子を見に行ったのね

……」

「ええと、あの……」

「気持ちはわからんでもないが、だからと言って内緒でというのは戴けない」

「まあまあ、良いじゃない……こうして無事に戻って来てるんだし。それに、皆は良い子だから、もうこんな事しないもんね?」

恭也さんに見えない場所で俺達に向かってウインクをし、フォローを入れてくれる美由希さん。後で、何かお礼をした方が良いかもしれない。

「うん。その……お兄ちゃん、内緒で出掛けて、心配かけてごめんなさい」

「すみませんでした」

誠意が、申し訳なかったという反省の意が伝わったのか此方の謝罪を受け入れて許してくれる恭也さん。

だが、精神年齢では上である此方が、年下に深々と頭を下げて謝るといふのには少しばかり抵抗があつた。それでも、俺達に対して心配をしてくれていたのだから、純粋に感謝をしておいた方が良いだろう。

「はい、これで解決。でも可愛い動物ね。母さんなんか……この子、可愛過ぎて悶絶しちゃうんじゃない？」

「その可能性は否定できんな」

美由希さんの言葉に、恭也さんは苦笑しながら返答する。

俺達にも、なのはの母親である「高町桃子」さんの姿を、ユーノを見て悶絶している姿が簡単に想像出来て、笑ってしまう。

「取り敢えず、お前達の家には、親御さんに連絡は入れるからな」

楽しい気持ちで解散をする事が出来るかと思いきや、そんな事は無かつた。

まあ、自宅に待機している親も、自分の分身が変身をした姿なのだから問題は無いのだが。

「なのは……昨夜の話、聞いた？」

元氣良く挨拶をするなののはに対し、アリサは何かを心配している様だ。

「昨日、行った病院で車の事故か何かあったらしくて、壁が壊れちゃったんだって」

「あのフェレットが無事がどうか心配で……」

「うん……」

アリサ同様にすずかも心配をしている様で、とても沈鬱な表情をする2人に対し、なのは戸惑いながらも応える。

「ええとね……その件は、その……」

「そっか。無事なのはん家に居るんだ。で、あんた達は知ってた訳？」

なのはが説明をするなかでタイミング良くなのか、悪かったのか俺と雄介は教室の中に入る。ランドセルを置き終えた俺達に、アリサは質問をしてきた。

「俺はランニングをしてて、丁度、偶然にな……」

「なのはが家を出て行くのが窓から見えてな……追いかけてみたら」

昨夜、寝る前に念話を使用して、2人で用意をしておいたものを口に出す。

そんな苦し紛れな回答に対し、アリサ達は何の質問を挟んで来る事も無く、話は進んでいく。

「でも、凄い偶然だったね。たまたま逃げ出してたあの子と、道でばったり会うなんて」

「ねえ」

笑い合っているアリスとすずかに対し、なのははアハハと苦笑いを浮かべる事しか出来なかった。

「（嘘は吐いてない……嘘は吐いてない……。ちよつと、ちよこつと真実を暈しただけ……）」

そんななのはの様子を、彼女等2人は不思議そうに見つめていた。

「そ、それでね……あの子、飼いフェレットじゃないみたいで……当分の間、家で預かる事になったよ」

「そうなんだ」

「名前付けてあげなきゃ。もう決めてる?」

「うん。ユーノ君って名前」

「ユーノ君……?」

「うん。ユーノ君」

「へえ」

そう話をしていると、チャイムが鳴り響く。

立って話をしていた生徒達、教室の外に出ていた生徒達は戻って来て、それぞれの席へと座る。

暫くすると教師が来て、授業が開始された。

「この前お話しした通り、漢字は偏と旁で出来ています。それを組み合わせる事で漢字は、1つの文字でもいろいろな意味を持つているのです。それは、偏には偏の意味、旁には旁の意味があるからです。例えば……………」

太陽の陽光が窓から射し込んでくる教室の中で、教師は漢字について説明をしている。

俺は窓際の席なので窓から外の景色をチラチラと見ながら、黒板に書かれている事を模写していく。だが、先生の話は耳に入っては来ない。

と言うよりも、聞いていないのだ。前世で学んで、覚えている事なので聴く必要性が一切感じられないのだから。

『ジュエルシードは、僕等の世界の古代遺産なんだ』

『ユーノか…………』

『古代遺産って…………オーバーテクノロジーだとか、オーパーツだとかみたいなの？』

『そんな感じですよ』

突然のユーノからの念話にハツとしてしまうが、それ程驚く事は無く、直ぐに平常心に戻って取り繕う。

授業中ではあるのだが、マルチタスクによる処理が出来るので、しつかりと聞いている体を装って念話に集中出来るのだから問題は無い。まあ、当てられた時の為に聞いておくべきだろうが。

だが、なのはの方は魔法を手に入れて直ぐどうのもあり、慣れていない様で、しつかりと授業を聞く事が出来ずにアタフタとしている様に見える。

『本来は、手にした者の願いを叶える魔法の石なんだけど……力の発現が不安定で……。昨夜みたいに暴走して、使用者を求めて周囲に危害を加える場合もあるし……』

ユーノのその言葉を聞いて、なのはは昨夜に相对した思念体の事を思い出す。

常に身体は流動していて、影の様に見える、紅い瞳に、大きく裂けた口。そして、その身体から放たれる無数の触手。その触手による攻撃は、コンクリートを簡単に粉々にしてしまう程の力を持っているのだ。

「確かに、あれは危険だな……。前世のアニメで見たものよりも遥かに強力になっていたし……」

『たまたま見付けた動物や人が、間違つて使用してしまつて……それを取り込んで暴走する事もある』

『そんな危ないものが、何で家の御近所に?』

『僕の所為なんだ……』

シユンとしたトーンの声を出して、念話をしてくるユーノ。

この街にジュエルシードが落ちて来た事に責任を感じているのだろう。

『全部私のせいだ! ハハハハハッ! 全部私のせいだ!』

『黙れ、雄介……』

そんな俺達の茶番を聞き流し、話を続けていくユーノ。

ユーノはチャンネルを絞っていないからか志蓮にも聞こえてはいるだろうが、口を挟んで来る様子は無い。

『僕は故郷で、遺跡発掘を仕事にしているんだ。そしてある日、古い遺跡の中であれを発見して、調査団に依頼して、保管して貰ったんだけど……。運んでいた時空艦船は事故か、何らかの人為的災害にあつてしまつて。21個のジュエルシードは、この世界に散らばつてしまつた……。今まで見付けられたのは、昨夜のを含めて2つ』

『あと19個か。あれ……? でもちよつと待つて……。話を聞く限りでは、ジュエルシードはこの世界に散らばつちやつたのつて、別に全然、ユーノ君の所為なんかじゃ無

いんじや』

『だけど、あれを見付けてしまったのは僕だから……。全部見付けて、あるべき場所に返さないと駄目だから……。』

『なんとなく、なんとなくだけど……。ユーノ君の気持ち、分かるかもしれない。真面目なんだね、ユーノ君は』

強い自責の念、そして真面目さがユーノを動かしているのだろうか。だからこそ独りで、何も知らないこの世界に来て。暴走した思念体を単独で封印しようとしていたのだろう。

だが、やはり一人で出来る事には限界が存在している。限られているのだ。そしてその事に気が付き、この世界の人に、魔法を使える素質を持つている人に、念話で協力を求めたのだろう。

『ジュエルシードを発見したという事から考えるとお前の行動も原因の1つなのかもしれない。……。だけど、それだけだ。事故が起きてしまったのは、その船の整備を怠っていた所為。本当に人為的災害なら、それを起こした奴が悪い。それだけだろ。別に、お前が気にする事なんて無いさ……。あまり自分を責めるなよ』

『そうだよ（便乗）。気にするな、なんて言われても無理かもしれない。仕方が無いと理解はしているだろうけど、義務と責任は全くの別物だゾ』

フォローと言える程のフォローなんていうのは出来はしないだろう。だが、ユーノの話聞いて、想った事は直ぐに念話で吐き出してしまおう。

『ありがとう、皆……。昨夜は巻き込んだんじやって、助けて貰って本当に申し訳なかったけど。この後は僕の魔力が戻るまでの間、ほんの少し休ませて貰いたいだけなんだ。……1週間……。いや、5日もあれば力は戻るからそれまで——』

『戻ったらどうするの?』

そんなユーノの言葉を遮る様にして、なのはは彼に対して静かに、そして優しく問いかける。

『また一人で……。ジュエルシードを探しに戻るよ……。』

『それはダメ』

『だ、駄目って……。』

『私、学校と塾の時間は駄目だけど……。それ以外の時間なら手伝えるから』

『そうだぞ、一人で抱え込むなよ』

『だけど、昨日みたいに危ない事だつてあるんだよ』

『それは此方のセリフだよ』

なのはと雄介の言葉に、それでもと言うユーノ。

だが、俺からすると、ユーノ方が危険な目に合ってしまうと思うとハラハラとしてし

まうのだ。見捨てておけないのだ。

『もう知り合っちゃたし、話も聞いちゃったもの……放つとけ無いよ。それに昨日みたいな事が御近所で度々あったりしたら、皆さんの御迷惑になっちゃうし……ね？』

ユーノ君、独りぼつちで助けてくれる人、居ないでしょう？ 独りぼつちは寂しいもん……私にも御手伝いさせて』

昔を思い出すかのように目を細くするのは。傍から見ると何の変哲も無い様に見える。だが、アリサとすずかは、そんななのはの変化に気が付いているのか、彼女の方を見て首を傾げている。

『独りぼつちは、寂しいもん……。いいよ、一緒にいてやるよ……』

『だから黙っている雄介。』

『困っている人が居て、助けてあげられる力が自分にあるなら、そのときは迷っちゃいけないって……。これ、家のお父さんの教え。ユーノ君は困ってて、私はユーノ君を助けてあげられるんだよね……魔法の力で』

『……うん』

『私、ちゃんと魔法使いになれるか、あんまり自信無いんだけど……』

『なのはもう魔法使いだよ。たぶん、僕なんかよりずっと才能のある……』

『そうなの？ 自分では良く分からないんだけど。取り敢えずいろいろ教えて……』

私、頑張るから』

『さて、もうすぐ家に着くよ。取り敢えず一緒におやつ食べようか』

『あ、うん……。ありがとう』

『今日のおやつは何かかな？』

念話で会話をしながら過ごしているといつの間にか時間は経過していて、あつという間に下校の時間帯だ。

アリスとすずかは「お稽古があるから……」と言って、先に帰っていた。

そして俺達は、今日という日はこれと言って何も無いので、なのはの家に御邪魔する事になったのだ。

学校の敷地から出て、ビル街を歩く。

サラリーマンなどが歩いていて、携帯ショップを始めとしたいろいろな店からは沢山の機械が聞こえている。

『そう言えば、雄介とブロン……。君達の力の事なんだけど……』

『あ！ それ、私も気になってた』

ユーノの質問に、なのはも同調をする。

『俺の力は、ユーノ……。お前も気付いているかもしれないけど、魔法だ。で、その魔法の名前は滅竜魔法って言うんだ……』

『滅龍魔法!? それって確か、"ロストマジック" だった様な……。どうやってそんな魔法を?』

『企業秘密だ』

『そっか……。で、ブロンの方なだけで』

雄介は焦る事も無く、言葉をスラスラと述べていくが、俺の力の説明は少し気が引けてしまう。下手に説明をすると大変な事になってしまいうだろう。そして、少ししかないのであれば、それもまた上手く伝わらないだろう。

「(聖王かのじよの血を引いたクローンであるという事は隠しておいた方が良いでしょう……。サイヤ人であるという事の方はどうすべきか)」

『話したくなかったら、別に良いんだけど……。』

『話したくない訳じゃないんだけど、どう話せば良いのか……。気つて言っても理解出来るか?』

『「気?」』

『魔法とはまた別の力で、生命エネルギーの様なものかな……。魔法とは違って、此方は修行さえすれば誰にでも扱う事が、使う事が出来る様になるし……。!!』

『「!!!」』

『!!!』

活気に溢れかえっている街並みを歩きながら、念話を使用して己の力について説明をしようとしていると、突然大きな魔力の波動を感じた。

『ユーノ君、今のつて?』

『新しいジユエルシードが発動している。すぐ近く』

『どうすれば?』

決心をしたのは良いが、突然の事に慌ててしまっているのは、雄介は落ち着いて喋る。

『魔力の発生源は神社の方だ……行こう。魔力を追って現地集合で良いか、ユーノ?』
『うん、手伝って』

「ユーノ君!」

神社の下の方で合流を果たし、急いで現場へと向かう。

だが、神社は眼と鼻の先だと言える場所にも関わらず、目の前には、その神社へと続くとても長い階段が存在していた。

「どうしよう……」

「なのは、乗れ」

「わんわんお」

「黙っている雄介」

そのジュエルシードを取り込んでしまい暴走をしている犬は大きな犬歯を、牙を剥き出しにして、唸りをあげている。思念体の時と同様に瞳は紅く、ギョロリと此方を見据えてきている。身体の大きさは俺達の2倍程だろうか。

「実体がある分、手強くなってる」

「ふむ……。なのは、雄介。今回は2人で何とかしろ」

「ふええええ!!」

「何でだよ、ブロン!」

「俺が手伝えない状況だつて起こり得る。例えば、複数の場所での発動時だ。お前ら、俺が居ないと何も出来ないんか?」

「分かった」

俺の言葉に、なのはは頷く。そして彼女のその静かで決意に満ちた返答に、此方も頷き返す。

「(っべー……。したくないからって押し付けてしまった)」

なのはに頷き返しながらも、俺は少し自身を責めてしまう。

その気持を知ってか知らずなのかなのはは前に進み、雄介の方も渋々といった感じで

前に出る。

「なのは、レイジングハートの起動を」

「ふえ!? 起動って、何だっけ?」

ユーノのその言葉に「何それ、美味しいの?」とでも聞きたそうな顔をするなのは。その様子を見て俺は「あちやく」といった感じに、思わず手を顔に当ててしまう。

そうしている間に、犬の姿をした暴走体は突っ込んで来ている。

「雄介、起動の邪魔をさせるな」

「分かってるよ」

雄介はその返事をすると同時に、炎を纏わせた拳で暴走体を殴りつける。

その攻撃が当たった暴走体は、その大きな身体に似つかわしくない悲鳴をキャンキャンとあげながら飛び跳ねる。

「我は使命を、から始まる起動パスワードを」

「あんな長い覚えてないよ」

「もう一回言うから、繰り返しして」

「分かった」

だが其処に、雄介が殴った事で飛び跳ねた暴走体は標的を変え、なのはとユーノの方へと飛び掛かる。

「しまった！」

「きゃあああ!!!」

なのはが悲鳴をあげると同時に、胸元にあるレイジングハートが光りだす。

「レイジング……ハート……？」

「Stand by ready set up」

なのはの身体は光に包まれ、彼女は杖に変形をしたレイジングハートを手にする。

放たれている光は壁となつて、跳び掛つてきた暴走体を弾き飛ばした。

その眩い光を、忌まわしそうに睨みつけている暴走体。

「(パスワードも無しで、レイジングハートを起動させた!?)」

レイジングハートが自律的にした事なのか。なのはの才能に反応をして、起動をしたのか。

ユーノは、その事に驚きを隠せずに居た。

どちらにしても、パスワード無しでの起動は、並大抵の魔導師では不可能だと言つて良いだろう。

況してや魔法と出会つて1日ちよつとしか経過をしていない筈の少女が、それを行なつたのだから。

「なのは、防護服を」

「え!？」

それに対し暴走体はなのはの事を脅威だとみなしたのか、彼女へと向かい勢い良く跳び掛かる。

【Barrier jacket】

なのはの身体を包んでいた光は、より輝き、そして消える。その後には、白を基調としたバリアジャケットを着用したなのはの姿があった。

暴走体は、そのまま突っ込んで行くが、なのはの周りには魔力で構成された防護フィールドが存在をしていて、ドームの様にして彼女を包む。それは盾となり、暴走体は一旦距離を取る様に、後ろへと跳ぶ。

一息を吐く暇も無く、暴走体はなのはに向かつて、鳥居の上から勢い良く跳び掛かる。

【Protective condition all green】

それもまた、発生した防護フィールドによって攻撃は見事に防がれ、仕掛けてきた暴走体を弾き飛ばす。

「(あの衝撃をノーダメージで……。やっぱりだ。この娘、凄い才能を持つてる)」

「痛た……って程痛くは無いかな。ええと、封印つてのをすれば良いんだよね?」

イジングハート、お願いね」

【All right. Sealing mode set up】

魔力で構築された光の糸が暴走体を絡め取って、動きを止めていく。そして、その暴走体の額には、XVIとうろま数字が浮かび上がっていた。

【Stand by ready】

「リリカル・マジカル……ジュエルシード、シリアルXVI……封印!!」

【Sealing】

縛り上げられる事で動きを封じられた暴走体は大きな悲鳴を上げると同時に、そのまま消滅した。

そして消えた暴走体からは、取り込まれていた現住生物である犬と青い菱形の宝石であるジュエルシードに分離される。

封印が完了した事で、ジュエルシードはレイジングハートに吸い込まれる様にして収納された。

【Receipt number XVI】

「ふう……。これで良いのかな？」

「うん、これ以上に無い位に」

「上から目線ですまないが、初めてにしては良いんじゃないのかな」

「終わったああ……」

状況が終了した事に安堵をし、ヘナヘナと地面に座り込んでしまう雄介。

なのはは肩で息をしているが、倒れていないのだから十分に凄いだろう。そして、其処に奴が来た。

「ジュエルシードの暴走体は何処だああああああああ!!」

「よ、志蓮」

「志蓮君？」

「誰が呼んだんだよ」

「悪いな、俺が呼んだんだ。戦力が多いに越した事は無いからな」

志蓮の姿を見てうんざりとしているなのはと雄介に、俺は正直に伝える。

なのはの方は仕方が無いというのは理解が出来る。日頃の態度が態度なのだから、これは当然の反応だろう。

だが、雄介の方は知っているだろうにという言うのは野暮なのだろうか。

「ちつくしよおおお……出遅れたああああ!!」

志蓮の言動が演技なのだと知っているからか、どうしても邪険に扱うという事が出来ないのだ。

なのはは雄介、ユーノと志蓮の3人と1匹の様子を見て、思わず吹き出しそうになつてしまったのは内緒にしておこう。

プールで封印 更なる高みへ

「そう。集中して、心のなかにイメージを抱いて……」

「う〜ん……」

「そのイメージを手にした杖に……レイジングハートに渡して」

此処は『海鳴臨海公園』。

早朝だからなのか人が居らず、とても静かなものだ。

目を瞑りながら、ユーノによる指示に従い、言葉通りにイメージをしようとするのは。

そして、身体のなかにある暖かいもの——魔力——を感じ取り、それを杖であるレイジングハートへと伝達していく。

「うん。レイジングハート、お願い」

【Stand by ready】

「イメージに魔力を込めて、呪文と共に杖の先から一気に発動」

「イメージを魔力に……。リリカル・マジカル、ええと……捕獲魔法発動！」

なのはが唱えたその呪文に従うかの様にして、レイジングハートの先端部が強く光り

始め、大きな爆発音が鳴る。

「やった!! 成功?」

「いや、してない!!」

その慌てているユーノの声に驚いて、目を見開くなのは。

「ふえ? ああああ!!」

「なのは? なのは?」

「うううん……びつくした〜」

目を開いた先には、魔法の発動に失敗した事により大きく抉れている地面があった。

「大丈夫?」

「うん、なんとか。なかなか上手くないかね」

「いや。でも凄いよ。たった数日でここ迄出来る様になってるんだから」

そんなユーノによる励ましの言葉に対し、実感を感じていないのか、なのはは少しばかり首を傾げる。

「うくん、そうなのかな? それにしても凄いよね……あの3人」

「そうだね……」

捕獲魔法の練習を一旦終了して、少し離れた場所で練り広げられている彼等の戦闘訓練に目を向けるのはとユーノ。

「『鉄竜棍』!!」

「はあ!!」

「遅い……遅いよ」

次々と雄介と志蓮から繰り出されてくる攻撃を、スルリスルリといった感じで俺は軽々と避けていく。

彼等の攻撃は拳銃から放たれる銃弾と同等のスピードなのだが、戦闘力の違い、大きな差からか、とても遅く、スローモーションの様に見える、感じてしまうのだ。その為に、避けるのも、防御するのも、反撃するのも簡単に出来てしまう。

「な！ クソツ……これならああ!!」

「どうだ!!」

雄介の腕はノコギリ状の鉄に変化している。

志蓮の手には、何か握られている。何かというのは、目視では確認をする事が出来ないのだ。何かしらの魔法などを使用しているのか、その握っているものの全容を把握する事がなかなか出来ない。

「(だが、まあ……『約束された勝利の剣』であり、『風王結界』だろうな……)」

振り回される武器や腕による攻撃を、身体の重心をズラし最小限の動きで回避していく。

もし第三者が見ているのだとしたら、俺の姿は立体映像の様になっていて、2人の少年は無駄に動いているだけの様に見えるにしまっているだろう。

そして、相手である雄介と志蓮側からすると、攻撃をしても手応えが無い。それどころか、すり抜けていっている様な感覚を味わっている事だろう。

だが始めてからものの数分程度しか経過していない筈なのだが、彼等による攻撃は連携時の動きは格段に速やかに、よりスムーズになっていき、研ぎ澄まされ、徐々に隙が減っていつている。

余裕だと思つて一瞬でも余所見をすると、攻撃が当てられてしまうだろう。

「(ここままで良いかな)。……さて、休憩にしようか」

「はあああ……」

雄介と志蓮は、同時にして大きな溜め息を吐く。それと同じタイミングで、2人はヘナヘナといった感じに脱力し、地面へと倒れてしまう。

「なかなか良くなってるよ。攻撃のキレもスピードも速く、強くなってるし」

「……よく言うよ、掠りもしてないのに」

「全くだ」

愚痴を溢す2人に、なのはとユーノが近付いて来る。

「凄かったよ、3人共」

「ありがとな。お前達もやるか？ その気になれば、此奴等よりも強くなれるかもよ」
「私にはあんなの無理だよ。目で追うのがやつとだし……」

「僕の方も遠慮しておこうかな」

余りにも大きな力の、レベルの差に対して笑う事しか出来ないのは。ユーノの方もただただ、彼等の動きを視界に入れるだけで精一杯だったのだ。

なのはから差し出されたタオルを受け取り、首などに流れている汗を拭いていく。このタオルは予め俺が持って来ていて、近くのベンチに置いておいたものだ。

「さてと、休憩がてらにだが気について説明しようかな」

「あ、それ気になってんだ」

「私も」

初めてジュエルシードを封印した日の翌日から数日間ではあるが、今日の今日までずっと戦闘訓練。魔法の練習しかしてこなかったのだ。

気についての説明をするにも、機会がなかなかなかったのだから。

「気……というのは生命エネルギーの様なものだ。魔法とは違ってリンカーコアが無くて、リンカーコアを使う必要が全くない。だから、修行さえすれば誰にでも使える

様になる

説明を始めるとなのはとユーノ、そして雄介は興味津々だともいった感じの表情をし、聴き始める。

志蓮の方かというと、興味が無いといった風なポーズをとってはいるが、意識は此方に向いている様に見える。

「そして……気が此れだ」

言葉による説明だけでは完全に理解をするというのは難しいものだ。だから彼等に見える様にして、俺は実際に掌に気弾をつくりだす。

「使い様によつては身体能力の強化をしたり、空を自由に飛んだり、気弾……またはエネルギー弾をつくりだす事が出来る。その気弾が此れだ」

「質問があるんだけど……」

「構わないよ、ユーノ」

小さな前片足を上に上げて、何かを聞いたように、知りたそうな感じを出しているユーノ。

知りたいという欲求というのは、知的好奇心というものはとても強く、強力であり、大事なものである。時には自身に対して良い方向へ、時には自身に対して悪い方向へと働く場合もある。そして悪い方向へと働く場合、それは大概是恥をかくだけで済むのだ

が、大怪我をしたり、破滅してしまったりと、取り返しの付かない事になるケースもある。だが今回の、このケースは良い方向へと働くであろう事であり、此れを満たす事でそれは知識となり、知恵となり、今後に起きる何かしたに役立つかもしれない。

「そんなに便利なものなのはどうして知られていなくて、使われていないのかな？」

「知られていない理由は分からないな。存在していると知っていても使い方が理解出来ないから、同仕様も無くて広がらなかったのかもしれないね。それに便利だという印象が強いけど、とてもこわい力なんだ」

「こわい？」

「ああ。この力は簡単にものを壊す事が出来る。人を……簡単に殺す事が出来るんだ」

説明をしていると、思わず拳を強く握り締めてしまう。頭の中には、2人の男の子の姿が。転生者だと思いき少年達を、ヒトを殺してしまった事を、命を奪ってしまった事を思い出してしまう。

「大丈夫？」

此方へと顔を覗かせるかたちで、言葉をかけてくるなのは。意識はしていなかったのだが、苦しげにしていたのか、顔を酷く歪めてしまっていた様だ。

「ああ……大丈夫だよ。ありがとう」

「でも、魔法も同じだよ」

少しマシになったのを見計らい、ユーノは話を続けていく。握りしめていた拳を解き、ユーノの言葉に対し、否定をする。

「気をつけていうのは、魔法とは違うんだ。非殺傷設定なんていう都合の良いものなんて無い。常に殺傷設定なんだよ……」

話をしていると、なのはの持つて来ている携帯電話から設定したであろうアラームの音が、コールが鳴り響く。

「朝御飯の時間だ」

「じゃあ、今朝は此処までって事で」

「有り難うレイジングハート。また、後でね」

【Good bye】

なのはの言葉と同時にレイジングハートは杖の状態から、宝石であるスタンバイモードへと戻り、宙から彼女の手の平へとゆっくり落ちていく。

「はあ……。攻撃とか防御とかの魔法はコツを掴んできたんだけどな」

「なのははエネルギー放出系が得意みたいだからね。元の魔力が大きい分、収束とか圧縮とか微妙なコントロールが苦手なんだよ」

「その……それは私が力任せで大雑把な性格という事では」

「えっ？ いや、そうじゃないよ……」

先程地面を大きく穿った失敗を省みて、なのはが大きな溜め息を吐く。

それに対し、ユーノの解釈を聞いてのなのはの返事を聞いて、彼はしまったという感じで少しばかり狼狽えてしまう。

「圧縮！ 圧縮！ 魔力を圧縮！ なんて言いながらしてみたら上手くいくんじゃないかな」

「にやはは」

そんな雄介のアドバイスに対して、志蓮を除いた俺達は苦笑いを浮かべる事しか出来なかった。

「でも、取り敢えずは大丈夫。少しは魔力が戻って来たから……捕獲とか結界の魔法は、僕がサポート出来るし。というか、僕がしないと……。皆出来ないみたいだし」

使う事が出来るんだと言ってしまうのは簡単だ。だがそれを言ってしまうと、ユーノに役目は無くなってしまいかもしれない——要らない子扱いを受けてしまうかもしれないのだ。それを考えてしまうと、使えるという事を口にするのが憚られる。気が引けてしまう。

「だけど、ジュエルシードの封印は僕の魔力では……」

「大丈夫……それは私がバッチリやるから。大っきな魔力で攻撃と防御が得意な私が

封印……補助魔法の得意なユーノ君は私の魔法の先生で、現場では封印のサポート。相性バツチりだよ」

ユーノの自信無さ気な言葉に、なのはは彼を安心させる様に言う。

「それに、俺達も居るし……な？」

彼女の言葉に同意をし、志蓮に向かって念を押す雄介。

「当たり前だ、嫁を守るのは当然だろ」

思い出したかのように慌てながら応える……そんな志蓮の様子を見て、俺は思わず吹き出してしまいそうになった。

「だから、大丈夫。皆で一緒なら、ね？」

「さ、帰ろう。今日も元気に朝御飯だ」

「朝御飯食べて、元気もーりもり！」

「うん」

「それじゃ、またね」

手を振りながら、それぞれの家の方向へと足を向けていく。

なのは達の姿が消え、歩いているが、まだ早い時間だからなのか人一人すらも歩いて

はいない。

「1人での修行は夜しか出来なくなっただけど、相手が居るといいうのは凄いな。戦闘力ではかなりの差がある筈なのに……危ないと思ってしまいう時がよくあるし……」

先程の公園での組手でヒヤリと流れた汗、当たると思い回避を選択した時の事を思い出す。

「(相手はどうしようかな……。この世界で知っている人達じゃ、多分だけど相手にならないだろうし。だからと言って、他の世界の住人では強すぎるキャラが相手だと。ポコボコにされるだけだろうし)」

自身を徹底的に痛めつけ、回復をさせていく事で大幅な戦闘力の上昇を図ってきた。体内に存在しているナノマシンのお陰で無茶をする事が出来たが、このままではいずれ限界が訪れてくるだろう。

戦闘力の壁。

寿命の壁。

才能の壁。

超サイヤ人に覚醒をしたといっても、そういったものは必ず来るであろうものなのだから。

「(うーん……。やっぱサイヤ人にはサイヤ人が一番かな)」

脳内では、山吹色の道着を着ている人物が浮かび上がってくる。ツンツンとした特徴的な髪型をした英雄的人物。

「お願いします」

両手を合わせ、合掌しながらお辞儀をする。目の前の彼は、構えを取る。

「それじゃあ、始めっか」

お互いに、それぞれの構えを取り、一瞬だけではあるが静寂が訪れる。

だが、それは一瞬だ。文字通り、一瞬なのだ。

「はあああああああつ!!!」

「だりやあああああああつ!!!」

お互いの拳が、腕が、脚がぶつかり合う。

その速さは、目で追う事が出来ない程のものではあるのは勿論、強さは、威力の程は山を、星をも簡単に削り取り、割り、砕き、壊してしまう程のものだ。

相手の握拳が俺の顔を強く殴りつけてくる。

お返しだと言わんばかりに殴り返し、蹴りを入れていく。

それぞれが殴り蹴り合う度に、大きな衝撃が疾走り抜けていく。

「お前え、強えな……。オラ、ワクワクしてきたぞ」

記憶に残っている、彼のお決まりのセリフが発せられる。

俺の顔はニヤけてしまう。

それは実際に、その知っている言葉を聞く事が出来たからか。

サイヤ人の血の所為か、実力の近い者同士での、強者との渡り合いが、闘い合いが愉しくて、此方も彼同様ワクワクしてきたからなのか。

「俺も同じだ。……ワクワクしてきた」

「それじゃ、第2ラウンド始めっか」

その言葉と共に、彼の姿が目の前から一瞬にして消える。

「グフッ！」

腹の中心から体全体に向けて、強烈な衝撃と痛みが、攻撃が入り、広がっていく。腹を押さえながら、俺は数歩後ろに後退りをしてしまう。脚はガクガクと震え、今にも倒れてしまいそうだ。

「クソつたれ」

思わず、大きく舌打ちをしてしまう。

彼の動きは速く、複数の残像が影の様に見える、現れては消えていく。

「まるで動きが見えない……。目で追うのでは無く、気で追わないと。感じ取るんだ

……気を……)」

目を瞑り、意識を研ぎ澄ませていく。彼の気が高速で動き、俺の身体を殴り付けてくる。

「があああつー！」

相手の動きを、気を感じ取る事は出来た。だが、それだけだ。

感じ取るだけで全く対応をする事が出来ていない。身体が対応すべきそのスピードに追い付いていない、追いつく事が出来ていないのだ。

だが、大きく開いたその瞳には、赤いオーラの様なものが映った様に思えた。独特の音を鳴らしながら、残像を残しつつ、高速で動いている。

「（あれは『界王拳』か……？ どれぐらいの倍数なんだ？ いや、今はこの状況をどう突破するかどうかを考えるべきだな）」

超サイヤ人は使わない様になっている。

当然だろう。もし使ってしまうと、それは修行では無くなってしまうと思うからだ。

超サイヤ人は切り札の様なもの。今の相手の戦闘力ならば、簡単に捻り潰してしまう

事も出来る程の戦闘力の倍加をさせるものなのだ。

「（そこか……！）」

動いている彼の気を追いかけながら、彼の行動を予測し、読んでみる。

後ろへと振り向き、気を弾丸に見立てた“気合砲”で彼を強く吹き飛ばす。

「よし」

成功した事に、俺は思わずグツとガッツポーズを取る。

吹き飛ばされた彼は直ぐに体勢を整え、再び高速で動き回る。

「だけど……」

吹き飛ばした事は、こんなものはただの時間稼ぎにしかない。いや、実戦なら時間稼ぐ事すらも出来ないだろう。

「界王拳か……。此方も使えれば良いんだけどな」

無い物強請りねだをしても仕方が無い。頭では、そんな事を理解しているのだが如何せん、出てきた欲望は簡単には治まらず、次第に大きくなっていく。膨らんでいく一方だ。

「（どうすりゃ良い……？ どうすれば使えるようになる……？ 気をどの様にして爆発させるんだ……？ どんな風にしてコントロールをすれば良いんだ……？）」

自分の持っているものの何倍もの大きさを誇る気が此方に向かって、高速で近付いて来るのを感じ取る。

そんな危機的状况であるにも関わらず、俺の頭のなかはやけに静かで、冷静なものだった。

「……かあああああつっ!!」

ロールしていく。

「はー」

体内の気を集中させていく。

目の前で構えを取って、此方を見ている彼。

彼の気は段々と大きくなっていつている。

「めー」

互いの両掌に溜められた気は大きく強くなり、そして圧縮されていく。

この戦闘は脳内でのイメージによるものだ。そうである筈なのに、想像力が強く、鮮明にハッキリと描く事が出来ている所為か、現実味を帯びていて、大きくて強烈なプレッシャーを感じさせてくる。

「波アアアアアアアアアアツツ!!!」

限界まで溜められたその気を気功波として、お互いに向けて発射する。

それぞれが放ったかめはめ波はぶつかり合い、せめぎ合い、大きく空間を歪めていく。皮膚を、髪を塗り取ろうとしているのではと思ってしまう程の大きく強い風が発生する。

「まだまだああああああああああ!!!」

ありったけの気を込め、全力全開のかめはめ波を目の前の彼へと向けて放つ。強大で

強烈なエネルギーの奔流は、彼の姿を消してしまふかの様にして、より大きくなり、押し
していく。

「……………」

目を開くのに苦勞する程の光が消え、煙がモウモウと立ち籠めている。

その煙も晴れ、視界がクリアになると同時に、彼の姿が目に入ってきた。

「参つた……。オラの……負けだ……」

目の前の彼は力を使い果たしたのか、大の字を書くようにして横になっている。此方
も同じで、フラフラとしていて、今にも横になりたい程だ。

「また、闘ろうぜ」

「(こ)ち(ら)こそ、頼みますよ」

笑いながら、彼のその姿は霞の様に消えていく。まるで夢であつたかの様に、幻で
あつたかの様に。

だが、消える際にも彼の顔は清々しい程に良い笑顔をしていたように思えた。

「やばかった……」

意識は完全に現実の方へと戻る。

額には汗が流れており、先程のイメージでの戦闘の凄まじさを物語っている様だ。

心臓はドクドクと大きく脈打ち、血液の流れがやけに速く感じられる。

着ている服には何の問題も無いのだが、身体の彼方此方に擦り傷の様なものが、切り傷の様なものが見受けられる。なのは達と居た時には無かった傷だ。

脳内での修行ではあるのだが、それが余りにもリアルであり、強いイメージなので身体にフィードバックし、実際に傷が出来てしまったのであろう。

「実際には気を消費していないのに凄い疲労を感じるぜ……」

身体に出来た傷は、ナノマシンの効果が働き、一分も経過しない間にすっかりと痕が残る事も無く塞がっていく。

マルチタスクを運用してのイメージ戦闘だったので、帰り道で、電信柱にぶつかったり、躓いたりとする事は全く無く、無事に家へと辿り着く。

授業が終わり、チャイムが鳴る。

それと同時に元気な仲良し3人娘はほぼ同時に立ち上がる。

「よし、授業終わり」

「それじゃ」

「待ち合わせの場所に」

「「「しゅっぱくつ!!!」」」

「午前中だけ授業だと楽でいいわね、放課後一杯遊べるしさ」

「うん、そうだね。今日のプールも楽しみ楽しみ」

アリサのその言葉に同意の意を示すはずか。

確かに授業が午前中だけで放課後が空いているのはとてもいいものだ。アニメを見たり、ゲームをしたりと好きなことが沢山出来る。

「ちやんと、水着持ってきた？」

「もちろん」

「泳ぐの好き好き」

——泳ぐのが好きだと言うがなのはよ、運動音痴じゃなかったのか？ と、疑問に思うが口には出さないおいた方が良かったらうか。口は災いの元なのだから。

「私は美由希さんかノエルさんに泳ぎ教わらなきゃ」

「俺が教えてやるよ」

「浮き輪使って良いみたいだからファリンに持って来て貰ってるよ」

「それナイス」

「ああ、浮き輪でプカプカも良いなあ」

相も変わらず志蓮は無視をされている。好きで演じているのだから気にする必要がないのだろうが少しばかり不憫に感じられてしまう。

“ノエル・K・エーアリヒカイト”。月村家で働いているメイド長だ。クールな感じの容貌をした大人の女性。

“フアリン・K・エーアリヒカイト”はノエルさんの妹で、同じく月村家の専属メイド。

ノエルさんの方は“とらいあんぐるハート”3で出てきた“ノエル・綺堂・エーアリヒカイト”と共通点が多く見られ、働いている家が月村なのでこの姉妹は自動人形なのかも知れないが実際は良くわからない。

地球人とはまた違うが気を感じ取る事が出来るので、“ドクター・ゲロ”が作った“人造人間”のようなものではないのだろう。

それに彼女たちが自動人形であるのならば月村すずかと彼女の姉である月村忍は“夜の一族”という吸血鬼モドキのような存在だろう。

考える必要もないと思い、皆と同じように接しているつもりだ。

話していると車のクラクションが聞こえる。

「すずかちゃん」

「フアリン」

車から降りてきたのは先程の話で登場したメイドのフアリンだ。

「アリサお嬢様、なのはお嬢様、雄介おぼっちゃま、志蓮おぼっちゃま、ブロンおぼっちゃま。お迎えに上がりましたよ」

「ノエルさん」

「有難うございます」

開けられたドアから中に入っていく俺たち。

「（やはり慣れないものだな……）」

おぼっちゃまと呼ばれることは彼女たちと交友関係を築いてからは星の数とはいかないものの数えることが出来ないほど呼ばれ続けているが、くすぐったくあり、違和感を感じさせるのだ。

「美由希さんは現地集合ですか？」

「ユーノ君と一緒に」

「なのは、ユーノとすっかり仲良しね」

「ユーノ君、賢い子でいいよね」

「うん」

アリサとすずかの2人のその言葉にすっかり気を良くしたのか元氣よく頷くのは。

「(動物をプールに連れて行くのは駄目なんじゃないのかなんて言える雰囲気ではないな……というかユーノはヒトだし)」

ふと横を見ると雄介と志蓮は顔を青くしてグロッキーな状態になっていた。

「死ぬ……」

「川が……」

雄介は滅竜魔導士なので仕方が無いとしても志蓮の方は何故か。ただ車酔いしただけだろう。

俺はそつと彼らにエチケット袋を差し出すことしか出来なかった。

「はい、すみません。周りに気をつけてくださいね」

「「ごめんなさい」」

飛んできたボールを掴み、少年たちに返し、はあと溜め息を吐く高町恭也。

「あ、恭也さんだ」

「アリサ早いな」

「はい。なのはとすずかは着替えています」

「そうか」

「恭也さん…監視員姿、似合いますね」

「そうか？」

アリサの言葉に訝しむ感じで首を傾げる恭也。

「アリサちゃん、お兄ちゃん」

「恭也さん」

「こんにちは」

「こんにちは、恭也様」

なのはは手を振りながら、すずか、ファリン、ノエルはその後ろに付く感じて来た。

「雄介くん達は？」

そのなのはの言葉に恭也以外の皆が首を傾げ周りを見渡す。

「あいつらなら、彼処で…ほら」

「いつの間に……………」

恭也が指をさしたその方向には既にプールの中に居る彼らの姿があった。

「良いか……？ 此処では気のコントロール、魔力のコントロールで身体能力の強化をするだけだ」

「ああ」

「周りに被害を出すわけにはいかないからな」

「先ずはこの人混みを避けて恭也さんの所にどれだけ速く向かうか勝負だ。俺はハンデとして1分間此処に居る」

その俺の言葉にムツとしたのかしかめっ面で雄介達は反対の言葉を述べる。

「そんなものは要らない、全力で行こう」

「そうだな、そうじゃないと修行にならない」

「わかった……それじゃ行くぞ。 5……4……3……」

「2」

「1」

「0!!!」

そのカウントを終えると同時に俺達は動き出す。

水という抵抗があるにも関わらずサクサクとスイスイと泳ぎ、前に前に進み、タイルの部分に身体を出す。

「不思議だな。前世では全く泳げなかったのに自然に身体が動いている」
あつという間に俺は目標地点に到達する。

当然の結果というか何というか1番は俺で後ろの方にどんぐりの背比べと言わんばかりに接戦している2人の姿が映しだされていた。

「驚いたな…流石に速いじゃないか」

「有難うございます」

その恭也さんの言葉に照れながら素直に受け入れる。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

全力で動いていた為か2人は大きく息を荒らげている。

「おまたせ」

競争を終えて、2人が息を整えていると美由希さんが到着した。

「恭ちゃん、監視員姿似合う〜」

「うん……」

どう返せばいいのかわからないと戸惑う恭也さん。

「こっちはどう？ 今年初の皆の水着姿は」

「ビシツと決めてみました」

「ああ、うんと……その……なんだ……」

「セクシー？」

「応っ」

言葉に詰まっている恭也とは反対に志蓮は堂々とハッキリと答えた。

「此処凄いいね。流れるプールあるし、飛び込むプールあるし」

「あつちにはお風呂もありましたよ」

お風呂のあるプールとは。それはもうプールではなく単なる娯楽施設なのではなからうか。

『ユーノ、此処に』

『うん……なのは気付いてないみたいだけど……この場所には微かに魔力の残滓がある。誰かの強い願いと後悔……』

『ジュエルシードがそれに反応しようとしているのかもね』

念話で密かに俺とユーノ、雄介、志蓮で現状の確認をする。

「ねえ、恭也さん。あれは何ですか？」

「ああ、希望者が歌って踊れるステージなんだよ」

「「「「ええええええ!?!」「「「「」」」」」

その言葉に驚きを隠せない皆。

志蓮の方は気にした素振りを見せないようにと装っていて皆ほど大きな声でのリア

クシヨンをするには無かった。だが、その挙動からするとやはり気にはなる様だ。

「こんな場所で歌ですか？」

「いや、これが結構人気あるんだよ。ついさっきまで女の子たちが歌ってたし」

「プールで歌というと水着だらけの水泳大会という感じですね」

「お姉さま、何ですかそれ？」

「昔そういうテレビ番組が」

「えへへっ、誰か歌う？」

「私はいいよ」

「私も」遠慮

歌いたくないと拒否するなのはとすずか。

「美由希さん？ ファリンさん？」

「ダメダメ。私、歌下手」

「私なんてもつとですう」

大きく手を振りながら全力で否定し拒否の意を示す2人。

「やはり此処は言い出した方が先陣を切られるべきでは……ね、アリサお嬢様」
だが、このノエルの言葉によりアリサはほんの少し後悔することになる。

「アリサの歌を聞いてみたい人？」

「「「はーい」」」」

手を上げアリサに歌うように催促をしていく皆。

「藪蛇だわ。これは何かの罟？」

「粉バナナ」

「ほら、受付はあつちだぞ。行つといでアリサ」

「頑張つてアリサちゃん」

「フアイトオ」

「……良いわ、泳ぎの前の景気付け。ここは一発歌つてみせようじゃないの」

半ば諦めたかのように、自分に言い聞かせるように大きな声で宣言をするアリサ。

だがその目には自身のしでかしたことに對しての後悔と恥ずかしさを感じさせる。

「仕方ない……俺が先に歌うからお前もちゃんと歌えよ」

思わず助け舟とはいかないが放つて置けずに口走つてしまう。

「ホント!?!」

「それじゃ、行つてくるよ」

ワーワーと元気に騒ぐ彼女たちをあとに俺は受付の方へと足を向けた。

パチパチと拍手されるなかアリサへとバトンタッチをする。

「頑張れよ」

「ありがとう。それと、なかなか良かったわよ」

そう言いながら歩を進めていく彼女を見送り皆の居る場所へと戻る。

「格好良かったよ」

「上手だったね」

「ありがとう」

ありきたりな労いの言葉を貰うがやはり照れてしまう。褒められると嬉しいのは誰だつて同じだろう。

「さ、アリサの番だぞ」

その恭也さんの言葉で舞台上に目を向ける。

歌い終えた彼女に対して賞賛の拍手をする。

「わあ、すごい」

「可愛かった」

「ちよつと気持ちよかったかも」

照れながらも強気で、それでいて満足したというような態度を見せる彼女。

「さして、それじゃ……」

「プールですから」

「泳ぎますか」

「「「「「「「「「「「「お〜」」」」」」」」」」」」」」」

「実はつい先日、着替えや水着を盗む変質者が出たらしくて……」

「(着替え……水着……もしかして)」

恭也さんと美由希さん、ノエルさんの会話を遠くから聴こえてくるキーワードが気になる。

「(ドラマCDの話か……)」

転生時の影響か原作である魔法少女リリカルなのはの内容を忘れかけている。

だが、レアスキルの効果が働いているのか、キーワードを知り、それに対して知りた
いと思うことさえ出来れば、疑問に思うことさえ出来れば簡単に思い出すことが出来る
のだが。

『ユーノ』

『俺は少しこの辺りを散策してみようと思う』

『そっか。気を付けてね』

「次の見回りはボイラー室つと……流石にこんな場所に潜むような輩は居ないか」
恭也は扉を開き中に進みながら様子を伺う。

そこには人の気配はしない変わりにも何かヒトではない、得体のしれないものの気配が感じられた。

「誰か居るんですか？」

そう聞くことしか出来無かった。

ヒトではないと理解はしていても他に安全な確認のしようがないのだから。

『もう発動している。外部からの刺激を受けて行動を開始するタイプなのか？ 今の魔力で広域結界……つくれるか？』

恭也がボイラー室に入ると同時にユーノはジュエルシードが発動したことに気がついた。

『ユーノ君?』

『なのは、ジュエルシードだ』

『うん』

『ごめん皆。折角のプールの最中なのに』

『大丈夫。一蓮托生、勇気凛々。良いよ、何時でもOKだよ』

『僕の方も大丈夫』

『俺も大丈夫だ』

『大丈夫だ、問題ない』

『ありがとう』

『レイジングハート、お願いね』

【Stand by ready】

「うわあああああ!?!」

ボイラー室に辿り着くと同時に発動したジュエルシードは恭也を飲み込んでいく。

「恭也さん!!」 広域結界展開つ!!」

「ふわあ、大つきい。水のお化け?」

「ところでこいつを見てくれ……どう思う？」

「すごく……大きいです……」

茶番を繰り広げる雄介と志蓮を他所にユーノは申し訳無さそうに、それと同時に焦った感じで謝罪をしてくる。

「ごめん、切り取り範囲が多くて中にまだ何人かヒトが居るんだ」

「ダニイ!!」

「ええええ!!」

「きやー!!」

「アリサちゃん？　すずかちゃん？」

「何、何。何なのこれ？」

「水着を脱がそうとしてる」

「■■■■!!!」

その光景を目の前にし、雄介と志蓮は思わず前のめりになってしまふ。

「命に危険ってわけじゃなさそうだけど、あれ何？　どうなってるの？」

「（見てはいけない……見てはいけない……見てはいけない）」

「ユーノ君？」

目の前のモノにどう対処すればいいのかわからにからか、ユーノの様子がおかしいこ

とに気が付いたのか声をかけるなのは。

「あ、その……想像なんだけど……あのジュエルシードを発動させた人間。捕まっ
たつていう更衣室荒らしの人の願いと興味がカタチになったんじゃないかなと」

「ほえ？」

理解できていないのか首を炊げるなのは。

そんな彼女に優しく簡単に説明していく。

「つまり……女の子の服を集めたいっていう願いだから……」

辿々しく、自分ことではないのに申し訳無さそうに、気恥ずかしそうに説明をしてい
く。

「きゃーっ!!」

そのアリサとすずかが叫ぶと同時に彼女たちはプールの中に落ちてしまう。

「な、何てことを……」

「ひどい……水着だけ脱がせて放り投げるなんて」

「返せっ!!! 戻せっ!!!」

そんな悲痛な訴えにも動じずにカラダを動かす思念体。

その大きなカラダの所為か局所的で小さな、だがヒトにとってはじゆうぶん大きな波
が発生する。

【Protection】

「波が…避けてく」

「当て身」

流されてきた2人に対して手刀を当て気絶させる。

「ブロン君、ナイス。これなら」

【Barrier jacket】

なのはに応えるようにレイジングハートはバリアジャケットを展開する。

「趣味や興味は人それぞれですが、人様に迷惑をかける変質的行動は良くないと思います。という訳で」

【Sealing mode set up】

その言葉を発した彼女の目には怒りが宿っていた。どうやら御立腹の様だ。

「■■■■■■!!!」

そんな彼女に思念体は放っておいてくれと言わんばかりに大きな声をあげる。

「リリカル・マジカル…封印すべきは忌まわしき器ジュエルシードッ!!! ジュエル

シード、シリアル……あれ? 番号が読めない」

「えっ? そんな!」

「確かに読めないな……」

そのジュエルシールドは水の中にある所為か霞んで読むことが出来ない。

「あの中に入って確かめてこようか？」

「大丈夫。読めないけど取り敢えず封印っ!!!」

〔Sealing〕

レイジングハートから放たれた魔法の光が暴走体をかき消していく。

「止まった？」

「あれ？ 大量の水着と下着は出てきたけどジュエルシールドが出て来ない」

「反応も消えてない……まさか……分裂してるのか？」

「そのまさかだろうな」

「取り敢えず、急いでその反応の方に」

「うん」

その言葉に従い急いで向かおうとするのだがユーノが倒れてしまう。

「ユーノ君？」

「大丈夫……ちよつとクラつときただけ」

「魔力の使いすぎ？ そうだよね……ユーノ君、ボロボロになるまで独りでジュエル

シールド探してて、怪我だって治ったばかりで……乗って」

「ええ？」

「こつちに気付いた。なのはを狙ってる……1度空に回避を」

「残念、ユーノ君。空飛ぶ魔法はまだ教わってない」

「あああああああ、そうだったああ」

「でも……大丈夫」

そう話をしている間に魔力は杖の先端部に集まり、宝石部分は強く光っている。

「なのは？ 魔力が一気に収束して」

「(流石、稀少技能が収束というだけはあるな……)」

「捕獲魔法……魔法……」

「■■■■■■■■■■!!!」

「リリカル・マジカル……捕獲、そして固定の魔法……レストリクトロックツ!!!」

「範囲対象の完全固定……収束系の上位魔法!!」

「これでそのまま固まって……行くよ、レイジングハートツ!!」

【Sealing mode】

「リリカル・マジカル……今度こそ」

その呪文に呼応するかのようには水で出来た思念体の中からジュエルシードが出てくる。

「出てきた、17番」

「うん。ジュエルシード、シリアルXVII……封印っ!!!」

【Sealing】

杖から放たれたその封印魔法は水にぶつかり、それらは水蒸気となって辺りに立ち込める。

「封印……出来てない!?!」

「そんな!?!」

霧が晴れると同時に目の前には拘束魔法の範囲対象外に居たのか、抜け出したのか小さな分身体がまだそこに存在していた。そしてどんどんと分裂してあつという間に先程と同じ、それ以上の数にまで増殖した。

「『ギヤラクティカドーナツ』だっ!?!」

大きな、とても大きく広いリング状の気を思念体を中心に発生させる。

それはあつという間に小さく狭くなり、数えるだけで大変だった全ての思念体を一纏めにして動きを完全に封じてしまう。

「なのは!」

「本当に今度こそ……封印っ!?!」

なのはの放つその封印魔法はすべての思念体を光で包み込んだ。

【Mode release】

「ありがとうレイジングハート」

【Good bye】

周辺に存在したジュエルシードの魔力が消え去ったのを確認したのかレイジングハートはスタンバイモードへと戻る。

「あつ。服と水着が戻ってく」

「魔法が解けたから持ち主の所に戻るんだ」

「そっか……良かった。でも、ジュエルシードもユーノ君が持っていたものを含めてこれで4つ……あと17個だね」

「うん」

「どうしたの、ユーノ君？ グツタリして……。疲れた……？」

「うん。（なのはの魔法のセンスってどうなってるんだろう……僕よりずっと大きな魔力に、凄い才能。だけど器用なのか不器用なのか全然わからないし、何より……見ていて危なかつしくてしょうがないんだ。なのはを見てると本当にドキドキする。怪我でもするんじゃないかとかいろいろと……やっぱり僕がしつかりして封印の手助けをしてもらうだけにしなくちゃ）」

「まあ、無事に解決してみただし……良かった良かった、だね？ あつ。辺りも戻ってきた。バリアジャケット解除しなきゃ……ええと……出来た」

ユーノの悩みに気が付くこともなくなのは魔法の成功と封印が出来たことに安堵していた。

「お疲れ、ユーノ君。バスケットで休憩しててね」

「うん、ありがとう。(本当は僕が一人でやれたら良いんだけど……)」

「そう言えば、お前……どうして直ぐに対応できたんだ？」

「魔力を感じたんだよ……まだ封印できていないんだなって。」

「でも私、確かにジュエルシードを狙ったよ」

「多分なんだけど蜃気楼の1つだと思うんだよね……なのは魔法の発動で辺りの温度と水の中の温度に大きな差が出来て、水の中にあつたジュエルシードの幻が見えたんだよ」

「あ、2人共起きた？」

「御二人ともよくお休みで」

「寝てた？」

「寝ぼけ眼を擦りながらアリスとすずかは周りに対して確認を取る。

「はしゃいでたからきつと疲れちゃったんですねえ」

「どれぐらい寝てた？」

「30分ぐらいですよ」

「(何か非常にアレな夢を見たような気がするんだけど)」

「(恥ずかしいし、言えないし)」

「あ、なのは達は?」

「あそこ」

指をさした場所には浮き輪の上に居座っているなのは達が居た。

「御二人が御休みでしたので浮き輪でプカプカのんびり背泳ぎ、だそうです」

「ブロン君の方は流れるプールで流されるということは人生にも通じることだよな
んて」

「ハハッ。すずか、目醒めた?」

「うん、もうパツチリ」

「折角来たんだし、もうちよつと遊んで行こうか」

「うん」

アリサとすずかがなのは達の居るプールに向かった同時に監視員である恭也が水を
滴らせながら歩いてくる。

「あれ? 恭ちゃんどうしたの? びしょ濡れだ」

「ポイラー室を見回ってたら派手な水漏れがあつてお湯の濁流に吞まれた」

その言葉通り服を含めて彼の全身は濡れている。だが彼の整った容姿も相まって文字通りに水も滴る良い男という感じだ。

「お怪我とか無いですか？」

「ああ、それは平気なんだが…廊下まで水漏れしてるので俺はこれから掃除の手伝いを」

「大変ですね」

「残業代も出るみたいだし、良しとするよ」

彼は自身に言い聞かせるかのようにそう話した。

「はああ……」

呼吸を整える。

腕に付けたデバイスは23:00をさしている。

プールで走り、泳ぎ回り、ジュエルシールド封印の手助けをしたのだが言うほどの疲れは感じていない。普段、毎日のように体力を大幅に消費する修行をしている所為だろうか。

「ッ超界王拳ッ だっ!!!」

スーパーサイヤジン
超サイヤ人の状態から更に界王拳を使う。

纏っているオーラは金色から赤色へと変色する。

その開放された気は密閉されたその空間を大きく揺るがせる。

「やっぱ、すげえ疲れるな……」

戦闘力の倍数宣言なしだと通常時の75倍という大幅な上昇は可能だ。だが使用後はかなりの倦怠感が襲ってくる。

超サイヤ人の状態でも身体に負担を掛けているのだ。そこから超サイヤ人ほどではないにしろ界王拳もまた身体に負担を掛ける技だ。これを重ね掛けをすることで大きな負担が身体にも精神にも襲ってくる。

「だけど、これをものにすれば」

今のところの最終目標は『ドラゴンボールGT』の『超一神龍』との戦闘時の『超サイヤ人4』『ゴジータ』だ。

余りにも高すぎて、大きすぎる目標はまるで地球から宇宙の果てまで行くのと同じ様に感じられる。

だが、出来無い訳ではない筈だ。

最低でもフルパワー状態の超サイヤ人4孫悟空と同等の力は持ちたい。

誕生時、戦闘力が2というサイヤ人としては最低部類だった彼も修行することであそこまで上り詰めたのだ。

「だから……より強く、より速く、より先へ」
そしてまた、アラームが鳴り響くまで修行に明け暮れるのだ。

街で発動!! 大きな樹が出て大混乱

月の光が差し込む静かな校庭に6つの影が存在している。その中の4つは人の形をしている。1つは4足の小さな動物。そして最後の1つは今にも消えようとしていた。

〔Stand by ready〕

「リリカルマジカル。ジュエルシード、シリアルXX∴封印っ!!」

〔Sealing〕

その言葉とともに杖から放たれた封印魔法による光が校庭に存在していたジュエルシードの思念体を包み込んでいく。

その光は月明かりよりも明るく、校舎にある窓ガラス1つ1つを一瞬だけだが綺麗に照らした。

封印作業を終えたレイジングハートから封印時に使用した魔力により溜まったその熱が排気される。

その熱の量はあまりにも膨大な為に蒸気となり、一時的に周囲に漂い、そして曇らせた。

その煙が晴れるとそこには魔力の大量使用により息を切らしているなのはの姿が

あった。

「なのは、お疲れ様」

ユーノのその劳いの言葉とほぼ同時に、封印されたジュエルシードが空からレイジングハートへと、なのはの方へと落ちてくる。

そのジュエルシードには大きく黒い字でXXと表示されていた。

「大丈夫、なのは？」

未だにSealing modeの状態のレイジングハートを引き摺りながら帰路へと、ヨロヨロと歩くなのはに対してユーノは声をかける。

彼女は相棒であるレイジングハートをあろうことか杖代わりにしていた。

「大丈夫なんだけど、ちよつと疲れた……」

ユーノの言葉に応えると同時にバタツという感じで力無くアスファルトの上に倒れるなのは。

やはりと言うか当然というべきなのだろうか使い始めたばかりの魔法で、大量の魔力を消費したのだ。疲労で動けなくなってしまうのは仕方がないことだろう。慣れない事をすべきでは無い。

「ヤムチャしやがって…」

そんな雄介のセリフはただ聞いただけでは単なるネタだと感じられるがしっかりと聴いてみるとなのはを心配している事が理解出来る。彼の着ている服はボロボロになつており、ジュエルシードの暴走体との戦闘がどれだけ壮絶だったのか暗に物語っていた。

「やはり俺がしつかりしないと……」

志蓮の方はとうとなのはの様子を見て自分に言い聞かせる様にそつと呟いている。その目は決意に満ちていて、何か強いものが感じられる。そんな彼の服もまた、雄介のものと同様にボロボロになっている。

「やれやれだぜ……」

そんな俺の言葉は静かな夜空に吸い込まれるように消えていった。

翌朝の5時。

起きる人は起きているだろうが、基本的に大抵の人が未だに布団の中で夢を見ている時間帯だ。

それ程寝てはいない筈なのだが、目はパツチリと覚めてしまいこれ以上寝る事は出来

ないだろう。仕方無く起きる事にした。

起きたからといって特に変わった事は一つも無く、俺はいつもの習慣通りに地下で修行をしていた。

「100009……100010……100011……」

片腕での腕立て伏せをしている。最初の頃は全く出来なかつたがコツさえ掴めば簡単に、あつという間に出来る様になつた。

額にはかなりの量の汗が流れており、身体の下には流れ落ちた汗で水溜まりが出来ている。

動かしている身体から発せられる熱の所為なのか、汗で出来た水溜まりから蒸気が発生して周囲が蜃気楼の様揺らいで見える。

それと同時に、汗の水溜りが熱せられている為に異様な臭いが立ち込めてしまつていた。

「……200000……。ふういゝ疲れた……」

予め決めていた回数に達したので終了する。

腕に付けられているデバイスには1000000と表示されている。この数字は自身に対して通常の10万倍の重力を加算し、加えている事を表しているのだ。

それは身体に当然ながら強い負担を掛けてくる。

片腕に自身の体重全てが集まるのだから、その支柱となつてゐる腕がとてつもなく痛い。右腕から左腕へと変えたりと繰り返しながらそれぞれ2万回ずつ、合計で4万回も腕立て伏せをする。

その結果、大きな重力と回数の影響か腕はパンパンであり、かなりの痛みを感じる。

「やっぱ、しんどいな……」

その声にはかなり大きな疲労が感じられるが顔の方は達成感を感じていますというぐらいに輝き、満ち溢れていた。

「さて……あれ？」

浴場にてシャワーを浴びようとした時にふと思いついた。思い出したと言つた方が良いだろうか。

——どうして自分はこんなにも頑張つてゐるのだろうか。

前世では何をするでもなく、何かをするでもなく、何かをしようとも、行おうともせずダラダラと日々を過ごしてゐたのだ。変わらない事を望み、意味のない現状を無理やり維持して親の、家族や親族に失望を与えて、買つてゐた。

そんな同仕様も無かつた自分が目標を立て、その目標に向かつて汗水を流しながら叶うかどうか分からないのに必死に努力をしている。

「ふむ……」

サイヤ人の血の所為か、それとも環境が変化した所為か。

自分の事である筈なのに、自分の事だからこそなのだろうか。それが全く理解する事が出来ないのだ。

「考えてると何だか気力が抜けてきたな……」

前世での沢山の失敗を思い出した所為か、自身を責め立て、また無気力になりかけてしまう。

どうでも良いと、したくないと、頑張つてどうなるんだと、どうせ無駄なんだと。否定的な考えが、ネガティブな気持ちで頭のなかに居座り渦巻いていく。

「駄目だ駄目だ……考えるのは止めた。それよりも飯だ、腹減つて力出ねえし」

その考えを、嫌な思い出から逃げる様に振り払い、払い落とす様にタオルでしっかりと入念に、汗の流れているその身体を強く拭いていく。

「修行した後の御飯は実に美味しいな」

簡単に調理した朝御飯を食べながら夜中の事を思い出していく。

「確実にアニメで観たモノよりも戦闘力は上だ。見ただけでも分かる……スピードもパワーも遥かに超えている。修行してなかったら一瞬で殺されていただろうな……」

ジュエルシードの思念体はアニメで観た限りでは魔法と出会ったばかりのなのではなくても対処は出来ていた。

だが、この世界の思念体との戦闘はなのは、雄介と志蓮の転生者2人を含めた3人でも苦戦する時は苦戦するのだ。

実際に夜中の戦闘時に思念体はかなりのスピードで動き、3人は翻弄されていた。

この強さの理由は何だろうか。

偶々なのか。それとも俺たち転生者というモノが存在していることによる弊害——副作用。イレギュラー要素なのだろうか。

「考えても仕方が無い事だけどな……」

意味が無いという事を理解しているが、その疑問は皆と会うまでの間、頭の中を螺旋階段を永遠と登っていく様にグルグルと回り続けていた。

川岸。

其処では少年サッカーの試合が行われていた。

元気良く声を出しながらボールを蹴り、それを妨害したりする少年たち。

それに対し彼等を応援する少女たちの声もまた元気に溢れより一層場を盛り上げていた。

「頑張れ、頑張れ」

「みんな頑張ってる」

『これってこっちの世界のスポーツなんだよね』

『うん、そうだよ。サッカーと言うの。ボールを足で蹴って相手のゴールに入れたら1点。手を使って良いのはゴールの前にいる1人だけ』

『面白そうだね』

なのはの説明を聞きながら目の前で繰り広げられている試合を興味津々といった感じで見つめているユーノ。

なのははマルチタスクによる分割思考に大分慣れたのか意識を逸らす事無くしつかりと説明をしながら試合を観戦している。

その為、最初の頃は周りに不審に思われていたが今ではそんな素振りを見せる事も無く身体を動かし、目の前にあるものを消化していきながら別のものに対して思考するという事も簡単に出来る様になった。

『ユーノ君の世界にはこういうスポーツってあるの?』

『あるよ。僕は研究と発掘ばかりであまりやってなかったけど』

スポーツというものの知識は持っているがそれだけで、実際はした事が無いからだろう。ユーノは喰い付く様にして目を向けている。

『にやはは……私と一緒にだ。スポーツはちよつと苦手』

「試合終了です。2対1で翠屋JFCの勝利」

ピーツと鳴るホイッスルとともに、なのはの父親である「高町士郎」さんがオーナー兼コーチをしているチームの勝利が告げられる。

「よし。みんなよく頑張った。良い出来だったぞ、練習通りだ。じゃ、勝ったお祝いに飯でも食うか」

その士郎さんの言葉にメンバー全員が元気良く手を上げて喜ぶ。

身体を思いきり動かした後、ましてや勝利した後の食事はとても美味しく感じられるものだ。その喜びは俺にも共感し理解することができる。

前世では体力が無く、走っていると5分も経過していないのに目眩が、息切れが起きていたのだ。

その為、身体を動かすことは今と比べて真逆と言って良いくらいに嫌いで、体力を増やす為に運動する気力も起きず、ひたすら家の中でゲームをしていた。

だが、今世では転生特典の御かげでもあるのか身体を動かすことが苦に感じる事が無く、それどころかゲームや漫画と同じくらいに好きな部類に入っているのだ。

その事に思わず苦笑してしまう。本当に変わってしまったんだなど、変わる事が出来

たんだなと思った。

なのはの両親が経営している喫茶翠屋の中では現在、勝利の余韻に浸り、分かち合い、メンバーは食事をして、活気に満ち溢れていた。

俺達は中と比べると比較的静かに、それでも充分に、何時も通りに盛り上がりながら会話をしながら店外で食事をしている。

「それにしても改めて見るとこの子、フェレットとはちよつと違わない?」

アリサが放ったその懐疑の言葉になのはは思わずギクツといった感じに驚く。

そのなのはの驚き様が可愛らしく、面白く俺は思わずニヤけてしまう。

「そういう言えばそうかな…動物病院の先生も変わった子だねって言ってたし……」
「すずかの方も前から気になってはいたのかアリサのその言葉に同意する。」

「くくく」

雄介の方も我慢しているのか小さな声で彼女達に気付かれない様に見えるだけ静かに、腹を手で抑えながら笑っている。

志蓮の方は我関せずと言わんばかりに目の前のケーキを黙々と食している。だが、その目は何処か楽しそうだ。

「ああ、ええつと…まあ、ちよつと変わったフェレットつてことで。ほらユーノ君、お

手」

「キユ」

「おおっ」

「可愛い」

その慌てながらも必死になのはアドリブをきかせて、ユーノはそれに対し合わせるように彼女の手にも自身の前足をのせる。

アリサとずかはそのユーノを見てよほど気に入ったのか可愛がり何度も何度も撫でる。

『ごめんね、ユーノ君……』

そのなのは謝罪の言葉にユーノはただ大丈夫だと返す事しか出来なかった。

「皆……今日はすつげえ良い出来だったぞ。来週からまた練習頑張つて次の大会もこの調子で勝とうな」

士郎さんのその言葉で何かを思い出したのかアリサは俺、雄介、志蓮の3人に質問を投げかけてくる。

「あんた達はサッカーやらないの？」

「俺は興味ないから」

「何だ、出て欲しいのか?」

「ダルいから」

三者三様に答えを返していく。

「ただ俺のしない実際の理由の方は身体能力にかなりの差が存在しているからだ。これで実際にサッカーの試合に参加すると周りは俺達の動きに着いて行けず、ただ立っているだけのカカシ状態になってしまう。ボールをゴールの方へとシュートするとキーパーは勿論、サッカーゴールの方も唯では済まない。言う慣れば超次元サッカーといった感じになり、俺達専用のゴールやボールをつくらなければ駄目になる。勿論、気の操作でどうにかなるといえばどうにかなるのだが少し気を抜くと相手を吹き飛ばしてしまうかもしれない。」

「学校の授業では仕方が無いので参加しているが出来る限り、こういった事は避けておきたいのだ。」

「そんな事を言っても信じる事は出来ない筈なので、ただただ適当に答えておく事しか出来ない。」

「……………」

「サッカーチームのメンバーが解散する中で、キーパーをしていた子が持参してきたであろう鞆の中からひし形の宝石を取り出す。」

「あっ!!」

なのはそれに気付いたのかその彼の方へと目を向ける。

彼の後ろをマネージャーと申しき少女が追いかけて一緒に帰っていく。

その不安気なのはの視線に気付く事無く彼等はその後をした。

「あゝ面白かった。はい、なのは」

「え?」

余所見をしていたなのには対してアリサが差し出したその手にはグツタリとして目を回しているユーノがそこに居た。

「さて、私達も解散?」

「うん、そうだね」

そう言いながらアリサとすずかは持って来た鞆を手に取り帰宅の準備をする。

「そっか。今日は2人とも午後から用があるんだよね」

「お姉ちゃんと御出かけ」

「パパとお買い物」

その2人の声は何処か弾んでいるように感じられる。それだけ楽しみということだろうか。家族仲が良いという事が理解できる。

「良いね。月曜日にお話聞かせてね」

「みんなも解散か？」

そこに片付けをしに来たのか士郎さんが話しかけてくる。

「あ、お父さん」

「今日はお誘い頂きまして有難う御座いました」

「試合、格好良かったです」

家の、親の教育がしつかりと行き届いているのか、それとも厳しく躰けられているのか。並みの小学生では出来ない様なしつかりとした御礼の言葉を述べるアリサとすずか。

「すずかちゃんもアリサちゃんも有り難うな、応援してくれて。帰るんなら送って行

こうか？」

「いえ、迎えに来て貰いますので」

「同じくです」

元氣よくそれでいてハッキリと答える2人に微笑みながら了承する士郎さん。

「そっか。なのははどうする？」

「お家に帰ってのんびりする」

「父さんも家に帰って一風呂浴びてお仕事再開だ。一緒に帰るか？」

「うん」

親と子。家族が仲良く出来るというのとはとても良いものだ。

前世では俺の態度が、生活が駄目だった所為で親からは常に疎まれてる様に、責められてる様に感じられ居場所が殆ど無く、ヘッドホンで耳を塞ぎ、壊れたステレオの様に繰り返される親の小言から、嫌な言葉をシャットアウトして、現実を見つめながらも2次元に逃げて、目を背ける事しか出来なかつた。

その家族に対しての罪悪感からか、仲の良い家族を見ているととても眩しく、どうしても嫉妬してしまうのだ。

「(自分の所為なんだけどな……感情というのは本当にコントロールが難しいな……)」

充分に恵まれていた筈なのだ。恵まれた環境で過ごしていたのだ。

それに甘えてしまっていたのかどうかは分からないが、動く事もなく、変わる事も出ず終えてしまった人生。

2度目がある。2度あることは3度あるというがだからと言ってこのまま何もせずにもまた死ぬのだけは嫌なのだ。

だからこそ今、目標を立て修行をしている。

もし大事な誰かが出来たなら、大事なモノを、大事な皆を、自分をしっかりと守る事が出来る様に。

「君たちもご苦勞様。今度、練習に参加してみないか?」

「「気が向いたら宜しくお願いします」」

見事に返答の声はハモリ、やんわりとお断りをする俺達。

その答えに士郎さんはガクツと肩を落とした。

解散し、家に帰っている途中。先程、キーパーが持っていたジュエルシードの事が頭の中を占めていた。

「(なのはとユーノに連絡して、すぐに封印するべきか…なのはの方はちゃんと気付いていたみたいだけど……)。此処はなのはの成長の為に知らせないでおくべきか……)」

キーパーである彼が、一緒に帰った彼女が発動させた場合どの様な事になるか、どんな事が起きるか。知識の中では知っている。覚えていないのだ。

だが、どうするべきなのか判断できない。決断できないのだ。

なのはの成長の為だというのが結局のところ言い訳に彼女を使っているだけで、動こうとしていない。

「(こう云うところは前世と全く変わらないな……考えれば考えた分だけドツボに嵌まって動くことが出来なくなる……)」

何度も何度も、繰り返し繰り返し頭のなかを反芻する。それが悪いという事では無いのだろうか、そこから抜け出す方法を、抜け出し方を、そこからどう動くべきなのかが思いつかない。答というものが存在しないものなのか、スキルも働かない。

「——なんだ!?!」

ウロボロスのように自分に噛み付きグルグルと、思考という名前のメビウスの回廊を走り廻り続けていると突然大きな魔力の波動を感じた。

「まさか……」

ジュエルシードが発動したのだろう。

俺は急いでその現場に向かう事にした。先程までの不毛な考えは嘘のように消え去り、泥沼からの脱出は出来ていた。

「おーい」

とあるマンションの屋上で魔力を開放しバリアジャケットを展開するなのは。その魔力を辿り、その場所に集合する。

辿り着くと同時に目に入るその光景は余りにも現実的で、現実離れしていた。

「あ!?!」

「あれは……」

「ファッ!？」

「凄い事になってるな」

「……………」

目の前にはビルを覆い隠すほどの大きな樹が存在していた。

その樹の根はアスファルトの地面を突き破り道路を、車や人々の通行を遮り邪魔をしている。それどころかその大きな根は車を突き破り壊していたり、引つ掛かって怪我をしてしまうヒトまで出てくる始末だ。

余りの大きさの所為か、魔力を感知してから行動という後出しの結果なのか結界を張る事が出来ない。

これでは沢山の人の記憶に残ってしまし、記憶の改竄というのも難しいだろう。白昼夢という事で済めば良いだろうが、発動時に発生した地震、根が突き破って出来た穴、砕けた道路などのアスファルトはどうしようとも誤魔化す事が出来ないだろう。

「酷い……………」

その一言で済ますことが出来るかとそういう訳ではないが、この惨状に対して表現出来る言葉は今のところそれぐらいしか浮かんでこない。

「多分、人間が発動させちゃったんだ…強い思いを持つものが願いをもつて発動させた時、ジュエルシードは一番強い力を発揮するから」

そのユーノの予想による言葉になのはは解散前にキーパーの少年が持っていた所を見たことを思い出す。

「やっぱりあの時の子が持つてたんだ……私気付いていた筈なのに……こんなことになる前に止められたかもしれないのに……」

「なのは……」

そのなのはの様子を見て俺の心には暗い影が通り、自身を爪を立て、責め立てていく。
「(分かってた……分かってたんだ……覚悟はしていたはずなんだけど……)」

気が付くと俺の手は、拳はグーの形で強く握られており手に平には爪の跡が出来ていた。

「なのは?」

なのはが何かを思ったのかそれに応えるようにレイジングハートは強く光る。

「ユーノ君、ブロン君……こういう時はどうしたら良いの?」

「え?」

「そうだな……」

その疑問の言葉に思わず、喉が詰まってしまったかのような錯覚に陥り対応策という言葉が出て来ない。そんなことはないはずなのに、まるで自分が責め立てられているかのように感じる。息苦しさを、居心地の悪さを感じてしまう。

「封印するには接近しないと駄目だ。先ずは元となつている部分を見つけないと……でもこれだけ広い範囲に広がっちゃうとどうやって探したら良いか……」

黙っている俺の代わりに平静さを取り戻したユーノはなのはの質問に対する回答を出す。

「元を見付ければ良いんだね?」

その単純であると同時に難しいことをやってみる言わんばかりに口にするのは。

「えっ?」

そのなののはの言葉に驚きを隠せないユーノだが先日のプールの件という前例が存在しているために無理だと否定することが出来ない。

「Area Search」

「リリカル……マジカル……探して、災厄の根源を」

その言葉と共にレイジングハートから光が発せられ、それは複数に分散し、蜘蛛の子を散らすように周囲に、街一帯に飛び散り広がった。

その光の玉である「サーチャー」を通して色々な場所の光景が、状況が頭のなかに浮かんでくる。

その情報はマルチタスクを使用することが出来なければ混乱を、運が悪ければ頭の中がパンクして気がどうにかしていたであろう。

「——見つけた！　すぐ封印するから」

「此処からじゃ無理だよ、近くに行かなきゃ」

そのユーノの言葉を否定し、なのはは強く応える。

「出来るよ！　大丈夫！　そうだよね、レイジングハート……」

天へとレイジングハートを掲げながらなのはは自身に言い聞かせるかのように声にする。

「『Shooting mode』 Set up」

そのなのはの言葉に対して自信を持たせるように、後押しをするように音声を鳴らしながら変形をするレイジングハート。その形は杖の上の方に、前方に魔力を集中させる為なのか、音叉状に変形し、魔力光で出来た光の羽が広げられている。

「行って、捕まえて!!」

レイジングハートから放たれたその大きな魔力の光は災厄の根源となってしまうた発動者、つまりキーパーの少年と一緒に居た女の子を包み込む。

「Stand by ready」

「リリカルマジカル…ジュエルシード、シリアルX…封印っ!!」

その言葉とともに駄目押しと言わんばかりに再度巨大な魔力光線を放つ。

「Sealing」

その光は確実に彼等を包み込み、暴走したジュエルシードを封印した。

封印に成功した為か、街を覆うほどの大樹は光となり本当に夢であったかのように消滅した。だが、その道路などに出来た破壊の跡は、人々に出来た傷の痕は残り、夢では無かったことを語っている。

発動源となっていた少年に握られていたジュエルシードは吸い込まれるようにレイジングハートの方へと飛び、収納される。

〔Receipt Number X. Mode Release〕

沢山の魔力を使用し、高威力の封印砲撃をした際に蓄積された熱を排気するレイジングハート。その蒸気は煙の様に周りに立ち籠め、蒸発して消えていった。

「ありがとう……レイジングハート」

〔Good bye〕

「僕にも使えない遠距離魔法……この子、一体どれだけの魔法の才能を持っているんだ……」

「いろんな人に迷惑かけちゃったね……」

「……………」

「何言ってるんだ、なのはちゃんとやってきてくれるよ」

「そうだぞ、なのは。お前はちゃんとやってる」

「流石は俺の嫁だな。初めての魔法でしつかりとやってのけるなんて」

そのユーノ、雄介、志蓮の励ましの言葉は効果が無く、なのはは悲しそうな顔と声を
して独白をする。

「私、気付いてたんだ…あの子が持つてるの。……でも、気の所為だつて思っちゃった
……………」

「なのは。お願い、悲しい顔をしないで…元々は僕が原因で」

「はい、そこまでだ。このことに関してだけど誰の責任でもないよ。次からはどうす
べきか、次からはどうしたらこんなことが起きるのを防ぐことが出来るかを考えるのが
大事なんだから」

雄介のその言葉は俺の心のなかに重くのしかかる。それと同時に何かが軽くなるの
が感じられた。

それは当たり前であると同時に、それだけ難しいことでもあるのだ。理解と行動は別
物なのだから実際に出来るとは限らない。

「(そうだ、言い訳して見逃して発動させてしまったけど…次からどうするかが大事な
んだ……………」

その帰り道で見た夕焼けはとても眩しく、自分の心のなかの汚れた部分が陽光に照ら
されて、周りに見透かされているかの様に感じられた。

「はあ……」

お風呂に入りながら今日の出来事を思い出す。

夜中は学校でジュエルシードの思念体との戦闘。昼間から夕方にかけて人の願いにより暴走したジュエルシードの封印。

両方共なのはとユーノ、雄介、志蓮がしたのだが自分がそれをしたかのように疲れを感じてしまう。

普段ならばお湯に使っているだけで疲れというものが吹き飛ぶような思いになるのだが、精神的疲労によるものか、自信を責めている所為か、身体は心に引つ張られて雨が降っているようにどんよりとして、鉛のようにつつしりと重く感じられる。

「どうすれば良かったのかな……?」

口を開けばこの言葉ばかりだ。

もしも、たら、れば、なんてそんなことを口にしていけばそれには星の数よりも遙かに多く、上限が、限りというものが無く、永遠と続いていく。

過去の可能性の話をしてても無駄だというのに。

「寝よう……朝になればきつと……」

前向きでポジティブな考えが太陽の様に昇り、浮かび、出来る様になる筈だ。

楽しい、きつと明るい1日が始まる筈なのだ。

寝間着である子供用のパジャマに着替え、ベッドの上に敷いてある布団の上に身を倒す。

疲れたその心と体にはその布団は優しく包み込んでくれているかのように感じられた。

もう2人の魔法使い登場 猫屋敷での初邂逅

「ふう……」

息を吐く。

自分以外誰もいないその空間はとても静かで己の呼吸音が、息をしている音が、心臓の鼓動音だけが鳴り響いている様な錯覚を与え、その様に感じさせてくる。

「はあああああ」

少し自身に気合を込め、気を開放する。

すると意識が分裂し、もう1人の自分が出現する。真・四身の拳だ。

お互いがお互いを、自分同士を見ながら歩を進め、距離を取る。相手の全身が視界に入る距離まで離れるのだ。

「さて、やるか……」

「ああ」

その言葉と同時に姿が消える。

消えたというのには語弊があるだろう。ごく普通のヒトには、動物の目には追えない、追いつけない程のスピードで動いているだけなのだから。

「だりやああつ!!」

「なんのっ!!」

目の前に存在している自分自身に攻撃を与え、それと同時に向かってくる攻撃を逸らし、躲し、防御する。

自分自身との闘い。これは当にこの言葉通りだった。自分と同じ力を、戦闘力を持つ存在同士の不つきり合い。自分と同じ思考を持った存在が読み合つて闘っているのだから。

鏡で自身を見るのとは違い、目の前にもう一人の自分が居るといふ事はとても違和感があり、それと同時にとても気持ちの悪いものだ。

だが、その感覚は麻痺してきたのか最初の頃とは違い、慣れてきたのか落ち着いて修行に勤しむことが出来るようになってきた。

「おらあああああ!!」

殴り殴られ、蹴り蹴られる。そんな原始的な闘いの応酬が繰り広げられている。

そのやり取りは唯の殴り合いのようではそれだけではない。一撃一撃が重く速いのだ。その拳は、蹴りはとてつもなく重く、気を高めて防御力を向上させているのにもかかわらず身体に大きな痛みを、負担を掛けてくる。

するとピピピとこの場面に似つかわしくない、相応しくない電子的な音が鳴り渡る。

腕に付けているデバイスから鳴っているのだ。

「もうこんな時間か……」

設定されたアラーム音を鳴らし続けているデバイスを操作し音を止める。

「さて……朝御飯の準備に取り掛かるか」

真・四身の拳を解除し、風呂場に向かう。まずは汗をどうにかしないといけないのだから。

「（もう少しで壁を超えることが出来そうなんだけどな……）」

風呂場にて湯船に身を委ね浸かりながら俺は悩んでいた。

壁。此処でいう壁というのは超サイヤ人の壁のことだ。超サイヤ人から

スーパーサイヤジン
超サイヤ人2″へと変身出来るかどうかという壁だ。

とても大きく深く激しい怒りが必要なのか、それともその実力が足りていないのか。

目に見えないその壁はとても大きく、高く、頑丈に感じられる。そしてその壁には亀裂が走っているのだ。

だが、その壁をぶち壊す為の決定的な一撃が出せないでいる。

「あとちよつとなんだけどな……」

未だに見えない、超える事の出来ない壁に対してどのように挑戦し超えるかを考える事しか出来なかった。

「おはよう。雄介君、ブロン君」

「おはよう、なのは」

「おはようございます、恭也さん」

「それじゃ、行こうか」

挨拶を終えて俺と雄介、なのはと恭也さんはバスに乗る。

今日はさすがの家、要するに月村家に遊びに行くのだ。

家に向かう途中、窓から海が見える。海面は光が反射してキラキラと輝いておりとても眩しい。

「(海か……)」

前世では海には小さな頃に1度しか遊びに行ったことは無かった。

1回だけでも行くことが出来たというのはそれだけで幸せなことなのだろうが、如何せん幼い時のことなので全然覚えていないのだ。

況してや前世での出来事なので今の俺にはもう殆どが思い出せない様になってきているのだが。

「(みんなどうしてるかな?)」

前世で置いてきた家族を、親戚を、友達を想い、俺は少し泣きそうになる。確かに、だけどゆっくりと記憶が朧気になり思い出せなくなりつつあるのだ。

「はあ……」

これから遊ぶというのに溜め息を吐き、ブルーな気持ち吐き出す事しか出来なかった。

「いらつしやいませ」

「ああ、お招きに預かって」

「こんにちは」

「どうもです」

「こんちやーす」

インターホンを鳴らし、少し待つとドアからノエルさんが迎えに出てくる。

「どうぞ、此方です」

促され、家の中に足を踏み入れる。

家に入るとその大きく静かな空間に足音が鳴り響く。

「やはり大きいな」

玄関だけでもかなりの大きさだ。これでは家というよりも屋敷という方が正しいだろう。家の大きさといい、メイドさんが居ることといい良家だということが十二分に理解できる。

部屋に入るとそこには既にアリサが来ていて、何か飲み物を飲んでいた。

椅子の上に猫が丸まっていて、床の方は子猫達が短い足を使いながらじゃれ合っていた。

「なのはちゃん、恭也さん、雄介君、ブロン君」

此方に気付いたのかさすがが歩き、近づいて来る。

「なのはちゃん、雄介君、ブロン君……いらつしやい」

「すずかちゃん、アリサちゃん、ファリンさん」

「キュ」

その声に応える様になのははそれぞれの名前を呼ぶ。

「ユーノ君もいらつしやい」

「恭也、いらっしやい」

「ああ」

俺達が入ってくるると同時に忍さんは恭也さんの方へと足を向ける。恭也さんの方も優しい感じの笑みを浮かべながら忍さんと向き合っている。

「お茶を御用意致しましょう。何がよろしいですか？」

「任せるよ」

「なのはお嬢様は？」

「私もお任せします」

「俺達もお任せで」

質問をされる前に答えておく。

お任せでというのは無責任な発言なのかもしれない。相手側からすると選ぶのに苦労し、これほど難しい物はないのだから。

自分の意見を言えとよく言われるが、これが自分の意見なのだからどうしようもない。仕方が無いのだ。

それにお茶と言ってもそれほど知識も無く、拘りもないのだ。お任せすることしか俺の中には選択肢は無かった。

「かしこまりました」

そんな言葉にたいした反応を見せず、嫌な顔ひとつしないでニコリとした笑顔で了解と答えてくれるノエルさん。

「(流石というか何と言うか……)」

「ファリン」

「了解です、お姉様」

そのノエルさんの言葉にすずかの近くに居たファリンは入ってきた扉の方へと向かい、退出する。

「じゃ、私と恭也は部屋に居るから」

そう言いながら忍さんは自然な感じで恭也さんの手を取る。当たり前のように、何時もしているというような感じでスツと手を握っている。

「はい、そちらにお持ちします」

ノエルさんとファリンさんが部屋から出るとなのは椅子に座るために上に居座っていた猫を抱き、床に下ろす。

「おはよう」

「うん、おはよう」

「相変わらずすずかのお姉ちゃんとなのはお兄ちゃんはラブラブだね」

「うん」

そのアリスの言葉を聞きながら今にも退出しようとしている2人を視界に入れる。

2人は腕を組みながら歩いており、とても楽しそうだ。

「お姉ちゃん、恭也さんと知り合ってからずっと幸せそうだよ」

「家のお兄ちゃんはどうかな…でも、昔に比べて何だか優しくなったかな。よく笑うようになったかも」

「リア充爆発しろ、パルパルパルパルパルパル」

その雄介の妬みを含めた言葉に俺は前世で彼女が居なかった為にただ力無く笑う事しか出来なかった。

ふと視線を下に向けるとユーノはかばんから抜け出している。

だが何処か様子がおかしい。何かを警戒しているかの様に、蛇に睨まれた蛙のように動かない。

いや、動けないでいるのだ。よく見るとユーノ前には猫が居て、今にも跳びかかりそうな様子なのだから。

『見てないで助けてくれないかな……』

『オコトワリシマス』

『薄情者ーっ!!』

他人の不幸は蜜の味と言いますか、見ている分には面白いので、ユーノには悪いが放

置する事にした。

「そう言えば今日は誘ってくれてありがとうね」

「こつちこそ来てくれてありがとう」

「今日は元氣そうね」

「へ？」

「なのはちゃん、最近少し元氣なかつたから」

そのアリサとすずかの2人の言葉にハツとするなのは。

「何を驚いているのやら。顔に出やすいということに気付いてないのか」

「もし何か心配事があるなら話してくれないかなって、2人で話してたんだけど……」

「すずかちゃん、アリサちゃん」

よく見ているなど思いながら近くに居た猫をモフる。ひたすらモフっていく。フ

シャーッと嫌がられるまでただただモフリ続ける。

この屋敷に居る殆どの猫は気性が大人しいのか、撫で続けていてもそれ程強く怒ったりする事が無い。

「(猫か…時間軸的に『リニス』は死んでいるのだろうか。A'sでは『ロツテ』と『

アリア』の『リーゼ姉妹』も出て来るし、どうしたものか……)」

そう考えているとユーノの悲鳴が聞こえてくる。

「キユー、キユキユキユ」

「ユーノ君？」

「アイン駄目だよ」

ふと目を向けると先程の猫がフェレット形態のユーノを追いかけているのだ。

「は〜い、お待たせしました。いちごミルクティとクリームチーズクッキーです」
運が悪いのか、間が悪いのかそこにおやつを持ったフェアリンがやって来る。

その彼女の足元をグルグルとユーノが、アインが回り、それに対して慌てた彼女はフランスを崩してしまう。

「フェアリン危ないっ！」

その拍子に何枚か皿が宙を舞う。

「セーフ」

何とかなのはとすずかの2人が倒れそうになるフェアリンを背中から支える。

が、空中を飛んだ皿は床へと落ちて見事真つ二つに割れていた。

「すずかちゃん、なのはちゃん。ごめんさ〜い」

「しっかし相変わらずすずかの家はネコ天国よね」

アリスのその言葉を聞き、改めて辺りを見渡すとそこには猫、猫、猫。沢山の猫が居

る。猫カフェでも開けそうなほどの数の猫が居るのだ。そこら中で猫がにやーにやーと鳴き、じやれ合っている。猫好きには堪らない空間だろう。

漢字にすると猫、猫、猫、猫猫猫猫猫猫猫猫猫。これだけでもまだごく一部で全ての猫を漢字で書くと猫という漢字に対してゲシユタルト崩壊してしまいそうになる。

「子猫たち可愛いよね」

「うん。里親が決まってる子も居るからお別れもしなきゃならないけど」

「そっか……ちよつと寂しいね」

「でも、子猫たちが大きくなっていくのは嬉しいよ」

「そうだね」

「——!？」

話をしているとそこにジュエルシードの魔力が流れてくる。まだ、完全に発動はしていないが、放っておくと大変なことになるのは目に見えている。自明の理なのだ。

『なのは、雄介、ブロン』

『うん。すぐ近くだ』

『反応はこの屋敷の敷地内だ』

『どうするっ?』

『えっと……えっと……』

猫と遊んでいるはずかとアリサを見ながらどうしようか悩んでいるのは。

『そうだ』

「ユーノ君？」

助け舟を出すかのようにユーノは何かを思いついたのかなのはの膝の上からおり、駆け出す。

「あらら、ユーノどうかしたの？」

「うん、何か見つけたのかも。ちよ、ちよつと探してくるね」

「一緒に行こうか？」

「俺が行くよ」

そう言い、雄介となのはは走り去ったユーノを追いかけていく。

その不可解な行動と言動にアリサとすずかの2人はただ首を傾げるだけだった。

「発動した？」

「此処だと人目が…結界をつくくらなきや」

結界。動物病院やプールでユーノが使用していた魔法だ。

通常空間から特定の空間を切り取り、魔法効果の生じている空間と時間信号をズラす

魔法。術者が許可した者と、結界内を視認、結界内に進入する魔法を持つ者以外には結界内で起こっていることの認識や内部への侵入が出来ず、魔法戦での周囲への被害を与えたり目撃されたりしないようにできるのだ。

詰まるところ身も蓋もない表現だが便利な空間をつくり出すといった感じだろうか。

「あまり広い空間は切り取れないけどこの家の付近くらいならなんとか」

その言葉と同時にユーノは魔法を発動させる。

なのはと雄介の目の前には大きな円形の魔法陣が地面に展開されており、その魔法陣の大きさにただ驚くことしか出来なかった。

「いやあ〜」

「ふえ?」

「え?」

目の前には大きな猫が居た。

「あ、あ、あ、あれは……………」

「た、多分、あの猫の大きくなりたいてって思いが正しく叶えられたんじゃないかなと

……………」

「そ、そっか……………」

文字通りに大きいのだ。歩く度に地面は揺れる。

結界で時間信号をズラしていないと地震か何かじゃないかと騒ぎになっていたかもしれない。

大きくなりたいという願いがそのままの意味で叶えられたのだろう。それが本当の意味で、願い通りに叶えられたかどうかはともかくとしてだが。

「大人になりたいっていう願いだったのかもしれないけどな」

「だけど、このままじゃ危険だから元に戻さないと」

「確かにそうだな」

「流石にあのサイズだとすずかちゃんも困っちゃうだろうし」

「そういう問題じゃないと僕は思うんだけどな……」

「襲ってくる様子も無さそうだしササツと封印を……レイジングハート」

そこに何処からか魔法による攻撃がその大きな猫に命中する。

「にやああ」

「『バルディツシュ』……フォトランサー連撃」

【Photon lancer Full auto fire】

金色の魔法弾が連続で猫に向かい放たれる。

その金色に光り輝く魔法弾が当たり、大きな子猫は悲鳴を上げる。

「な!?! 魔法の光……そんな……」

目の前の猫に気を取られ、意識が集中していたのかユーノはもう1人の魔法使いの接近に気が付かなかった。

「気付けよ……」

「——ごめん」

気付かなかったユーノに対してか、自身に対してか放ったその言葉に対してユーノは自分のミスだと謝る事しかできなかった。

「レイジングハート、お願い」

「Stand by ready. Set up」

攻撃を受けたからか猫はその場から逃げようとする。

だが普段は俊敏な猫であっても、体が大きいからかその動きはノソノソとしていても遅く感じられる。

「“Flier fin”」

なのはの足に小さな光の翼が形成される。

軽くジャンプをして猫の元へと向かうのは。

そこに先程の魔法使いが再び攻撃魔法を繰り出してくる。

「“Wide area Protection”」

その攻撃をprotectionで防御し、猫を守る。

「魔導師……」

彼女はそう呟きながら猫への攻撃は止めない。

防御をしているのはを無視して彼女は猫の足元へと攻撃をした。

「にやああ!!」

その足元への攻撃が見事に命中し、バランスを崩したのか猫は木々を薙ぎ倒しながら倒れる。

「(そろそろ驚かなくなってきたけど、僕がなのはに教える事はもう何も無いのかも)」

「同型の魔導師……ロストロギアの探索者か」

「間違いない……僕と同じ世界の住人。ジュエルシードの正体を」

その魔導師というキーワードで確信したのかユーノは大きな声をあげる。

「バルディツシュと同型の『インテリジェントデバイス』……」

なのはの手に握られているレイジングハートを見ながら彼女はそう呟く。

「バル……ディツシュ……」

それに対して彼女の手に握られている黒を基調とした杖を目にしながら呟くのは。

「ロストロギア……ジュエルシード」

「『Scythe form』 Set up」

頭に当たる部分が直角に展開、変形する。それと同時に先端部分に金色の魔力光が発

生する。鎌の様な見た目だ。

彼女のバリアジャケットは黒く、そのデバイスと同時に、一緒にみると幼く可愛らしい死神の様な印象を周囲に与える。

「——申し訳ないけど……頂いていきます」

その言葉と同時に彼女はなのには向かい一直線に飛び掛かる。

【Evasion. Flier fin】

何とか相手の攻撃を躲し上空に移動するなのは。

【“Arc Saber”】

そんな回避をしたなのには向けて先端に形成されている魔力光を飛ばしてくる彼女。その攻撃は回転をしながらかなりのスピードでなのには向かっていく。

【Protection】

「なののはっ!!」

防御すると同時になののはを中心にして大きく爆発が起きる。

更に上空へと退避しようとするなのには彼女は追い打ちをかける様に近接攻撃を仕掛ける。

【!?!】

そこに雄介が攻撃を仕掛けるが彼女はスルリと避けた。

「避けたか」

手に炎を灯しながら雄介は1人そう呟く。

「雄介君？」

「悪いなのは……ミスった」

軽い感じで謝罪の言葉を述べる。

「あなたは……」

そう言いながら見下ろす彼女に対して笑いながら見返す雄介。

「2対1は流石に卑怯だと思っただがな……」

「誰だ!？」

声のした方向をよく見ると木の上に少年が立っていた。彼女と兄妹なのだろうか何処か顔が似ていて、髪の色は同じ金色だ。だが彼には額に水晶のようなものがあり、彼女とは違った存在だという事を推測させる。

「お前の相手は俺がしてやる。フェイト、チャツチャと封印しちまおう」

「——わかってる」

その言葉と同時に彼は雄介に殴りかかる。

「グイルバーニアッ!!」

雄介は自身の移動速度を倍加させ、相手の攻撃を避けながらこの先どうするかを考える。

「(ブロンを呼ぶか? いや……あいつに頼ってるばかりじゃ駄目だ。俺達だけでどうにか打開を)」

「オラオラどうしたあ?」

彼の拳は速く、鋭く次々と繰り出される。

だが、ブロンとの訓練の成果が出ているのかその拳はゆっくりに見え、避けるのに然程苦労することはないようだ。

「お前、転生者だな?」

「そうだとしたら?」

額に水晶の付いている少年はその質問に対して当たり前だという感じに答えると同時に疑問を投げかけてくる。

お互いがお互いに拳をぶつけ合いながらなのはやユーノ達に聞こえないくらいの大きさの声で会話をする。

「お前、フェイトの何なんだ?」

「兄だよっ!!!」

その攻撃を避けているとなのは達から離れていく。

「(クソツ)」

焦る雄介に対して目の前の彼は余裕だと言わんばかりに笑っている。

「そう言うお前はどうかなんだ？　なのはの側に居るようだが」

「幼馴染みだ」

言葉を放ちながら己の拳を目の前の不敵な顔を浮かべている少年に向ける。

だが、彼の方もスルリと攻撃を避けながら反撃をしてくる。

「——魔法でスピードを上げてるのにつ)。これならどうだつ、〃白竜の咆哮〃 つ!!!」
口からレーザーのような鋭い閃光のブレスを放つ。その光は凄まじく強く、周囲を焼くほどでとても眩しい。

「ぐっ!!」

彼はその光に眼を瞑り避けることが出来ずに、防御する。彼はガードをすることにより少し後ろに退がった程度だった。

彼の足元は足を引きずったかのように地面が削れ、抉れていた。

「〃覚えた〃……」

「何?」

何を覚えたというのか。

雄介にはそれが理解できなかったが、その彼の小さな言葉は何処か不安を感じさせるものがあつた。

「こう使うのか？ 白竜の……」

「まさか……」

「咆哮ッ!!!」

その言葉と同時に彼の口からもまた雄介が放つたものと同じ閃光が放たれる。

「ちい」

舌打ちをしながら回避する雄介。

先程雄介が居た場所は、地面は大きく削れ、相当のダメージを与えるほどの威力を誇っていることを示した。

「お前のその能力……」

「そう、俺の能力は……この力は“ZERO”の“フラグメント”。お前が魔法を使えば使う度に俺はそれを覚え、同じ魔法を使えるようになる」

——ZERO。

それは他者の能力による技を体感や観察によつて理解することでその能力を使えるようになる力だ。本来はフラグメントと呼ばれる特殊能力に対してだけだったのだがこの世界においては魔法に対しても適応されるようになったのだろうか。

「面倒くさい能力だな…だが、覚える事が出来ても使えるかどうかは別だろ」

「……………」

「だから、より強くて難解な技を使えばいいだけの話だ」

「面白い。掛かって来いよ、ハリーハリーハリー」

「燃えてきたぜ」

「何で、何で急にこんな……………」

「答えても、多分……………意味は無い」

その会話を終えると同時に一気にお互いに離れ、距離を取る。

なのは猫の方へ、彼女は木の枝の上に。

「『Device form』」

斧のような形へと変形するバルディッシュ。

「Shooting mode. 『Divine buster』 Stand

b
y」

「Photon lancer Get set」

それぞれがお互いのデバイスを相手に向けて構える。

緊張が走り、一瞬……一瞬だけ時間が止まったかのように感じさせる。

「……………」

「……………」

「(きつと私と同じ年くらい……綺麗な瞳ときれいな髪。だけど……この娘……)」

「にやああ」

先程まで倒れていた猫が鳴く。

それに気を取られたからだろうか、それがなのはの敗因となった。

「ごめんね」

小さな、とても小さな声で黒色のバリアジャケットを着用している金色の彼女は呟く。その謝罪の言葉は猫に対してのものなのか、それともなのはに対してのものなのか。だが、その言葉は彼女が優しい性格だということを理解させるには充分だった。

【Fire】

「——!?!」

バルディッシュから放たれた金色の光は辺りを包み込み盛大に爆発する。その爆発によりなのはは空に、空中に投げ飛ばされた。

「なのは!!」

そんななのはの所へユーノは急いで駆けつけ、魔法陣によるクッションをつくり上げ

る。

【Sealing mode form”. Set up】

Device modeの時とは反対に頭の部分が反転し、光の翼が出ている。立ち上がる猫に彼女は杖を向ける。

その彼女から魔力によるものか、周囲を電撃がビリビリと走っている。

「捕獲」

大きく振りかぶりビリビリと魔力を放っているバルディッシュの先端部を地面に付ける。そこから地面の中を進み、猫に命中する。

「にやああああああ」

その猫の大きな身体からXIVと表示されたジュエルシードが抽出される。

【Order】

「ロストロギア、ジュエルシード…シリアルXIV…封印」

【Yes sir】

上に向け、魔力を込めた光を空へと向けて放つ。すると空中に黒い渦が、雲が出来、そこから無数の光の矢がジュエルシードに降り注ぐ。

【Sealing】

あとにはグツタリとした子猫と封印が完了したジュエルシードがそこにあるだけ

だった。

【Captured】

その宝石はバルディッシュに吸い込まれるように移動し、収められた。

「……………」

気を失っているのはに目を向ける彼女。ただそれだけで他に何かをするでもなくその場をあとにする。

ユーノはその後姿を見ることしか出来なかった。

「おらおら、どうしたどうした」

「この野郎っ」

振りかざすその拳はスルリと避けられ、避けようとするも見事にその攻撃を喰らってしまう。

状況を打開しようと魔法を使用するもその殆どの攻撃魔法は覚えられコピーされる。

「くそっ、どうすれば」

「終わりか？」

「——んな訳無えだろっ……。 (だけどうする…このままじゃジリ貧どころか不利

になるばかりだ。此処は魔法じゃなくてこの前覚えた技を使うべきか……」

「——!?!」

「何だ!?!」

相手を見据えながら思考の海に潜っているとそこに、大きな光と魔力の爆発を感知した。

目を向けるとなのは宙に舞い、力無く落下しようとしている。

「なのはっ!!」

「フェイトか……ま、当たり前だよなあ」

概ね原作通りだと言っても良い展開だ。なのははフェイトとの初邂逅時の戦闘では負ける。自分達転生者による歪みの発生は無く、問題は無い。

だが雄介の胸の中には大きなショックが、怒りがフツフツと湧き起こっていた。

「(なのはが……なのはが……)」

こうなることは予想して覚悟していたが、長い時間を一緒に過ごしてきたのだ。その大事な幼馴染みがやられているのを見てただただじっとしている事は出来なかった。

「何処へ行くんだあ?」

「勿論、アイツを助けに」

「それは無理だな……お前の相手は俺なんだか——」

そこで言葉は途切れる。

「(此奴……さつきまでと大違いだ。守りたいものがあるっていうのはこれ程まで変えるものなのか……)」

雄介の姿自体はそれほど変わりはないなかった。だが、注視すればその変化に気付く事が出来るだろう。

全身に白と黒の模様が浮き出ている肌は鱗状に、全ての歯は鋭く犬歯のように、背中、手首、足首には魔力出でできた透明の羽が出来ている。

その彼の様子は「稀少古代種」である「真竜」を想像させる程のものだ。

「……………」

その変貌に、迫力を前にして彼は動けずにいた。

「終わったよ」

そこにジュエルシードの封印を終えたフェイトが来る。

「それじゃあな」

そう言いながら背を向けて自分達の目的は達した、用は無いといった感じにその場から離れていく2人。

「はあぁ……」

大きな溜め息を吐く。

「なのははっ!？」

落ちていった彼女の方へと思い出したよう様に向かい走りだす。

既に先程の変化は消え失せ、いつもと変わらない彼の姿が其処にあった。

「どうしたの、その怪我？」

なのはを背負いながら戻ってきた雄介。

その雄介の服はポロポロで身体の至るところに擦り傷が出来ていた。

「ユーノを追いかけてるとなのはが転んでさ……それをかばってこのザマよ」

「ごめんね、雄介君」

「キユ」

『ブロン……』

『フェイトか』

『ああ。転生者も居た…彼奴はフェイトの兄だと自称していたが……』

『そうか』

『取り敢えず今夜、会議かな』

『——そうだな』

その夜。時間は22：00だろうか。良い子は寝ている時間だ。

『——フェイトの方は原作と対して変わらなかつたんだな』

『ああ、そうだ。……転生者の方は強い。俺の攻撃が簡単に避けられた……それだけじゃない。俺の滅竜魔法がコピーされた』

『マジかよ』

念話で俺は雄介、志蓮との3人で会話をしている。

重い目蓋を必死に開けながら起きていた最初の頃がとても懐かしく感じられる。

『魔法による攻撃は殆ど覚えられると思った方がいい』

昼の戦闘を思い出しか苦虫を噛み潰したかの様な感じに忠告をしてくる雄介。余程に悔しかったのだろう。声だけであつてもその気持ちが伝わってくる。

『其奴の能力、何て言つたけ?』

『ZERO』

『そうだ、ZEROだ。それは確か“アダム・プロジェクト”の』

『“NEEDLES”だつたつけ?』

『それってどんな作品なんだ?』

『簡単に言うくと超能力バトルものだ。フラグメントと呼ばれる特殊能力を使って戦う基本ギャグ要素のとても強い俺TUEEEEE作品だ』

『そうか……』

『念動力とかの強力な力を持つてるかもしれないな…使っていないだけで』

『兎に角、警戒する方針で』

『ま、結局だけど最終的には手を結ぶ事になるだろうけどな』

『——取り敢えず今日はこれで会議終了という事で』

『ああ』

『お休み』

『お休…zzzzzzzzzzzz』

自身が今打つかつている壁、雄介と戦った転生者。

悩みの種は尽きず増える一方だ。時間が解決してくれるだろうと思うがどうしても気になり、考えてしまう。

「考えても仕方がないよな……俺も寝よう」

寝室にて布団の中で身体を丸めながら目を閉じる。

出来るのであれば原作通りに、それ以上に平和に平穏に事が進み、無事事件が解決する様にと祈りながら俺の意識は睡眠という谷底へと落ちていった。

なのは敗北 海鳴温泉で魔法戦闘

「はああああああああああああああああああああ」

己の中に存在している気を爆発させ徐々に高めていく。その生命力である気はどんどんと大きくなり膨張する。

自身を中心にして身体から発せられるその大きな気は周囲の空気を大きく震わせている。

「かああああああああああああああああ……」

その、今解放可能な極限点にまで高めたその気は消え入るように小さくなっていく。

「——ダメか……」

先程まで周囲を明るく照らしていた金色で逆立っていた髪は黒色の髪へと、普段の髪型へと戻る。

「どうすれば良いんだ？」

目の前に見えている超サイヤ人^{スーパーサイヤジン}2の壁はまるで砂漠の真ん中で見える蜃気楼のように近くに感じられ、それと同時にとてもなく遠くに感じられる。

「今はこれくらいにおこうかな。今日は皆で温泉なのだから……腐☆腐」

その言葉を終えると同時に持っていく荷物を準備し始める。

戦闘力や気の扱いは関係ないのだろうが動きは俊敏で正確。次々と必要だと思うものを入れていく。

「パンツやシャツなどの着替えは必須…シャンプーは必要ないな、其処にあるものを使えば良いんだし。タオルは入っている…あとは財布かな」

あつという間に準備を終え、靴を履く。

「行ってくる…後のことは」

「任せろ」

真・四身の拳で創りだした分身に家事を、買い物を見せて家を出る。

「行くか……」

『なのは、旅行中くらいはゆっくりしなきゃ駄目なんだからね』

『わかってるよ。大丈夫』

なのははユーノのその気遣いに感謝の言葉を返しながら月村邸に先週で出会った彼女の事を、もう一人の魔法少女のことを思い出していた。

「うぶ…吐きそう……」

「かゆうま」

そんなのはを余所に俺の横に座っている2人の少年は走りだして直ぐに車酔いを起こしていた。

「吐くなよ、絶対だぞ」

「それフリだよな？ うぷ……」

「フリじゃねーよ。てか、なんで酔い止め用の薬飲んで来ないんだよ……」
「トロイア
使えよ」

「何回も使った所為か効果が無くなって……」

トロイアとは天の滅竜魔法の1つで対象のバランス感覚を養わせる事が出来る。だが、その魔法は使えば使うほど身体に抵抗できるのか効果が無くなっていくようだ。

「嗚呼……刻ときが……刻ときが見える……」

雄介の横に居る志蓮はもう駄目なようだ。目は死んでいて唇は真っ青になっている。

「——エチケツト袋は？」

「吐くなよ、袋用意するから我慢しろよ」

「うぷ……おえええええ」

「うぷ……もう駄目……もらいゲロしそう」

「やめろおおおおおおおっ!!」

何とか無事に海鳴温泉に辿り着く。

「大丈夫？」

「ああ」

「すまない」

雄介は勿論だが志蓮の方は酔った直後からか覇気が無く、声に力が感じ取ることが出来ない。

「あまり無茶をしないことだな」

「幼稚園に行つてた頃は車に酔つて無かつたのにどうしてだろう？」

その周囲の疑問に答える余力もないのか雄介は力無く項垂れている。

「取り敢えず部屋で横になってなさい」

「——わかつた」

敷かれた布団にゴロンと横になる2人。

「さて、俺達は風呂に行こう」

その士郎さんの言葉を機にぞろぞろと部屋から出て行く皆。

『しつかり体休めておけよ』

『ああ』

『わかってる。あと、原作通りならフェイト達が来ているはずだ。気を付けて』
『了解した』

「……………」

今俺とユーノは女風呂の方に入っている。男湯の方に行こうとしたのだが首根っこを捕まれ連行もとい連れて来られたのだ。

原作通りなのかもしれないがとても居心地が悪く感じられ、その為に喋ることが出来ずただ口を閉じているしか無いのだ。

「お姉ちゃん、背中流してあげるね」

「ありがと、すずか」

「じゃ、わたしも」

「ありがと」

姉妹の仲がとても良いということを感じさせてくる。

「ふふふ……………じゃあ、あんたはわたしを洗ってあげるね」

そう言いながらユーノを抱きしめるアリサ。

「心配ないわよ。洗うの上手いんだから」

その腕の中でバタバタと暴れるユーノに対してアリサは大丈夫だと笑いかける。実

はヒトだということを話したいがそれはこの先の展開の為にグツと我慢をする。

『ブ、ブロン…助けて』

その悲痛な救援サインを無視して俺は静かに移動し身体を洗い始める。

「ふう……………」

『ハアツ☆』

前世ではそれほど気にはいなかったのだがどこから洗うか拘っている人はやっぱり居るのだろうか。

「……………」

ゴシゴシと入念に力を入れ過ぎないように気を付けながら出来る限り丁寧に洗っていく。

シャワーから出て来るお湯はその身体に付いている泡を綺麗に洗い流す。

「尻尾を洗うのは…辞めるしか無いな」

今は微量な魔力で変身魔法を使用して姿を変えているのだ。

このメンバーならこの事を知られても問題は無いのだろうかやはりと言うか何と云うか心のどこかで恐れているのか話すことが出来ない。

「(今話すべきでは無いということだろうか…………)」

再度シャワーで身体に残っている汚れと泡を洗い流し、温泉に身体をゆつくりと入れ

浸かっていく。その温かさは早朝にしていた修行の疲れを吹き飛ばしていく。

「(温泉か…入るのは前世を含めると久しぶりだな)」

前世では同居していた祖父母と共に良く温泉に行っていた。

いろんな風呂があり、良く足湯の方に行っていた気がする。お湯の中は気持ちが良いのだが水圧の所為か苦しく感じていた。その為に、あまり自分から温泉に入りたいという気持ちは無かった。

だが、今はサイヤ人の身体であり、ある程度の水圧ならば苦も無く耐え、慣れる事が出来るからかそんな事は無く思う存分温泉を楽しむ事が出来る。

「それじゃお姉ちゃん、お先でーす」

「はい」

「なのはちゃん達と旅館の中探検してくるね」

「うん、また後でね」

「さ……行くわよユーノ、ブロン」

「キュ」

「わかった」

もう少し、じっくりと堪能していたかったが致し方がない。俺は澁々と温かいお湯の

中から着替えを置いてある脱衣所へと向かった。

「卓球しない？」

「えー、卓球？」

「わたし御土産見たかったんだよねー」

「……………」

3人はとても楽しそうにそれぞれのしたいことを、行きたい場所を話している。俺は特にこれといったものが無いので黙っているのだが。

「はーい、おチビちゃん達」

その会話の中に別の声が入り込む。目の前に居る女性が話しかけてきたのだ。

「君かね？ 家の娘をアレしてくれちゃってるのは？」

「え？ え？」

真つ直ぐになのはの方へと向かう彼女。

「あんま賢そうでも強そうでも無いし、唯のガキンチョに見えるだけどね〜」

「なのは、お知り合い？」

狼狽えるなのはを庇うように前に出て関係を尋ねるアリサ。

「知らない」

「この娘、貴方を知らないようですがどちら様ですか？」

「——アハハハハハハハ……ごめんごめん人違いだったかな……知ってる娘に良く似てたからさ」

「なんだ、そうだったんですか」

その彼女の言葉に安堵するなのは。

だがアリサは変わらず彼女に対して警戒しているようだ。

「可愛いフェレットだね」

「はい」

「よしよし、なでなで」

フェレット形態であるユーノを撫でる彼女。

『今のところは挨拶だけね』

「——!？」

彼女からなのか突然の念話になのはとユーノは少し目を見開く。

『忠告しとくよ……子供は良い子にしてお家で遊んでなさいね。でないとオイタが過ぎるとガブつといくわよ』

『その言葉そのまま返すよ』

なのはに向けられてはいるのだろうが俺は思わず間に入り彼女に対して念話をする。

『——あんたは?』

『俺が誰であろうと問題ない…お前の主も子供なのだからそれはブーメランだぞ』

その俺の言葉を聞いたからか、言いたいことを言ったからか彼女はその後を後にして離れていく。

「なーにあれ!?!」

「可怪しな人だったね」

「昼間つから酔っ払ってんじやないの?」

「まあまあ、寛ぎ空間だしいろんな人が居るよ」

「だからと言って節度つてもものがあるでしょ、節度つてもんが」

自身が絡まれた訳でもないのに怒っているアリサを宥めるなのは。立場が逆なのではないのだろうか。

『あー、もしもしフェイト…:…此方“アルフ”』

『うん』

『ちよつと見てきたよ、例の白い娘』

『そう、どうだった?』

『うーん? まーどうってこと無いね。フェイトの敵じゃないよ』

『こつちもちよつと進展……ジュエルシードの場所、大分特定できたよ。今夜には捕獲できると思うよ』

『んー、ナイスだよフェイト。流石わたしの御主人様』

『うん、ありがとうアルフ。夜にまた落ち合おう』

『そう言えばあの白い娘の所に妙な男の子が居てさ……わたしに念話してんだよ』

『男の子？　もしかしてお兄ちゃんと戦つてた』

『なんかそいつすごい気迫でさ……ま、取り敢えず夜に』

『うん……夜にね、アルフ』

念話を終えて改めて湯船に浸かるアルフ。

「うーん」

伸びをしている彼女の頭には本来ヒトには無いはずのものが、犬の耳が付いていた。

「あら、ファリンちゃん。子供たちもう寝た？」

「もうぐつすり」

「ありがとね、ファリンちゃん」

「いえいえ、好きでやつてることですから」

『ユーノ君、雄介君、志蓮君、ブロン君起きてる？』

『うん』

『勿論だ』

『ああ』

『起きてるぜ』

そのなのはの呼びかけに俺達は布団をゴソゴソと動かしながら念話で応える。

『昼間の人、この間の娘の関係者かな？』

『多分ね』

昼間の人というのはアルフのことだろう。念話での忠告、家の娘をアレしちゃってく
れてなどといった言葉から魔法関係の存在だというのは予想することが出来る。

『また、この間みたいになっちゃうのかな……』

『多分……なのは、僕ね……あれから考えたんだけど……やっぱりここからは僕が』

『ストツプ、そこから先言ったら怒るよ。ここからは僕1人でやるよ、これ以上皆を巻
き込めないからとか言うつもりだったでしょ』

『……………』

『ジュエルシード集め、最初はユーノ君のお手伝いだったけど今はもう違う。わたし
が自分でやりたいと思ってやってることだから。1人でやりたいなんて言ったら怒る

よ』

なのはのその言葉は怒ると言いながらもどこかユーノのことを思っているのか優しさを感じ取ることが出来る。

『俺もそうだな』

『俺も俺も』

『同じく』

『少し眠つとこ、今夜にもまた何かあるかもしれないからね』

『うん』

そのなのはの言葉に俺達は目を閉じる。

静かになった部屋の中で俺はまた脳内でイメージトレーニングをすることにした。

「ふう……」

イメージするのはどのような衝撃にもどのようなモノにも耐えることが出来る空間。
相手は超サイヤ人2スーパーサイヤジンに覚醒した“孫悟飯”さんだ。覚醒したというが、覚醒して直ぐのように興奮しているわけではなくブウ編の時のように落ち着いている状態のだ。

「宜しくお願ひします」

「お願いします」

俺の服装は孫悟空さんと同じ山吹色の道着だ。違いといえば丸の中に悟や界、亀などといった文字ではなく転生者の転という字が書かれている。

開始の合図などというものは無い。どちらかが動けばそれが試合の開始なのだから。先に動いたのは悟飯さんの方だ。

まだ超サイヤ人スーパーサイヤンになっていないからなのか速さは言うほどではなく対応できるスピードだ。

「ダリヤリヤリヤリヤリヤ」

右手、左手と次々と繰り出されるそのパンチを回避していく。目で追う前に気を感じ取ることでその動きに対応し避けることが出来ているのだ。

「今度はこっちの番だ」

その言葉と同時に俺もまた同じようにパンチを繰り出していく。その攻撃によって彼の髪をかすめ、数本の髪の毛が宙を舞う。

「——!？」

『みんな!』

『分かってる』

『大丈夫、急ごうユーノ君』

意識が深い所に居たからか、ジュエルシードの発動により沈んでいた意識が無理やり表に引つ張つてこられたからか少しばかり気分が悪い。

だが、それを現状が許してくれる訳でもなく俺はなのは達と一緒に部屋から静かに飛び出してジュエルシードのある場所へと走って向かうこととした。

「うっはー、凄いなこりゃ。これがロストロギアのパワーってやつ?」

「随分不完全で不安定な状態だけどね」

「あんた達のお母さんはなんであんなもの欲しがるんだらうね」

「研究者だからいろいろと調べたり、使ったりするんじゃないやね?」

「理由は関係ないよ…母さんが欲しがってるんだから手に入れないと。バルディツ

シュ、起きて」

【Yes, sir. Sealing form Set up】

「封印するよ、アルフサポートして」

「へいへい」

「2つ目……」

発動したジュエルシードの場所に辿り着くことが出来たが時既に遅く、ジュエルシードは既に黒い魔法少女が封印していた。

「あーら、あらあらあら」

「あつ!？」

「子供は良い子でつて言わなかったか？ それにさあたし親切に言ったよね……良
い子でないとガブつといくよつて」

その言葉を終えると同時に彼女の姿は大きく様変わりする。

「やっぱり、あいつあの娘の『使い魔』だ」

「使い魔？」

「そうさ、わたしはこの娘につくつてもらった魔法生命。製作者の魔力で生きる代わ
りに命と力のすべてを掛けて守つてあげるんだ」

「魔法生命か……やはり魔法関係者だったんだな」

「あんたは!？」

その俺の言葉にアルフは驚くと同時に合点がいったのか此方を強く睨んでくる。

「ジュエルシードをどうする気だ。それは危険なモノなんだ」

「それがどうした？ 答える理由は無いら、言うつもりもないぜフェレットさんよ」

彼女の、フェイトの横にいる少年は此方を挑発するかのようにな俺達を見下げながら言

葉を放つ。

「——この前の奴じゃねえか：凝りもせずまた俺にやられに来たのか？」

「くっ」

その言葉に雄介は動揺したじろぐ。

「へえ、そいつの事だったのかい。わたしはてつきりアイツの事かと思つてたよ」

「俺に任せてくれれば全て簡単に解決して」

「いや、此処は俺に任せてくれ雄介」

志蓮の言葉を遮り俺は雄介の、なのは達の前に立つ。

「お前が俺の相手を？ やめとけ、魔力も祿に無いじゃないか：恥をかくのが関の山だぞ」

「そうかな？ やってみなきゃ分かんねえぞ」

「それじゃ、俺達はあの使い魔と戯れ合うってことか」

「なのは、あの娘をお願い」

「させるとでも思つてんの？」

「させてみせるさ!!」

「移動魔法？ マズイッ!!」

なのはの肩から飛び降りてアルフと雄介、志蓮を連れてユーノは離れた別の場所へと

移動する。

そこに残されたのは俺となのはとフェイト、そして不遜な態度を取る少年の4人だけだった。

「結界に『強制転移魔法』……。良い使い魔を持っている」

「ユーノ君は使い魔つてやつじゃないよ。わたしの大切な友達……。話し合いでどうにか出来るつてことない？」

「私はロストログアの欠片を、ジュエルシードを集めないといけない。そして貴女も同じ目的なら私達はジュエルシードを懸けて戦う敵同士つてことになる」

「だからそんなことを簡単に決め付けないために」

「言葉だけじゃきつと何も変わらない……。伝わらない」

「——!？」

その瞬間目の前の彼女の姿は消え失せ、なのはの後ろに移動していた。

「それじゃ、俺達も始めようぜ」

「良いのかよ？ そうか、無様な姿を見せたくないつてことか。負けてからでも見せることになるけどなあ」

「魔法だけが全てじゃない。魔法の強さが、レアスキルの強さが戦力の決定的戦力差

でないことを教えてやる」

その言葉と共に足を踏み出す。大地を強く蹴り、彼の懐に飛び込む。強く握りしめたその拳で彼の顎を殴りつけた。

「がッ!？」

彼は何が起きたのか分からない、信じられないといった表情で足元に居る俺を見下ろす。

「お前……一体何を？」

「ただ移動して殴っただけだ」

「クソッ」

彼のその振り上げた拳を軽く避けてみせる。

その攻撃は空を斬り、俺は既に最初の場所へと戻っていた。

「……ハハッ……ハハハハハハハハハハハハハハハハ——良いぜ、お前は彼奴より強い。俺が力を解放するだけの相手だっただけのことを認めてやるよ」

その瞬間俺の身体は動かなくなった。ウントもスントも動かすことが出来ないのだ。

「何だ、これは!？」

「『サイコキネシス』さ。この力はな、自分の何十倍もの大きさのビルを、高層ビルを持ち上げることが出来るんだぜ。いくら筋力が強かろうと、どれほど魔力が多くて身体

能力を強化したところで無駄なあがきなんだよ……オラツ！」

身体を足で強く蹴り飛ばされる。かなりの距離を跳び、木々を薙ぎ倒し地面を削つていく。

「痛つつつつ」

ある程度飛ばされ、落ち着いた所で立ち上がる。

蹴られた腹部が地味に痛みを発している。

「この力、*「パワー」*のフラグメントで強化してるな」

「御名答……さくて、お次はこれだ」

「オゴツ!!」

再び強烈な痛みを感じる。今度は腹部だけでなく身体中を、顔から肩、手や足にだ。目で追うことの出来ないその攻撃にただなされるがままである。

「(スピードのフラグメント……この速さはブラックバードか)」

——*「ブラックバード デイーンドライブ B・B」*。それはマツハ3のスピードで敵を攻撃する超速

の技だ。加速時は反射神経も速度相応になるため、音速を超越しながらも精密に相手の弱点などを攻撃していくことが出来る。

「次にこれだ。*「アキト 雷竜の顎」* おおお!!!」

電撃を両手に纏わせて拳を合わせ、叩きつけてくる。その攻撃は威力ではなく、電撃

により俺の身体は痺れて上手く動かすことが出来ない。

「ハハッ、手も足も出ないってか？」

「フツ」

その彼の言葉に俺は思わず笑ってしまふ。

「何が可笑しんだよ」

「別に。相手の魔法やレアスキルを修得する。なるほど……それはとても厄介だ。とてもとても厄介で、また強烈な能力だ」

「……………」

「だが、それだけだ。お前、格上相手に戦ったことないだろ？」

「……今、そんなの関係ないじゃねえか」

「あるんだよな……」

「あ？ 何だった？」

「サイヤ人の恐ろしさを教えてやろうかと言ったんだ」

その瞬間、その場は真昼のような明るさを取り戻す。その光は局所的に周囲を照らしながら辺りに存在している動物の本能に強く訴えかけていた。

逃げろと。

「お、お前……その姿」

「……………」

姿事態はそれほど変貌してはいない。だが、髪の毛が逆立ち、金色になっている。

この変わり様、変身を知らない転生者はどれほど居るのだろうか。

「す、ス……超サイヤ人……」

「そうだ」

俺はただ静かに頷き、それに答えるだけ。

その放たれる威圧感は自然と幻覚などではなく、実際に目の前に存在している、現実のことだと彼の心に語りかける。

「だ、だが……動きを封じてしまえば」

その彼の言葉と同時に俺の身体に違和感が生じた。サイキネシスで動けなくしたのだろう。

「無駄なんだよ、無駄無駄。そもその戦闘力に差があるんだ……そういった能力は強いが格下にしか通用しない」

そう言いながら体内の気を外へと開放し、爆発させる。

そうして、目の前の彼を吹き飛ばし、俺は身体を動かしてみせる。軽く飛び跳ねてジャンプをしたり、シャドーボクシングをしてみせる。

「それは身体を動かせないようにするだけだろ？ そんなんじゃ駄目なんだよ」

「か、勝てない……今の俺じゃあ。今の俺どころでは無い。逆立ちしたとしても勝つことは出来ない。もうだめだあ……おしまいだあ」

そんな様子に目の前の彼は両膝と両手を地面につき、頭を項垂れる。

そんな彼を前にして俺はスツと何時ものように、修行後の何時もの様に変身を解く。

「お前は凄いや。俺が転生してから超サイヤ人^{スーパーサイヤン}に変身させた奴なんて1人も居なかつたんだからな……名前は？」

「ドウム……ドウム・テスタロツサ」

「ならばドウム、顔を上げろ。誇れよ、お前は凄いな……そうだ」

「懸けて……それぞれのジュエルシードを1つずつ」

「Photon Lancer Get set. Thunder Smash
er」

フェイトのデバイスによる攻撃を避けたのはに対して直線的な魔力攻撃を放つ。

「Diving Buster」

レイジングハートから放たれた魔力砲撃はThunder Smasherとぶつかり合う。

「レイジングハート、お願い」

【All right】

その言葉と共にDivining Busterの威力は増し、フェイトの攻撃を押し返していく。

【“Scythe Slash”】

なのはの砲撃を避け、フェイトは上空から近づき魔力刃をなのはの首元に持つていく。

寸止めだ。

ギリギリの所で攻撃を止めて、様子を見ている。

魔力に宿っている電撃がビリビリとしており少しでも動けばなのはの首が切れてしまうだろう。

【Put out】

その瞬間、レイジングハートから封印されたジュエルシードが放出される。

「レイジングハート、何を？」

「きつと、主人思いの良い子なんだ」

出されたジュエルシードはフェイトの手に握られる。

この戦いはフェイトの勝利に終わった。

「ちよろちよろちよろ逃げんじや無いよ」

林の中をユーノとアルフは走っている。そのアルフの様子はまるで小動物を狩ろうとしている大型の肉食動物のようだ。

「使い魔をつくれるほどの魔導師だ…なんでこんな世界に来ている？ それにジユルシードについて、ロストログアについて何を知っている？」

「^ぶこちゃ^ぶこちゃ煩い」

「遠くから見るとトムとジエリーみたいだな」

「俺達、要らない子じゃね？」

「言うな」

アルフに無視をされて離れた場所から見えるその光景はまるで弱肉強食の世界を表しているかのようだ。

だけど、そんな光景に対して原作という名の預言書を持つ彼等にはどうしてもおもしろい光景にしか映らなかった。

追いかけるアルフに対して必死に逃げながら時折繰り出される攻撃を避けていくユーノ。

そこに空の方で大きな魔力光が光るのが目に入る。

「なのは、強い」

「——でも、甘いね」

「帰ろう……アルフ、お兄ちゃん」

「さっすがあたしの御主人様。じゃあね、おチビちゃん」

「フンッ」

「待つて」

立ち去ろうとする彼女に対してなのは呼び止める。

「出来るならもうわたし達の前に現れないで……もし次があったら今度は止められないかもしれない」

「名前、貴女の名前は？」

「フェイト…… // フェイト・テスタロツサ」

「私は——」

なのはの言葉を聞き終えること無くその場を離れていくテスタロツサ兄妹とその使魔。

その場に残されているのは戦いに負けた一人の少女と一匹の小さな男の子、そして三人の転生者だけだった。

街中での強制発動 暴走するジュエルシード

ここは何処だろうか。真つ暗でよくわからない。

ただ道路の真ん中だということだけは理解することが出来る。

周りには人つ子一人居らず動物の気配もない。

道路だというのに自動車などの車1つすら駐車されていない。

上の方を見上げてみる。そこは空だということを理解できて、赤い月が2つ存在していた。

「!?!」

急に後ろの方に気配を感じる。かなりの距離があり、遥か後ろのほうだということが自然と理解できた。

その気配は段々と近づいていく。

まだかなり距離があるというのにその何かの足音だろうか、ヒタヒタという音が鳴り渡っている。

何故かその存在に追いつかれてはいけないと気がして俺はその場から前へ歩き離れていく。

「……………」

その足音は相変わらず聞こえ続けて、確実に此方を追い続けてきている。不気味だ。

何も存在しないはずの場所に、俺以外が存在しないはずの場所に得体のしれない何か、意味の分からない何かが存在しており、此方を追いかけてきているのだから。

何が目的で、どういった理由で来ているのかは良くわからないが追いつかれるのは不味いという事は本能で理解することが出来る。

その足音は一定間隔のリズムを刻みながら確実に此方との距離を縮めてきている。

「ッ!!」

俺は思わず走りだした。

走る。疾走る。はしる。ハシル。

風を切り、全力で足を動かしてひたすら逃げ続ける。

するとその後ろの存在もまたスピードを増して追いかけて来る。

走り続けていると相手もかなりの早さで追いかけてきているのだが、そいつ等は走っているのではなく歩いていて、ということが理解出来る。

何故ならそれは未だにヒタヒタという音をゆっくりと鳴らしながら近付いて来ているのだから。

そしてその足音以外にも何かの音が聞こえてきた。ピチャピチャとした、グチャグチャとした得体の知れない音が。

それが更に不気味さを感じさせて、俺は更に足に力を入れて走りだした。それでも距離を取ることが出来ず、その後ろの存在は追いかけて来る。

どれくらい走ったのだろうか。

実際のところはそれほど時間が経っていないくて、2分や3分なのかもしれない。けど同じ所をグルグルと廻っているかのように同じ景色が続くだけでそれが原因なのか、感覚的にはかなり走ったかのように、20分走り続けているかのように感じる。

ふと後ろの方が気になった。

それまで不気味に感じていた何かが居なくなったのだ。そう感じたのだ。

だから俺は足を止めて振り返った。

振り返ってしまった。

「!？」

だが其処には血みどろで身体がグチャグチャになった2人の少年らしき存在が居た。

「」

その何かがブツブツと呟いている。

それは段々と近づいてきて声もハッキリと聞こえてくる。

近づいてくるだけそれから放たれる声が大きくなり、血の匂いがキツくなり、見るに耐えないグチャグチャとなった肉が鳴らしている音が嫌にハッキリと大きく感じられる。

「——お前の所為だ」

「——お前が悪いんだ」

「——お前が殺した」

「——よくも」

そんな呪詛のような言葉が、声はその少年から。否、周囲から聞こえ始めてくる。耳を塞ごうにも何故か塞ぐことが出来ず、ただただ聞き続けることしか出来ない。目を塞ごうにも目はしっかりと開かれており閉じたたくても閉じることが出来ない。

鼻を摘もうとしても手は動かすことが出来ず、血の匂いを、鉄の匂いを嗅ぎ続ける他ない。

「止めてくれ」

声に出してその言葉を拒否しても未だに聞こえ続けている。

目の前の、その2人の男の子らしき何かは俺に飛び掛って来る。

「!? ——はあ……はあ……はあ……はあ……はあはあ」

悪夢。

嫌な夢だった。

よく覚えては居ないが本当に嫌な夢だ。

気持ちの悪い汗が流れて身体とシャツが引っ付いている。

「何だったんだ一体？」

その気持ちから逃げるように俺はまた布団にくるまり、目を瞑る。

だが、頭は覚醒しており、しっかりと目が覚めていた。

「仕方ないか」

俺は布団から抜けだしてパジャマのまま浴室へと向かう。

部屋を出る前にチラッと確認すると時計は朝の3時を指していた。

「……………」

身体を流れていくお湯が、シャワーから出ているお湯が心地よく思わず目を細めてしまふ。

それは先程までの不思議で、不気味で、嫌な気持ちだった気持ちを洗い流してくれているような錯覚を感じさせてきた。

ずっと流し続けている所為か、浴室は蒸気が溜まり湯気で周りがよく見えなくなっている。

それはまるで自分の今の状態のように感じさせると同時に何処かそれが他人事のようにも感じられた。

「ふう〜」

風呂から出て、普段着に着替えた後はこの家に置いてあつた扇風機の電源をいれてその前に座る。

修行や風呂などの後に回っている扇風機の前に座るととても気持ちがよく感じるのだ。

「あああああああああ」

思わず扇風機の前で意味のない言葉を口にする。

その言葉は、音は震えてどこか自分じやない誰かの言葉。まるで宇宙人が頑張つて日本語を、地球の言葉を話しているかのように思わせてくるのだ。

それが何故か楽しく、面白く感じられ続けてしまう。

子供のようだと思いつながらともそれを止めることが出来ず、無意味に10分ぐらいそれをしながら遊んでいた。

「ま、今のこの体は子供だけだな」

時刻を確認すると時計の針は4を指していて普段ならそろそろ起床して修行を開始する時間だ。

だが、今日はそんな気持ちが出て来なくて俺は自分用だと決めた自室に置いてあるデスクトップ型のパソコンを起動してインターネットを開く。

「今日のアニメは……」

何時もなら真・四身の拳での分身体のうちの一体が観ているのだが、今日は修行する気が無いのでこのままアニメを視聴することにした。

「相変わらずくだらないのに何故か笑ってしまっただよな」

くだらないことほど不思議と笑えてしまう。それだけ充実しているということだろうか。

そんな取り留めもない事を考えながら今日の分のアニメのノルマを消化していく。

相も変わらず、前世と全く同じで俺THUEEEモノやハーレムものばかり視聴している。

実際のところ前者の方は叶っており、後者の方はただ羨ましいと思うだけで叶えたいと思うことは全く無いのだ。

実際にそうになったら今でさえ大変なのに日々を生きていくのに心労が絶え無さそう

だから。それどころか増えそうなのだから。無尽蔵に、ただ増殖していくような気がしてならない。

だからこうして現実と2次元を区別して見ているだけで充分なのだ。

だが最近、現実と2次元の区別が曖昧に感じてきているかのようになり始めてきた。

ここは、この世界は前世ではアニメの世界で、2次元の世界だった。だが今、俺はその世界に来て、それが現実になっている。俺は2次元の世界に来たのか、それに限りなく近い現実の、3次元である並行世界に来たのかわからなくなる時が本当にあるのだ。

転生時に並行世界の一つである異世界だと説明は受けた筈なのに、だ。

「ま、いつか」

そんな堂々巡りではないが意味の無いであろう考えを振振り切り俺は朝食の準備を、弁当の準備に取り掛かることにした。

「こんなものかな」

出来上がったものをちよつとずつ取り上げて弁当にチヨコチヨコと入れていく。勿論色映えなどを考えながらだ。食べる時に蓋を開けて、気持ちの良い気分で食べたいのだから当然であろう。

「続きだ」

自室へと赴き、スリープモードにしていたパソコンを再び触る。

次に観るのはアニメでは無くてMADなどが投稿されている動画サイトだ。このサイトにはアニメなどのMAD以外にも音楽などが投稿されている。中には権利者の申し立てなどで削除されたりする動画、違法に挙げられた動画なども存在しているが基本的には面白可笑しく楽しむためのサイトなのだ。中でもこのサイトには動画視聴中にコメントを投稿することが出来て、そのコメントが動画内で流れるという画期的な技術が存在している。これを始めてみた時は驚くと同時に感動を覚えたものだ。

前世でも似たようなサイトはあったが此処までそっくりなものは見たことが無かった。

だからその分感動をより強く感じる事が出来た。

「さてと、そろそろ登校かな」

パソコンに内蔵されている時計を確認すると7時過ぎと表示されており、俺はランドセルに今日の教科の分の教科書やノート、勿論筆記用具に先程準備した弁当を入れる。腕にデバイスを装着して、変身魔法で周りには気付かれないように。

真・四身の拳で分身をつくりだして、それぞれの役割を確認する。

「さて、行くとしますか」

時刻は7時25分。歩いて行けばバスがタイミングよく来る時間帯だ。

「いい加減にしなさいよ!!」

穏やかで賑わっていた教室の中で一際大きな怒声が鳴り響く。

それまで盛り上がっていた生徒たちは何事かと思いいその原因の方を向くもそれも一時的なもので結局は再び元の盛り上がりを取り戻していく。

「この間から何話しても上の空でボーっとして」

だがそんな中でも変わらずに御立腹な人物が一人居た。大声を出した張本人である少女は親友である一人の少女の態度に腹を立てているのだ。

「あ……う……。ごめんね、アリサちゃん」

「ゴメンじゃない。あたし達と話してるのがそんなに退屈なら一人でいくらでもボーっとしてなさいよ」

相当頭に来ているのかアリサは言葉をぶつけ終えると教室から立ち去る。彼女の歩く様はまるで床を揺らすように力強く、その怒り様が伝わってくる。

「なのはちゃん……」

「いいよすずかちゃん、今のはなのはが悪かったから」

横で2人を見つめ心配しているすずかに対してなのはは力無く微笑む。

「そんなこと無いと思うけど。取り敢えずアリサちゃんも言い過ぎだよ。少し話して

くるね」

そう言うのとアリサを追いかけて教室から出て行くすずかに、先に出て行ったアリサに対してなのはごめんねと謝ることしか出来なかった。

「怒らせちゃったな」

「——そうだな」

俺と雄介はそんな申し訳無さそうにしている彼女に、怒っているアリサに、その2人の中でどうすればいいのか悩みアタフタとしているすずかに対してどうするべきなのか頭で考えていた。

『此処は励ますべきなのだろうか、放っておくべきなのだろうか』

『放っておいても問題は無いだろう。時間が解決……いや、自身で気付いて何とかするだろうし』

前世で見たアニメの展開ではそれぞれがそれぞれの考えで、自分で気づいて解決していた。

だが、この世界ではそのように上手くいくのか、良い方向に事が運ぶのかどうか非常に心配なところなのだ。

「何で、アリサは怒ったと思う?」

「心配かけているのは分かってるけど、今やっていることをアリサちゃん達には話せない

いし……」

ゆつくりとした感じで雄介はなのはに問いかける。

その質問は何処か自身で悟らせるかのように優しく、穏やかな感じの声をしていた。

「ここは幼馴染みに任せるか。ホワブロンはクールに去るぜ」

そんな捨て台詞を吐きながら俺は教室という喧騒の中から抜け出し、アリサ達がどうしているのか見に行くことにした。

「アリサちゃん」

先に出ていたアリサに追いつき声をかけるはずか。

そこは1階と2階を繋ぐ階段で他の生徒の姿は見受けられずとても静かな場所だ。

「何よ?」

その応えたアリサの声は如何にも不機嫌ですと言わんばかりに低かった。

「何で怒ってるのかなんとなくわかるけど駄目だよ。あんまり怒っちゃ」

そんな彼女に臆すること無くすずかは宥めるようにアリサに向かい会話を投げかける。
る。

「だってムカつくわ。悩んでるの見え見えじゃない……迷ってるの、困ってるの見え

見えじゃない。なのに……何度聞いても私達に何も教えてくれない」

「……………」

「すずかはその言い分には同じ気持を抱いているのか止めることも否定することも出
来ない。」

「悩んでも、迷ってもいないなんて嘘じゃん」

「どんなに仲良しの友達でも言えない事ってあるよ。なのはちゃんが秘密にしたいこ
とだったら私達は待つてあげられしか出来ないじゃないかな？」

その2人の言葉は、瞳は真剣にもう一人の友達の事を、なのはの想っていることを現
していた。

「だから、それがムカつくの。少しは役に立ってあげたいのよ」

「自覚をしている分、しているからこそだろうか。アリサは大事な友達が悩み、苦悩し
ているのを見ているだけなのだが力になれず無力であることが歯痒く、とても悔しく、
やるせないのだろう。」

「どんなことだって良いんだから。何も出来ないかもしれないけど、少なくとも一緒
に悩んであげられるじゃない」

「うん。やっぱりアリサちゃんもなのはちゃんの事が好きなんだね」

「そんなの当たり前じゃないの」

照れながらも全力で肯定するアリサにすずかは優しく微笑んだ。

そんな様子を俺は遠くから見つめている。ひっそりと、物陰に隠れて彼女達の事を伺っていた。

「(優しい娘達だ。本当に恵まれているな、なのはは)」

俺は足音を立てないように気付かれないように気配を殺しながらゆつくりとまたその場を後にした。

「あの娘が居たからわたしは独りぼっちじゃ無くなったんだ」

揺れる風の中、屋上でアリサとすずかは街を見下ろしながら少し前の事を、2年前の出来事を思い出す。

「——そうだね。わたしもだよ」

少し前、というが彼女達にはそれがそれなりに昔の事のように思えてしまっていた。

「なのはちゃんが居たからわたし達友達になれたんだよね」

終了のチャイムが鳴り渡る。今日の授業は終わり特にこれといって用事の無い生徒は帰宅をする時間だ。

「じゃ、なのはちゃん。ごめんね。今日はわたし達お稽古の日だから」

「夜遅く迄なんだよね？ 行ってらっしゃい。頑張つてね」

教科書とノートを抱に入れながら激励の言葉を述べるなのはを教室に残してアリスは廊下を歩く。

「大丈夫だからね」

「うん。ありがとうすずかちゃん」

そんなアリスの後ろ姿を見ながらすずかはなのはに優しく声を掛ける。

その言葉は何に對してなのだろうか。なのはが悩んでいることを話さなくても良いということなのか。アリスは実はそれほど怒っているというわけではないということだろうか。直ぐに仲直りが出来るということだろうか。

なのははただそんなすずかの言葉に感謝の意を表すことしか出来なかった。

その帰り道はとても寂しく、暗いものだった。

落ち込んでいるなのはを志蓮は励まそうとするが効果は無く、自分の世界に閉じこもるなのは。

『で、どうするんだ？ 雄介？』

『結局放置することにしたよ。自身で気づいて欲しいし』

そんな事を考えているとなのはは何時もの帰り道から逸れて別の方向へと向かって

いく。

「大方、今の顔を見られたくないから寄り道しようとも思ってるんだろ(うな)」
そんななのはの背中はとても寂しそうであり、消えそうな気がした。

俺達は彼女を放っておくことが出来ない。だが何かをしてやれるという訳でも無く、ただ付いて行くことしか出来なかった。

塾へと向かう車の中でアリサとすずかは静かに、それぞれ窓際に座っていた。

外は車の排気音や人の声などで騒がしいが中はお互いに黙っているからかとても静かだ。

「初めて会った頃はさ……わたし、今よりずっと気が弱くて思ったこと全然言えなくて。誰に何を言われても反応出来なくて……」

暫く続いていた沈黙に耐えかねたのかそれを破りすずかは独白する。

「わたしは我ながら最低な娘だったけね。自信家で、ワガママで、強がり。だからクラスメイトをからかってバカにした。心が弱かったからね」

そんなすずかにアリサもまた自らの過去のことを述べる。

「わたしも弱かったからちゃんと言えなかった。それはすごく大切な物だから返してって」

「止めなよって言われても聞かなかった。他人の言う事素直に聞いたら何かに負けちゃう気がしてたから」

過去の自分を認めながらもそれを否定せずに過ちを認める。そんな難しくも当たり前の事をしながら初めて出会った時の事を思い出す。

「あの時なのはちゃん、何て言っただっけ？」

「痛い？ でも大事な物を取られちゃった人の心はもともっと痛いんだよ」
「そうだったね」

「(アリスちゃんとはその後大喧嘩になったけ…それを止めてくれたのが)」

「事の発端の酷く大人しい娘」

「あの時は……だって必死だったんだよ」

その事を思い出して恥ずかしがりながら特に否定することもなく俯くすずか。

「それから少しづつ話をするようになって行っただっけね」

「そう。3人、ううん。なのはちゃんの幼馴染みの雄介くんとも友達になって志蓮くんが盛り上げてくれて。ブロンくんが転校してきて」

「で、すずかはその昔話を切っ掛けにわたしに一体どうさせたい訳？」

「理解つてる癖に」

「わたし達に心配させたくないだけだつてくらいわかつてるわよ。多分わたし達じゃあの娘の助けにならないって事も。待つてあげるとか出来ないなら……じゃあ、私はずつと怒りながら待つてる。気持ちを分け合えない寂しさと親友の力になれない自分に」

「意地つ張り」

「フンだ」

アリサの瞳には決意が満ちていた。大事な友を待ち続ける事、自ら明かしてくれろことを信じ待つという決意が。

とあるビルの一室。

陽も沈みかけ太陽の光が部屋に差し込んでくる。

「ううん、こつちの世界の食事もなかなか悪くないよね」

アルフはそう言いながら皿からスプーンで口に入れていく。

「それは良かった。だが、ヒトの形態でいるのならドッグフードを食べるのは止めろ」そんなドウームの言葉は聞こえていないのかアルフは尻尾を大きく振りながら食事に勤しみ続けている。

「さて、家のお姫様はっ」と

自身の主であるフェイトの居る部屋へと向かうアルフ。

食べ物に満足したからかその足取りは軽い。

「ああつ！ また食べてない。駄目だよ、食べなきゃ」

「少しだけ食べたよ」

そのフェイトが横になっているベッドの側には殆ど手が付けられていないであろう食事が置かれていた。

「大丈夫。……そろそろ行こうか。次のジュエルシードも大まかな位置特定は済んでいるし。あんまり母さんを待たせたくないし」

「それはわかるが飯はちゃんと食べろ。広域探索の魔法は身体に与える負担が大きい。この世界には腹が減っては戦ができぬという諺というものがあるらしいしな」

「大丈夫だから」

「リニスが居たら何て言うだろうな？」

「大丈夫——」

「……………」

そんなドウームの言葉に、無言の圧力に耐えかねたのかフェイトは渋々といった感じにスプーンを手に取り食事を口にす。

すると余程お腹が空いていたのか小さな可愛らしい音が部屋に鳴り響く。

「……………」

赤面しながらもフェイトは夢中になって食事を摂っていた。

「そろそろ帰らないと」

「大丈夫だよ、僕が残ってもう少し探しておくから」

門限なのかなのはネオンが光る街の中でジュエルシードの探索を中止することにした。

「うん。ユーノくん一人で大丈夫？」

「平気。だから晩御飯取っと言ってね」

「俺も一緒に探そう」

動物体であるユーノ。彼は遺跡の調査などで探すことは得意な方かもしれないが身体は小さい為に苦労することが多いだろう。

その分、俺が力を貸すことでジュエルシード探しが楽になるのなら嬉しい。幸い、俺の家は俺の分身体しか居ないので遅くならうが何の問題もないのだ。

「だが、もう一人居てくれれば更に楽になるのだが……」

「……にいますぞおー！」

そんなワザとらしい俺の言葉に雄介はのってくれて、一緒に探すことになった。

高層ビルの屋上。少年と少女、そして一匹の計3つの影が降り立つ。

「だいたいこの辺りだと思っただけ。大まかな位置しかわからないんだ」

「確かにこれだけゴミ、ゴミしていると探すのも一苦労だね」

そんなフェイトの言葉に同調しウンウンと頷くアルフ。

「ちよつと乱暴だけどこの辺に魔力流を打ち込んで強制発動させるよ」

「ああ待った。それあたしがやる」

今にも魔力を流しそうな主人を制してアルフは自らが前に出る。

「大丈夫？ 結構疲れるよ」

「このわたしを一体誰の使い魔だと？」

その言葉はアルフが主の実力を知っており、その使い魔であることを誇りに思っているからかとても強く、同時に頼もしいとフェイトは感じた。

「じゃあお願い」

「そんじゃ」

その了承の言葉と同時に彼女の獣の体から大きな魔力が迸る。放たれた魔力は天へ昇り、月は雲に隠される。

遙か上空、雲の上では更に上に存在している雲から雷がゴロゴロと鳴り響き地上に落ちる。

「こんな街中で強制発動!?!」

なのはと別れるとほぼ同時にその魔力を感じる。

「ユーノ、結界を」

「わかつてる。間に合えっ!!」

「レイジングハート、お願い」

魔力の波動を感じ、なのははバリアジャケットを展開する。彼女の服は分解され、白を基調とした防護服へ変更された。

「見つけた」

「けど、あっちも近くに居るみたいだね」

なのはの魔力を感じ取りそちらの方を見据える。

「速く片付けよう。バルディッシュ」

【Sealing Form Set up】

「あー！」

なのは目の前にはジュエルシードから放たれている魔力が、光が見えていた。

『なのは、発動したジュエルシードが見える？』

『うん。すぐ近くだよ』

『あの娘達も近くに居るんだ。あの娘達より先に封印して』

『うん、わかった』

それぞれのデバイスから放出される魔法がジュエルシードに命中する。

「リリカル、マジカル」

「ジュエルシード、シリアルXIV」

「封っ」

「印っ!!!」

ジュエルシードの封印は瞬間的なものとはいえ、それは同時に行われた。

封印された青い宝石は光を放ちながら空中に浮遊している。

「（アリサちゃんとはずかちゃんとも初めて会った時は友達じゃなかった。話を出来なかったから、分かり合えなかったから。アリサちゃんに怒られてのもわたしが本当の

気持ちをも、思っていることを言えなかったから)」

「やった。なのは、速く確保を」

「——そうはさせるかいっ!!」

駆けつけたユーノに対してアルフは勢い良く飛び掛かる。

だが、張られたフィールド系の防御魔法に跳ね飛ばされる。

その魔法は解除されるとなのは目の前には黒の魔法少女であるフェイト・テストアロッサが居た。

ジュエルシードを挟みながらお互いを見つめ合い、瞳の中にそれぞれを映し出している。

「(目的がある同士だからぶつかり合うのは仕方ないのかもしれない。——だけど、知りたいんだ)……この間は自己紹介出来なかったけどわたしなのは。高町なのは。私立聖祥大学付属小学校3年生」

【Scytheform Setup】

自己紹介をするのはに対してただ武器をもって応えるフェイト。

それに対してなのはレイジングハートを構える。

「(どうしてそんなに寂しい瞳をしてるのか)」

構えるなのはにフェイトは手にしたバルディッシュを振りかざす。

【Flash move】

その攻撃を躲して後ろを取るなのは。

彼女の瞳には何か、強いモノが感じられた。

【Divine shooter】

【“Defenser”】

レイジングハートから放たれた攻撃を逸らして回避するフェイト。

「フェイトちゃんっ!!」

「!？」

そのなののは言葉は不思議とビルの間を駆け抜け強く反響しているように感じられる。

「話しあうだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ。ぶつかり合ったり競い合ったりするのは仕方が無いのかもしれないけど……だけども分からないままぶつかり合うのはわたし、嫌だっ!!」

過去の経験からかなのはは心の底から思いの丈をぶつけて行く。

最速で、最短で、真っ直ぐに、一直線に思いをぶつけていく。

「わたしがジュエルシードを集めるのは、それがユーノくんの探しものだから。ジュ

エルシードを見付けたのはユーノくん、ユーノくんが元通りに集め直さないとイケないから。わたしはそのお手伝いで。だけど…そのお手伝いをするのは偶然だったけど今は自分の意思でジュエルシードを集めてる。自分の暮らしている街や自分の周りの人達に危険が降りかかったら嫌だから。これがわたしの理由」

「……わたしは」

そんななのはの真っ直ぐで真摯で真っ直ぐな想いに突き動かされたのかフェイトは自らの理由を述べようとするが。

「フェイト、応えなくて良い」

「!?!」

「優しくしてくれる人達のとこでヌクヌクと甘ったれて過ごしているガキンチョになんか何も教えなくていい」

「え?」

「わたし達の最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ」

そんなアルフの言葉にフェイトは本来の目的を思い出し、ジュエルシードに目を向ける。

封印されたジュエルシードへと向かいそれぞれフェイトは飛んで行く。

なのはは一步遅れてその彼女を追いかけた。

同時だ。同時にお互いのデバイスがぶつかり合う。それぞれのデバイスにヒビが入り砕け散った。

そこからそのデバイスに流れる魔力に反応したのか。それともただ打つかった衝撃の所為なのか。

ジュエルシードは大きく脈打ち暴走する。

「……………」

お互い見つめ合いながら微動だにしない俺達転生者組。

「この前ぶりだな、ドゥーム」

「ああ」

「え？ 何？ 名前知ってるの？」

それぞれ名前を呼び合う俺達を見て雄介は首を傾げる。

「で、どうする？ やるか？」

構えた俺を見て、目の前の少年は少し後退りするも直ぐに立て直す。

よっぽど全開の戦闘で力の差というものを実感したのだろう。

「なあ、今回こそ俺にやらせてくれよ」

そこに志蓮が言葉を投げかけてくる。

俺は特に気にすることもなく、ただただ自然にドウームの相手を志蓮に譲った。

「さてと、この前は何も出来なかつたけど俺はそのトカゲ野郎とは違う。来いよモノマネ野郎」

「そのサイヤ人以外には負ける気は毛頭ない。来いよ金ピカ」

トカゲ野郎という言葉に怒っている雄介を無視しながら彼等はお互いに挑発しながら様子を見ている。

それぞれ実際のところは初めて戦うのだ。警戒するに越したことは無い。

両者に緊張が走る。

だが、いざ戦おうとするとそこにジュエルシードの大きな魔力の波動を感じ取った。

「ちえつ、横槍かよ」

「また駄目だった」

「なのは達の方だな」

「きやあああああつ?!?!」

「くう!!」

暴走しているジュエルシードから強烈な衝撃波が発生する。その大きく凶暴な風になのはとフェイトは吹き飛ばされてしまう。

「すずか、どうしたの？」

「ううん、なんでも」

月明かりの下、用事である習い事を済ませたアリサとすずかは迎えの車に乗ろうとしていた。

「もうお腹減ったよ。速く帰ろう」

「あ、うん」

月は今にも雲で隠れようとしていた。

謎の組織登場 介入、時空管理局

なのはとフェイトのデバイスであるレイジングハート、バルディッシュがぶつかる。

その衝撃が原因なのか、それともデバイスに流れていた彼女達の魔力が起こしたのか封印していた筈のジュエルシードが暴走する。

それにより近くに居た2人は発生した衝撃波により吹き飛ばされた。

ジュエルシードから出ている魔力は余りにも膨大な所為か柱となって境界内の街に大きな明かりをもたららし、光に満ちた。

「大丈夫。戻ってバルディッシュ」

【Yes, sir】

何とか体勢を整えたフェイトは大きくヒビの入っている愛機を待機させる。その待機状態へと戻ったバルディッシュは彼女のグローブの、手の甲の部分に収まる。

「……………」

見据えた先には未だに暴走をし、魔力と光を放ち続けているジュエルシード。

その膨大な魔力を垂れ流し、衝撃波を発生させながら震えている宝石に向かい駆け出した。

「——『マグネティックワールド』……フェイト・テストロッサ」
が、彼女の身体は後ろの方へと勢い良く引つ張られていく。

「——!?!」

まるで何かに引き寄せられるかのように、磁石にでもなったかのように逆らうことが出来ず兄の方へ引き戻される。

「兄さん?」

「今、ジュエルシードの方へ行こうとしたらどう?」

「だって……」

ドウムの顔を見て自身の心配をしてきていることを察せられ、フェイトは言葉を続けることが出来なかった。

「だけどうするのさ?」

ユーノとのやり取りを切り上げて此方に戻ってきたアルフはジュエルシードを見つめながらドウムへと質問を投げかける。

「勿論封印し直すさ——彼等が。……そしてその後」

「大丈夫か、なのは?」

着地に成功したなのはへと雄介、志蓮、ユーノ、そして俺が走りながら無事を確認する。

目で確認する限りでは彼女に怪我という怪我は存在してはいない。

だが、彼女の相棒であるレイジングハートは見事に沢山の大きなキズとヒビが入っており相当のダメージを負っているようだ。

「何とか」

彼女の無事を知り安堵する皆。

そんな中、俺はジュエルシードから発せられる魔力の方が気になってどうしようもなかった。

「どうしよう」

「——志蓮」

「やっとな俺の出番だ！」

その俺の言葉に志蓮は嬉々として応えてくる。

不安を見せるのはとユーノを余所に志蓮と俺は余裕を見せている。

その様子にユーノは不思議がり思わず大きな声を出す。

「何でそんなに余裕なのさ——あんなに大きな魔力なんだよ」

「簡単だよ。あれを消すことが出来るんだから」

その言葉にユーノは訝しみながらも何処か期待をしていた。

今までの事を考え、思い出してみると彼等は自分の常識に当てはまらなくて、不思議な事を起こし、駄目だと思つた事を引つ繰り返し無事解決してきたのだから。

「王^{ゲートオブパレロン}の財宝」

志蓮の背後に突然と数々の剣が、槍が出現する。それはまるで最初から其処に在ったかのように自然にあらわれた。

だが、それら武器からジュエルシードと同等、それ以上の魔力を放っており唯の道具では無い事が嫌でも理解させられる。

「破魔^{ゲイ・ジャルグ}の紅薔薇^グ!!!」

出てきた武器の中から紅色の長槍を一本手に取り、それをジュエルシードに向けて強く投げつける。その様はまるで、今までの鬱憤を晴らすかのように力強く、そして投げた後の彼の顔は清々しかった。

それは放たれている魔力に吸い込まれるように見事に命中し暴走は嘘の様に治まる。先程の魔力の暴走が幻であつたかのように、だ。

「ふう〜……なんとかなつたな」

「そうだな……」

雄介のその言葉にどうしながら俺はドゥームの方へ目を向ける。

彼の方もしつかりと理解しているようだ。

「……………ロケットスレッド デイーンドライブ R・T」

その言葉と同時に彼の姿は消え失せ、それと同時にジュエルシードもまた喪失していた。

「しまった!!」

志蓮、雄介は大きく叫び、ユーノとなのはは呆然とするしかなかった。

実際には封印し直したわけではないがすっかり大人しくなったその青い宝石を手に、ドゥームは勝ち誇った顔をしながら此方に目を向けてくる。

「これは貰って行くぞ」

「サツサと行こうよ。此処に長居する理由なんて無いんだしさ」

「兄さん」

「ああ……………じゃあな」

目的の物を手に入れ、彼等は結界内から逃走する。その動きはとても速く、断続的に転移魔法を使用しているのか魔力での追跡が困難だ。

「ブロン、瞬間移動で」

「無理だ——ジャミングされているみたいに上手く気を探れねえ」

勿論これは嘘だ。気を探り、今にでも彼等の居る場所へと移動することが出来る。だが後々の為に今は黙っているしか無い。

無闇矢鱈と動きまわり、知識と違った展開になるのがとても怖いのだ。臆病者だと言われ、罵られようが怖いものは怖い。自分の所為で何かが大きく狂い、取り返しの付かない事になるのがとても怖いのだ。

「レイジングハートはかなりの大出力にも耐え得るデバイスなのにこれを一撃でこんなにも破損させるなんて」

ひび割れたレイジングハートを見ながらユーノは街で起こったジュエルシードの暴走を思い出す。

「あの娘となのはの魔力の衝突——いや、それじゃ説明がつかない。あれはやつぱりジュエルシードの」

ドアをノックする音が聞こえてくる。

数回のノックの後にドアは開き、入ってきたのはこの部屋の主であるのはであった。

彼女は風呂から出てきたのか。パジャマに着替えている。

「ユーノくん。レイジンググハート、大丈夫？」

「うん。かなり破損は大きいけど……きつと大丈夫。今、自動修復機能をフル稼働させてるから明日には回復すると思う。……なのは大丈夫？」

「うん。レイジンググハートが守ってくれたから……ごめんね、レイジンググハート」

そのなのはの謝罪の言葉に答える代わりにレイジンググハートは修復時に発生する光の点滅で応えることしか出来なかった。

「明日は母さんに報告に戻らないといけないから早く治さないとね。傷だらけで帰ったらきつと心配させちゃうから」

そう言うフェイトの身体にはいくつかの怪我が見受けられていた。ジュエルシードの暴走時に発生した衝撃で飛んだアスファルトの破片によるものか。幸いにもその傷は浅く、少し切っただけのようだ。

「心配するかなあ？ あのヒトが」

「母さんは少し不器用なだけだよ。わたしにはちゃんとわかってる」

そんな訝しげなアルフの言葉に優しい笑みを浮かべながらフェイトは母親を擁護す

る。それは愛する母親だからだろうか。父親が居ない分、それだけ愛し、信じているの
だろう。

「報告だけならわたし行つて来れば良いんだけど」

「母さん、アルフの言う事あまり聞いてくれないもんね……アルフはこんなに優しく
て良い娘なのに」

「まあ、明日は大丈夫さ。こんな短期間でロストログア——ジュエルシード4つも
ゲットしたんだし。褒められこそすれ、叱られるような事先ず無いもんね」

自身の主であるフェイトに頭を撫でられ、アルフは照れながら強く彼女に、自分に言
い聞かせる。

「うん。そうだね」

「だからこそ……なおさらこの怪我を治さないとな」

そう言いながらドウームはフェイトに、怪我をしている部分に手を翳し、触れる。す
るとその傷は怪我をする前のように、まるでしていなかったかのように消え失せてい
た。

「——これは？」

「ドツベルゲンガー変身」。俺のレアスキルの一つだ。さて寝よう——明日は早いからな」

「うん」

怪我の治療を済ませ自身に充てがわれた部屋に行くドゥーム。
愛する妹の怪我を治したが彼は不安で心が一杯だった。

アルフの言った言葉がフラグで当たる確率がかなり大きい。いや、確実に当たるであろうと思う。

そんな気持ちから逃げるように彼は布団を勢い良くかぶった。

『なのは?』

『ユーノくん!』

『どうしたの? こんな朝早く』

『ちよつと目が覚めちゃったから』

姉である美由希の竹刀による素振り、練習を見ながらなのははユーノに念話での返事をする。

『それでね、ユーノくん。わたし……考えたんだけど』

『うん?』

『わたし……やっぱりあの娘のこと——フェイトちゃんの事が気になるの』

『気になる?』

『すごく強くて、冷たい感じもするのに……だけど綺麗で優しい瞳をして。なのに

何だか凄く——悲しそうなもの』

『……………』

そんななのはの呟くような独白にユーノは静かに耳を傾ける。

『きつと理由があると思うんだ、ジュエルシードを集めてる理由。だからわたし、あの娘と話がしたい……………だから、その為に』

『遠見市』の住宅街にあるとあるマンションの屋上。そこには3人の人影が存在していた。

「御土産はこれで良しと」

そんなフェイトの手には何処で買ったのか可愛らしいデザインの絵が刷られているケーキの箱があつた。

「甘いお菓子か。こんなものあのヒトは喜ぶのかねえ？」

「分かんないけど……………こういうのは気持ちだから」

「ふーん」

アルフはフェイトからその箱を預かり、それを不思議そうに見つめる。

「『次元転移』——『次元座標』、876C—4419—3312—D699—3

583—A1460—770—F3215”。開け、誘いの扉……“時の庭園”、テスト
タロツサの主のもとへ”

その詠唱を終えると共に彼女達の姿はその場から消え失せていた。

「皆どう？ 今回の旅は順調？」

「はい。現在、第三船速にて航行中です。目標次元には今からおよそ160ヘクサ後に到達の予定です」

扉から入ってきた緑髪の女性の質問に的確に、しっかりと、オペレーターらしき人物が答えていく。

「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きは無いようですが2組の捜索者が衝突する危険性は非常に高いですね」

「そう」

「失礼します。リンディ艦長」

「ありがとうございます、エイミー」

緑髪の女性——“リンディ・ハラウン”——は紅茶を淹れ、机に置いてくれた“エイミー・リミエッタ”に感謝の言葉を述べる。

リンディ・ハラオウン。彼女は、今“次元空間”内を航行している。// 巡航L級8番艦アースラ”の、この船の艦長である。

「そうねえ……小規模とはいえ次元震の発生はちよつと厄介なものね」

紅茶の入ったコップを持ち少し口を含む。その行為は確実に喉を潤し、彼女の疲れを、不安を少しばかり和らげた。

その紅茶には彼女の姿を鏡のように映し出されている。

「危なくなったら、急いで現場に向かってもらわないと。ね、クロノ」

「大丈夫。分かっていますよ、艦長。僕達はその為に居るんですから」

そのリンディの言葉に応えた黒尽くめの少年は自信有り気にそう答えた。

広いその空間には何かを叩く音が、そして小さな女の子の悲鳴が響いている。その音は大きく部屋の外に漏れ出ており、その女の子はその痛みを必死に耐えていた。

「たったの4つ……」

その部屋には魔力でつくられた縄でフェイトは釣り上げられていた。

「これは余りにも酷いわ」

「……はい……ごめんさい、かあさん」

フェイトの着ている服はボロボロになっており、所々に痣が見受けられる。

彼女の瞳は力無く目の前の母親を見つめ、ただただ謝ることしか出来なかった。

「良い？ フェイト。貴女は私のむすめ——『大魔導師』 プレシア・テストロッサの一人むすめ。不可能なことなどあつては駄目……どんな事でも——そう、どんな事でも成し遂げなければならないの」

そのプレシアの言葉は低く、何処か深い所から発せられているかのように重く感じられる。

「はい」

「こんなに待たせておいてあがつてきた成果がこれだけではかあさんは笑顔であなたを迎えるわけにはいかないの。分かるわね、フェイト？」

「はい、わかります」

「だからよ。だから、覚えて欲しいの。もう二度とかあさんを失望させないように」
「……………」

彼女が、プレシアが手にしていた杖が鞭へと姿を変える。それは、またフェイトの身体に痛みを、罰を与えるという意味だった。

そしてまた、鞭によって小さな身体を叩く音、小さな悲鳴が木霊し始めた。

「なんだよ。一体何なんだよ……あんまりじゃないか、あの女」

フェイトの悲鳴が大きくなる。それに対して思わずアルフは目を瞑ってしまふ。

「あの女の、フェイトのはおやの異常さとかフェイトに対するひどい仕打ちは今に始まったことじゃ無いけど……今回はあんまりだ。一体何なんだ。あのロストロギアは、ジュエルシードはそんなに大切なもんなのか）……あんたは平気なのかよ!？」

「そんな訳ないだろ」

近くに居た彼女の兄であるドウムに対して行き場のない怒りを、憤りをぶつけるアルフ。

だが彼もまた同様に憤りを、無力さを感じ、悩んでいた。

今直ぐにでも部屋に乗り込み助け出したい。そんな思いを手をグツとキツく握りしめ耐え忍んでいた。手の平に爪を立て、血が出ている。

その彼の様子を見てアルフはこれ以上、何も言い出すことは出来なかった。

「ロストロギアはかあさんの夢を叶える為にどうしても必要なの」

「はい、かあさん」

「特にあれは……ジュエルシードの純度は他のものより遥かに優れてる。あなたはやさしい……だから躊躇ってしまふこともあるかもしれないけど、邪魔するモノがあるなら

潰しなさい。どんな事しても。あなたにはその力があるのだから」
魔法を解除したのかフェイトを吊るしあげていた綱が消え失せる。

「行ってきたくれるわね？ 私のむすめ、かわいいフェイト」

「はい。行つてきます、かあさん」

「暫く眠るわ。次は必ずかあさんを喜ばせてちょうだいね」

「……はい」

部屋の奥に設置されているドアの方へとプレシアは向かう。

後に残されたのは傷だらけのフェイトと御土産として買ってきたケーキの入った箱だけだった。

「フェイトー！」

フラフラと歩くフェイトを目にして駆け出すアルフ。

倒れそうになるも何とか抱きとめることが出来た。

「フェイト、ごめんよ。大丈夫？」

「何でアルフが謝るの？ 平気だよ、全然」

フェイトの身体には生傷が沢山存在し、服はボロボロになっていた。

それは先程の鞭の威力を物語っている。

「だってさ……まさかこんなことになるなんて。ちゃんと言われた物を手に入れて来たのにあんな酷いことをされるなんて思わなかったし……知ってたら絶対に止めたのに」

「酷いことじゃないよ。かあさんはわたしの為を思ってたって」

「思ってるもんか、そんな事。あんなの唯の八つ当たりだ」

「違うよ、だって親子だもん。ジュエルシードはきつとかあさんにとって凄く大事な物なんだ」

語気を強め、キツく言い放つアルフ。

フェイトはそんな使い魔に優しく、落ち着かせるように言葉を紡ぐ。

「ずっと不幸で悲しんできたかあさんだから、わたし何とかして喜ばせてあげたいの」
力無く笑いながら、フェイトは自身の思いを打ち明ける。

「だって……でもさ……」

そんな彼女に対してアルフはそれでもなお、プレシアへの不満、そして主への不安が胸一杯だった。

「ジュエルシードを手に入れて帰ってきたら、きつと母さんも笑ってくれる。昔みたいに優しい母さんに戻ってくれてアルフにもきつと……優しくしてくれるよ。だから行こう。今度はきつと失敗しないように」

その言葉は自分自身に言い聞かせているようにも感じられた。

「バルドイツシュ、どう……?」

【Recovery complete】

「そう、頑張ったね。偉いよ」

「感じるね。わたしにも分かる」

「近くのジュエルシードがもうすぐ発動する」

そのテストタロツサ兄妹、そしてその使い魔には緊張の色が見える。

「レイジングハート、治ったんだね? よかったあ……」

【Condition green】

「……また、一緒に頑張ってくれる?」

【All right, my master!】

「ありがとう」

ユーノが持つて来たレイジングハートを手に取り、強く握りしめるのは。彼女の瞳には強い決意が見受けられる。

“海鳴臨海公園”。

そこで落ちていたジュエルシードは発動した。光の柱を形成し、近くに生えていた木と同化していく。

「封時結界、展開!!」

そのユーノの魔法により世界は切り離される。

同化したジュエルシードの暴走体は葉の生えている部分が頭で、枝が手に、根が足となっていた。まるでヒトを真似たかのような姿だ。

「生意気にバリアまで張るのかい」

「……………」

自身の攻撃を防がれたが、フエイトは落ち着いて暴走体を注視している。

「今までのより強いね。それに——あの娘達も居る」

視界にはジュエルシードの暴走体と共にもう一人の魔導師である高町なのはが存在していた。

「お前たちは退がってろ。此処から先は」

「俺達のステージだ」

そう言いながら拳を握りしめ、自身の相棒であるデバイスを握る彼女達の前に出る雄

介とドゥーム。

「合わせろよ、モノマネ野郎」

「そつちこそな、トカゲ野郎」

同時に走りだし、繰り出される根による攻撃を避けていく2人。地面に叩きつけ飛び跳ねる大きな石を躲しながら、土埃を気にすること無く進んでいく。

「熱吸収」

そのドゥームの言葉と同時に地面が凍りついていく。

「寒い」

バリアジャケットを着けていても寒気を感じるのかなのはは身体を強く抱きしめる。

「これは？」

「地面に存在している熱エネルギーを、所謂地熱というやつを吸収したんだよ」

おそらく「第四波動」によるものだろう。確か周囲の熱エネルギーを吸収し、増幅して放出する能力だった筈だ。

「堅ってええ〜。クソツ、バリアが」

握りしめた拳に息を吹きかける雄介。その手は赤く腫れ上がっているかのように見える。

「俺が破壊する。決めろよ」

展開されるバリアに苦戦していた雄介に手助けをするドゥーム。

敵味方関係なく手を取り合い目の前の目標にぶつかっていくこの光景。見ている限り本当に頼もしく感じるとともに嬉しいものだ。

「誰に言っただよ」

そんなドゥームの言葉に自身満々に応える雄介。

「——力のフラグメント＋^{スピード}速のフラグメント。そして^{アグニッシュユワツタス}炎神の息吹”っ!!!”」

その言葉とともに発生したバリアを、周囲の分子を振動させて破壊するドゥーム。その隙に暴走体の足元に雄介は潜り込んでいた。

「喰らえ——^{!!!}滅竜奥義、紅蓮火竜拳”ッ!!!”」

炎を纏わせた拳でオラオラと殴り続けていく。

連続で繰り出される炎の打撃に暴走体は後ろに退がり、当たった所から燃えていく。

「なのは、フェイト!!!」

その2人の言葉に2人の少女は空へ高く飛び上がる。

「バルディッシュ」

「Arc saber」

「レイジングハート!」

「Shooting mode」

バルディッシュから放たれた Arc saber が残っていた根を刈り取り、木に刺さる。

「撃ち抜いて——ダイバイン！」

【Buster!】

上から放たれる砲撃に暴走体は防護壁を張る。

「貫け轟雷！」

【Thunder smasher!】

フェイトの方からも放たれた砲撃を防ぐ暴走体。

広がる炎により燃え続ける身体なうえ、そしてダメ押し of 2 方向からの砲撃には流石に耐えることが出来なかったのかジュエルシードと木は分離し始める。

【Sealing mode Set up】

【Sealing form Set up】

「ジュエルシード、シリアルⅦ」

「封印」

浮き出たナンバーを読み取り封印を行う。封印と共に強烈な、目を灼くほどの光が発せられる。

だが、その光も一時的なモノで直ぐに収まりお互いに見詰め合う。

「ジュエルシードには衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「うん。昨夜みたいなことになったら私のレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも可哀そうだもんね」

「だけど……譲れないから」

〔Device form〕

「私は……フェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど」

構えたフェイトに対して思わずなのはもまた反射的に構えてしまう。

〔Device mode〕

「私が勝つたら……ただの甘ったれた娘じゃないって分かってももらえたら。お話、聞いてくれる?」

「……………」

向き合う2人を俺と雄介、志蓮、ドウム、ユーノ、アルフはただ見ていることしか出来なかった。

動いた。

どちらが先に動いたのだろうか。

そんなことは分からない。殆ど同時に動いたかのように見えたのだから。

だがそこに、見覚えのない2人組が割り込んでくる。

「ストップだ!!」

「!?」

「此処での戦闘は危険過ぎる」

文字通り彼女達の間、真ん中に転移してきたのだ。

それぞれの、2人のデバイスを掴み、攻撃を止めていた。

突然の事に俺達転生者組以外は目を見開いている。

「『時空管理局執務官』 クロノ・ハラオウン」だ。詳しい情報を聞かせて貰おうか」
どう出て来るかそれぞれを注視しながら彼は、クロノ・ハラオウンは強い姿勢で出てきた。

宙にはまだ封印されたジュエルシードが静かに浮かんでいた。

アースラで模擬戦 謎の管理局員

「ストップだ！ 此処での戦闘行動は危険過ぎる」

彼等は俺達の目の前に、なのはとフェイトの間に突然現れた。

だが、それは転移時に発生する魔力を感じ取ることが出来なければそう感じるだけなのだが。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ」

バリアジャケットだろうか。黒い服を着た少年クロノ・ハラオウンはなのはの方を、もう一人の少年の方はフェイトの方を抑えている。

もう一人の少年。名前の方は分からないが、彼は何処か異質めいたものを感じさせた。それは原作に登場していない人物だからなのだろうか。それともその彼の放つ存在感によるモノなのだろうか。

「詳しい事情を聞かせて貰おうか。まずは2人とも武器を引くんだ」

そのクロノ・ハラオウンの言葉によりなのはとフェイトの2人は大人しく地上の方へと降下していく。

「このまま戦闘行為を続けるなら——っ!!」

着地をした瞬間、そんな彼等の方へと魔力弾が飛んで行く。

クロノ・ハラオウンはこのような事に慣れていいのかそれに対して落ち着いた感じでは Protection だろうか防御魔法を発動させる。

そのおかげか後ろに居たなには何の被害もなかった。

だがフェイトはその隙に、防御の際に発生した土埃と爆発に紛れ彼等管理局員から大きく距離を取る。

「撤退するぞ、フェイト」

予想通りというか何と言うか、攻撃をしたのはフェイトの使い魔であるアルフと兄であるドゥームの2人だった。

2回目の攻撃時、フェイトは未だに空中に浮かんでいるジュエルシードへと手を伸ばす。

だが、それを目にしたクロノ・ハラオウンは彼女に向かい攻撃をする。

その魔力弾は見事に命中し、フェイトは受け身を取ることが出来ず落ちていくが何とかアルフが受け止める。

「っう……」

その攻撃はクリティカルヒットしていたのか彼女は苦しそうにしている。

再び彼の、クロノ・ハラオウンの杖に魔力が集中する。

「駄目！ 撃たないで」

そんな彼の目の前になのはは思わずフェイトを、彼女を庇う形で前に出る。

「撤退だ」

そんなドウームの言葉にアルフは怪我をしたフェイトを背負いその場から離脱していく。

其処には封印処理がなされ浮かんでいる青い宝石と4人の魔導師と1匹の小動物だけが取り残された。

「戦闘行動は停止。 搜索者の一方は逃走」

「追跡は？」

「多重転移で逃走しています。 追いきれませんね」

「そう」

アースラ内にて一連の行動は監視されていた。

監視、覗いていたというのには些か言葉に語弊があるかもしれない。何か起きた時の為の様子を見ていたと言った方が彼らにとっては良いだろう。

「ま、戦闘行動は迅速に停止。 ロストログアの確保も終了。 良しとしましょう。 事情

も色々聞けそうですしね」

《クロノ、お疲れ様》

「すみません。片方は逃がしてしまいました」

突如、何もない空間にモニターのようなモノが出現、それに女性の顔が映し出された。その女性は自分の失態だと謝罪してくるクロノに対して優しい言葉をかける。

《ううん。まあ、大丈夫よ。でね、ちよつと話を聞きたいからそつちの子達をアースラに案内してくれるかしら》

「了解です。直ぐに戻ります」

『どうするんだ?』

『どうするもこうするも、今は大人しくするさ。下手に動いて問題を起こしたくは無
いからな』

雄介、志蓮の2人に俺の考えを念話に乗せて伝える。

その言葉に2人は快く承諾してくれた。予め相談して決めていたことだ。これはあくまで確認という行動だけなのだから。

クロノ・ハラOWN執務官と共に俺達は転移魔法でアースラの中に移動した。

そこは見たこともないような機械的な、それでいて神秘的な空間で、先程まで居た公園とのギャップにただただ驚くことしか出来ない。

『ユーノくん、此処って一体?』

『時空管理局の“次元航行船”の中だね。えつと簡単に言うと幾つもある次元世界を自由に移動するその為の船』

『……あ、あんま簡単じゃないかも』

『ええとね……なのはが暮らしている世界の他にも幾つもの世界があつて僕達の世界もその一つでその狭間を渡るのがこの船で。それぞれの世界に干渉しあうような出来事を管理しているのが彼等時空管理局なの』

『そうなんだ』

『すげーな、まるでSFだぜ』

『写真撮つとこうぜ』

ユーノがなのはに説明を受けている間、俺達は面白可笑しく笑いながら携帯電話のカメラ機能を使用して写真を撮っていく。その様子は見るもの全てが新鮮に見えて、所構わずはしやぎまわる観光客のようだった。

……嘘？ えええええええ？」

「君たちの間で見解の相違でも？」

そんなやり取りを見てクロノ・ハラオウンは思わず、質問を投げかける。

「な、なのは。僕達が最初に出会った時つて僕はこの姿じゃ？」

「違う違う、最初っからフェレットだったよ」

「ううん？ あああつ！ あ、あ、あ、そうだそうだ。ごめんごめん。この姿は見せてなかった」

少しばかり頭に手をやり、記憶の中に潜っていくユーノ。直ぐに自分が見せていなかったことに気が付く。

「だよね、そうだよね。ビックリした」

「こつちがお前の声の大きさにビックリだよ」

「何か言った。ブロンくん？」

「別に……」

思わず俺は口にしてしまった言葉をなのはに聞かれ、それを否定する。

誰にも聞こえないくらいの小さな声で呟いたつもりだったのだが、彼女には聞こえらしい。

「被告人、ユーノ・スクライア」

「え？ え？」

突然、雄介と志蓮は裁判だろうか、裁判官の真似をし始める。

茶番が始まったのだろう。

「君はなのはに自分がヒトだということを話していなかった。もしくは教えていなかった。これに間違いは無いかね？」

「——は、はいっ」

その低い声に、強烈なプレッシャーにユーノは思わず返事をしてしまう。

「ジャッジ、判決を言い渡す。……ギルティ。有罪だ」

「な、何で？」

「風呂や温泉と一緒に入ったり、なのはが着替えるのを覗いたりしていたからだ。ウラヤマシイ」

最後のほうでかなり私怨な理由だという事を察する事が出来る言葉を放つ雄介と志蓮。

だが、そこで俺にも火の粉が降りかかる。

「温泉での一件ならブロンも一緒だったよっ！」

「ダニイ!!? それは本当か? ブロン被告人?」

「一緒に入ろうと言われたんだ。お前らだったら断れるか?」

「そ、それは……」

そんなどうでも良いやり取りをなのはクロノ・ハラウン、そしてもう一人の少年は白い目で俺達を見ていた。

「コホン……で、君は変身魔法を解かないのか？」

そのクロノ・ハラウンの質問に俺は思わず黙りこんでしまう。

今此処で変身を解除すると俺が聖王の血筋かのじよだということがバレてしまう。

そうなるとうなるのだろうか。

管理局上層部に情報が行く。何処かでその情報が「聖王教会」に漏れる。

どのような事になろうと面倒臭い事に変わりはない。

「しゅ、宗教上の問題で——変身魔法を解除することは」

「——そうか、わかった」

苦しい。とても苦しい言い訳だ。苦し紛れに出てきたその場から一時的にしか出来ない逃走手段だ。

だが、彼は深くは追求してくることは無く、何とか窮地を脱出することが出来た。

そんなクロノ・ハラウンとは違い、もう一人の彼は俺の事を見ている。その目付きは鋭く、睨んでいるかのように感じられた。

「……………」

「艦長を待たせているので出来れば早目に話を聞きたいんだが」

「あ、はい」

「すみません」

「艦長、来てもらいました」

扉が開き、中を覗く。

すると其処はまた違った意味で別世界が広がっていた。

盆栽、茶道で用いると思われる道具一式、ししおどしなどなど e t c ……。

和という和、日本の文化とイメージを集めたと言わんばかりの状態だ。

例えるのならばそう、日本の事を間違った形で知ってしまった外国人の様な感じだ。

まあ、間違った形でなどと言うが、正しいというのは一体何なのか、どうなのだと聞かれても答えることは出来ないのだが。

「お疲れ様。まあ、4人ともどうぞどうぞ楽しんで」

その目の前の女性の笑顔に対して俺達はただ呆然とする事しか出来なかった。

「どうぞ」

「あ、はい……」

差し出された和菓子、羊羹と緑茶を受け取る。

「なるほど。そうですか……あのロストロギア。いえ、ジュエルシードを発掘したのは貴方だったんですね」

「それで僕が回収しよう」と

「立派だわ」

「だけど、同時に無謀でもある」

その管理局員の言葉はユーノに対する賞賛と、それと同時に無茶をするなどいう意味に聞こえた。

「……………」

ユーノはただ黙ってその言葉を聞くことしか出来なかった。その行動の意味、重さを理解しているからこそだろう。

「あの、ロストロギアって何ですか？」

「ああ、遺失世界の遺産って言っても分からないわね。えっと……次元空間の中には幾つもの世界があるの。それぞれに生まれ育っていく世界。その中に極稀に進化しすぎる世界があるの。技術や科学……進化しすぎたそれらが自分達の世界を滅ぼしてし

まあって。その跡に取り残された失われた世界の危険な技術の遺産」

「それらを総称してロストロギアと呼ぶ。使用法は不明だが使いようによつては世界どころか次元空間さえ滅ぼす力を持つ事もある危険な技術」

なのはのその疑問に丁寧な、分かりやすく噛み砕きながら説明をしてくれる2人の局員。

ブラックテクノロジードとか、オーパーツだとかそういういたものも含まれると考えるてもいいのかもしれない。

というよりも、あらかじめユーノから聴いていた筈なのだが。

「然るべき手続きを以つて然るべき場所に保管されていなければいけない品物。貴方達が探しているロストロギア、ジュエルシードは次元干渉型のエネルギー結晶体。幾つか集め特定の方法で起動させれば空間内に次元震を起こし、最悪の場合『次元断層』さえ巻き起こす危険物」

然るべき手続きに然るべき場所。言葉にするのは実に簡単に使い勝手の良いモノだろう。

だが、それは一体何処に存在し、どのような手続きで、それらを一体誰が許可するのだろうか。

時空管理局という名称からそれらの危険物を管理したりするのだろうか。

だけどそのことから考えるに然るべき場所というのは管理局で、然るべき手続きというのには管理局を通して、という解釈しか出来ない。

相手側に対して失礼なことなのかもしれないが、それは余りにも傲慢すぎるのではないのだろうか。

こういつた考え事態が傲慢でエゴなのかもしれないが、自分にはその様に思うことしか出来ず、その気持ちを抱えたまま話を聞いていた。

「君とあの黒衣の魔導師が打つかった時に発生した振動と爆発。あれが次元震だよ」
そのクロノ・ハラオウンの言葉になのはは街での戦闘を、レイジングハートとバルディッシュがぶつかり合った時の事を思い出す。

「たった一つのジュエルシードの全威力の何万分の一の発動でもあれだけの影響があるんだ。複数個集まって動かしただけの影響は計り知れない」

「聞いたことあります。『旧暦』の462年。次元断層が起こった時のこと」

「ああ。あれは酷いものだった……」

「……隣接する平行世界が幾つも崩壊した。歴史に残る悲劇」

どれくらいの大きさの次元震なのか。どれほど沢山の世界が崩壊し、滅んでいったのか。それらは実際のところ良くは分かってはいない。

だが、語り継がれていくほどの出来事だった。それだけ酷いモノだったということだ

けは話を聞いていて理解することが出来た。

「繰り返しちやいけないわ」

そういう言いながら女性には緑茶の中に砂糖を大きじ一杯入れ、それを飲む。

「これよりロストログア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全件を持ちます」

「「え？」」

「君達は今回のことは忘れてそれぞれの世界に戻って元通りに暮らすと良い」

「でも……そんな」

「次元干渉に係る事件だ。民間人に介入してもらおうレベルの話じゃない」

「でも——」

「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて皆で話し合ってから改めてお話をしましょう」

善意で言っているのだろう。

だが、精神年齢によるモノか、中途半端に知識や知恵といったモノを持つている所為なのか。前世で読んだ二次創作の解釈による影響を受けているからなのかどうしても彼等の事を疑ってしまう。何か裏があるのではないかと訝しんでしまう。

純粋な気持ちで彼等の、彼女等の言葉を真摯に受け止めたいのだがそれが出来ない。

「送って行くこう」

この部屋から、アースラから出ていこうとしたその時。相手側から、もう1人の管理局員である少年が声を掛けてきた。

「すまないが、少し話がある。其処の少女と少年以外は残ってくれ」

「ええつと……」

「先に帰ってくれ」

その心配そうな、不安気なのはに対して俺達は先に帰れとしか言葉に出来なかった。

「自己紹介をしよう。俺の名前はゾイル——時空管理局執務官。この船の第2戦力。……そして転生者だ」

「やっぱりか……俺達が転生者だというのを理解しているからこそ話してきたのだからけど、なんでこの2人が居るんだ？」

その場には先程なのはとユーノを送り届けたクロノ・ハラオウン執務官が。そしてこの船の、アースラの艦長であるリンディ・ハラオウン提督が居た。

「それは知っているからよ。彼が、そして貴方達が転生者であるということ」

その言葉に思わず出てきた唾を飲み込んでしまう。

話したというのだろうか。自ら転生者であるということを、自分にとってのこの世界のことを、前世での事を。

「安心しろ。記録なんかしていない」

「その言葉は信じるにしても、何故こんな事を」

「貴方達の放つ雰囲気がああ娘達とは違っていた。そう感じたからと言うべきかしら」

「あのもう1組の搜索者の方にも転生者が居るんだろ？」

転生者だという事は既にバレてしまったのだからもうどうしようもない。大人しく、それでいて半信半疑で受け答えをしていくしか無いのだろう。

「さてな、それは自分達で確かめるべきだろう」

「そうだな。さて……原作通りの展開ならば今夜にでもあちらから、ユーノから連絡が来るだろう。手伝いたいってな」

「君達はどうなんだ？」

そのクロノ・ハラオウンの質問に俺は迷う事無く応える。

「YESだ、手伝う。だが、そちらの下につくわけではなく対等のポジション、立場で」
「俺も同じだ。なのはに負担を掛けるわけにはいかないからな」

「俺の嫁に格好良いところを見せたい。というか、もっと活躍したい」

「分かった。だけどお前達の実力が理解できなければ意味は無い。——そこで模擬戦だ」

「試合方式は1対1。どちらかが戦闘不能になるか、降参するかで決着」

「「上等!!」」

「だけど、君達は2人で俺達は3人だろ? どうするんだ?」

その雄介の言葉に俺と志蓮は頷く。

ゾイルは転生者だから何かしら強力な力を持っているのだろう。

だが、クロノ・ハラオウンの方はどうなのだろう。

歩くロストロギアとでもいうほどの力を持つ存在である転生者にどう対処するのか。対策があるとも言うのだろうか。それだけの實力があるとでも言うのだろうか。

「何を言っている。1対3に決まっているだろう。ま、順番は決めてもらうが……いや、一斉に掛かって来ても良いんだぞ」

その彼の、ゾイルの言葉に沸点が低いのか雄介と志蓮の2人は声を荒げる。

「良い気になるなよ。あとでそのチビすけに助けを求めるなんてしても駄目だからな」

「だ、誰がチビすけだ」

「そんな事は絶対に、絶対に……絶対……絶対にしなあああああいいい」

そんなゾイルの言葉には絶対に自信が含まれており、余裕というものを感じさせた。

《それでは上条雄介くんとゾイル執務官の模擬戦を始めたいと思います》

「……………」

「……………」

お互いに睨み合っている。

それぞれの持つ力を、実力をしらないのだから当然か。

互いの様子を見て、隙を伺っているのだから。

「——ッ!!」

先に動いたのは雄介の方だ。

「火竜の鉄拳ッ!!」

炎を纏わせた拳で殴りに行く。その速さは今までの比にならずかなりのスピードを出していた。

「ほう」

雄介の全体像をよく見てみると足元から炎が噴出している。ブースターの替わりにしているのだ。勢い良く出ている炎が推進力となり直線的に跳び、ゾイルの懐へと一瞬で到達する。

「喰らえ!!」

「フン。動きが愚直過ぎる、真っ直ぐ過ぎる。そんなんじや避けろと言っているものだぞ」

だがその攻撃はスルリと簡単に躲かれてしまう。

「まだまだ——火竜の鉤爪エツ!!」

ブースターの代わりにしていた足の炎をそのまま相手に向け、蹴り放つ。

「クッ」

その攻撃は予想外だったのか彼の、ゾイルの顔を掠めた。

「彼、炎熱の変換資質持ちなのかしら?」

——「魔力変換資質」。

魔力は炎や電気、凍結などといったものに変換をする事が出来る。

魔力をそういった他のものへと変換する事は学習によって習得をする事も可能である。それでも変換時にはいろいろと必要なのだが。

だが、極稀にそういったプロセスを踏まずに、意識をする事無く変換する事が出来る資質を持つ者が居るのだ。

今の俺達は別部屋に居り、モニターを通してその模擬戦の様子を観ている。

リンデイさんは自身の知識内で推測を立て言葉を口にするが、俺はそれを否定する。

「いえ、違いますよ。彼奴が使うのは炎だけじゃない」

「彼奴は他にもいろいろな力がある」

「炎か。随分と熱いじゃないか」

「燃えてきただろ？」

「ああ、確かに。グツグツに燃え滾ってきたぞ、俺の血が、血液が」

ゾイルはそういう言いながら自身の体から血管を出していく。

それは普段直接目にする事が無いものだ。身体の中にあり、常に脈打っている。

その血管が、赤黒い触手のようなものが体外に出て、それぞれ一本一本に意志があるかのようにウネウネと動いている。

グロテスクであり、気味が悪い。

モニターを通して観ているとはいえ、SAN値がガリガリと削れていきそうなものだ。

「な、何だそれ？」

「見ろよ。お前の言う通り燃えてきた所為か熱くて熱くて、俺の血は沸騰してるぜ」
その血管から血と思しきものが噴出している。だがそれは本当に血なのだろうか。
その出ているモノから熱と思しきモノが発生しているのだ。

「何だよ、それ」

「——// かいえんのうのモード 怪焰王の流法” ツ!!!”

その血はまるで火山から吹き出ている溶岩の様にグツグツと煮えたぎり沸騰している。その熱で発生した蒸気により周りは歪んで見えてしまう。

「本来のこの力では血液を5000℃までしか加温出来ないが、俺のこの力は——俺の血液は摂氏10000℃にまであげることが出来る……オリジナルの倍の熱さだ。俺の身体は丈夫でな、それに耐えることが出来る。お前はどうかかな？」

「そんなもん飲み干してやる」

見栄を張り、強気な態度をとるのはいいのだが雄介は内心焦っていた。
焦るところではない。勝てないのではないか。そう思い始めていた。

「(さて、どうしたものか……炎を食べる事は出来るけどグツグツに煮え滾った血液なんて食えるものじゃないし)」

「来ないのなら此方から行くぞ——// かいえんのうたいしゃやく 怪焰王大車獄” う!!!”

針のように尖った先端を持っている血管を全身から突き出させて、回転するゾイル。彼の身体から、血管から最低でも1000℃もの高温の血液が噴出する。その様子は外から観ているとまるでスプリングクラーの様だ。

だがそれは、実際には相手を死へと誘う炎の嵐なのだが。

「——危ねっ!」

飛んでくる血液、血飛沫をギリギリの所でなんとか避けていく雄介。

だが、その血液が当たった所は溶けて赤くなり、物凄い蒸気を出していた。

「(ブロンと修行してて良かったぜ……あんなモノに当たってたらどうなってたか。考えたくもないね)」

「ま、流石にこれは模擬戦だ。殺しはしないさ、殺しはな。だがな、思い切りはやらせてもらおう」

「来るか?」

「かうえんのうモード怪焰王の流法+〃風の流法〃」

血管から出ている熱い血液だけじゃなく、彼の身体の周りに突如風が発生する。

「厄介だな……」

そんな雄介の額には大粒の汗が流れていた。

俺は究極生命体 スタンドさえも使用可能

「さて、どうする？ 滅竜魔導士……降参するか、白旗を掲げるかあ？」

「冗談じゃねえ、まだやれる」

ゾイルの周囲には正直に言う常人では絶えられないほどの熱と風の嵐が発生していた。その熱は肌を、喉を焼き、風は皮膚を、空気さえも切り裂いているようだ。

「ハッキリ言つてこれは無理ゲーかも知れない……幾ら滅竜魔法が強力であっても今の俺には」

「来ないのなら俺の方から行くぞ」

ゾイルはその言葉と同時に雄介に向かい駆け出す。その走り方は妙にバランスが良く、上半身は微動だにしていな

「(は、速い)。——うげえ!？」

動いたと認知した途端、雄介は横殴りにされていた。勢い良く飛ばされたその身体は訓練室の壁に勢い良く打つかる。

「気を失ったか……。まあ、頑張った方だろ」

「ま、まだ……だ……」

フラフラとしながらも両足で踏ん張り立つ雄介。

その目はまだ死んではおらず、しっかりと目の前の相手を見据えていた。

「まだ立つか。存外しぶといものだな」

「食ったら力が湧いてきたぜ」

口元を手で拭いながら雄介は構える。

先程まで違い、彼の様子が変わっていた。

肌は鱗が浮かび、口には鋭牙が出来ている。そしてその鱗肌は何処か紅く輝いている様に見える。

「思い出したぞ……滅竜魔導士——お前らは確かその属性に合ったものを口にすると魔力が回復し強くなるんだったなあ」

「……………」

「だが、お前は何を食べた？ 俺の血液か？ 俺が作り出した風か？ まあいい……どちみちお前の力の確認は済んだ……合格だ」

「——え？」

その言葉に雄介は思わず疑問符を浮かべる。

今日の前は何と言ったのだろうか。合格。つまり、この戦いは終わりということだ。

「次の奴と交代しろ。あと、医務室に行け——その怪我では歩くのも辛いだろ」

「あ、ああ……」

「終わったようだな」

「次は俺だな」

映像を通して観ていた俺達はゾイルの力についてある程度は予測することが出来た。雄介には悪いとは思うが捨て駒の様なモノ、尖兵とでも言うべき存在になってもらったのだ。

「雄介は犠牲になったのだ……犠牲の犠牲にな」

「奴はおそらく『ジヨジヨの奇妙な冒険』に出て来る『柱の男』の能力を持っている。怪焰王かいえんのうのモードの流法と風の流法を使った所からそう判断出来る」

「ま、それならそれでやりようはある筈だ……ガンバルサ」

「頑張つてね」

部屋から退出する志蓮をリンディ・ハラオウン提督はヒラヒラとハンカチを振りながら見送る。

「次はお前か……名前は確か」

「志蓮だ。神威志蓮」

「言葉は不要だ……掛かって来い、劣化『英雄王』」

「行くぞ、王の財宝」
ゲイト・オブ・パビロン

志蓮の背後に無数の武器が出現する。剣や槍、斧などなど無数の武器が現れる。その中にはチェーンソーなどの武器かどうか怪しい物まで紛れている。

「王の財宝か……本当に劣化英雄王だな」

「オリジナルに敵わないというのは重々承知しているさ……だがな、これが欲しかったんだよ。心の底から。テンプレートだとかいろいろ言われようとお」

その志蓮の言葉には切実さを感じさせるものがあつた。相当に欲しかった……使つてみたかったのだろう。

「ま、いい……。来い」

雄介は浮かんでいる刃が鎌の様な形をした刀剣の1つを手にする。

「フンツ!!」

大きくそれを振りかざす。その動きは散漫で避けるだけなら簡単に出来るだろう。

「無駄だ」

ゾイルはその志蓮の攻撃に対して避けることはせず、手を動かし吹き飛ばす。

「ほう……」

だが、ゾイルのその払いのけた方の手には傷が出来ていた。

「傷の治りが遅い——その武器は不死殺しの属性でも持っているのか？」

「バレたか。ま、どうせ通じないと思ってたし。次の手に出ますか」

次に志蓮は槍を手にする。

「予めネタばらししとくけどこれ、^ゲ必滅の^イ黄^ボ薔薇^ウだから」

「自らの手の内をさらけ出すとはそれほど余裕なんだな」

「それほどでも無いさ……。ただお前の力を知っているのにそっちは知らないっていうのは不公平だと思ってな——行くぞっ!!!」

志蓮は駆け出した。その速さは素早く迅速で最速の英霊と並ぶであろうと思えるスピードだ。

次々と繰り出される槍の攻撃をギリギリの所で避けていくゾイル。少し間違えば大きな傷を負うであろう事は簡単に予想できる。

だが彼の、ゾイルの顔は何処までも余裕に満ち溢れていた。

「(この速さでも当てるのが出来ないのかよ……)」

「どうした？ その程度か？」

自らが放つ事が出来る最速の攻撃を何の苦労も無さそうに避けていくその様子を見

て、志蓮は焦り出す。

「終わりだ」

そのゾイルの言葉とともに志蓮の意識は途切れた。

「俺の番か……」

「そうだ」

向かい合う俺達の間、緊張と静けさが降り立ち通過していく。

もしこれが地上で、漫画の中ならばお互いの間に一陣の風が吹いていたかもしれない。

「待っていたんだ……この時を」

「何?」

「お前があの中で一番強いことだけは分かっていた。まあ、何の力かどうかなんていうのは理解できないがな」

「俺もだ。待ってたよ、お前と戦えるのを」

その瞬間、世界は一瞬で様変わりした。

パンチにキック。目の前の標的目掛けてなされるワザの応酬に訓練室の中を衝撃波

が襲う。それは足元である床を抉り、壁を凹ませていく。

「か、艦長?! これは……」

「わからないわ…何が起こっているのか」

「み、見えん! この神の目にも!」

「目で追うのがやつとだぜ」

離れた部屋から映像を通して観ていた局員達は彼等転生者の最後の模擬戦の様子が理解できなかった。

彼等が動いているといことをかろうじて教えてくれる影と思しきものが映り、何とか闘いが続いていることだけは理解できる。

「本当に凄いわね……彼等、転生者は」

「そらああああ!!」

ゾイルに目掛けて突っ込み俺はパンチを繰り出していく。

それはゾイルの方も同じで俺に向けてパンチにキックをして来た。

その攻撃はお互いの腕で、足で防ぎながら続けていく。

「遅いー!」

そのゾイルの言葉と共に俺は切り裂かれる。

「……な、何?」

だがそれは幻影で、切り裂かれた俺は消え去った。

「『残像拳』っていうんだ」

「面白い技を使うな。確か、ドラゴンボールに出てきた技か……」

「そうだ……そういうお前は柱の男の能力だろ?」

「ああ。全てを話すことは出来ないが概ねその通りだということは答えてやる」

「最初に使ったのは怪焰王かいえんのうのモードの流法……そして次に風の流法だ。これは『エシディシ』

と『ワムウ』の力だったか」

「そうだな……風と炎というのは実に相性が良い。燃えたぎる炎を風でより強く、より激しく燃え上がらせる事が出来るんだからなあ」

「俺に『波紋の呼吸』が使えれば、お前にダメージというダメージを与えられるんだけどなあ……。で、居たのか? 『波紋使い』って?」

「居たさ。今から20000年くらい前だったかな……まあ良い。かなり昔のことだが確かに『波紋の一族』は存在した」

20000年前というのは数字では理解していても実際のところはよく理解できない。実感が湧かないのだ。

だが、ゾイルはそれをつい昨日の出来事のように懐かしみながら、思い出しながら言葉を紡いでいく。

「俺達、柱の男……その一族は太陽に弱い代わりに絶大な力を持っていたのは原作と同じだ。『石仮面』も存在した。『エイジャの赤石』も、だ。俺達の長は他の生命体を餌として管理していた。だがな……前世での生半可な知識や与えられた良識というモノの所為で俺にはそれが嫌でしょうがなかった……我慢できなかった」

そのゾイルの拳は強く握られている。滴っている赤い血は床に落ち、ジュウジュウと音を立てながら蒸気を発生させていた。

「俺は思わず皆を、他の奴らを殺したよ……。特典で貰った力を使ってな。……跡に残ったのは殺した仲間の肉塊と廃墟、そして力も知識もない他の生命体だけだった」

「……………」

「まあ、そんな事は今はどうでも良い。それよりもお前の実力が知りたいんだ」

「ああ」

その暗くなった雰囲気を通り切るように彼は俺に向かって駆け出してきた。

「オラアアアアアア!!!」

「ソラアアアアアアア!!!」

俺の拳はゾイルの顔を、ゾイルの拳は俺の顔を強く殴りつける。その一撃はとても重く、気を全身に回らせていないと気を失っていたであろう程の攻撃だ。

その反動でお互いに少しばかり後ろに飛び跳ねる。

「強いな」

「お前もな」

俺達の間には何時の間にか、何故か青春ドラマで河原で殴りあっていた不良の様に友情が芽生えつつあった。

「……からは少しばかり力を使わせて貰うぞ」

その言葉と共に俺は吹き飛ばされる。

「!？」

「実に不思議そうな顔をしているな……簡単に言うと時を止めたんだ」

「ザ・ワールド・アルティメット 世 アルティメット・シング 界 ” ……そうか、お前は ” 究極生命体 ” ……」

「その通りだ」

確か小説に “ スタンド ” を使うことの出来る究極生命体が出来きたはず。

波紋、石仮面、エイジャの赤石、特典。思い返せばそれらしきキーワードがあつたじゃ

ないか。

そして何より、公園での出来事だ。ゾイルは太陽の下で何事も無いようにしていた。これは太陽を克服した。つまり究極生命体になっていたということだ。

柱の男だというのを確信したのならこの事に気付いても良かったはずなのに……。

「で、どうする？ まだ続けるのか」

「当たり前だろ」

相手は究極生命体。尚且つ見えない攻撃をしてくるスタンドが使える。

状況は絶望的だろう。

だが、何故か。ワクワクしているのだ。これもまたサイヤ人の血がそうさせているのか。

生きるか死ぬかではなく、勝つか負けるかという模擬戦だからこそだろうか。

「……その目……波紋の戦士を思い出すな」

「波紋の戦士だと……？」

「強く真つ直ぐな目をしている。どんなに不利な状況であろうと」

その言葉に俺は思わず笑いそうになる。

そんな事は無いのだ。何時だって俺は、前世からずっとほんの少しのことでも躓けばすぐさま諦めているのだから。

「そんな事は無いさ……。俺は何処まで行っても、何をしようと直ぐに諦める人間のクズさ」

「諦める……か。……だがそれは、引き際を見極め、判断しているということじゃないのか」

「そんな合理的で綺麗なもんじゃなさ……」

「俺にはどうでも良いことだがな……。さて、続きをするか」
目の前のゾイルはそう告げると同時に消え失せる。

「後ろか!？」

気が移動したのを確認し、後ろを振り向くと目の前に居た。

「な!？」

「『ホワイトスネイク・アルティメット』」

ゾイルの前に奇妙な人型の存在が浮き出てくる。

その姿は塩基配列が描かれている包帯状のラインが走っており顔の上半分と肩、腰の辺りは紫色の装飾品のようなもので覆われている。

ホワイトスネイク・アルティメットはブロン顔に触れ、その触れた部分からディスクが取り出される。

そして、そのディスクを自身の頭へと挿入する。

「……………」

「成る程……。サイヤ人、か……。——ッ!! これは……。変身魔法を解除しなかったのはこの所為か」

——スタンド。

幽波紋とも言う事が出来、スタンドとはパワーをもった像、ヴィジョン。

スタンドは基本的にスタンド使いにしか見えない。記録することも出来ない

スタンドに触れることが出来るのはスタンドだけ。但しスタンドからは他のモノを触ることが出来る。

そのルールの御蔭か影響なのかブロンには勿論の事、映像を観ている他の皆にも理解することは出来ない。

ゾイルは自身へと挿入していたディスクを取り出し、本来の持ち主であるブロンの頭へと挿入し直す。

「はっ!? お、俺は……。一体?」

「済まないがお前の事を見させてもらった……。閲覧させてもらったよ」

「何イ!?!」

「お前が頑なに隠しているもの……」

「……………」

「別に此処で話したり、バラたりするなんてことはしないさ。墓まで持っていく」

「よく言うぜ……究極生命体だから死なない癖に」

自分は何をされたのだろう。

相手はスタンドを使う。

相手であるゾイルは閲覧をしたといった。

其処から考えるにおそらく「ヘブンズ・ドア」かホワイトスネイクだろう。思いつくスタンドは、前世で得た知識から引つ張り出せるスタンドはそれくらいだ。

「続きだ……それとも降参するか？ スタンドに対処することは出来ないだろうしな」

「冗談じゃないぜ……。だが、どうする？ スキルメイカーを使うか？ この事は奴にも知られている筈……。……）」

「来ないのならこれで——？」

「行くぜ。スキルメイカー発動」

想像しろ。想造しろ。創造するんだ。

相手は見えない攻撃が出来るスタンド使いだ。

そのスタンドを視認、その上にそのスタンドに対して攻撃が出来、防御も出来る様になるスキルを。

「……作成、終了」

「ほう……レアスキルか。良いだろう、試してみようじゃあないか」

「うげえ……」

見える。ゾイルが出したスタンドを実際に目で見る事が、認識することが出来る。だが其処には少しばかり数えるだけでうんざりするほどの数の、最低でも3180体の程の小さな存在が居た。

遠くから見てみるとそれはまるで集合した虫の様に見え、背中にゾワツとしたモノが駆け抜ける。

「——『ハーヴェスト』……」

その言葉と共にそのスタンド達は一斉に此方に向かい襲い掛かって来る。まるでイナゴの大群が自分に向かって飛来をして来る様だ。

だがイナゴとは違い、ハーヴェストはヒトの肌を千切り取る事が出来る。気持ちの悪さと同時に大きな恐怖を感じてしまう。

「はあああああああッ!!」

俺は気を開放して、それら全ての群体を吹き飛ばす。

「これで……終りか?」

「いいや——まだ、終わりにゃ無いさ」

目の前にはまるで中世の騎士が着ていた甲冑を身に纏った人型のスタンドが立ち、手にはレイピアが握られている。

「シルバーチャリオッツ銀の戦車”か”」

「更に更にいいいいいいいいい~~~~~イイ」

そのスタンドには刀が握られている。その刀には何処か神秘的な、不思議な魅力を感じさせるものがあつた。

「”アヌビス神”？ お前は……」

「安心しろ、俺はゾイルだ。これはアヌビス神のスタンドが持つ能力をコピーしただけだからな……この刀にはやつシルバーチャリオッツの自我なんてモノは一片足りとも存在してはいない」

「銀の戦車の素早さに加えて、剣の達人のアヌビス神。更には戦う度に強くなるか……原作にも出てきたけどかなり厄介な」

「——此方から行くぞ」

シルバーチャリオッツがレイピアを突き出してくる。

その速さは目で追うにはかなりの神経と労力を使い、体力はどんどん消費されていく。

「くッ！」

その攻撃は、その速さは段々と速くなっていく。加速していく。それは感覚的には1

秒毎に2倍3倍の速さになっているかのように感じられる。

「(このままじゃあ……だりやあああああああああああああ!!!)」

気を周囲へと解放し、爆発させる。

バカの一つ覚えのように先程と同じ方法での対処だが、今の俺にはそれしか思いつかなかった。

《艦長!! アースラがかなり揺れてるんですが》

「不味いわね……そろそろ止めさせるべきかしら」

「止めて下さああああい。アースラがああああ——アースラそのものがあああああ
あ」

「ふむ……これ以上続けるとアースラが沈みかねないからな。合格だ」

「そ、そうか……」

その言葉に俺は思わずヘナヘナと座り込んでしまう。緊張が解けたからか上手く立ち上がる事が出来ない。

「もうちょっとやりたかったんだけどなあ」

そのゾイルの言葉に俺は半分同意で、もう半分は反対の気持ちを抱いていた。もっと自分の力を試してみたい。強い相手ともっと戦っていたい。

そう思っている一方で普段以上に感じた極度の緊張と体力の消費に身体は悲鳴をあげていた。

「立てるか？」

「すまねえ……」

そう言いながら差し出されたその手を掴み何とか立ち上がる。立つことは出来たが、それでもフラフラとしており今直ぐにでも倒れそうだ。

「お前は随分としつかり立ってるな……」

「鍛え方が違う。それに、お前はサイヤ人だがそれでも普通と呼べる枠組みの中の存在だ。俺は究極生命体だぞ……体力そのものが違うんだよ」

普通の枠組みとは一体何なのか。そんな取り留めもない事を考えながら俺は医務室に肩を貸してもらいながら移動する。

「そう言えば、あの刀はどうした？」

「アヌビス神？ ああ、”エニグマ”だよ。そのスタンド能力で紙の中に入れてのさ」

「へええ」

「さて。模擬戦の結果だが全員合格だ」

「おい待て……俺は確実に不合格なはずだろ？」

その志蓮の言葉にゾイルは静かに言葉を告げる。

「確かに瞬殺だったが、お前は十分に強い事が理解できた。他に似たような力を持つ奴らと戦ったことがあったが……そいつらと比べるとだいぶとマシだ。可能性を感じさせる」

「あ、ああ」

「艦長、クロノ。彼等の実力も理解できたことですし」

「ああ。そうだな」

「改めてなんですが、貴方達転生者にこの事件の解決をするにあたって協力をして欲しいのだけど」

「「はい、よろこんで」」

「凄いや。どっちもAAAクラスの魔導師だよ」

モニターにはなのはとフェイトの戦闘映像が映しだされている。

その映像の記録の際に計測した数値を見てエイミー・リミエツタははしゃいでいた。

「ああ」

「こつちの白い服の娘はクロノくんの好みっぽい可愛い娘だし」

「エイミー……そんな事はどうでも良いんだ」

「……………」

ゾイルはその映像を観ながら、クロノとエイミーの会話を聞きながら少しばかり考え事をしていった。

魔法少女リリカルなのはの元ネタ。原作はエロゲでその特典ディスクのゲームにてクロノとなのははくつついていた筈だ。

「魔力の平均値を見てもこの娘で127万、黒い服の娘で143万。最大発揮時は更にその3倍以上。クロノ君より魔力量だけなら上回っちゃってるよね」

「魔法は魔力値の大きさだけじゃない。状況に応じた応用力と的確に使用できる判断力だろ」

そのエイミーのからかいに対してクロノは自信の考えを強く述べる。

「それは勿論。信頼してるよ……アースラの切り札だもん、クロノ君は」

「あ、艦長」

「ああ、2人のデータね」

「……はい」

「確かに凄い娘達ね」

「これだけの魔力がロストログアに注ぎ込まれば次元震が起きるのも頷ける」

「あの娘達、なのはさんとユーノ君がジュエルシードを集めてる理由は分かったけど

こつちの黒い服の娘は何でなのかしらね」

「随分と必死な様子だった……何か余程強い目的があるのか」

「貴方は理解しているのかしら？」

「ああ。だが、それを教えることは出来ない……例えば上司の命令であろうと、な」

「目的、ね……まだ小さな子よね。普通に育つてればまだ母親に甘えていた年頃で

しように」

そのリンディの瞳には画面の中のフェイトを映していた。

「駄目だよ……時空管理局まで出てきたんじゃ、もうどうにもならないよ。逃げようよ……3人でどっかにさ」

「それは……駄目だよ」

時空管理局が出てきて、其処から何とか多重転移をする事でもうにか拠点に逃げお
せることが出来た。

だが、フェイトは怪我を負い、アルフは彼女を心配し弱音を吐いてしまう。

「だって……雑魚クラスなら兎も角、あいつ一流の魔導師だ。本気で捜査されたら此
処だって何時までバレずにいられるか……。あの鬼婆、あんたのかあさんだって訳分か
らないことばっか言うし、フェイトに酷い事ばっかするし」

「かあさんの事、悪く言わないで」

「言うよ！　だってあたしフェイトのことが心配だ。フェイトが悲しんでるとあたし
の胸も千切れそうに痛いんだ。フェイトが泣いてるとわたしも目と鼻の奥がツンとし
てどうしようもなくなるんだ。フェイトが泣くのも悲しむのも私、嫌なんだよ」

精神リンクが働いているのだろう。アルフはフェイトの潜在的な苦しみを感じ取り、
見抜いているのだ。

「わたしとアルフは少しだけど精神リンクしてるからね……ごめんね。アルフが痛いな
らわたしもう悲しまないし、泣かないよ」

「わたしはフェイトに笑って幸せになって欲しいだけなんだ……何で、何で分かってく
れないんだよ」

「ありがとう、アルフ。でもね、わたし……かあさんの願いを叶えてあげたいの。かあ

さんの為だけじゃない。きつと自分の為。だから、あともう少し。最後までもう少しだから……わたしと一緒に頑張ってくれる？」

アルフの頭を撫でるフェイトのその手は何処までも優しいものだった。だからこそだろうか、なおさらそれがその様子を見ているドウムにはとても辛く感じられる。

「約束して。あのひとの言いなりじゃなくて、フェイトはフェイトの為に、自分の為だけに頑張るって。そしたらわたしは必ずフェイトを守るから……」

「うん」

その2人の少女の瞳にはそれぞれの姿が映っており、涙で滲んでいる。

月の光が部屋に差し込み、そんな2人を優しく照らしていた。

《だから、僕もなのはもそちらに協力させていただきたいと》

「協力ね……」

《僕は兎も角なのはの魔力はそちらにとつても有効な戦力だと思えます。ジュエルシードの回収……あの娘達との戦闘。どちらとしてもそちらとしては便利に使える筈です。雄介達と比べると自信は無いですが……》

「ううん。なかなか考えてますね。それなら、まあ良いでしょう」

「か、母さ、艦長!!」

「手伝ってもらいましょう。此方としても切り札は温存したいもの。ね? クロノ執務官」

「……はい」

「条件は1つよ。両名とも身柄を時空管理局の預かりとする事。良くつて?」
《分かりました》

時空の狭間に建築物と思しきモノが浮かんでいる。

時の庭園だ。

その中の1つの部屋に女性が1人、静かに座っている。

「早く、早くなさい……わたし達の救いの地が——『アルハザード』が待ってるの。……わたし達の救いの地が」

プレシアは熱に魘うなされているかのように、その強い思いを口にする。

その言葉は彼女以外誰も居ないその空間に寂しく響き渡った。

海上での決戦 最後のジュエルシード

「という訳で、本日0時を以って本艦全クルーの任務はロストロギアジュエルシードの搜索と回収に変更されます」

アースラ内に存在する一室にて会議が行われている。

その会議内容は重大であり、大切な事なのでその分空気は重く、肅々と行われている。「また、本件に於いては特例として、問題のロストロギアの発見者であり結界魔導師でもある此方」

「はい。ユーノ・スクライアです」

「それから彼の協力者でもある現地の魔導師さん」

「た、高町なのはです」

その場の空気因るものか、極度の緊張に因るものなのか2人の体はガチガチとしており、声は少しばかり上ずっている様に感じられる。

「上条雄介です」

「神威志蓮」

「保和歩栄です」

「以上5名が臨時局員の扱いで事態に当たってください」

「「「よろしく願います」」」

ふと目線を上げるとクロノ執務官が此方を。否、なのはの方を見ていた。

それに気付いたなのは緊張が解けたのか彼に向けて笑顔を向けるが、クロノは顔を少し赤くして目を背ける。

その彼の行動に対してユーノはジト目で見詰めていた。

『初心だな……』

『ああ、初心だな……』

『ど、ど、ど、どどどど童貞ちゃうわ!』

『悲しいかな、この世界ではこの身体だし、どう足掻いても童貞なんだよな』

『ちくしよーめ!』

「じゃあ此処からはジュエルシードの位置特定は此方でするわ。場所が分かったら現地に向かって貰います」

「「はっ」」

「艦長、お茶です」

「有り難う」

エイミーが持つて来た湯呑みの中に大きじの砂糖を2杯とミルクを入れる。そのお茶をゴクゴクツツと喉を鳴らしながら美味しそうに飲み干していく。

後ろに居たなのは信じられないモノを見たと言わんばかりに目を見開いている。

周りのクルーは何のアクションを起こしてもいないところを見ると普段からこのようにしてお茶を飲んでいようだ。

『あれが噂の“リンディ茶”か……』

『見ただけで甘過ぎて胸焼けがしてくるぜ』

『お、そうだな』

あれはおそらく彼女なりのストレス解消法なのだろう。

普段ならば糖分の摂り過ぎだと声を大にして指摘したいところだが、その事を考える
と口になすことが出来なかった。

「そう言えば、学校の方は大丈夫なの？」

「家族と友達には説明してありますので」

とある結界内にて魔法を使った戦闘が行われていた。

彼女達の目の前には謎の生命体が飛翔している。正確には暴走したジュエルシードが現地の動物である鳥と融合したモノだ。

「捕まえた。なのは！」

魔力で編まれた鎖が暴走体の首に絡み付き、束縛し動きを止める。

「うん！」

【Sealing mode Set up】

レイジングハートから出現した魔力の束が暴走体へと向かっていく。

その鳥の頭部にⅧという表示が浮き出てくる。

【Stand by ready】

「リリカル・マジカル、ジュエルシードシリアルⅧ…封印！」

【Sealing】

封印が完了されたジュエルシードは青い宝石となりレイジングハートに吸い込まれるように収納される。

【Receipt No.Ⅷ】

「状況終了です。ジュエルシードNo.Ⅷ、無事確保。お疲れ様。なのはちゃん、ユーノ

君

『はい』

「ゲートを作るね。其処で待つてて」

なのはとユーノがジュエルシードを封印しているのをアースラからサーチャーを通して空間モニターでクルー一同は観ていた。

「うーん、2人共なかなか優秀だわ。このままうちに欲しいくらいかも」

観ていたリンディ提督はその2人の働きぶりに満更でもなく、満足しているようだ。

「この黒い服の娘、フェイトって言ったけ」

「フェイト・テストアロツサ。かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」

モニターにはそのフェイトの姿が映っている。

「へえ。そうなの？」

エイミイのその疑問に対してスラスラと記憶の中にある事件を思い出して言葉を紡いでいくクロノ。

「だいぶ前の話だよ。『ミッドチルダ』の中央都市で、魔法実験の最中に次元干渉事故を起こして追放されてしまった大魔導師」

「その人の関係者？」

「さあね……本名とは限らない」

「ああ……やつぱり駄目だ、見つからない。フェイトちゃんつたらよつぽど高性能のジヤマー結界を使つてるみたい」

「使い魔の犬、多分此奴がサポートしてるんだ。此奴だけじゃない……此奴も」

その画面にはアルフとドゥームが映しだされている。

アルフに対して厳密には狼の部類に入るのだが、元イヌ科の生き物なので別段問題ないだろう。本人は否定するだろうが。

そしてドゥームの方だ。彼の力は未だに未知数だ。

記録の中では木と融合したジュエルシードの暴走体との戦闘時に炎を使っているよ
うだが、話を聞く限りでは相手の稀少技能であるレアスキルをコピーする。

稀少技能であるレアスキルというのは1人に尽き1つというのが原則であり、唯でさえ稀少というだけあって持っている人は少なく、その能力はその人によるものなので様々だ。

これはレアスキルの基本前提を大きく覆す能力だ。

「もう2個もこつちが発見したジュエルシードを奪われちゃつてる」

「しつかり捜して捕捉してくれ。頼りにしてるんだから」

「はいはい」

そのクロノの言葉にエイミイはうんざりしながらも頼られていることを嬉しく思い、再び搜索を始めるのだった。

「さて、気に付いての説明と特訓なのだが」

「気は前に説明した通りだ。覚えているか？」

アースラの訓練室にて俺達転生者組となのは、ユーノ、クロノは集合してそれぞれの持つ力と技術について最低限の事を話している。

「確か、生命体ならば必ずと言っていいくらいに持っている体内エネルギーの比喩だったかな？」

「その通りだ。流石だよ、ユーノ」

「そして、その気を扱うことで弾のようにして放つことや空を飛ぶことが出来る……」

「そう。その飛ぶ技術のことは『舞空術』と言うんだ。更に身体中にその気を行き渡らせる」と

「!？」

「こんな風にかなりのスピードで移動することが出来る」

そう言いながら彼等の後ろへと移動する。その際に、ソニックウェーブなどの衝撃波が発生しないように細心の注意を払いながらだが。

「何時の間に後ろに」

「それを教えてくれるということだが……？」

「ああ。教えるよ」

「ゆっくり自分の中の力を引き出すんだ」

そう言いながら俺は自らの両掌の間に気のエネルギーを集中させ増幅させていく。次第にそれはカタチを作っていく、目に見える程に大きくハッキリとしたカタチになっていく。

「[[[[[………]]]]」

「ほら、こんな感じだ」

「こんな感じだって……ね、簡単だよ？ みたいに言われてもなあ」

そう言いながらも皆はマジマジと目の前のそれを見詰めている。

そのエネルギーを見ているだけで不思議と体の底からポカポカとした感じに暖かくなり、安心感を感じさせる。

「さて、やってみるんだ。静かに……落ち着いて……」

「……ああ」

「「「「「……………」」」」」」

皆、目を閉じながら気を出そうと努力をし始める。

だが、そう簡単には出来なくて少しばかり体に無駄な力が入ってしまった。

「駄目だよ、力りきんじゃ。落ち着いてしないと気は引き出せないよ。集中しないとね」

「うがーっ！ 出来るわけねーだろ、こんなのっ!!」

「そう怒るなよ、ゾイルを見ろよ。出来てるぜ」

髪を掻き筆りながら愚痴る志蓮に対して、ゾイルの方を指差す。

彼の手には大きな気弾が出来ていた。

「ほう……これが気という奴か。成る程な」

「流石アルティミット・シイング」

「是位は造作も無いことよ。ヒトのみで出来るのであるのなら、至極当然に究極生命体にも出来る事。あたりまえだよなあ」

「彼奴は規格外だ……兎に角頑張ろう……」

【Please do its best. You can if lady, master】

「ありがとう、レイジングハート。がんばるよ」

そのクロノとレイジングハートの言葉に皆は再び意識を集中させる。力み過ぎているのか額には大粒の汗が流れ、ポタポタと訓練場の床に落ちていく。

「いいぞ、その調子だ……どんどん気を引き出していけ、生徒たちよ……ふーっふっふ
あーはあーはあーはーっわうああーはあーはあーはあーはあーはっわふあっはっはっ
はっはあーっわわひあっはっはっはっわわ」

彼等の掌にはドンドンと気が蓄積され目に見えるカタチで大きくなりつつあった。その気は更に増大し、小さなエネルギー弾として放つ事が出くらしいの大きさまでになる。

「出来たじゃないか。それが気だ」

「不思議な感じ……」

「魔法とは……リンカーコアから抽出される魔力とはまた違った感じだ」

「これが……気……」

「やったぜ！」

「成し遂げたぜ！」

「だが、何だろう？ 凄い疲れるといっか……」

「初めて気を引き出したんだ、仕方ないね」

「だけど、ゾイルくんは全然疲れていないみたいだし……その上、飛んでいるみたいだし」

「……ああ」

目を向けると、彼は訓練場の天井近くをビュンビュンと自由自在に飛び回っていた。その速さは勿論、目で追うことなどそう簡単には出来ず、機械類で捕捉することも難しい。残像が目に入るので辛うじて動いているのが、飛んでいると云う事を認識できる程度のスピードだ。

「ま、彼奴は規格外だから……才能の塊だから……」

「意外と簡単なものだな、舞空術というものは。気の基本さえ習得すればこんなもの」
ゾイルは1人口に出しながら、下でへたり込んでいる彼等を見下ろしながら降下して来る。

「簡単って……そんな簡単なのかよ?」

「うーん……人によるかな」

「そんなことはどうでも良い。俺達に空の飛び方を、舞空術を教えろ。ササツとだ——
ハリー、ハリー、ハリーハリーハリーハリー」

「そうだよ（便乗）」

「今日は此処までだ。気の修得も本当はかなり時間を掛けるものなんだぞ。体力も使

うし、気も使う。疲れているだろうし此れ迄だ。続きはまた明日に、な」

仕方ねえなど言いつつ雄介と志蓮は訓練室を後にして退出していく。

憎まれ口を叩く彼等であるが、背中の方から見ているだけでも相当の疲労が襲っていることは見て取れた。

「さて、解散だ」

「今日も空振りだな」

「そうだな」

俺と雄介、志蓮の3人は食堂で軽食を口に入れていた。

少し離れた机の方になのはとユーノが居る。

「確か、海の中だったような気がするんだよな」

「原作通りならな」

「ジュエルシードのあった海ってさ、*“闇の書の闇”*を倒す時の場所と同じだよな？」

「多分な」

「そんなことよりおうどん食べたい」

現在、アースラ組である俺達が所持しているジュエルシードは9個。

テストロツサ組は6個。

まだ見つかつてない残りのジュエルシードは6個。

薄く消えかかっている前世の記憶から引つ張りだした知識を元にこの先の展開のこ
とを相談する。

その事を周りに聞かれぬように声を出来る限りの最小限に抑えて。

「お、此処に居たか」

「ゾイルか。よう」

「仕事の方は良いのかよ？」

「休憩だ」

食堂に入ってきたゾイルを迎え、現在確認出来る転生者はドウームを除き、この4人
だ。

彼は椅子に座り、此方の話に参加する。

「そう言えば、お前って一応柱の男だよな？ 何で、触れても吸収されないんだ？」

「一応って……」

「究極生命体だからな、体表面の細胞を変えることなんて造作も無いことよ」

「成る程な。究極、生命体……ね」

「もしかしたら結構長く掛かるかもね。なのは、ごめんね」

「ふえ？」

「寂しくない？」

「別にちつとも寂しくないよ、ユーノくんと……皆と一緒だし。独りぼっちでも全然平気。ちつちやい頃はよく独りだったから」

ユーノの言葉になのはは手元にあつたクッキーを口に運び、笑いながら否定する。小さい頃と云うのは幼稚園児の頃の事だろうか。

「家、わたしがまだちつちやい頃にね……お父さんが仕事で大怪我しちゃって暫くベッドの上から動けなくなつたことがあるの。喫茶店も始めたばかりで今ほど人気がなかつたから、お母さんとお兄ちゃんは何時もずっと忙しくて……。お姉ちゃんはずつとお父さんの看病で……。だからわたし割と最近まで、雄介くんと出会うまで家で独りで居ることが多かつたの」

まだ数年しか経過していない筈なのに、思い出しながら語るなのはの瞳は物憂げで懐かしさを感じているかのように思われる。

「だから、結構慣れてるの」

「そっか……」

「そう言えばわたし、ユーノくんの家族の事とかあんまり知らないね」

「ああ。僕は元々一人だったから」

「そうなの？」

「両親は居なかったんだけど、部族の皆に育ててもらったから。だから、スクライアの一族皆が僕の家族」

「そっか…いろいろな片付けたら、もっと沢山お話しようね」

「うん、いろいろ片付いたらね」

《エマーゼンシー。捜索域の海上にて大型の魔力反応を感知》

「!？」

「……「アルカス・クルタス・エイギアス」……「煌めきたる天神よ。今導きのもと、降りきたれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル」」

海鳴公園の近くの海上でフェイトは大きな魔法陣を展開し、呪文詠唱を唱え、魔法の行使準備を行なっている。

兄であるドウムの認識阻害の魔法により公園から覗いても、何の変哲も無い唯の海に見える。

だが、その海から流れてくる風は明らかに不穏なことが起きていることを感じさせ

る。

「ジュエルシードは多分海の中。だから、海に大きな電気流を叩き込んで強制発動させて一気に位置を特定する。プランは間違っていないけど、でも。フェイト……」

「〃撃つは雷、響くは轟雷。アルカス・クルタス・エイギアス〃……」

フェイト達の頭上には、バチバチとした電撃を帯びた大きな魔力スフィアが複数出現する。

「はああああつ!! はあはあはあ……見付けた……残り6つ」

「(こんだけの魔力を撃ち込んで、更に全てを封印して。こんなのフェイトとドゥームの合計魔力でも絶対に限界超えだ)」

「アルフ、サポートをお願い」

「ああ、任せといて……(だから誰が来ようが、何が起きようが……わたしが絶対守ってやる)」

暴走を始めるジュエルシードを瞳に映しながら、アルフは強く心に誓った。

「行くよ、バルディツシュ。……がんばろう」

「何とも呆れた無茶をする娘達だわ」

「……無謀ですね。間違はなく自滅します。あれは個人が出せる魔力の限界を超えている」

ブリッジのモニターには荒れ狂う波を避けながらジュエルシールドの方へと近づこうとしているフェイト・テスタロッサの姿が映しだされていた。

「フェイトちゃん！」

ドアが開き、駆けながら入室して来たのはなのはを始めとした地球の魔導師組とゾイル執務官だった。

「あの、わたし急いで現場に」

「その必要は無いよ。放っておけばあの娘は自滅する。仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところで叩けば良い」

「返ってきたクロノの返事は冷たく強いものだった。」

「でも……」

「今のうちに捕獲の準備を」

それは執務官としての仕事を全うするためか、あくまで冷静に判断し、指示を飛ばす。だが、モニターに映る彼女を目に入れると、それは冷酷に感じさせられる。

「私達は常に最善の選択をしないとイケないわ。残酷に見えるかもしれないけど、此れが現実……」

「フェイト!? フェイトッ！」

封印をしようと近づくも、荒れ狂う波により吹き飛ばされる少女と使い魔。

彼女の手にあるバルディツシユは主の魔力供給が足りない所為か魔力刃が明滅し消失する。

「だが、このまま放っておけばどのようなことになるか分からない。次元震が起こるか……次元断層が起こるか……。少なくとも近くの街、俺等の地元は大きな被害を受けるだろうな」

モニターを見ながら俺は思った事をそのまま口にする。

考えれば考える程悪い方向にしか思考は動かさず、嫌な未来しか見えてこない。

原作通りならばそんなことは無いはずなのだが、此処に転生者という存在が居るのだ。何が起きても不思議ではない。

『行つて。なのは、行つて』

『ユーノくん?』

『僕がゲートを開くから行ってあの娘を』

『でもユーノくん…わたしがあの娘と、フェイトちゃんと話をしたのはユーノくんとは』

『関係ないかもしれない。だけど僕はなのはが困ってるなら力になりたい…なのはが僕にそうしてくれたみたいに』

「……………」

「というこゝで行ってきますね、執務官殿。仕事熱心なのも良いですが後のことというよりも、あらゆる可能性もしっかりと考えて」

ユーノの後ろの空間が突如光りだす。転移魔法のゲートの様だ。

念話を終えて、決断をした彼女達を確認すると同時にゾイルと雄介を除いた俺達転生者組はなのはと共に開かれたゲートへと向かう。

「君は!? 待て! 何処に行くつもりだ?」

「決まってるじゃないですか…:フェイトの居る場所にですよ。行こうか、なのは」「ごめんなさい…高町なのは、指示を無視して勝手な行動を取ります」

「あの娘の結界内へ、転送!!」

そのユーノの言葉と同時に俺達の目の前の景色は一変する。

転移した先は遙か上空だった。

慣性の法則に従い、重力に、引力に引かれて身体はグングンと海の方へと落ちていく。普段ならば景色を楽しんでいるだろうが、今はそんなことをしている時ではないだろう。

「行くよ、レイジングハート。風は空に、星は天に。輝く光はこの腕に、不屈の心はこの胸に！」レイジングハート、セーット・アープ！」

〔Stand by ready〕

簡略化した起動詠唱呪文を口にし、バリアジャケットを構築し着替えるのは。

「!？」

転移してきた魔力を感じたのかフェイトは上空を覗き、仰ぎ見る。

分厚い雲から出、降り立つなのはの姿はバリアジャケットの色の所為か、遠くから見ると鳥。否、天使の様に見えるだろう。

「フェイトの邪魔をするなあ！」

俺達の姿を見とめたアルフは邪魔をしに来たのかと勘違いをして此方に攻撃を仕掛けようとしてくる。

「勘違いするな。別にお前達と戦うために来た訳ではない」

その言葉と共に、エルキドゥ天の鎖で一時的にアルフの動きを封じる志蓮。

「バカな。何やってるんだ、君達は」

『ごめんなさい、命令無視は後でちゃんと謝ります。だけど放つとけないの』
念話で返事をするなのはの瞳を見て、一瞬呑み込まれたじろぐクロノ。

『あの娘もきつと独りぼっちなの……独りきりが寂しいのは、わたし少しだけ分かるからー』

「そう言えば、貴方は行かないのかしら？」

「俺、まだ飛べないし……」

リンディ提督のその疑問に雄介はモニターを強く睨みつけながら言葉を返す。その拳は強く握りしめられていた。

「まずはジュエルシードを停止させないと不味いことになる」

「来たのか、ユーノ！」

「うん、行こう！」

志蓮は天の鎖エルキドゥを解除して、自身の転移を終え先行するユーノを追いかける。

海上はフェイトとドゥームの魔力により暴走したジュエルシードを中心に大きな水の竜巻が沢山発生している。

「だから今は、封印のサポートを！」

ユーノの魔力で出来た鎖が巻き付き竜巻の動きを封じる。

志蓮もまた天エルキドゥの鎖に自身の魔力を付加させ、竜巻の動きを封じる。

天エルキドゥの鎖は“神性”を持つ者に絶大な効果を誇る鎖だ。だが、例え対象が神性持ちでは無くても、強固な鎖である事に変わりは無い。

それは、確実に竜巻の動きを封じた。

「うっ……あー！」

「……………」

魔力鎖により動きを止めようとするもその力は絶大で振り回されそうになるユーノ。だが其処にアルフが参加し、竜巻を3人で一箇所に集めていく。

「フェイトちゃん！ 手伝って、ジュエルシードを止めよう！」

なのはの意思に応えるかのようにレイジングハートから光の帯が伸び、バルディツシユに吸い込まれる。

【Power charge.】

【Supplying complete】

“Divide Energy”だ。此れによりなのは魔力がフェイトへと供給された。

バルドイツシユは先程まで魔力刃を出せなかったが、この魔法によりフェイトからの十分な魔力供給が成され、新たに形成して刃を出現させる。

「2人できつちり半分」

「……………」

見つめるフェイトになのは唯頷く。

今はそれだけで充分だった。

「随分久しぶりだな、ドウーム」

「そんなに経っていたか？」

「気の所為だな……。今はそれよりも」

「ああ、ジュエルシードの封印だ」

目の前には荒れ狂う波と複数の大竜巻。

その竜巻にはフェイトとドウームの魔力が流れ込んでいる為か、強力で膨大な電撃を帯びている。

「にしても、あの雷属性は厄介だな」

「すまない……。俺達の所為か？」

「いや、別に謝るほどの事じゃねえ。平均的な魔導師にとつてはかなり骨が折れるだろうなって思っただけさ」

そんな軽口を叩きながら俺とドウームは魔力を、気を高めていく。

「そうか……。それじゃ」

「止めますか」

ドウームはサイコキネシスで、俺は皆が止めた竜巻をギャラクティカドーナツで纏め締め上げる。

「皆が止めてくれてる。だから今の内。2人でせーの、で一気に封印！」

【Sealing mode】

【Sealing form Set up】

悩む主の背中を一押するようにバルディッシュは封印のための形態へと自身の意思で変形する。

「——バルディッシュ……？」

「ディバインバスター、フルパワー……いけるね？」

【All right, my master】

なのはの足元にある魔法陣が大きく広がる。

フェイトもまた決意したのか、彼女の足元に巨大な魔法陣が出現する。

「せーのっ!」

「サンダーアアツ!!」

「デイバイイイインンツ!!」

「レイジイイイイツツ!!!」 / バスタアアアアアアアツツ!!!」

それぞれのデバイスから放たれた魔力砲撃が暴走する6個のジュエルシードに命中する。その際に発生した衝撃波は凄まじく、近海に存在した砂浜にまで衝撃が届き、中規模の津波を巻き起こす。

結界魔法を使用していないと大きな被害が発生していたことだろう。

「なのはの奴、少量だが気を魔力に込めやがったな……未恐ろしい娘だぜ」
砲撃時に僅かだが魔力と共に気を感じ取れた。

ほんの少し教えたただけだというのに短時間でモノにし、更に応用までするとは御神の血が流れ、戦闘民族だというのは本当かもしれないと背中に汗が流れヒヤツとする。

「ジュエルシード、6個全ての封印を確認しました」

「転生者でもないのに何て出鱈目な」

「……でも凄いわ」

アースラ内から映像で見ているクロノ達はその暴走している複数のジュエルシードを同時に封印した彼女達とその魔力に驚きを隠せなかった。

封印されたジュエルシードが海の底から空へと浮かび上がってくる。

青い宝石を挟み、なのはとフェイトはお互いを見つめ合っていた。

そのジュエルシードは光が反射し、それぞれの少女の姿が映しだされている。

「友達に、なりたいんだ……」

「！」

なのはが自身の思いを告げ、フェイトはそれに対し困惑する。

その時間はほんの少し。本当に瞬間的なモノだったのだろう。

だが俺達には長く、とても長く、数分間のように感じられた。

「——！ 来たか……」

《次元干渉!?! 別次元から本艦及び、戦闘区域に向けて魔力攻撃来ます。あと、6秒

!!

「!?」

同じタイミングでアースラの方でも異常は感知された。

艦内には大きな警報音がけたましく鳴り響いている。

その瞬間、アースラは攻撃を受け大きく船体を揺らす。

上空から雷が海上に落ちて、大きく水が跳ね上がる。

「——!? かあさん?」

空には紫色の大きな雷が光り、ゴロゴロと爆音を立てている。

その1つがフェイトに当たり、彼女は小さな身体からは想像できないほどの大きな悲鳴を上げる。

雷の直撃を受けて気を失い落ちていく彼女を抱え、アルフはジュエルシールドへと向かう。

だが其処に、転移して来たのかクロノ執務官が彼女の行く手を阻む。

「邪魔ア、するなああアアアッ!!」

手の平に発生させた魔力弾を爆発させて、クロノ執務官を吹き飛ばす。

ジュエルシードのある場所へと向かうが、其処には1つも残ってはいなかった。下を見るとクロノ執務官の手には3つのジュエルシードが握られている。

「クツ……」

「何をしている……。撤退だぞ、アルフ」

声を掛けたドウームの手に残りの3つのジュエルシードが握られていた。

「フンツ!!」

海面に向けて魔力弾を撃ち、小規模ながら爆発を起こし撤退をしていくテストタロツサ組。

気を失った主を抱えている狼の瞳は何処までも鋭く、強く険しい物だった。

「逃走するわ、捕捉を」

「駄目です。雷撃で機能が停止」

警報が鳴り響いている艦内でリンディ提督は追跡の命令を出す、予想以上に強力な魔力攻撃だったのかセンサーの類は一時的に使用不可能になっていた。

「機能回復まであと25秒……。追い切れません!」

「……。ふう……。機能回復まで対魔力防御。次弾に備えて」

「はい」

「それから、皆を回収します」

テストロッサ組が撤退すると海の上は嘘のように静まり返った。

先程まで強く光り鳴り響いていた雷鳴はピタリと止まり、消え失せていた。

仲直り 大きな犬って、アルフさん？

《5人共、戻って来て》

「了解……」

《で、なのはさんとユーノ君、保栄君、志蓮君には私直々のお叱りタイムです》

降り落ちてくる水滴の中で、聞こえてくるリンディ提督のその言葉には怒りと呆れなどの感情が入り混じったものに感じ取ることが出来た。

「指示や命令を守るのは個人のみならず、集団を守る為のルールです。勝手な判断や行動が貴方達だけでなく周囲の人達を危険に巻き込んだかもしれないという事。それは分かりますね？」

「はい……」

「（思わず生意気な事を口走ったり、行動に走っちゃったけどどうしよう……。絶対怒ってるよね。というか怒っているに違いない。嫌われたかな、幻滅されたかな……。どうしようどうしよう。やべえよ、やべえよ……。）」

「本来なら厳罰に処すところですが」

聞いていただけだと単純に怒っている様に感じられるが、その言葉には確かに優しさが有り、此方の事を想つてのことだということが理解できる。

だがそれは普段通りの心持ちならば理解できるといふ事だ。今の俺は自分の考えなしの行動を悔やみ、その事で頭が一杯で周りの事など見えはせず、声も聞こえない状態だ。

「(教えた途端に簡単に使つてしまうなんて……。なのはは……。これが天性の才能というものか。クソツ……。俺の才能は与えられたモノで無理やり創り出したものだしな……。すげえよな、本物は)」

「……………」

志蓮の方かというと目を閉じながら何処吹く風といった感じにリンディ提督の御小言を聞き流している。右から左へと、その言葉はただ無意味に耳の中を通り過ぎていくだけだ。

「結果として幾つか得るところがありました。抛つて今回の事については不問とします。ただし、2度目は在りませんよ。良いですね？」

「はい」

「すみませんでした」

その2人の素直な謝罪の言葉にリンディ提督は一息付く。

「さて、問題はこれからね」

「クロノ、事件の大意について何か心当たりは？」

「はい。エイミイ、モニターに」

《はいはい》

机の真ん中に紫色の髪をした妙齢の女性が映しだされる。

「——あらー！」

「そう。僕達と同じミッドチルダ出身の魔導師、プレシア・テストロツサ。専門は次元航行エネルギー開発。偉大な魔導師でありながら違法研究と事故によって放逐された人物です。登録データと先の魔力波動も一致しています。そして、あの少女フェイトはおそらく……」

「フェイトちゃん……あの時母さんって」

先程の海での出来事を、雷に撃たれたフェイトの言葉を思い出すなのは。

「……親子、ね」

「そ、その……驚いてたって言うより何だか怖がっているみたいでした」

「エイミイ。プレシア女史についてももう少し詳しいデータを出せる？ 放逐後の足取

り。家族関係。その他何でも」

《はいはい、直ぐ探します》

「ん？ 今何でも」

『黙っている雄介。今はそういう雰囲気じゃないのはわかっているだろ？』

『わかっているさ。此れ以上は巫山戯ないよ』

「（この人がフェイトちゃんのお母さん……）」

時の庭園。

其処ではまた鞭で何かを叩く音が、小さな少女の悲鳴が響き渡っていた。

撓る鞭は未成熟な身体を強く叩き、生傷をつくっていく。振られる度にまた1つまた1つと新たな傷が増えていき、少女はただその痛みに口を閉ざしながら耐えることしか出来なかった。

「はあはあはあ……あれだけの好機を前にして唯ぼうつとしているなんて」

「（めん……なさい……）」

少女の声は今にも消えそうな程とても小さい。それは度重なる痛みの所為か、それとも母親に対して申し訳ない気持ちと恐れを抱いている為か、声は掠れ聞き取ることが難しい。耳を澄ませば辛うじて聞き取ることが出来るくらいの大きさだ。

「酷いわフェイト、あなたはそんなにかあさんを悲しませたいの？」

その言葉と共に振り上げられる鞭。再びプレシアはフェイトへと向けて、手に持ったその鞭を少女の身体に叩きつける。

フェイトは、眼を瞑りその痛みに耐えながら先程のなのはの言葉を思い出していた。

「プレシア・テスタロッサ。ミッドの歴史で26年前は中央技術開発局の第三局長でしたが、当時彼女個人が開発していた“次元航行エネルギー駆動炉”、“ヒュードラ”使用の際、違法な材料を以って実験を行い失敗。結果的に中規模次元震を起こした事が元で中央を追われて地方へと異動になりました。随分もめたらしいです。失敗は結果に過ぎず実験材料にも違法性は無かったと。辺境に異動後も数年間は技術開発に携わっていました。暫く後、行方不明になって。……それつきりですね」

調べたデータを読み、述べていくエイミィ。

その口から出て来る情報は概ね原作通りで転生者組は、その事実に対して胸糞の悪良い気持ちを抱くと同時に、大きな変化が無いことにホッと胸を撫で下ろす。

「家族と行方不明になる前の行動は？」

「その辺のデータは綺麗サッパリ抹消されちゃってます。今、本局に問い合わせて調

べて貰っていますので」

「時間はどれくらい？」

「一両日中には」

「……ふむ。プレシア女史も、フェイトちゃんもあれだけの魔力を放出した直後では早々動きは取れないでしょう。その間にアースラのシールド強化もしないといけないし……」

懸念とされるテストタロツサ組の行動、遠隔地からの魔法攻撃、シールド機能の麻痺。彼女達の行動は無いとしても、機能の回復や情報収集と整理にはそれなりに時間がかかるものだ。

「貴方達、一休みしておいた方が良いわね」

「あ、でも……」

「特になのはさんはあまり学校を休みつばなしでも良くないでしょう。一時帰宅を許可します。御家族と学校に少し顔見せておいた方が良いでしょう」

学校の方は理由をぼかして休学をしている。休学と言ってもほんの短期間だ。

理由の方はしつかりと説明をしていないし、皆の家族やクラスメイトには心配をさせてるであろうが為に顔を出しておかないといけないであろう。

「俺達も学生なんだけどな……」

「……はい」

そのリンディ提督の言葉には釈然としない気分を抱えながら、同意する。

「フェイト！ フェイトッ!!」

冷たい床に横たわる自身の主に驚き、走りながら声をかけるアルフ。

「フェイト……」

フェイトの身体はボロボロで至るところに傷が出来ている。その傷は、それだけプレシアの鞭によるしつけが酷いものだという事を物語っている。バリアジャケットにより、その部分だけ傷が出来ていないのが幸いだということだろうか。

主であるフェイトを床に座りながら抱き抱える。

彼女の無事を確認すると同時に顔を上げるアルフ。その使い魔の眼には涙と強い怒りが確かに感じ取る事が出来る。

「たった9つ。此れでは次元震を起こせるけどアルハザードには届かない」
宙に浮かんだ9つのジュエルシード。それらは鈍い光を放ちながらプレシアの前に並んでいる。

「——カハツ……ゲホゲホツゴホゴホツ……もうあまり時間がないわ。私にもッアリシアにも」

咳をし、手を口元に持つていくプレシア。

それと同時にドアが蹴破られ何者かがこの部屋に入り込んで来た。蹴破られたドアとその周囲にあつた壁を壊した際に発生した煙の中を一人の娘は歩を進めていく。

「……フツ」

その足取りは重く強い。その歩き方から彼女は何か強い感情を抱えている事が理解出来る。

「はあっ！——!？」

振り上げられた拳は張られた障壁により防がれる。そして反動に因るものなのかアルフの身体は数歩分後ろに吹き飛ばされてしまった。

それでも尚、彼女はそのバリアに向かい攻撃を続けていく。それは傷ついた主の為を思つての事なのか、怒りをその拳にのせてひたすらに障壁を叩き続ける。

「あんたははおやで、あの娘はあんたの娘だろう！ あんなに頑張つてる娘に、あんなに一生懸命な娘に何であんな酷い事が出来るんだよっ!!」

障壁をぶち破りプレシアの胸ぐらを掴み取る。

彼女の言葉には大きな怒気が含まれており、それが心の底から主であるフェイトの事

を思っているというのを理解させてくる。

「!?」

だが、そんな彼女の言葉を無視しプレシアは魔法に依る衝撃波でアルフを突き飛ばす。

吹き飛ばされ近くにあった支柱を壊し、土埃が舞い上がる。

「あのこは使い魔のつくり方が下手ね……余分な感情が多過ぎるわ」

「フェイトは——あんたの娘はあんたに笑って欲しくて、優しいあんたに戻って欲しくて……あんなに！——ッ！」

吹き飛ばされた際に出来た傷が痛みぶつきたい言葉は口から出ず途切れてしまう。

「邪魔よ、消えなさい!!」

展開した杖状のデバイスを使用し魔法を行使するプレシア。

「!?」

足元に魔法を放ち時の庭園から脱出するアルフ。

その彼女の身体には主人ほどで沢山では無いにしろ大きな傷が出来ていた。

「(何処でも良い、転移しなきゃ……ごめんフェイト、少しだけ待って……)」

「逃げたのね……!? ……私は何を？ フェイトに、アルフに何て事を……私は、私は、わた——」

「おまえは悪くはない。アリシアを蘇らせるのであろう？　もう一度逢いたいのであろう？　なら別に問題は無いはずだ……あいつは、あいつらは人形だ。計画に必要な駒にすぎない。そう、駒だ」

「駒……？」

「そうだ。あれはただの道具だ。何も苦しむ必要は無い。オマエはただしい……娘と、たった一人の娘と逢う為の計画。絶対に成功させなくては、なああ」

「……フェイトは駒。ドウムも、アルフも駒。計画……。嗚呼、アリシア……」
物陰に隠れている存在がプレシアにネットリとした感じに声をかける。

それに対しプレシアは戸惑いながらもその言葉を受け入れていく。

影に隠れているそれはヒトとは違う異形の姿をし、口元をニタつと大きく歪めていた。

「フェイト、起きなさいフェイト」

「……はい、母さん」

気絶しているフェイトに声をかけ起こすプレシア。

彼女はフェイトを見下ろしながら手にした宝石をナンバー毎に宙に浮かべる。

冷たい床で横になりながらフェイトは自身のははおやの言葉に耳を傾ける。

「あなたが手に入れてきたジュエルシード9つ、これじゃ足りないの。最低でもあと5つ。出来ればそれ以上……急いで手に入れて来て、かあさんの為に」

「はい。……アルフ？」

「ああ。あのこは逃げ出したわ。怖いからもう嫌だつて……必要ならもつと良い使い魔を用意するわ。忘れないで、あなたのホントウのミカタはかあさんだけ。良いわね？

フエイト」

「はい……母さん」

そのプレシアの言葉は毒のようにフエイトの心に強く染みこんでいく。再び彼女ははおやであるプレシアの為に地球に行く準備を始める。

「送信つと」

「アリサお嬢様、何か良いお知らせでも？」

「別に……。普通のメールよ」

塾などのお稽古の帰りだろうか。

アリサ・バニングスは専属の執事である鮫島の運転による車で帰宅をしている途中だ。

携帯電話を嬉しそうに触っているアリスの様子をルームミラーを通し見て鮫島も自身の様に嬉しく感じ、思わず頬を緩める。

「!? 鮫島、ちよつと止めて」

その言葉に従い車を道路の端へと停車させる鮫島。

アリスはドアを開き道路から少し離れた場所に向かい走りだす。

「やつぱり大型犬……」

其処には傷を負い、血を流している大きな犬が横たわっていた。

その犬は意識を失っているのか近づいても反応が無い。呼吸をしている為かお腹が動いているのを見る限り生きている事だけは確かだ。

「怪我をしていますな。かなり酷い様です」

「でも、まだ生きてる。鮫島」

「心得ています」

「よし。久しぶりの自宅だ、修行だ、訓練だ！」

俺はリンディ提督の有難い言葉により、自宅へ帰宅していた。

リンディ提督は家に来て両親に説明をすと言ってきたのだが何とか断る事が出来

た。

「全く……苦労したぜ、しつこいんだからな」

そんな事を愚痴りながら地下の修行室へと移動する。

ほんの少ししか開けていない筈なのにそれが本当に久し振りの様に感じられた。

「さて、と……。身体は鈍ってないよな。それじゃ、やりますか」

呼吸を整えて気を少しずつ高めていく。

体の底から沸き上がってくる気は少しずつ大きくなり大気を、空間内の空気を震わせていく。

「はあ……ハアハアハア……」

額に流れる汗がポタポタと床に落ちていく。

髪の毛が逆立ち、黄金色に輝く。目は両方共緑色に変化していた。

「此処からだよな、問題は」

一呼吸置いて、気をまた高めていく。

高めた気は目に見える形でオーラとなり周囲を必要以上に光り照らしていく。

「ダメか……。壁が大きいぜ」

原作のドラゴンボールに出て来る孫悟飯の様に強大で、強烈で、鮮烈で、劇的で純粋な怒りが必要なのだろうか。

その怒りというのが、また大きな壁であり山なのである。登り方の分からない山。事前情報も無しに、装備もなしにエベレストを登ろうとしているかのようにも感じられる。

「スキルを使えば良いのかもしれないけどよ」

何かが違う。何かが。

スキルメイカーで変身できるスキルを、レアスキルを創り出せば簡単に超サイヤ人2スーパースイヤジンの壁を越える事が出来るだろう。

だが、そんな事をする、スキルを使うと此れまでの努力が無駄に、無意味に、努力を裏切る様な気がしてならないのだ。

そんな事をしてしまえば、前世での自分とまた同じ様な事になるのではないか。それが不安で、怖くて、恐くて、魅力的で、楽そうでそちらに惹かれてしまう。引かれてしまうのだ。

「ダメだよな、こんなんじゃないよ……皆は必死こいて、足掻いて、死にそうになりながら覚醒したり強くなったりしてるとのにさ……」

己の中にあるのはそのスキルの誘惑と努力をするべきだという考え、そして何よりも

姿だった。

その手には犬用のお皿が握られており、その横には犬が2匹。犬種の違う犬2匹と女の子1人が様子を伺ってきている。

2匹の犬は、主である少女を守る様に横で御座りをしている。

「あんた頑丈に出来てるのねえ。あんなに怪我してたのに命に別状は無いってさ。怪我が治るまでは家で面倒見てあげるからさ。安心して良いよ」

そう言いながらアリサは檻を少し開き、餌の入った皿を入れる。

そして怪我をした大型犬であるアルフの頭を撫でる。

その優しさにアルフは撫でられながら思わず目を閉じ、温泉での出来事を思い出す。

「あ！ あの娘の友達なんだ……」

「ほら。柔らかいドッグフード何だけど食べられる？」

その思いやりにアルフは応えるべく差し出された食事を口に入れていく。御腹が空いていたのか思わずがつつくようにムシャムシャと食べるアルフ。

「そんなに食欲あるなら心配ないね。食べたらゆつくり休んで早く良くなりなね」

その食べっぷりに驚きつつも安心するアリサ。

そのアルフに向けた言葉は優しく、夜空に吸い込まれるように消えていった。

「なのはちゃん！ みんな！ 良かった、元気で」

お互いの手を握りながら再開を喜ぶのはとすずかの2人。少しの期間しか休んでいないはずなのにかかなりの長期間会っていないかのような素振りだ。

「うん、ありがとうすずかちゃん。アリサちゃんもごめんね、心配かけて」

「まあ、良かったわ元気で」

そのアリサの言葉に思わず笑う2人。

仲が良いという事は本当に良いものだ。

「そっか。また行かないといけないんだ」

「うん」

「大変だね」

魔法関係の事は暈して要所要所を説明、まだ終わっていない事を簡単に説明するなのは。

「でも大丈夫」

「放課後は？ 少しくらいなら遊べる？」

「うん。大丈夫」

「じゃあ、家に来る？ 新しいゲームあるし」

「ああ！ 本当？」

「そう言えばね、昨夜怪我をしている犬を拾ったの」

「犬？」

「うん。凄い大型で何か毛並みがオレンジ色でおでこにね、こう赤い宝石が付いてるの……」

「——あ！」

その説明を聴きなのはは驚く。

そんな特徴をしているイヌ科の動物などそうそう存在しているわけではない。この地球には居ないのだ。そんな動物は。毛並みがオレンジの犬など遺伝子を弄り品種改良しないと無理であろう。額に宝石があるなんて尚更この地球の生物ではない。思い当たるのはついこの前まで相對していた魔導師の少女。その使い魔のアルフであるだろう。

「「……………」」

「で、あんた達は今まで何してたのよ？」

「何って……」

そのアリサの質問に対して大きくキョドリ始める志蓮。どうやら彼には演じるといふ事は出来ても隠し事をするという事は出来ないようだ。

「何なのよ？ 雄介……？」

「な、何って。そ、それはだな……山籠りだ」

「や、山籠り!？」

「そ、そうだ。な、ブロン？」

「お、おう」

「本当に山に籠ってたの？ それに具体的に何をしてたのよ？」

「修行だよ。見てみるか？ この俺の16個に割れた腹筋をよお？」

「嫌よ、気持ち悪い。ま、良いわ。あんた達も来るわよね？」

「「もちろんさ」」

その苦し紛れの雄介による言い訳は何とか通じ、話は終了した。

その言い分になのはも思わず驚きを隠せなかったが深く追求されなかった以上問題は無いのかもしれない。

志蓮は無視されなかった事に驚きつつも喜び、後ろの方でダンスを踊っている。変な踊りだ。死のダンス、呪いの踊りだろうか。MPだか何かが減りそうなの。

取り敢えず俺達はそのアルフなのかどうかを確かめに、アリサと遊ぶ為に彼女の誘いを受け、彼女の家に行く事にした。

バニングス邸。

その庭にて場違いなものが其処には存在していた。

檻だ。大きな動物を入れておく為の、猛獣を入れておく為のケージだ。

そして其の中には予想通りにオレンジ色の毛をした大型のイヌ科の動物、アルフが居た。

『やっぱり……アルフさん』

『あんた達か……』

『その怪我どうしたんですか？ それにフェイトちゃんは？』

アルフであった。その事実には驚きつつもやっぱりという確信もありそれほど取り乱したりはせず、念話で質問をするなのは。

アルフは怪我が少しマシになったが不安であり警戒をしているのか、声が少し低く小さい。

「あららら、元氣無くなっちゃった。どうした？ 大丈夫？」

「傷が痛むのかも……そつとしておいてあげようか」

「うん」

背中を見せたアルフに対してアリサは心配して声をかける。

だがアルフはそのまま動かず、俺達は屋敷内に移動する事にする。

「あー！」

胸に抱いていたユーノが抜け出し驚くすずか。

ユーノはスタツと地面に着地すると後ろを向いているアルフの居る檻に近づく。

「ユーノ！ こら、危ないぞ」

「大丈夫だよ。ユーノくんは」

気に掛けるアリサとすずかに対してのなのはの言葉に2人は思わず不思議がるも顔を見合わせるだけで何も言いはしないようだ。

「ユーノはフェレットにしては妙なくらいに賢いからな……。聴い上に敏い。いざ危なくなれば逃げるだろうさ、全力で所構わずその場にあるモノを利用しながらな。それにこのイヌは檻の中だぜ。別に危なくないだろ、中にはいらぬ限りはな」

「それもそうね。でも、入るかもしれないじゃない」

「大丈夫だつて。言つたら。妙なくらいに聡い。其の上に敏いつてな」

『彼女からは僕から話を聞いておくから。皆はアリサちゃん達と』

『うん』

「それじゃあお茶にしない？ 美味しい御茶菓子があるの」

「うん」

「楽しみ」

俺達はユーノと檻の中に居るアルフをその場に残して屋敷の中に入る。時空管理局からの連絡もあるだろうし、此方から念話での会話も出来る。今は皆で遊ぶのを優先するでしょう。

「一体どうしたの？ 君たちの間で一体何が？」

なのは達が離れたのを確認するとユーノは背中を向けている口を開く。

「……あんたが此処に居るってことは管理局の連中も見てるんだろうね」
「うん」

《時空管理局、クロノ・ハラオウンだ。どうも事情が深そうだ。正直に話してくれれば悪いようにはしない……君の事も、君の主フェイト・テストロッサの事も》

「……話すよ、全部。だけど約束して。フェイトとドゥームを助けるって。あの娘達は何も悪くないんだよ」

《約束する。エイミイ、記録を》

「フェイトのははおや、プレシア・テストロッサはすべての始まりなんだ」

主であるフェイト・テストロッサ、そして其の兄であるドゥーム・テストロッサの安全を約束して貰い、アルフは自身の話せる全てを少しづつ言葉にしていく。

《なのは、皆……聞いたかい？》

『うん。全部聞いた』

『ああ』

『余すこと無く』

『しつかりとな』

《君達の話と現場の状況、そして彼女の使い魔アルフの証言と現状を見るにこの話に嘘や矛盾は無いみたいだ》

『どうなるのかな……』

《プレシア・テスタロツサを捕縛する。アースラを攻撃した事実だけでも逮捕の理由にはお釣りが来るからね。だから僕達には艦長の命がありしだい、任務を、プレシアの逮捕に変更する事になる。君はどうする？ 高町なのは》

『わたしは……わたしはフェイトちゃんを助けたい。アルフさんの思いとそれから私の意思……フェイトちゃんの悲しい顔は私も何だか悲しいの。だから助けたいの、悲しい事から。……それに友達になりたいって伝えた、其の返事をまだ聞いてないしね』

《わかった。此方としても君の魔力を使わせて貰えるのは有り難い。フェイト・テス

タロットサについてはなのはに任せる。それで良いか?》

『なのは……だったね。頼めた義理じゃないけど、だけど……お願い。フェイトを助けて』

『うん。大丈夫。任せて』

涙で目を濡らしているアルフの言葉に対し、なのはは力強く応える。なのはの瞳には何かを決めた者特有の強い光が宿っていた。

「遅いよ、なのは」

「新しいダンジョンに入るの、待ってたんだよ」

「あはは、ごめんごめん」

《予定通りアースラへの帰還は明日の朝。其れまでの間に君達がフェイトとの遭遇した場合は》

『うん……大丈夫』

「ふうー……なかなか燃えたわ」

「やっぱり皆で遊んだ方が楽しいよ」

「ありがとう……多分、もうすぐ全部終わるから……そしたらもう大丈夫だから」

「なのは……」

「うん？」

「何か、少し吹っ切れた？」

「え？ え、あ、えと。どうだろう？」

「心配してた。てか、私が怒ってたのはさ……なのはが隠し事してる事でも、考え事してる事でも無くて。なのはが不安そうだったり、迷ったりしてた事。それで時々、そのままもう私達の所へ帰って来ないんじゃないかなって思っっちゃうような瞳をする事」

「……………」

アリサの言葉になのはは目頭が熱くなったのか目蓋をこする。

よくよく見てみるとアリサとすずかの2人の目にも小さな水滴が溜まっていた。

「行かないよ、何処にも。友達だもん、何処にも行かないよ」

「そっか」

「うん」

「で、あんた達はどうなのよ？」

「もちろんこの1週間で解決だ。親父による鍛錬もそろそろ佳境だしな」

「そうそう、俺達の戦いはこれからだ」

「打ち切り止めろや」

なものは抱えていた問題は、ジュエルシード事件はそろそろ終結に向かっている。プレシア・テスタロッサの暴走を止め、ジュエルシードを出来る限り回収、なのはとフェイトが友達になるのを見守る。

其れ丈でいい筈だ。

なのだが……。

「何だ、この言いしれ様の無い不安は……。一体何が？」
事件解決を間近に俺の心は不安と焦りで一杯一杯だった。

海鳴臨海公園。

現在の時間は午前5時55分だ。普通の小学生ならばまだ布団の中で夢を見ているであろうこの時間帯。

俺達は公園で待ち合わせをしていた。

此処ならば、この時間ならばそれほどヒトは居らず誰かに見られる確率を確実に格段と下げる事が出来るのだから。

「(ま、普通の小学生って…その普通の定義は何か。分かんねえな)」
暫らくして、近くにヒトが近づいてくるのを感じ取る。

「この気と魔力は……」

「此処なら良いね。出て来て、フェイトちゃん」

波音が、木々の葉が擦れ発生する音が公園中を走り回る。風が頬を撫であげて、少しばかり冷たいがそれが逆に心地よく感じられる。

[Scythe form]

背後から聞こえて来る聞き覚えのあるその機会音声に振り向く。

彼女は街灯の上に経っていた。

朝日に照らされ、彼女のバリアジャケットの黒はより存在感を主張しているかのよう
に感じ取られる。

「フェイト……もう止めよう。あんな女の言う事ももう聞いちゃ駄目だよ。フェイト、
このままじゃ不幸になるばかりじゃないか。だから、フェイト！ ドウムも！」

「だけど……それでもわたしは、あのひとの娘だから」

「……………」

アルフのその言葉にフェイトはただ首を横に振り、ドウムは黙っているだけだ。そ
んなフェイトの、彼女にもまたなのは同様強い光が瞳に宿っている。

「ただ捨てれば良いって訳じゃ無いよね。逃げれば良いって訳じゃもつと無い。切っ
掛けはきつとジュエルシード……だから賭けよう。お互いが持つてる全部のジュエル

シードを」

【Put out】

【Put out】

それぞれのデバイスからジュエルシードが出現する。なのはの方は12個、フェイトの方は9個。

それぞれの周囲に円を描くように現れる。

「それからだよ、全部……全部。私達の全てはまだ始まってもない。だから本当の自分を始める為に……始めよう。最初で最後の本気の勝負」

互いのデバイスを、相棒を手にし睨み合う。

それぞれの思いと、気持ちを抱いて宿しながら。

勝った方がより強い思いを抱いているとかどうかではない。

ただ、勝者にはジュエルシードを。

そして何よりも譲れない思いを懸けて。

明かされる真実

あれっ…俺は？

——かあさん。わたしのかあさん。何時も優しくわたしのかあさん。わたしの名前を優しく呼んでくれた、かあさん。

「ね、とても綺麗ね。アリシア」

——アリシア？ 違うよ、かあさん。わたしはフェイトだよ。

「さあ、いらっしやい。アリシア。……ほら、可愛いわアリシア」

——ま、良いのかな。わたしは優しいかあさんが好きだから。

「戦闘開始みたいだね」

「ああ」

アースラのモニター室にてクロノ・ハラオウンとエイミー・リエツタはサーチャーを通じてなのはとフェイトの戦闘を観戦している。

「しかし、ちよつと珍しいよね。クロノ君がこういうギャンブルを公認するなんて」

「まあ、なのはが勝つに越した事はないけど……あの2人の勝負事態はどちらに転ん

でもあんまり関係ないからね」

「なのはちゃんが戦闘で時間を稼いでくれてるうちにあの娘の帰還追跡の準備をしておくってね」

「頼りにしてるんだから。逃さないでくれよ」

「うん、任せとけてね」

クロノはスプレー状のワックスでエイミイの後ろ髪を固め、櫛で梳かしていくが効果は無くハネてしまう。

「でも……あの事、なのはちゃんに伝えなくて良いの？ プレシア・テストアロッサの家族とあの事故の事」

「勝つてくれるに越したことは無いんだ。今は……なのはを迷わせたくない」
そう言うクロノの視線の先には空を舞いながら戦う2人の魔法少女の姿が映っていた。

お互いのデバイスがぶつかり合い、その際に魔力による電撃が発生する。

それも一時的なもので、即座に距離を取る2人。

【Photon Lancer】

宙返りをした後周囲に電撃の塊である魔力弾を形成するフェイト。

「『Divine Shooter』」

なのの方もまた魔力弾をつくりだす。

その色は、それぞれの個性を表しており、なのの方は桃色。フェイトの方は金色と
いった感じだ。

「ファイア!!」

「シューート!!」

お互いがお互いの「スファイア」に依る攻撃を回避する。

障壁を張り、防御をしたフェイトの視線の先には再び攻撃の準備に取り掛かっていた
なの姿があった。

「シューートツ!!」

【Scythe Form】

形成した魔力刃で桃色の魔力弾を切り裂いていくフェイト。

【『Round Shield』】

回避をしながら接近を試み、飛行するフェイトに対しなのはは防御の体勢に入る。金
色の刃とピンク色の盾がぶつかり合い火花が散る。

「……………」

なののは目を瞑り、残しておいた1つのスファイアを相手の背後に向かわせるがそれを

察したのかフェイトは障壁を張る。スフィアは防御され、砕け散り光の泡となる。

「？」

防御をした際にそのスフィアの方に目を向けたか為かフェイトはなのはの姿を見失う。

周囲を軽く見渡してみろが、その姿は目に入ってこない。

【Flash Move】

「てええええい!!」

「!」

上だ。

なのはによる上空からの攻撃に驚きはするもしつかりと防御をするフェイト。デバイスに魔力を込めている為か、大きな衝撃と魔力の激突による光が発生する。

【Scythe Slash】

バルディツシュに魔力をのせ切り裂くように攻撃をするも、なのはは足元に発生させた羽の様な形をした空を飛ぶ魔法であるFlier Finを自在に使い回避をする。

だが、回避した先にはフェイトが仕掛けたであろうビリビリと電撃を纏った複数のスフィアが待ち受けていた。

「始まったようだな」

「さて、と。此方も始めようか。なあ……ドウム」

「ああ」

「相変わらず表情一つ変えねえのな、お前は」

「そう言うお前は常に眉間に皺を寄せているな、トカゲ野郎」

「殺るか？」

「待てよ、俺にやらせてくれよ」

なのはとフェイトの戦闘が始まると同時に俺達転生者組もまた一同に介し、睨み合っていた。

だがドウムの方からはやる気が、もとい戦う気というものは一切感じ取ることが出来ない。

戦わずに済むという事だろうか。

いや、そういう訳にはいかないだろう。

「隠れてないで出て来いよ」

「アラアラららら、バレてしまいましたかあああ」

俺の言葉に応えるかの様にして、公園の中に存在する木々の中から其奴は現れた。

「!？」

其れはヒトではない。

ヒト型の姿をしているが地球人でも、ミッドチルダのヒトでも、その他の次元世界のヒトでも無い。

其奴は蛇のような見た目をしている。身体全体には草が覆われているがところどころ見られる肌らしき場所には鱗のようなモノが。ずんぐりとしていて、背丈はだいたい180cmくらいといったところだろうか。縦に長い鼻をしており、目はやけに丸く、歯は細かくギザギザとした感じに細い。目と歯の両端に細長く鋭いヒゲが生えている。

「使い魔!？」

「始めまして。転生者の皆様、そして他世界の住人の皆様。私の名前は『アカマタ』。どうぞ、お見知り置きを」

驚くユーノとアルフを、アースラから見ているクロノ達を余所に其奴、アカマタは口元を大きく歪めながら自己紹介をしてくる。

その様はとて不気味で、この世の存在とは思えないモノの様に感じられる。

「此奴は……使い魔なんてチャチなモンじゃねえ。……もつと得体の知れない」

「ええ、ええ、ええ。私とそんな下等な存在を一緒にしてもらつては困ります。私は『外道衆』……『外道衆12呪皇』の1人、アカマタなのですから」

「〔外道衆……?〕」

「けっ、1人じゃなくて1匹じゃねえのかよ」

「いちいち癪に障るサルどもだ。此れだから猿というものは……いやはや失礼。此度、挨拶をしようと思いましたがね。その結晶体を、ジュエルシードを此方に渡して貰えないでしょうか？」

俺達の背後に浮かんでいるジュエルシードを指差し、此方に寄越せと言い寄ってくるアカマタ。

その口にはチロチロと長い紫色の舌が見え隠れしている。

「それは無理だな。此れはある魔導師捕縛の為に必要なのだから」

「ゾイル!」

「お前、何時の間に……」

「渡す訳にはいかない。其の上にいると聞かないといけないみたいだからなあ。倒させて貰うぞ。妖怪……」

「待て、其奴は!!」

「ええ、ええ、ええ。良いですよ。貴方が私を倒せるのであるのなら……ですがね」俺の制止しようとする言葉は無視され、アカマタのその言葉と同時に2人は目の前から消える。

発生する衝撃波から、土埃から目の前で戦闘をしているであろうと云う事が辛うじて

理解出来るだけだ。

「な、なんなんだいあれは……」

「わからねえ。でも、今は」

「ジュエルシードを守り、あの2人の戦いの邪魔をさせない様にするだけだ」

「遅い、遅い、遅いですよお。止まって見えますねえ」

そう言いながらアカマタはゾイルに対して次々とパンチを連撃で喰らわせていく。其の度にゾイルの身体は大きくバウンドし、衝撃で吹き飛ばされる。

「——ッ、これならどうだ？　〃キング^深・クリムゾン^紅〃」

その瞬間、世界は暗転する。

「今、貴様が見たのは未来のお前自身だ。俺以外の時間は全て吹き飛ば……喰らえ」
止まっている敵に対して、ゾイルは強烈な拳をお見舞いする。

筈だった。筈だったのだ。
だが。

「未来の自分ですか……はて、見えませんか。私には」

切り取られた筈の時間内で、そのスタンドを持つ者以外動けない筈の時間で其奴は見

事に動いてみせた。

ゾイルの拳を受け止め、お返しだと言わんばかりに軽く小突く。

「——ッ!？」

軽く小突かれただけの筈なのだが、それはゾイルにとってはかなりのダメージとなる。

その付かれた場所から徐々に大きなダメージとなり、広がっていき、身体中から血液が零れ出る。

「面白い身体をしていますねえ……。その血は何度位なんでしょうなあ。その傷もまた塞がるのが非常に速い。気になりますねえ……」

「——ゾイル!? 全員でたたみ掛けるぞ!」

その雄介の言葉に従い転生者組である俺を除いた転生者組が各々攻撃を仕掛けるも、尽く躲かれてしまう。

ヒラリヒラリと避けられて次第に溜まっていく焦り。

焦りと不安が蓄積されていく一方でその相手であるアカマタは涼し気な顔をしている。

「火竜の咆哮!!!」

「『ヴァルカンシヨックイグニシヨ』!!!」

「マジシャンズレッド 魔術師の赤」、ハリケーンスペシャル ハリケーンスペシャル!!!」

それぞれが持っている火属性の攻撃を放つ。

龍の放つモノと同等の炎、空気中に存在する燃素フロギストンを操作して放つ火球、3000℃を誇る見えざる熱の塊。

それらは見事に目の前の標的へと命中する。

「Yes, I am!」

「やったか?」

「へい! フラグを建てるんじゃないやあねえぜ!!」

当たった炎の攻撃が見る見るうちにその口の中に吸い込まれていく。あっという間にその火は消え果て、その場にはアカマタの姿があるだけだ。

「これは、これは、これはどうも有難う御座います。美味しかったですよ」

「あ、あれだけの炎を美味しかったで済ますなんて……無理だ、勝てる訳が」

「い、一体どうなってるって言うんだい。わたしには何が何かさっぱりだよ」

なのはとフェイトの戦闘を観戦している筈が今は此方の戦闘の方が激化しており、激しく厳しいものになっている。

彼女達が此方に気付く、目の前の此奴が彼女達の戦闘に気が付き、混戦になる事だけは避けたい。

「そろそろ『水切れ』の様ですので、失礼致しますね。それでは皆様、また逢う時まで」

その言葉を放つと同時に木々の間に出来た隙間の中に吸い込まれるように消えるアカマタ。

残っているのはゾイルとアカマタの戦闘によってつくりだされた穴や薙ぎ倒された木。

そして遠くから聞こえてくるなのはとフェイトの戦闘の音だけだった。

《……終わったのか……？》

「そのようだ……」

「なのはとフェイトの方は……」

《そっちはまだ続いてるよ。ってか、結界がボロボロだよ……崩壊寸前っ》

「俺が補強する」

先程の戦闘で崩れかけている結界を建て直すゾイル。

不安定だった周囲の魔力が立ち直っていくが、ゾイルの方が逆に辛そうに顔を顰める。

「さっきの野郎、とんでもねえ強さだった」

「また逢う時まで……なんて言ってたな」

不安な気持ちを抱えたままだが、なのはとフェイトの…2人の戦闘を見守る事にする俺達。

臨海というだけあって潮の匂いが強烈で、俺の鼻をうった。

「(初めて会った時は魔力が強いだけの素人だったのに、もう違う。速くて、強い…：迷ってたらやられる)」

お互いに睨み合い、呼吸が速くなる。疲労に因るものなのか、それとも相手の実力を知り焦っているからなのか。

だが、どちらの目もまだ諦めてはおらず、強い光が宿っている。

デバイスを構え直し、呼吸を、魔力を整える。

「っ！」

先に仕掛けたのはフェイトの方だ。

彼女の足元に大きな魔法陣が展開される。

「Phalanx Shift」

なのはの周囲に金色の魔法陣が多数展開されたかと思うと、それらは全て消え、フェイトの周囲に多数の魔力弾が形成されていた。

「——ッ!!」

防御の準備に取り掛かろうとするが、手が何かに吸い寄せられ磔にされる。

『ライトニング・バインド』……まずい、フェイトは本気だ!』

『なのは、今直ぐサポートを』

「駄目ええええっ!!……アルフさんもユーノくんも手、出さないで。全力全開の一騎打ちだからわたしとフェイトちゃんの勝負だから!」

『でも、フェイトのそれは本当に——』

『其処までにしておけよ、アルフ』

『その通りだ。横槍を入れるようなら俺達が相手になるぜ』

焦るアルフとユーノに対し、なのははあくまでも一騎打ちだと言い張り、前を向く。

それでも、と心配するアルフに対してドウームと雄介は彼女を止めに入った。

そんな彼等だが、服も身体もボロボロだ。

それでも、彼達はアルフだけでなく平均的な魔導師では相手になる事すら無理な話だと言えるくらいに実力差が存在している。

『……………』

「平気。……ありがとうね」

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神、今導きもと撃ちかかれ。バルエ

ル・ザルエル・ブラウゼル」

フェイトの周りには膨大な数のスフィアが浮かんでいる。それら全てはバチバチと電撃を放ちながら浮遊している。

『はえ、すつごい多い……』

『フェイトの姿が見えない程の数かよ……』

「フォトンランサー・ファランクスソフト。撃ち碎け、ファイアーツ!!!」

無数の魔法弾がなのはへ向けて飛んで行く。

38個のフォトンスフィアから毎秒7発の Photon Lancer を斉射していくフェイト。

『なのは!』

『フェイト!』

魔力の消耗が激しく、コントロールが難しい為かフェイトは大きく肩で息をしている。

「……………」

無数の魔法弾がぶつかり、発生した煙が晴れていく。少しずつ、少しずつ。

『勝ったな……』

『ああ』

其処にはボロボロになりながらも健在なのはの姿があった。バリアジャケットはボロボロになっていているが其れ丈であり、目立った外傷は無い。

まだ終わっていないようだ。

「痛ったあ……撃ち終わるとバインドつても解けちゃうんだね。今度はこっちの…」

〔Divine〕

「——番だよっ!!」

〔Buster〕

レイジングハートから桃色の光線が放たれる。

フェイトの方も先程溜めておいた残りの魔力弾を一つに集め迎え撃つ。

が、なのはの砲撃の方が強かったのか魔力弾は呑み込まれ、フェイトの方へと迫っていく。

「!? ……っ。(直撃……でも耐え切る。あの娘だつて耐えたんだから)」

障壁を張り、全力での防御をするフェイト。

彼女の視界には桃色の光が一杯に広がっている。

普通ならば発狂したり、恐怖に潰されたりするであろうが、フェイトはそんな事を起こさず必死に防御魔法を発動している。

砲撃が止み、障壁を解除する。

バリアジャケットは所々破けており、先程の砲撃が強力なものだったという事を暗に語っている。

「——！」

上空に光が発生しているのに気が付くフェイト。
なのはだ。

空一面に桃色の魔力光が広がり、支配していた。

『来るぞ……』

『皆大好き』

『SLB』

「レイジングハートと考えた、知恵と戦術、最後の切り札……受けてみて、デイバインバスターのバリエーション！」

「『Starlight Breaker』」

周囲に光が発生し、なのはの元へと集められていく。魔法陣に出来た魔法弾は徐々に、確実に大きくなっていく。

「クツ——！！」

フェイトは防御魔法を発動しようとするものはのバインドに動きを封じられてし

「大丈夫だ」

「えと……ドゥームさん……でしたっけ？」

「ああ」

落ちていくフェイトを拾い上げ、公園の中へと移動する3人。

抱えられ移動する最中、フェイトは目を覚ました。

「兄さん……」

「気付いた？ フェイトちゃん……。ごめんね、大丈夫？」

「うん」

「私の……勝だよね？」

「そう……みたいだね……」

ドゥームにお姫様抱っこされているからか、勝負に負けてははおやへの申し訳ない気持ちが強いかから複雑な表情をするフェイト。

《《よし。なのは、ジュエルシードを確保した後、それから彼女を》》

《《いや、来た》》

レイジングハートの中に公園内に置いてあったジュエルシードの全てを回収しようとするが。

突如、上空に暗雲が立ち昇り、紫の雷がゴロゴロと鳴り渡る。

「フェイトちゃん!? ドゥームさん!？」

その雷は彼女達兄妹に命中する。

その威力は強力なものなのかバルディッシュは砕け散り、待機状態へと戻ってしま
う。

《《ビンゴ! 尻尾掴んだ!!》》

その雲に吸い込まれていくジュエルシードを元に転移先の座標を見つけるエイミィ。

《《良うし。不用意な物質転送は命取りだ。座標を》》

《《もう割り出して送ってるよ》》

《《武装局員、転送ポートから出動! 任務はプレシア・テストアロツサの身柄確保です》》
転送ポートから大人数の魔導師が転移していく。

「やっぱり、次元魔法はもう身体が保たないわ……それに、今のでこの場所も捉まれ
た。……フェイト、あのこは駄目だわ。そろそろ潮時かもね」

血を吐きながらモニターを通して、フェイトの姿観ているプレシア。

彼女の周りには先程雲に吸い込まれていったジュエルシードが浮かんでいた。

「第二中隊、転送完了」

「第一小隊、侵入開始」

「お疲れ様。それから、……フェイトさん、ドウムさん。始めまして」

「……………」

「……………ああ」

ドウムの方は返事をするがフェイトの方はヒビ割れたバルディツシュを握り締め無言を貫く。

『母親が逮捕されるシーンを見せるのは忍びないわ。なのはさん、彼女達を何処か別の部屋に』

『あ、はい…………』

「総員、玉座の間に侵入。目標を発見」

「プレシア・テスタロッサ。『時空管理局法』違反及び管理局艦船への攻撃容疑で貴女を逮捕します」

「武装を解除して此方へ」

目の前に居る多数の管理局員を前に、プレシアは悠然とした感じに椅子に座っている。

だが、彼女のその瞳は何処か虚ろのようになっていた。

「フッ」

だが、数人の局員が奥の部屋の方へと向かった時、彼女の様子が一変した。

「ッ、これは……」

「え!？」

モニターに映っている培養カプセルの中には、其処には見覚えのある少女の姿があった。

「私のアリシアに……近寄らないで」

「撃てえ！」

「煩いわ……」

そう言い、プレシアは局員の攻撃を難なく防御し、彼等を吹き飛ばす。

《局員たちの送還を!!》

「りよ、了解です」

「(アリ……シア……)」

《座標固定、0120503》

「固定。転送オペレーションスタンバイ」

「もう駄目ね……時間がないわ。たった9個のロストログアではアルハザードに辿り着けるかは分からなかったけど……でも良いわ、これで21個。終わりにする」

大事なものを護るように、大切なものに触れるかのように優しくその生体ポッドに手

を添えるプレシア。

彼女は管理局のサーチチャーの方へと目を向ける。

《この娘を亡くしてからの暗鬱な時間も……この娘の身代わりの人形を娘扱いするの
も》

「!？」

「……………」

《聞いていて？ アナタのことよ、フェイト。折角アリシアの記憶をあげたのにそつくりなのは見た目だけ……役立たずでちっとも使えない。私のお人形》

そのプレシアの言葉はフェイトの心を少しづつ抉り取っていく。

耳を塞ぎたいのに、聞きたくないのに、何処かで理解をしていたからかその話に耳を傾けてしまう。

目は信じられないモノを見聞きしているかのように開かれているのに、だ。

《最初の事故の時にね、プレシアは実の娘……“アリシア・テストロツサ”を亡くしているの。彼女が最後に行なっていた研究は、使い魔とは異なる……使い魔を越える人造生命の生成》

「え？」

《そして、死者蘇生の秘術。フェイトって名前は当時彼女が研究に付けられた開発コードなの……》

《よく調べたわね……。そうよ、その通り。だけど駄目ね……。ちつとも上手いかなかった。造り物の命は所詮造り物。失ったものの代わりにはならないわ。……アリシアはもつと優しく笑ってくれたわ……。アリシアは時々我儘を言ったけど私の言う事をとても良くきいてくれた》

「止めて……」

《……アリシアは何時でも私に優しくかった……。フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽物よ。折角あげたアリシアの記憶もあなたじゃ駄目だった……》

「止めてよ……」

《アリシアを蘇らせるまでの間に私が慰みに使うだけのお人形。……だからあなたはもう要らないわ。何処へなりと消えなさい》

「お願い、もう止めて！」

プレシアの言葉に悲痛な叫びをあげるなのは。

フェイトは目尻に涙を浮かべ、ただただその言葉を聞く事しか出来ない。

フェイトの脳裏には今までの記憶が、何処から何処までが自分の記憶で、アリシアの

記憶なのか分からず、混乱が起き始める。

そんな中、プレシアはただ不気味に笑い続けていた。

《……いい事教えてあげるわ、フェイト。アナタを創りだしてからずっとね、私はアナタが……大っ嫌いだったのよ》

その言葉にフェイトは、フェイトの心は崩れ去る。

「フェイトちゃん……」

「フェイト……」

「局員の回収、終了しました」

《大変大変！ ちよつと見て下さい。屋敷内に魔力反応多数!!》

《何だ？ 何が起こってる!?!》

慌てたエイミーの言葉にブリッジに居るメンバーとクロノはただ驚く他なかった。

「庭園敷地内に魔力反応。何れもAクラス！」

「総数、60……80……まだ増えています!!」

「プレシア・テストアロッサ……一体何をするつもり？」

生体ポッドを固定していたアームは取り払われ、プレシアの歩く後に飛びながら続い

ていく。

「私達の旅を……邪魔されたくないのよ。……私達は旅立つの……忘れられた都、アルハザードへ」

21個のジュエルシールドがプレシアの周りを浮遊し、飛び散っていく。

「この力で旅立って……取り戻すのよ。全てを!!」

そんな彼女の瞳は狂気に取り憑かれているかのようにより大きく見開かれていた。

《——言いたいことは其れだけか?》

「言いたいことは其れだけか?」

プレシアの言葉を耳にし、雄介は口を開く。

《何ですって?》

「言いたい事はそれだけかって聞いているんだよ?」

《それがどうしたの?》

「お前は勘違いをしているようだから、いろいろと教えてやろうと思ってな」

「雄介……くん?」

《良いわ。御教授願おうかしら……》

「まず一つ。同じ人格の生命体は決して生まれぬ。記憶を模写した所でそれはあくまで記憶……記録、データベースだ。魂まで同じとういわけではない。もしお前がそれに気付いてればな……」

思いの外饒舌な雄介。

普段はおちやらかした感じで巫山戯る事の多い奴だが、今回は違うようだ。

「2つ目。いや、これは違うか……お前が気付こうとしてないだけなのか」

《……………》

「その身体ではアルハザードに辿り着いてもそれだけだ、直ぐに死んでしまう。アリシアを蘇らせても、お前が死ぬと無意味だ」

《黙りなさい……………》

「最後に……………。もし全てが上手くいってアリシアが蘇り、お前の身体が保ったとしても、だ。それでアリシアは喜ぶのか？」

《喜んでくれるわ……………あの娘は》

「子供つてのは案外鋭く聡いものだ。お前が隠している事、直ぐに気付くだろうさ。そして何て言ってくるだろうなあ？」

《黙りなさい……………》

「ママなんて大っ嫌い！」

《黙りなさい!!!》

そのプレシアの叫びと同時に大きな揺れが発生する。

アースラ全体が大きく揺れ、辺り一面に赤いランプが灯る。

「次元震です。中規模以上!」

「『デイストーションシールド』を」

「ジュエルシールド21個始動。次元震更に強くなります」

ブリッジ内に、アースラ内にて警戒のアラームが五月蠅いくらいに強く大きく鳴り響く。

耳を劈くその音はそれだけそれが危険なモノだという事を教えてくれている。

「転送可能な距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動を!」

「りよ、了解です」

「このままだと次元断層がつ!!」

「アル……ハザード……」

「バカなことを」

「クロノ君!」

「僕が止めてくる。ゲート開いて！」

急ぎ、モニター室から出て転送ポートへと向かうクロノ。大きく揺れる船体に構いもせず、クロノは廊下を走り続ける。

「アルハザード——失われた禁断の技術が眠る土地。其処で何をしようっていうんだ……自分が無くした過去を取り戻せるとでも思ってるのか。どんな魔法を使つたて過去を取り戻すことなんか出来るもんか！」

「私とアリシアはアルハザードで失われた過去の全てを取り戻す」

プレシアの笑いは時の庭園の中を寂しく、そして強く大きく広がり響いていった。彼女自身、目に涙を浮かべている事に気付くこと無く。

過去を取り戻す プレシアの悲痛な叫び

「次元震発生。振動、徐々に増加していきます」

オペレーターの声にはやはりというか焦りというものが多分に含まれている。

現在発生している大きな次元震によりこの艦だけでならず、地球を始めとしたこの近くに存在する多数の次元世界に強大な影響を与えてしまうのだから。

「この速度で震度が増加していくと、次元断層の発生予測値まで……あと、30分足らずです」

30分というのは主観的なものではあるのだが随分と微妙な時間だろう。早過ぎず、遅過ぎず。だから何だという話なのだが。

だが、この状況で30分というのは余りにも短すぎる。

《あの庭園の駆動炉、ジュエルシードと同型のロストログアです。それを暴走覚悟で発動させて、足りない出力を補っています》

21個のジュエルシードがつくりだす次元震。

それでもなお足りないというのか、プレシアは時の庭園の駆動炉を臨界寸前まで高めているようだ。

それが暴走すると一体どういうことになるか。考える必要もなく頭に浮かんでくる。「始めから……片道の予定なのね」

アルハザードへと向かった後、その世界に留まりこの世界には戻って来ない。それ程に彼女の、プレシアの決意というものは堅いのだろうか。

赤いランプの灯る廊下の中で、茫然自失となっているフェイトを抱えたアルフ、なのはとユーノ、雄介に志蓮、ドゥーム、そして俺が走っていた。

自分達以外誰も居ないその空間では、無闇矢鱈と音が鳴り響いているかのような錯覚を感じさせる。

艦内に鳴り響く警報音、走る際に発生する靴音、そして自分達の呼吸音と鼓動音。それらがどうしても煩わしく、焦りを増長させていく。

少しばかり走っていると目の前からバリアジャケットに身を包んだクロノと出会う。彼もまた焦りを抱え、それでいてプレシアの暴走を止めようとしているのだろうか。

「クロノくん、何処へ？」

「現地へ向かう。元凶を叩かないと」

「わたしも行く」

「僕も」

時の庭園へ向かう事を告げるクロノに対し、自身も連れて行けとなのはとユーノは言葉の口にする。

「わかった」

本来ならば止めるであろう、止めるべき事態なのだが、クロノはその希望を了承。行動を共にする事を許可した。

「アルフはフェイトに付いててあげて……ドゥームさんも」

「う、うん……」

「ああ」

そのユーノの勧めに頷くもアルフは何処か、ドゥームに対して猜疑的な視線を向けていた。

「行こう！」

「うん!!」

クロノを先頭に俺達は転送ポートへと足を速める。

焦るべき場面なのだろう。怒るべき時なのだろう。

だがそんな気持ち湧いて来ず、ただ状況に流されている。今の自分がそのような感じだとしても思い、疑問に思わざるを得ない。

か。
どうしてこんなにも他人事の様にもうでも良い、と。感情が揺れ動かないのだろうか。

「私も現地に出ます。貴方達はプレシア・テスタロッサの逮捕を」

《了解》

《おkです》

ブリッジから転送ポートへと向かうリンデイ艦長。

彼女の背中を見ると、とても頼もしく感じられる。

提督という立場に座っているだけあり、それだけの实力があるからだろうか。

彼女もまた、足を急がせて、時の庭園へと向かう。

「……………」

「へえ……………」

目の前には沢山の機械の兵隊が立ち並び、行く手を遮って来た。

見た目は様々で、中には何処ぞのスーパーロボットの様な出で立ちをしているモノも存在している。

「一杯居るね……………」

「まだ入り口だ。中にはもつと居るよ」

「クロノ君……このコ達って……?」

「近くの相手を攻撃するだけの、唯の機械だよ」

その言葉通りにそれら全てからは生命にはあるべき気というものが存在していない。動く度に機械的な音を出すだけだ。

AIなどの人工知能が存在していない限り、それほど脅威というべきモノでもないだろう。

「そっか。なら安心だね」

「この程度の相手に無駄弾は必要無いよ」

構えるなのはを制し、クロノは一步前が出る。

だが、其れよりも先に動いた者が居た。

「“火竜の煌炎”!!」

なのはの背後から巨大な火球が飛び出し、目の前の機械兵を焼き尽くしていく。その熱は膨大で、スピードは速く、避ける隙無く門前の番兵達は消え去ってしまう。

「ゆ、雄介君……」

「君は!」

「この程度の相手に無駄弾は必要ないんだろ? なら、怒る必要ないじゃないか」

「それは、そうだが……」

ユラユラと機械兵の残骸の上で燃えている炎に照らされながら前に進んでいく。

雄介の顔は、普段では見ることの無い、いや、見た事の無い顔をしていた。苦虫を潰したかの様に、嫌な過去を思い出してしまったかの様に険しく、辛そうな顔をしている。だがそれはほんの一次的なモノで、一瞬のうちに消え、見え無くなる。

「Stinger Snipe」

「は、速い……」

目の前に出現した敵に対してクロノは魔法を行使する。

彼のデバイスである「S2U」から放たれた一発の魔法弾が次々と敵を内貫き、切り裂いていく。

その光弾は螺旋を描きながら的を攻撃していく。

「スナイプショット」オ!!」

空中で一時停止をした後に、再加速をし、複数の機械兵を葬り去っていく。

そのスピードに機械兵の反応速度は及んでいないのか次々と身体に穴を空けて倒れていく。

「これが螺旋の力かよ……大したもんじゃねえか」

「(螺旋の力……まさか此れを願った奴は居ないだろうな……もし居たとしたら)」

雄介の言葉に、嫌な考えが俺の頭の中を走り廻る。もし、それが本当ならば……。

そんな考えが頭の中で一杯になるが、そんな事は知らないと言わんばかりに事態は刻一刻と進んでいく。

自身の2倍もの大きさの機械兵の攻撃を焦ること無く回避し、その相手の頭の上に着地をするクロノ。

「Break Impulse」

その機械兵の頭に杖を、S2Uを接触させる。光を放つと同時に、その機械兵は大きく爆散した。

「振動による破壊……炎神の息吹アグニシユワツタスと似たような原理か……」

そのクロノの動きになのはとユーノは呆然と立ち、口を開ける事しか出来ない。

それは俺にも言える事だった。

努力と経験だけで辿り着いた動き。おそらく彼には才能という才能は無いのだろう。そんなクロノがここまでの力を身に付けるのにどれほどの努力が必要なのだろうか。あえて言うのならば努力をするという才能をもって生まれたのだろう。所謂努力の天才といった存在だ。

「俺なら絶対無理だろうな……」

「呆つとしてないで、行くよ」

「……ああ」

「うん」

そのクロノの言葉により、意識は戦場へと戻される。

先を走るクロノ達を俺は追いかけていく。

「その穴……黒い空間がある場所には気を付けて！」

走っているとその途中の道では、崩れ去っている場所などがある。そんな中でも目を引くのがそのクロノの言う黒い空間だ。

「え？」

「『虚数空間』——あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間なんだ」

「飛行魔法もデリートされる。もしも落ちたら重力の底まで落下する。二度と上がって来れないよ」

「き、気を付ける」

「ま、落ちても舞空術で何とかなるだろうけどな」

——虚数空間。

次元断層により引き起こされる次元空間に空いた穴だ。

リンカーコアを使用した魔法は全てキャンセルされてしまう。

落ちてしまえば助からず、そのまま死んでしまおうだろう。

魔法ではない気进行操作した舞空術なら大丈夫だという確信は無いが、何となくそれで助かる気がするが、その底なし沼の様な空間の事を考えるとそれだけでも冷や汗が流れる。

「魔法が解除されるといふのなら……もし俺が落ちれば、変身魔法は解除され……考えるのは止めだ。今は前に進む」

その事実を知らされ焦るなとは別に、俺もまた別の理由でその空間を恐れ、焦つてしまう。

扉を蹴破り、部屋の中に侵入する。

すると、其処はただっ広い空間に無数の機械兵が立ち並んでいた。それら機械兵はそれぞれの手当たる部分に盾と斧を掴み、此処は通さないぞと言わんばかりに行く手を遮っている。

「此処から二手に分かれる。君たちは最上階にある駆動炉の封印を」

「クロノ君は？」

「プレシアの元へ行く。それが僕の仕事だからね。今道をつくる……そしたら！」

「どうやら、そうはいかないみたいだぜ……」

「ええ、ええ、ええ。その通りで御座います。貴方方は此処で死んでしまうのですから」

機械兵の脚部に存在する隙間から其奴は現れた。

その顔は相も変わらず、ヒトの身からすると表情というモノが分からず不気味に感じられる。

だが、その顔は何処か嘲笑っているかの様に感じられた。

「何の用だ？ アカマタ……」

「いえいえ、いえいえ、いえいえ……少しばかりプレゼントを、と思いましたが……。これ、何か分かりますか？」

其奴の背後には大きな機械が存在していた。

乗用車程の大ききで、動いているのか機械音が発生している。

「さて……このボタンを押すと……」

「——ガッ!？」

目の前の其奴がボタンを押すと同時に異変が起きた。

意識が飛びそうになる。

周囲の言葉が聞こえてこない。

ただこのままでは非常に不味いと云う事だけが理解出来た。

「……逃、げ……ろ……」

その言葉を発するだけで精一杯だった。

「どうしたの？ ブロンくん……？」

「……逃、げ……ろ……」

目の前の異形である存在を前にしてブロンの様子は可怪しくなった。いや、正確には彼奴がボタンを押してからだ。

「グ……グギ……ギギギイ……」

ブロンは歯を強く噛み締め、白目を向く。身体中の毛が増毛し、骨格が変化したのか、肉体が成長しているのか、身体がドンドンと大きくなっていく。

「それでは、お楽しみ下さい……」

その言葉と共に姿を消すアカマタ。

残されたのは戸惑うなのは達と苦しむブロンの姿だけだ。

「ブ、ブロン……!?!」

手を差し伸ばすなのは。

「すまない……遅くなった」

彼の手には刀が握られており、その刃はキラリと輝いている。

それを見るだけで、彼等はゾイルが尻尾を斬ったという事を理解した。

「先を急ぐぞ」

「でも、ブロンくんが……」

「……………俺の事は良い……………先に行け……………」

「ブロン……お前……………」

尻尾を斬られ、身体が戻ったブロンは意識を取り戻していた。

その下半身には斬られたあとの尻尾があり、服は大猿になる際に敗れたのか全裸の状態で。

「わかった……………」

先へと、足を進めるなのは達。

最初の言葉通りにクロノは真っ直ぐプレシアの元へ、なのは達は駆動炉へと向かった。

「俺は……………ドウム・テストロッサは『プロジェクトF・A・T・E』のプロトタイ

プ。フェイトをつくる前に実際に記憶の転写は成功するかどうかの実験で作られた……」

「……………」

ドゥームの独白は部屋の中を寂しく、小さく響き渡る。

フェイトは変わらず、殻に閉じこもり、反応は無い。

「フェイト……俺もお前もあいつにつくられた存在だ。かあさんというのは間違いではない。存在を否定されたかのように思っているだろうが……お前を肯定する。俺がお前を肯定する。例えば、誰が否定しようと……兄である俺が、お前の存在を肯定する。——それに、アルフも同じだろうしな……」

アルフの顔を見ながら、ドゥームはフェイトに優しく語りかける。

例えば、聞いていないとしても、聞こえていなくても、耳を塞ぎ聞こうとしてないとしても、ただ側に居ると。

「待っているぞ、フェイト」

「あの娘達が心配だから……あたしも……ちよつと手伝ってくるね。直ぐ帰ってくるよ……それで、全部終わったら……ゆっくりで良いからわたしの大好きな、本当のフェイトに戻ってね。此れからはフェイトの時間は全部、フェイトが自由に使って良いんだから」

優しく主の頬を手で撫でながら自身の思いを口にするアルフ。その言葉は、自分に対して、其れ以上に大好きな主人であるフェイトに対し言い聞かせる様に。それでいて思いやりのあるモノであつた。

アルフが退出し、部屋は静まり返る。

——母さんは最後迄わたしに微笑んでくれなかつた。わたしが生きていたいと思つたのは、母さんに認めて欲しかつたからだ。どんなに足りないと言われても、どんなに酷い事をされても。だけど、笑つて欲しかつた。あんなにハッキリ捨てられた今でも、わたし……まだ母さんに縋り付いてる。

——アルフ……ドゥーム兄さん。ずっと側に居てくれた。言う事を聞かないわたしに、きつと……随分と悲しんで……。

——何度もぶつかつた真つ白な服の女の子。初めてわたしと対等に、真つ直ぐ向き合つてくれたあの娘。何度も出会つて戦つて、何度も……わたしの名前を呼んでくれた。何度も……。何度も……。

——生きていたいと思つたのは、母さんに認めてもらいたいからだつた。其れ以外に生きる意味なんか無いと思つてた。それが出来なきや、生きていけないんだと思つてた。

——捨てれば良いって訳じゃない。逃げれば良いって訳じゃもつと無い。

——わたしの……。私達の全ては、まだ始まってもない。そうなのかな……。？
バルディツシュ……。私……まだ始まってもいなかったのかな……。

【Get set】

手に握ったバルディツシュがデバイス状態へと変化する。その動きは、ところどころにヒビが入っている所為かぎこちないが、確実にフェイトの心を後押しする。

「そうだよね……。バルディツシュもずっと私の側に居てくれたんだもんね。……お前も、このまま終わるなんて嫌だよね」

【Yes, sir】

「うまく出来るか分からないけど、一緒に頑張ろう」

目を閉じ、意識を集中させる。

魔力がバルディツシュへと流れていき、ヒビ割れなどの傷が修復される。

【Recovery】

——私達の全ては、まだ始まってもない。

「だから、本当の自分を始める為に……。今までの自分を終わらせよう」

迫り来る機械兵を薙ぎ倒し、撃ち穿き、先を進んでいく。

だが、目の前には無数の敵が存在し、倒しても倒しても減っている様には感じられない。

「——チツ……、数が多い！」

「だけなら良いんだけど……この！」

「そうだな……第四波動おおっ!!！」

「何とかしないと……なのは!!！」

取り逃がした機械兵がなのには対し、斧を振りかざす。その動きは彼等に、彼女にはスローモーションの様にゆっくりと感じられた。

【Thunder Rage】

上空から金色に光る雷が、その機械兵を貫き打ち倒す。

【Get set】

「——サンダアア……レイジイイー!!！」

其の様は、まるで天から機械兵に与えられた天罰の様だ。

「フェイト!?!」

数秒程、なのはとフェイトは見詰め合う。

だが其処に、壁を破壊し先程の大猿と同等の大きさの機械兵が現れた。背後に存在す

「デイバイイーン、バスターアアアーン!!」

金色と桃色の光が機械兵の発した魔力障壁とぶつかり合う。

その2人の魔法攻撃は少しずつだが、確実にバリアを破ろうと障壁をガリガリと削つてく。

「セーのっ!!」

ダメ押しとばかりに出力を上げ、機械兵を吹き飛ばす。

その威力はかなりのモノであったのか、庭園内を大きく揺るがせ、穴を開けてしまう。爆発の際に発生した煙が晴れ、目の前には粉々になった巨大な機械兵の残骸が存在していた。

「フェイトちゃん!」

「フェイト、フェイト、フェイト!!」

「アルフ……心配かけて御免ね。ちゃんと自分で終わらせて、それから始めるよ……
本当の私を」

抱きついてきたアルフをあやししながら、自身の決意を、フェイトは表明する。

彼女の瞳には、迷いというモノが消え失せていた。

上に進み、機械兵を倒していく。

暫く進むと、漸く目の前に駆動炉へと繋がるエレベーターが視界に入った。

「彼処のエレベーターから、駆動炉の所に」

「うん、有り難う。フェイトちゃんはお母さんの所に？」

「うん」

「私、その……うまく言えないけど……頑張つて」

「……ありがとう」

「クロノが一人で向かつてる」

「急がないと間に合わなくなるかもしれないな」

ユーノ達の言葉にフェイトとアルフはその場を急ぎ、あとにする。

雄介達はその後姿を見、彼女の思いが伝わり、叶う事を祈るだけだった。

時の庭園での戦闘は激しく、その影響は地球にも出ていた。それは原因不明の地震のとなり、人々を不安にさせている。

アリサとすずかはただ、親友であるのは達の事を案じる事しか出来なかった。

駆動炉には予想以上に機械兵が存在している。それらはまるで、駆動炉を守護する騎士の様に、防御を固めている。

「防御は僕がやる。雄介と志蓮はなのはの援護。なのはは集中して」

「何時も通りだよ。何時も私と一緒に居てくれて、守ってくれたよね」

襲い来る機械兵の攻撃を Protection で防御するユーノ。

その攻撃をして来た機械兵を壊し、道を切り開く雄介と志蓮。

[Sealing mode]

「だから戦えるんだよ。背中が何時も暖かいから」

そのなのはの言葉に、ユーノを始めとした雄介と志蓮の2人もまた口元を綻ばせる。

「いくよ。デイバインシューター、フルパワー！ シュウウーート!!」

《プレシア・テストアロツサ……終わりですよ。次元震は私が抑えています》

リンディ提督は Distortion Shield を展開していた。

その言葉通りに、空間の狭間に特殊な歪みを生じさせ、次元震による大きな揺れは鳴りを潜めていた。

《駆動炉をじき封印。貴女の元には執務官が向かっています。……忘れられし都――

アルハザード。そして其処に眠る秘術は、存在するかどうかすら曖昧なただの伝説です！

「違うわ。アルハザードへの入り口は次元の狭間にある。時間と空間が砕かれた時、

其の狭間に滑落してゆく輝き……道は確かに其処にある」

《随分と分の悪い懸けだわ……》

「そうかしら……？　伝説と思われていたサイヤ人が、実際に存在しているのだし……」

——あるという可能性がより大きく、確信がより強くなったわ。

そのプレシアの口元はニヤリと歪んでいるが、瞳は空虚、そして目元に涙を溜めていた。

《貴女は其処に行つて、何をするの？　失つた時間と、犯した過ちを取り戻すの？》

「……そうよ。ワタシは取り戻す。ワタシとアリシアの……過去と未来を。……取り戻すの……こんな筈じゃ無かつた、世界の全てを！　——!？」

部屋の隅で爆発が起きる。

其処から、管理局の執務官であるクロノ・ハラオウンが顔を出し、強く大きな声で思いを発する。

「——世界は、何時だつて……こんな筈じゃ無かつた事、ばつかりだよ!!　ずっと昔から……いつだつて、誰だつて……そうなんだ!」

「!」

上を見上げると、其処から見覚えのある3つの影が降りてきた。

「こんな筈じゃ無い現実から…逃げるか、其れ共立ち向かうかは個人の自由だ！ だけど……自分の勝手な悲しみに無関係な人間まで巻き込んで良い権利は、何処の誰にもありはしない！」

「……………」

「——ゴホッ」

先程まで余裕を見せていたプレシアから其れは消え去る。

「母さん！」

その様子を見て駆け出すフェイトに対し、プレシアの瞳は何処までも冷たいものだった。

「何をしに来たの？ ……消えなさい、もうアナタに用は無いわ」

そんな彼女の口元は血で汚れていて、それだけ追い詰められており、先が無い事を理解させた。

「貴女に言いたい事があつて来ました……。私は……私は……アリシア・テストロッサじゃありません。貴女が造つただだの人形なのかもしれません」

「……………」

「だけど……私は……フェイト・テストロッサは……貴女に生み出して貰つて、育てて貰つた貴女の娘です」

そのフェイトの言葉に、プレシアはただただ狂気に満ちた笑いを声に出し、大きく身体を震わせる。

「だから何？ 今更アナタを娘と思えと言うの？」

「貴方が……其れを望むなら。……其れを望むなら、私が世界中の誰からも、どんな出来事からも貴女を護る。……私は、貴女の娘だからじゃない。貴女が、私の母さんだから！」

「いつだってそう。私は……気付くのが遅すぎるわ」

差し伸ばされたその小さな手を握り返そうとするプレシア。

彼女の、その瞳から、何時の間にか狂気というモノが抜け落ちていた。

だが。

「——ッ!？」

彼女の、プレシアの居る床が崩れる。そして、プレシアとアリシアの入った培養器は虚数空間に呑み込まれた。

「——そんな……な……。母さん!!」

「いや、いや、いや。面白いモノ見させて貰いましたわ。……家族の絆、恐るべし。まさかこのわたしの洗脳を振り解くとわ」

振り返ると、其処にはへビが存在していた。

口元で鋭く長い舌がチロチロと出たり入ったりと繰り返している。

「……………あなたが母さんを……………」

「ええ、ええ、ええ、そうですよ。その通りで御座います」

その言葉と共に、アカマタは吹き飛ばされる。

ぶつかり、壊した壁から発生している煙により確認は出来ないがそれほどダメージは通ってはいないだろう。

「もう良い。喋るな……………」

握りしめた拳をかざし、ドゥームは怒りにその身を任せていた。

何とか決着 消えるアカマタ、そして俺

「クソツ……」

なのは達を見送り、残された今の俺には悪態をつく事しか出来なかつた。

周囲を見渡すと、破壊された柱に、機械兵。その残骸や破片が辺り一面に跳飛び散らかっている。

「（尻尾が無い……大猿になってしまったのか……）。……ハハッ」

綺麗に切断された尻尾を手に取り、ただ空虚に笑う。

自身をコントロール出来ず、戦闘本能の赴くままに辺り一面を破壊し、友である皆を傷つけた。

「（今度は流石に……今度こそ本当に嫌われたかもな）」

大きな猿の化け物に変わり果てた。そして、理性を失くして、攻撃をした。先程見た彼等の姿。バリアジャケットはボロボロになっていたのだ。

「何やってるんだらうな……」

尻尾が無いのではなく、斬られた。

——スキルメイカーで理性を保つ為のレアスキルを創りだしておくべきだった。

——尻尾を予め、最初から切っておくべきだった。

そんな事が頭の中を占め、グルグルと廻り、モヤモヤとした雲をつくりだす。その雲は、目の前を隠し、歩を進める事に対して大きな恐怖を抱かせた。

「情けない……皆は戦っているのに、俺ときたら」

脚に力を入れて立ち上がる。だが、上手く立ち上がる事が出来ず、スタんと尻もちを付いてしまう。

「そっか……尻尾が無い所為かバランスが取れてないんだ」

何とか立ち上がるが、其れでもフラフラとする。其の様子はまるで、生まれたての子鹿の様に頼りない。脚がブルブルと震え、今にも倒れそうだ。

「何とか動けそうだな。でも……服が無いしな」

今の姿は当にお笑いモノだろう。

全裸に加え、中途半端に斬られた尻尾の生えている亜人。金色の髪が目立っている所為か尻尾の方は余り視界に入らないかもしれないが、それでも間抜けなのは変わらな
いだろう。

「ブ、ブロン!? その姿……。というか、本当にブロンなのか?」

気が付くと目の前にはドウームとアルフの姿があった。

思わず冷や汗が流れる。

今の俺は裸で立っているのだ。

裸を見せる趣味は無いので羞恥心が途端に爆発的に現れる。

「——!?!」

「……ドツペルゲンガー」

そのドゥームは手で俺の身体に触れ、その言葉と同時に服を構築してくれる。瞬きをする、その一瞬の間に見覚えのある服を俺は着ていた。

「ドゥーム……一瞬、掘られるのかと焦ったぜ……」

「そ、そんな訳ないだろ！ 裸じゃ寒いだろうと思つて服を構築してやったんじゃないか。感謝して貰うならいざしらず、そんな事を言われるなんて」

「悪い。其れにしてもこれは粹な計らいだ。……嬉しいぜ」

自身の着ている服を触りながら彼に向かい、感謝の気持ちを述べる。

俺が現在着用しているのは山吹色の道着だ。背中の円の中に文字があるかどうかは知らないが、それでもこの道着を着てテンションはかなり上がった。

先程までのブルーな気持ちはすこしばかり鳴りを潜めている。

「其れは良かった。それじゃ、先を急ぐか」

「悪い、先に行つてくれ」

そのドゥームの言葉に俺は思い出したかの様に尻込みをしてしまう。

皆と集まるのが、合流する事が怖いのだ。

「分かった。……あとから来いよ」

「ありがとう」

ドゥームはそう言うと、アルフと共に走り去って行く。

その後姿を見届けたあと、俺は意識を集中させた。

「今のうちにスキルを創りだしておこう……大猿になっても理性を失くさないスキル……そして……」

「……………」

「あら、あら、あら。もうオシマイですか……」

アカマタの前には力無く倒れているドゥームの姿があった。

ドゥームだけでは無い。

フェイトが、アルフが、なのはが、ユーノが、クロノが、リンデイが。

そして、雄介と志蓮、ゾイルもまた倒れていた。

「ま、まだ……」

「無理はなさらない方が良いですよ。さて、と……苦しまない様に優しく呑み込んで

あげましょう」

そう言うのと、アカマタはその自身の口を大きく広げ、倒れている雄介を飲み込もうとする。

《——逃げて！ 雄介くん》

「駄目えええー!!」

その大きな悲鳴を楽しむかの様に、目を細め丸呑みにする。

《そ、そんな……》

「いや……」

「——何をした!? サイヤ人!!」

だが、その飲み込んだ筈の当のアカマタは戸惑いと同時に驚き、そして怒りをあらわにし、肩を震わせている。

「ブ、ブロンくん？」

「良かった。間に合って……」

周囲を見渡すと、其処には力無く倒れている皆が居た。

アースラの切り札であるクロノとゾイルが…。

その上に立ち、艦長をしているリンデイが…。

フェイトが、アルフが…。

なのはとユーノが…。

そして、雄介と志蓮が…。

「志蓮……例のモノは？」

「なん、とか……此処に……」

差し出されたその手には木製の赤い色に塗られた筆が握られていた。

「ありがとう……。エイミイさん」

《は、はい》

「皆を転送して下さい」

《でも君は!?!》

「大丈夫です」

その言葉に、エイミイは倒れている皆をアースラへと送還させる。

自分以外の皆の転送が終了したのを確認し、目の前の敵を睨みつけた。

「覚悟しろよ……へび野郎」

「ふむ、ふむ、ふむ……尻尾が無いところを見ると斬られたようですね。貴方の様な化け物、皆怖がつてるんじゃないですかね……」

「そうかもしれないねえ。だけど、今は……そんな事あどうでも良い。お前を倒す。いや、消滅させる。細胞の一片も残さず、な」

「倒れていった仲間の為とか言うつもりですか？」

「馬鹿言うなよ……気に喰わないからだ。お前が、そして何よりも、自分が。ただそれだけのシンプルな理由だ」

その言葉を吐き捨て、自身に託された赤い筆を握りしめる。

其れを目の前に持って行って行き、空中に文字を書き記す。

「一筆……奏上！」

書かれたのは火の文字。

その文字は次第に大きくなり、身体を覆い隠す。

炎が消え、姿を現すが、其処には先程までの姿では無く、身長は伸び、バリアジャケットの様に、全身を包む赤いスーツを着込んでいた。

そのスーツは着物の様な特徴をしており、腰にはベルトが。そのベルトの左部分には刀が帯刀されている。

そして1番目を引くのが頭だ。

マスクには先程の黒色の火という文字が大きく主張するかの様に、存在している。

本来ならスーツは青年くらいの年程で丁度の大きさだが、装着者である俺に合わせた大きさになる。

「“シンケンレッド”、保和歩栄」

「〃シンケンジャー〃だと!? 〃志葉の一族〃とその関係者共は滅亡させた筈……いや、そもそもおまえは志葉の血を引いてはいない筈だ!!」

「全く以てその通りだ……。だが、俺は〃モチカラ〃を扱える。この事が分かるな?」
——モチカラ。

その名前の通り、文字を具現化させる力だ。

本来ならば、志葉の一族やその家臣とされる〃池波〃、〃白石〃、〃谷〃、〃花織〃の一族だけが使いこなせる特殊な力。

レアスキルの御蔭とはいえ、使用する事が出来たのに自分でも驚いている。

『志蓮、頼みがある』

『何だ?』

鳴り響く警報の中で、俺と志蓮は密かに念話で頼み事をする。外道衆が存在している。そして出現した。

だからこそ、用意しておくべきモノがあるのだ。

『〃シヨドウフォン〃を探して欲しい』

『何だそれは?』

『赤色の折り畳み式携帯電話みたいなモノだ。筆のカタチに変形する変わった代物だが……外道衆が居るのだからそれもある筈だ。お前のデバイスは王の財宝ゲイト・オブ・パレロンの様なモノなのだろう？ なら中に存在しているかもしれない……』

『……わかった。時間は掛かると思うが、検索はしてみる』

「忌々しい志葉の力。良いでしょう、今度こそ消し去ってあげますよ……跡形残さず、消し炭に」

「参る！」

左腰に存在している「シンケンマル」に、バックルに設置されている黒色のディスク装填し鏢にする。

床を強く蹴り、アカマタの懐に潜り込む。

シンケンマルを振り上げ、斬りかかるが鱗により流されてしまう。

「（リンデイさんはどうして彼処に？ ゾイル程の実力者が何故？）」

「疑問に思っているようですね？ お応えますよ、その疑問に」

お互いに攻撃の応酬を繰り返しながら、言葉を交わしていく。

その口からは予想する事は出来たが、其れでも認めたくない言葉が発せられる。

「彼等は攻撃してきましたが、てんで弱かったですよ。大人の女の方は遅れてきたのですが、予想以上に弱くて、脆くて……。黒い方じゃない少年……。彼も転生者ですよ。え。彼はまあ、強かったですよ。ヒトの身でありながらですが。外道に堕ちずにあの実力なのですから、落ちた場合はどうなるのか……」

「ヒトの身でありながら……。か。究極生命体をそんな風に評価するなんてお前ぐらいだろうさ」

繰り広げられる攻撃と防御は苛烈であり熾烈で、無事だった空間を削っていき、虚数空間が広がっていく。

その穴に落ちない様に気を付けながら戦うのには問題は無いが、目の前の敵であるアカマタの攻撃を回避しながらとなると話は別だ。

其奴の動きは速く、蛇のようにねちっこい。

回避をしたと思うと、次の攻撃が迫り来る。思わぬところから、思わぬ角度での攻撃が飛んでくる。

右に、左にと飛んで回避をしていると周囲の壁や床はボロボロと崩れ去り、脚の踏み場は殆ど無くなっている。

「（此れじゃ、不味いな……。場所を変えるべきだろうか）」

相手の攻撃を避けながら、隙を突きシンケンマルで斬りつける。

そうしながら少しずつ場所を移動し、まだ安定した踏み場のある空間に踊り出る。

「そろそろ本気を出したらどうですか？ 貴方の本気を見てみたいのですが……」

「……………」

印籠の様なカタチをした新しいアイテムを手に握る。

蓋を開き、内部に“スーパードイスク”を装填する。

「スーパードイスク」

上部に存在しているボタンを押すと再び姿が変わる。

赤いスーツの上に、金の縁取りが成された白い陣羽織が出現する。

その手に持った“インロウマル”をシンケンマルに装填する。

「それは……何ですか？」

そのアカマタの疑問に俺は応える事なく、斬りかかる。

だが、先程よりも強力で迅速なその攻撃に対しても其奴は難なく対処してくる。

「本気を出してください……欠伸が出てしまいますよ。ふわあ……」

《そんな……このままじゃ》

「大丈夫ですよ、エイミイさん」

その不安げな言葉を放つエイミイに対し、赤いマスクの中で俺は不敵な笑みを浮かべる。

それに対し、アカマタはただただ訝しげに顔を顰めるだけ。

「どういうつもりですか？」

変身を解除した俺に対し、アカマタは動揺したのか大きく声を荒げる。

その瞳は、予想外の行動に驚愕し、其れと同時に恐れているかの様に感じられる。

「なあに……見せてやろうと思つてな。モチカラではなくてサイヤ人の力を。全く

……嫌になるぜ、力押ししか出来ない自分がよお……はああああああああつ

!!!!
」

気を一気に大きく開放する。

開放されたその気はオーラとなり、身体の周囲を明るく照らす。

「——ガッ!？」

アカマタは御腹を押さえながら身体を丸め、此方を睨む。

「どうした？ 立てよ……」

《一体何を!？》

「ただ速く動いて、速く殴つて蹴つた。そして斬つた……其れ丈ですよ」

《其れ丈つて言われても……》

「ウググ……」

「何蹲つてるんだ？ たかだかパンチ100発とキックを50発喰、斬撃を318回

喰らっただけじゃないか……」

「イタイイタイイタイイタイ……」

壊れたレコーダーの様に同じ言葉を繰り返すアカマタ。予想以上に堪えているのか、その瞳には大きな涙を溜めている。

「……痛い」

繰り返ししていた言葉は止み、顔を上げる。

「ん？」

そのアカマタの瞳は大きく見開かれ、ギョロツとしている。ヒゲが抜け落ち、より蛇に近い姿になる。

「予想外でしたよ。此処迄のスピードに、此処迄のパワー。いやはや予想外……それでいて想定外……。良いでしょう……私も少し、本気を出しましょうかねえ……」

「——!？」

その言葉を聞くと同時に脚に鋭い痛みを感じた。

「な、なに……蛇……だと……?」

脚に蛇が齧り付いていた。噛まれている箇所からドクドクと血液が零れ出ていく。

「ククツ……気が付かなかったようですねえ。この腕が、脚が変形し、噛み付いていた事に……」

その言葉を聞き、見てみるとアカマタの右腕と左脚が伸び、そして此方の脚に噛み付いている蛇と繋がっていた。

いや、この噛み付いている蛇が腕と脚なのだ。

「くそ……」

身体がフラつき、視界が暗くなり霞む。

目の前には倒すと決めた敵が存在しているのに、身体を思う様に動かす事が出来ない。

「毒が効いてきたみたいですね……」

《——毒!?!》

「ええ、ええ、ええ。この毒は私の体内で生成される特殊なモノでしてね……ワクチンや抗体なんてモノは存在せず、無意味なんですよ。万能薬でも無い限り同仕様も無い程に強力な毒……」

「(やべえ……目の前が……。声も余り聞こえなくなってきたやがった)」

息が荒くなり、視界は暗く、耳は遠くなる。身体の熱は急上昇し、重く、四肢を曲げる事すらままならない。心臓の音、鼓動だけが聞こえ、それがやけに煩わしい。

「それでは行きますよ」

その言葉と同時に次々と拳が襲い掛かって来る。

それらの攻撃は弱りきった身体に容赦無く叩きつけられ、大きな悲鳴を上げる。

《ひ、酷い……》

「知らないんですか？ 蛇とは相手を毒で弱らせた後に美味しく頂くんですよ……。ああ、そういえば……締め付けるのを忘れていましたね。蛇といえはまず此れでしよう」

その言葉と同時にその長い腕で、身体を巻いていく。

そして巻き終わると同時に、キツく締め付けるのだ。

「ぐわあああああ……ツツツツ!!!!」

「良い悲鳴ですね……もつと聞かせて下さい」

《止めて、其れ以上は……》

「安心して下さい……この次は貴女方の番なのですから」

そう言いながらアカマタはより強く、身体を締め付けていく。

その顔は、表情というモノが存在するのならば愉悦とうモノに浸っているように見えただろう。

「エイミイ……」

「クロノ君!」 駄目だよ、そんな身体で動いちや!」

振り返ると、其処にはボロボロになりながらも立ち上がり此方を見据えるクロノの姿があった。

クロノだけでは無い。なのはや雄介を始め、先程回収をした皆が立ち上がっている。だが立っているだけで精一杯なのか、フラフラとしており、デバイスを杖代わりになっている。

「転送ポートの起動を頼む……」

「無茶だよ……そんな傷で」

「頼む……」

「ブロン君だけに戦わせるなんて出来ないよ」

それぞれが、エイミィに対し、己の思いをのせた視線を送る。その瞳には恐怖が存在しているが、確かな決意と大きな勇気が存在していた。

「其れでも、その傷じゃ……」

「そんなに傷が気になるなら……此れでどうだ?」

志蓮はその言葉を発すると、王の財宝から人数分の飲み物を取り出す。

その液体からは消毒液の様な鼻を打つ匂い、其れと同時に甘い匂いが漂ってくる。

「何だ? その液体は……」

「表現の難しい匂いだね」

「“エリクサー”……特效薬さ」

「貸せ」

雄介とドウームはその手にあるエリクサーを奪い取り、一気に飲み干す。

「——な!？」

その途端、身体が発光し、傷が見る見るうちに塞がっていく。

「す、凄い……傷が……」

「それだけじゃない……体力が回復してる」

「副作用は？ 副作用とか無いよな!？」

「無い！ そんなモノは一切、断じて無い。存在していない」

その志蓮の言葉を聞くやいなや皆が次々とエリクサーを飲む。

万全の状態に戻った彼等は、再び戦場へと足を運ぶ。

「グギ……グググ……」

「フフフ……。この程度では終わらせませんよ、この程度ではねえ」

締め付けがどんどんと強くなっていく。

それを感じ取ることは出来るのだが、身体が動かず、抵抗する事が出来ない。

毒による所為か意識は朦朧とし、藻掻く事もなく、身体はブランと力無く垂れている。ただただ締め付けられ、骨が軋み折れ、ヒビ割れる音が遠くから聞こえてくるだけだ。「抵抗くらいして下さいよ……ああ！ 毒の所為ですかね……その効果で動けないんですか。……応える元気も無いんです、かあ!!」

強く、その身体を蹴り上げるアカマタ。

文字通り人形のように動かない身体をゲシゲシとサッカーボールの様に蹴り続ける。

「ハハハッ、幾ら戦闘民族とは云え毒で此処まで弱るとは……。——!?!」

「——グラビトン!!」

「——影竜の咆哮!!」

突如、アカマタを強力な重力と黒いブレスが襲いかかった。

「お前達は!? どうやってその身体の傷を」

「大丈夫か、ブロン!?!」

横たわるブロンを引き寄せ、目の前の敵である蛇を睨むのはとフェイト。

「う……」

「此れを飲ませておけ……其れまでの間、俺達が時間を稼ぐ」

「させませんよ!!」

その手に有る液体がどういったモノなのか瞬時に理解したのか、アカマタはなのは達

に飛び掛かる。

「サイコキネシス！」

「お前の相手は此方だ」

空中へとジャンプをしたアカマタの動きを止め、雄介の回復を急かせる。止まったアカマタの瞳はガラガラと光り怒りに燃えていた。

「これを飲んで」

口元に充てがわれたその瓶の中身をゴクゴクと飲み干していく。すると不思議な事に、先程迄の身体の痛みが治まり、傷が見事に塞がっていく。

「ブロン君！」

「ちくしょう……死ぬかと思った」

目の前で心配そうに覗きこんでくる少女2人、そして少年2人と1匹の女性に対し、大丈夫だと応える。

「本当に大丈夫なの？」

「ああ……この通りだ」

軽くジャンプをして、身体を動かしてみる。

先程までの事が嘘みたいに、身体は軽く、自在に動いてみせる。

いや、それ以上だ。

瀕死になりかけ、其処から回復をしたのだ。劇的に戦闘力が上昇した筈だ。

「にしても、このエリクサーだっけか……。カルピスと混ぜると美味しくなると思うんだけどな……」

「ははっ」

「さて、反撃開始だ！」

目の前で繰り広げられている戦闘に、俺はまた再び足を踏み入れる。

「ブロン！」

「回復したか……」

「御陰様でな。にしても、『仙豆』以上の万能回復アイテムが存在しているなんてな」

「サイヤ人め……」

「サイヤ人は死の淵から復活すると、その度に強くなっていく。……この意味が分かるな？」

目の前の敵を睨み、呼吸を、気を整える。

先程まで身体に溜まっていた毒は消え失せ、頭の中は何時もよりもクリアになっていた。

「行くぞ」

「——グあつ!？」

さつき迄よりも、嘔み付かれ毒を注入される前の時よりも強く、速く打撃を叩き込んでいく。

その様子は周囲から見ていると、アカマタの身体が突然折り曲がったり、凹んだりしている様に見えるだろう。

「何が起きているんだ？」

「み、見えない……目で追う事が……」

「気で追おうとしてるんだけど……全然追いつけない……」

次々と手で、脚でその鱗を削り、確実にダメージを与えていく。

その攻撃に対処する事が出来ず、受け続け、アカマタは白目を向きながら必死に息をするかの様に口を大きく開いている。

「超サイヤ人になる必要も無いな……ホラッ、プレゼントしてやるよ」

その大きく開いた口の中に、凝縮した気の弾丸を詰め込む。そして、右手で上顎を、左手で下顎を掴み、無理やり閉じさせる。

1秒も経過せずとその気弾は爆発し、鼻の穴から煙がモクモクと出て、昇っていく。

「えげつねえな」

「どつちが悪者か分からねえ……」

「畜生！ お前達を殺してやる!!」

激昂し、言葉遣いが乱れるアカマタ。

彼の瞳には、もう理性というモノは存在せず、あるのはただ目の前の存在を消し去るという害意、敵意、殺意だけだった。

「これで終いだ……コオオオオオオオツ」

気を高めると同時に呼吸を整えていく。

その呼吸の仕方は通常時とは違い、大きな音が鳴り響く。

特殊な呼吸法により、体内の血液の流れがより速く、確かなものへと変わる。そしてそれは、吸血鬼が最も忌み嫌う太陽と同種のエネルギーを体の内につくりだす。

「この音は？」

「波紋だ……。波紋の流れる音だ」

手にしたシヨドウフオンで気という文字を書き記していく。

その文字は身体に吸い込まれていき、波紋の呼吸による太陽のエネルギーと共に、気を限界以上に引き出し、増大させていく。

まるで潜在能力を開花させたかのように。

「ビクバン・か、め、は、め……」

両掌に溜められた気は大きくなり、一気に凝縮する。

その気弾からは目を灼くかと疑う程の凄まじい閃光を放ち、周囲を強く照らす。

「波あああああああー……っ!!!」

放たれたエネルギーはアカマタの身体を飲み込んでいく。強烈な光が迸り、その敵の身体を消滅させた。

「やった……?」

「やったぞ!!」

「終わったあ……」

「まだだ……まだ “二の目” がある」

安心している皆を余所に俺はまだ気を周囲に配っていた。

「二の目って?」

「——来たぞ」

「よくもやってくれましたねえ」

消滅した筈のアカマタが再生し、巨大になっていく。

だが、その大きな身体の所為で自滅する事になる。

「——!?! バカなああああああああ」

床が割れ、虚数空間に落ちていくアカマタ。

「え!？」

急に身体が引つ張られて、俺もまた落ちていく。

舞空術で切り抜けようとするも、何かが巻き付いているのか上手く抜け出すことが出来ない。

脚元を見ると其処にはまた蛇が絡み付いていた。

「道連れって事かよ……」

落ちていく俺に対し、遠くから俺の名前を呼んでいる皆の声如山彦のように繰り返し聞こえた。

ただいま皆 帰ってきた保和歩栄

暖かい陽射しが身体を優しく照らし、徐々にはあるが確実に暖めていく。背中にはヒンヤリとした感触が存在し、少し青臭い匂いが鼻を打つ。

何時までも横になっていたいが、ふと眼を開き、身体を起こすと、其処は先程までとは違った空間が広がっていた。

「此処は……」

見渡す限り青々とした色が、草木が広がっている。

風により、樹の枝が揺れ、擦れ合い、その際に発生する音が聞こえてくる。

風が頬を、金色の髪を撫でていく。

それは弱いと感じられるが、それでも確かに優しさと温もりが存在していた。

「目が覚めましたか」

「——っ!？」

背後から聞こえてきたその声に、驚きながら俺は後ろを振り向く。

そこには、一風変わった見た目をした青年が居た。

「そんなに警戒しないでください。私は貴方と話がしたいだけです」

その様な事を言われても、警戒しないでいるという方が無理な話だろう。

声を懸けられるまで、後ろに居たという事に気が付かなかつた。

何かしらの力を持っていると思つて問題は無いはずだ。

況してや、目の前の彼からは、有機的生命体ならば本来持つているであろう気を感じ取る事が出来ないのだ。

警戒しない方がどうかしているだろう。

「そんな事を言われてもな……自己紹介すらもしてこない奴を、どう信用しろと？」

「それもそうですね。では……改めまして、私は『界王神』——シエンとでも気軽に呼んでください」

その言葉に、俺は唾然とする事しか出来なかつた。

界王神。

成る程、言われてみれば確かにそうなのかもしれない。

藤色だろうか……青とも紫とも言い難い肌、白い髪色。そして、両耳に付けた変わった形をしたイヤリングのような物。

何処からどう見てもとまでは言えないが、それでも界王神だと言われればそうなのかもしれないと思わせる特徴を、彼は持つている。といつても知識内に存在している特徴から判断しただけなのだ。

が、本当に界王神だでしょう。

そうすると、此処は『界王神界』なのだろう。

地球と比べ、空気が澄んでいて美味しい。

心地よい風が吹いて、生物にとって良い環境だ。

「その……で、貴方が界王神様だとしてですが……。一体何のようですか?」

「シエンで構いません。そんなに堅くならないで下さい。フランクに、友達と話している感じで良いですよ」

目の前の青年、シエンが笑いながら、そう勧めてくる。

彼が本当に界王神だとしたら、そんな事は恐れ多くて出来はしない。

そう思うのが正常なのかもしれないが。

「それなら、シエン……と。それで、一体何の用で?」

「用というのは簡単です。貴方達転生者は『闇の書』には限界まで手出しをしないで欲しいのです」

「庭園、崩壊終了。全て虚数空間に吸収されました」

「次元震、停止します。断層発生はありません」

「了解……」

時間は遡り、ブロンが虚数空間に呑み込まれ落ちていった直後の事。

その場に残っていたなのはを始め、時の庭園に居た皆はアースラへと送還され事無きを得ていた。

だが、アースラに乗る全員の気持ちは酷く落ち込んだものだ。

プレシア・テスタロツサが発生させた次元震は停止し、その背後に居たという謎の存在であるアカマタを倒すことは出来た。

1人の少年の行方不明、という案件を残して。

「第三船速で離脱。巡航航路に戻ります」

その事に唇を噛み締めながら、彼等は崩壊し、消え去った庭園跡から離脱していく。

「あれ、フェイトちゃんは？」

「アルフと一緒に護送室、ドゥームは別の部屋だ。彼女はこの事件の重要参考人だからね……申し訳ないが暫く隔離になる」

医務室にて、なのは達は怪我をした部位の治療をしている。

幸いと怪我は酷いものではなく、消毒をしたり、包帯を軽く巻く程度だ。

と言うよりも怪我はほぼほぼ塞がってしまったている。あの薬——エリクサーの効果によるものだ。

「今回の事件は一步間違えれば、次元断層さえ引き起こしかねなかった重大な事件なんだ。時空管理局としては、関係者の処遇には慎重にならざるを得ない」

そのクロノの言葉になのはは顔を下に向け、頷くほか無かった。

フェイト・テストアロツサは母親であるプレシア・テストアロツサの言葉に従い、行動を起こしていた。

彼女に非は無いのだから……といった気持ちを抱いていると同時に、それでもいろいろと必要な事なのだとして理解せざるを得ない。

そんな複雑な気持ちを抱きながらなのはユーノによる治療を受ける。

「ブロンンの事なんだが……」

その雄介の言葉に、場はシンと静まり返る。

虚数空間の底に落ちていき、消えていった彼。

無事なのだろうか、それとも。

考えれば考える程に悪い方へとイメージが動き固まってしまう。

「……………」

「彼奴なら生きている」

そのゾイルの言葉には確かな説得力があった。

その理由というものは理解できないが、その言葉を聞いた彼等には何故かそう感じられたのだ。

「奴の気を僅かだが感じ取ることが出来る。気が……感じ取れるんだ」

「——!? それは本当なのか?」

「ああ、確かにそうだ……。だが、何かに邪魔をされているのか、虚数空間の中だからなのか上手く拾うことが出来ない」

見えない壁の様なモノに遮られ、気をハッキリと感じ取る事が出来ない。

だが、その言葉は彼等に、なのは達にとつては希望となり、安心感を与えた。

少なくとも、ブロンは死んではいけない。生きている。

「あとは、見付けて保護するだけか……」

そんなクロノの呟きはその事実安心したという安堵感と同時にこれからの事に対しての不安と焦りを感じさせた。

「闇の書には手を出さないで欲しいのです」

「えっと……何となく理解は出来たのですが、何故ですか?」

界王神界にて、風に髪をなびかせながら俺はシエンの申し出に対して質問で返す。

そんな俺の態度を気にした素振りを見せること無く、シエンは笑いながらその質問に回答をしてくる。

「あなた方、転生者は強力な力——能力——を手にしています」

それは事実、この身体には、魂には強力な力が存在し眠っている。

「それが……その力を内包したリンカーコアが抽出され募集されてしまうとどうなると思いますか？」

そのシエンの言葉に、俺はその場面を、そうなった後の事を想像してしまう。

誰にも手が付けられない程の力を持ち、そして暴走を始めるだろう。

地球で発動し暴走した闇の書は、内包した魔力と魔法を暴発させ、その次元世界を破壊する。

そして「転生機能」により、新しい場所へと移動しそれを繰り返していくのだ。

それはとても恐ろしい事なのだろう。

「……そうなった場合、この世界は」

「ええ、破壊し尽くされてしまうでしょう。この世界だけは無くて他の世界も……」

その言葉に目の前が真っ暗になる。

死刑宣告に似たその言葉は、俺の背中を冷たく撫でていき、首元を締めているかの様

な錯覚を感じさせる。

それは、この世界にとっても死刑宣告であろう。

もしそうなつてしまえば、止めるどころか防ぐことも出来ない。

「わかりました……。不用意な戦闘は……。募集されるような事は避ける様にします」

「有り難う御座います」

その俺の返答にシエンは、安堵したのか頬の筋肉を弛め、微笑む。

鳥の囀りが遠くから聞こえ、木々の間を風が通り抜けていく。

「あの……」

「何でしょうか？」

どれ位じつとしていただろうか。

沈黙に耐える事が出来ず、俺は思わず声を掛けてしまう。

「貴方は何故、転生者の事を……？」

「世界は無数に存在している……。その事を知っていますか？」

その俺の質問には答えず、新たな質問をしてくるシエンに対し、俺は少し首を傾げる。

そんな素振りに気が付いていないのか、気付いていないふりをしているのかシエンは

話を、言葉を続けていく。

「平行世界、異世界、次元世界……数えきれない程存在しています。……そして、各世界

には神様が存在しているのです。人の数だけ、人の思いの分だけ……所謂八百万の神でしようか」

神様が居るからヒトが居る。

人が居るから神様は存在している。

「……そして、この私を始め創造の神である界王神。その対となる『破壊神』。各世界を歩き来する魂を管理する『転生神』」

「転生、神……？」

「はい。あの方はカタチというモノを持つてはいません。その者の心に合わせて姿を変えらるのです」

「姿を変える……」

「憶えがありませんか？」

その問いに俺は自分の記憶の中を覗く。

この世界に転生をする前、前世の世界で死んだあと、不思議な空間で出会った存在。それが、そうなのだろうか。

「でも、死んだら……魂は『閻魔様』に」

「ええ。それで合っています。……ですが、あの方は心の奥を……深層心理を見抜くのです。そして、転生を心の底から望んでいるヒトを、よつほどの悪事を働いていない限

り、転生させるのです。まあ、どの様な順番で転生をさせるかなどはサイコロを振って決めているみたいですが……」

「なんですか、それ……」

その余りにも、しようのない、そしてくだらなく巫山戯た選定方法に俺は思わず、驚きよりも、呆れが。

そしてその事実には笑う事しか出来なかつた。

「次元震の余波はもうすぐ収まるわ……此処からなのはさん達の世界へなら明日には戻れると思う」

アースラ内に存在する食堂。

其処でなのはを始めとした地球組の魔導師、ユーノ、そしてリンディ提督が食事を摂りながら之からのことを話している。

「……ただ、ミッドチルダ方面への航路はまだ空間が安定しないの。暫く時間が掛かるみたい……。数ヶ月か、半年か。安全な航行が出来るまでそれくらいは掛かりそうね」

時の庭園で発生した次元震の影響によるモノなのか、次元世界を行き来する為の空間

が乱れている。

無理に航行すると何処に出るか、最悪の場合は次元の波に呑み込まれ航行不能……そして、虚数空間に落ちる可能性も存在しているのだ。

「あの人が目指していたアルハザードって場所、ユーノ君は知ってるわよね？」

「はい……聞いた事があります。旧暦以前——全盛期——に存在していた空間で、今ももう失われた秘術が幾つも眠る土地だって」

「だけど、とつくの昔に次元断層に落ちて滅んだって言われてる」

ユーノの言葉に付け足すようにクロノは言葉を発する。

彼の両手にはトレーが握られており、その上には食べ物が入った食器が置かれてい

る。

これから食事を摂るのだろう。

「あらゆる魔法が、その究極の姿に辿り着き、その力をもってすれば叶わぬ望みは無いとさえ言われた——アルハザードの秘術。時間と空間を遡り、過去さえ書き換える事が出来る魔法……失われた生命をもう一度甦らせる魔法。彼女はそれを求めたのね……」

「でも……魔法を学ぶ者なら誰もが知っている。過去を遡る事も、死者を甦らせる事も出来ないって」

「だからその両方を望んだ彼女は、お伽話に等しい様な伝承にしか頼れなかった…頼らざるを得なかったんだ……」

そんなユーノとクロノの言葉に志蓮は黙り続けることしか出来なかった。

死んですぐにしか効果は無いとは云え、死者を完全に蘇生させる事が出来る薬物が存在している事を。

過去も未来も自由に行き来することが出来るタイムマシンが存在しているという事を。

「でもあれだけの大魔導師が、自分の生命さえも懸けて探していたんだから…彼女はもしかして本当に見付けたのかもしれないわ——アルハザードへの道を……今となつてはもう分からないけどね」

サイヤ人という伝説で語り継がれている種族が存在していたのだから……。

だがそれは、今となつては確認する事が出来ないモノだ。

この場に居るユーノ、クロノ、エイミィ、そしてリンディはそう思わざるを得なかった。

「ごめんなさい。食事中に長話になっちゃった……冷めないうちに頂きましょう」

そう言いながらリンディは、笑い、スプーンを手取る。

「君達には多分、アースラでの最後の食事になるだろうし……」

「お別れが寂しいなら、素直にそう言えば良いのになあ……クロノ君てば照れ屋さん」
そんなエイミーの言葉に、クロノは慌てふためく。

からかっているという事を理解してはいるがそれでも、顔を紅くし声が上がってしま
う。

「此処には何時でも遊びに来て良いんだからね」

「はい、有難う御座います」

「エイミー、アースラは遊び場じゃ無いんだぞ！」

「まあまあ、良いじゃない。どうせ巡航任務中は暇を持て余してるだし」
声を荒げるクロノに対し、その上官であるリンディ提督は笑いながらその事を了承す
る。

「艦長まで!？」

それに対し、クロノは驚きを隠せず、ただ啞然とし、呆れる事しか出来なかった。

「ブロンさん……貴方は何故、プレシア・テスタロッサに思いをぶつけなかったのですか
？」

「——え!？」

シエンの唐突な疑問に、俺は思わず黙りこんでしまう。あの時に、彼女を見て思った事は沢山あった筈なのだ。

だが、それが上手く思い出せない。

衝動的な感情、想いだったからだろうか。

「そんな事、訊かれてもなあ……」

「……………」

答えをなかなか出せない俺に対し、シエンは黙って俺の顔をジツト見つめてくるだけだ。

それが、何処か責めているようで、そうじゃ無いみたいで……不思議な感じを与えてくる。

そうして俺は、ポツリと言葉を吐き出していた。

「資格が無いと思っただ……」

死んだ後……あの空間で、転生神と出会い力を望んだ。

前世で、家族の想いを蔑ろにし、鬱ぎ込んでいた自分。

促されるままに、自分の勝手な欲望のままに力を望み欲した。

家族の事を想った事は、今世で自身の持つ指の本数だけでは数えきれない程ある。

死んだ娘——アリシア・テスタロッサ——に対してのプレシアの想い、願い。

フエイトに対しては酷く当たっていたが、それだけの強い思い。それだけ愛情が深いという事。

愛が強く深いが為に、故に浸け込まれ、暴走した。

彼女は罪を犯した犯罪者として語り継がれていくだろう。

だけど、そんな彼女が……自分よりも、よっぽど人間らしい。

人として精一杯生きていたと思う。

だからなのだろうか。

負い目を感じているからだろうか。

「資格が、無いと……感じたんだ」

あの時に声を出せた雄介が羨ましい。

そして、人として、母親として暴走していたプレシア・テスタロッサが羨ましく、眩

しく感じられたのだ。

「それじゃ、今回は本当に有り難う」

「協力に感謝する」

言葉と、そして別れの握手を交わしていく。

この場、転送ゲートにはなのは、雄介、志蓮、フェレット状態のユーノ、ゾイル、クロノ、エイミー、リンデイが居た。

ただ一人、ブロンを除いて。

「フェイトの処遇の決定……そしてブロンの居場所が見つかり次第、連絡する。大丈夫さ、決して悪い事にはならない」

「うん、有り難う」

未だに見つかってはいないブロン。

彼の気がまだ存在している事だけが手がかりなのだ。

捜し出すには相当の苦勞があるだろう。

そして、フェイト・テストロッサ。

彼女の使い魔であるアルフ、フェイトの兄であるドウム・テストロッサ。

彼等の処遇は、それほど悪い方にはいかず、それどころか良い結果が出るだろう。

何も知らされず、ただ母親の頼みを、命令を聞いていた彼女達。

そんな3人を、クロノ達が、目の前の彼等が見捨てる筈が無い。

そう信じる事が自然と出来るのだ。

「ユーノ君も、帰りたくなったら連絡してね。ゲートを使わせてあげる」

「はい、有難う御座います」

「じゃあ、そろそろ良いかな？」

名残惜しそうにエイミーは転送の準備が出来たことを伝える。

「それじゃ」

「またね」

眼を開くと其処は既に海鳴臨海公園だった。

設置されている時計は朝の6時25分を指している。

風は少し冷たく、潮の香りが漂ってくる。

小鳥の鳴き声は何処からか聞こえて来て、太陽も昇りつつある。

「帰ろうか」

「「うん」」

それぞれが、それぞれの家へと向けて歩を進めていく。

朝の風が髪を優しく撫でる。

新鮮な空気が肺の中に入り、帰ってきた事を彼等に実感させた。

携帯電話が、起きろとも言わんばかりに大きな音を鳴らしている。

寝ぼけながら、重い目蓋を擦りながら、なのはは布団の中でモゾモゾと動き、そしてその携帯電話はベッドから落ちてしまう。

それでも鳴り止まぬ音に、なのははうんざりしながらも携帯を手取る。

だが、その画面を見た途端、彼女は慌てて通話ボタンを強く押した。

「はい、なのはです……ふえ！ 本当!？」

《ああ……正式に決まった。フェイトの身柄はこれから本局に移動、それから事情聴取と裁判が行われる。フェイトは多分……いや、ほぼ確実に無罪になるよ。大丈夫》

《クロノ君ってば、あれからずっと証拠集めしてくれたからねえ》

《エイミイ、そういう余計な事は言わなくていい》

「有り難う、クロノ君！」

そんなクロノとエイミイのやりとりを耳にし、微笑むなのは。

《聴取と裁判、その他諸々は結構時間が掛かるんだ。で、その前に》

「うん。うんうん！ すぐ行く！ うん！」

「どうしたの、なのは？」

先程のなのはの声に、驚き目を覚ましたユーノ。

嬉しそうにしているなのはに、ある程度は察してはいるが確認を取るようにユーノは

質問をする。

「フェイトちゃんが本局に移動になるんだって、暫くの間。で、その前に……少しだけど会えるんだって！」

「そうなんだ」

「私に逢いたいって言うてくれてるんだって！」

なのは声は喜びに溢れていた。

そんな彼女を見て、ユーノもまた同じように嬉しさを感じ、口元を弛め、微笑む。

海鳴臨海公園。

其処には5人の少年少女が居た。

カモメなどの海鳥の鳴き声が響き、青い空に吸い込まれて消えていく。聞こえてくるのは穏やかな波の音。

少しすると3つの、いや、4つの人影が近づいていく。なのは達だ。

雄介と志蓮もまた連絡を受けていたのだ。

「あんまり時間は無いんだが、暫く話すと良い。僕達は向こうに居るから」

そう言いながら、クロノは少し離れたベンチの方へと移動する。

転生者組である雄介、志蓮、ドゥーム、ゾイルもまた別の場所へと移動する。

お互いに見つめ、微笑み合う2人の少女。

「何だか一杯話したい事あったのに、変だね……フェイトちゃんの顔見たら忘れちゃった」

「私は……そうだね……私も上手く言葉に出来ない。……だけど嬉しかった」

「え？」

「真っ直ぐ向き合ってくれて……」

「うん……。友達になれたらなって思ったの」

フェイトの言葉に対し、満面の笑みで応えるのは。

最短で、真っ直ぐに、一直線に自身の思いをぶつけ、分かり合う。

理解しあう為に、友達になる為に。

「でも……今日はもうこれから出かけちゃうんだよね」

「これからの事なんだが……」

なのはフェイトの2人から、そしてクロノとユーノ、アルフの3人からも離れた場所
所で雄介を始めとした転生者組は集まり話をしていた。これからの事を。この後に起きるであろう大きな事件、闇の書に付いての事を。

「八神はやたと接触した場合どうするか……」

「そして、ヴォルケンリッターに協力するか……募集されない様にするには」

「原作通りに進んでいくどうか……」

考えても、考えても答えなど出てきはしない。

保身の為に、そして予想出来ない……知識にない出来事が起きる事への恐怖。

「結局、なるようにしかならないよな……」

「出かけちやうんだよね……」

「そうだね……。少し長い旅になる」

「また逢えるんだよね？」

友達になりたい。

そう願ひ、その思いを言葉にし伝えた相手。

その彼女が遠くに言行つて、それっきりになる。

会えなくなるかもしれない。

それはとつても寂しくあり、不安なのだ。

そんななのに対して、フェイトは大きくだが頷く。

「少し悲しいけど、やっと本当の自分を始められるから……。来て貰ったのは返事を
する為……」

そんなフェイトの顔は、少し紅くなっている様に感じられる。

「君が言ってくれた言葉、友達になりたいって」

「——うん！ うん！」

「私に出来るなら、私で良いならって……。だけど私、どうして良いのか分からない。だ
から教えて欲しいんだ……。どうしたら友達になれるのか」

「簡単だよ……。友達になるの、凄く簡単。名前を呼んで……。はじめはそれだけで良
いの」

不安になり、下を向いているフェイトになのはは微笑みながら優しく自分の考えを述
べる。

「君とか貴方とそういうのじゃなくて。ちゃんと相手の目を見てハッキリ相手の名前
を呼ぶの」

「……………」

「私、高町なのは…なのはだよ！」

「なの……は」

「うん！ そう！」

「なのは」

「うん！」

「なのは……君の手は温かいね……」

その言葉になのはは思わず涙を流してしまふ。

そんな彼女に対し、フェイトは自身の指でそのなのはの涙を拭う。

「少し分かつた事がある……友達が泣いていると、おんなじ様に自分も悲しいんだ」

「フェイトちゃん！」

泣きながらなのははフェイトに抱きつく。

慌てながらも優しく抱きとめるフェイトにもまた目尻に涙を溜めていた。

「有り難う、なのは……今は離れてしまふけどきつとまた逢える。そうしたら、また君の名前を呼んでも良い？」

「うん！ うん！」

「逢いたくなつたらきつと名前を呼ぶ……だから、なのはも私を呼んで。なのはに困つた事があつたら、今度はきつと私がなのはを助けるから」

そのフェイトの言葉になのはは我慢出来なくなつたのか大きく嗚咽する。

「あんた達のとこの娘はさ……なのははほんとに良い娘だね……フェイトがあんなに

笑ってるよ」

泣きながら抱き合っている2人の少女を見ながら、アルフはむせび泣く。

そんな彼女に対し、ユーノはフェレット状態の小さな手で、その涙で濡れた頬を優しく撫でる。

「時間だ。そろそろ……!?! なんだこいつらは……」

そんな2人の少女のところへと向かい、声を掛けるクロノ。

だが、そこに木々の間に出来た隙間、ベンチに存在している隙間。

周囲に存在している隙間という隙間から異形の存在が数えきれないほど現れる。

赤色の魚の様な頭部、そして、武者の様な姿をしている。

「封時結界!」

ユーノの結界魔法により、世界は分断され、この場に存在する魔導師組とその得体のしれない異形共だけになる。

そんな謎の軍団の中に一際目を引く存在が居た。

牛の様な頭をしていて、首から下は大男……鬼のような胴体。首にはヒトの頭蓋骨を複数繋げて作られたと思われるネックレスの様なものがぶら下げられている。赤黒い肌。手には身の丈の2倍ほどの大きさをした巨大な大剣が握られている。

「やっと暴れられるぜ……。『ナナシ連中』共……。好きなだけ暴れて良いぞ。俺も暴

れてやるからな、ハハハハハハ!!」

「此処は本当に静かだな……」

綺麗な空気に、水……心地よい風が吹き、鳥が元気良く飛び、川の中を元気良く魚が泳いでいる。

「ブロンさん、見てくださいい！」

慌てながら此方に向かい走ってくるシエン。

その手にはサツカーボール並みの大きさの水晶がある。

「これを見てください」

「——!?!」

その水晶には見知った顔が複数映しだされていた。

だけど、そこには何時もと違うモノが一緒に映しだされている。

赤黒い牛の様なモノとそして武者の様な姿をしたモノ。

特にその武者の様な姿をした異形の存在の数は非常に多い。

そいつらが七分に、陸地と海を合わせてやつと三分。

それほど沢山の異形共が溢れ出ていた。

「シエンさん……」

「行くんですね」

「——はい」

その三分しかない場所に皆が居る。

目にしてしまったからには放っておく訳にはいかないのだ。

人生の中で、ほんの少しとはいえ一緒に過ごしたのだ。

大事な友、仲間なのだ。

青臭いだとか偽善だとか言われようと構わない。

ただ、今の俺は駆けつけて助け出したい。

そんな思い出一杯だった。

「行つてらっしゃいです、ブロンさん」

「行つてきます」

友である皆の気を探り、そしてその場に瞬間移動する。

「気をつけてください……そして、忘れないでください。我々転生者には大きな責任

というモノがあると云う事を」

そんなシエン——界王神——の言葉に気付くこと無く。

「ハハハハハハハハ!!」

大剣を振り回しながら高笑いをする牛鬼。

振り回した際に、強い風が発生して立っている事すらも難しい。

「どうすれば……」

だがそこに、ドンドンと何かを叩く音が響き始める。

「太鼓の音?」

突如、複数の黒子が出現する。

そして、彼等の手には陣幕とのぼり旗が握られている。

「結界に、どうしてヒトが!」

太鼓の音が止んだと同時に、彼等黒子は姿を消した。

だが、そこになのは達には見覚えのある人物が立っていた。

「——!」

普段見覚えのある姿ではなく、大猿から戻ったあとの、別れた時の姿ではあるが。

「其処までだ、外道衆!」

彼の瞳は、強く目の前の鬼を睨んでいる。

そこから発せられる殺気は大気を揺るがし、周囲の存在は否が応でも金縛りの様に動

けなくなる。

「サムライザー」、ゴー・ゴー・サムライ！」

「ショーグンモード」

手にした赤い可変式の筆を動かし、空中で文字を描く。

それは初めて使用した時と同じで、火の文字。

文字は身体中を覆い、そして火の粉を撒き散らしながら消失する。

「——貴様は!？」

其処には、以前と同じ……いや、少しばかり違った見た目をしている。

赤い和服の様なスーツ。

だが、その胸部には甲という大きな漢字が装甲の様に。

腕部には新たに銀色の籠手、脚部にも銀色をした装甲。

肩には大きな盾の形をしたモノが。

そして何よりも目を引くのは頭部だ。

マスクの火の文字が金縁で、その上部にはさらに金色に輝く火の文字が。

それにより、火から炎に変化しているのだ。

バックルには顔の様なモノが付いている。

彼の等身が低い所為なのか、少しばかり不格好に見えてしまう。

10代後半になって変身をすれば、それなりには様になるだろう。

「何だ、それは？」

「聞こえなかったのか？ 將軍だよ」

その姿には敵も味方も唾然とする。

そして、それと同時に敵には畏怖を、味方には勇気を与えた。

「ブ、ブロン！」

「話は後だ……お前らならそいつらを倒せるだろ。俺は目の前の牛を倒す……参る！」

その言葉と同時に俺は駆け出す。

「ナナシ連中!!」

敵の方も動き出し、事態は混沌とした状況になる。

上空から放たれる魔法の光が、地上に居るナナシ達に命中し、爆発する。

空から降ってくる魔力弾は、まるで流星の様であり、死を運ぶ火山弾の様でもあった。だがそれは色とりどりの光を放っているので、眩しく、そして花火の様にも見える。

「志葉の力を持つお前は……貴様は一体何なんだ？」

「さてな……少なくとも俺は俺で、転生者でもある事だけは確かだ」

手にしたシンケンマル、そして牛を模した大筒である“モウギユウバズーカ”を持ち

モウギユウバズーカにインロウマルを装填したシンケンマルを装着する。

そして、そのインロウマルに最終奥義と書かれたディスクを装填する。

「スーパーモウギユウバズーカ……」

「ち、畜生……この俺が」

「——外道覆滅!!!」

トリガーを引き、牛のカタチをしたエネルギー弾を打ち出す。

それは見事に牛鬼へと命中し、爆散する。

「……………」

その四散した身体の破片が集合し、元の身体に戻る。

そしてその身体は先程の大きさとまるで比にならない程の大きさに——目測50m程度にまで巨大化する。

「ど、どうするんだい……この前は虚数空間に落ちていったから良かったものの」

そんな不安気なアルフの言葉に、俺はただ一言で応える。

「吹っ飛ばす！」

結界を崩壊させない程度に体内の気を開放していく。

掌に集中させたその気は一秒も刻まない間に大きくなっていく。

大きくなった気弾を、次第に小さくしていく。

皆が皆、目尻に涙を浮かべ、無事だった事に安心してきているのだ。

「心配かけてすまなかった」

「全くだ……。で、一体虚数空間からどうやって」

「その話は後だ……。まずはフェイト達を」

「ああ……」

クロノの疑問に、俺は後で答える事を約束し、フェイト達をアースラに転送させる事を勧める。

「フェイト、アルフ、ドウム……そろそろ」

「フェイトちゃん！」

フェイトに駆け寄るなのは。

彼女は、なのは自身の髪を結んでいた白色のリボンを解き、フェイトへと差し出す。

「思い出に出来るもの……。こんなおのしか無いんだけど……」

「じゃあ、私も……」

フェイトも同じように、髪を結ぶ黒いリボンを解き、なのはへと差し出す。

「有り難う、なのは……。きつとまた……」

「うん……。きつとまた……」

地面に出現した魔法陣が光り、フェイト達を…フェイトを、アルフを、ドゥームを、クロノを、ゾイルを包み込んでいく。

手を振るフェイトに対し、なのはを始め雄介も、志蓮も手を振り返す。

彼女達が、アースラへの転送を完了し、目の前から姿が消えるまで手を振り続けた。

空白期間

俺 管理局に入ります

「どうやって虚数空間から抜けだしたんだ？」

「どうやってと聞かれてもな……」

アースラにある執務室にて、俺とクロノ、そしてゾイルが集まり事情聴取が開始された。

質問をされている側はもちろん俺だ。

界王神界から、瞬間移動で皆の元へと、海鳴市へと帰還し、外道衆である牛鬼を倒した時に「あとで話す」と言葉にしたのだ。

その翌日である今日、約束通りに説明をしようと、クロノを気を探り、アースラに来たのだ。

だが、その界王神界という場所をどの様に説明をすれば良いのか分からない。

上手く言葉にすることが出来ないのだ。

「なんて言えば良いのかな…虚数空間の先には、実は別の空間が存在していた？ ……みないな」

「なぜ疑問形なんだ…?」

そんな俺の様子と言葉に、クロノは呆れながらも此方の目を見て、真剣に耳を傾けてくれている。

実際のところ、気が付けば界王神界に居たのだ。だから、どのように説明をすればいいのか自分でも理解出来ていない、仕様が存在していないのだ。

クロノ以上に、自分も説明をして貰いたい気持ちを抱いているつもりだ。

界王神界に居た時に、シエンに聞いておけば良かったと後悔はしても、あとの祭。

だが、今度行った時にでも聞いてみれば良いだろう。

「界王神界っていう場所なんだけど…世界全体を見守る界王神という存在が居る場所かな。その界王神であるシエンに助けられたんだ」

「そんな存在が居るなんて上が知れば、大混乱どころが大問題になるだろうな…で、その界王神界という場所に居た…と」

「もしかすると其処がアルハザードなのかもしれないな…」

そのゾイルの言葉に、頷きながら俺達はそれぞれの手元にあるコップを手に取り、コーヒーを口に含む。

程よい苦味が口の中に広がり、喉を通過していく。

アルハザード —— 失われた秘術が眠る伝説の土地

死者を蘇生させたり、時間を遡行したりする魔法などの失われた技術などが存在しているときされる隔絶された場所。

界王神界は、実際のところそんな場所ではないのだが、界王神という存在はレアスキル以上の特殊な力やアイテムを所持している。

前世の記憶を覗いてみれば、他人の潜在能力を限界まで引き出してみせたり、自身の生命を引き換えにして他者を生き返らせたりしていた筈だ。

その事から考えるに、あながち間違いでは無いのかもしれない。

「プレシア・テストアロツサの姿は見なかったか？」

「いや、影も形も…見当たらなかった」

眼を開き、周囲を見渡した際に視界に入ってきたのは一面の緑色。

そして、シエン以外のヒトは存在していなかったのだ。

もしかすると、未だなお、アリシアと共に虚数空間を彷徨っているのかもしれない。

其の事を考えると、ゾツとしたモノが背中を這いずりまわる様な気がした。

「そういうえば、フェイト達はもうどうしてるんだ？」

「護送室で大人しくしている。近い内にミッドチルダにも到着するからな…裁判も事情聴取も悪い方向には進まないだろうさ」

嫌な気持ちから逃げ出すように、話題を変えてみたが、そのゾイルの言葉に安心し、

ほつと胸を撫で下ろす。

懸念事項が1つ解消されたのだ。

「……その……俺の事なんだけどき……」

そう、1つ目は、だ。

まだ頭に引つ掛かっている事は、思い悩んでいる事はある。

時の庭園での出来事……俺の変化についてだ。

此処からが俺にとっては本題でもあり、正念場でもあるのだ。

今、クロノ達の目の前に居る俺の姿は普段の黒髪黒目ではなく、金髪であり、右目が翡翠、左目が紅玉のオッドアイなのだから。

下には、ゾイルにより斬られたであろう痕が残っている尻尾が存在している。

「モチカラを使った場面、外道衆を名乗る存在を倒した場面は記録されていない……金髪、虹彩異色症であるお前のその姿もだ。そう、そしてこの話はすべてオフレコだ。そうだな、クロノ執務官？」

「ああ。だが、君が大猿になった場面は記録されている……」

何かを聞いたそうにしてはいるが必死に堪えながら話すクロノのその言葉に対し、俺はただ「そうか」と返した。

予想は出来ていた、していたのだ。

だが、実際にその言葉を聞くと無性に不安に駆り立てられてしまう。

「——で、だ……これを誤魔化す事は出来そうにない」

「理解ってるよ……」

情報が漏れれば、上の方からいろいろと大きな圧力が掛けられ、出て来るだろう。

大猿への変化は魔法による変身だと説明をすれば良いのかもしれない。

だが、理性を失くし、暴走していたのだ。

味方であるクロノ達を攻撃した。その事実だけでも公務執行妨害などでしょうつ引く

事も可能だろう。

幸いにも、クロノにその気は無いみたいなのだが。

魔法とはまた違う力を所持し扱う存在、更にはその力をしっかりと、完全にコントロール出来ていない。

此れほどの巨大な力を持ち、暴れる危険性を持つ存在を野放しにしていられる程、時空管理局は優しく、間抜けな組織ではないだろう。

近い内に何かしらのアプローチが、あちら側から来る筈だ。

「だからこそ、だからこそだ……先に此方が動くべきだ。動くべきなんだ……。俺、管理局に入るよ」

「手続きは此方でしておく。動きがあり次第連絡するよ」

「ある程度良い方向になる様に努力する」

俺の考えを予想していたのか、2人は驚く事もなく、静かに、優しく応えてくれた。

テスタロツサ兄妹とアルフの抱える問題も存在しているのに、負担を更に増やすことが情けなく、申し訳なく思うが、それ以上に感謝の気持ちが強かった。

「ありがとう」

手元に置かれているコップを掴み、残りの少ないコーヒーを飲み干す。

それなりに時間は経過していた為か、冷めてしまっている。

「さてと、取り敢えず話したい事と話すべき事は解消したし…帰るよ」

逃げるように目を閉じ、海鳴市に存在している自分の気を探りだす。

その気を頼りに、自宅へと瞬間移動をした。

目の前から一瞬にして姿を消した事にクロノは驚くが、それも一瞬の事で、ゾイルと共に普段と同じ様に事務作業へと手を戻した。

「(最初の頃はゾイルの話を聞いて半信半疑でいたが、流石にここ迄くると信じる他ないか……)」

書類の整理をしながら、クロノは事件を、そしてゾイルと初めて会った時の事を思い

出す。

少し前の出来事の筈のだが、かなり時間が経過しているかのように感じられた。

伝説の三提督と共に功労者として管理局に貢献している彼だが、そんな事は管理局員の殆どは知らない。

彼自身がそんな事を気にしている風でもなく、自分が気になった事に対してのみ全力で活動しているのだ。

究極生命体である彼にとって、この世界の殆どはつまらないものであり、退屈しのぎなのだろうが。

そんな働きをしている彼だが、執務官というポストにおさまっている事はとても不思議に思える。

だが、彼のつく執務官というポジションは普通のものではなく、特務や特殊といったものが先についてまわる。

本来の執務官は事件捜査や各種の調査などを取り仕切る役職であり資格だ。

資格保有者は所属部隊における事件及びホーム案件の統括担当者になる事が出来る。

だが、彼には行動の自由を持っており、その権限は通常の部隊指揮官、場合によっては提督以上のモノで事件の捜査や調査の指揮、作戦の立案や実行などの権限を有しているのだ。

簡単に言えば、執務官とい名前の特種な階級だ。

母親であるリンディ提督が艦長を務めるアースラに配属された時、彼もまた此処に配属され、顔を合わせる事になった。

初めて会った時に、直ぐに「自分は転生者だ」と言った時には面食らったものだ。

「さて、今回の事件……名称はプレシア・テストロツサ事件か……それとも……」

本局に於いて、歴史上では遺失遺産の違法使用による次元災害未遂事件となるだろう。

母親であるプレシア・テストロツサの命令を受けて、フェイト・テストロツサはジュエルシードを探索していた。

兄であるドウム・テストロツサとフェイトの使い魔であるアルフは、そのフェイトを守る為に、手伝うために。

目的を知らされず、必要だと、探して持って来いと言われるがままに。

発掘者であるユーノ・スクライアと現地の魔導師である高町なのは、上条雄介、神威志蓮、保和歩栄の5人と数回の戦闘。

高町なのはの友人であるアリサ・バニングスの家で、怪我をしたアルフと話をする。

そして、フェイトはプレシアにより虐待を受けている事が発覚した。

なのはとフェイトによる2人だけの戦闘、そして外道衆を名乗る異形の存在アカマタ

との戦闘。

彼女達の闘いはなのはの勝利に終了したが、アカマタの方は取り逃がす。

アースラにフェイト達を連行すると、時の庭園の映像がモニターに映し出される。

そしてプレシアの目的が、実の娘であるアリシア・テスタロッサを生き返らせ、失くした時間を取り戻す事だと判明した。

その方法は、次元震と次元断層を起こして、虚数空間にあるとされるアルハザードに行き、其処で目的を果たす。

時の庭園に転移し、プレシアの暴走を止めようとするが再びアカマタが現れ、ブロンが大猿になり暴走。

ゾイルが尻尾を斬ることで事無きを得る。

フェイトがプレシアに自身の思いをぶつけるとプレシアもまたそれに応えようとするが、彼女とアリシアは虚数空間に落ちていく。

そして、再度アカマタとの戦闘が始まった。

その戦闘時に、プレシアの暴走はアカマタが促して、起こさせたものだと言明。

「動きが見えなかった…対応できなかった」

アカマタの動きは肉眼で捉えられないほどのスピードでサーチャーを通した映像でも影が映るだけだった。

ブロンが戻って来て、アカマタと戦闘。
虚数空間に落としたが、ブロンもまた共に落ちる。

時の庭園から脱出後搜索をしたが、見つかる訳もなく困難な状況に。
唯一、希望を抱けたのはゾイルの「気を感じる」という言葉だけ。

高町なのは達を現地である海鳴市に帰還させ、フェイト達の観察、事後処理とブロンの搜索を続行。

なのは達に別れの挨拶をする時に、別の外道衆が乱入。

そこに行方不明となっていたブロンが介入し、外道衆を撃退。

彼に事情聴取を開始……。

「(流石に転生者の事や界王神界について載せる訳にはいかないし……外道衆の事もどう説明すれば……)」

たった1人であろうともロストロギアに相当する、場合によってはそれ以上の力を発揮し、戦闘力を誇る存在。

その力が破壊に用いられた場合にどうなってしまうのか考えたくは無い。

状況によっては単独で管理局を壊滅させる事すらも可能だろう。

稀少技能として解釈することで社会に受け入れられるだろうが、その存在がなければ彼等は孤立するだろう。

もしそうなれば、彼等はどのような行動を取るか。

彼ら転生者は一体何を望み、何処へ向かうというのか。

望みを抱いていなくても、どのみち世界に大きな影響を与えるだろう。

「一体何なんだ…君達は…?」

「——到着つと…」

自身の分身が発する気を頼りに、自宅への瞬間移動を終え、深呼吸をする。

数日ではあるのだが、掃除をしていなかった為か少し埃っぽく感じられる。

それ程時間は経過していない筈なのだが、それでも何処か久し振りに感じ、懐かしさを与えてくる。

数日間しか開けていないに、それがとてつもなく長い間だと感じられるのだ。

「それにしても…自分がもう一人存在しているというだけでも違和感を感じるのに、自分の気を感じ取ることが出来るなんてな…奇妙なモノだ…上手く言葉に出来ない」

鏡の前に立ち、自身の姿を見直してみる。

ガラスである表面の部分には少なからず埃がかぶっており、気になったのでポケットに入れてあったハンカチを用いてその汚れを拭き取ってみる。

「うーん、やっぱり黒髪にしておいた方が良いだろうな…学校にも行くんだし…うるさく言われるのは勘弁だ」

突然の髪色の変化に、周りの生徒達は集まってワイワイと騒ぎ出すだろう。

なのはや雄介達、魔導師組は見た事があるのだからそれほどだろうが、アリサとすずかはだろうか。

彼女達は騒ぎはしないだろうが、驚くだろう。

質問をしてくるだろう。

あとあとバレて説明するのだから問題は無いのかもしれない。

だけど、管理局からの接触などの問題は存在しているのだ。

其の事を踏まえて考え行動しないといけない。

無闇にこの姿を晒すのは良くはないだろう。

鏡の前で、変身魔法を行使する。

金色だった髪、翡翠と紅玉の瞳は黒色へと変化。斬られた痕のある尻尾は綺麗サツパリ姿を消し、見えなくなっている。

そこに映っているのは普段学校に通い、遊んでいたブロンの姿だった。

「そーいや、デバイスが壊れたんだよな…高性能で、重力操作も出来た代物だったのに……」

大猿へと変化した時に、腕につけていたデバイスは、その身体の変化に追いつけず壊れたのだ。

いろいろな便利な機能が搭載されており、毎日の様に使用していたのだが、いざ無くなるもの寂しい気持ちを感じざるを得ない。

幸いと言って良いのは、その量子変換機能を使用してキャッシュカードなどの重要なものをデバイスの中に入れておかなかつた事だろう。

それら貴重品は大事に、別の場所に保管をしているのだ。

「ま、仕方ないよな……形あるものはいつかは壊れる……重力による負荷を与えての修行は出来なくなつたけど」

「1000009……10000010……10001000……10000001010
……」

地下室に存在している修行室で、久し振りに身体を動かしている。

汗を額から流しながら、腕を高速で屈伸させていく。いわゆる腕立て伏せというものだ。

とてつもない回数を行なっているので、普段ならばどれだけの回数をこなしたか分からなくなるほどだ。

だが、マルチタスクを使用しながらなので、その心配をする必要性も無く、ひたすらに、意識を修行に集中させ、励む事が出来るのだ。

数を数え間違えることも無く、体力の続く限り、筋肉が悲鳴をあげるまで続けられる。

「これで……終了……ぬわああああああああん疲れたもおおおおおおおお
おおおん……………」

大きく息を吐き、大の字を描くように床の上で横になる。

身体を動かした事により体温は上昇し、その所為か通常よりも床がヒンヤリと冷たく、気持ちよく感じられる。

「シャワーでもかかるとするかな……その前に、ポチツとな」

部屋を出て、すぐの所にあるボタンを軽く押す。

それにより、修行室内の温度は急上昇を始める。

空気が熱せられ、空間が揺らめいて見えるほどに、だ。

腕立て伏せをしていた場所には、流れて出来たであろう汗による水溜まりが出来ている。
る。

実に汚いものだ。

その液体は、急激に上昇した室温により蒸発していく。

そしてその後、端の方の壁に換気扇の様なものが出現する。

その大きさは大型トラック一台分の3倍ほどの大きさだ。

そして、そのファンがゆっくりと回転を始め、次第にその動きは速くなる。

室内の空気は流れ始め、中の空気と外の空気を入れ替えていく。

「ふう〜…生き返るわあ」

少し早いが出している扇風機から発生する緩やかな風に当たりながら、冷蔵庫の中で冷やしていた炭酸水をコップに注ぎ、それを飲み干す。

流れる風が、濡れた肌を優しく撫で上げ、それがとても心地良く感じられる。

「さてと…チエックするか」

パソコンの電源ボタンを押し、立ち上げる。

カタカタという音を鳴らしながら、真つ暗だったモニターは白色の光を放ちながら点灯し、OSなどのソフトウェアの名称が表示されていく。

インターネット接続が成されているかどうかを確認し、ブラウザを開き、起動させる。

「おっ！ 再生数がまた上がってるな。やったぜ」

今、俺が見ているのは動画共有サイトだ。

其処に、俺は前世の記憶の中に存在している曲やアニメなどを、スキルを使用し、コピーや模倣して、そのサイトに投稿しているのだ。

声真似をしたり、打ち込んでBGMを再現して流したり。

前世での世界には存在していたが、今世では見受けられなかったものを投稿している。

但し、自分の知っている中で、転生者が特典として貰って使っている能力などが出て来るものを除いた作品をだ。

記憶はモヤが掛かり臆気になってはいたのだが、新しく創り出したレアスキルの効果により、ハツキリと思いつく。それ以上に、完全にとまではいけないが、ほぼほぼそっくりに真似をする事が出来た。

曲に於いては楽譜も、書かれていない歌の部分も。

アニメの方はキャラクターデザインも、BGMなどの流すタイミング、声優さんの声や喋り方なども、だ。

そんな作品など俺が投稿するまで名前どころか存在すらしていなかった。

そして、投稿すると予想以上に広がっていったのだ。

「だからって…俺が作者扱いなんてな……」

この世界には、その作品の原作者や作曲者と同じ名前で性別の人は居るだろう。

だが、それだけなのだ。

実際にはその人、本人ではないのだから。

そして何よりも、自分の好きな作品が知られて広がっていく。

それはとても嬉しいことだ。嬉しい事なのだ。

だが、自分が一から生み出したモノではなく、その作品の恩恵を受けて、そこから出て来る甘い汁を吸っているだけなので、自分の作品の様に扱われ広がっていく事に對し、何処か後ろめたさも感じさせている。

「さて……入ってくる事は無いだろうけど、一応」

パソコンをある程度触り終え、満足したのでシャットダウンをする。

懐に入れておいたシヨドウフォンを取り出し、宙に「守」の文字を描く。

書き終えると同時に、そのも漢字は巨大化し、家を覆っていく。

そしてその文字は霞のように、幻のように消え去る。

「これで、外道衆は入ってこれないだろう……皆の家にもしておいた方が良さだろうな……いや、出来るのならば地球全体……そして、次元世界全体にも」

思い出したかの様に、モチカラによる結果を家に張り、一息を吐く。

それ程の力を所持している訳がないのに、そんな大きな事を考えてしまう。

だが、実際に友人の家には張っておいた方が良さのかもしれない。

時計を見ると、時間は17:00を指しており、お腹の方も空腹を主張するように大

きな音を鳴らし始める。

それを自覚すると、先程まで感じてはいなかったのに、強力な空腹感が襲い掛かって来た。

「明日からまた学校に戻るからな…腹が減っては戦は出来ぬ、だったかけ…：飯だ」
台所へと向かい、夕御飯の準備に取り掛かることにした。

「ご馳走様でした、そしてお粗末様でした…片付けをし…：!?!」

食事を終え、自身に挨拶をする。

食後の皿洗いに入ろうかと考えると同時に、大きな気が出現した事に気が付く。

その気の質は、何処か歪であり、生きている者が発するモノでは無い事が気を感じる
ことが出来る者には理解出来る。

「この気の質は…：外道衆か…：場所は何処だ？ 反対側…」

その気が発せられている場所は、南半球に存在するとある国からだ。

そこから気を感じ取れる。

外道衆は三途の川から隙間を通して、この世界に来るのだ。

その先がどの国であろうと、どのような場所であろうとも関係はない。

水切れを起こさない限り、そして三途の川の水を溢れさせる為に人々のマイナス要素の強い気持ちを煽り、増長させて集めているのだから。

前世で観ていた特撮の物語で、日本だけが、アメリカだけが舞台だったのがとても不思議に思える。

「考えていても仕方が無いか…さて、と」

家の鍵などを閉めて、戸締まりをする。

そして、四身の拳による分身を自宅待機させ、その気を探り、瞬間移動を使用した。

「少し、肌寒いかな…」

日本では5月末で、春とも夏とも言い難い時期に差し掛かる。

そして、此処は南半球に位置した場所だ。日本とは季節が正反対。

気候もまた逆なのだ。

「あ、いたいた。一筆奏上…はしなくても良いかな」

手にしたシヨドウフォンで「刀」の文字を描き、シンケンマルを召喚、そして懐の中に入れる。

目の前に存在しているのは猿の様な妖怪だ。

大きさは電話ボックスの3倍ほどだろうか…とてつもなく大きい。

人々はその姿を見て逃げ惑うが、妖怪の方はその様を見て大笑いをする。その際に、唇は自身の目を覆う程に大きく捲れ上がる。

その笑い声は凄まじく、周囲に存在しているトラックなどの自動車をも吹き飛ばすほどの衝撃波を起こしている。

現地のヒトはその爆風に煽られて、為す術無く吹き飛ばされていく。

「五月蠅い声だ……それに、風が強いな……皆吹き飛ばされてる」

近くに居るナナシ連中ですら立っている事が出来ずに吹き飛ばされていく始末だ。その声は、ビル街を突き抜け、窓ガラスを振動で破壊していく。

「よう」

「ん？ ハハハハハッ、人間だ！ 俺に声を掛けてきやがったｗｗｗｗｗｗ」

耳の鼓膜が破れる程の大きな声に、身体を吹き飛ばそうとする程の風。

そして、喋った際に無数の唾がマシンガンの弾の様に飛んでくる。

「(汚え……) ……悪いけど早々に退場してもらおう」

「え？」

シンケンマルに気を纏わせ、上から下へと向かい袈裟斬りをする。

腕や脚を、身体全体を鮮やかな動きでサイコロ状に斬り刻んでいく。

斬られている側である妖怪はその一秒にも満たない時間で自分にされている事を、何

その光は、暖かく周囲を照らしては居るが、生命を奪い、消滅させる事の出来るものだ。

「ん？」

その小さな明かりに気が付いたのか、下の方を向く猿の妖怪。

だがその動きは酷く遅く、ゆっくりだ。

「止めろ！ その攻撃は！」

その俺のする行動に気が付いたのか、そのエネルギー弾の威力を悟ったのか先ほどまでとは打って変わって焦り出す。

その際に、身体を大きく動かし、小規模ながら地震が発生する。

「スローイングプラスターツ……」

ボウリングの球を放り投げる様にその気弾を放つ。

左手に凝縮されたエネルギーの弾がその巨体へと一瞬で迫る。

その弾が当たった瞬間、それは大きく膨張し、周囲を緑色に照らしていく。

後ろに振り返ると同時に、その巨体は消え去り、大きな爆発を起こした。

「此れにて、一件落着」

結界を解除し、急いで自宅へと瞬間移動する。

「便利何だけどな…今度、シエンに瞬間移動のやり方を教えて貰おうかな」
大きな欠伸をしながら、再び風呂場に向かい、湯船にお湯を入れていく。
水温が高いからか、既に蒸気が立ち、空間内を曇らせていく。
「片付けをしないとな…」

翌朝のテレビ、そして新聞にはデカデカと外道衆の事、そして俺の事が見出しに記載され、放送されていた。

見出しはこうだ

———
幻覚か!?

猿と少年サムライの戯れ

界王界で大試合　あの世一武道会に参加だ

ワーワーといった大きな歓声が闘技場の中を響き渡り、反響している。

周りを見渡してみると、其処は円形に座席が設置されており、その座席には沢山のヒトが座っている。

その中にはヒト型ではあるが、おおよそヒトでは無い者も存在している。

そして、別の場所にはより綺麗に装飾された椅子に座っている人物が1人。

「どうしてこうなった……」

初めて会った時はシェンの持つ気を感じする事が出来なかったが、少しの間ではあるが時間を共にしているとその彼の気がどのようなモノか理解することが出来た。

クリアなのだ。限りなく静かで質の良い、透明であるが為に、気が付きにくいだけなのだ。

それにその事に気が付くと、彼の持つ気を感じ取る事が出来た。

そして界王神の使う瞬間移動が便利なので、それを教えて貰おうと気を頼りに移動したが、其処でこの様な誘いを受ける。

「あの世に行ってみませんか？」というシエンの言葉に、俺は迷うこと無く頷いた。前々から気にはなっていたのだ。

この世界に存在するあの世というのはどのような場所なのか、閻魔様や“界王達”はどのような人物なのか。

その事から俺は、そんなシエンの言葉に快諾したのだ。

「此処がああの世です」

目を閉じ、開く。

その一瞬の間に俺達2人は覚えのない場所へと移動していた。

中華風、和風に装飾された空間に立っているのだ。

目の前には死者の魂だろうか——列をつくり並んでいる。

その近くにはスーツを着込んだ鬼が「列を乱さないように」などと拡声器を手にし、大きな声で呼びかけている。

「すごい近代的だ……」

「こつちです」

驚く俺を置き去りにして、シエンは先へと進んでしまう。

ゲートの様な場所へと行くと、其処にもまた別の鬼が居る。

「!?!」

横を見てみると、其処には壁かと思ひ込んでしまふ程の巨大な机に、そして大きな椅子に座り、書類に判子を押しているヒトが居た。

「お久しぶりですね、”閻魔大王”」

「——！これは、界王神様。どうしてこの様な場所に……?」

手を動かしながら作業を続け、そして口を開き、シエンに対し質問を投げかける閻魔大王。

ふと机の方を見てみると、其処にはモニターが設置されており、生きていた頃のだろうか——映像が流されている。

それを見た魂は、その無い身体を大きく震わせ、まるで悔やみ、泣いているかのようだ。

「いえ、ここに居るブロンには是非大会に参加して貰おうと思ひまして」

「成る程……」

「では、此れにて……行きますよ、ブロン」

そのシエンの応えに頷きながらも、閻魔大王は作業を続け、魂を処罰し、“天国”か“地獄”に逝くようにと指示を出していく。

天国逝きだと示された魂は「わーい」と喜びながらゲートへと向かい、地獄逝きだと

示された魂は文句を言うが強面の鬼により連行されていく。

「待ってくれよ」

そんな様子を片目に見ながら、シエンの後を追う様にゲートを潜る。

其の先には、飛行機が2台ある。

1台は、大きくジェット旅客機の様にしつかりとした感じをしている。

だが、もう1台の方は少しばかり小さく、比べてみると見窄らしく感じてしまう。

「こつちですよ」

そう言いながら、シエンは小さい方の飛行機へと乗り込む。

慌てて、追いかけるようにその飛行機に乗り込んだ。

「見て下さい、あれが天国です」

その指の先には大きな星が存在しており、それを見下ろしてみる。

ピンク色の雲が広がり、下には草木などの植物なのか緑色が広がっている。

「あの世と言っても、閻魔王の居る“閻魔界”、天国、地獄……そして、“転生の間”が存在しています。大きな球状の空間で構成されていて上半分が天国を含めた界王界、地上に閻魔界。中というか底の方が地獄です。太陽もあるんですよ」

乗っている飛行機は古い物なのか、ガタガタと大きく機体を揺らしている。

シエンの声もまた、その機体の揺れと共に震えている。

「そろそろ着きますよ」

その一声を聞き、窓の外を覗いてみると、目の前には発着場が広がっている。暫らくするとドアが開き、降りることが出来る様になる。

「こつちですよ」

シエンの後ろを付いて行くと、其処には大きな武闘会場が広がっていた。

真ん中に存在している舞台では既に大会は開始されているのか、2人のヒトがお互いを殴り、蹴り、攻撃と防御の応酬を繰り返している。

周囲からは大きな歓声が響き、熱狂が伝わって来る。

「か、界王神様!? 何故この様な場所に?」

此方に気が付いたのか、黒を基調とした服を着ている4人の集団が此方に近づいてくる。

「(界王……なのか……?)」

彼等の服の真ん中には界王という文字がデカデカと書かれており、頭の方には触覚の様なものが付いている。

「彼にも参加して貰おうと思っていたのですが、既に始まっていたみたいですね」

目の前で繰り広げられている組手を目にしながら、残念そうにしながら言葉にするシエン。

そんな彼を見て、大きな椅子に座っていた老人が指で鼻をほじりながら近付いて来た。

「SEED枠で出たら？」

「大界王様！」

目の前に居る老人は、彼等のトップである大界王なのだろう。

見た目としては4人の界王よりも年上の様に見える。

そして、その着用している服の真ん中には大界という文字が主張している。

だが、その登場の仕方が原因なのか、とても彼達の上司だとは信じる事が出来ない。

「それではお願いします」

そのシエンの言葉により、俺自身の意思は関係なくあの世一武道会に参加する事になった。

《お待たせ致しました！ 今回の“あの世一武道会”で優勝したヤーゴ選手にはSEED枠の保和歩栄選手と闘ってもらいます!!》

司会進行役によるアナウンスが会場に響き、観客の声援がより一層大きくなる。

「ブロンさん！ あの世一武道会のルールは御存知ですよね？」

「一応……」

舞台から落ちた場合、降参した場合、泣いてしまった場合に勝敗が決定される。

目潰しや、急所攻撃は反則として禁止されている。

基本的には舞台限定でのものなので、会場にある天井に足が着いても失格となる。

そして、優勝者には大界王から個人指導を受ける権利が与えられる。

「だったかな……」

「はい、その通りです」

記憶の中に存在するアニメやゲームの知識を参考に確認をすると、肯定だという返事が返ってくる。

「界王神様に敬語を使わないなんて、なんて奴だ……」

「界王神様お墨付きの子だから、強いんでしょうね」

「だけど、子供だぞ」

などと言った言葉が横の方から聞こえてくる。

それはそうだろう。いくら上司が推薦してきたとはいえ、年端もいかぬ少年がこの大会に参加して優勝するなんて思いもしない。

大会参加者は全員、英雄とまで言われる存在で、この大会の為に一生懸命に修行しているのだから。

だが、そんな界王達を余所に、シエンは自分が闘うわけではないのに、自分の事に自信満々といった様子を見せている。

《それでは両名とも舞台の上へ上がって下さい！》

アナウンスの指示に従い、舞台の上へと登る。

舞台の上立つと、観客の沢山の驚いた顔が目に入ってきた。

目の前に立っている選手も同じだ。

「子供だからといって手加減はしないぞ」

目の前の相手はヒト型の様な見た目をしている。

だが、カタチがそうであるというだけで肌は濃い緑色で無数の細かいイボに覆われている。

頭は尖っており、腕や足などが太くがっしりとしている。

そして何よりも、死者であるという証が、輪っかが頭の上で浮かんでいるのだ。

「どうしてこうなった……」

目の前の彼を見て、周囲の観客と界王達、シエンを見て、そう小さな声で愚痴る事しか出来なかった。

《それでは、試合を開始して下さい!》

試合開始のアナウンスと同時にゴングが会場に鳴り響く。

その瞬間、目の前のヤーゴの姿が消え、気が付くと拳が迫ってきていた。

「——っ!?!」

その拳は見事に鳩尾に当たり、その小さな身体を貫通する。

その様子を見て、周囲の観客は何が起きたのか理解出来ずに首を傾げている。

「危ない……残像拳を使つてなかったら吹っ飛ばされていた……」

「……成る程。高速で動いて、元の場所には残像が残っていた……。そして、それを俺が貫いた訳か……。痛い目を見ないで済む様にと思つてやつてやつたんだがな……」

「余計な御世話ですよ……」

先程までの試合とは打つて変わり、目に追えない戦闘が始まった事により観客の殆どは、司会進行役のヒトまでもがリアクションに困っている。

だが、そんな中でも、シエンは此方を静かに見つめていた。

「(盛り上げろつていうのか……)。仕方ない……おじさん」

「何だ?」

「続き……やろうか……」

お互いにしか聞こえないほどの小さな声で、目の前に居る相手に戦闘続行だという自身の意思を伝える。

そんな俺を見て、ヤーゴの方もまた、ニヤリと口元を歪め、構えを取る。

「来い！ 小僧っ！」

高速で移動し、背後を取ったかと思うと取られており、取り返す。

そんなやり取りを何度も何度も繰り返していく。

外から見ると、突然消えて、突然相手の後ろに現れての繰り返しで何が何か理解できないだろう。

拳と拳が、脚と脚がぶつかり合い、大きな衝撃波が発生する。

その際に、空気が振動し、衝撃波だけではなく、ぶつかった音までもが歓声を打ち消すほどの大ききで会場全体に鳴り響く。

「真・四身の拳……」

気进行操作し、自身の分身を4体創り出す。

修行の時に重宝するが、こういった闘いの場面でもまた——こういう時こそだろうか、真価を発揮する筈だ。

それを見た観客は勿論だが、界王達もまた驚きに目を見開いている。

「行くよ」

それぞれに、舞台の端に立たせ、俺も移動する。

そして、一気に中央に居る彼目掛けエネルギー弾を飛ばした。

そんな攻撃をもともせず、ヤーゴは少し気合を込めた大声で、その気弾を打ち消した。

「これで終わりか？」

「まだだよ……」

外道衆との戦いの時は、ただひたすらに目の前の敵を倒す事しか考えていなかった。

流されながらも、皆を守らないといけないと思い、必死になりながら。

だが、この大会は——この闘いは自身の持てる力を最大限に発揮しながら、何処までいけるか試す事が出来る。

強い相手と闘い、自身も強くなっていく事が出来る。

「最高だぜ……」

前世では体を動かす事自体がしんどくて、面倒臭くて、億劫な事だった。

今世で健康な肉体を手に入れたからか、サイヤ人の血の影響なのか、楽しさすら感じている。

「前世とは真逆だな……本当に最高だぜ」

「前世……？」

「何でも無い……気にするな」

此方の言葉が聞こえていたのか、聞き返してくるが一蹴する。

今は目の前の相手に、この試合に集中して欲しい。

「こっからが本番だ……。はあああああああああああ」

真・四身の拳の解除をすると同時に体内の気を循環させ、身体中に行き渡らせる。

そして、その隅々まで行き渡った気を増幅させ爆発させる。

その気の開放により、砂利などの小さな粒や瓦礫が、その場が無重力であるかの様に宙に浮かび上がる。

気の爆発により、身体を中心に暴風が発生する。

舞台の外ではあるが、近くに居た進行役、そして界王達を壁際まで吹き飛ばす。

「やるねえ、あの子」

「でしよう……彼は近い内に1つの世界を救う筈です」

「それは、レアスキルである予知能力によるモノ？」

「其のようなモノです……」

そんな界王達とは正反対に、暴風に身体を煽られながらもしつかりと立ちながら、平静な様子で話をしている大界王とシエン。

観客の方にもその風の影響は出ていて、透明のドームの様なモノがガタガタと大きく

震え、今にも外れそうな勢いだ。

「姿が、変わった……？」

髪は黒色から金色へと変化し逆立ち、瞳もまた黒色から緑色の碧眼へと。眉もまた金色に変色する。

「ふう……」。第2ラウンド開始だ」

「第2ラウンド、か……。ならば、此方も」

そう言いながら、ヤーゴもまた体に力を入れる。

腕と脚の筋肉が膨れ上がり、血管が浮き出してくる。

「気が増えた……」

少しずつ、少しずつその身体が、筋肉が収縮していく。

そして、身体の表面が——肌の色が緑色から黄色へと変色していく。

「おまたせ……此方も準備は完了です。さて再開しましょうか」

「まさか……あんたも変身できるなんてな」

身長は変身前と比べ数段も、1回りも2回りも小さくスリムな感じに変化した。

体色は濃い緑から鮮やかな黄色へと変色。

そして、尖っていた頭部が裂開している。

「行くぜ」

舞台を強く蹴り、そのままの勢いを保ちながらヤーゴの顎を下から上へと蹴り上げる。

そのまま、身体を回転させ目の前にある胴を強く蹴る。

体勢を整え、右拳と左拳を連続で叩き込んでいく。

「——フツ」

だが、そんな攻撃も無意味だと言わんばかりに余裕綽々の態度を取るヤーゴ。

彼は腕を組みながら此方に向かい、口を開く。

「両手は使わないでおきましょう……」

「随分と余裕だな……アニメで見たキャラクターそっくりだ……気に食わない」

その口振りに、態度に対して随分と腹が立ってしまふ。

超サイヤ人状態ではサイヤ人としての好戦的で冷徹な性格がより強く表に出て来る。

だが、この状態で長く居続ける事でそれを、興奮状態を克服し抑える事が出来る。

「(小学校に入る前にやつといて正解だったぜ……今頃プツンと逆上して、良いように遊ばれていただろうな……)」

その場の空気を吸い、強く吐く。

深呼吸をして頭の中を一瞬だけクリアに真っ白にする。

「よしー」

両手で自身の顔を叩き、気合を込めなおす。

目の前の相手をどのようにして倒すか、驚かすかを考える。

だが、そんな時間を与えられる筈もなく、ヤーゴは此方の懐に潜り込んでくる。

「スピードが遅い、まる見えですよ……どうしました？ 私はまだマックスパワーの半

分どころか3分の1すら出していませんよ」

避けながら攻撃をしていこうとするが、それ以上に彼の動きは速く、次々と当てられてしまう。

息を吐く暇も無く、与えられる攻撃により舞台の端へと、ギリギリの場所へと追い詰められてしまう。

「それでは、御退場願いますようか……」

その言葉と共に、強い衝撃が身体を疾走り抜ける。

蹴られたのだ、強い力で身体を。

「——ガハッ」

口から血が出そうになる。意識が飛びそうな程の強烈な威力だ。

だが、壁に飛ばされる事も、地面に身体を落とす事も無くなんとか体勢を整える。

「はあ……はあ……はあはあ……」（そもそもこれはあの世一武道会だろ……此奴等は死

んでいる身で、俺はまだ生きているんだ……この闘いで死んでしまうなんてとんでもねえぜ」

舞空術で宙に浮かびながら、少し距離を取り、舞台へと着地をする。

ヤーゴの方は此方を静かに見ているだけで、余裕だという様子を此方に見せてくる。彼の口元は少し吊り上がり、此方を見下しているかの様な錯覚を感じさせる。

「まいった……まいったな……」

「何だ……？ 降参か？」

「違う違う……そうじゃない……お前が強いから」

ワクワクしてきたのだ。

心が、心臓が歓喜により大きく脈打ち震えている。

強者との闘いが此れほど楽しいモノだったとは。

生死を分けたモノではなく、純粹な力比べが出来る事が嬉しいのだ。

前世では何をしても中途半端で、腕相撲ですらも簡単に負けてしまう程の非力な人間だった。

「(そんな俺が……与えられたモノとはいえ)……思う様に身体を動かし、自身が生きている事を再認識出来るまでの闘いが出来るなんて……」

そのセリフにヤーゴは眉をぴくりと動かした。

だが、それだけで、再び此方を見て静かに口を開く。

「そろそろ終わりにしましょう……無駄に長く続けているのも」

「ああ……倒れるのはあんただけだな」

強くヤーゴを睨み、拳を握り締める。

目を閉じ、地球に居るなのは達を、ミッドチルダに向かっているであろうフェイト達を頭の中に浮かべる。

彼女達にも、彼等にも界王神界や天国など——いろいろなモノがある事を教えてあげたい。

知って欲しい。

目を閉じていたのはほんの一瞬だっただろうが、思い描いていた時間は長く感じられた。

「……超界王拳」

全身に纏っていた超サイヤ人特有の黄金に輝くオーラが赤色へと変化する。

「——グッ……」

強烈な負担が身体に襲い掛かって来るが、それを堪え、目の前に立っているヤーゴを見つめる。

今は、何よりもこの闘いに勝つことを、全力全開で挑んでいきたいと思っている。

そう思っているのだ。

「——全力……全、開……」

自身の中に存在する気を引き出していく。

通常時に出せる分、そして界王拳での無理矢理に引き出す分だ。

リンカーコアから魔力もまた引き出し増幅させていく。

「(なのはにだって出来たんだ……俺にだって)。うわあああああああああああああ」

思い出すのは、なのはとフェイトが海上で、1対1で闘った時。

なのはは、魔力は勿論だが、教えたばかりの気のパワーを完璧どころか魔力と同時に扱った。

「すごい気だ……魔力も混ぜてる……」

両手に集めた気の大きさと量は余りにも膨大な所為か先程以上の風を、爆風を引き起こしている。

司会進行役と界王は側にあるものに必死にしがみつくと事で飛ばされないようにし、観客席に存在するドーム状のバリアに亀裂が入り始める。

大界王とシェンの2人は風に飛ばされないように踏ん張りながら、試合の結果を見届けようと目を凝らしながら舞台の上を見ている。

「——ファイナルウウ……ギガンティックウウ……かめはめ波あああああああああ

あああああつつ!!!!!!
「」

両手の掌に存在する気を集中させ、一つの気弾にし、ヤーゴへと向けて光線状で一直線に放たれる。

そのエネルギーがヤーゴの身体にぶつかると同時に、光線状から巨大な球体のエネルギーの塊へと変貌する。

「ググツ……」

その気弾をヤーゴは両手で抑え、耐えてはいるが、その間にも球体はドンドンと大きくなっていき、彼は舞台端へと追い込まれてしまう。

「こらー！ ヤーゴー！ 負けるんじゃないよ！ お前は東の銀河が最強だって示さないといけないんだからあ!!」

横から、この状況を是としない“東の界王”が大きな声で口を挟んでくる。

だが、ヤーゴ自身にはそんな余裕が存在していないのか、返事をする事も出来ず、額には大きな汗が流れている。

「——ダメ押しだあああああ!!!!」

自身の中に存在している気を限界ギリギリまで引き出して、放出する。

それは、ヤーゴを押しているエネルギーと一つになり、より巨大に、より強力になり彼を押し込んでいく。

「うおおおおおおお!!!」

お互いの気合と声、エネルギーがぶつかり合い、大きな衝撃波と地震を発生させる。大気が、大地が震え、周辺のもののは倒れ、まともに立つことすらも出来なくなる程だ。

「はあ……はあ……はあはあ……」

「はあはあ……はあ……はあ……」

煙が巻き上がり、それが晴れると同時に俺達2人は力を使い果たしたのかドサツと倒れる。

俺は舞台上で、そしてヤーゴは舞台外で。

《しょ、勝者……保和歩栄選手!!》

一瞬、静寂が訪れるもそれも文字通りに一時的なもので一気に大きな歓声が会場内にドツと響き渡る。

その大きな声援は、先程の爆発よりも、より強く会場を震わせた。

「お疲れ様……ま、どっちも頑張ったんじゃないかな」

先程まで観戦していた大界王が此方に向かいながら声を掛けてくる。

ヤーゴの方は気を失っているのか動く気配はなく、担架に乗せられ運ばれていった。だが、此方にも応えるほどの気力は無く、顔を声のする方に向ける事しか出来ない。

「ま、君はまだ生きてるし……死んでから修行の手解きを、つてね……」

そんな大界王の声を聞きながら、大きな歓声を耳にしながら、俺は意識を手放した。

「クオクオア……?」

目を覚ますと其処は見慣れた天井が存在していた。

横を見てみると愛用しているPCや録音などに使用するマイクなどの多数の機材が置かれている。

間違いなく自室なのだろう。

倒れている身体を起こし、ベッドから身を乗り出す。

そして、机の方をふと目にしてみると、そこには1枚の紙が置かれていた。

その紙には少なからず文字が記載されている。

——お疲れ様でした。また来るのを楽しみにして待っています。冷蔵庫の中のプリン美味しかったです……。

書かれたものを読んでいると、何故かフツフツとした怒りが込み上がり、沸き上がってくる。

その抑えられない衝動に駆られ、手にしていた手紙をクシャクシャに握り締めてしまっていた。

「冷蔵庫のプリンン!? あの世界一オ、在り来りだけどよお、楽しみに取っておいたのに……」

文章の最後の方にはこうも書かれていた。

追伸 瞬間移動については、また今度教えます

だが、プリンの中で頭が一杯になり、そんな事には気が付かず、ムシヤクシヤとした気持ちを一時間ほど抱えて過ごした。

王の財宝　ヘゲート・オブ・バビロンへの秘密　その先には 神の宮殿

サンサンと輝く太陽の下で、30人ほどの人数がそれぞれ15人ずつの2グループへと別れ、お互いを睨み合っている。

その中でボールを持った生徒が1人。

開始のホイッスルの音がグラウンドに鳴り渡る。

そう、この時間は体育の授業なのだ。

そして今から始まるのはドッジボール。

ルールは実に簡単だ。

長方形のコートを二分し、それぞれのチームの陣地とする。原則的に自分の陣地から足を踏み出して外に出たりするのは禁止だ。

自分の陣地は内野と言い、相手のコート周囲である外野と言う場所に数人のヒトを配置する。

ボールを持っているヒトが敵陣の中に居るヒトへと向けて投げ、それを当てる。

陣地内では、相手の投げたボールに当たらないように逃げる。もしくは受け止めるか

をするのだ。そしてそれに失敗してしまった場合にはアウトと判定され、場外である外野へと出る。そうしなければ駄目なのだ。

ボールを受け止めたり、拾うと、その時点で攻守は入れ変わる。逆転するのだ。

相手の陣地にヒトが居なくなったら勝ち。内野にヒトが居なくなれば負けだ。

基本的にはこのようなものだ。

他にもいろいろとルールは存在しているが、大きなルールで全国的に共通しているであろうモノはこれぐらいであろう。

「……………」

「……………」

睨み合う生徒達にはお互いがお互いを警戒しあっているからか一種の緊張感の様なモノが発せられ、蔓延している。

此方のチームには志蓮、なのはが居る。

志蓮は転生者であり、顔も良いが、運動能力も高く戦力になるだろう。

だが、問題は高町なのはの方に存在している。

彼女は基本的には運動音痴なのだ。

魔法を使用した戦闘時には問題なく動き回ることが出来るのだが、普段の生活ではドジな一面を頻繁に見せてくる。

何も無い場所で転ぶほどのモノではないのだが、彼女の動きは基本的に鈍いものだ。まあ、Striker Sの時代である数年後には改善されているだろうが。

その事から彼女には戦力的に期待はしない方がいいであろう。そして、敵陣に居る存在が厄介なのだ。

アリサ・バニングス。

彼女は言わずもがな活動的な娘だ。そして平均的な小学生よりは強い腕力を、身体能力を持っている。

少女とは小さな女性である。

そうであるのだから、腕力だとかどうかいうのは失礼なのだろうが、この際には仕方のない事だ。

上条雄介。

彼は転生者の1人である。

特典には滅竜魔法を望んでおり、それを使うだけの肉体も所持している。

竜に匹敵するほどの強靱な筋力。その力から放たれる球は、全力であるのならば殺人級であろう。

実に厄介な相手なのだ。

そして何よりも警戒すべきなのは、月村すずか。

彼女は転生者ではない。ないのだ。

だが、そのような存在に匹敵するかと思えるような力を所持している。

大人しく、優しそうな見た目をしているが、見た目に騙されては痛い目を見ってしまうだろう。

ドッジボールになると毎回、アリサと一緒に最後の最後まで残っている。

敵のチームには相手にしたくない存在が3人も居るのだ。

同時に相手取るにはかなり多くの不安要素が存在している。

「いくわよ」

ボールを所持しているのはアリサだ。

彼女が投げたボールは此方の内野にいる1人の男子生徒の腕にヒットし、外野へと送り出す。

そして、そのボールは見事にバウンドをして彼女のいる敵陣地へと戻ってしまった。

「バ、バカな……」

目で追える程度のスピードではあるが、見えているだけなのだ。

実際に反応し、避ける事が出来るかどうかは別なのだから。

「まずは1人……」

彼女の瞳は、まさに飢えた猛獣のそれだ。

この状況では、その言葉がしつくりと当てはまるかもしれない。そして、彼女の視界に、彼女の瞳に親友であるなのはが映しだされる。

彼女の瞳が、キツく細くなる。獲物に狙いを定めた瞳だ。捕食者の瞳だ。狩る側の存在がする瞳をしている。

「なのは……親友だからって容赦はしないわよ」

「ア、アリサちゃん……」

その瞳を目にしたなのはは動けないでいる。

まるで蛇に睨まれた蛙の様だ。

ガタガタと震え、避ける暇も存在せず、なのはは棒立ちのまままでアリサの投げるボールに当たり外野に移動する事に。

「なのはがやられたか……」

なのはが当たったボールは、上空へと高く舞い上がり、そして此方の陣地内へと落ちる。

そのボールを拾い、俺は雄介を標的として決定した。

厄介な存在を消していくのは戦いの上では定石なのだから。

「雄介……俺達、友達だよな？」

「——？ ああ、いきなりどうした、ブロン……？」

その言葉と共に、アンダースローで投げられるボール。

その飛行する球体は見事に雄介の脚に当たり、彼は敵側の外野へと、要するに俺達の背後に移動する。

考えてみれば、後ろに移動するのだ。

振り返る時には隙が出来てしまう。

そこに浸け込まれて、ボールを当てられてしまう可能性が大きくなる。

「（選択を失敗したか……？）」

「雄介君……」

雄介をアウトに追いやったボールはその陣地の中で止まり、再びアリサが手にして投げてくる。

2度も言うが、目で追う事は簡単に来るのだ。

だが、避ける事が出来るかは別だ。

次々と当てられて、外野へと送り出されていく仲間達。

全面からの2人の少女の投げるボールと背後からの雄介の投げるボールに警戒しながら、回避を続けていく。

当たらないようにするだけならば、それほど問題は存在しない。

避けるだけならば大丈夫なのだ。

だが、気が付けば残されたのは最初に外野に居たので戻って来た志蓮と最初から陣地内に居る俺の2人だけになってしまった。

目の前の、敵陣にはアリサとすずかが居る。

他の生徒はもう居ない。

彼女達もまた、俺と同じく居続けているのだ。

ボールに当たる事無く、避けたり、掴んだりしながら。

状況は五分五分なかもしれない。

「外さない！」

アリサの投げるボールが真っ直ぐに俺の方へと向かってくる。

小学生にしては速い球だ。

「——な、なにを!？」

「側に居たお前が悪い……」

俺は思わず、横に居た志蓮の腕を引っ張り、盾の様に扱ってしまう。

所謂ガードベントというやつだろうか。

「——グフえ……!？」

そのボールは見事に志蓮の御腹に刺さり、彼は一風変わった叫び声を上げ、志半ばで倒れてしまう。

見事な投球だった。

志蓮の御腹の上で数回ほどの回転を続けるボール。

摩擦による熱と煙が発生し、体操服には大きな穴が空いている。

「すまない、志蓮……お前の犠牲は無駄にはしない。良い奴だったよ……」

彼は自身の腹を抑えながら、外野へと移動する。

転生者である彼にとつても痛そうだ。

どれほどの威力なのだろうか。

残されたのは俺一人だ。

そして誰も居なくなつた。

たつた一人の最終決戦だ。

「ブロン……あんたもそろそろ退場してもらおうわ。それでジ・エンドよ」

「まだだ、まだ終わらんよー！」

落ちているボールを掴み、それをアリサへと大きく振りかぶり投球する。

それは、彼女の肩に掠つた。掠つたのだ。

外から見てみるとその事には気が付きにくい。いや、気が付かないだろう。

だが、彼女は。

「当たってしまったわ……。後はお願いね、すずか……」

彼女はバカ正直に、外野へと向かう。

「黙っていれば勝てたものの……」

「うるさいわね、別に良いでしょ!」

彼女は実に正直なのだ。そして、物事に真っ直ぐに真剣に挑み、行う。

ルールは守る。

だからだろうか、当たったのだから、それを誤魔化す様な事は一切せずに外に出たのは。

「私達、2人だけになったね……」

「そうだな」

お互いの陣地内に居るのはそれぞれ俺とすずかの2人だけだ。

大きく広かったコートには沢山の生徒が居たが、その場に居た皆は外野である外の方に移動をしている。

大きなスペースが存在しているだけだ。

睨み合う2人には言葉などは必要なかった。

あるのは、その手に握ったボールと、当てるか当てられるか。勝つか負けるかだけだ。避けたりするなんて以ての外。論外だ。

「……………」

「……………」

両者の間に沈黙が訪れる。

風が、一陣の風が吹き、土埃を巻き上げていく。

外野で待機している生徒達の殆どは既に退屈をしているのかお喋りをしたり、一人で遊んだりしている。

その事に担当の先生は別段、怒ったりはしない。

「いくよ……ブロン君」

「来い！」

すずかの投げたボールが高速で飛来してくる。

その球体は、グラウンドの土を削り取りながら飛行してくる。

飛んでいるボールはかなりのスピードを出しているのか風切り音がしている。

「——グッ!!」

そのボールをキャッチした際に、ズザザツという音を立てながら身体は数十cmほど後退してしまう。

「(な、なんて重く速い球だ……身体が、腕が痺れる……。月村の一族はバケモノか!?)」

彼女の、あれだけの細腕から一体どのようなにして、これほどの豪速球が投げ出されるのだろうか。

掴んだ後も、数秒間ほど手の中で回転を続けるボール。

煙が上がるが、手に痛みという痛みを感じはしない。

「(危ない……気を操作して強化してないと駄目だった、やられていた)」

「止められちゃったね……」

掴んだ際に、すずかは一瞬驚いた顔をするが、それが嘘の様に消えている。

今、目の前の彼女の表情は悔しいという気持ちよりも自身と同等に張り合う存在が居る事に対する喜びで一杯のようだった。

「今度はこっちの番だ……」

ほんの少しだけ気と力を込めて、腕を振りかぶりボールを彼女へと向けて投げる。

それは、彼女の脚に向かい、一直線に飛んで行く。

先程の彼女の投球の様に、大地を削りながら、土埃を起こして。

かなりの速いボールで、他の生徒には何が何か理解出来ないだろう。

ただ、向かい合っている2人を除いて。

キーンコーンカーンコーンといった本日全ての授業項目が終了したことを教える合図が学校内に鳴り渡る。

ホームルームも終わり、担任教諭からの「さようなら」という言葉を聞きながらカバンの中にノートや筆記用具などを乱雑に入れていく。

「今日、私たち塾があるから先に帰るわね」

ガチャガチャとした音を立てながら、そのアリサの言葉に「わかった」と簡単に応える。

なのはもすずかもアリサの後を追いかけ、教室から出て行く。

いつも通りに元気な仲良し3人娘の声が離れていく。

あとに残されているのは、片付けをしている俺と雄介、志蓮の3人。

そして数人の生徒達だけだった。

「帰るか……」

そんな雄介の言葉に従うように、俺と志蓮は頷き、3人でドアを潜り抜け、下駄箱へと移動する。

「今日さ、王の財宝ゲート・オブ・バビロンの中を整理しようと思ってるんだけどさ、手伝ってくれないか？」

そんな志蓮の言葉に、俺達は1秒も経過しないうちに了承し、大きく首肯する。

靴を履き替え、運動場に出てみると空にある太陽はまた嫌になくらいに熱を放ちながら輝いている。

グラウンドの真ん中では、他の学年が、上級生が授業で使用しているので、それを避

けるように端つこの方を歩いて行く。

端には木々がそれなりに生えており、木陰が出来ていて、少しばかり涼しく感じられる。

「ただいま」

「おじゃまします〜」

小学校から10数分ほど歩くと、そこには住宅街が目に入る。

その中に存在する家の1つが神威志蓮の住む家だ。

インターホンを鳴らすこともなく、志蓮のあとを付いて行く様に家屋の中に足を踏み入れる。

中には誰も居ないのか、シーンと静まり返っている。

「親は……っ？」

「仕事だよ、2人とも働いてる……夕方には母さんが帰ってくるよ」

促されるままに足を上げて、2階へと進んでいく。

志蓮の自室へと移動し、そこで荷物を下ろしながら周りを見回してみた。

これといって特色もなく、目に入るものといえば複数のお玩具らだろうか。

勉強机とベッドが置かれており、棚にはズラツと教科書以外にも本が置かれている。据え置ききのゲーム機もあり、出力先であろう小さなモニターに線が繋がれている。

「さて……始めようか」

「ああ」

志蓮は自身のデバイスを起動する。

すると、背後に光が発生した。

何も言わずにその光源の中に入っていく志蓮を追いかけて、俺と雄介もまた同じように身体を中に侵入させる。

「……………」

一瞬だけ大きな光が発生して目を閉じてしまふ。

開いてみると、そこには無数の大きな棚が存在しており、その上には、段にはいろいろな武器などの道具が収められていた。

その中には、見覚えのあるモノもまた存在している。

「整理といつても何処に何があるかを知りたいだけなんだ……余りの多さに俺だけじゃどうしようもない」

その言葉には、ただ頷き返すことしか出来なかつた。

実際に、目の前には数え切れないほどの棚が存在している。

前面の壁が見えないほどに、綺麗に並び立てられているのだ。

それぞれに、自由に中を散策していく。

出口の座標を記録しているので、すぐにでも転移をする事が可能だ。

横を見てみると、前を見ても、視界に入ってくるのは金色に光り輝く骨董品ばかりだ。

その輝きが、目を眩ませてしまい、頭がクラクラとしてしまう。

「……すごい光っているな」

目の前には金色の船が存在を主張しながら保存されている。

それには帆というものが存在せず、甲板に玉座のような椅子が付いているだけだ。

「これは……」

それなりに離れた場所から聞こえてくる「こつちに来てくれ」という雄介の呼び声に、俺は彼の居る方へと足を向ける。

そこには既に志蓮も来ており、2人共上を見上げながら大きく口を開けていた。

その様子を不思議に思い、首を傾げながらも同じように上を向こうとする前に、その目の前に存在するモノに瞳が惹きつけられた。

大きな足が存在しているのだ。

機械的な足が立っているのだ。

「なんだ、これ……」

上を向いて見ても、その全容を視界に入れることは出来ない。

出来そうにないほどの大きさをしている。

実際にはそんな事などないのだが、子供の身体の所為かそう感じてしまうのだ。

在りはするのだろうが、天井というものが存在していないかの様に、高い空間。

そして、目の前に存在する巨大なロボット。

一体、どれほどの広さを誇る場所なのだろうか。

「ねずみ色？」

「どちらかというともタリツクグレーだな」

その機体の色はグレーを基調にしており、ピカピカと輝いている。

「おーい、見てくれ」

舞空術で飛行し、声を出している志蓮の居る上へと移動すると、そのロボットの顔を

見ることが出来た。

「V字のアンテナに、ツインアイ……」

「……………」

「ガン、ダム……」

その姿は、何処からどう見ても「ガンダム」そのものだった。

ガンダムというものの特徴をしっかりと抑えており、その存在を大きく主張してきている。

「何で、こんなものが……」

「近い内にこれを使う様な事でも起こるっていいのか？」

そのロボット——「モビルスーツ」を使うような事態が存在しているのだろうか。

見た瞬間に、その事に対しての恐怖を、まだ見ぬ未来への恐怖を感じてしまう。

だが、それ以上に喜びに似た感情もまた同時に存在していた。

「(ロボットってというのは浪漫溢れるものだ……そうだろうか?)」

もし此処に鏡があるのだとしたら、映しだされている俺のその顔は、口元は大きく歪

み、瞳は期待にキラキラと輝かせているだろう。

「王の財宝に……こんなものが入っているなんてな」

自身の持ち物でもあるが、その事実^{ゲート・オブ・パピロン}に志蓮もまた困惑していた。

王の財宝とは本来、人類の知恵の原典にしてあらゆる技術の雛形だ。

ゆえにこの宝物庫には、人類が生み出すものであれば全て、遙か遠い超未来に人類が生み出すものまでも全て保有している、という過去未来の時間軸すら超越した途方もない代物なのだ。

それは比喩でなく文字通り人類が生み出すものであれば「何でも」であり、この宝物庫に存在しないものは基本的には「新人類が生み出す全く別の概念」によるもの、または「別天体の知的生命体の文明技術」によってできたものだけであるとされている。

この事から考えると、モビルスーツが中にあつたという事は、近いとは言えないが、この様なものが動いている未来が存在しているという訳だ。

「特典の中に、これを入れたりしたのか？」

「……………いや……………」

雄介の質問に対し、志蓮は小さく首を振りながら否定をする。

その声は少しばかり震えている様にも感じられた。

「特典……………」

思い出してみると自分は軽はずみに頼み、貰ってしまったのではないのだろうかといった考えが頭の中でグルグルと廻っている。

家族の事を忘れたことなどは無く、転生してからは思い出して涙を流した事なんて存在している全ての指の数では数えられないほどある。

だが、その時に、その特典を貰えるという事実を知り、その欲望に振り回されたのは事実ではないのだろうか。

その時に、残っている家族の事を一時的とはいえ忘れていたではないか。

果たして、促されるままに力を望んで良かったのだろうか。

「俺が欲しかったものは……」

自分が欲していたのは、本当にこんなモノなのだろうか。

深層心理などといったモノの事などは実際に理解する事なんて出来はしないだろう。

だけど、何かが、自分の望むチカラとはまた違ったモノなのではといった考えが思考を奪ってしまう。

「(そういえば何だか最近、可怪しいな……)」

転生してから直後はそんな事などはなかったのだが、ここ数ヶ月間の間、チカラに振り回されている様な気がする。

そんな気がしてならないのだ。

より強い相手と戦いたいという願い、自分よりも弱い存在を踏みにじってしまいたいという願望。

これは、サイヤ人の冷酷で惨忍で冷徹な面が強く出てしまっているのではないだろうか。

そんな事が頭の中を占めてしまう。

「……ロン！ ブロン！」

「!? すまない……」

そんな事を考えていると、横から耳の鼓膜を破るかと思ってしまうほどの大きな声で雄介が叫び、意識が戻される。

先程の嫌な考えはスツと吹き飛ばされたが、背中を冷たい汗が濡らしており、少し気持ちが悪く感じられる。

そんな気持ちを振り払いながら、進んでみると、そのガンダムの後ろには大きなエンジンのようなものと一緒に小型のエンジンの様なものが目に入る。

小型のエンジンの方は7708個ほどがショーケースの中に入っており、大きさはマグカップと同じくらいだろうか。

大きなエンジンの方は2mほどの大きさをしており、5個並べられている。

その両方のエンジンからは緑色に光り輝く粒子が微量ながらも噴出している。

「おいー」

「………何だ？」

志蓮の呼び声に応えながら、彼の方へと近づいていく。

すると、目の前には扉が設置されていた。

そのドアは、何かしらの金属で出来ているのか、かなりの重さを感じさせる。

「扉………？」

「行ってみようぜ」

その雄介の言葉には、何処かワクワクとした未知への期待に溢れたものを感じる。冒険心に似た気持ちなのだろうか。

特にこれといって否定要素も存在していないので、扉を開いてみる。

そのドアは、予想通りに重く、かなりの力を入れないと動いてはくれない。

「!?!」

扉を開いた先には青色が一面に広がっていた。

空だ。

足元には白いタイルのようなものがあり、やけに開けた、開放的な空間だ。

数歩ほど歩き、後ろを振り向いてみると、そこには宮殿が存在していた。

中からは、小さいが多数の気を感じ取る事が出来る。

自身の知るなのは達の気が存在している点からすると、此処は地球であるという事に間違いは無いだろう。

「な、何だ……この空間は」

「中に気を感じる……これは……」

「確かに……だが、何故気付かなかったんだ」

「……は、別の空間なのだろうか。」

ゲート・オブ・バビロン
 王の財宝の空間内の先には見知らぬ空間が存在していた。

そんな疑問にも似た考えを抱きながら、唾をゴクリと飲み込んでしまう。

「珍しい……来客ですか」

入って来たのとは別の扉を開くと、そこではパーティーが開かれていた。

自然と身体が動いてしまうかのようなBGMが流れており、そこにはいろいろな服を来たヒトが居る。

スーツを着たヒトも居れば、十二単を着用したヒトまでもが居る。

洋風な部屋の様子には、和風の服装はかなり浮いてしまっている。

「あんたは……」

「始めましてですね。私の名前はあまてらす天照大神あまてらす、この地球の神の一人です」

さきほど声を掛けてきた女性が近づき、自己紹介をしてくる。

彼女の姿はとても綺麗なものだった。

日本の神の名前を名乗ってはいるが、着ているのは洋風のもの。

モデル雑誌に載っている美少女とでも言っても言うて良いくらいの容姿だ。

そんな見た目をしてはいるが、彼女からは大きな威圧感の様なものが見え隠れしている。

「大きな災害になる前に、防いで頂き有難う御座います」

「いえ、そんな……」

大きな災害というのはジュエルシードによるものだろうか。

そんな事を考えていると、彼女は此方に対してニツコリとした笑顔を向けてくる。

「なあ、あんた……なんで俺達は今日の今日まで気付かなかつたんだ？ それに、ゲート・オブ・パピロン王の財宝の事もだけど……」

「気が付かなかつたのは結界による効果だ」

志蓮の疑問に対し、横の方から男性の返答が聞こえてくる。

そのヒトの容姿は、簡単に言うとかタイがとても良く、しつかりとした身体つきをしている。

「そして、2つ目だが……お前のデバイスと俺達の宝物庫が繋がっているからだ」

「貴方は……？」

「おっと、すまないな……俺の名前は“オーデイン”だ」

「何で俺のデバイスと繋がってるんだよ」

「そればかりは分からねえな。神だからと言って、何でもしているという訳じゃあ無いんだ」

自身の名前を述べ、志蓮の質問に対し、答えたいがその答えを知らないといった感じに口にするオーデイン。

「……………」

改めて彼等を見てみると、探してみれば何処にでも居そうな容姿をしている。気の方も、抑えているのか下で繁栄しているヒト達とほぼ同等の気の大きさだ。

「折角来たのですから」という天照大神の誘いに乗り、俺達は行われているパーティーに飛び入り参加した。

だが、腕に付けている時計を確認すると、時刻は16:00を指していて、そろそろ帰宅をした方が良さそうな時間帯だ。

「今日は楽しかったです。ありがとう、また来て下さいね」

「此方こそ、そちらが良ければまた来ますよ」

もと来た道を行き、宝物庫の中に入る。

相変わらず、広い空間に、眩い光を放っている沢山の道具達。

志蓮の自室へと辿り着き、ゲート・オブ・バビロン王の財宝を閉じる。

部屋の中を支配していた薄い光がより薄くなり、ひっそりと消えていく。

「突然だけどき……俺、最近なのは達に構って貰えてるよな……どうしてだろ?」

「テンプレートな踏み台を演じていないからだろ」

志蓮の唐突な疑問に対し、雄介は間髪入れずに簡単に答えてみせた。

なんとビックリ 地下には既に住人が

枕元に置いてある時計の針がアラームに設定した時間を指して、ジリジリとした大きな音を鳴らしていく。

その音は部屋の中を響き渡り、密閉状態の空間内で反響していく。

「ふわあ〜……」

口を広げ、大きな欠伸をしてしまう。

目尻には、欠伸により出てきた涙が、そして目やにが溜まっている。

「顔、洗うか」

ベッドから身を乗り出し、2階から1階へと降りていく。

手で目を軽く擦りながら、廊下を歩き、洗面所へ移動。

スイッチを押し、部屋の電気がピカッと光り、一瞬で明かりが灯る。

大きな洗面台の前に行き、蛇口を捻り水を流し出す。

水がぶつかり跳ねている音を聞きながら、両手で掬い、顔を軽く洗う。

近くに置いたタオルを手に取り、濡れた顔を抑えるようにして拭く。

先程の涙や目やには消え失せている。

台所へと移動し、冷蔵庫の中からパンと牛乳の入った紙パックを取り出す。棚からはコップと皿を取り出し、パンをトースターの中に突っ込む。

タイマーの部分を確認し、リモコンを使ってテレビの電源を入れる。

この時間帯は朝の04:00で早朝だ。

番組という番組は放送されてはいない。

テレビの電源を消して、風呂場へと移動する。

浴槽にお湯を入れていき、ある程度溜まると止めて、蓋を閉じる。

「食べるか……」

再び台所へと移動し、頭を出している焼けたトーストを皿に乗せ、コップに牛乳を入れていく。

トポトポという音を立てながら入っていく牛乳を見ながら、一体だけ分身をつくりだす。

「電源、入れてきてくれ」

「了解」

つくりだした分身は、部屋を抜け出して地下へと移動していく。

牛乳をコップの8割近くまで入れて、そこで止めて紙パックの蓋を閉める。

皿に乗せているトーストにジャムとバターを塗り、コップと一緒に机へと運ぶ。

「頂きます」

手を合わせ、食事開始の挨拶をする。

外からはチュンチュンという小鳥の鳴き声が聞こえてくる。

食事を終了させ、弁当の準備に取り掛かる。

冷蔵庫の中に存在している残り物を適当に詰め込んでいく。

「これで良し」と

入れ終わった弁当を机の上に置き、分身の居る修行室へと移動をする。

物置部屋の横にはエレベーターが存在していて、その中に入る。

複数のボタンがあり、地下26階から2階までの扉の開閉をする為のボタンが存在している。

「(そう言えば、基本的に地下21階しか使っていないよな…地下26階には行った事なんて無いし……てか26階なんてつくったっけ?)」

この家で生活を始めてから、何時もは地下24階で修行をしている。

そして地下26階は覗いたことすらもなく、気になっていたのだ。

それどころか地下26階なんてつくった覚えは無いのだ。

無意識につくりだしていたのだろうか。

「……行ってみるかな」

壁際に存在している地下26階のボタンを押す。

開いていたドアはスツと閉じ、1階から地下1階……地下9階……地下26階という文字が光りが移動し、機械の箱は下へ下へと落ちていく。

扉が開き、そのエレベーターから足を踏み出す。

目の前には暗い空間が広がっていた。

ところどころに存在している光がやけに眩しく感じてしまうほどにその場所は闇に満たされている。

足元にはコードが無数に広がり、絡み合っている。

「な、何なんだ……この空間は……？」

その異様な空間に、ただただ驚く事しか出来はしなかった。

自然と口の中には唾が大量に発生し、それを飲み込む。

前方からは小さな機械音が鳴り響いている。

その音の中には、また別の音が紛れ込み、不自然さと不気味さを醸し出している。

「……………」

少し歩いてみると、その機械音と別の何かの音が徐々に大きくなっていく。

機械が発しているものとは別の、その音に対して耳を澄ませてみると、それは何かを食べているかの様な音にも解釈する事が出来る。

もう少し近づいてみると、その音はハッキリとしたものに変化していく。

「誰か居るのか……？」

この家には、現在のところ俺以外は存在していない筈だという考えが頭の中には存在している。

だが、それはどうなのだろうか。

数日の間、家を空け続けてしまった時期がある。

その時に、誰かに侵入されてしまったとしても可怪しくは無いのだ。

実際に、シェンが瞬間移動をして来た事もあった。

何かしらの能力などを所持した存在であれば、気付かれずに入る事など容易な事なのであろう。

自身には気を感じ取る事が出来る。

それなのに、この家に他の気が存在している事に気付かないなんてどういふことなのか、という不可思議な事に頭を悩ませながらも、前進をしていく。

足を進める度に、音は大きくなっていく。

そして、目の前には小さな光が発生した。

発生したと言うよりも、目に見えるほどの大きさになったという表現の方が良いのだろうか。

足をコードに引つ掛けて転ばないように、物音を鳴らさない様に細心の注意を払いながら、進んでいく。

「い、これは……」

目の前に存在していた光はハッキリとしたものへと、大きな光源へと変化する。

モニターだ。複数のモニターが発している光なのだ。

それが、さつき目にした小さな光の正体だ。

そして、その背後には光を放っている大きな物体が鎮座されている。

そこから、緑色の光が少なからず発せられていた。

目に覚えのあるものだ。

「——遅かったじゃないか、聖王のクローン……。いや、サイヤ人のクローンの方が良いのだろうか……?」

黒い影がユラリと揺れながら、此方を目にして口を開く。

それは、モニターが発する光を遮るかのようにして椅子に座っている。

そして、その影は右手を上げて、指をパチンと鳴らした。

その瞬間に、部屋の暗さは嘘の様に消え失せて、明かりが満ちしていく。

「——ッ!？」

その一瞬の変化に、暗闇に慣れてきた目には辛いモノがあり、思わず眼を閉じてしま
う。

眼を恐る恐る開いてみると、そこには白衣を着た青年が立っていた。

「始めまして、実験N0, 7708……私の名前はマッド。君の生みの親の様な存在だ
よ」

彼の着ている白衣は、床に当たっている為なのか、少し汚れている。

彼の瞳もまた翡翠グリューンと紅ロートをしたオッドアイで、金色の髪をしている。

「あ、あんたは……何者なんだ……？」

「さつき言った通りだよ。私は科学者でも有り医者でもあるんだ……君の事、ずっと観察
させて貰っていたよ」

その言葉を証明するかの様に、存在している全てのモニターには家の各所が映しださ
れている。

自室として使っている場所は勿論、台所や修行室なども

この階を除いた全ての場所が映し出されている。

「何も言わなくても良いよ……君はあの研究所から抜けだして、この家に……デバイスに表示されたこの場所へと辿り着いた」

彼の両の瞳は金色に怪しく光りだす。

「あんたの家だったのか……。じゃあ、あの研究所は……？ デバイスの事だけ」

「謝らなくても良い。別段、気にもしてはいないから……それよりも、だ。100年近く生きているからかとても退屈していてね……だから君を観察していた」

謝罪の言葉は遮られ、彼は独りでに、楽しそうに喋り出す。

「君は必要以上に自身の身体を傷めつけているね。サイヤ人というのものは皆そうなのかい？」

他のサイヤ人については前世の記憶にある、アニメなどの登場人物の事しか知らない。

だから、実質知らないといった方が正解なのだ。

そういつた事から、その質問に答える事が出来ずに、だんまりを決め込む他ない。

「ふむ、面白いえばデバイスが壊れたんだね。今日中には新しいのが出来るから」

そう言いながら彼は「これ以上話すことは無い」とでも言わんばかりの勢いで隣の部

屋へと移動する。

移動した先からは、ギョインギョインといったモノやガンガンといった機械音や金属音などが響いてくる。

目を灼くほどの光が一定のリズムを刻むかのように明滅を繰り返して、この階全体を明るく照らしている。

「戻るか」

中何が行われているのか気にはなっているのだが、その好奇心を振り払うように元来た道を歩き、エレベーターに乗る。

台所に設置している時計は07:15を指しており、そろそろ外出の準備をしないと危ない時間に近付いて来ていた。

自室に置いてあるカバンを手に取り、中に入れてあった教材と時間割表をチェックして、台所の机に置いてあった弁当箱を入れる。

「行ってきます」

ガチャリという音を立て、ドアをしつかりと閉め、鍵を掛ける。

地下26階にはマッドという人物が居るのだから、分身を待機させておく必要性もない。

地下21階に居る分身に修行室の電源をセーフモードへと変更させて、消失させる。

帰ってきた時に、家に入る事が出来ないのであれば、その時はその時だ。

家を出て、ある数分ほどでバス停へと辿り着くことが出来る。

そこには既に、先客であるのはと雄介の2人が居た。

「おはよう、ブロン君」

「おはよう」

「おはよう」という挨拶を返し、数秒ほど待っていると遠くからエンジン音が聞こえ、立聖翔大学付属小学校行きの送迎バスが向かってくる。

停車し、扉が開くと同時に中に入るとアリサとすずかの2人が椅子に座っており、何時ものように近くに座る。

朝の挨拶をすると同時に、バスはエンジンをふかせながら走りだした。

「……………」

俺の座っている席は窓際にある。

太陽の光が窓を通過して教室内を明るく照らし、ポカポカとした暖かさを与えてく

る。

窓の直ぐ側に座っているのだから、その太陽光は身体をよく温めていき、強い眠気を発生させてくる。

「ここで、これを使えば……」などといった方程式に関する授業をしている教師の声なんていうのは右から左へと流れていき、耳の中を質量を感じさせない大気のように自然と通過していく。

眠ってしまったらないようにと右手に握っている鉛筆を回して気を紛らわせてはみるが、睡魔の方は相も変わらず強力な敵であり、授業内容などは全く頭に入っては来ない。

窓の外を見上げてみると、太陽は元気に輝きを放っていて、その余りにも強い太陽光に瞳は細くなってしまう。

他の場所ならば、すぐさま見つかり注意されて、クラスメイトの笑いの種にでもされるであろうが、窓際であればそれほど気にはしなくてもいいのが利点だ。

だが、ずっとそのようにしていればバレてしまうのは当然のことであるのだが。

授業終了のチャイムが校内中で響き渡る。

先生は教室を出ていき、その途端に生徒達はそれぞれのグループに集まって話をした

り、好きなことをしたりと各々自由に行っている。

もちろん俺もまたその1人であり、なのはや雄介達の居る場所へと何の疑問も抱かずに移動をする。

その事が自然な事だと、当たり前前の事なのだと思っている節が存在しているのだ。

「(ま、それがとても貴重で大切な事なんだけどな……)」

何の変わり映えも無く、他愛もない話を繰り返して行く。

話したいことを話して、相手が話していることをしっかりと聞いて。

巫山戯る時には巫山戯て、失敗をすれば謝って。

空気が読めずに思い付いた事を言葉にして話してしまったり。

そんな普遍的なことを繰り返して行く。

それがどれだけ幸せな事なのかとしっかりと理解をする事が出来ずに。

「それにしても、大分心配したわよ……あんただけ帰ってきてなかったんだから」

「心配かけてすまない……そして、ありがとう……」

ジュエルシードを巡った数日前までの事件直後、俺は虚数空間に呑み込まれ、落ちていった。

皆を残して行方不明になっていたのだ。

そして紆余曲折があり、皆の元へと帰還する事が出来た。

その帰るまでの間、俺だけが顔を見せずにいなかた事に対し、なのはや雄介達は勿論、アリサとすずかもまた同じように不安と心配に心が支配されかけていたのだ。

「それよりも、来月発売のゲームの事なんだけどさ」

「少しは空気読めないのかな、志蓮君は…?」

そんな暗い雰囲気をぶち破るかの様に、空気を読めない風を装いながらも志蓮は話を別の話題へと転換していく。

それが、どれほど不自然なカタチであろうとも、淀み重くなっていた空気がガラリと正反対のモノへと反転した。

休み時間もあつという間に時間は過ぎて、授業が始まる。

先程までの暗い雰囲気などは俺達の中から消し飛んでいた。

「ただいま」

ガチャつとドアを開けて、家に入るとそこはいつも通りとは言えない空間が広がっていた。

見た目はこれといって違うと言えるようなものは存在しては居ない。

だが、異様なのだ。異質なのだ。

大きな違和感を感じるのだ。

今までとは違う生活を送る事になるであろう空間になっているのだ、この家が。

「気に入ってくれたかな」

予想通りだとしても言うべきなのだろうか、目の前にはその現状をつくりだしてくれたであろう存在が2階へと続く階段の上で腕組をしながら仁王立ちをしている。

「自動人形。これで、この家の家族構成という不自然さは消え失せる。因みにだが、私は君の兄という役回りだ」

「兄だあっ!? 冗談じゃあ無いぜ、素性もよく知りもしない相手に兄を演じて貰うだなんてよ」

「それもそうだな……あれは今から」

「長くなりそうだから却下で」

ドヤアアという表現が正しく当てはまるといった感じの表情をしているマッドを一蹴して、周囲を見渡してみる。

「で、デバイスの方は……?」

「ああ、そうだったね。これだよ」

差し出されたそれは、指輪だった。

無色透明で透き通った光を放っている。

角度を変えてみると、その光は無色から虹色へと変化した。

「随分と小さいな」

「まあね……技術というものは進歩し発展する都度に小型化や薄型化していくものだ
よ」

目を細くしながら、その指輪を指で掴みながら見つめる。

最初の頃とは違い、余りにも小さくなったそれに対し、俺はただ感嘆の溜め息を零す
ことしか出来ない。

「腐っても科学者か」

「酷いな……。性能と使い方だけど」

語りだした彼の瞳は強喜に満ち溢れていた。

童心に帰った壮年男子であるかの様に、自慢の子供を紹介するかの様に。

「1つ、重力操作……これは前回のデバイスの1000倍まで引き上げる事が出来る」
自身に掛かっている重力を操作する機能。

これが、健在であるというのは嬉しいと感じてしまう自分が何処かに居る。

更にそれが、強化されているのだ。

修行をする事が、痛みを感じて嫌な筈なのに。

身体が強くなっていく事を実感する度に充実度と、満足度。そして達成感を感じて嬉

しいのだ。

「他にもマツピング機能や物体の量子変換システムだね……最大でだが、直径が20万kmものや質量が600億兆tの物体を収納できるぞ、しかもそれを318個もだ!!」

その果てしの無い数字に俺はただ耳を傾けて、口を開けている事しか出来ない。

その想像すらも出来ないほどの数字を聞いて俺はただただ「此奴、バカだ」といった言葉が頭の中に浮かび、口を閉ざした。

「重力操作の方だけどな……装着者に掛かる重力を倍加して、その重力が原因で周囲への負担や被害が出ないように調整をしたよ。あ、それと動力だ!」

サラツと重要な事を述べながらも、「これを忘れてしまっただけは駄目だ」といった感じに大きな声を上げるマツド。

近所迷惑ではないのかと心配になるほどの、その大きな声に俺は一瞬だけ耳を塞いでしまう。

「君は確か気と魔力を操作するんだよね? 魔力の方は枯渇しても大丈夫、気の方はかなり消費を抑えられるよ」

「どういう意味だ?」

「そのままの意味だよ……そのデバイスには超小型のGNドライブが搭載されていてね、そのGN粒子から作り出されるエネルギーを魔力や気に変換可能なシステムも積んで

るんだ」

その意味不明な言葉に対して、俺はただ黙って聞いている事だけしか出来ない。

そんなものが可能になれば、世の中にはもっと凄い作品もあるのだが、他の二次創作物もビックリなほどのチート能力を手にした事になるのではないだろうか。

「待てよ……GNドライブ……？」

そのマッドの言葉はかなり早口で、流暢で、速いものだ。

ただ聞いているだけなのならば、その単語を聞き逃してしまう所であっただろう。

そして、それに似たものを最近目にしたような気がするのだ。

「(地下26階の大型の物体……主の^{ゲート・オラ・パピロン}財宝に繋がっている宝物庫の中に存在する大型のエンジン……)」

それらから発せられていた緑色の光。

あれが、もしGN粒子なのだとしたら。

「お前かあああああ!!」

その声は屋内を響き渡り、家を揺らすほどの大きさだ。

近くにあったガラスは粉々に割れて、床に落ちていく。

「危ないじゃないか……」

「す、すまない」

その周りの惨状を見て、ただ謝ることしか出来なかった。

ガラスは勿論だが、開いていたドアは吹き飛び、床にはヒビが発生している。

余りの驚きに、気を込めて大声を出してしまったのだ。

「ま、直すから問題は無いのだけれどね」

マッドは、床に刺さっているガラス破片を避けながら、近づき、懐からリモコンを取り出してボタンを押す。

地下の方からスパーにあるカートの様な見た目をした機械が多数出現する。整備メカである“カレル”だ。

その上にはボールの様な球体のロボットである“ハロ”が付いており、それぞれ破損した床などを修理して、片付けをしていく。

「こんな高性能なもの、嬉しいんだけどさ」

「大猿になった時の事が怖いのかい？ 別に心配するような必要は無いよ、戦闘スーツの様に伸縮自在の材質を使用した指輪だ。触ってみると柔らかいだろう？」

「それもあるんだけど……見返りは？」

「僕自身の見返り……君に利点はあるが、私には無い。そう言いたいのかな？」

その質問に言葉ではなく、首肯で答えを返す。

マッドは少し考えるような素振りをするが、すぐにそんな様子は消え去り、笑いなが

らこう答えた。

「決まっている。データ収集だよ」

ベッドの上で、俺は横になりながらも寝ることは出来ずに今日1日の事を思い出していた。

今日の今日まで気が付くことが無かったが、同居をしていたマッド。

そのような存在など居ないと思い込んでいたのだ。

「彼は科学者でもあり、医者でもある」と自己紹介で述べていた筈だ。

彼は自分をつくり出した「親の様な存在」だとも言っていた。

それはどういう意味なのだろうか。

彼の瞳。

それが、その疑問を解消する答えを全て語っている様にも感じられる。

オッドアイなのだ。右目が翡翠グリンストーンで、左目が紅玉ロートをしているのだ。

彼も自分と同じ聖王かのじよのクローンなのか、その血を受け継ぐ者なのか。

そして、何よりも彼の特典と能力だ。

先ず浮かんでくるのはGNドライブだ。

そのドライブから発せられるGN粒子による影響なのか、彼の瞳はオッドアイから両目とも金色に変化し、輝いていた。

「（“純粹種”……“イノベーター”なのか）」

もしそうなのだとしたら、新しいデバイスを使用する自分にも、その影響は遠くないうちに現れるであろう。

2つ目に、1日で高性能なデバイスをつくりだす技術と能力だ。

彼は科学者だと自分で言っていた。

だとすると、物体の創作に関する能力を所持していると考えて問題は無いだろう。

枕元の時計を見てみると、時刻は23:45を指している。

「まじでそろそろ寝ないとな……」

今日はいつともとは違って修行をしようという考えすらも浮かんでこない。

俺はただ、大きな欠伸をして、眠気に誘われるままにベッドに横たわったのだ。

だが、眠ることが出来ずに、考え事をしている。

時計は何時の間にか23:59を指している。

カウントダウンを開始しているかのように時計の秒針が動く音がやけにハッキリと聞こえてくる。

「——ッ!？」

大きな魔力の波動を感じ取り、思わず身体を勢い良く起こしてしまう。

その魔力は、何かが目覚めた証なのか。

生命の産声であるのか。

それを感じ取った者は少なからずこの世界に存在していた。

地下26階でモニターをじっと見つめているマッド、ベッドに座りながらゲームをしている志蓮、机に向かいながら本を読んでいる雄介。

遙か上空に存在している神の宮殿内の天照大神あまてらすおみかみを始めとした地球の神々。

だが、そんな魔力に気付く事がない存在もまた居る。

2005年の6月4日。

3日の23:59分から丁度、4日の00:00に時間が動き、変化した時のことだった。

A, S 編

新たな戦い 襲撃されるなのは

「——ッ!?!」

6月4日の午前0時。

ベッドの上で横になりながら考え事していると、そこに突然として大きな魔力の波動が発生した事を感じした。

その魔力は純粹にして、妙に嫌な感じのするものが混じっている様な感覚を与えてくる。

しかもそれは少しどころでは無い。

大きくて邪悪な気の様なもの混じっているのだ。

「失礼するよ」

「うわっ! びつくりした……いきなり開けて入ってくるんじゃないやねえよ」

ドンツといった感じに自室の扉を勢い良く開き、「話は聞かせてもらった!」とでも言う様な感じに無断で部屋の中に入ってくるマツド。

彼は何処か嬉しそうな様子であり、声が上がっている。

「闇の書だよ、闇の書！ ああ、楽しみだなあ……。闇の書の闇はどの様な仕組みをしているのだろうか。そして、その主である彼女の側にはどのような転生者が居るのかな……」

マツドのその様子はとても無邪気なものだ。

子供の様に。とても、純粹で無邪気なのだ。

彼は何処か嬉しそうな様子であり、声が大きく上ずっている。

そんな彼の手の動きはとても不気味で、不自然さを感じさせる。

と言うよりも、その動きが感じさせてくるものはいやらしさだろうか。

まあ彼からすると純粹に楽しみなのだろうか。

彼の瞳はランランとしていて、何処までも自分の知識欲を満たそうとする事しか頭の中には無いのだろうか。

「そつちか。というか、一応ここは俺の部屋だぞ！ 監視カメラもあるし……。ああ、そうか。俺にはプライバシーというモノは存在していないのか」

楽しそうにしているマツドを横に、俺は大きく息を吐き出す。

頭の中には、「此れからどのような事が起きてしまうのだろうか」という不安で一杯なのだ。

そんな気持ちに、今にも心が支配されそうなのだ。

12月1日の午前6時35分。

海鳴市にある保和家の地下24階では、5人の少年少女達が集まり、それぞれが意識を集中させながら身体と魔力をフル回転させている。

建物の外は季節が季節であるので気温は低いのだが、この修業室の中は室温や空調が整えられていて、実に快適なものだ。

「それじゃ、今朝の練習の仕上げ…シユート・コントロールやつてみるね」

【A i r r i g h t】

目を閉じて、意識を更に研ぎ澄ませていくのは。

今の彼女は、自身の中に存在しているリンカーコアの動き、体の中を流れている魔力と気、そして自身の相棒であるレイジングハートのカウント音声の情報のみを意識している。

「リリカル・マジカル……デイベインシユーター、シユート！」

彼女の足元には桃色に光る魔法陣が出現する。

その指にもまた、同様の光を放つエネルギーが集中し、放たれる。

魔力を多分に含んでいるエネルギー弾は、頭上で回転を続けながらも落ちて来る

ジュースの空き缶に向かって高速で迫っていく。

「コントローラー……」

「18……19……20……21……」

「……アクセル！」

エネルギー弾は空き缶に当たりながらも、それを空へと高く打ち上げていく。

そのスピードも徐々に徐々に上がっていき、缶を更に高く打ち上げていくが、その魔法を行使する彼女の顔には少し苦悶の表情を見え始める。

「100……109……121……145……280……299……300」

「はぁ……」

閉じていた目と口を開き、大きく息を吐き出す。

彼女の小さな肩は上下に動いていて、顔には少量の汗が流れていた。

「Don't mind, my master」

「ありがとう、レイジングハート」

照れながらも、サポートをしてくれた自身の大切な相棒に対し、礼を述べるなのは。

先程まであったピンクに輝く光の弾は消え失せており、宙に浮いていた缶は重力に従い床へと落ちる。

「今日の練習、採点すると何点……？」

【About eighty points】

「そっか…」

そのレイジングハートによる採点に、笑顔を浮かべるのは。

今までの練習時の点数と比べるとかなりの高得点を獲得したのだから。

「でも、皆と比べると……」

【Because he who is evildoer……】

「そらっ！　良いもんやるよー！」

緑色に輝く無数のエネルギー弾が、雄介と志蓮に対して絨毯爆撃の様に空から降り注ぐ。

それらを避けたり防御をしたりと彼等は必死に対処をしていくが、あまり効果は無く、発生する爆風に煽られてその小さな身体は吹き飛ばされていく。

「こらー！　少しは手加減をしろー！」

「そうだそうだった！」

「手加減って、なんだ？」

そんな彼等の訴えは無情にも切り捨てられ、先程より一層数の増えたエネルギー弾に

翻弄され続ける2人。

彼等には余裕が無さそうに見えるが、ギリギリのところ回避をして直撃を避けている。

そして、その攻撃をしている俺に隙が出来るのを待っている。

「避けてるだけじゃ、意味が無いぞ」

降り続けるその緑色のエネルギーは、床に当たるその度に大きく膨らみ、立っているだけでも困難なほどの暴風を巻き起こす。

だが、それほどの威力を誇る力であっても、この室内の壁や床には少しの傷や凹みはたったの1つすらも出来てはいない。

存在していないのだ。

「今日はこれくらいにしておこうかな」

「……ありがとうございます……」

息も切れ切れといった感じに、彼等は床へと力無く座り込んでしまう。

2人の少年の服は、汗でビショビショになっていて、肌と密着している。

横になった彼等は大きく息をしながら、御腹を上下に動かしている。

「お疲れ様。それぞれ風呂に入っていると良いよ」

そんな言葉を口にする俺の方は、日頃の修行の効果によるものか一滴も汗は流れておらず、疲れすらも感じてはいない。

俺の口から出たその提案に従い、雄介と志蓮、なのはの3人はエレベーターに向かっていく。

この前のデバイス開発と同時に行われた半日の間での改築で風呂場は大きくなり、更には男女別の温泉の様なものへと変貌したのだ。

彼等は移動をするその途中で、かなり嬉しそうな顔をしている白衣の青年と鉢合う。

「おはよう、諸君」

「おはようございます、マッドさん」

白衣を着用している彼はにこやかな様子で、目の前に居る3人の子供に対して、優しい声色で口にする。

「お湯炊きは済ませてあるからね、存分に堪能してくると良いよ」

挨拶を終えると、雄介と志蓮、なのははエレベーターに乗り、地下21階へと上昇していく。

疲れた身体を癒す事を考えながら。

「で、何の用だ？ マッド」

「兄さんと呼んでくれよ、哀しいな……」

長身の青年の瞳は金色に光り輝いている。

その光は何処までも綺麗なモノで、それに見つめられていると界王神とはまた違った意味で心のなかを見透かされているかのような錯覚を与えてくる。

だが、とても不気味なものだ。

自分の心が除かれているというのは、実に怖いものなのだから。

「もうすぐだ……もうすぐ始まるぞ」

「ああ」

「闇の書だよ、闇の書！ ああ、楽しみだなあ……闇の書の闇はどの様な仕組みをしているのだろうか。そして、その主である彼女の側にはどのような転生者が居るのかな。ああ、闇の書を弄りたい」

「それ、前も言っただけだったか？」

「おじやりました」

「しました」

「またな」

3人の少年少女の湯上がりであるその身体は、外の空気に触れることによりあまりにも速いスピードで冷たくなっていく。

修行を終えた彼女達は、それぞれの自宅へと急いで足を向けて走りだす。

「さてと。修行の続きでもするかな」

「ふむ……戦闘民族としての自覚が出てきたのか。それともこの先の闇の書に向けてのものなのか……」

朝食の時間が来るまでの間修行を続けんだといった事で頭が一杯の俺には、マッドの言葉が聞こえてはいなかった。

マッドの、彼の言葉はとても小さな大きさの声であり、言った彼自身独り言の様なつもりで口にしたのだが。

次元空間航行艦船であるアースラは次元空間の中を航行していた。

アースラの目と鼻の先とでも表現をしても構わない位近くの座標に時空管理局の本部は存在している。

「管理局本局へのドッキング準備、全て完了です」

「うん。予定は順調……良いことね」

「失礼します。艦長、お茶のおかわりは如何ですか？」

背後から、執務官補佐をしているエイミー・リミエツタが艦長のリンデイ・ハラオウンに声を掛ける。

彼女、エイミー・リミエツタの仕事は基本的に執務官補佐であり、通信主任を兼任している。

だが、何も無い平時の状態では、リンデイ・ハラオウンのお茶汲みとして働いている様なものだ。

「ありがとう、エイミー。頂くわ」

湯呑みにトクトクとお茶が注がれていく。

その横にはお茶請けである羊羹が2個置かれている。

「本局にドッキングして、アースラも私達もやっと一休みね」

「ですね」

何時もと同じように彼女リンデイ・ハラオウンは角砂糖を次々と入れていく。

1個、2個、3個と入れられていくその砂糖の数は、彼女がそれだけストレスを溜めてしまっているとう事なのだろうか。

「子供たちは？」

「今はゾイル特務執務官と一緒に6人で休憩中ですよ。さつきまで戦闘訓練しましたし……両執務官共に、それに対して付き合っていましたから」

「そう。明日は裁判の最終日だつてのにマイペースねえ……」

「まあ、勝利確定の裁判ですから」

リンデイは2個ある羊羹のうちの1個をエイミイに渡して、2人でその羊羹を味わう。

その2人の笑顔は、美味しいものを食べているという理由と、予定調和な事柄に対するものでもあった。

「さて、最終確認だ。被告席のフェイトは、裁判長の間にその内容通りに答えること」

「うん」

クロノとゾイルの執務官組、そしてフェイト、アルフ、ドウム、ユーノを合わせた6人はアースラ内にある食堂で裁判で話すことについての会議をしていた。

食堂は賑わっていて、かなりの数の局員が食事をしているのが目に入る。

席も殆どが埋まっていて、新しく来た局員が座る座席を探すのに一苦労だ。

「今回はアルフにも被告席に入ってもらう」

「わかった」

「で、僕とこのフェレットモドキは証人席。質問にある回答は、其処にある通り」
「うん、わかった」

答えるべき事さえ答えてしまえば、筋書き通りにいけば勝利確定の裁判ではあるのだが、そうと分かってはいても緊張はするものだ。

彼等の間には、重い空気が流れている。

「てつ、おい！」

「何だ……？」

「誰がフェレットモドキだ！ 誰が！」

「君だが……何か？」

その空気をハンマーで尽く粉碎していくかの様な大きく荒げた声で、ユーノはクロノに対して憤慨する。

対するクロノの方はというと素知らぬ風を装って、惚けている。

なのは達と一緒に行動していた時は、常にとってもいいほどに変身魔法でのフェレット形態を取っていたのだ。

それが、その名称の理由だろうか。

「そりゃ……動物形態でいる事も多いけど、僕にはユーノ・スクライアっていう立派な名

前が！」

「ユーノ、まあまあ」

「クロノ、あんまり意地悪言っちゃ駄目だよ」

「大丈夫、場を和ませる軽いジョークだ」

ユーノも、実際のところそれほど怒ってはいないのかすぐにその喧騒は収まる。

「事実上、判決無罪：数年間の保護観察という結果は確実と言っていいんだが。一応、受け答えはしっかり頭のなかに入れておくように」

そのゾイルの言葉に、フェイトを始めとした被告側、そしてユーノは小さくではあるが、確かに首を振り、それを了承した。

《お疲れ様、リンデイ提督。予定は順調？》

「ええ、レテイ。そつちは問題ない？」

アースラ内にある艦長室にて、リンデイは通信モニターを使い、本局に居る知り合いである提督へと連絡をしていた。

《う〜ん……ドッキング受け入れと、アースラ整備の準備はね……》

モニターに映しだされているレテイ・ロウランの顔色はあまり良いと言えるものでは

なく、何か良からぬ事が起きているという事は簡単に想像が出来てしまう。

「え…………？」

《こつちの方では、あんまり嬉しくない事態が起こっているのよ…》

「嬉しくない事態って？」

《ロストログアよ。一級搜索指定の掛かっている超危険物……幾つかの世界で痕跡が発見されているみたいで、搜索担当班はもう大騒ぎよ》

「そう……」

ロストログアとは、遺失世界に眠っている、または眠っていた技術や魔法の総称だ。危険なものが多数存在している。

そして、第一級搜索指定がなされているロストログアというのは、その中でも特に危険なものだと認定されたものなのだ。

《捜査員を派遣して、今はその子達の報告待ちね》

そんな2人の会話を、報告に来ていたクロノは聴いてしまっていた。

「雑魚いな……こんなんじや大した足しにもならないだろうけど」

赤い騎士服の様な服を着た少女が1人、そしてそこに2人の青年が倒れている。

彼等は苦しげに苦悶の表情を浮かべていた。

それとは反対に赤い服の少女は事も無げに涼し気な顔をしている。

そして、更に異様なものが一つ。

彼女の手には細長いハンマーと黒い外装をした洋風の書物が握られている。

赤色をしたゴシッククロリイタの服装とは、かなりの不釣り合いさだ。

それが、彼女に異質さを与え、更にそれを引き立てている。

「お前らの魔力、闇の書の餌だ」

その書物は意思を持っているかのように、独りでに動き、宙へ浮かぶと同時にパラパラとページが捲れていく。

そこで風は吹いてはいないにも関わらず、だ。

何も書かれていない白紙のページが開かれると、倒れている青年たちは先程よりも更に苦し気な様子を見せて、その本は怪しく光りだした。

時刻にして12月2日の午前2時23分。

とあるオフィス街のビルの間での出来事だ。

同日の午後7時45分。

【Caution. Emergency】

「え？ 結界!？」

レイジングハートの警告を聞くと同時に封時結界に似た別の魔法が展開される。

【It approaches at a high speed】

「近付いて来ている……こつちに?」

明日提出である学校の宿題をしていたなのは、その作業を中断して外へと駆け出す。

外は不気味なくらいに静まり返っている。

感知している魔力は、確実に彼女に向けて一直線に飛んでいる。

「来たか……」

なのはの元へと移動している大きな魔力を感知したのは、何も彼女自身とレイジングハートだけではなかった。

その隣家に居る雄介はもちろん、志蓮も気が付いているだろう。

地下に居るマッドもだ。

「なのはに向かっている魔力、1つ……だけじゃない。2つ」

魔力の1つが移動しているという事は概ね原作通りだと言っても良いだろう。だが、気になる事はもう1つの魔力だ。

その魔力は片方よりも遥かに巨大で、相手に対して威嚇をしているかの様な、威圧をしているかの様な程に大きく放出をしている。

「それとも、コントロールが出来ていないのか」

なのはの気を探り瞬間移動をしようとする時、突如として頭のなかにシエンの「闇の書には限界まで手を出さないで欲しいのです」という言葉が浮かび、それを思い出した。

そうだ、確かに約束をしたじゃないか。

下手に動いて募集されでもしてしまえば、後々に大きく歪み、取り返しのつかない事になるかもしれないのだ。

「(楽観的だが、今のなのは達の実力なら何とかかなるかもしれない)。頼むぞ、皆……」

【Homing bullet】

前方から飛来して来る魔力の誘導弾に対し、Protectionを用いて防御をするのは。

「テートリヒ・シユラアークツ!!」

彼女の背後に向かい、ハンマーによる打撃攻撃が迫る。

だが、不意打ちに似たそんな攻撃にもなのは冷静に対処していた。

「あれ？ 遅い…？」

速い筈の相手の動きが、スローモーション再生を見ているかの様に感じ、対応する事が出来たのだ。

それぞれの方向に対し、シールドを張り防御をするなのは。

だが相手の少女の方が力が強いのか、それともデバイスによるものか折角取った防御の体勢は崩されてビルの間を転落してしまう。

「レイジングハート、お願い！」

「Standby, ready, setup」

落ちながらも、学校の制服に似た白を基調としているバリアジャケットに身を包みながら、杖となったレイジングハートを握りしめるなのは。

「Schwalbefeiegen」

赤い服を着た少女は鉄球を高く投げ、それをハンマー型のデバイスで殴りつけてくる。

それは火花を散らしながら、変身を終えたなのはの元へと真っ直ぐに飛んで行く。

「おらあああっ!!」

防御の際に発生した煙が原因で命中したのかは分からないが、赤い少女は勢い良くなのはの方へと突っ込んで行く。

その振り下げたハンマーにより煙は切り裂かれ、なのははその場から飛行魔法である Flier Fin で移動し回避をする。

「いきなり襲い掛かられる理由は無いんだけど…何処の娘？ 一体何でこんな事するの？」

その質問に、少女は魔法による攻撃で応える。

「教えてくれなきゃ、分からないってばー！」

少女の背後には、予め待機させておいたエネルギー弾が飛んでいる。

その1つを除けた少女だが、もう1つの方は回避が間に合わないことを悟ったのかシールドを展開して防御をする。

「この野郎！」

【Flash Move. Shooting Mode】

「話を……」

【Divine……】

「聞いてっつてばー!!」

【Buster】

懐に潜り込みハンマーを振りかざしてくる少女に対して、なのはは再度応戦をする。彼女の放つ砲撃魔法少女の身体ギリギリのところを飛んで行く。

その際に、彼女が身に着けていた帽子が、離れ、燃えながら消えていく。

それが彼女の逆鱗に触れてしまったのか、強く睨みつけられたのはすこしばかり萎縮してしまう。

「グラーフアイゼン、カートリッジロード！」

彼女の持つハンマーが伸縮して、その中から薬莖のようなものが飛び出す。

【Explosion. Raketenform】

「——えっ!？」

ハンマーはヘッド部分が推進剤噴射口に、反対側はスパイクに変形する。

その形態変化になのはは驚き、大きな隙が出来てしまう。

「ラケーテン……」

噴射口から大きな火花が発生し、少女のその小さな身体は振り回される様に回転を始める。

「うおおおおお!!」

その勢いを保持したまま、彼女はなのはへと向かい飛んで行く。

防御シールドを展開する暇も無く、レイジングハートを盾代わりにしてしまう。

それが仇となったのか杖には大きくヒビが入り、2つに砕かれてしまう。

「——ハンマアアアアッ!!!」

その攻撃に耐えられず、なのはは身体を回転させながらコンクリートを壊しながらビルの中に飛ばされる。

発生した煙により咳をしてしまうが、相手は待つてくれる筈も無く、間髪入れずに赤い少女は攻撃を仕掛けてくる。

【Protection】

「打ち抜けええっ!!」

【Jawohri】

桃色に光る魔法陣は、そのハンマーによる打撃を防ぐ。

その防御は長く続かず、雄叫びをあげながらのグラーファイゼンに付いているスパイク部分により薄い紙のように容易く突き破られてしまう。

そして、そのスパイクはそのままバリアジャケットにも当たり、防護服はガラスの鏡の様に割れて、解除されてしまう。

グラーファイゼンからは大きく膨大な熱が排出され、魔力が籠められていた葉莢であるカートリッジが飛び出す。

息も絶え絶えの状態でレイジングハートを構えるのはだが、そのレイジングハート

の放つ光もまた同じように弱々しいものになっている。

レイジングハートを握り、赤い少女へと向けているその腕はプルプルと小刻みに震えている。

今にもハンマーを振りかざそうとしている少女の姿はぼやけて見えてしまい、かなりのダメージを負っている事を嫌でも理解させられた。

「(こんなので終わり? 嫌だ……雄介君、志蓮君、ブロン君、ユーノ君、クロノ君、フェイトちゃん!)」

目を閉じたその瞬間、強い金属音が鳴り響く。

恐る恐る開いたその視界には、見覚えのある黒いバリアジャケットを着た金髪の少女が居た。

「ごめん。なのは……遅くなった」

「ユーノ君……?」

「仲間か……!」

罅迫り合いによる拮抗状態から、後ろに退がる事で抜け出す少女。

心優しき金の閃光は、相棒である閃光の戦斧を黒き鎌へと変形させ、掲げながら目の前に立っている赤く小さな少女に対して静かに口を開く。

[Scythe Form]

「……友達だ」

破れる結界　そして、なのはがっ！

なのは達が、赤いバリアジャケットを纏っている少女と戦っているビル街とは別の場所。

雄介は其処で得体のしれない存在と対面をしていた。

知識内、そして記憶内に存在している原作には出て来なかったものが目の前に居るのだ。

「お前も転生者なのか……?」

「……………」

「……………だんまりかよ」

軽く質問を投げ掛けてみるも耳に届いていないのか、それともただ無視をしているのか、相手は無言を貫いている。

蒼色のがつしりとした両足。

胸は深い緑色の外殻の様なもので覆われている。

両腕は大きく黒色をしていて、白い爪がやけに映えている。

肩にはスパイクの様なものが付いていて、頭部は赤い。

背中には白い羽が生えている。

身長は、目測で5 m程度もの巨軀。

その姿はまるで――

ドラゴン
「龍……いや、竜……ヒト型の飛竜か何か、か？」

口を開かない対面者に、苛立ちを隠せないでいると、目の前の竜人は姿を消した。

「――ッ!？」

天空の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーの恩恵か、空気の異様な流れを感知し、急いで身体を右へと移動させる。

自身が慣れない舞空術を使用して浮いていた場所には、姿を消していた筈の竜人が存在しており、その大きな腕を振りかざしてくる。

「つこの野郎!」

雄介は避けながら右手に炎を灯して彼へと殴りかかるが、その拳はかなり大振りなもので簡単に避けられてしまう。

「あ、あれ……う？」

相手は回避をしながらも雄介の腕を強く掴み、そのまま上から下へと向けて勢い良く投げ飛ばす。

雄介の身体は縦に回転をしながら、ビル街の間を突き抜けていく。

そのスピードはかなりのもので、衝撃波が発生して、ビルに設置されている窓ガラスを粉々に割っていく。

落ちていく無数のガラス破片が、尚も回転を続けている雄介の身体を映している。

ガラス破片はより小さなものに割れていきながら落下し、コンクリートで出来た地面へと落ちていく。

もし下にヒトや犬猫などの生物がいたとしたらそれは、死へと誘う透明な雪だと感じたかもしれない。

「痛てえ……」

雄介は、瓦礫に埋もれてしまっている自身の身体を起こして、その周りにあつたコンクリートの塊を吹き飛ばす。

そのままの勢いを保ったまま大きく両の腕を上あげて、相手に向けて大きく口を開いた。

「雷炎竜の……咆哮オオオツ!!」

大きく開かれたその口からは、膨大な熱量を誇る炎が吐出される。

そして、その炎の周囲には雷が渦巻いていた。

その電撃が付随した火炎は、上空でぼうつと浮かんでいる竜人へと真っ直ぐに飛んで行く。

「何?」

その鉄をもドロドロした状態へと簡単に溶かしてしまう炎の塊を、目の前の竜人は白く鋭い爪を使い一太刀で切り捨てたのだ。

斬られて分けられた火球は左右へと飛び、ビルに命中。

その跡には2つの大きな穴を作り出し、その周りをビリビリとした電撃が帯電している。

目の前の竜人は無言のまま雄介の方に向かい、じつとした状態で見ている。

ただ静かに、真つ直ぐな瞳で見下ろしてきている。

「強いじゃないか……」

——自分は滅竜魔導士だ。

なら、目の前の竜もどきをも倒す能力を持っている筈。

だが目の前の相手は、今の自分よりも強いだろう。

ブロンに教えて貰った舞空術は使えるが、生憎と練習はしていない。慣れていないのだ。

だが——

「——考えるだけでもウズウズと、メラメラしてくる。こういう時って何て言うんだっけ、か……? ……そうだ、あれだ。……燃えてきた」

その言葉通りに、雄介の身体は大きな炎に包まれていく。

燃え続けている炎と飛び散る火花により、周りは夜とは思えないくらいに明るく照らされて、周囲のコンクリートと鉄筋を、夏場のアイスのようにドロドロに溶かしていく。

足が付いている、接地しているコンクリートを強く蹴り、空で飛んでいる竜人へと一直線に向かっていく。

それをヒラリと、容易く躲してしまふ竜人。

だが雄介は肘から炎を噴出させ、相手の避けた先へと身体を向ける。

「——これなら!」

その握りしめた拳は見事に命中して、竜人の左腕に当たる。

「……………」

「見たか!」

だが、その無理矢理な方向転換が原因なのか身体は錐揉みをして、フラフラと不安定に飛行してしまふ。

竜人はその隙を見逃さず、腰部から伸びている二対の砲身を手で支え、雄介へと向けて魔力弾を放った。

「——うわあああ!」

2人の少女が睨み合っている。

フェイトの手にはバルディッシュが握られていて、魔力刃はビリビリと爆ぜ、結界内を照らしている。

「民間人への魔法攻撃……軽犯罪では済まない罪だ」

「なんだてめえ？ 管理局の魔導師か……？」

「……時空管理局 “囑託魔導師”、フェイト・テスタロッサ。抵抗しなければ弁護の機会が君にはある」

普段の優し気で、控え目なものとは違い、フェイトの声は低く感じられる。

正体不明の相手に対して警戒をしているのか、それとも——大事な友達である高町なのはが傷つけられた事に対して思うところがあるのか。

「同意するなら、武装を解除して——」

「——誰がするかよ！」

フェイトの進言を一考すらもせずに拒否し、赤色のゴスロリを着た少女はその場から離れていく。

「ユーノ……なのはを、お願い」

「うん」

フェイトは傷ついたなのはをユーノに任せ、逃げた少女を追いかけていく。

その2人の少女の姿は一瞬にしてなのはの目の前から消え、残されたのは横に居るユーノと力無く倒れてしまっている彼女自身だけだった。

「ユーノくん……」

なのはの呼びかけに頷きながら、ユーノは自身の持つ魔法を使い彼女の傷を癒している。

なのはのバリアジャケットは本来、重ね着の様に2重になっている。

だが、今の彼女のバリアジャケットの上の部分である白い防護服が破壊されている。

再構成されないとところから見ると、相当に大きなダメージを負ってしまった様だ。

「フェイトの裁判が終わって、皆でなのは達に連絡しようとしたんだ。そしたら、通信は繋がらないし……局の方で調べたら広域結界が出来てるし。だから、慌てて僕達が来たんだよ」

ユーノは話しながらも回復魔法を使い、なのはの傷は見る見るうちに塞がっていく。

だがダメージが大きい為に完全な回復とはいかず、なのはの顔色はまだ青く、悪い。

「そっか……ごめんね。ありがとう」

「あれは誰？　何でなのはを？」

「わかんない。急に襲ってきたの……」

「でも、もう大丈夫。フェイトも居るし、アルフも居るから」
「アルフさんも？」

「バルドイツシュ！」

【Arc Saber】

自身の相棒である戦斧を振りかざし、魔力刃を目の前に居る少女へと飛ばす。

魔力刃は大きく回転をしながら、上空に浮いている少女の方へと向かって真つ直ぐに飛んでいく。

「グラーフアイゼン！」

【Schwalbefliegen】

少女は4つの鉄球を宙へと浮かべ、ハンマー型のデバイスであるグラーフアイゼンで、その4つの弾を打ち出す。

その4つの鉄球は真つ直ぐとフェイトへと向かい、互いに出した攻撃は打つかる事無くそれぞれの術者である2人へと向かっていく。

「障壁！」

【Panzerhinderis】

少女の前に真紅に輝くバリアが展開される。

それは、回転を続けながら相手を切り裂こうとしている Arc Saber を軽々と防衛してしまう。

フェイトの方は飛んで来る4つの鉄球を回避するが、誘導弾なのか彼女に向かつて追尾をしてくる。

「——っ！」

「バリアアツ、ブレイク！」

防衛に成功した赤い服の少女に向かい、下から殴りに掛かるアルフ。

アルフの攻撃はほぼ奇襲であつたにも関わらず、防衛されてしまう。

それでも少女の想定したものよりもアルフの攻撃は強力なものだった為に、障壁を粉々に粉碎され、少女はその場から後退をする。

フェイトの方も飛来してくる4つの鉄球を誘導し、お互いをぶつけ合わせて回避に成功していた。

「——このっ！」

障壁を破られ後退をした少女は、助走を付ける様にしてアルフの方へとグラーフアイゼンを振りかざす。

アルフは障壁を張るが、少女はその障壁ごとアルフを勢い良く吹き飛ばす。

「——んっ！」

【P f e r d e】

少女の両足が魔力の渦巻で包み込まれ、フェイトの攻撃を高速で回避する。

そこにアルフが少女の脚へとBindを、Ring Bindを使い、動きを封じようとするが、それすらも避ける。

だが少し掠っていたのか、P f e r d eは解除される。

「はああああっ!!」

勢い良くバルディッシュを振りかざして攻撃を試みるが、少女はバルディッシュに発生している魔力刃では無くて柄の部分とグラーファイゼンの柄をぶつけてそれを防御してみせた。

防御されたが、フェイトは力を入れてバルディッシュで相手のデバイスを押し、動きを封じようとする。

「アルフさんも来てくれたんだ」

「クロノ達もアースラの整備を一旦保留にして、動いてくれるよ」

なのはとユーノはビルの屋上で、フェイト達の戦鬪を観ている。

彼は兎も角として、今の彼女にはそうする事しか出来なかった。

「アレックス……結界の解析、まだ出来ない？」

「解析完了まで、あと少し」

アースラ艦橋に存在する空間モニターは、テレビが出す事のある砂嵐の様な音を鳴らしながら、彼等の知識には無い言語を映し出している。

エイミー・リミエツタを始め、艦橋内で解析作業をしている局員達には緊張と焦りを感じ、ややヒステリック気味な声をあげながらも、もう一つのモニターに映しだされている少女達のサポートの為に作業を続けていく。

だが、その作業の進行度は芳しく無い。

こうしている間にも、なのはを助けに行ったフェイト達は苦戦をしているかもしれない。

「術式が違う、『ミッドチルダ式』の結界じゃ無いな……」

「そうなんだよ……何処の魔法だろう、これ？」

リンディ・ハラオウンやクロノ・ハラオウンはモニターを睨み付けている。

彼等に出来る事は、直ぐに解析が終了して、戦っている少女等の援軍を送る事が出来る様になるのを待つ事だけだ。

彼女等にはそれが歯痒く感じられていた。

そんな彼等の中で、ゾイルー人は静かに、落ち着いた感じで、未だ音も映像も乱れて

いるモニターを見詰めている。

この先にどの様な事が起きるのかを理解しているかの様だ。

「これも君の知っている通りの展開なのか、ゾイル？」

「ああ、そうだ。だが、少し可怪しい」

「何が可怪しいの？」

作業が完了するのを待ち、見守りながら、リンディはゾイルの言葉に対して質問をする。

「フェイトとなのは達が向き合って、やり合っている相手に問題は無い。だが、問題は雄介の方だ……転生者の可能性が大きい」

今のゾイルの頭には、戦闘をしている雄介と同様の疑問と考えが浮かび、支配していた。

「これはフェイトの気と魔力か……？ アルフとユーノも……。そうか、来た……来てくれたのか。これなら」

戦闘に参加をする事無く、俺は自宅で彼女等の戦いの様子を魔力と気の増減加減で想像していた。勿論魔力と気を最小限に抑えてだが。

そうしないと、相手側に仲間が居て、その仲間が此方に来る可能性が存在しているか

らだ。

——今直ぐにでも瞬間移動を使用して、戦闘をしている彼女等の元へと駆けつけ、サポートをしたい。

そんな気持ちではち切れそうではあるが、シエンの言葉を思い出して、何とか踏み留まる事が出来ている。

下手に介入をすると何が起きるのか分からない。

藪をつついて蛇が出て来るかもしれない。

それどころか全く別の、大きなヒト喰い狼を起こしたり、稀少古代種が出て来て暴れてしまう程の危険性があるのだ。

「だが、雄介の方は……相手の方がかなりのやり手の様だ。今の俺は参加出来ない……頼む、頑張ってくれ」

俺はただただ目を閉じて、祈る事しか出来なかった。

出来る限り何事も起きず、最低限の被害で済み、皆が無事で居る様にと。

そして、申し訳ないという気持ちもまた浮かんで来る。

この先に起きるであろう事を、人的被害を、更に先の出来事の為に見逃そうとしているのだから。

空中での戦闘を続けている少女達。

金色と赤とオレンジの光が線を引きながら度々ぶつかっては離れてを繰り返している。

遠くから見るとそれは、まるで小さな花火が上がっている様に思えるだろうか。

「ハのっ！」

赤い服の少女は、ハンマーを振りかざしてフェイトへと攻撃を試みるが、アルフの魔法で動きを阻害され、少女は空中で動きを止められてしまう。

アルフの魔法の効果で少女の両脚、両腕に Ring Bind が発生して完全に動きを封じられる。

脱出しようと軽く藻掻いてはみるが、強固なつくりと複雑なプログラムで成り立っている魔法なのか、魔法を解除して脱出をする事に苦戦してしまう。

「終わりだね……名前と出身世界、目的を教えて貰うよ」

動きを封じる事に成功したフェイト達は、目の前の少女へと質問を開始しようとする。

だが、少女は身体に力を入れると同時に、体内の魔力を徐々に増大させていく。

「何かヤバイよ……フェイト！」

「——っ！ うわあっ！」

突如、下の方から別の人物が登場して、フェイトへと攻撃をする。

フェイトは咄嗟の判断で、バルディッシュの柄の部分で防御をし、相手の攻撃により発生した大きな反動に抵抗をせずに後退をする。

「シグナム？」

「うおおおおおっ！」

アルフの方もまた、別の人物による攻撃を防御する。

最初の攻撃である左側への攻撃を防ぐのに成功するが、次いで足の足による攻撃は防御出来ず、脇腹に当たって吹き飛ばされてしまう。

「レヴァンティン、カートリッジロード」

【Explosion】

フェイトを吹き飛ばした女性が手にしている剣型のデバイスから葉莖の様なものが、カートリッジが噴出される。

其れと同時に、彼女の魔力が、デバイスから放たれている魔力が一気に増大する。

剣の刀身は膨大な熱の魔力で出来た炎を纏っていて、チリチリと火花を周囲に撒き散らしている。

「紫電一閃！　はああああっ！」

「——あ!?!」

剣を振るう女性の攻撃を相棒であるバルディッシュの柄の部分で防御するが、相手の女性が使用しているデバイスの切れ味が鋭く、バルディッシュは綺麗に真つ二つになつてしまう。

〔Defensor〕

自身の主であるフェイトへの攻撃を、自律思考で防御魔法を発動させて守るバルディッシュ。

だが、完全な防御をするという事は出来ず、大きな爆発を起こしながらフェイトは吹き飛ばされてしまう。

「フェイトツ!!」

アルフは飛ばされてしまったフェイトの身を案じ彼女の元へと行こうとするが、もう一人の介入者である男性に行く手を阻まれてしまう。

「こんのおつ……」

「フェイトちゃん……アルフさん……」

「不味い……。助けなきや! 妙なる響き、光となれ、癒しの円のその内に、鋼の守りを与えたまえ」

「え!?!」

「回復と防御の結界。なのはは絶対……此処から出ないでね」
「うん」

なのはを中心にして、ユーノは印を結び、高位結界魔法である Round Guard
der Extendを展開する。

確認の為に出した言葉に対し彼女が頷いたのを見届けると、ユーノは上空で戦闘をしているフェイト達の元へと移動する。

「『熾^ロ天^イ覆^アう七^スつの円環^{!!}』」

無数の魔力弾を、光の盾が塞いでいる。

その盾には花の花弁の様なものが付いていて、数十発もの魔力弾を受ける度に1枚ずつ剥がれていく。

「し、志蓮!?!」

「何してるんだよ……」

「お前……」

雄介の前へと立ち、志蓮は防御を続けていく。

花弁の枚数も少なくあと2枚となり、撃ち続けられている魔力弾による衝撃で自身の意志とは関係無く後退してしまう。

「……………」

「わかつてるさ……滅竜奥義・改 紅蓮爆雷刃っ!!」

雄介の右手には炎が、左手には雷が纏っていて、そのまま目の前の竜人へと一撃を放つ。

その攻撃は見事に命中し、竜人の身体を燃やし、炎と雷で灼いていく。

そして、それらが爆発をして大きな煙が発生した。

「やったか……?」

「バカ野郎! フラグを建て」

攻撃は直撃し、大きな煙がモウモウと立ち籠めている。

だがその煙の中から雄介の放ったもとは別の電撃が飛んで来た。

「——うわあああああっ!!」

余りの速さに、雄介はその電撃を飲み自身の力に変換する余裕も無く、彼等は回避を選択する事しか出来ない。

そして煙が晴れる前にその中から別の攻撃が、白く鋭い爪がワイヤー状に伸びて、雄介と志蓮へと向かっていく。

それは彼等の身体に絡まり、動きを封じてしまった。

「クソツ……何だよ、これ?」

「抜け出せねえ……」

抜け出そうと足掻けば足掻く程にそれは身体に食い込んでいき、煙が晴れると同時に竜人は、その爪を振り回して、ワイヤーを解除する。

当然だが雄介達の身体も一緒に振り回され、コンクリートで出来たビルの中を通り、それらを打ち抜き、砕きながら飛んでいく。

「どうしたヴィータ……油断でもしたか?」

「うるせえよ!　こっから逆転するよこだったんだ!」

紅い服を着た少女ヴィータは、シグナムに対し不貞腐れた様な声を出しながら顔を背ける。

シグナム達の助力により必要が無くなったのか、ヴィータが先程出していた大きな魔力は既に収まり、消えていた。

「そうか……それは邪魔したな。すまなかった」

ヴィータの態度に対しシグナムは落ち着いた様子で対応をし、彼女の動きを封じている Ring Bind を解除する。

「だがあんまり無茶はするな。お前が怪我でもしたら、我らが主が心配する」

「わーってるよ……」

シグナムと呼ばれた女性。

彼女はピンク色の髪でロングストレートのポニーテールをしている。

彼女の手には剣型のデバイスであるレヴァンティンが握られていて、凛々しく、若く強い女騎士の様な印象を与えてくる。

「それから、落とし物だ……破損は直しておいたぞ」

「……ありがとう、シグナム」

シグナムは、ヴィータの頭の上にポンつといった感じに「のろいうさぎ」の人形が付いている赤い帽子を置く。

それは、なのはの魔力砲撃により吹き飛ばされてしまったものだ。

「状況は実質3対3……1対1なら我ら「ベルカの騎士」に——」

「負けは無え！」

その言葉と共に彼女等は戦闘をしているフェイト達の方へと向かう。

だがその途中、ヴィータは自身の持ち物を確かめる。

「——あれ!? 闇の書が……無い!」

確かに持つて来て、先程まではあったのだ。

だが、今の彼女の手にはそれが、あるべき筈のものが無かった。

「大丈夫?」

「うん。ありがとう、ユーノ」

「バルディツシユも……」

崩れたビルの中、ユーノはフェイトのそこへの移動を完了し、彼女の身を案じる。

だが、怪我という怪我はしてはおらず、何故かほぼほ無傷だと言つても良いくらいだった。

「大丈夫。本体は無事……」

上と下に、真つ二つに斬られてしまった相棒を手に取り、金色の宝石部分を見、安堵をするフェイト。

【Recovery】

フェイトの言葉に応える様に、バルディツシユは自身の修復を開始と同時に完了させる。

上と下へと真つ二つに斬られたが、上の部分の方が下の部分をつくりだし、修復される。

下の部分の方は、放置ではあるが。

「ユーノ……この結界内から全員同時に外に転送……いける?」

「うん。アルフと協力できれば……なんとか」

「私が前に出るから、その間にやってみてくれる？」

「わかった」

『アルフも良い……？』

『ちよつとキツイけど、なんとかするよ』

アルフと戦っているのは、白い髪で青を基調とした“防護甲冑”を着た筋骨隆々とした青年だ。

彼もまた、アルフと同様に頭部に動物の耳の様なものが付いている。

彼もまた、何かの動物を素体にした使い魔なのだろうか。

【Photon lancer】

フェイトの周囲に、金色に光り輝く4つの魔力弾が形成される。

「レヴァンティン、私の甲冑を……」

【Panzergeist!】

シグナムの身体から大きな魔力が滲み出ている。

それはまるで鎧の様であり、魔力自体が服の様に彼女を覆っている。

「撃ち抜け、ファイアツ！」

4つの魔力弾が一直線にシグナムへと飛んでいく。

だが彼女はピクリとも動かずただ目を瞑るだけで、回避も防御もしようとはしない。魔力弾は見事に命中、直撃をするが、真つ直ぐに当たる事は無く、それはそれぞれ別の方向へと逸れ、弾き飛ばされていく。

「——っ!？」

「魔導師にしては悪く無いセンスだ。だが、ベルカの騎士に1対1を挑むには……まだ足りん！」

一瞬にしてシグナムはフェイトの目の前から消える。

彼女は右から直進、そして左折をしてフェイトへとレヴァンティンで斬り掛かる。

フェイトはその攻撃をDefenserで防ぐが、シグナムの斬撃は強い。そもそもDefenserは攻撃を防御するのでは無く、逸らす事が目的のものだ。真正面から受けたその攻撃で、障壁は紙の様に容易く破られる。

「っ……」

「はあああっ！」

障壁は破られたが柄の部分で攻撃を防御する。

今度は先程よりも高魔力でのコーティングをしているので簡単には斬られない。

お互いにそれぞれの得物に力を込め、反動によって大きく後ろへと退がる。

レヴァンティンにより、カートリッジがロードされる。

「レヴァンティン、叩き斬れ！」

〔Jawohl〕

再度のシグナムの攻撃がフェイトへと向かう。

バルディッシュの柄で受けるが、炎を纏っている刀身から繰り出される斬撃は更に強力なものになっていて、バルディッシュに大きなダメージを与える。

そのまま耐える事が出来ず、フェイトは背後に存在しているビルへと吹き飛ばされてしまう。

「はあああああつ！」

「——ッ！」

グラーフアイゼンを使いユーノへと殴りかかるヴィータ。

ユーノの方もそれに対し防御魔を使用し、それと同時に結界の外への転送の準備に取り掛かる。

『転送の準備は出来てるけど、空間結界を破れない……アルフ！』

『こつちもやってんだけど、この結界滅茶苦茶硬いんだよー!』

アルフは動物形態へと姿を変えていて、相手の方もまた同じく動物形態をしている。青年の今の姿からすると、アルフと同じ狼を素体にしたものだろう。

跳び掛かり、脚や爪での攻撃、牙で噛み付くなどを試みてはみるが、お互いの攻撃は当たる事が無く、牽制として行なっている様なものだ。

【Nachladen】

レヴァンティンに新しいカートリッジが装填される。

「あれだ……あの弾丸……あれで一時的に魔力を高めてるんだ!」

「終わりか?　ならばじつとしていろ、抵抗しなければ命まではとらん!」

「誰が!」

ふらつく身体を立たせ、フェイトは上空に居るシグナムに相対する様に宙を飛ぶ。

その様子に感じるものがあつたのか、シグナムはレヴァンティンを構え直す。

「良い気迫だ。私はベルカの騎士、ヴオルケンリッター」が将、シグナム……そして我が剣、レヴァンティン。お前の名は?」

「ミッドチルダの魔導師、時空管理局囑託、フェイト・テストアロツサ……この子はバルドイツシュ」

「テストアロツサ、それにバルディッシュユか」

「助けなきや……私が、皆を助けなきや!」

上空では戦闘が繰り広げられており、それぞれの特徴を現す魔力光が光り、それが軌跡を描いて激しく明滅を繰り返している。

そんな状況に、ただじつとしているという事は高町なのはには出来なかった。

ダメージが大きいからなのか、少し動くだけでも身体に鈍く強い痛みが疾走る。

【Master, Shooting Mode, acceleration】

「……っ!」

なのはの意志に応える様に、レイジングハートは桃色に光る魔力翼を展開する。

レイジングハートのその行動は彼女を、彼女の行動を後押しするかの様だ。

「レイジングハート……?」

【Let's shoot it, Starlight Breaker!】

「そんな……無理だよ、そんな状態じゃ!」

【I can be shot】

「あんな負担の掛かる魔法。レイジングハートが壊れちゃうよ!」

【I believe master. Trust me, my master】

「……………。レイジングハートが私を信じてくれるなら、私も信じるよ」

レイジングハートの播るがぬ決意に、主を信じる心になのはもまた同じく決意をする。

そして彼女は、ユーノに言われた結界の外へと身を乗り出す。

レイジングハートを空へと掲げ、彼女の目の前には大きな魔法陣が展開される。

結界の外に出たからなのか、Starlight Breakerを撃つ際に発生する効果によるものか。Round Guarder Extendは打ち消され、解除されてしまう。

『フェイトちゃん……………ユーノ君……………アルフさん、私が結界を壊すからタイミグを合わせて転送を!』

『なのは!』

『なのは、大丈夫なのかい?』

『……………』

『大丈夫!　スターライトブレイカーで撃ち抜くから!』

アルフを始め、心配をしてくれる皆に応える為に。

レイジングハートを握り締める力が強くなる。

「レイジングハート、カウントを!」

【All right, Count nine, eight, seven, six, five, four……】

「あの魔力……」

「結界を壊す気か」

収束されていく魔力に、ヴォルケンリッターが気付く。

だが、妨害をさせまいと、フェイト達は目の前の相手に執拗に、自分に釘付けになる様に必死に攻撃をしていく。

【Three, three, three……】

傷の入ったCDを読み込むオーディオ機器の様に、壊れたラジオの様に同じ数字を数えてしまうレイジングハート。

レイジングハートにも大きなダメージが存在し、蓄積されているのだ。

「レイジングハート、大丈夫？」

【No problem. Count three, two, one……】

持ち直し、再びカウントの続きを始めるレイジングハート。

「うわあああああああああつ!!」

「[[[」——!?!?」

「[[[………」

なのはとレイジングハートが結界の破壊をする為に Starlight Brea
kerのチャージをするなか。

雄介と志蓮の2人がなのはの後ろを勢い良く飛んで行く。

そんな2人を追いかけて来る竜人。

だが、竜人は結界を壊そうとしているなのはに標的を変え攻撃の体勢に入る。

「——させるかあああああつ!!!」

なのはの背後へと巨大な爆炎の球が、黒と白の二振りの短剣が飛んでいく。

それが、竜人の放った電撃を相殺し、彼女を爆風で煽りながらも、直撃コースの攻撃を防いだ。

「今だっ」

「撃てえーっ!」

だが、更に彼女の砲撃を妨害する出来事が起きる。

腕だ。

ヒトの腕が、なのはの身体を貫いていた。

その手のなかには、桃色に、ピンクに光り輝いている小さな球体が浮かんでいる。

その球体から大きな魔力が発せられている。

そこから導き出されるのは、それが高町なのはのリンカーコアだという事だろう。

その光景は異常であり、非情であり、見ているだけでも非常に痛いものだ。受けているなのは自身が感じている痛みは、それ以上に酷いものだろう。

「……………」

「なのはーっ!」

フェイトは、謎の魔法の対象になっている親友の元へと駆け付けようとするが、シグナムがそれを阻む様にして立ち塞がる。

「リンカーコア、捕獲。収集開始!」

【Sammlung】

なのは達の居る場所とは、遠く離れ、それでいて彼女等全員を視界に入れる事が出来る場所。其処に緑色の“騎士甲冑”を着た女性が1人居た。

その女性の言葉と共に、なのはの身体を貫通している手の内にある魔力球が小さくなっていく。

そして、それが小さくなっていくと同時に、書物型のデバイスである闇の書に文字が自動的に記載されていく。

【Count zero】

「スターライト……」

大きな傷みを感じながら、自身の身体に起きている不可思議であり、可怪しな現象に驚きと恐怖、そして痛みを感じながら、なのははレイジングハートを振りかざす。

「——ブレイカアアアアーツツ!!!」

レイジングハートが振られると同時に、宙に浮かび待機していた大きな魔力球は高速で空へと放たれ、強固なつくりである結界を破壊した。

歴戦の勇士ギル・グレアム登場　これからに向けての 準備

「結界、破れました!」

「映像、来ます!」

次元空間のなかで待機を続けている次元航行艦アースラ。

そのブリッジで謎の術式により組まれている結界の解析と解除を試みてはいたが、なかなか破れずに作業を続けていたクルー一同だったが、突然にその結界が破れた事により驚愕の声を上げる。

砂嵐の様な音を立てながら乱れていた画面はしっかりともの映す様になり、そのモニターには戦闘をしている少女等の姿があった。

「な、何これ? どういう状況?」

リンディや他の局員が居る艦橋とは別の、違う部屋で解析作業を続けていたエイミィは結界が解除された事に一安心をする。

だが、映しだされた映像によってその安心した心は一気に反転してしまう。

モニターには先程まで一緒に居た少女等、フェイト、アルフ、ユーノが映っている。そしてなのはと雄介、志蓮の姿も、だ。

そして、其処には自分達の見知らぬ者達の姿も同時に捉えていた。

「——これは!? こいつら……」

その映像を見て、クロノの目が細くなる。

なのはの身体を貫いていた腕と、その手の上で浮かんでいた桃色に光る魔力の塊が消える。

肉体的にも精神的にも大きくダメージを受け、疲労をしていたなのははレイジングハートを手放す。そして軽く音を立てながら倒れ、そのまま意識を失ってしまった。

「なのは!!」

目の前のシグナムの横を過ぎ、倒れたなのはの元へと急ぐフェイト。

そんな彼女の邪魔をする事も無く、シグナムを始めとしたヴォルケンリッター達は撤退の準備を始める。

「——ああ、逃げる! ロック急いで! 転送の足跡を!」

カタカタと急いでキーボードを叩きながら、逃げていくヴォルケンリッターを追いか

けていく。

《やってます!》

「——あれは……!」

逃げていく彼等を捕捉しようとするなかで、モニターには彼等のうちの1人が映し出される。

そして彼女が所持している一冊の魔導書を見て、クロノは思わず大きな声を出してしまふ。

《駄目です! ロックが外れました……》

「ああ……もうっ! ごめん、クロノ君……しくじった……クロノ君?」

逃げるヴォルケンリッターを追いかけようとするが彼等の方が上手なのか、多重転移を、転移魔法での移動を繰り返しているのか取り逃がしてしまう。

逃してしまった事に謝罪をするエイミイだが、クロノは真っ直ぐとモニターを見つめていて反応を返さない。

「第一級搜索指定遺失物、ロストログア、闇の書……」

「クロノ君……知ってるの?」

「……ああ、知ってる。少しばかり嫌な因縁があるんだ」

そう言ってクロノは自分でも気付かないまま手を強く握り占めていた。

「……………」

ゾイルは静かに腕を組みながら口を閉じ、彼等のその様子を見つめていた。

12月2日午後8時45分。

「検査の結果……怪我は大した事無いみたいです。……ただ、魔導師の力の源——リンカーコアが異様な程小さくなってらんです」

「そう。じゃあやっぱり一連の事件と同じ流れね」

「はい、間違いないみたいです。」

エレベーターの中で、報告を受けているリンデイ。

報告をしているエイミイも同じだが、リンデイも酷く疲れているのが見て取れる。

戦闘で傷ついて気を失い倒れてしまったのはを回収し、アースラは時空管理局の本局へと戻っていた。

本局にある医療機器での診断の結果、エイミイの報告通りになのはの持つリンカーコアが著しく小さくなってしまっている。

だが、小さくなっているというだけであり、命には何の問題も無い。時間が経過すれば彼女の意識が回復し、リンカーコアも元の大きさに戻るだろう。

「……休暇は延期ですかね。流れ的にうちが担当になっちゃいそうですし」

「仕方ないわ。そういうお仕事だもの」

「いや、君の怪我も軽くて良かった」

「クロノ……ごめんね、心配かけて」

「君となのは達で、もう慣れた。気にするな」

フェイトの怪我は酷くは無く、消毒をして包帯を巻く……そして回復作用のある魔法を掛けるというだけで塞がる程度のものであった。

エリクサーと呼ばれる万能薬も存在はしているが、なるべく使わない方向でとアースラスタツフ一同となのは達の間で相談し、決めていた。

副作用なども無く便利ではあるのだが、迂闊に使用してしまえば、管理局上層部に知られてしまう可能性があるからだ。

上層部で転生者などの存在を認識している人物はかなり限られている。

そしてもし、迂闊に知られてしまえばどうなるか。

何事も無い事を祈るよりも、そういった情報が漏れ出ないように、バレないようにと
する方が良いだろう。

「それにしても、何故君は来なかったんだ？」

「そ、それは……」

フェイトの治療を済ませ廊下を歩きながら、クロノは俺に対して質問をしてくる。

実際のところはそうでもないのかもしれないが、その言葉には刺が、そしてその目が俺を非難している、強く責め立てている様に感じられる。

「今回の相手は魔力を募集する……俺にとってそれは、どうしても避けたい事なんだ」
「……そうか」

リンカーコアにはその所持者が使った事のある魔法が記録されている。

闇の書の募集はリンカーコアを、魔力を募集するのだ。その際に、身体の外にリンカーコアが出る。

そしてその募集をする事で、リンカーコアに記録されている魔法のプログラムが闇の書に記載され、更に闇の書の主はその募集した魔法の使い方を知り、それを行使する事が出来る様になるのだ。

もし俺が募集されてしまえばどうなるのか。

攻撃やサポートの為の魔法などは使用した事などが無いから特にこれと言って問題は無いだろう。

だが、募集される際にリンカーコアが露出する。そして虹色の魔力光が見られてしまう。う。

それにより、俺が聖王の、彼女のクローンであるという事が知られてしまうのだ。

「——にしても、お前が急に家に来た時は驚いたぞ。手伝って貰うなんて言っ来て」
「今回の事件は、この前のものと同等……いや、其れ以上の規模に成るかもしれないからな。どうか力を貸して欲しい」

「と言うか、そうせざるを得なくなるだろうな。ハハッ」

逃げる様にして話を切り替える。

これ以上、深く追求されるのは此方としては困るのだ。

なのはの氣と魔力が小さくなり、ヴォルケンリッターが逃げた直後にクロノと志蓮が訪ねてきたのだ。

志蓮の方は前世での知識があるから問題は無かったが、クロノの方は大分と焦り、何か複雑な気持ちを抱いている様な表情をしていた様に感じた。

「其れにしても、慌て過ぎだったよ。あの時のお前は」

「仕方無いだろう、君の方でも何か問題が起きなんじゃないのかって思っ……」

「ありがとな、心配してくれて」

「——べ、別に心配している訳じゃ……」

素直にお礼を言うが、クロノはそれに対して顔をひどく紅くする。

どうやらクロノは真っ直ぐにお礼を言われるという事に耐性が無い様だ。

「うん。流石若いね、もうリンカーコアの回復が始まっている。ただ、暫くは殆ど魔法は使えないから、気をつけるんだよ」

意識が回復すると同時に、なのはは担当の医者による体内に存在するリンカーコアの検査を受けていた。

彼の言っている通りに、彼女のリンカーコアは回復へと向かって大きくなってきている。だが、現段階では殆どの魔法が使えず、使用が出来るのは初歩的なものである身体能力の強化や念話などくらいだろうか。

「はい、有難う御座います」

なのはの検査が終了すると同時に、ドアが開いてフェイトとクロノ、そしてゾイルと俺を含めた4人が部屋に顔を覗かせる。

医者は執務官であるクロノとゾイルに用件があり俺達に聞かれたくないのか彼等は別の場所へと移動していった。

「ああ。ハラオウン執務官、ゾイル特務執務官、ちよつと宜しいでしょうか?」

「はい、何でしょう?」

「こちらへ」

「わかった……」

「フェイトちゃん……」

「なのは……」

お互いに暗い表情をしているが、それも一瞬で消え失せて笑顔になる2人の少女。

「あの、ごめんね。折角の再会がこんなで。怪我、大丈夫？」

「ううん……こんなの全然。それより、なのはは？」

「私も平気。フェイトちゃん達のおかげだよ！ 元氣元氣！」

気丈に、そして相手に心配をさせまいと振る舞う2人。

その言葉、そしてその姿は見聞きしている俺の心に重くのしかかって来るものがある。

あんな体験をしてしまい、それがトラウマにならない方が可怪しい筈なのに。

そんな素振りを見せる事も無く、なのはは再会した事に対して大きく喜び振る舞う。

「フェイトちゃん……？ フェイトちゃ——っ！」

「——なのは！」

それでも暗い顔をしているフェイトに対し、なのははベッドから降りて近づこうとする。

だが病み上がりだという事もあり体勢を崩してしまうが、フェイトが直ぐに抱きとめる。

「ごめんね。まだちょっとフラフラ」

「うん……」

「助けてくれて有り難う、フェイトちゃん。それから、また逢えて凄い嬉しいよ」

「うん……私も……なのはに逢えて嬉しい」

互いの無事を確認するかの様にして抱き合う2人を見て、俺は静かに部屋を出た。

「どうして……」

どうしてあんな笑顔を見せる事が出来るのだろうか。

今の僕には理解出来ない。

「もし俺が……もし俺があの時ちゃんと居れば……。もし俺がなのはと同じ様な目に合ってしまったら……」

もしとか、たらとか、ればとか……。

そんな事を考えても限が無く、際限無く頭の中に湧き出て来るだろう。

「……強いな、ほんとうに……」

「行くぞ、ブロン」

「……ああ」

医者との会話を終えたゾイルが此方に話し掛け、その言葉に従って後を追いかける。

今の僕には、周りにある全てのものがいつもよりもとても大きく、遥か遠くのものに

感じられた。

医務室から出てメンテナンスルームに入ると、其処には映しだされているキーボードをうっているユーノ、そしてアルフと雄介、志蓮、ドゥームが居た。

彼等の前には特殊なポッドが存在していて、傷ついてしまった魔導の杖達——レイジングハートとバルディッシュがその中で修復を受けている。

「——あつ！」

「なのは！ フェイト！」

その後直ぐに、なのはとフェイトも入室をして来る。

「ユーノ君！ アルフさん！」

「なのは、久し振り！」

「なのは」

「皆、久し振り！」

無事に再会が出来た事に感謝をし、再び笑顔を見せるなのは。

ユーノとアルフも無事であり、そして元気な様だ。

「バルディッシュ……ごめんね。私の力不足で」

「破損状況は？」

「正直、あんまり良く無い。今は自動修復を掛けてるけど……基礎構造の修復が済んだら、一度再起動して、部品交換とかしないと」

「そうか」

ユーノの報告に対してクロノの応える声は重苦しいもののように感じられる。

修復作業に入っている自身の相棒を見て、なのはとフェイトの顔に陰りが出る。

雄介と志蓮もまた戦闘時の事を思い出しているのか、苦虫を噛み潰した様な顔をしている。

「ねえ、そう言えばさ……あの連中の魔法って何か変じゃなかった？」

「あれは多分、『ベルカ式』だ」

「ベルカ式？」

聞き慣れない言葉に、アルフは聞き返す。

「その昔、『ミッド式』と魔法勢力を二分した魔法体系だよ」

「遠距離や広範囲攻撃は、ある程度度外視して対人戦闘に特化した魔法で、優れた術者は騎士と呼ばれる」

「確かに……あの人、ベルカの騎士って言った」

思い出すのは剣を手にしたポニーテールの騎士。

フェイトは彼女の言葉と実力を思い出す。

「最大の特徴はデバイスに組み込まれた“カートリッジシステム”って呼ばれる武装儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで、瞬間で気に爆発的な破壊力を得る」

「危険で、物騒な代物だな」

「成る程ね……」

「いっぱい頑張ってくれてありがとうとね、レイジンググハート。今はゆっくり休んでね」
『だが、あの竜人は何だ？ 魔法を使っただけで魔法陣が出てないし、カートリッジを使った痕跡も……』

『確かに、な……彼奴は、奴は一体……転生者であるという事は予想出来るけど……』

雄介と志蓮は、自分達が相手をしていた竜人の姿を思い出す。

竜の様にガツシリとした身体をしていて、羽虫の様に素早い挙動をしていた。

そして、攻撃をしてくる際に発生するであろう筈の魔法陣が出ていなかったのだ。

『魔法陣の出ない特殊な魔法なのか……それとも、レアスキルか』

『はたまた、俺達同様に特典によるものか……』

『ブロンはどう思う？』

『さてな。其奴を実際に見てみないと理解らない』

雄介と志蓮の話の聴く限りでは思い当たるものが幾つか存在している。

だが、確証が無い為に言葉に出した通りに目で確かめるしか無いのだ。

「フェイト……そろそろ面接の時間だ」

「うん……」

「なのは……それに君達も。ちよつと良いか？」

「ユーノ君、アルフ……」

「エイミィ」

自動修復機能を使っている為に、そしてなのは達が行ってしまった為に特にする事が無くなってしまったユーノとアルフ。

2人は休憩として自販機で買った缶ジュースを飲もうとするその時、後から聞き覚えのある声を耳にする。

「レイジングハートとバルディッシュの部品、さつき発注してきたよ！ 今日明日中には揃えてくれるって」

「有難う御座います」

「でね……さつき、正式に今回の件がうちの担当になったの」

「え？ でもアースラは今、整備中じゃあ？」

「そうなんだよね……」

上司であるリンディとの会話の時に予想していた通りの結果になってしまう。

事件が起きている現場に急行し、その犯行をしている人物を実際に目の当たりにしたのだからそうなっても仕方が無いかもしれないだろう。

だが、アルフの言う通りアースラは今整備を受けている最中だ。

実際に捜査を行うのだとしたら、現場で急造の前線基地の様なものをつくり、整備が終わるのを待ちながら、少人数で行動しなければならぬだろう。

「あ！ そうだ、クロノ君知らない？」

「なのはとフェイトと雄介達と一緒に面接だつて」

「何か、管理局の偉人だそうですね」

「へええ」

「失礼します」

「クロノ、久し振りだね。ゾイル特務執務官殿も、お久しぶりです」

「ご無沙汰しています」

「ああ」

応接室の自動ドアが開き、俺達はクロノとゾイルの金魚のフンの様に後ろを付いて行く。

目の前には男性が1人立っている。

此方に気づくと同時に彼は、俺達に椅子に座るように促し、人数分の紅茶を用意し始めた。

「『保護観察官』と言っても。まあ形だけだよ。リンデイ提督からは先の事件や君の手柄についても聞かされたしね。とても優しい娘だと」

「有難う御座います」

男性の言葉に、フエイトは下を向き、照れながら礼を述べる。

「グレアム提督はクロノ君の指導教官だった人なんだよ。『歴戦の勇士』……1番出世してた時で艦隊指揮官、後に執務官長だったかな」

「滅茶苦茶偉い人じゃん！」

エイミイはカタカタとキーボードを叩きながらクロノ達が会っているであろう人の説明をしていく。

その人物説明に、アルフは思わず大きな声を出して驚いてしまう。

「うん。でも良い人だよ。優しいし」

「なのは君、雄介君に志蓮君、そして歩栄君は日本人なんだね。……懐かしいなあ、日本

の風景は」

「え？」

「私も君達と同じ世界の出身だよ、イギリス人だ」

「え!!? そうなんですか？」

「あの世界の人間の殆どは魔力を持たないが、稀にいるんだよ。君達や私みたいに高い魔力資質を持つ者が。魔法との出会い方までそっくりだ」

目の前で喋っている男性——ギル・グレアムは目を細め、昔を懐かしみながら言葉を続けていく。

「私の場合は、助けたのは管理局の魔導師だったんだけどね。もう50年以上も前の話だよ」

助けた相手は違うが、その経緯の殆どが似通っている事を知り、なのはは思わず口を開けて驚いてしまっている。

「フェイト君、そしてドウム君、君はなのは君達の友達なんだね？」

「はい……」

「約束して欲しい事は一つだけだ。友達や自分を信頼してくれている人の事は決して裏切つてはいけない……それが出来るなら、私は君達の行動について何も制限しない事を約束するよ。出来るかね？」

「はい、必ず」

「うん、良い返事だ。まあ、この事はフェイト君とドウム君だけでは無く、君達にも当て嵌る事なんだけどね」

フェイト達兄妹へと確認をしながら、グレアムは俺達へと視線を向けながら口にする。

彼の言葉は、俺達へ向けてのものだと同時に、自身に対してのものでもある様に感じさせる。

俺は出されていた紅茶を飲み、なのは達と退出をする。

「提督、もうお聞きかもしれませんが、先程、自分達がロストログア闇の書の搜索捜査担当に決定しました」

「そうか。君達が、か……言えた義理でも無いかもしれんが、無理はするなよ」

「大丈夫です。急事にこそ、冷静さが最大の友。提督の教え通りです」

「そうだったな」

「では……」

クロノは報告を済ませ、軽く会釈をすると同時に部屋を出、その場を後にした。

部屋には、俺達を見送ったグレアムと、冷えてしまった紅茶の入ったティーカップが8人分と、空になったティーカップ一つが机に置かれているだけだった。

「親子って、リンディさんとフェイトちゃんとドウームさんが？」

「そう、まだ本決まりじゃ無いんだけどね。養子縁組の話をしてるんだって」

上昇が続いているエレベーターの中でのなのはと雄介、そしてエイミイはテストロッサ兄妹とハラオウン親子についての話をしていた。

「『プレシア事件』でフェイトちゃんとドウーム君……親が居なくなっちゃったし」

プレシア事件——『プレシア・テストロッサ事件』。略称は『PT事件』。

フェイトとドウームの親であるプレシア・テストロッサが起こした事件の名称だ。

次元震を起こして、次元空間の先にあるというアルハザードへと向かう。そして、実際の娘であり、ドウームとフェイトの姉に当たるアリシア・テストロッサを蘇生させる為に起こしたものの。

表向きは、だ。

実際のところは、外道衆と呼ばれる謎の集団に属しているアカマタと自称した存在により煽動され、行動を起こした。

まあ、この事は上層部の人間であったとしても知っている人物は少ない。

そしてまだ、虚数空間に落ちて行ってしまったプレシアとアリシアの遺体は見つかっていない。

「艦長の方から、家の子になる？　って。フェイトちゃん達もプレシアの事とかいろいろあるし……今は気持ちの整理がつくのを待ってる状態かな。なのはちゃん的にはどう？」

「うんつと……何だか凄く良いと思います」

「そっか！　雄介君は？」

「別に問題は無いと思いますよ。後ろに誰かが付いてくれているというだけでも安心が出来るものですし……家族というのは、大事だと思います」

「でも、そうするとクロノ君……お兄ちゃんですね——フェイトちゃんの」

「そうそう。でも結構気が合うみたいだし、案外良い感じの兄妹かも」

「（流れるには原作通りかな……ドゥームはフェイトの兄だ。だけど、クロノの方が肉体的な年齢は上で、でもドゥームは精神的には上で……）」

雄介には、ドゥームがクロノに対して「お兄ちゃん」だとか「兄さん」とか呼んでい
る場面が簡単に浮かんでこない。

——だけでもし、そんな事になるのなら見てみたい。

想像をすると笑えてしまうが、それも良いのかもしれないと思う雄介だった。

「クロノ」

「——艦長……フェイトとドウムも一緒か」

「うん / ああ」

「今回の事件資料、もう見た……？」

「はい。さつき全部」

「なのは達の世界が中心なんですよね、〝魔導師襲撃事件〟って？」

「そうね……なのはさんの世界から〝個人転送〟で行ける範囲に限定されてる」

「あの辺りは、本局からだとかかなり遠いですね。〝中継ポート〟を使わないと転送出来
ない」

「アースラが使えないの、痛いですね」

「空いている艦船があればいいんですが……」

「長期稼働が出来る艦は2ヶ月先まで空気が無いって……」

「そうか……」

今のアースラはプレシア事件を解決し、その際に出来た傷や故障箇所などの修理。そして改修作業などを行なっている。

時空管理局本局からなのは達の世界である地球へと向かうにはそれなりに距離があるのだ。次元航行艦があれば中継ポートを使わずに行く事が出来るが、フェイトの言葉通りに今は空気が無い。

更に、中継ポートでは一度に大人数を転送させる事は出来ない。そしてアースラに配属されている殆どのメンバーは整備をしているから、行く事が出来るのは極少数の人数だけだろう。

「とうるかフェイト、ドウム……君達は良いのか?」

「何が?」

「囑託とは言え、あくまで君達は外部協力者だ。今回の件に迄、無理に付き合わなくて」

「クロノやリンデイ提督が大変なのに、暖気に遊んでなんかいられないよ……アルフも手伝ってくれるって言ってるし。手伝わせて!」

「うん……有り難くあるんだが……」

「俺も同じ気持だ。クロノ……俺からも頼む。手伝わせてくれ」

「やっぱり、あれで行きましょうか!」

「あれ?」

重い空気を引き裂く様にして、リンデイは予め考えていたプランを実行する事を決意する。

フェイトが疑問に感じて聞き返すが、リンデイは「後のお楽しみね」といった感じにただ笑い返すだけだった。

「さて……私達アースラススタッフは今回、ロストログア闇の書の搜索、及び魔導師襲撃事件の捜査を担当する事になりました。ただ、肝心のアースラが暫く使えない都合上、事件発生時の近隣に臨時作戦本部を置く事になります。分轄は、観測スタッフのアレックスとランディ」

「はい！」

「ギャレットをリーダーとした捜査スタッフ一同！」

「「「「「はい！」」」」」

「司令部は私とクロノ執務官、ゾイル特務執務官、エイミイ執務官補佐、ブロン、特務執務官補佐、フェイトさん、アルフさん。以上3組みに分かれて駐屯します。因みに司令部はなのはさんの保護を兼ねて、なのはさんの家の直ぐ近所になります」

そのランディの言葉に、なのはは満面の笑みを浮かべる。

フェイトとアルフも、彼女同様に驚きと喜びを感じていてた。

「話は以上です」

「では、各自——」

「——つて、ちょっと待って下さい！」

それぞれの分轄についての話を終えて解散をしようとするその時、なのはと雄介、志

蓮、フェイト、アルフ、ユーノの6人が声を上げる。

「ブロン特務執務官補佐って……」

「どういう事だよ！」

「どうって……言ってなかったっけ？」

「」「」「言っていないっ!!」「」「」

声を揃えて否定をしてくる彼女等に、思わずたじろいでしまう。

「悪かったな」

謝罪をするも、なかなか「許さない」といった態度を取る彼女等に狼狽している俺を、リンディとエイミイの2人は面白そうに、クロノを含めた他のアーススタッフは「大変そうだな」といった感じに見ていた。

「リンディさん、クロノ、ゾイル……エイミイさんも。会って欲しいヒトが居るんだけど。なのはとフェイト、ドウム、そしてユーノとアルフもだ」

「会って欲しいヒト？」

今後の方針についての話を終えた後、彼女等に頼みをする。

既に解散をしていて、他のスタッフは居ないのだが。

「志蓮、ゲイト・オブ・バビロン王の財宝を……」

「ああ、わかった」

「王の財宝……？ ああ、そういう事か！」

領くと同時に、王の財宝を展開する志蓮。

彼の背後に金色の光が出現し、辺り一体を包み込む。

「此処は？」

「王の財宝の中だ」

「王の財宝の中？ 此処が……？」

なのはの質問に応える志蓮。

周囲が光りつて限りが無い空間の様に、前後と上下の感覚が狂いそうになる。

だが、足が床らしきものに着いている点と背後にドアがある事により辛うじて感覚を保つ事が出来ている。

「相変わらず可笑しい場所だな」

「先に進むぞ」

足を進める俺に従う様にして後を追いかけて来るみんな。

横や上の方には無数の棚が存在し、其処には槍や剣などの武器を始めとした物騒なものも保管されている。

代わり映えのしない異様な空間に加え、その中に置かれている無数の魔法兵器。

それが、余計にこの空間の異質さを際立たせている。

「何て魔力なの……」

「こ、これは……全部ロストロギア相当のものじゃないか！ こんな危険なものを個人が所有して良い筈が……いや、此れ以上は言わないでおこう」

「助かる」

「ドア……？」

「ああ、開けるぞ」

開くと同時に視界が大きく変化する。

「此処は一体……？」

「神殿だよ、神様たちの居る場所」

「神殿!? 神って……いや、何だ……この大きな魔力は？」

「言ったら、神だって」

宮殿の中から漏れでている気と魔力は俺からするととても小さなものに感じられる。だが、他のメンバーからすると大きなものに思えるのだろう。

「ちよ、勝手に入るのは——」

中に入ると、其処は以前に来た時と同じ様にしてパーティーが行われていた。

「……………え!?!……………」

中の様子に驚きを隠せずにいるなのは達。

「あ、久し振りだねー！」

一瞬にして天照が跳び抱きついて来る。

「久し振りと言う程時間は経っていない。と言うよりも離れて下さい……」

「ええ、良いじゃん？ 減るもんじゃないし。それとも、意識してるのかなあ？」

腕に抱きつくようにして密着をしてくる彼女に、俺はただただ冷静に言葉を紡ぐ。

だが、彼女はその言葉とは反対により強く胸を押し付けてくるなんて事は無く、すんなりと離れる。

「で、どうしたのかな。迷えるヒトの子等よ……？」

「一応、あんた等と話しておかないとなんて思ってたな」

「えっと、ブロン君。そのヒトは？」

「紹介が遅れました。此方は——」

「——地球の神の1人、天照大御神です」

俺の紹介に割って入る様にして、自己紹介をする天照。

彼女は一瞬にして、巫山戯た態度から威厳のある神としての態度へと切り替えてみせる。

発せられている威圧感と魔力、そして大きな気によってなのは達は勿論だが、リン

「ディを始めクロノ達も体を強張らせてしまう。」

「その辺にしてやれよ。怯えちゃってるじゃないか」

「オーディン……」

奥の方からゆっくりと歩いて来るその男は北歐神話で最高神を務めている神。

神とは云え、下界の人による文化に毒され——俗に染まってしまったからなのか、とてもラフな格好をしている。

簡単に言ってしまうえばシャツと短パンといった風な感じだ。

「さてと、本題に入らないとな。この前もそうだったけど、また地球の危機が迫っている」

「ほう……」

「その地球滅亡を回避する為に、この人達に助力をして貰おうと思ってるな」

リンディ達を紹介し、この先に起きるであろう事を予想しながら話を進める。

「今回起きるであろうものの規模は多分だが、前回の比では無い。とても大きな被害が……地球全体に大きなダメージが出るかもしれない」

「ヒトだけでは無くて他の生命も……人のつくりだした文化、そして何よりも地球自体が……それどころか、最悪の場合は宇宙全体が滅んでしまう可能性もある、と」

「ああ、その通りだ」

その天照の口にした確認に対し、もともと張り詰めていて重かった空気がより重く苦しいものになってしまう。

「そ、そうだ！ 地球の神の一人って事は他にも居るの？ いえ、居るんですか？」
機転を利かしたのか空気を变える様に大きな声で質問を投げかけるエイミイに対し、オーデインは応える。

「勿論他にも居る。無数に、な。八百万の神と言つてな……これは日本人の方が知っているか。まあ、800万どころじゃ無いんだがな」

「何処をどう見ても居ないけど」

「下界に降りて遊んでいるのよ。下界には娯楽が多いからね……私達の文化は停滞をしているわ。いつからこんな風になってしまったのかしら……」

「日本で言う昭和の最後辺りからじゃないか」

「えっ!? そんな最近だっけ？」

アルフの言葉に対し、怒る素振りすらも見せずにあっけらかんといった感じにして応える天照。

愚痴る天照を、オーデインはやれやれといった感じにして宥めている。

「取り敢えず、だ。大きな戦闘が繰り広げられる事になるだろうけど——」

「——大丈夫よ。気にせず好きだけやっちゃいなさい。ある程度の被害が出るのは覚

悟しているし……私達がやんちゃしていた時と比べると、ね」

「そう言ってくれると助かる」

俺達は天照とオーディンの2人と別れ、時空管理局の一室へと帰還する。

部屋の中に戻り時計を見ると、1時間程度で話を済ませる事が出来た様だ。

「ビックリしたわね。神様に逢えるなんて」

「貴重な体験をしたね、クロノ君」

「何で僕に言うんだ、エイミィ」

「あれ？ ブロン君、その周りに浮いているのって何？」

なのはの質問に、周りのみんなも俺へと視線を向ける。

そこには、俺を中心にして玩具の様なものおりがみが浮かびグルグルと周っているのだ。

「折神ゲート・オブ・パピロン」だ。王の財宝から出る時に着いて来たんだろう」

「へえ……こんなものがあつたのか」

「志蓮、お前が驚くなよ」

「で、ブロン君……折神って何？」

「簡単に言うと式神の様なものだ」

「式神……？」

「ああ。ミッドチルダにはそういう云つたものが無いのか」

聞き返してくるクロノ達に頷きながら説明を始める。

「何て言えば、説明すれば良いのかな。荒ぶる神とか、神霊とか、様々な不思議現象を起こす超人的存在だとか……」

「えっと、具体的には？」

「モヂカラの塊の様なもの、だな」

「で、この赤いのは？」

捕まえて手の平に乗せると同時に変形を繰り返していく折神。

そのうちの一体を指差して、フェイトは質問をする。

「獅子折神だ。ライオンをモデルにしたものだな」

「こつちの青いのは？」

「龍折神」

「それじゃあ、こつちは？」

「亀折神だ。緑色のは熊折神で、黄色色のは猿折神」

「それじゃ、それぞれで準備を始めましょうか」

話を切り替える様に手を叩き、リンディは指示を始める。

それに従ってエイミィとクロノは動き始め、ゾイルは部屋から出て行った。

「地球へ行く準備を始めるから、少し待っていてね」

「はい」

「わあああ！ 凄おい！ 凄い近所だ！」

「本当？」

「ほら、あそこが私ん家」

ベランダに出て、自身の家のある方向を指さすのは。

なのはとフェイトは外を見て、楽しそうにしている。

準備を終えて地球へと転移を済ませた俺達は一旦それぞれの家へと戻った。

リンディ達は戸籍などを偽造し、フェイト達がPT事件時に使用していたマンション

の一室に住む事に。そして、他の局員等の協力の元で荷物を運び込み、今に至る。

「ユーノ君とアルフは、こっちではこの姿か？」

「新形態、子犬フォーム！」

「なのはやフェイトの友達の前では、こっちの姿でない」と

「君等もいろいろと大変だね」

彼等の姿は文字通り動物である獣のものへと変わっている。

アルフは子犬へと。PT事件での時の姿をそのまま小さくしたものと同じだ。

ユーノの方もまた、その事件時と同じでフェレットの姿をしている。

「アルフ、ちっちゃい！ どうしたの？」

「ユーノ君もフェレットモード久し振り！」

「可愛いだろう？」

「うん」

小さなアルフを抱きしめるフェイト。

アルフはフェイトの顔をペロペロと舐める。

なのはもフェレットモードのユーノに対し、頬ずりをしている。

ユーノは少し戸惑い、そして照れている様だ。

『可愛い娘に頬ずりして貰えて役得だよなあ、ユーノ君よお！』

『そ、そんな事言われても……』

雄介の誂いの言葉に、ユーノは固まってしまふ。否定をしないところを見ると、満更でも無く、そして悪くはないと思っているのだろうか。

志蓮の方はなのはとユーノを見て、今にも血涙を流しそうな勢いを醸し出している。

面白そうだからという理由で踏み台をわざわざ演じているとはいえ、彼女に対して好意を抱いていない訳では無いのだから仕方が無いのかもしれない。

「なのは、フェイト……友達だよ」

「はーい！」

クロノの呼びかけになのはとフェイトの2人は笑顔で玄関の方へと駆けて行く。俺と雄介と志蓮、ドゥームも彼女等を追いかける様にして向かった。

「こんにちは！」

「来たよ！」

「アリサちゃん！　　すぐかちゃん！」

出入口であるドアから、アリサとすぐかが顔を見せる。

「始めまして…て言うのも何か変かな」

「ビデオメールでは何度も会ってるもんね」

「うん。でも逢えて嬉しいよ。アリサ、すぐか」

「うん！」

「私も」

「フェイトさん、お友達？」

奥の方からリンディさんが姿を見せる。

「こんにちは。すぐかさんにアリサさん、よね？」

「はい！」

「私達の事」

「ビデオメール見せて貰ったの」

「そうですか！」

「良かったら皆でお茶でもしてらっしゃい」

「あ、それじゃあ家のお店で！」

「そうね……それじゃ、折角だから私もなのはさんのご両親にご挨拶を。ちよつと待っててね」

そう言いながら再び奥の方へと戻り、準備を始めるリンディ。

「綺麗な人だね」

「フェイトのお母さん？」

「えっと……その……今は、まだ、違う……」

アリサの質問にフェイトは顔を赤くしながら小さな声で応えた。

「ユーノ君、久し振りだね」

「キュ、キュウ」

「何かあんたの事、どつかで見た事ある気がするんだけど。気の所為かな？」

フェレット状態のユーノを優しく撫でるすずか。

横の方ではアリサが膝の上に子犬フォームのアルフを乗せながらじつと見つめている。

アリサの言葉にアルフは不味いと思ったのか、ピクリといった感じに身体を小さく震わせる。

「お前が保護した犬の子供だよ」

「ブロン君」

「そっか……なら似てるのも仕方無いか」

なのは達とは少し離れた椅子と机で俺達転生者組は集まってジュースを飲んでいる。俺の言葉にアリサは納得をしたのか、これ以上の追求はしなかった。

「そんな訳で、これから御近所になります。宜しくお願いします」

「ああ、いえいえ。こちらこそ」

「どうぞ御鼻屑に」

喫茶翠屋の中ではなのはの両親である士郎と桃子、そしてリンデイが挨拶をしている。

話自体は他愛も無い内容だろう。だがまあ、その殆ど——8割近く、いや9割が嘘で固められているみたいだが。

「ドゥーム君が4年生……そしてフェイトちゃんは3年生ですよね？ 学校はどちらに？」

「はい、実は……」

士郎の質問にリンデイが応えようとするちょうどその時、店のドアが開かれる。

「リンデイ提……リンデイさん！」

「はい、なあに？」

呼び方を間違えそうになるが、すんでのところで呼び直すフェイト。

それに対し、リンデイは何事も無い様にして応える。

「あの、これ……これって……」

「転校手続き取つといたから、週明けから、なのはさん達のクラスメイトね」

戸惑うフェイトとは対照的に、リンデイはいたずらが成功した者に似た表情をしている様に見える。

まさに「してやったり」と言った感じだ。

「あら、素敵！」

「聖祥小学校ですか。あそこは良い学校ですよ。な、なのは？」

「うん！」

「良かったわね、フェイトちゃん」

「あの、えつと……はい……有難う御座います」

フェイトは照れ、顔を隠す様にして制服の入った箱を抱きしめた。

「ロストロギア闇の書の最大の特徴は、そのエネルギー源にある。闇の書は魔導師の魔力と魔導資質を奪う為に、リンカーコアを喰うんだ」

「なのはちゃんのリンカーコアもその被害に？」

「ああ、間違い無い。闇の書はリンカーコアを喰うと収集した魔力や資質に応じてページが増えていく。そして最終ページまで全て埋める事で――」

「――闇の書は完成する」

「ゾイル特務執務官」

モニターには、先の戦闘後でヴォルケンリッターが逃げる際、補足をしようとした時に捉えた映像が映し出されている。

「やっぱり君は知っているんだな」

「……ああ。だいたいこのロストロギアについての知識は頭の中に詰まっている」

「完成すると、どうなるの？」

「少なくとも、碌な事にはならない」

「果たして鬼が出るか、蛇が出るか……それとも龍が出て天変地異が起きるか……」

「まあ、碌な事にはならないだろうな」

「はい、はい、エイミーですけど」

《あ、エイミー先輩、本局メンテナンススタッフのマリーです》

必要なものは出し、片付けをしていると通信が入り、そちらを優先するエイミー。

モニターには眼鏡を掛けたタレ目の少女が映っている。

「何？ どうしたの？」

《先輩から預かっているインテリジエントデバイス2機なんですけど……何だか変なんです》

「え？」

《部品交換と修理は終わったんですけど……エラーコードが消えなくて》

「エラー？ 何系の？」

《ええ。必要な部品が足りないって。今、データの一覧を送りますね》

「あ、来た来た。 え？ 足りない部品って……これ？」

《ええ……これ、何かの間違いですよね？》

その送られてきたデータにはこう記載されていた。

——エラーコードE203 必要な部品が不足しています エラー解決の為の部品

“CVK-792”を含むシステムを組み込んでください。

《2機共、このメッセージのまま、コマンドを全然受け付けないんです。それで、困っ

ちやつて》

「レイジングハート、バルディッシュ、本気なの？」

CVK-792 ベルカ式カートリッジシステム。

今回の事件の発端であり、そして相手である彼等ヴォルケンリッターのデバイスに組み込まれているもの部品。

——お願いします。

それは、レイジングハートとバルディッシュ両機の覚悟とも解釈出来るメッセージであつた。

帰ってきた2機の相棒達 叫べ、新たなる名前を！

12月5日午前6時335分。

保和家地下24階。

「……………」

なのは意識を深いところへと潜らせ、集中をしている。

彼女の身体のなかから僅かながらも魔力が出、それが両手のなかに目に見えるかたちとなって出て来るがそれも一瞬の事。

その小さな魔力の塊はあつという間に霧散し、消えてしまう。

「まだ、駄目みたいだな」

「そうだね……………」

リンカーコアから魔力の大部分が募集され、数日の間ではあるが魔力の使用に制限が掛かってしまったなのは。

何事も無く、これといった問題も起こる事が無い俣に時間は経過し、小さくなっていったリンカーコアは修復され、元の大きさに戻りつつある。

だが、まだ本調子では無いのか上手く魔力を結合させる事は出来ないみたいだ。

「それなら……」

もう一度、両手の中へと魔力を集中させていく。今度は魔力だけでは無く、気も含めてだ。

みるみるうちにして、その桃色に光り輝くエネルギーの塊は小さな球形へと変化していく。

5分ほど時間が経過したが、それが消えるという事は無く、維持をし続ける事が出来ているみたいだ。

「そんなに力りきむなよ、って言っても無理なのかな」

「私は大丈夫だから」

なのはの横の方では、フェイトが木刀を手にして素振りをしている。

こちらの言葉を流しながら、フェイトは只管バルディッシュの代わりである木刀を振り続ける。

「それにしても、気づって凄いな。魔法での身体強化した時の力がまるで、赤ん坊みたいに感じる」

「そうか? 結局は使い方だしな……ベクトルや使用方法、操作方法とかが違うだけだぞ。アルカンシエルやロス古ストロギア遺産などの技術とかを使用すれば、これ以上の力を扱えるようになるし」

木刀が振られる速さはとてつもなく、残像が見える程のものだ。

上下に振られる度に、空気を斬り裂く音が閉鎖されている空間内で響いていく。

なのはもフェイトも、2人とも先日の戦闘で負けた事が相当に悔しかったのだろうか。何も出来ずという事は無いが、大事な友達を守れなかった事が。闇の書の守護騎士達との間に存在する力の大きな開きを感じ取って。

「さて、と……それじゃ、お前等。全員で俺に攻撃をしてこい」

「え？」

「どうしてだよ？」

「今のお前等じゃ、デバイスを強化しても敵うかどうか怪しい。だからこそその組手だ。俺は諸事情で戦闘に表立って参加出来ない。あと、自分より強い奴とやり合う時もあるだろうし、少しはマシになる筈だ。それに……」

——俺達転生者が知っている正史と呼べるものとは違う方向へと進んでいっており、ヴォルケンリッターも強くなっている。

——他の異常事態イレギュラーなどが起きて、予想外のものが出て来る可能性も存在している。

「それに？」

「何でも無い、気にするな。それじゃ、始めるぞ」

その言葉と同時に、俺は彼女等へと向けて気弾を発射する。勿論威力は抑えてあり、

回復魔法を使用すると直ぐに塞がる様な傷が出来る程度の威力でだが。

それでも、何もせずに真正面から喰らってしまうと、強烈な痛みを感じると同時に気絶をしてしまうだろうが。

「な、何をするんだよ!」

「始めると言った筈だ」

繰り出される無数のエネルギー弾を思い思いの方法や手段を用いて回避していく皆。

「避けてるだけじゃ、意味が無いぞ。彼奴等はこの攻撃よりも速く強い威力のものを繰り出してくる可能性がある。と言うかお前等、さっさと反撃して来いよ!」

「そんな事言われてもよお」

「避けるだけで精一杯だよおっ」

天井付近から床へと降り注いでいく気弾のシャワー。

俺は抗議の言葉を無視して、それらを下に居る彼等に対して執拗に、容赦という感情を捨て、次々と連続発射していく。

転生者であるが為に身体能力が高いのか、雄介と志蓮、ドゥームは反撃をするという事は難しそうではあるものの、避けるという行為自体には余裕が生まれ始めてきている。

なのはとユーノの方は彼等程では無いが、避ける事に成功をしている。

そしてフェイトとアルフだ。

彼女等は、俺の想像をしていたものよりも動きが速く、爆風に煽られながらも回避していく事が出来ている。

「(本当は雄介達も前に出て戦うというのは止めるべきなのかもしれない。だけど、話を聴く限りでは謎の相手——転生者らしき奴——と戦ったとか……)。ほら、次行くぞ！」

「止めてくれ〜！」

「勘弁して〜」

傷一つ付かない訓練場の中で、来る時に向けて訓練を続けていく。

青く光り輝く無数の気の塊が、その場に居る俺以外の皆を吹き飛ばしていった。

教室の中に居る生徒等は、教壇に立っている教師を前にして静かにしている。

だが次の教師の放った言葉に、生徒等は騒ぎ始める。

「さて皆さん、つい先週急に決まったんですが、今日から新しい友達がこのクラスにやってきました。海外からの留学生さんです。フェイトさん、どうぞ！」

「——失礼します！」

その教師の言葉の後に、扉が恐る恐るといった感じで開かれて、フェイトが教室の中に入ってくる。

彼女の動きはとてもしぎこちなくて、ゼンマイ仕掛けのロボットのようにかチカチとした、ガチガチといった感じをしている。

見知らぬ場所、なれない環境、そして衆人環境の前であり、その複数の視線が自分に集中しているのだから緊張してしまっても仕方が無いだろう。

だが、そんな中でも、見知った者達が居てくれるというだけでも十二分に勇気などの気持ち湧いて出て来るものだ。

教室に入ったフェイトを見て、周りの生徒達が先程よりも大きくザワザワと騒ぎ、どよめき始める。

「あの……フェイト・テスタロッサといいます。宜しくお願いします」

自己紹介が終わり、生徒達による笑顔での拍手が教室内に響き渡る。

その瞬間、緊張が薄まり安心をしたのか。フェイトは柔らかな笑顔を浮かべた。

「ねえ、向こうの学校ってどんな感じ？」

「わ、私、学校には……」

「すげえ急な転入だよね？　なんで？」

「いろいろあつて……」

「日本語上手だね。何処で覚えたの？」

「前に住んでたところって、どんなところ？」

「えと、あの、その……」

次々と、矢継ぎ早に繰り出されていく数々の質問に対し、フェイトは戸惑い、しどろもどろになりながらも何とか答えていく。

だが、生徒達の好奇心は治まるところかより一層加熱していき、より沢山の質問が寄せられていく。

「フェイトちゃん、人気者」

「でもこれはちよつと大変かも」

「しょうがないわね……はい、はい！ 転入初日の小学生をそんなに皆でワヤクチャにしないのー！」

「アリサ……」

「それに質問は順場に！ フェイト、困ってるでしょー！」

見かねたアリサが彼女等の方へと向かい、質問攻めをしていた生徒等に注意をする。

すると、それは鶴の一声の様にして、騒ぎ立てていた生徒達は静かになる。そして、質問をする順番を相談し始めた。

「向こうの学校ってどんな感じ？」

「えつと……私は普通の学校には行ってなかったんだ。家庭教師というかそんな感じの

人に教わってて」

「へえ、そうなんだ」

順番を決めたは良いが、それでも訊きたい事は沢山あるのだろう。

フェイトに対して次々と質問が投げかけられ、アリサはその仲介役をする。

「どうしたんだ、ブロン?」

「いや何……俺の時もあんな感じだったかなと思つてな」

他の学校でさえ、転入生とう存在は稀であり、珍しく感じられるものだ。

況してや、この学校は偏差値などのレベルが高く、並大抵では入る事は出来ない。だからこそ、余計に珍しく感じられる筈。

そして転入して来たのが、可愛らしい少女なのだ。興味を抱かない方が可怪しいのかもしれない……そのように思えてしまう程の様子だ。

「そうだったな、確かにあんな感じだったか」

「あの時のお前は魔力を無駄に出していたし……喧嘩を売っているのかと思つたぐらいだぞ」

「そ、そうか?」

あの時アリサは、今の様に仲介役を買って出てはくれなかった。まあ、志蓮に対しての対応で大変だったのだろうから仕方が無いだろう。

「何だかな……。何時まで経っても俺は……。こんな小さな事で気持ちを乱れさせてしまふなんてな。まるで拗ねている我儘な小さな子供みたいだな」

そうこうしているうちに、休み時間終了を告げるチャイムが鳴り響く。

訊きたい事を一通り訊き終えた生徒も、まだ質問をしたい生徒も皆、それぞれの自分の席へと向かい座る。

そして2分と経たずに教師が教室へと入室して、授業が開始された。

《クロノ君、駐屯所の調子はどう？》

「機材の運び込みは済みました。今は、周辺探査のネットワークを」

ある程度の作業は終了し、クロノは休憩がてらに空間モニターを使用してレティ・ロウラン提督と通信をしていた。

レティ・ロウラン。彼女は、クロノの母親であり上司でもあるリンディの同僚であり、友人でもある。

《そう。ご依頼の武装局員一個中隊は、グレアム提督の口利きのお陰で指揮権は貰えたわよ》

「有難う御座います、レティ提督」

《それから、グレアム提督のこの使い魔さん達が逢いたがつてたわよ……。可愛い弟子

に逢いたって」

「リーザ達ですか……。その、適当にあしらっておいてくれますか？」

《わかったわ。それじゃ、程々に頑張ってるね》

「はい。レティ提督お方も」

空間モニターを通しての通信を終了させる。

それと同時に廊下の方からエイミーが部屋へと入って来る。

数十冊の本を抱えながら、ブロンの方も遅れて入室をして来る。

「クロノ君。どう？ そっちは？」

「武装局員の中隊が借りられた。捜査を手伝って貰うよ。そっちは？」

「良くないね。昨夜もまたやられてる。今までより少し遠くの世界で、魔導師が十数人、

野生動物が約四体」

「野生動物？」

「魔力が多い大型生物……」

エイミーが投影型のキーボードを操作する事で、空間モニターには募集されたであろう動物と同種のものが写されている写真が映しだされている。

「リンカーコアさえあれば、ヒトで無くても良いみたい」

「当に形振り構わずだな……」

「でも、闇の書のデータを見たんだけど……何なんだろうね、これ？」

映像が闇の書のデータが記載されているものへと変わる。

「魔力蓄積型のロストログア……魔導師の魔力の根源となるリンカーコアを喰って、そのページを増やしていく」

「全ページである666ページが埋まると、その魔力を媒介にして真の力を発揮する。次元干渉レベルの巨大な力をね」

「で……本体が破壊されるか、所有者が死ぬかすると白紙に戻って別の世界で再生する、と……」

「様々な世界を渡り歩き、自らが生み出した守護者に守られ、魔力を喰って永遠を生きる。破壊しても何度でも再生する、停止する事の出来ない危険な魔導書」

「それが闇の書……」

守護騎士プログラムによる4体の守護騎士―ヴォルケンリッターが存在し、それを守護している。

そして、謎の竜人の存在もあるのだ。

守護騎士4人と竜人の捕縛。運が良ければ、上手く事が運んだ際にはそのまま闇の書の主を捕縛する。

だが、守護騎士は古代ベルカ式のカートリッジシステムを使い熟している強者等。

そして、破格の強さを誇る筈の転生者である雄介等を軽くあしらった竜人という大きな壁。

捕獲をする事が難しく、完成してしまえば止める事が困難どころかこの星への被害に對して目を瞑りながら闇の書に對処しなければいけない可能性もあるのだ。

そして何よりも転生者という存在が居る事が悪影響を及ぼして、更に厄介な事に成り得る可能性もある。

「私達に出来るのは、闇の書の完成前の捕獲?」

「そう。あの守護騎士達を捕獲して、更に主を引きずり出さないといけない」

「まあ、それが難しいんだがな」

「ところで、ゾイル。君は何をしてるんだ?」

「見れば分かるだろ? 読書だよ、読書。この世界の娯楽は素晴らしいと思わないか?

ミッドチルダにも多少は入ってきているが、それでは足りない。是非、買って持って帰ろう。そして布教をしよう」

ゾイルの熱の入った目と言葉に気圧されながら頷くクロノ。

ゾイルの手には漫画が、そしてスタープラチナ・ザ・ワールドの手にはライトノベルと思しき文庫本が1冊ずつあり、次々とページを捲りながら黙読をしている。その速さは速読の範囲に収まるものでは無く、捲ったと思つたら直ぐに次のページに捲っている

といった風であり、床には読んだ後のものなのか無数の本が山積みされている。紙を捲る度に、風切り音が鳴る。

「ク、クロノ君……ほ、本が……」

「ああ、浮いているな」

エイミイは宙に浮いている本を、独りでにページが捲れていく本を見て、驚きを隠せないでいる。

クロノの方も同じく驚いている。

だが、その理由はエイミイのものとはまた別の理由だ。

見えているのだ。薄ぼんやりとはあるが、スタープラチナ：アルティメットが。その存在を視認する事が出来ているのだ。

幸いと言って良いのかクロノとエイミイの2人はスタンドである幽波紋スタンドに関する知識を少しではあるが持っている。

その為に驚いたのはほんの一瞬だけであり、直様気を持ち直す。
だが――。

「(こちらを見ているのか?)」

スタープラチナ・アルティメットは本へと向けていた目を、クロノの方へと一瞬ではあるが向けた。

少なくともクロノにはそう見えた。

睨んできた訳では無い筈なのに、クロノは、純粋な力の塊であるそのスタープラチナ・アルティメットの一瞬の行動に対して大きな恐怖と畏れを感じ、目を背けてしまう。

「どうした、クロノ?」

「嫌、何でも無い……」

再びスタープラチナ・ザ・ワールド・アルティメットの方へと向けると此方へ一瞥する事も無く、ただただ本を読んでいる。

「で、ゾイル君はどう思う? 闇の書の事」

「そうだな……あれはかなり厄介なロストログアだ。だが……あれが闇の書にかいへ……なつて、そう呼ばれる様になったのは……まあ良い。助力はするが、解決そのものはしない」

「ああ」

先ほど感じた気持ちを振り払い、誤魔化すようにして話を戻すクロノ。

黙読をしながら、言葉を返し領くゾイル。

「それにしても驚いたな……」

「何がだ?」

「この本さ。前世で読んだのと同じものだ」

「その何処が可怪しいの？」

「この本は本来なら、俺の元居た世界での年代的には2年前に発売されている筈のものだ。そして、この世界とは別の世界だから存在していなくても可怪しくは無いのだが」「存在し無かった筈のものが存在している……その本の著者も前世の記憶を持っているという事か？」

「それって」

「ああ……」

記憶の摩耗によって、一言一句全てが同じかどうかは判別も判断、そして断定は出来ない。

だがそれでも、大まかな内容などが前世で見ただであろうものと一致している。記載されている作者名や出版社名などの名称迄もが。

発売時期などがただズレているだけであれば良い。

だが、そうで無いのであれば。

「逢ってみたいものだ……」

「フェイトちゃん、初めての学校の感想はどう？」

「歳の近い子がこんなに沢山居るのは初めてだから、何だかもうグルグルで」

「まあ、直ぐに慣れるわよ、きつと。ブロンだつてそうだったでしょ?」

「お、そうだな」

「うん、有り難う。だと良いな」

「よお、お前等」

「兄さん」

「ドウームじゃないか、どうしたんだ?」

廊下を歩いていると目の前から見知った顔が近づいて来た。

ドウーム・テストロッサだ。

今の彼は、俺と同じ様に変身魔法を使用している。と言っても少し変化しているだけで、額の水晶を消した。というよりも見えないようにしただけというべきだろうか。

「こんにちは」

「ああ。こんにちは、だな」

「ちよつと、雄介! 失礼じゃ——」

「構わないよ。俺からそう呼んでくれと頼んだからな……そうだな。君達にもお願いしようかな」

「それはちよつと……」

「そうか……では改めて。と言うか、引越しの時には挨拶が出来なかつたからな。俺

の名前はドウーム……ドウーム・テストロッサ。フェイトの兄だ。宜しくな」

ドウームは、俺達と違って1つ上の学年だ。

「何だか、奇妙な……新鮮な感じだな。フェイトと離れて活動をするというのは」

「そう、だね」

何から何まで、何時如何なる時もとまではいれないが、殆ど一緒に行動をしていたのだ。

母親であるプレシア・テストロッサの命令を受けた時は勿論、それ以外の時でも。

「兄さん、学校の方は？」

「良いところだと思う。平和で、伸び伸びと安心して暮らせる良い国だ。そしてこの学校……生徒皆が楽しそうにしている。教師の教え方もリニスに引け劣らない程に優しく理解り易いし。お前はどうかんだ、馴染めそうか？」

「皆優しく、直ぐに馴染めるかな……」

「そうか。それは良い。是非、フェイトと仲良くしてやってくれ」

「はい」

「言われなくても」

「あ、当たり前だ。嫁に優しくするなんて当然の事だろう」

廊下の窓から見える外は中庭になっていて、其処には沢山の生徒が楽しそうに話をし

たり、遊んだりしている。

開かれている窓から心地の良い軟風が吹き入れ、髪がなびき、その冷たい風が肌を撫でていく。

「その……質問何ですが、リニスって?」

「家庭教師のような立場の人かな……。いや、家庭教師というよりも家政婦?」

「ああ。教室でのやり取りで出てきた家庭教師みたいな人って、そのリニスって人の事?」

「うん。そうだよ」

リニス。

テストタロツサ家で飼われていたミッドチルダの山猫の名前だ。

フェイトの姉であるアリシア・テストタロツサとよく遊び、プレシアが家に帰ってくるのを待っていた。

そして、次元航行エネルギー駆動炉ヒュードラの暴走。それにより、アリシアと山猫としてのリニスの生命が消えたのだ。

アリシアの遺体は保存され、彼女の細胞を使用してフェイトとドウムが生まれる。

リニスはプレシアにより使い魔としての第二の生が与えられ、フェイト達の面倒を見る事になった。

約束された期限が来るまでの間……そして――。

「授業に遅れる様な事はするなよ」

「うん。理解ってる」

軽く言葉を交わし終え、ドゥームはゆっくりとした足取りで離れていく。

俺を含めたフェイト達は、ドゥームが離れていくその後姿を見送った。

風芽丘図書館。

柔らかな夕陽が射し込んできていて、中で読書をしている人達を優しく照らし、包み込んでいる。

俺は本を借りに来ている。「私も行くから一緒に行かない？」というすずかの好意い甘え、月村家の所有する車でこの図書館へと連れて来てもらったのだ。

周りの人達は読書をしたり、勉強をしたりと、それぞれ集中をしている為かとても静かなもので、聞こえて来るのは本のページの捲る音と文字を書く際に出る筆音、そしてキーボードなどを叩いているであろうタイピング音くらいだろうか。

「はやてちゃん！」

「――あつ！ すずかちゃん！」

目当ての本を手にとると同時に、すずかは知り合いを見つけたのか横の方へと首を向

けて声を掛ける。

呼ばれた彼女はそれに気付いたのか応えるようにしてすずかの名前を呼び、付き添いであろう女性は足を止めた。

「すずかちゃん、今日は何借りたん？」

「うん、童話の本なんだけど。何だかちよつとジンとくる感じ本なの」

「あ、童話、私も好き。面白そうやね」

「読んでみる？ 1巻がまだ、棚にあつたよ」

「うん！ 後で見してみる」

「はやてちゃんも童話好きなんだ！」

なのは達と居る時と同じくらいに愉しそうにしているすずか。

その様子を見てみると、目の前の彼女とも親友の様な関係なのだろうと感じ、思える。

「(と言うか、どう考えても八神はやてだよ……シグナムも居るし……ああ、接触してしまつたよ……)」

元々正史通りに闇の書から彼女等を救い出すというのは考えていた。

だが、接触をしてしまつたが故なのか、その考えと気持がより一層強くなる。

放つては置けないのだ。知り合いとなつた今では余計に。実際に会い、見てしまつたが故に。

「で、すずかちゃん……其処に居る子は、もしかして」

「友達の保和歩栄君。図書館に行こうとしていたらしくて、私もちょうど行こうと思つてたから、誘つたの」

「そっか……なら」

そう言いながら彼女は此方へと顔を向ける。

「始めまして。八神はやて、いいます」

「始めまして。保和歩栄だ。ブロンで良い」

「なら、ブロン君で。私の事もはやてで良えよ」

茶髪であり、おかつぱ頭で合っているのだろうか。

柔らかな感じの関西弁で喋り、車椅子を使用している。

そして、自分から名乗つたのだ。

知識内に存在している特徴と合致している。

これで、彼女が闇の書の主であり、今回の事件のキーパーソン、知識内に存在していた八神はやてと同一人物と呼べる娘だと断定をして良いだろう。

「……………」

こちらの様子を静かにうかがっているシグナム。

俺は今、魔力を微量消費しながら変身魔法を使用している。

その事に気が付いて警戒をしているのか。

それとも、ただ単純にはやてを気に掛けているだけなのか。

その両方である可能性もあるだろう。

表立って何かをしてこないというのは、目の前には主であるはやてとその友人である
すずかが居り、その2人に対して配慮をしている為なのか。

「シグナム」

「はい」

はやての呼びかけに応え、此方へとゆっくり近付いて来るシグナム。そして、お互い
に自己紹介を終え、軽く握手を試みる。

彼女の身体はベルカの騎士を名乗るだけの事はあつて、かなりの力があるのを感じ取
る。

女性という事もあり、身体は少し細い。だが強靱な筋肉が付いており、動きも他のヒ
トとは違う。

プログラム体であるというのにも関わらず、彼女の身体からは体温と心臓の鼓動など
が感じ取れる。

やはり、ヒトと対して変わらない。身体が炭素で構成されているか、データが元にな
っているかの違いだけだといったふうだ。

「(……何故俺はこんな事に気付くんだ? どうして、こんな事に関する知識なんて全く無い筈なのに……)」

シグナムを見て、気付いた事に疑問を感じながらもはやとすすかの方へと目を向ける。

「すすかちゃんと同じで、何も訊かへんのやね」

「訊いて欲しいのか?」

そう言う八神はやては、足が悪いのか車椅子を使用している。

前世の知識を頼りにすると、闇の書が影響を与えている筈だ。

「別にそういうんや無いんやけど……」

「気にするな。俺は何も気にしていない」

「優しいんやね」

「俺が優しい? 違うな。間違っているぞ、はやて。すすかは兎も角として、俺の場合はただの偽善だ」

そう。

自分が傷付くのが嫌であり、怖いだけなのだ。

ちよつとした小さな事であろうとも、他者を傷付ける事と自身が傷付く事の両方を恐れているのだ。

だからこそ、当たり障りの無いであろうとも思える事を言い、行動する。

それが傷つけ傷付く事もあるが、結果的に、たまたま自身にとって良い方向へと向いているだけ。

そしてそれがもし、結果が自身にとって悪い、嫌な方向へと向いてしまうとどうなるのだろうか。

「(考えるな……そんな事を考えても無駄なだけだ。時間的にも精神的にも)」

「どうしたん？」

「顔色悪いよ」

「いや、何でも無い……」

一度浮かび上がった考えは頭の中から消えるという事が無く、留まり続ける。

そういったものを隠すようにして、彼女達からの心配の声に対して簡単に応える事しか出来なかった。

「有難う御座いました」

「なのはー!」

「検査結果どうだった？」

「無事完治!」

「こつちも完治だつて」

なのはの体内にあるリンカーコアの大きさが完全に戻った。

そして、ユーノとフェイトの手には修復が終了したレイジングハートとバルディツシュが。

なのはに自身の完治が完了した事を教える様に、レイジングハートがキラリと光る。

「良かった」

「有り難う、フェイトちゃん、ユーノ君、アルフさん」

「まあ、無事で良かったよ」

「また頑張ろうね、レイジングハート」

【Of course, my master】

「それじゃあ、僕はエイミィさんに連絡するね」

「うん、お願いするね」

「そう……良かった！ 今、何処？」

《2番目の中継ポートです。あと10分位でそちに戻れますが》

「そう。じゃあ戻ったら、レイジングハートとバルディツシュについての説明を——」

ユーノとエイミィが空間モニターを通して、報告を兼ねた会話をしていると、突然に

エイミイの居る駐屯所のなかでけたたましく警報が鳴り始める。

その警報の原因を探ると、空間モニターにはとある地点の座標が表示されていた。

「——こりや不味い! 至近距離にて緊急事態!」

《都市部上空にて、搜索指定の2名を捕捉しました! 現在、強装結界内部で対峙中です》

「相手は強敵よ。交戦は避けて、外部から結界の強化と維持を!」

《了解!》

「現地には執務官を向かわせませす」

結界内で、10名の武装局員、そしてヴィータとザフィーラが向かい合っている。

「管理局か……」

「でもチャライよ、此奴等。返り討ちだ!」

「だが、警戒はしておけよ。もしもの事があれば主が——」

「わーってるよ。はやてには笑顔でいて欲しいもんな……」

ヴィータがグラーフアイゼンを握り攻撃をしようとした時、局員全員が道を開けるようにして後ろに退がり始める。

「——上だ！」

「ステインガーブレイド、エクスキョーションシフトッ！」

ザファイラの言葉に反応して、上を見上げるヴィータ。

だが、攻撃の準備が既に完了していたのか、刃の形をした100もの魔力弾が彼女等に向けて降り注いでいく。

「——つちい！」

魔力弾が命中し、大きな煙が発生する。

「少しは通ったか？」

「いや、駄目だな。気を抜くなよ」

「分かってるよ」

大量に魔力を魔力弾に込め消費したのか、クロノは肩で息をしている。

煙の向こうにある魔力と気はそれ程の変化を見せておらず、相手の2人が未だ健在である事を理解させて来る。

「ザファイラ！」

「気にするな。この程度でどうにかなる程、軟じゃ無い！」

煙が晴れると、何事も無いかの様にザファイラとヴィータが居る。

ただ、変化と言えば、ザファイラの腕には3本の魔力弾が刺さっている位だろうか。

どうやら防御をして、腕に刺さってはいるが難無く耐えた様だ。

そして、ザフィーラは腕に力を入れ、刺さっている魔力弾を粉碎してみせた。

「凄いな。少し力を入れるだけで刺さっている魔力弾を壊すなんて」

「あんなの、君にも出来るだろ」

「ああ、まあな。だが、並大抵の魔道士には出来ないだろうさ」

「この前のは違う奴らだな」

「彼奴、かなり強いぞ」

「ああ」

ヴィータとザフィーラの目は、真っ直ぐにゾイルを貫いている。

数々の戦いをしてきたであろう彼女等には、正体迄は理解からずとも柱の男であるゾイルが強敵だという事が、戦わずとも一瞬で理解をする事が、そして感じ取る事が出来た。

「アルティツミット・バインド……」

そのゾイルの言葉と同時に、ヴィータとザフィーラ彼女等2人の動きを封じる様に、要腕と両脚に鎖状のBindが巻き付く。

「クソツ、解除出来ねえ」

「かなり難解で入り組んだプログラムなんだ」

「安直な名前だと言う事は重々理解しているが、効果は折り紙付きだ。どれだけ藻掻いても、今の状態だとうしようも無い。大人しくしている。そして捕縛される」

「誰がするかよ！」

〔Explosion〕

ヴィータのその言葉に応える様に、グラーフアイゼンから葉莖が飛び出て、彼女の魔力が増大し、大きくなる。

「ほう……」

無理やり引き千切る様にして、自身とザファイラの動きを封じていたBindを解除した。

それを見て、ゾイルの口の両端が自身の意志とは関係無く釣り上がる。

「どうだ！」

「ふむ。威勢だけでは無い、か……。改良の余地があるな……」

グラーフアイゼンが排莖をした葉莖が、地へと落ちていく。

かなりの高度で飛行をし続けている為に、落ちていった葉莖が地面に打つかる音は聞こえて来ない。

「……お前、何処かで会わなかったか？」

「何だ？ プロポーズか？」

「ち、ちげえよ」

ヴィータはゾイルを見てみると、何か頭のなかで引つ掛かっている様な気がしていた。

それが何故なのか、一体何なのかという事は理解が出来ないでいる。

グラーフアイゼンを握る手に汗が出る。

「そうだな……。俺とお前達はかなり昔に数度……何度か会っている」

「何……!?!」

柱の一族として生まれ、一族を滅ぼし、かなりの年月が経過した。

そして最後の柱の男として次元世界を渡り歩いている時だ。ゾイルはヴォルケンリッターと戦闘をした事があった。

まあ実際のところは戦闘というよりも、ゾイルが近付いて来る虫を払ったかのように一瞬でケリがつき、ヴォルケンリッターが撤退をして行っただけなのだが。

「(だが……その時よりも強くなっている気がするな)」

向かい合っている両組は強く視線を交わし、睨み合っている。

その重く苦しい緊張を切り裂く様にして、エイミーからの通信がクロノとゾイルに入る。

《武装局員、配置終了! OK、クロノ君、ゾイル君!》

「了解！」

「了解した」

《それから今、現場に助っ人を転送したよ！》

「レイジングハート！」

「バルディッシュユ！」

彼女等2人の少女の手には修復が完了したデバイスが乗せられている。

マスターである少女等二人の言葉に応える様にして、宝石部をキラリと光らせるデバイス達。

「セーット、アーツプ！」

「Order of the setup was accepted」

「Operating check of the new system has started」

「Exchange parts are in good condition, completely cleared from the NEURO | DNA | IDENT alpha zero one to beta eight six five」

「こ、これって……?」

だが、いつもの様にバリアジャケットの展開、そしてデバイスの変形が行われない。
「今までと、違う……」

《2人共、落ち着いて聴いてね。レイジングハートとバルディッシュは新しいシステムを積んでるの》

「新しいシステム?」《その子達が望んだの。自分の意志で、自分の想いで! 呼んであげて、その子達の新しい名前を!》

【Main system, start up】

【Haken form deformation preparation: the battle with the maximum performance is always possible】

【An accel and a buster: the modes switching become possible. The percentage of synchronicity, ninety, are maintained】

【Condition, all green. Get set】

【Standby, ready】

「レイジングハート・エクセリオン!」

「バルディッシュユ・アサルト！」

【Drive ignition】

強大な龍の力 異様な結界内戦闘

「あいつらのデバイス……」

都市部上空で飛行魔法を使い浮いているヴィータの目には、デバイスの起動を成功させて、バリアジャケットを装着し終えた2人の少女の姿が映っている。

ヴィータはその少女等の姿を視認して少し驚いてしまっていた。その理由は主に2つ存在している。

まず1つ目は魔力だ。

2人の少女等のうちの1人は前回の戦闘時、撤退前にリンカーコアから出来る限りの魔力を抽出し、募集をした筈なのだ。

だが、そのような様子を見せる事も無くデバイスを構え悠然と立ち、此方を見据えている。

成長途中故の回復速度の速さだと言え、無理矢理にでも理解と納得をする事が出来るかもしれない。

そして2つ目の理由だ。彼女等の手にしているデバイスと着用をしているバリアジャケットが前回と比べて、微細ながらも変化をしているのだ。

そういった理由などから驚いているのはヴィータだけでは無かった。隣に居るザフィーラは勿論、クロノを始めとした管理局員等も同じ。

クロノはあらかじめ話を聞いていた筈なのだが、そうであつても驚きを隠せずいた。

だがそういった中で、ゾイルー人は驚くと言うよりも、「遂に来たか……」といったふうにして顔を綻ばせている。

〔Assault form, cartridge set〕

〔Accelerate mode, standby, ready〕

デバイス——再会した相棒である「レイジングハート・エクセリオン」と「バルデイツシュ・アサルト」——を起動させたなのはとフェイトの2人。

彼女等の手にしている相棒^{デバイス}の姿は少しかり変化をしていた。

それぞれの柄の部分に、レイジングハート・エクセリオンにはマシンガン型のカートリッジシステムである「CVK792-A」、バルデイツシュ・アサルトにはリボルバー型のカートリッジシステムである「CVK792-R」が搭載されている。

そしてバリアジャケットだ。

パツと見たところ、これと言つて変更された箇所は無いと思えるだろう。

だが、変化している場所は複数存在している。

先ずは、なのはの方だ。

詰め襟状のインナースーツ、肩部にはフィールドジェネレータである赤い宝石の追加、袖部には青いクラブが追加されて上半身を中心とした防御性能が強化されている。

次にフェイトの方だ。

見た目の方はなのはのものと比べて変化した部分は少なく、大きく変化はしていない。変化した部分を強いて挙げるのであれば左腕部、そして足回りに装甲が付いている事だろうか。それにより防御の強化はピンポイントに止める事が出来、魔力消費の増加を抑えた上で元来の高速機動を存分に生かせられる。

「新しいシステム……」

「これって——」

《——カートリッジシステムさ——》

バリアジャケットの展開と装着を終了させたなのは達2人の横に、突如として空間モニターが出現する。

そのモニターには、彼女達の知る男性——ブロンンの兄であるマッドの姿が映し出される。

当のマッドは「ドヤア」と言わんばかりの笑顔を浮かべており、その声は上ずつてい

る。

その顔と声から察するに、相当に嬉しく自信があるのだろう。

「カートリッジ、システム……？」

《既に知っていると思うが、君達の相手であるヴォルケンリッターが使用しているデバイスに搭載されているシステムと同様のものと言って良いものだ》

「それって危険なんじゃ」

マッドの言葉を聞き、彼女等はメンテナンスルームでの一連の会話を思い出す。

——『ベルカ式カートリッジシステム』。

薬莖に込められた圧縮魔力を開放し、デバイスないし自身の身体能力や使用魔法の威力を上昇させるなどといったふうに使役をする事が出来る。

だが、その効果が大きい分だけ反動もまた大きく強い。未成熟かつ幼い彼女等のその身体には、大きなダメージと負担は計り知れないものになる事は理解と想像をする事が出来るだろう。

それはヴォルケンリッターの使用しているものと同じシステムや管理局が使用している旧式のカートリッジシステムであれば、の話しだが。

《安心し給え。改良に改良を重ねて、危険度の低下と安全性の向上性のある程度計ってはある》

「そうなんですか……」

《だがそれはある程度というだけだ。無茶な使用を重ね続けるとデバイスにも、君達の身体にも大きな負担が掛かるだろうから気を付けなさい》

「——はい！」

「強装型の捕獲結界……ヴィータ達は閉じ込められたか」

「そうみたいだな。だが、脱出は出来なくても、そんじよそこらの魔導師には負けはしないだろう」

「ああ。ベルカの騎士は1対1で負ける事は、余程の事が無い限り在り得ないだろう」

管理局武装局員の数名が展開し、補強をしている結界の外。

シグナムと竜人はヴィータとザフィーラからの連絡が途絶えた事に気付き、この場に駆け付けたのだ。

管理局の武装局員等による強化され続けている為に、生半可な攻撃などではその結界に傷を付ける事が出来ないだろう。

【W·h·l·e·n·s·i·e·a·k·t·i·o·n!】

「レヴァンティン……お前の主は、此処で引く様な奴だったか？」

【Nein】

「そうだ、レヴァンティン。私は、今までもずっとそうして来た」

シグナムの足元に魔法陣が展開され、レヴァンティンからカートリッジである薬莖が1つ排出され、刀身が炎を纏う。

彼女の足元にある魔法陣。それはなのは達が魔法を行使する際に出るものとは別のものだ。

彼女等2人が使う魔法のプログラムである術式はミッドチルダ式で、内部に二重の正方形を持つ真円形をしている。

だが、シグナムやヴィータが使う魔法により出て来る魔法陣は正三角形のフレームと、その頂点および内部に円形の小型魔法陣が組み合わさっている。

「俺もこの結界をぶち破るのを手伝おうか？」

「いや、私1人で十分だ」

その言葉と同時にレヴァンティンを振りかざし、結界を斬り裂いた。

「私達は、貴方達と戦いに来た訳じゃ無い。先ずは話を訊かせて」

「闇の書の完成を目指している理由を——」

「——あのさあ、ベルカの諺にこう云うのがあるんだよ。// 平和の使者なら槍は持たな

い」

上空に居るヴィータとザファイラに対して質問をするのはとフェイト。

だが、当然その質問に対して正直に答える訳は無く、ヴィータはそれを一蹴する。

「話し合いをしようつてのに、武器を持ってやって来る奴が居るかバカ！ つて意味だよ。バーカ！」

「いきなり有無を言わずに襲い掛かって来た娘がそれを言う？」

「それに、それは諺では無く、小話の落ちだ」

「うっせー。良いんだよ、細かい事は」

なのはの反論、そしてザファイラによる冷静な指摘に、ヴィータは拗ねる様にして顔を背ける。

「ププツ」

「間違えてやんの」

「——其処、聞こえてっぞー！」

なのは達達2人の後ろに居る雄介と志蓮は思わず吹き出し、笑い出してしまふ。

そんな彼等に対して、ヴィータは殴りに行こうとする。

だが、それと同時に結界の上部に当たる部位に大きな魔力の波動が流れ、剣の騎士と竜人が乱入をして来る。

「結界の中に入って来たか。あの竜人……」

前回の戦闘を思い出したのか、それともその身体から滲み出ている魔力を感じ取つてなのか。雄介は竜人を見た瞬間に、思わず身体を震わせてしまう。

「雄介君、志蓮君、ドウム君、ユーノ君、クロノ君、ゾイル君……手、出さないでね！ 私、あの娘と1対1だから」

『アルフ、兄さん……』

『どうした？ フェイト？』

『私も……彼女と……』

『ああ……』

『わかった』

『私も野郎に、ちよいと話しがある』

なのはを始め、フェイトもアルフもそれぞれの相手であるヴィータ、シグナム、ザフィーラを真つ直ぐに見つめ、貫いている。

それは、先日の戦闘での雪辱を晴らす為。交戦した事のある自分が——という考え。

そして、最短で、真つ直ぐに、一直線に相手に向かって、話を訊く為に。

「クロノ、ユーノ！」

「何、雄介？」

「お前達は、もう1人の方と闇の書の主を捜せ。連中は見たところ、闇の書を持っていないみたいだからな」

「だが、君達は——」

「——此奴の相手が出来ると言うなら、交代しても良いが……？」

雄介と志蓮、ドウム、ゾイル、クロノ、そしてユーノ等の目の前には竜人が静かに立っている。

その様子から見えるのは先日の戦闘で勝利した事による慢心か、それとも負ける事は無いという余裕と絶対の自信から成せるものか。

竜人の大きな身体から放出されている魔力はかなりのものであり、その魔力に気圧されてゾイル以外は後退んでしまう。

目の前に居る竜人は厄介である事は自明の理であり、何とかしないと駄目なのは理解出来る。

それと同時に、闇の書を所持している者を確保する必要があるという事も理解出来ているのだ。

「わかった。無理はするなよ」

「了解した、執務官殿」

クロノとユーノは結界の外へと転移をすると同時に、竜人の魔力が先程よりも大きく

膨れ上がる。

「君は行かないの、ブロン君?」

「ちよつとした理由で、前線に出る事は出来ないんです。まあ、非常時になれば別ですが……」

「そつかく。でも、驚いたよ。突然連絡が入つて来て、必要なCVK—792が2個、タイミング良く送られてくるんだもん」

《それはすまなかつたね。ブロンは私の弟だからね。その友人の助けになるんだから、手を貸すのは当然だろう》

「有難う御座います。お陰で発注をする必要が無くなりましたし」

《それは良かった。送つた甲斐があつたというものだ》

駐屯所で、俺とエイミイはモニターを通して戦闘の様子を観ている。

モニターは2つあり、1つは戦闘の様子を。そしてもう1つはマツドの顔を映している。

睨み合う両組を見つめながら、助けに行きたいという気持ちを必死に抑えていた。

【Master, please call me // Cartridge Load

「」

「うん。レイジングハート！ カートリッジ、ロード！」

[Load Cartridge]

[Sir]

「私も、だね。バルディッシュ……カートリッジ、ロード！」

[Load Cartridge]

デバイスからカートリッジがロードされ薬莢が排出され、なのはとフェイトの魔力が増大する。

その増大した魔力は、彼女等を守るオーラの様にも見えるかたちで放出されている。

「デバイスを強化して来たか……気を付けろ、ウィータ」

「言われなくても！」

彼女等のデバイスとその様子を見て、その瞬間だけで前回のものと比べられない程に力が増している事を瞬時に見抜くシグナム。

ウィータは頷くと同時に、自身の標的だと決めたなのはの元へと移動をする。

「結局、やんじやねえかよ」

「私が勝つたら、話を訊かせて貰うよ！ 良いね!？」

「やれるもんなら、やってみろよ！」

【Schwalbfliegen】

【“Axelfin”】

飛んで来る鉄球を、上空へと移動する事で回避するのは。

それを予測していた様に、ウィータはなのはへと向けかつて突っ込んで行く。

「アイゼン！」

【Explosion. Raketenform】

カートリッジをロードして、グラーフアイゼンは強襲形態であるRaketenformに変形する。

「——ッ！」

【“Protection Powered”】

回転をしながら向かって来るウィータの攻撃を、レイジングハートは自信の意志で魔法を発動し、防御をする。

「——堅てえっ……！」

「本当だ！」

そのProtectionは、名称にPoweredが付いているというだけあつて強化されており、今までのProtectionを遥かに凌ぐ防御力を誇っている。

グラーフアイゼンのスパイクである部分とぶつかっているProtection

Poweredは、火花を散らしながらも弾こうとする程の堅さで、なのは自身でも驚く程のものだ。

噴射口から出る推進剤が増加し、威力を増大させるが、それでもProtectio
n Poweredを破るという事が出来ない。

【“Barrier Burst”】

展開しているProtection Poweredを爆発させて、なのはは爆風と
衝撃に逆らわずに、従うようにして距離を取る。

だが予想した攻撃とは別のものだったのか、油断をしていたのか。ヴィータは爆風に
煽られ、ダメージを受けて吹き飛ばされる。

【Let's shoot it, “Accel Shooter”】

【アクセルシューター!】

【Accel Shooter】

【シューツト! ——!】

「——つな!?!」

発動し、発射すると同時に両者は大きく驚愕し、驚きを隠せなかった。

如何せん、数が多いのだ。

レイジングハート
相棒の助力があったとしてもこれまでであれば10発撃つだけで精一杯であった

のに対し、今使用した魔法で発射されたのは20発もの魔力弾だ。

その数は生半可な、並の魔導師では出す事も出来ず、例え優秀な部類に入る魔導師であろうともその全ての魔力弾をコントロールをするという事は至難の業だといえる程のものだ。

それを、魔法と出会い数ヶ月しか経過していない筈の少女が実現させているのだ。

彼女のなかに大きく深い魔法の才能がある事を嫌でも理解させてくる。

「Control, please」

レイジングハートの言葉に従い、なのはは目を瞑り、20ものAccel Shooterを操作する為に強く集中をする。

1つ1つのAccel Shooterがなのはの周囲を囲い、円を描くようにして飛行し待機している。

「アホか。こんな大量の弾、全部制御出来る訳が——」

なのはの放ったAccel Shooterが移動し、そう言うヴィータの周りを包囲する。

周囲にあるAccel Shooterは常に動いており、隙があるようで殆ど無いといえるだろう。

そこから抜け出す為に迂闊に動けば、逆に当たってしまう可能性がある。

【It can be done, as for my master】

ヴィータは鉄球を操作し、なのはへと向けて攻撃をする。

が、その鉄球は4つのAccel Shooterにより粉碎されてしまう。

「——そんな!？」

「約束だよ。私達が勝つたら、事情を訊かせて貰うって。アクセル……」

【Panzers hindernis】

ヴィータは20もの魔力弾を見事にコントロールしてみせた事に驚きを隠せない。

だが、ヴィータは即座に気を取り直して自身を中心にして、赤色の防御魔法を展開する。

その装甲障壁は、多面体の形をしていて全方面からの攻撃を防ぐ事が出来るものだ。

「——シュート!」

なのはの掛け声と同時に、残りのAccel Shooterである6つのAccel

Shooterは、Panzers hindernisを叩く様にして当たつてい

く。

フェイトとの戦闘時の時に使用したそれよりも魔力を注ぎ込んではいるが、Accel

Shooterに内包されている魔力の方が多量に強いのか、当たった箇所から

次々とヒビが入っていく。

お互いのデバイスがぶつかり合い、込められていた魔力が火花となって周囲に飛び散る。

ぶつかり合つては離れ、再度接触をする。

それを何度も繰り返していくフェイトとシグナム。

高速で動く彼女等は、各々の魔力光の色の線を上空に描いていた。

その様は、遠くから眺めていると闘いによるものの光とは思えない程に綺麗なものだ。

「Plasma Lancer」

バルディツシュの補助により、生成される金色の発射体と魔力弾。

その数は16と多く、これもまた彼女の成長とバルディツシュの強化による結果だろうか。

それだけでは無く彼女自身の実力と才能があつてこそというのもあるだろう。

「プラズマランサー……ファイアー！」

発射された魔力弾を、シグナムはレヴァンティンに炎を纏わせて強く振るい、それを弾き飛ばす。

「ターン！」

が、フエイトの命令と同時に飛ばされた Plasma Lancer は向きを逆転させ、再びシグナムの方へと向かって行く。

「……レヴァンティン」

【“Sturmwinde”】

飛来してくる Plasma Lancer に対し、シグナムは魔法による高速移動で上昇する事により回避をする。

【“Blitz Rush”】

Plasma Lancer の速度が上がり、回避を選択したシグナムを追い立てる様にして迫っていく。

シグナムは、避けるという行動を止め、レヴァンティンに纏わせてあった炎を、飛んで来る Plasma Lancer へと飛ばして相殺する。

全ての Plasma Lancer を撃ち落として直ぐ、シグナムの背後に、フエイトがバルディッシュを手にして近接攻撃を仕掛ける。

【“Haken Form”】

【“Schlange form”】

それぞれのデバイスが、カートリッジをロードして変形していく。

バルディッシュは魔力刃の付いた斧に、レヴァンティンは幾つもの節に分かれた蛇腹

劍——鞭狀連結刃へと形を変える。

お互いの攻撃は命中し、大きな爆発を起こす。

それと同時に、距離を取る彼女等。

フェイトの左腕には2つの擦り傷が。

シグナムの方は、バリアジャケットを抜いて胸に擦り傷が出来ている。

「強いな、テストアロツサ……それに、バルディッシュユ」

【Schwert form】

【Thank you】

「貴女とレヴァンティンも……シグナム」

【Danke】

「此の身に成さねば成らぬ事が無ければ、心躍る戦いであつた筈だが……仲間達と我が主の為、今はそうも言つてられん」

Schwert formと戻つたレヴァンティンを、鞘へと納刀し、構え直すシグナム。

それと同時に彼女の魔力が増大し、足元に古代ベルカ特有の形である三角形の魔法陣が展開される。

「殺さずに済みます自信は無い。此の身の未熟をゆるしてくれるか？」

「構いません。勝つの、私ですから」

「デカブツ、アンタも誰かの使い魔か？」

「ベルカでは、騎士に仕える使い魔とは呼ばぬ！ 主の牙、そして盾——守護獣だああ！！」

「おんなじ様なもんじゃなかよお！」

お互いの魔力を込めた拳と拳がぶつかり合って、その度に大きな衝撃波が発生する。それは道路を形成しているコンクリートを捲り上げ、周囲のビルの外壁にヒビを入れて、次々と剥がしていく。

「(状況は、余り良くないな……)」

「戦闘の最中に考え事かい!？」

絶える事無く迫り来るアルフの拳を、ザファイラは右に左にといなし、躲していく。上空では、なのはとヴィータが、シグナムとフェイトが戦闘を繰り広げ、花火の様に魔力による光を明滅させている。

「……………」

なのはとフェイト、アルフの3人を見送り、更にクロノ等2人と別行動を選択した転

生者組。

目の前には、大きな身体をした竜人が存在し、立ち塞がっている。

その存在と魔力はかなり大きく、幾重にも重なり固く閉ざされた難攻不落の城壁のよ
うに堅く思えてくる。

「悪いけど、今回は俺に譲って貰うぜ」

「おいおい志蓮……この前の戦闘を忘れたのか？ 彼奴は相当に出来るんだぞ。ゾイル
を除いた俺達による総掛かりで抑える事が出来るかどうか——」

「——大丈夫さ」

心配する雄介の言葉に、志蓮は余裕を感じさせる顔をして応える。

「何か策でもあるのか？」

「策なんてもんは無い。此れっぽちも無い。一切無い。存在していない」

ドウムの質問に、志蓮は呆れ返ってしまう位に大きな声で返事をする。

「無策で突っ込んで、どうにか成る相手じゃ——」

「——やらせてやれ」

ゾイルの言葉に、雄介とドウムは黙り込む。

「ありがとよ」

ゾイルに礼を言いながら竜人の前へと進み、強く睨み付ける。

「ゾイルとの模擬戦の時もそうだったけど、嫌だったし、な……。だけどよお、今のままじゃあ同仕様も無いって事だけは理解出来るぜ。認めるよ。今の俺では、お前に勝てない。勝機なんてものは無いって、ハッキリと理解出来る」

「……………」

「だからよ……使わせて貰うぜ。『憑依経験』をよお」

「——な、何だ!? いつの間に?」

「見えなかった。ゾイルは見えたか?」

「ああ。ハッキリとは言えないが、見えた。目で追う事は出来た……目で追う事は、な」
 竜人は、一瞬にして雄介達の目の前に建っているビルへと吹き飛ばされ、その巨軀を埋まらせていた。

志蓮は鎧を装着している。それは超サイヤ人の放つものと同じ程の輝きを放ち続ける金色の鎧。

そして、手には紅と黄色の2つの槍——『破魔の紅薔薇』と必滅の黄薔薇が握られている。

鎧は彼自身の身体の大きさに合わせたものへと変化している。

だが槍の方は長く、破魔の紅薔薇の長さは2mもある為に、少しバランスが悪く見え

る。

「知ってるか？　『ランサー』の『サーヴァント』っていうのは最速のサーヴァントらしいぜ。まあ、俺はサーヴァントじゃ無いけどな。それでも、その英雄達に迫る程の速さを出す事が出来る。——付いて来れるか？」

「……………」

再び、瞬きをしてしまったのかと疑わざるを得ない程の速さで移動し手にした槍に依る刺突攻撃を次々と繰り返していく志蓮。

志蓮の身体から、大きな魔力と気が。そして握られている長さの異なる2つの槍からは禍々しい程の膨大な魔力が発せられている。

その槍から出ている魔力は、この結界内に居る全員が認識出来るだけのものであり、更に外で結界の維持をしている局員達にも感じ取れるだけのものだ。

「うっかり結界に当たらないようにしないと。少しでも掠つてしまえば、解除されてしまう。あかいあくまのうっかりみたいな事に成らないように細心の注意を払って——」

その槍に依る攻撃が、竜人の身体を掠めていく。

竜人の身体は魔力で構成されているのか、一瞬だけ乱れる。

その竜人の変化に気を取られて、志蓮の動きが止まる。

その隙を逃さずに、竜人は一瞬にして距離を取り、2対の砲身から無数の魔力弾をマ

シンガンの様に連続で発射をしてくる。

「——見えるっ！」

音速で飛んで来る魔力弾を、志蓮はそれぞれの槍に当てていく。

破滅^{ゲイ}の黄薔薇^{ホウ}に当たった弾はそのまま結界の端の方へと飛んで行き、破滅^{ゲイ}の紅薔薇^{シャルグ}に当たった弾は当たると同時に霧散する。

破滅^{ゲイ}の紅薔薇^{シャルグ}にある、魔力^{マナ}と魔力^{オド}の結合を阻害し、持たされた方向性を失くす効果が働いたのだ。

弾き飛ばされた魔力弾はなのは達の間を抜いて行き、結界の端々へと飛んで行く。

結界の壁である部分に当たると同時に、結界は大きく揺れる。

「クソッ。あの槍による攻撃の魔力余波が」

「見えない、見えないぞ。畜生」

「馬鹿野郎！ 目で追うのでは無く、気で追え!!」

志蓮の攻撃の1つ1つがかなりのものであり、槍が竜人の身体に当たると同時に強くなる大きな衝撃が疾走する。

「流石に手を抜いては要られない、か……」

「何？」

志蓮から距離を大きく取り、竜人は口を開く。

竜人の身体は映像が乱れる様にして、不安定な状態だ。

だが、少し魔力を込めるだけで直ぐに安定して元の姿に戻る。

「この状態のままではケリがつけばと思っていたが、そうそう上手くいかないみたいだな。転生者が相手であれば尚更」

「今の今まで、ずっと手を抜いていたってか？」

「そうだとしたら……？」

先程の志蓮への意趣返しなのか、竜人は挑発的に言葉に出す。

「俺には、この形態以外にも他の姿がある。1つはスピード重視の形態。これは、俺自身でも未だコントロールが出来ていない。動く身体に対して、目で捉えて判断するという脳の働きが追いついていないからだ」

話しながらも、竜人の体内から魔力が漏れ出して来る。

その魔力はバーコードの様な形と成って、竜人を覆い隠していく。

「そして、もう1つ。全体的な能力を向上させた姿。いや、エヴォリユーション進化だとしても表現した方が良さそうか。この力の元と成ったものが出て来る原作的に考えて」

バーコードが大きくなり、それと同時に魔力も増大する。

隠れていた竜人の身体が現れ、そして変化した姿が志蓮達の視界に入る。

脚と肩、そして腕部は黒い装甲で覆われ、所々に金色の装飾が成されている。

腕の先である、手の甲の部分と脚には金色に光り輝く大きな3本爪が。

胸は、緑色の装甲が無くなり、代わりにと言つては何だが、白と赤の2色をした竜の顔の様なものがある。

尻尾と手、そして顔は青色で、金色の冠の様なものを冠っている。

背中の羽は赤色へと変色し、大きく成っている。羽と言うよりも翼だと言つた方が正しいだろうか。

そして、その身体の大きさは、四肢は伸び、5m程度だった身長はその10倍は超えており、目測で60mもの巨軀と成つた。

「——な、何だよ……あの大きさは……」

「大きさはじゃ無い。魔力もそうだ」

「何なの、あれ……？」

「し、知らねーよ……此方が訊きてえくらいだ」

「あれは……！」

「……大きい」

その変貌を、志蓮と雄介達だけでは無く、なのはやフェイト、そしてヴィータとシグナム達も目にし、驚きを隠せないで居た。

「図体がでかく成つたな。まるで、外道衆みたいだぜ。ま、的が多く大きく成つたと思え

ば良いの——」

言い終える前に、志蓮は結界の端近く迄、吹き飛ばされる。

竜人がその大きな腕を振るった所為か、結界内に暴風が発生する。

その風は余りにも強く凶暴で、飛行していたなのは等に戦闘を中断させ、空中に浮かんでいながらも体勢を崩させる程のものだ。

「し、志蓮!」

「今度こそ、俺にも見えなかった。奴は予想以上にパワーアップしている」

「此れじゃあ、^{ワイバーン}竜人じゃ無くて^{ドラゴン}龍人じゃ無いか」

その大きさと強さを目にして、雄介は唾を飲み込み、喉を鳴らす。

唾が出て来るだけの水分がある筈なのに、口の中はカラカラと乾き、渴いている様な錯覚が存在していた。

「ド、ドラゴンだつていうなら、俺の……」

「無理はするなよ、トカゲ野郎。話を聴く限りじゃ、あの前の形態とでさえ、対等に渡り合えなかつたらしいじゃねえか。辞めとけ。その方が賢明だ」

「く、くそつ……」

ドゥームのその指摘に対し、雄介は強く口を閉じる。

何も言い返せないのだ。

前回の戦闘で、実際に敗北をした。そして、今回でも勝てる見込みが、可能性が全くと言っていい程に無く、想像をする事すらも出来ない。

更に、前回の戦闘で竜人は力の一部しか見せなかった。

今回も少ししか見せていないのだとしたら。他にも、何かを隠しているのだとしたら。

そんな不安が押し寄せて来て、雄介はドウームに反論をする事も前に出る事も出来なかった。

『シグナムやヴィータ、そして竜人が負けるとは思わんが……此処は退くべきだ。シヤマル、何とか出来るか?』

『何とかしたいけど、局員が外から結界を維持してるの。私の魔力じゃ破れない。シグナムのファルケンか、ヴィータちゃんのギガント級の魔力を出せなきゃ……それよりも上の魔力が必要かも』

結界の外では、緑色の騎士甲冑を着込んだ女性——シヤマルが、闇の書を手にして中の様子を伺っていた。

だが、彼女の言葉の通りに、結界は局員の手によって維持し、補強されている。中の様子を覗く事や入る事は出来ても、破るのにはそれ相応に膨大な魔力が必要なのだ。

『2人とも、手が離せん。やむを得ん。あれを使うしか』

『理解ってるけど、でも……』

ザフィーラの言葉に対し、躊躇いを見せるシヤマル。

「そらそらそらっ」

再び龍人の懐へと潜り込んで、槍による連撃を行う志蓮。

だが、龍人は反撃や避けるという行為すらもせずただ立っているだけだ。

「——なっ、硬てえ!?!」

龍人に当たった槍は跳ね返され、大きく体勢を崩してしまふ志蓮。

そんな大きな隙を見逃す事無く、龍人はその大きな拳で志蓮を殴り飛ばす。

「ぐわああああああ」

槍をクロスさせて防御をしたが、その防御の上から結界端にあるビルへと吹き飛ばされる志蓮。

志蓮は崩れたビルの瓦礫の中から何とか身体を起こして、抜け出す。

「(速い……それに、かなりのパワーだ。そして何よりも硬い。まるで)……まるで、身体を強化させずに岩盤を殴り付けた様な……。って、何言ってるんだか」

口から出ている血を手の甲で拭い取ると同時に、手にしている2本の槍を見る。

「——な……!?」

手にしているその2本の槍——破滅の紅薔薇と破滅の黄薔薇は見事に折れ、砕けていた。

折れた破滅の紅薔薇の長さは半分となり、漸く身長と釣り合う位の長さになった。

そして、着用していた鎧には大きなヒビが入っていた。

「おのれ……——おのれ、おのれおのれおのれおのれ……!!!」

身を灼き尽くし、焦がしてしまうかと思えてしまう程の激情と怒りが込み上げる。

理由なんてものは理解が出来ず、知ろうという意志は無い。

だが、目の前に存在している龍人は許せないという抗い難い程に大きく強い感情が自分というものを支配しようとしている事だけは自然と理解をする事が出来た。

だが——。

「(……我は、俺は一体……!? 何故、こんなに心を乱しているんだ? どうして……?)」

何故か急に、唐突にして冷静に、そして平常時通りの感情の振り幅が戻る。

それは頭の上から強烈に冷えた水である冷水を掛けられたかのようにであり、一瞬にして先程の強いものは消え失せていた。

逆に、今度は冷静に。そして、目の前や現在置かれている状況などがクリアに見え、感じ取る事が出来る。

「そ、そんな……借り物だつてのに……。クソっ」

瓦礫の上に立ち上がると同時に、背後に王の財宝を展開し、

その折れた槍を王の財宝の中へと収納する。

「どうすつかな……。相手は龍人だ。龍人……。龍、か。なら……」

背後で光り輝いている王の財宝の中から黒い鞘に銀色の柄を持つ大剣を取り出す。

「（『幻想大剣・天魔失墜』……龍殺しの剣だ）。……殺す必要は無いが、その位のものを使う必要があるかな、今の俺には」

柄には青い宝石が嵌められており、空で戦っているなのは達の魔力弾の光に照らされてキラリと輝く。

少し魔力を込めると刀身と柄は眩い光を放つ金色へと変色をする。

それと同時に、大気を震わせる程の魔力が結界内に満ちる。

「憑依経験……」

読み取るのは、この剣を使用していた英雄である『ジークフリート』、そしてこの剣を創り出し使用したのであろう神の経験。

それらを読み取り、魔力と気を通して自身の身体に伝え、身体能力と動体視力を一時

的ではあるが底上げし強化する。

無理矢理ではあるが、英雄の域へと足を踏み入れる事が出来るのだ。

その幻想大剣・天魔失墜の放つ光は神々しくも禍々しくあり、その剣が聖剣であると同時に魔剣であるという事を証明している。

「行くぜ」

地を強く蹴り、龍人の元へと移動する。

その速度はとてつもなく、移動をするだけで衝撃波が、ソニックムーブが発生して周囲の瓦礫を吹き飛ばしていく。

その衝撃波の影響で、脚元や周囲にあつたコンクリートの破片が舞い上がって散らばり、更に細かくバラバラになる。

「おらあああああああつ!!」

強風を巻き起こしながら龍人へと斬り掛かり、その身体へと攻撃を当てる。

だが、その刃は当たりはするが、食い込む事もその表面を斬り削ぎ落とすという事も無くぶつかっただけだ。

「(腕が震えてやがる……龍殺しなんだから多少はダメージが通ってくれても良いのによお)……涼しい顔をしやがって」

「終わりか?」

龍人が少し身体を動かすだけで、周りの瓦礫と同時に志蓮は再び結界の橋へと飛ばされてしまう。

「いや、まだだ！」

途中で体勢を立て直し、空中で見えない壁を蹴るかの様にして龍人に向けて跳び掛かる。

「スプレンドーブレード」

龍人は腕の爪から光の剣を発生させ、志蓮の持つ剣にピンポイントでぶつけ、鏢迫り合いを起す。

「こ、此奴……！」

自身の身体よりも大きな光の剣と手にしている大剣をぶつけ、周囲に火花が散る。

「な、何て正確な斬撃だ……下手をすれば俺の身体は上下に分かれ、さよならしてたぜ」

「なのはとフェイトの奴、善戦してるみたいだな。だが、志蓮の方は……」

「大分苦戦してるみたい」

《それだけ相手が強いという事だ。転生者だから余計に厄介といったところかな》

モニターに映し出されている彼等は戦闘を続けている。

だが、志蓮と竜人を始めとしたのは等もまたかなりの速さで戦闘を行っている為

サーチャーによる補足が追い付いていない。

残像が走っている様子が辛うじてモニターに映し出されているだけだ。

映し出されてはいないが、雄介とドウム、ゾイルは結界内で観戦。

クロノとユーノは結界内外で闇の書を所持している者を搜索している。

「(なのはとフェイト、志蓮も気をしっかりと使つてやがる。それでも勝つ事は出来ないのは相手の地方の方が上だからか。ヴォルケンリッター……。原作と比べて相当に強く成つてやがる)」

「クロノ君達、見つけたかな」

「いや、まだだ。結界外にクロノ等局員以外の気を感じるが、接触はしていないようだ。

多分、闇の書を持つている奴だ」

《おや……?》

「どうしたんですか?」

《何か、結界外で大きな魔力と空間の歪みが起きたみたいだが……》

「え、そうなんですか? 此方では全く反応無いのに」

《多分誤作動だろう。一瞬だけだったからね》

マッドの言葉を聞き、俺は気と魔力を探る。

だが、感じ取る事が出来るのは直ぐ側に居るエイミイ、マッド、局員達、闇の書を所

持しているだろう人物、なのは達の家族、結界内に居る皆のものだけだ。
「(気の所為だと良いんだが) ……!」

「搜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いで貴女を逮捕します。抵抗しなければ弁護の機会が貴女にはある」

結界の外で、クロノは緑色のバリアジャケットを着た女性を見付け、その女性へと近付く。その女性の手には闇の書が握られており、この事件の関係者である事だけは確か
なようだ。

「同意するなら武装の解除を——」

「——えっ!?!」

クロノのその言葉を聞きシヤマルは抵抗をどうか迷っていると、何処から現れたのか仮面を付けた謎の男がクロノを蹴り飛ばす。

クロノはそのまま向かい側のビルの屋上にあるフェンスへとかなりの速度でぶつかってしまう。

クロノの着用している黒いバリアジャケット、そして“仮面の男”の脚からは煙が発生しており、かなりの速さで繰り出されたものだという事を理解させてくる。

《エイミー、今のは?》

「わ、理解りません。こっちのサーチャーには何の反応も……何で、どうして?」

その様子は当然、エイミー等もサーチャーを通して目撃をしている。

だが、その仮面を付けた謎の男は何処からどのようにして現れたのか計測、そして捕
捉出来ていなかったのだ。

「貴方は?」

「使え」

「——っ!」

その仮面の男の言葉に、シャマルは驚いてしまう。

何を使えという意味なのか。傍から見ているとしても、その言葉の意味は理解できない
いだらう。

だが、シャマルの方にはそれに対して予想をし、その意味を理解する事が出来た。

先程ザフィーラと念話をし、その際に使うかどうかを悩んでいたもの。

この男は一体何者なのか。

そして、その方法を何故この男は知っているのだろうか。

そういつた疑問が頭の中をグルグルと渦巻いていく。

「闇の書の力を使って結界を破壊しろ」

その仮面の男の言葉で、彼が此方がしようとしていた事を理解しているという事を確信した。

そしてそれにより、目の前に居る男に対しての疑念と警戒心がより一層強くなる。

先程も浮かんだ、何者なのか、何故知っているのか、何が目的で接触をして来たのかという疑問が。

だが、状況がそういつた事を考える時間を与えてはくれない。すぐさま決断して行動をするべきだろう。

それでも踏み切る事が出来ない。

「でも、あれは」

「使用して減ったページはまた増やせば良い。仲間がやられてからでは遅かろう」

その言葉を聞き、シヤマルは決断をする。

闇の書のなかに存在している魔力の一部を消費し、結界の中に居る仲間を救出する事を。

だが――。

「その必要も、心配もありませんよ」

何処から聞こえたのだろうか。

また、別の男の声が聞こえた。

シャマルも仮面の男も、クロノ、そしてサーチャーを通して観ているエイミー等もその声の主へと目を向ける。

そこには、明らかに人外だと言える存在が居た。

河童だろうか。

日本には妖怪と呼ばれる人外のものが存在し、そう呼ばれるものの持つ特徴と合致する部分が多い。

鋭く頑丈そうな青白いウ鱗が身体の殆どを覆っており、頭の上には皿のようなものがある。

「お前は……」

その姿を見て、クロノとエイミー等は大凡の検討をつける。

それがどういった存在なのかを。

そして、何故介入をして来たのかという疑問もまた出て来る。

「何者だ？」

「——え？」

その存在を見て、シャマルと仮面の男は強く警戒をする。

一目見ただけで、目の前の存在が如何に厄介で強い存在かを理解したのだ。

そしてシャマルは、目の前に居る人外と仮面の男が知り合いでは無いという事を知り、更に気を引き締め、警戒をする。

「結界を破壊するのと管理局の魔導師を相手にするのは我々が引き受けましょう」

「貴様は何者だと訊いている！」

河童のような人外の言葉を聞き、仮面の男は強めの語気で再び、その正体について問いかける。

シャマルもまた仮面の男同様に、目の前の異形な存在へに対しての疑問が拭えなかった。

仮面の男同様に何者なのか。

何が目的なのか。

何故、こちらの手助けをするのか。

彼、もしくは彼女には何かしらのメリットが存在しているのか。

目の前に存在している人外はとも異様な存在であり、この人間界において異質な存在であるという事を嫌でも理解させるものを持っている。

「何者か、ですか……。そうですね。外道衆が一人、『水虎』とでも名乗りましょうか」

その水虎の言葉は清流を流れる水のように冷たく、肌に染み込むようにして耳に届い

てくる。

「外道衆……?」

仮面の男はオウムのようにしてその言葉を確認する。

仮面の男、そしてシャマルは勿論そんなものを聞いた事は無かったのだ。そしてそれが、余計に警戒を促してくる。

「——おや?」

「——バインド?」

水虎を始め、仮面の男、シャマルの3人の動きをバインドが封じている。

「ご苦労な事ですね、管理局の魔導師」

「そう思うなら大人しく倒されてくれないか……?」

「残念ですが、それは無理な話です。こちらもこちらで色々としなくてはならないので」
クロノと軽く言葉を交わしながら水虎は、自身の動きを封じているバインドを斬り裂く。

それは水虎自身のものだけでは無く、仮面の男のものやシャマルのものもまた同時に、だ。

「どういうつもりだ?」

「あなたは一体……」

「別に、たいした事はありませんよ。ですが、まあ……。何の目的があつてこんな事をするのか。そういう疑問に思つているのでしょうか？　今は答えられませんが、そのうちに嫌でも理解するでしょう」

その詳細を語る事無く、水虎はクロノへと目を向ける。

その瞳は、外道衆に属している筈であるのに……いや、属しているからこそだろうか。純粹で、そして何処までも吸い込まれそうな程に深い青色をしている。

「先程、我々と言つたな。だが、貴様は一人だけに見えるのだが」

仮面の男の言葉を聞き、水虎はやれやれといった感じに首を振りながら応える。

「ええ、確かに言いましたよ。我々と、ね」

その言葉と同時に、周囲の隙間という隙間から無数の赤いヒト型の生命体のようなものが湧き出てくる。

「——なっ!？」

誰がその驚愕の声をあげたのだろうか。

辺りのビルの屋上に存在しているスペースといえるスペースに名無し連中が武器を手にしながら立っている。

軽く見積もつても300程は居るだろう。

だが、幸いと言って良いだろうか。

これだけの数が居ながらも、地上に居る人等は気付かずに平常通りに過ごしている。

「よお、外道衆」

「貴方は、確かサイヤ人の」

「サイヤ、人……」

「(サイヤ人？ 伝説でしか存在しない筈)」

「ブロン、お前」

ナナシ連中が出ると同時に、クロノの気を頼りにして瞬間移動をしたのだ。

目の前に居る水虎と名無し連中を睨み付ける。

「志葉の一族同様にモチカラを操るもの……」

親の敵を見るかのように睨み返してくる水虎。

その視線を無視し、シヨドウフオンを手にする。

「一筆——っ!？」

筆モードにしたシヨドウフオンで文字を書こうとすると、何かが飛来して来る。

それを回避しようと試み、成功をするがシヨドウフオンがその攻撃に当たってしまった。
う。

シヨドウフオンは何か貫かれたように穴が空いている。木製である為に容易く撃ち貫かれてしまったようだ。

「いくらモチカラを持っていてもそれが使えないと変身が出来まい」
「くそっ……」

壊れたシヨドウフオンを片目で見やり、思わず舌打ちをしてしまう。

シヨドウフオンに出来ている穴から一滴の水が零れ出て、握っている手が濡れる。

「——水？　——しまった！」

そちらに気を取られた瞬間、水虎は結界へと手を向ける。すると結界は何か斬られたかのように切れ目が走り、解除されてしまう。

「——結界がっ」

「解除されたのか……？？」

それは結界の中で行われていたなのはやフェイト、シグナムにヴィータ等による戦闘を中断させるには十分なものだった。

『皆、今のうちに撤退を』

『分かった』

シヤマルからの念話に返答をし、前に居る相手へと目を向ける。

突然の事ではあるが、そうであっても慌てる事も取り乱す事も無い。

戦いというものは生命のようなものであり、常に変動をし続けている数字のようなも

のでもある。

突然何か予想していなかった事が起きたとしても可怪しくは無いのだ。

「すまん、テストアロツサ。この勝負、預ける」

「——シグナム！」

「ヴォルケンリツター、鉄槌の騎士……ヴィータ。あんたの名は？」

「なのは……高町なのは」

「たかまちなぬ……なの……ええい！ 呼び難い！」

「逆ギレ？」

「ともあれ、勝負は預けた。次は殺すかな、ぜってえだ！」

「えつと……ヴィータちゃん!？」

それぞれに言葉を交わして、撤退をしていくヴォルケンリツターの面々。

後に残されたのは龍人を始め、クロノとゾイル等を中心とする管理局の部隊、なのは、

フエイト、アルフ、ユーノ、雄介、志蓮、ドゥーム。

そして、こちらへと視線を向け続けている水虎率いる外道衆だ。

《状況は?》

「魔力による斬撃? でも、魔力は感知してないし……」

《エイミイ?》

「——ぶ、物理被害はありません。でも、ジャミングされてサーチャーとレーダーが」
サーチャーによる観測を続けていたエイミイとリンディ。

変化した状況に対応して逃げるヴォルケンリッターを追いかけようとするのだが、相手側の方がやはり上手なのか、その方法が使えないように対策をされている。

『なのは、フェイト、アルフ……大丈夫?』

『うん。こっちは大丈夫』

ユーノからの念話を受け取り、戸惑いながらも落ち着いて返事をするなのは。

なのははヴィータが飛んでいった方向を見て、そこからビルの上に居る名無し連中へと目を向ける。

「……………」

「——お、おいつ!」

「止める志蓮。今はあっちの方が重要だ」

ヴォルケンリッターの後を追いかけるようにして高速で移動をする竜人。

志蓮は追いかけようとするが、ゾイルの言葉を聞き踏み留まる。

「……………」

「……………」

互いに警戒をしつつ、様子を見合っている。

クロノは後方で局員等に前に出ないように指示を出しつつこちらへ目を向けている。

仮面の男は逃げようとは思うが、迂闊に動いてしまえばどうなるかわからない為には動けないでいるようだ。

「嫌ですね。何ですか、この重苦しい空気は？ 別に今直ぐ殺し合いをしようという訳では無いのに」

水虎は、やれやれといったふうにして首を横に振りながらこちらへと目を向ける。

「こちらのするべき事はし終えたので退散をさせて貰いますね。そろそろ水切れも近いですし」

「——待て!!」

そう言いながら、水虎は名無し連中と共に隙間を通って向こう側へと帰っていく。

「……………」

「あの男は何処へ？」

仮面の男もまた姿を消している。

おそらく水虎の方へと注意が向けられた隙に撤退をしたのだろう。

「あいつの気を追えるか、ブロン？」

「……駄目だ。何かに邪魔されてるみたいだ」

嘘だ。

気を追う事自体はどうという事無く出来ている。

ただ、その気が向かった先にある気が問題なのだ。

下手に喋り、動いてしまえば後々の展開にも影響が出て来るだろう。

そんな不安から、又もや嘘を吐いてしまう。

「取り敢えず、此方も撤退か……」

「また、寂しい想いをさせてしまったな……」

家の中から出、外の空気を浴びて頭を冷やす。

「それにしても……お前を助けたあの男と、化物で良いのだろうか？ 一体何者だ？」

「理解らないわ。少なくとも当面の敵では無さそうだけど……」

仮面を着けた男。そして異形の存在。

目を閉じただけで頭の中に浮かび上がってくるその姿は異様なものであり、それがどれだけ強烈な印象を与えてくる姿だったのかを理解させてくる。

彼等の目的は一体何なのか。

管理局に対して敵対的とは言えないまでも、こちらを助けるような行動を取ったのだ。

少なくとも、直ぐに敵となりぶつかる訳では無いだろう。

「管理局の連中もこれで益々本腰を入れてくるだろうな。だが、あまり時間も無い」

「……うん」

「一刻も早く、主はやてを闇の書の真の所有者に」

「そうね」

「重ねて言うけど、カートリッジシステムは扱いが難しいの。本来なら、その子達みたいな繊細なインテリジェントデバイスに組み込むようなものじゃ無いんだけどね。本体破損の危険も大きいし、危ないんだけど……」

「確か、ブロンンの兄のマッドさんが」

「そう。彼の技術は確かだからね。まあ、どんなドツキりびつくりシステムが積み込まれてるかわからないけど」

カートリッジシステムはドーピングを行うようなものでもあり、身体とデバイスに多大な負担を掛けるものである、というのが今迄のものだ。

だが、創り出したのが転生者の1人でもあるマッドであるのだから、何かしらこちらの知らない術や方法でそういったデメリットを極力小さくしたものになっていても可怪しくは無いだろう。

それでも、成長途中の小さな身体にとつては大きなものと変わりは無いのだろうが。「まあ兎に角、危険なものなの。でも、その子達がどうしてもつて……。よっぽど悔しかったんだね。ご主人様を守ってあげられなかった事とか、ご主人様の信頼に応えきれなかった事が」

「ありがとう、レイジングハート……」

【All right】

「バルディツシュ……」

【Yes, sir】

「モードはそれぞれ3つずつ。レイジングハートは中距離射撃のAccelと砲撃のBusterで、フルドライブはExelion Mode。バルディツシュは汎用のAssault、鎌のHarken、フルドライブはZanber form」。の筈なんだけど……」

含みの有る言い方だ。

先程言ったマッドが改良をしたシステムだという事が関係しているのだろう。

「兎に角、破損の危険があるから……フルドライブは成る可く使わないように。……特になのはちちゃん」

「——はいっ?」

突然の名指しに驚くのは。

「フレーム強化をする迄、Exelion Modeは起動させないでね」

「はい」

「問題は彼等の目的よね」

「ええ、どうも腑に落ちません。彼等はまるで自分の意志で闇の書の完成を目指しているように感じますし」

「それって何か可怪しいの? 闇の書つてのも、要はジュエルシードみたくすっごい力が欲しい人が集めるようなもんなんですよ? だったら、その力が欲しい人の為にあの娘達が頑張るつても可怪しくは無いと思うんだけど」

アルフの疑問に対し、自身の持つ知識を整理していくクロノ。

そして、自分とアルフの間にある認識の違いを出来る限り埋める為に説明をしていく。

「第一に、闇の書の力はジュエルシードみたいに自由な制御の効くものじゃ無いんだ」

「完成前も完成後も純粋な破壊にししか使えない。少なくとも、それ以外に使われたという記録は一度も無いわ」

「……そうか」

リンデイによる捕捉説明も聴き、納得をするアルフ。

「それからもう一つ。あの騎士達——闇の書の守護者の性質だ。彼等は人間でも使い魔でも無い」

クロノの言葉を聴き驚くなのはとフエイト、ユーノにエイミイの4人。

「闇の書に合わせて魔法技術で造られた擬似人格。主の命令を受けて行動をするただそれだけの為のプログラムに過ぎ無い筈なんだ……」

闇の書の呪い 愛する家族の為に

「使い魔でも人間でも無い擬似生命っていうと、わたしみたいな——」

「——違うわ！」

フェイトの疑問の声に対して、リンディは思わず遮るようにして大きな声を出して否定をする。

そんなリンディの様子に、転生者を除いた皆はハツとしたふうにして大声を出した彼女へと目を向ける。

「フェイトさんは産まれ方が少し違っていただけで、ちゃんと生命を受けて生み出された人間でしょう？」

「検査の結果でも、ちゃんとそう出てただろ？ 変な事を言うものじゃ無い」

リンディは気持ちを落ち着かせ、改めて言葉を口にするが、それでも少し興奮をしているかのように強めの口調だ。

そこにクロノはそんな彼女達2人に呆れながらもフォローを入れる。

「はい、ごめんなさい……」

フェイト・テストアロツサ。

プレシア・テスタロッサの愛娘であるアリシア・テスタロッサが、事故が原因で死んでしまい、それによって出来た心の隙間にアカマタが付け込んだ事が原因でプロジェクト「F・A・T・E」が発足し、フェイトとドゥームは誕生した。

遺失世界の遺物であるロストロギアの中に存在していたアダム・プロジェクトに関する資料を見付けたからといってほんの数年間の間にプロジェクト「F・A・T・E」の技術と組み合わせさせて完成させてしまったプレシアの一途だと感じさせる程に強い思い。

そして産まれ方が違うという点で言う転生者である俺達もまた同様であるかもしれない。

他の皆はどうなのかという事は訊いていない為にわからないが、少なくとも死んだ者の細胞を利用して生み出されたという点では俺もフェイトも変わらないだろう。

だが、違う箇所をあげてしまえば、両親が判明している事。

この世界に於ける俺の両親に位置する者は一体誰であり、どのような人物なのだろうか。

「ああ！ モニターで説明しよっか！」

空気を変えるようにしてわざと大きな声で提案をするエイミイ。

こういった時に、切り替えがしやすくサポートをしてくれる人が居るといえるのは助かるものだ。

その元気で大きな声に、こちらの考えも中断される。

部屋が暗くなり、空間モニターが展開される。

「守護者達は、闇の書に内蔵されたプログラムがヒトのかたちを模ったもの。闇の書は転生と再生を繰り返すけど……この4人はずっと闇の書と共に様々な主の元を渡り歩いている」

「意思疎通の為の対話能力は過去の事件でも確認されてるんだけどね……感情を見せつつは、今までに無いの」

「闇の書での魔力収集と主の護衛……彼等の役目はそれだけですものね」

そう。

今まで管理局が調べ集めてきた情報通りであるのなら、それだけなのだ。

それだけである筈なのだ。

「でも、あの帽子の娘——ヴィータちゃんは……怒ったり悲しんだりしてたし」

「シグナムからもはつきり人格を感じました。成すべき事があるって……仲間と主の為だって……」

「主の為か……今まで管理局が集めた情報通りなら、模倣しているだけという事に……」

「あいつ等も俺等もたいして変わらないと思うんだけどな……」

雄介の言葉にクロノは思わず否定をしかけるが、留まる。

「俺等の頭、つまり脳だがな……空覚えだけどき、これは電気信号とかで動いてる筈だぜ。身体がプログラムと魔力で構成されてるか、炭素みたいな有機物で構成されてるかの違い程度……容姿や種族の違いみたいなものだろうか？」

「言いたい事は理解らないでもないが、暴論じゃないか？」

「そうか……？」

「まあ、それについては捜査に当たってる局員からの情報を待ちましょうか」

リンデイの言う通り、これからどういった展開を取るのかは情報を得てからしか判断が出来ないだろう。

「転移頻度から見ても、主がこの付近に居るのは確実ですし。案外、主が先に捕まるかもしれないね」

「ああ、それはわかりやすくて良いね」

「だね。闇の書の完成前なら持ち主も普通の魔導師だろうし」

クロノとアルフ、そしてエイミイの言葉を聴き、思わず慌てふためいてしまいそうになる。

彼等はこの事件を解決しようとしているだけなのだから、他意は無いだろう。

だが、こちらとしては知識通りの展開が望ましいのだから、そういった事になってしまふと困るどころではすまないだろう。

「あと残る問題は」

「仮面の男と外道衆……」

クロノの言葉を聞き、この場に居る面々は彼等の姿を思い出す。

「仮面の男……おそらく魔導師だろう、闇の書を狙っている」

「闇の書を狙う？」

「闇の書を持つ者は大きな力を手に入れる事が出来る」

「でも、それは闇の書の主だけでしょ？」

「ああ。だがそれは、その力を扱う事が出来る者が主だけだという事だ」

「それって……」

どういった事なのか理解らず、頭を悩ませるなのはとフェイト、アルフ。

「仮面の男は警戒すべきだろう。だが、もう一つどうにか対処をしないといけないのは」

「外道衆……確か、水虎と名乗っていたか」

あの外道衆もまた、仮面の男同様にヴォルケンリッターを助けるように出て来た。

水虎もまた、彼と同じように闇の書を欲しているのだろうか。

「何の目的があつて、介入を」

「闇の書の力を狙っている……？　だが、それをどうやって……」

「兎に角、それも含めて調査をしないとイケないわね」

リンデイの言葉に反対をする必要も無く、皆同時に頷く。

「少し詳しいデータが欲しいな……。ユーノ、明日から少し頼みたい事がある」

「え？　良いけど……」

クロノとユーノが話している傍らで、俺はこの先どのようにして外道衆と戦うのかという事で頭が一杯だった。

シヨドウフォンには大きな穴が開けられており、使用する事が出来ないのだ。

「(本当、どうしようか……)」

『闇の書の主ってどんな人かな？』

『闇の書は、自分を扱う資質を持つヒトをランダムで転生先を選ぶみだから……』

月が優しく照らし、ビルなどの人工物から光が出て、人々が行き交っている。

自宅へと帰宅をするなか、なのはは闇の書の主がどのようなヒトなのかを想像して見ていた。

『そっか……。案外、わたし達と同じ年位の子だったりしてね』

『流星にそれは……』

そんななのはの言葉に、雄介や志蓮、そして俺は黙り込んでしまった。

的を得たというのか。感が良く、鋭いというのか。

『どうしたの？ 3人共黙り込んでるじゃって』

『いや、何でも無い……』

知識内にある闇の書の主がどういった存在なのかを知っている為に、彼女のその言葉に驚きを隠せない。

そして、その驚きを表に出さないように耐えているのだ。

ポケットに入っている携帯電話が震え、着信した事を教えてくる。

『すずかちゃん、今日は友達がお泊りに来てるんだって』

『そうなの？』

『うん。ほら』

どうやらすずかからメールを着信したようだ。

一斉送信だったのか、雄介や志蓮、俺の方にもメールが届いていた。

なのははユーノに、そのメールに添付されている写真を見せる。

その写真を見て、俺達転生者組は再び黙りこんでしまう。

『八神はやてちゃん。今度、紹介してくれるって』

『へえ』

すずかの横に座る少女。

見覚えのある顔が写されていた。

「シグナム……はやてちゃん、もう直帰ってくるそうよ」

「そうか」

薄暗い部屋の中に、朝日がカーテンの隙間から射し込んでいる。

シグナムはソファに身を預け、目を閉じながら腕を組み、シヤマルの報告に対して静かに頷いた。

「ヴィータちゃんは？　まだ……」

「かなり遠出らしい。夕方には戻るそうだ」

闇の書に魔力を募集する為に。そしてそれは、管理局に捕まらないように細心の注意を払いながらとなる。

付近の次元世界では足が付いてしまう為に、そういういった事に気を付けてもう少し離れた次元世界での募集行為に努めているのだ。

そして、離れた次元世界だという事は行きも帰りも相応の時間が掛かってしまう。交代をしながらではあるが、休みという休みも無しにそういうった事を続けている。

主であるはやての為に。

それが彼女に心配を掛け、寂しい思いをさせてしまっていたとしても。

それでも彼女を護り、助ける為に。

そう信じて……そう願う……行動しているのだ。

「貴女は？ シグナム？」

「何が？」

「大丈夫？ って……。大分、魔力を消耗してるみたいだから」

「お前達の将は、そう軟弱には出来てはいない。大丈夫だ」

心配するシャマルに、安心させるように優しい声色で応えるシグナム。

その答えは自信の表れか、氣遣いによるものか。

だがそれは、自身に言い聞かせもいるかのように聴こえ、感じられた。

「貴女、随分変わったわよね。昔は、そんな風には笑わなかったわ」

「そうだったか？」

「貴女だけじゃ無い。私達全員、随分変わったわ。皆、はやてちゃんが私達のマスターに成ってから……はやてちゃんと竜人りゅうとが家族として迎えてくれた日からよね」

「そうですか。御親戚の皆さんと一緒にだと良いですね」

「はい。何やこう……毎日無闇に楽しいです」

「素敵ですね」

ノエルが運転をする車の中で、はやては家で自身を中心に繰り広げられている事を話

していく。

最初は家に着くまでの間どうしようかと考えてはいたが、いざ話してみると次々と言葉浮かび上がり、気が付けばはやてもノエルも互いに笑い合っていた。

「(そうか……皆が来てから、もう半年以上になるんやな)」

揺れる車体に、窓から射し込む陽光。

その陽光は座っているだけのはやてに、強い眠気を発生させる。

動いている車は、まるで乳母車のようだ。

はやては、昨日の事のように思えるそれを、沈む意識の中で思い出していた。

6月4日の午前0時丁度、それは起きた。

目の前にある1冊の古い本は、独りでに宙へと浮かび上がり自身を縛っていた鎖を無理矢理に引き千切る。

部屋の中であるのだから風も起きていない筈なのに、髪が捲れてページが次々と変わっていく。

その様子をただ見ているだけしか出来ないはやて。

何が起きているのか理解が追い付かないのだ。

どうするべきなのかを考えるだけの余裕が無いのだ。

開かれていたページが閉じ、本が降りて来る。

思わず後退りをしてしまう。

自身の理解の外にあるそれが怖い。恐いのだ。

[Anfang]

古びた本から発せられる機械音声。

それがよりこの場が異様であり異質なものであるか、平和な日常とはかけ離れたものであるかを少女に教えてくる。

浮かんでいる本が光ると同時に、自身の胸もまたそれに共鳴をするかのように光り出す。

その胸の光は空中へと浮かび上がり、本と自身の中間位置で止まり、それらの光がより強く輝く。

その強烈な光が止み、はやては目を開く。

すると、側には黒いアンダースーツを着用している見覚えの無い4人が自身へと向かって傳えているのが見えた。

「闇の書の起動を確認しました」

「我等闇の書の収集を行い、主を護る守護騎士にて御座います」

「夜天の主に集いし雲」

「ヴォルケンリッター。何なりとご命令を」

目の前の出来事が理解出来ず、脳内での解釈と処理もまた追いつかなかったのか。意識を手放してしまった。

「はやてちゃん。良かったわ、何とも無くて」

「えっと……すんません」

目を覚ますとそこは病室であり、側にはわたしの主治医である「石田幸恵」先生が居た。

そうすると、ここは海鳴大学病院やろうか。

「で……誰なの、あの人達は？」

無事を認め安心をすると直ぐに、石田先生は小さく手を動かして指をさす。

そこには見覚えの無い——いや、気を失う前に目にした4人の姿があった。

「どういう人達なの？ 春先とはいえまだ寒いのに、はやてちゃんに上着も掛けずに駆け込んできて。変な格好してるし、言ってる事は訳分かんないし。どうも怪しいわ」

成る程。

意識を失ったわたしをここへと連れて来てくれたのはあの4人で間違いが無いのだ

ろう。

だが、あの格好。黒いアンダーズーツだけを着用しているだけなのだから、けつたいな格好だと言う他無いだろう。

それにしても、あの黒いアンダーズーツ。

金髪でショートボブの女性と桃色でロングストレートの髪をポニーテールに纏めている女性。出ているところはちゃんと出ていて、引つ込むところもまた同じように引つ込んでいる。所謂ボンキュッボンと言えるメリハリのある体型をこれもかと言うくらいに主張をしてくている。

特にあの桃色の髪の女性。胸が——おっぱいが大きい。

「ああ、えつと……。その……何と言いましようか……。」

石田先生の言葉を聴き、どう返答すべきなのか。

『ご命令を頂ければ力になれますが。如何が致しましょう？』

戸惑い悩んでいると、頭の中に声が響く。

頭の中に直接語りかけて来るといふ表現が正しいと思えるような感じだ。

それに対して、思わず信じられないものを見てしまったかのような顔をしてしまう。

『“思念通話”です。心でご命令を念じて頂ければ』

自身の持つ疑問に答えてくれるかのように説明をしてくれる。

目の前の様子を見る限り、思念通話をして来てくれているのは桃色の髪の女性のようだ。

『ほんなら、命令と言うよりお願いや』

『——?』

『わたしに話合わせてな』

『はい』

「えつと……石田先生。実はあの人達、わたしの親戚で」

「親戚？」

「遠くの祖国からわたしのお誕生日をお祝いに来てくれたんですよ。それで、ビックリさせようと仮装までしてくれてたのに」

説明をしながら、改めて彼女等を見遣る。

男の人の頭には何かの動物の耳のようなものが付いていて、それが動いている。

それを見て、思わず顔を引き攣りかけてしまう。

「わたしがそれにビックリし過ぎてもうたというか、その……」

気を取り直して説明をし、石田先生へと目を向ける。

赤髪の少女なんて、「何言ってるんや、こいつ」みたいな顔でこつちを見てるし。

「そんな感じで……なあ」

「そうなんですよ」

「その通りです」

同意を求めてみると、金髪の女性がこちらの意を汲んでくれたのか肯定をしてくる。続いて、桃色の女性もまた同意をする。声からするに、予想通りに思念通話での声はこの桃色の女性で正解やったみたい。

思い付きでもある為に、我ながら苦しい言い訳ではある。

石田先生や他の医師等は何とか理解をしてくれたのか、これ以上追求をせずに部屋を出て行ってくれた。

「で、この者はどうなさいますか？」

先生等が出て行くと同時に、目の前に居る誰かへと向けて敵意を向ける4人。敵意の先へと目を向けると、そこには兄である竜人が居た。

「はあ……ああもう、何度も言っているだろう。俺ははやての兄だ」

「何の目的で主に近付いた？」

「待って」

そのわたしの一言で彼女等4人は大人しくなる。

まるで、鶴の一声のよう。

「わたしの兄で間違いは無いよ」

「シヤマル、主が魔法などによる洗脳を受けている可能性は？」

「無いわ。もし私が気付かない程に優れた魔法を使っているのだとしたら……」

「まあ兎に角、ここから出よう、な？」

その提案を受け入れてくれたのか、彼女等4人は部屋の外へと。竜人兄ちゃんは車椅子を用意し、外へと連れてって来れた。

「そうか……この子が闇の書っていうもんなんやね」

「はい」

「物心がついた頃には棚にあったんよ。綺麗な本やから大事にはしてたんやけど」

自宅へ帰宅し、彼女等に闇の書と彼女等自身についての説明や自己紹介をしてもらった。

竜人兄ちゃんが言うには、わたしが誕生した時には既に家にあつたとか。

古びてはいるが、ボロボロになつている訳では無く、状態が良く綺麗だった。

古本屋に売るつもりは無かつたし、気に入つてもいたからずつと手元に置いていたんやつた。

「覚醒の時と眠っている間に闇の書の声を聴きませんでしたか？」

「うん……わたし、魔法使いとちゃうから漠然とやったけど。そういうのは竜人兄

ちゃんの方が詳しいんとちゃうん？ 昔から魔法使いだ、とか言ってたし」

「——やはり貴様！」

「魔法使いじゃなくて魔導師、な。で、お前の場合はどうなんだろうな……魔導師騎士とも言うべきか」

敵意を含んだ彼女等の視線も何のそのといったふうに竜人兄ちゃんは答えてくれる。

魔法使いとまどうしってどう違うんやろ？ なんて疑問に思えてしまう。

「あ、あった。分かった事が一つある。闇の書の主として守護騎士皆の衣食住、きっちり面倒見なあかんいう事や」

「流石はやて。着眼点というか何というか……」

「幸い住むところあるし、料理は得意や。皆のお洋服買ってきて来るからサイズ測らせてな」
そう言つて先ほど見付けたメジャーを取り出す。

そんなわたしの言葉に驚きを隠せない守護騎士等。

そして横では、竜人兄ちゃんが腹を抱えて笑いを必死に堪えていた。

「騎士甲冑？」

「ええ。我等は武器を持っていますが、甲冑は主に賜らなければなりません」

「自分の魔力で創りますから形状をイメージしてくださいれば」

「そつかあ……そやけど、わたしは皆を戦わせたりせえへんから……」

——騎士甲冑。

その呼び名の通りに騎士の着る甲冑という事やろうか。

甲冑ついていったら西洋のガチャガチャとしたフルプレートアーマーを思い浮かべるけど、それやと動き辛いやろうし。

それにやるからにはデザインの方も拘りたいし。

少し頭を悩ませるが、直ぐに思い付く。

もし一昔の漫画の中に居たとしたら、頭の上に電球があつて、光つてるやろ。

「服でええか？　騎士らしい服、な？」

「ええ、構いません」

服ならばデザインもしや易いやろう。それに、動き易さも良い筈や。まあ、防御面に難ありなんて事になるかもしれないんやけど。

「ほんなら資料探して、格好ええの考えたらな」

「ハハハハ。」

「良えから良えから。こういうところにこそ、それっぽい材料が」

資料を手に入れる為に来たのは、近所にある玩具屋だ。

横を見てみると沢山のフィギュアやぬいぐるみか棚に並べられている。

そんな中で、一緒に来ていたヴィータは1つのぬいぐるみへと目を向ける。

兎のぬいぐるみだ。赤い瞳に黒い蝶ネクタイをしており、長いウサ耳は折れ曲がっている。

そんな「のろいうさぎ」という名前のぬいぐるみをマジマジと見詰めるヴィータ。

「ヴィータちゃん、どうしたの？ ヴィータちゃん？」

「やっと年齢相応のものになってきたのか……」

「良い風ですね」

「ほんまや」

求めていたものを見付け、買い物は終了。

帰り道を歩いていると、秋風が丁度良い感じに吹いており、木々が揺らめいている。

そんな中、頭の中では「でもこの風、少し泣いています」なんてフレーズが浮かんで来る。

「お天気も良いですし」

「絶好のお散歩日和やな。ヴィータ！」

後ろの方では、紙袋大事そうに抱えながら歩いているヴィータが居る

此方の声に気付き、顔を上げるヴィータ。

「もう袋から出しても良えで」

その言葉に隙かさず袋から中身を取り出す。

出てきたのは兎のぬいぐるみ——店内で気になったのかじつと見続けていたのろいうさぎだ。

ヴィータの顔は見る見るうちに綻んでいく。

「はやて、竜人……あり——」

ヴィータはお礼を言おうとするがその言葉を中断して走るようにして後を追いかけて来る。

はやてはシグナムに抱えてもらいながら庭の方へと出、満天の星空を見上げて感嘆の言葉を口にする。

「主はやて」

「ん？」

「本当に良いのですか？」

「何が？」

はやての言葉は優しく、家族を想っている事を感じさせる。

シグナムの方もまた、言葉遣いの方は堅く主従のそれだが、その声からは少し前のものとは比べるまでも無い程にまるく優しいものだ。

「闇の書の事です。貴女の命めいあらば我々は直ぐにでも闇の書のページを収集し、貴女は大いなる力を得る事が出来ます。この脚も、治る筈ですよ……」

「あかんで。闇の書のページを集めるにはいろんな人に御迷惑をお掛けせなあかねやろ？ そんなんはあかん。自分の身勝手に他人ひとに迷惑掛けるんは良くない」

そのはやての言葉を聞き、シグナムは少し戸惑う様子を見せる。

これ迄の主であれば喜々としてという程でも無いだろうが、それでも闇の書のページの収集は行って来ただろう。

だが、今回の主であるはやてはそういういった行動をしないと云うのだ。

シグナムは、はやてが主となつて数ヶ月の間でこれ迄の主とは違う事を認識していたが、ここで改めてそれを知り、理解したのだ。

「わたしは今のままでも十分幸せや。父さん母さんはもうお星様やけど、竜人兄ちゃんが居るし、遺産の管理とかは叔父さんがちゃんとしてくれてる」

「お父上の御友人でしたか？」

「お陰で生活に困る事も無いし。それに何より、今は皆が居るからな」

そう言いながらはやてはシグナムの身体へ抱きつく。

「はやて！」

「どないしたん、ヴィータ？」

「はやて、冷凍庫のアイス食べて良い？」

ヴィータのその言葉に、シグナムは呆れているような感じだ。

「お前、夕食をあれだけ食べて、まだ食うのか？」

「うるせーな。育ち盛りなんだよ。はやての御飯はギガ美味だしな」

「しゃあなうなあ……。ちよつとだけやで」

「おう！」

その言葉を聞いて嬉しかったのか。はにかみながら承諾をするはやて。

ヴィータも同様に満面の笑みを浮かべて返事をし、冷凍庫の方へと走りだす。

「シグナム」

「はい？」

「シグナムは皆のリーダーやから……約束してな」

「はい？」

「現マスター八神はやては、闇の書には何も望み無い。私がマスターである間は闇の書の事は忘れてて。皆のお仕事は家で仲良く暮らす事、それだけや。約束出来る？」

「誓います。騎士の剣つるぎに賭けて」

はやての御願いに、首肯き応えるシグナム。

それを見て、腕の中に居る今の主は微笑む。

その笑顔を見て、シグナムは言葉には出さずに改めて誓いを立てる。

闇の書の今の主であるこの優しい少女とその兄に報い、応えていく事を。

だが、そんな誓いも、平和な日々も長く続きはしなかった。

「生命の危険？」

「はやてちゃん——」

「ええ。はやてちゃんの脚は原因不明の神経性麻痺だとお伝えしましたが、この半年で麻痺が少しずつ上に進んでいるんです。この2ヶ月は特に顕著で……このままでは内臓危機の麻痺に発展する危険性があるんです」

病状の説明をする石田先生の声は深く沈んでいる。

それを聴いているシグナムやシャマルの雰囲気も暗く、診察室の中の空気は御通夜のように重苦しいものになってしまっていた。

「何故……何故、気付かなかった……」

「(い)めん……(い)めんなさい……。私……」

「お前にじや無い。自分に言っている」

謝るシャマルに訂正を入れるシグナム。

はやては元気に、無邪気に笑顔をみせている。

だが、それは気付かずにいるからか。それとも……。

将でありながら、家族でありながらそれに気付かなかった自分を責めるシグナム。

強く拳を握りしめながら、それを壁に叩きつけてしまう。

はやてに起きている原因不明の脚の麻痺。それはこの地球で言う病気とはまた別のもの。

——闇の書の呪い。

はやてが生まれたその時から共にあつた闇の書は、彼女の躰と密接に繋がっていた。

抑圧された強大な魔力は魔導師の力の源であるリンカーコアの未成熟な少女の躰を

蝕み、健全な肉体機能どころか、生命活動すらも阻害してしまっているのだ。

そしてはやてが——主が第一の覚醒を迎えた事でその呪いの進行度は加速した。

守護騎士プログラムであるヴォルケンリッター4人の活動を促し維持をする為に、極

僅かとは言え、はやての魔力を使用している事に無関係では無い筈なのだ。

「助けなきや……はやてを助けなきや！ シャマル、シャマルは治療系得意なんだろ？

そんな病氣位治せよ！」

「ごめんなさい……どうにも」

「何でだ？ 何でなんだよ!？」

闇の書の呪いもまた闇の書のシステムの一部。

ヴォルケンリッターもまた、闇の書の中の守護騎士プログラムである。

上位存在や管制人格、管理者などでないとそれを防ぐ事は出来ない。出来る力も権限も持ち合わせていないのだ。

代表するかのように喚き、泣きじやくるヴィータ。

今の彼女等はいまにも無力で、ちっぽけな存在だ。

「シグナム……」

「我等に出来る事は余りに少ない……だが」

とあるビルの屋上で4人の守護騎士等は向かい合い、^相デバイス^棒を握りしめている。

——はやての軀を蝕んでいるのは闇の書の呪い。

——彼女が闇の書の主として^{まじと}真の覚醒をすれば……。

——その小さな軀を蝕んでいる病は消え去る。少なくとも進みは止まる。

——はやての未来を血で汚す事は避け、人殺しなどはしない。だが、それ以外であるのならば……何だつて出来るだろう。

「（申し訳ありません……我等が主、そして竜人。唯一度だけ、貴女との誓いを破ります）」

魔法陣が展開し、シグナムにシャマル、ヴィータは騎士甲冑を纏い、ザフィーラは人間形態へと変わる。

「我等の不義理を御許し下さい」

「——何が御許し下さい、だ」

背後から掛けられたその声に、シグナムは驚き振り返る。

「竜人……」

「頼む、止めないでくれ。これははやての為に」

「誰が止めるって言ったよ」

溜め息を吐きながら、竜人は4人の顔を見る。

彼の表情からは諦めなどと同時に呆れなども感じているように思わせるものがある。

「俺も手伝う」

「な!?! 自分が何を言っているのか理解ってるのか?」

「理解しているね。嗚呼、十分に嫌という程に理解してしまっているね。はやての為に彼奴を蝕んでいる胸糞悪い病気……いや、呪いを解く。その過程で他人様に多大な迷惑を掛け、その結果犯罪者になってしまいかもしれないって事をな」

「ならば何故!？」

「決まっているだろ? 愛する妹の為だ。それ以外に何が要る。どんな答えなら納得する? 俺には十分過ぎるね」

「竜人……」

捲し立てるように、反論させる機会すらも与えないように応えていく。

救ける事が出来る可能性が少しでもあるのならそれに縋りたい。しがみつきたい。そしてそれを4人がやろうとしているのに、自分だけが何もしないというのは嫌なのだ。

力を持っているにも関わらず、自分だけが苦しむはやてを見続けるだけで、4人に負担を押し付けるのが嫌なのだ。

「本当に良いのか?」

「くだい! 覚悟は出来ている、とつくに完了しちゃってるんだよ。それにさ、理由は分からないけど感じるんだよ。このままじゃ駄目なんだって。行動しなくちゃ駄目なんだって。(前世での何かがそう感じさせてくるのか? 俺は一体何を知っていたんだ?)」

4人へと真っ直ぐに見詰め返し、笑ってみせる。

愛する妹などのような臭いセリフに照れながらも、その確かな想いをぶつけていく。

「理解った」

「——シグナム!？」

了承したシグナムに対し、驚きを隠せないでいる残りの3人。

「だが、条件がある」

「何だ? 言ってみろ」

「お前に魔力が——リンカーコアがあるのは理解している。それでも、連れて行く価値があるのか、それだけの実力を持っているのかを確かめさせて貰う」

真つ直ぐにこちらへと向けてくる彼女の視線は研ぎ澄まされた刃のようで、背中を冷や汗が流れていく。

いや、冷や汗どころか失禁をしまいそうな程に恐怖を感じさせてくる。

「良いぜ、やってやるよー!」

そんな感情を踏み留め、押し殺し、睨み返してみせる。

こんな痛みよりもはやての方が強いものを感じている筈だ。

こんな恐怖よりもはやての方がもつと大きなものを感じている筈だ。

自分が死ぬという事を微かにでも感じ取り、ハッキリと理解している。

そして、それを悟られないように必死にして笑顔をみせて隠し通している妹。

主であり家族でもある1人の少女を救ける為に、自身から汚れ役を買って出る4人の

家族。

「覚悟は良いか？」

「俺は出来ている」

次元世界の記憶が眠る場所 超規模データベース 無限

書庫

サンサンと、と言うよりもカンカン照りといった表現の方が良いだろうか。

2つの太陽に照らされ続けている世界に小さな人影が1つあった。

草木1つすらも見当たりも、生えてもない砂漠で、赤い騎士甲冑を着込んだ少女は相棒^{グラーファイゼン}を杖代わりにして立ち上がる。

無限とある砂の上でグラーファイゼンを引き摺りながら、フラフラとした足取りで、砂に足を取られながらも歩き続ける。

背後には、倒し募集を終えた現地の野生動物が横たわっている。

微動だにしないところから、意識を失っているのか死んでいるのかのどちらかだろう。

「……クソっ……はやてに貰った騎士服をこんなにグチャボロにしやがって……ま、騎士服は直るし、そこそこページは稼げたから良いけどよ……」

そのヴィータの言葉通り赤く綺麗だった騎士服はボロボロになっており、砂埃や戦闘の際に舞い上がった砂でところどころが汚れてしまっている。

その中でも目立つのは帽子だ。帽子には玩具屋で見付け気に入ったのろいうさぎを模した白い兎のアクセサリーが付いているが白い為か、汚れが他の箇所よりもハッキリと見えるのだ。

ダメージが蓄積されていたのか靴が壊れ、前のめりに顔面から倒れてしまう。

「——いつ、痛……く……無いい！」

痛みを堪え、空を仰ぎ見る。

「痛く、無い……こんなのちつとも痛く無い！ 昔とはもう、違うんだ」

再びグラーフアイゼンを杖にして、よろめきながらも立ち上がる。

歩く度に服が動き、少なく無い傷も見え隠れをする。

「帰ったらきつと……温かい御風呂とはやての御飯が待つてんだ……優しい家族がニコ

ニコ待つててくれるんだ。そうだよ……私は、すっげえ幸せなんだ！」

自分に言い聴かせ、気持ちをも、そして身体を奮い立たせていく。

フラフラとしていた足取りが確かなものへと戻り、一歩ずつ確実に歩みを進めてい

く。

「だからっ——」

地面が大きく揺れ動いて、砂底からリンカーコアを持つ現住生物が飛び出してくる。

「こんなの……全然、痛くねええええええええ!!」

グラーフアイゼンを握りしめ、目の前の標的へと飛び掛かる。

「はあ……はあ……はあはあ……ハア……ハアハア……」

目の前の目標を叩き倒し、目的であったリンカーコアの募集を開始する。

先程よりも大きな汚れと傷が騎士服には付いている。

「く……そつ……」

募集を完了すると同時に、同種ではあるがまた別の個体が顔を出して来る。

「次から次へと……」

目の前に居る標的を倒そうとグラーフアイゼンを振りかざそうとするが、身体がよろけ倒れそうになる。

「全く……何をしている、ヴィータ？」

「竜……人……？」

倒れそうになる小さな身体を、また別の小さな身体が苦も感じさせないように片腕で支えている。

支える側も、支えられる側もだ。

「これくらい……」

「無理はするな。其処で暫くの間、休んでろ」

「でも……」

「帰った直後に疲れやダメージの蓄積の所為で倒れてでもしてみろ。はやてはどう思うか……と言っよりもだな……、兄である俺にも少しは頼ってくれよ。家族だろ？」

「3人掛かりで出てきたけど、大丈夫かな？」

「まあ、モニタリングはアレックスに任せて来たし」

「闇の書について調査をすれば良いんだよね？」

「ああ。これから会う2人はその辺に顔が利くから」

地球に置いてある臨時作戦本部から離れ、クロノとエイミイ、ユーノの3人は管理局本部へと来ていた。

廊下を歩きながら、これから会うであろう2人の事を軽く説明をするクロノ。

目的の場所へと辿り着き、ドアが開く。

「リーゼ、久し振りだ。クロノだ」

「うわおお！」

「——な!？」

部屋の中には2人の少女が居た。

その2人には猫のような耳と尻尾が生えており、使い魔だという事を理解させてくる。

そして、2人の顔は瓜二つだと言える位に似通っているところから見ても、双子だという事もまた同時に理解出来た。

その2人の内の1人がクロノを見ると同時に、柔らかな動きで彼へと飛び掛かり抱きしめる。

「クロスケ、お久し振り振り〜」

「離せコラー！」

照れているのか、顔を赤らめながら離れようと必死に抵抗をするクロノ。

「何だと、コラー？ 久し振りに逢った師匠に冷たいじゃんかよ〜」

そう言いながら再び抱きしめる。

それに対し、より一層顔を赤くして抵抗をするクロノ。

「アリア、これを何とかしてくれ！」

「久し振りなんだし、好きにさせてあげれば良いじゃない」

猫の少女が少年に対して、酷く猫可愛がりをしているようだ。

「それに……まあ、何だ。満更でも無かるう？」

「そんな訳が……」

クロノが言葉を言い終える前に、少女は彼を押し倒して挨拶と称したキスをしていく。

2人の身体はソファの陰に隠れて見えないが、唯一見えている少女の尻尾は垂直に立ち、大きく揺れ動いている。

「リーゼアリア、お久し」

「ん、お久し」

イチヤイチャとしている、と言うよりも一方的にクロノがやられているその光景などを、毎回の事なのか余所にして挨拶をするエイミーとアリア。

クロノと少女のやり取りを見て、気にしないように心掛けた。の2人の様子を見て、気にしないように心掛けた。

「リーゼロツテは相変わらずだね」

「まあ、我が双子ながら時々計り知れんところはあるね」

「御馳走様」

「リーゼロツテ、お久し」

「エイミー、お久しだ」

満足そうな顔をしながら、エイミーとアリアの方へと移動をするアリア。

そして、エイミーの後ろに居るユーノを見付ける。

「何か美味しそうな鼠っ子が居る。どなた？」

「……………」

にこやかな笑顔を見せながら顔を覗かせるロツテ。

だが、ユーノはその笑顔が捕食者のそれに見え、思わず頬をひくつかせてしまう。

「何で、あんなのが僕の師匠なんだ……………」

やっとの思いでソファから身を乗り出したクロノはウンザリとした表情を浮かべており、彼の顔には無数のキスマークが付いていた。

「ああ……………成る程、闇の書の搜索ね」

闇の書の発見とその搜索、情報の探索が必要な事を説明するクロノ。

その話を聴いている間、アリアは姿勢正しく座っているが、ロツテの方はソファにもたれ掛かりながら尻尾を右に左にと動かしている。

「事態は父様から伺ってる。出来る限り力になるよ」

「宜しく頼む」

「エイミイさん……………この人達って？」

「クロノ君の魔法と近接戦闘のお師匠様達。魔法教育担当のリーゼアリアと近接戦闘教育担当のリーゼロツテ。グレアム提督の双子の使い魔。見ての通り、素体は猫ね」

3人の会話を邪魔しないように、エイミーはエイミーに彼女等の紹介をする。

「な、成る程……」

それに気付いたのか、ロツテはユーノに対して微笑み手を振る。

ユーノもまた、引きつった笑顔を浮かべながら手を振り返した。

「2人にも駐屯地方面に来て貰えるって心強いんだが……今は仕事なんだろう？」

「うーん。武装局員に新人教育メニユーが残っててね……」

「そつちに出突つ張りにはなれないのよ。悪いね」

「いや……実は今回の頼みは彼なんだ」

クロノの言葉にリーゼ姉妹はユーノへと顔を向ける。

「喰って良いの？」

「つう……」

捕食者のようにキラリと目を光り輝かせるロツテを見て狼狽えるユーノ。

「ああ。作業が終わったら好きにしてくれ」

「な、あ、おい！ ちよつと待て！」

人身御供のようにして差し出すようなクロノの口振りに思わず立ち上がって反論をするユーノ。

そんな彼等2人の様子を見て、少女等3人は笑う。

「それで、頼みって？」

「彼の、無限書庫での調べ物に協力してやって欲しいんだ」

そのクロノの言葉に双子は顔を見合わせ、品定めをするかのようにユーノの方へと視線を向けた。

「何だか、一杯あるね……」

「まあ、最近は何れも同じような性能だし……見た目で選んで良いんじゃない？」

今、俺達は窓際に集まり、射し込んでくる陽の光を浴びながら会話をする。

それぞれの手には携帯電話の種類や仕様及び機能などのデータが記載されている冊子があり、フェイトはその中のどれを買うかを悩み、考えているのだ。

俺達は、そんなフェイトにどのような基準でどれを買えば良いのかなどといったアドバイスをしているのだ。

フェイトの言葉通り、メーカーも複数あり、そこから販売されている携帯電話の数も多い。

そしてアリスの言葉も正しいと言え、ここ最近販売されている携帯電話の性能はどのメーカーのものであろうと大した差は無いように思える。

どの携帯電話を買うのかを決めるのにいろいろ考えてしまうのは仕方が無いだろう。

「でもやっぱ、メール性能も良いやつが良いよね」

「カメラが綺麗だといろいろ楽しいんだよ」

なのはやすすずかの言葉にも耳を傾け、より一層深く考えこんでしまうフェイト。

「でもやっぱ、色とデザインが大事でしょ！」

「操作性も大事だよ！」

「外部メモリ付いてるといろいろ便利で良いんだけど」

「そうなの？」

「うん！ 写真とか音楽とか沢山入れておけるし。そうそう、メールに添付してお友達に送る事も出来るの」

アリサやなのはの意見もまた同意出来るものであり魅力的なものではあるが、フェイトはすすずかの出した意見の方へと喰いつく。

そうして、そのすすずかの意見に対し、なのはとアリサもまた同意をする。

「あんた達はどう思う？」

「そうだな……どの意見ももつともだしな……」

「これなんてどうだ？」

雄介が冊子を広げて指し示したそれは折りたたみ式の携帯電話であり、SONIA製のCMDX II NF226Dだ。最新機種という事もあつてか、メール機能やカメラ

機能も優れており、画素数も多い。

これと言って悪い部分は見当たらず、強いて言えば月額の料金位だろうか……他の機種と比べて少し高いかなと思える程度だ。

全体的に見て、良機種と言えるだろう。

「うん。良いと思う」

記載されているデータや画像を見て気に入ったのか、フェイトは首肯してみせる。

「ドゥームの方はどんな携帯を選ぶのかな?」

「さあ? 気になるなら訊いてみれば?」

フェイトの兄であるドゥームもまた同時期に携帯電話をリンデイに買って貰うのだ。

ドゥームは必要無いと言っていたらしいが、リンデイは友達との連絡などにも必要だろうからと説得をして、買う事になったらしい。

「フェイトさん……はい」

「ありがとうございます、リンデイ提督」

会計や手続きを済ませたリンデイから受け取り、なのは達の居る場所へと走りだすフェイト。

受け取ったそれは小洒落た紙袋であり、中には先程の冊子に載っていた携帯電話――

CMDX II NF226Dだ。

「お待たせ」

「ううん。良い番号あつた?」

「うん」

「何番?」

「えつとね……これ」

アリサとなのはの質問に答え、手にしている袋から取り出して見せるフェイト。

年齢相応に笑い、笑顔を見せる彼女等を離れた位置から見たリンディは微笑む。

こちらもまた同様に彼女等の様子を見て、自然と笑顔になる。

「お前の方はどうなんだよ、ドゥーム?」

「これだ……」

志蓮の質問に対して、紙袋から箱を取り出して見せるドゥーム。

彼の買った携帯電話はフェイトの選んだ折りたたみ式のものとは違い、スライド式の

だ。更に、スライドで伸ばした後には回転させる事も出来る。

所謂、スライド型と回転型リボルバータイプの特徴を併せ持つ変わった機種だ。

「へえ……面白い機種だな」

「まあ、生前にスライド式を使っていたからな。使い慣れているかたちの方が良いかな

と思つてよ」

そう言いながら、指でメインディスプレイをスライドさせてみせるドゥーム。

「管理局の管理を受けている世界の書籍やデータがすべて収められた超巨大データベース……」

「幾つもの歴史が丸ごと詰まった、言うなれば世界の記憶を収めた場所……」

「それが此処……無限書庫……とは言え、中身の殆どが未整理のまま」

「此処での探し物は大変だよ」

次元の狭間に存在する時空管理局本部の中にある無限書庫。そこにユーノ等は居た。

ロツテとアリアの2人——リーゼ姉妹は愛弟子に頼まれた事、そして彼の友人であるユーノ自身に対しての興味などの理由から、クロノに頼まれた通りユーノの手伝いをする為に無限書庫に来ていた。

辺りを見渡してみると、至るところに階段のようなものが縦横関係無く走っており、壁に当たる部分には大きな本棚が。そしてそこに無数の本が収納されている。

だが、それはほんの一部だ。無数に存在している本は、その全てが本棚に収まりきつているという訳では無く、大部分は宙を浮遊している。

円筒形のその空間で、下に行けば行く程に古いものがあり、無限書庫の名前通りに本

を始めとした資料が無限にあるのではないかと思わせてくる程のものだ。

リーゼ姉妹の言葉は強ち嘘では無いと感じさせるものがある。

初めてこの無限書庫に訪れ中を見たのだとすると、その空間の広さと資料の多さに圧倒されてしまうだろう。

そしてそれは、ユーノもまた例外では無い。だがまあ、今迄いろいろな遺跡を見てきた彼は直ぐに気を取り直したのだが。

「本来ならチームを組んで年単位で調査する場所なんだしね」

「過去の歴史の調査は僕等の一族の本業ですから……検索魔法も用意して来ましたし……大丈夫です」

その周囲に存在する本を見てうんざり気に話すアリアに対して、ユーノは大丈夫だと応える。

これだけの数の本を見てうんざりとした気持ちになるのは彼もまた同じだが、予めクロノからどういった場所かという事が軽い説明を受けており、その為の魔法も用意していた。

そして何よりも、スクライア一族は、どのような仕組みかも理解らない、どんなトラップが設置されているか予測すらも出来ない遺跡を調査する事を仕事としているのだ。

その一族の血が流れているユーノにとっては望むところであり、嫌気が差しているの

と同時に心が踊っているという事もまた感じ取っていた。

「そつか。君はスクライアの子だっけね」

「私もロツテも仕事があるし、ずっとつていう訳にはいかないけど、成る可く手伝うよ」

「可愛い愛弟子、クロスケの頼みだしね！」

「ほう……なら、俺の頼みも利いて貰いたいものだな」

「うげっ……特務執務官」

突如として、下の方から聞こえた声の主を見遣る。

そこには3人とも顔を知っている人物であり、管理局内ではかなり特殊な立場に居るのであろうゾイルが居た。

ユーノとは反対に、ロツテの方はあからさまに嫌だと言わんばかりの表情をしている。

「うげつとは失礼な猫だな。まあ良い。闇の書について調べるのだろうか？　なら、もう1つついでに調べて欲しいものがある」

「何ですか、ゾイルさん？」

「ああ。お前も知っているだろうが、外道衆とモチカラについてだ」

ゾイルの頼みを快く承諾をし、その調べ物の内容について質問をするユーノ。

そしてゾイルの返答を聴き、了承の意を示すように頷く。

外道衆とモヂカラについては情報統制が行われている為にリーゼ姉妹は首を傾げ、興味津々といったふうに関き耳を立てている。

「出来得る限りの情報、データは集めます。ですが……」

「理解している。勿論、闇の書の方を優先してくれて良い。だが、余裕があるのであれば、今言った事と……それともう一つ……」

「何ですか？」

「そっか……アリサとすずかはヴァイオリンをやってるんだね」

「うん。メールで良くお稽古の話とか教えてくれるんだよ」

「そうなんだ」

携帯電話を買い終えた後、アリサとすずかの2人はフェイトとドゥームの選んだ携帯電話を見てその番号を登録し終わると、ヴァイオリンの稽古に行ったのだ。

なのはの言葉通り、何か変わった事や面白いと感じた事などがあると、彼女等はその内容をメールにして送って来てくれる。文面だけの時もあれば、画像が添付されている時もある。

その内容の殆どはくだらないと思えるような事ではあるが、何処か面白くもあり、思

わず頬が緩んでしまうものばかりだ。

例えば先生の言葉だとか、練習について、発表会などについてだ。

「ただいま〜！」

話をしているとエイミイの声が聞こえ、彼女は買い出しから帰って来た事を教えて来る。

スーパーで貰ったビニール製の買い物袋からはネギやトマト、かぼちやなどが出てきて、なのははそれを冷蔵庫へと入れていく。

「艦長、もう本局に出掛けちゃった？」

「うん。アースラの武装追加が済んだから……試験航行だつて、アレックス達と」

「武装つていうと、アルカンシエルか……あんな物騒なもの最後迄使わずに済めば良いんだけど……」

そう呟いて、大きく息を吐き出すエイミイ。

「アルカンシエルか……威力は推して知るべしといったところか」

「まあな。あれは凄いで。映像でしか見た事が無いけど、あれだけの物をヒトはつくりだせるのかなんて、何も知らなければ思えてしまうくらいだ」

「そんなにか？」

「ああ……」

思い出しただけでも自然と身体が震えてきてしまう。

なのはとフェイト、雄介、志蓮の4人は不思議そうにしているが、エイミイの方は苦笑いを浮かべていた。

『アニメやその資料では着弾後の空間歪曲によって目標を消滅させるとあったな』
『ああ。俺の記憶が正しければだが』

『空間を歪曲させるといえるのはこわいものだ。だがな……問題なのはその範囲だ。どれ位だと思う?』

『精々、発生地点を中心にして百数十km位だろ?』

『違う……直径で1,000km規模だ』

『……………』

そのあまりの大きさに絶句してしまい、言葉を発せなくなってしまう雄介と志蓮の2人。

今、なのはとフェイトには聞かせたく無い……と言うよりも、知って欲しくは無い。

「(まあ、フェイトの方は知っているだろうがな……)」

「クロノ君も居ないですし……戻る迄はエイミイさんが指揮代行らしいですよ」

『責任重大』

エイミイはなの言葉とアルフからの念話に対し顔をひくつかせるが、気を取り直

してかぼちやを冷蔵庫に入れる。

「それもまた物騒な。まあ……とは言え、早々非常事態なんて起こる訳が——」
警報が鳴り響く。

空間上にはモニターが展開され、Emergencyの赤い文字が浮かび上がった。

「文化レベル0。人間は住んで無い砂漠の世界だね」

モニターには、飛ばしたサーチャーからの映像が映し出されており、そこにはシグナムとザフィーラの姿があった。

「結界を張れる局員の集合まで、最速で45分。不味いなあ……」

「エイミー。私が、私が行く」

「私もだ」

焦りながらタイピングをするエイミーに対し、フェイトとアルフの2人は自分が行くという案を提示する。

映し出されているのはシグナムとザフィーラであり、戦闘経験のある自分達が出るべきだろうと判断したのだろうか。

「うん、御願い」

「うん / おう」

「なのはちゃんと雄介君、志蓮君、ドウム君にブロン君はボックス。此処で待機して」
「はい」

「了解 / わかった / ok」

「行くよ、バルディッシュ」

「Yes, sir」

机の上に置いてあったカートリッジを手にし、部屋から出るフェイト。

バルディッシュの宝石部分が応えるようにキラリと輝く。

「出る前にこれを」

「これって……?」

フェイトが出て来ると同時に、俺は彼女に声を掛け、手にしているものを渡す。

「カートリッジだね。でもこれは?」

「これには圧縮魔力の代わりにモヂカラが込めてある」

「モヂカラが……? そっか。外道衆との戦闘に備えて」

「そうだ」

見た目としては他のカートリッジと変わったところは無い。

が、そこには言葉通りに魔力の代わり膨大な量と大きさのモヂカラを圧縮して込めて

ある。

魔導師同士や現地生物との戦闘であれば魔力と気の運用だけでも何の問題も無いだろうが、外道衆が相手となればそうはいかない。

外道衆を倒そうとする、倒せはし無くても、傷を付けるだけだとしてもモヂカラ使用出来なければ無理なのだ。

「でもさ……カートリッジ内のモヂカラを解放しても、扱えなけりや意味無いじゃん」
「その為にこれも」

そう言いながらデータを渡す。

「これにはモヂカラを扱う事が出来るようになる為のプログラムが入ってる。バルディッシュに読み込ませてくれ」

「プログラムをバルディッシュに……」

「時間はそんなに掛からない。ものの数秒程で出来るさ」

「バルディッシュ……」

応える変わりにキラリと金色の光を放つバルディッシュ。

その様子を見て、フェイトは頷いた。

「理解った。でも」

「なのは等には今から渡すつもりだ」

【Reading of data is completed. Condition, all green】

喋っている間にデータの全てを読み込んだ事を教えるバルディツシュ。

「そんじゃまあ、行つて来い」

「うん！ / ああ！」

砂煙が舞い上がる中で、シグナムは現地の生物と向かい合っている。

現住生物は疲れという疲れを見せないでいるが、相手をしているシグナムの方は軽く肩で息をする程度には体力を消耗していた。

「ヴィータが手古摺る訳だな……。少々厄介な相手だ……。——っ！」

息を整えると同時に後ろから、前に居る個体の尻尾に当たる部分が出て来る。

シグナムは上空へと退避して攻撃を躲そうと試みるが、尻尾に付いている触手のようなもので絡め取られてしまう。

「——!? しまった……」

抜け出そうと藻掻いてはみるが、逃すまいとして現住生物はより強く彼女を締め付ける。

【Thunder blade】

雷が集合した剣が無数、空から落ちて来て、現住生物を貫き、斬り裂いていく。それがシグナムの動きを封じていた触手を斬り裂いて、彼女の身体は解放された。

「……………」

シグナムが上を見上げると、そこには見覚えのある黒いバリアジャケットを着込んだ金髪の少女が金色に輝く魔法陣の上に居た。

「ブレイク!」

少女の言葉と同時に、刺さっていた剣は爆発、電撃を発する。

それをまともに受けた現住生物は大きな悲鳴を上げながら倒れた。

《フェイトちゃん! 助けてどうすんの!?! 捕まえるんだよ!》

「あ…………ごめんなさい。つい…………」

エイミーからの通信に謝罪をするフェイト。

動けずに居たシグナムを見て、思わず助けてしまったのだろう。

《いや…………あれで良い。闇の書による募集を阻止した。それに、その生物が生きていたとして、シグナムとの戦闘を邪魔して来るかもしれないからな》

概ね原作通りの展開に安堵を覚えながら、フェイトの行動にフォローを入れる。

雄介と志蓮、ドゥームの3人もまた、同じように胸を撫で下ろしているように見える。

「礼は言わんで、テストアロッサ」

「お邪魔でしたか？」

「収集対象を潰されてしまった……」

申し訳無さそうにして言葉を口にするフェイトに対して、シグナムは目を瞑りながら応える。

モニター越しではあるが、様子からするとそれ程悔しいだとか残念だとかは思っていないようだ。

カートリッジを相^{レウアンティン}棒に装填するシグナム。

「まあ……悪い人の邪魔をするのが私の仕事ですし」

「そうか……悪人だったな、私は」

フェイトの言葉を聞いて、改めて認識をしたのか……それとも、思い出したのか。管理局に追われている理由と原因を思い返して呟くシグナム。

「——!!」

サーチャーから送られて来るフェイトとアルフ、そしてシグナムとザファイラの様子をモニターで観ていると、また警報が鳴り響いた。

「もう一箇所!？」

「いや、2箇所だ……」

周辺の次元世界にばら撒いてあるサーチャーの内の2つが反応し、モニターにはヴィータ、そして竜人の姿が映し出されていた。

2人とも同じ次元世界ではあるが離れた場所に居る為に、2つのサーチャーが反応したのだ。

竜人とヴィータが合流を果たすのが観える。

「うげっ……」

竜人の姿を見て、雄介と志蓮は嫌そうな表情を出してそれを隠そうともしない。

余程に前の戦闘で痛い目を見てしまったのだろう。

「(今回は俺が出るべきか？　だが、外道衆が出て来る訳じゃ無いし……)」

「本命はこっち？」

ヴィータの手には闇の書がある。

竜人の方は何も手にしてはい無いが、ヴィータを護衛するようにして飛行している。

「なのはちゃん！　ブロン君！」

「はい」

「……了解した」

「久し振りだね、リンディ提督」

「闇の書の事件……進展はどうだい？」

机に置かれた2つのコップからは湯気が上がっている。

そして、中にある紅茶はリンディとグレアムの2人の顔を映している。

「なかなか難しいですが、上手くやります」

「君は優秀だ。私の時のような失態はしないと信じているよ」

リンディは砂糖を入れた紅茶を一口だけ口に含み、彼に言葉を返す。

「夫の葬儀の時、申し上げましたが……あれは提督の失態ではありません。未来を知っているならいざ知らず、あんな事態を予測出来る指揮官なんて、居ませんから」

カチャリという音を立てながらコップを置き、何度目かも分からなくなった謝罪をするグレアムに対して微笑むリンディ。

「へえ……器用なもんだね。それで中が理解するんだ」

ユーノは目を瞑り、空中で胡座を組みながら魔法を行使している。その魔法は読書をするのに優れたものであり、複数の本を同時に読む事が出来る。探索魔法の1つでもあり、スクライアの一族でこれを修得している者は多い。

ロツテは両手に複数の本を乗せ、その本をアーチ状にして運びながら、そんなユーノを見て驚嘆する。

管理局では、この魔法を使える人材が少ないのだ。

「ええ、その……まあ……リーゼロッツテさん達は、前回の闇の書の事件を見てるんですよ？」

「うん。ほんの1年前の事だからね」

「その……本当なんですか？ その……その時に、クロノのお父さんが亡くなったって……」

「本当だよ……私とアリアは父様と一緒にだったから、直ぐ近くで観てた」

その時の事を思いだしながら応えるロッツテの顔は、先程と比べて少し沈んだ感じになった。

「封印した筈の闇の書を護送中のクライド君が……クロノのお父さんね」

「はい……」

「クライド君が、護送艦と一緒に沈んでく……」

普段はおちやらかした感じであり、クロノの事をクロスケと呼ぶ彼女が彼の事をクロノと言った事からも、あまり思い出したく無い事を口に出している事を感じさせる。

「封印手段は、やっぱりアルカンシエルになっちゃったな……」

「他に無いもんね。他に、あんな大出力を出せる武装」

「あれは周辺への被害が大き過ぎる。撃たずに済めば良いんだが……」

「主が見付かれば良いんだけどね」

アルカンシエルと同等、それ以上の力を出す事が出来る存在が居るといふ事をクロノは知っている。

——彼の力を得る事が出来れば、それが可能なのであればどれだけ安全に、楽に事を済ませる事が出来るだろうか。

なんて事を考えながら、アリアと廊下を歩くクロノ。

だが、彼等の存在は秘密であるのだからそういつた事は出来ないのだ。

「まあ、既に力を貸してくれてはいるし、お人好しだから進んで首を突っ込んで来るだろうけど……だが……」

「まあ……例えば主を押しえたところで、闇の書には転生機能があるから……。新しい主に当たる迄、ほんの数年ばかり問題を先送りに出来るだけ……」

「それでも、その場で大規模な被害が出るよりはずっと良い」

「まあね……」

彼等がガラス越しに見下ろす先には、改修作業と武装を搭載し終えたアースラの雄姿があった。

「預けた決着は出来れば今暫く先にしたいが……速度はお前の方が上だ。逃げられないのなら、戦うしかないな」

「はい。私もそのつもりで来ました」

太陽が照りつけている。

バリアジャケットには温度調節などの機能があるが、それでも暑さは感じているだろう。

それぞれの相棒であるデバイスを構えるフェイトとシグナム。

先に動いたのはフェイトの方だ。

次にシグナムも動き出す。

それぞれのデバイスをぶつけ合い、弾かせ、それを繰り返していく。

足場が砂浜である為に普段通りの動きが出来ず威力やスピードが殺されてしまうが、

2人は直様それに適応してみせる。

フェイトは身体を右に回転させながら、Assault Formのバルディッシュをシグナムへと向ける。

シグナムもまた、左回転で身体を回してSchwertform状態のレヴァンティンをフェイトへと向ける。

2人はそれぞれの攻撃をバリアタイプの魔法で防御し、いなしてみせる。

そのまま、場所を入れ替える2人。

かと思うと、フェイトはシグナムの背後を取りバルディッシュを振りかざす。

だがシグナムもまた今迄の戦闘経験を身体で覚えていたのか、直感的に振り返り、レヴァンティンで防ぐ。

力強く振り下ろされたレヴァンティンによる攻撃を防ぎはするが、フェイトは吹き飛ばされて距離が離れてしまう。

これで、実質的に最初に見合った時と同じ距離に戻ってしまった。

レヴァンティンの刀身の付根にあるダクトパーツがスライドして、カートリッジである薬莖が1個飛び出し、魔力が増大する。

〔Schlangeform〕

いくつもの節に分かれた蛇腹剣の形態である鞭状連結刃へと変形したレヴァンティンを振り翳すシグナム。

伸びた刀身は砂浜へと当たり、小さな砂を無数巻き起こす。

一時的に小規模な砂煙となり、両者の視覚を遮った。

砂煙が晴れると同時にシグナムは攻撃をするが、向かってくる刀身をフェイトはジャンプして回避する。

身体を回転させ砂浜に着地して、フェイトもバルディッシュにカートリッジをロード

させる。

【Load cartridge, Haken form】

「ハーケンセイバー！」

「はああ！」

シグナムの意志に呼応して、連結刃はフェイトの周囲を囲み込む。

フェイトは三日月型の魔力刃を、連結刃の隙間を通るように飛ばす。

飛ばした魔力刃は、三日月の形から円形状へと変形して、強い回転と切断力を生み出す。

「——せえいっ！」

シグナムは、フェイトの周囲にある連結刃を彼女へと向けて包囲網を小さくする。

それと同時に、舞い上がった砂煙から出て来る金色の魔力刃を回避してみた。

【Blitz rush】

フェイトも、魔法を発動させて囲うようにして迫って来た連結刃から脱出してみせる。

そのまま、上空へと回避をしたシグナムよりも上へと飛行して、斬り掛かる。

【Haken slash】

「——っ！」

「——鞆!？」

だが、咄嗟の判断なのか。シグナムはレヴァンティンの鞆を使い、バルディツシユから出ている魔力刃を防ぐ。

驚いた事によって出来た隙を見過ごす事は無く、シグナムはフェイトを回し蹴りで蹴飛ばす。

〔Plasma lancer〕

フェイトは、顔へと向けて蹴り上げられたシグナムの足を防御魔法でいなして、飛ばされながらも攻撃魔法を撃ち出す。

金色の魔力弾は、三角形の環状魔法陣が取り巻くスファイアから発射され、高速でシグナムへと向かって行く。

〔Assault form〕

命中して爆発をしたのを確認したが、それでも健在であると判断し、直ぐに対応出来るように待機する。

〔Schwertform〕

フェイトの予想通りにシグナムは健在であり、砂浜へと着地を試みせる。

互いにカートリッジをロードして、魔力を上昇させる。

両者の脚元には魔法陣が展開され、攻撃魔法が繰り出される事を予想させた。

「プラスマ……」

「飛竜……」

魔力が十分に溜まったのを確認すると同時に、その魔法を発動させる。

「——スマツシヤアアアツツ!!」

「——閃つ!!」

フェイトの方からは電光を伴った純粹魔力砲撃が、3つ存在する加速と威力増幅用の円形の環状魔法陣を通り、彼女の左手1つから放たれる。

そして、僅かながら気も同時に込められていた。

シグナムの方からはSchlangeformへと変形したレヴァンティンの連結刃に十分に圧縮した魔力を乗せて撃ち出した。

互いの攻撃がぶつかり、爆発。相殺されるのを確認する事も無く、2人は上空へと飛行して、カートリッジをロードする。

お互いに近付き、拳をぶつけて、直ぐに距離を取る。

「あんたも使い魔、守護獣ならさ……ご主人様の間違いを正そうとしなくて良いのかよ？」

「闇の書の収集は、我等が意志。我等の主は……我等の行っている収集については何も

御存知無い」

「何だつて……？ そりや、一体……」

アルフの疑問に答えるザフィーラ。

空を覆う雲は、黒くどんよりとしており、暗い。

「主の為であれば、血に染まる事も厭わず……。我と同じ守護の獣よ、お前もまた、そうでは無いのか？」

「……そうだよ……でも、だけどさ……！」

ザフィーラの解答に同意出来る部分はあるが、それでも納得が出来無いアルフ。

そんなアルフの気持ちをしつてか知らずか、ザフィーラは主を護る為に、仲間に応える為に再度拳を握り締めて構える。

『シグナム達が？』

『砂漠で交戦してるの。テストアロッサちゃん……その守護獣の娘と』

『……………』

シグナムとフェイト、ザフィーラとアルフが戦闘をしているのは、何も闇の書事件の解決に來ている管理局員だけが知っている訳では無かった。

ウィータと竜人もまた、シグナム等が戦闘を開始した事を知ったシヤマルから連絡が

あつたのだ。

『長引くと不味いな。助けに行くか?』

『いや、その必要は無いだろうさ。それに……こちらにも客が来たようだ』

『——!』

竜人の言葉に、ヴィータは前へと進むのを止め、目を向ける。

そこには白いバリアジャケットに身を包んだ少女と、山吹色の道着を着た少年が待ち伏せていた。

『ヴィータちゃん?』

『くそっ……こつちにも来た。例の白服。あともう1人……見覚えの無い奴』

白服を着た少女の名前。

——そう、確か……。

「高町なんとか!」

「——!! なのはだつてばあ! な、の、は!」

名前を覚えて貰えていなかった事がショックだったのか、大きな声で訂正を入れて、息を吐き出すのは。

「ヴィータちゃん、あと、えっと……」

「竜人だ」

「ヴィータちゃん、竜人さん……やつぱりお話聴かせて貰う訳にはいかない？ もしかしたらだけど、手伝える事とか……あるかもしれないよ？」

そのなのは言葉と笑顔に、ヴィータは自身の大切な主であり家族でもある少女の姿を重ねて見てしまう。

「煩せえ！ 管理局の人間の言う事なんて信用出来るか！」

だが、ヴィータはそれを振り払い否定をするようにして声を荒げる。

「私、管理局の人じゃ無いもの。民間協力者」

そう言いながら、「ちゃんと受け止めるから。だから話して」と言うように両手を広げるのは。

「(闇の書の収集は魔導師1人につき1回……つまり、此奴を倒してもページにはなん無いんだよな。でも、もう1人の魔導師からなら……だけど、カートリッジの無駄使いも避けたいし……)」

『あの少年の方は俺が募集する。シグナム達の援護に行ってくれ』

『竜人……』

悩むヴィータに、竜人は前に出てなのはとこちらを睨み付ける。

『理解った……。頼む、竜人』

『任された』

「ヴィータちゃん」

「ぶつ倒すのは、また今度だ！」

「——!!」

「吼えろ！ グラーフアイゼン!!」

ヴィータの脚元にベルカ式特有の魔法陣が展開され、手の平に魔力で赤色の衝撃弾を生成する。

【E i s e n g e h e u !】

生成したそれをグラーフアイゼンで叩くと同時に、目を灼くかと思える程の閃光と思わず耳を塞いでしまいそうになる程の大きな音、衝撃波が発生する。

となりを見てみると、なのはは耳を両手で耳を塞いでいる。

目の前に居るヴィータは一瞬だけではあるが、球状のバリアで守られており、竜人の方は何をするでも無く、立っているだけだった。

生み出した隙を付いて、ヴィータは飛行し、グングンと距離が大きくなっていく。

「——あつ!!」

「なのは、此奴の相手は俺がするから、なのははヴィータの方を」

「うん！」

相変わらず竜人は動く事無く、こちらを見ているだけだ。

なのはが動くこうとしていられるにも関わらず、邪魔をしようとはして来ない。

【Master】

「うん」

「よし！ 竜人も居てくれてるし、此処まで離せば攻撃は来ねえ。次元転送」

かなりの距離を取った事を確認すると、シグナム等の居る次元世界への転移魔法を発動する準備に入る。

「——！！」

だが、竜人の居る方へと目を向けると砲撃体勢に入っているなのはを目にする。

【Buster mode. Drive ignition】

レイジングハートの補助を受け、真っ直ぐにヴィータへと精密に狙いを付けるのは。

「行くよ！ 久し振りの長距離砲撃！」

【Load cartridge】

カートリッジが2個排出され、魔力が増大する。

レイジングハートの後ろに小さな環状魔法陣が、真ん中に中位の魔法陣が1つ、前方に大きさは異なるが大きな環状魔法陣が展開される。

脚元には足場のようにして、巨大な魔法陣が展開されている。

「まさか、撃つのか!? あんな遠くから!」

杖の先端に桃色の魔力光が集まり、収束されていく。

「竜人は!」

見ると、竜人の方は、道着を着ている少年と向かい合い一步も動いてはいない。

『すまない、ヴィータ。此奴は強い……下手に動けば』

『自分ではどうにかするしかないのか……くっ』

竜人からの念話に、ヴィータは思わず舌打ちをしてしまう。

信じたくは無いが、竜人の前に居る道着を着た少年はかなりの強者であり、高町なんとかは当たるかどうかは兎も角として、あの距離からの砲撃を仕掛けてくるのだ。

なのはマガジンをグリップの代わりにして強く握り、照準を固定する。

【Divine Buster Extension】

「ディバイイーン……バスターアア!!」

水色のスフィアが3つ形成され、気が含まれた大きな桃色の魔力弾は2つの環状魔法陣とスフィアを通過して、加速、威力を増大させてヴィータへと真っ直ぐに向かってくる。

排熱、そして圧縮された魔力の内使われなかった魔力残滓が煙のようにレイジングハートの排気ダクトから排出される。

ヴィータの居た場所を見遣ると、大きな爆発と煙が上がっており、直撃した事を教えて来る。

「It's a direct hit」

「ちよつと、やり過ぎた？」

「Don't worry」

煙が晴れていと、その中に居るヴィータの影が見えた。

だが、そこにはヴィータだけでは無く、もう一人、長身の影が存在していた。

「——あ！」

仮面の男だ。

白と青色をした服に、額部に宝石のある仮面を付けている。

遠くからでは判り難いが、少し服が汚れているだけであり、身体に傷は付いていないように見える。

おそらく着ているのはバリアジャケットのようなものであり、カートリッジ2発を消費して放った魔力砲撃を防いでみせたのだろう。

「……あんたは？」

「行け、闇の書を完成させるのだろうか？」

その仮面の男の言葉を聞き、改めて次元転送の準備に取り掛かるヴィータ。

正直なところ、目の前に居る仮面の男の正体や目的は知らないでいる。が、今大事なのはそれでは無いのだ。

「デイベイイインン……」

【Master】

逃すまいと砲撃準備に入るが、仮面の男がカードを取り出すと同時に光の鎖が出現して、なのはを拘束する。

「——バインドツ!? そんなー あんな距離から……一瞬で?」

Divine Buster Extensionでやつと届く距離から、砲撃でも無い魔法で此方へ介入して来たのだ。

仮面の男の底知れない実力と、なのはとの間にある魔法の実力の差はハッキリとしたものになった。

【Sorry, master】

力尽くでの内側から魔法による拘束を解除して前へと目を向けるが、そこには既にヴィータの姿も、仮面の男の姿も無かった。

「ううん。私の油断だよ」

後に残されたのは、なのはとレイジングハート、竜人とブロンを含めて3人と1機であり、フェイトとアルフの無事を祈るだけだった。

何度も何度も斬り結び合い、接近しては離れてを繰り返すフェイトとシグナム。シグナムの左腕には傷が出来ており、そこからは血が出ている。

流れ落ちる血は、ポタポタと砂浜に落ち、極一部ではあるが赤く染めている。

「(ここに来て、尚速い……目では追えない攻撃が出て来た。早めに決めないと、不味いな)」

肩で息をしながらも、将であるという事もあつて実力は確かなもの。

冷静に自身の状態と自身が置かれている状況を把握していた。

二刀流のように、レヴァンティンと、その鞘を使い、構える。

「(強い……クロスレンジもミドルレンジも圧倒されつばなしだ……。今はスピードで誤魔化してしているだけ。まともに喰らったら、叩き潰される!)」

フェイトの方もまた手負いの状態であり、左脚から血が出ている。

肩を動かしての呼吸を止め、息を整える。

バルディッツシュを構え、構えているシグナムを睨み返した。

「(シユツルムファルケン……当てられるか……?)」

「(ソニックフォーム……やるしかないかな……?)」

一瞬の間ではあるが、互いに様子を見合い、強い焦りと緊張を感じ始めていた。

両者共に、砂浜を蹴り、疾走る。

「!?」

「!」

だが、それと同時に第三者による介入が成された。

フェイトの小さな身体を白い腕が突き抜けている。

後ろを見てみると、そこには仮面の男が静かに、フェイトの身体に腕を通しながら立っていた。

「テストロッサ……」

フェイトの叫びと共に、彼女のリンカーコアが最小の大きさになる迄抜き取られてしまふ。

そして、その痛みに耐えられず、フェイトはそのまま意識を手放した。

「——貴様!」

綺麗な金色で光り輝く、小さくも膨大な魔力の塊であるリンカーコア。

それは、仮面の男の手に握られていた。

それを見て、思わず目を見開き、彼に対して強く睨み付けるシグナム。

だが、そんなシグナムとは対照的に、仮面の男の声はただただ静かなものだった。

「さあ……奪え」

黒き龍の力の暴走 斬り裂け! コラブサー!

「はじめまして、と言うべきだろうか……なあ、八神竜人」

「俺を知っている? まさか、あいつの事も!」

「当然だ、管理局の情報網を舐めるなよ。ちよいと調べれば出て来るんだよ」

竜人と向かい合い挨拶と同時に軽く挑発を試みせる。

実際のところ、管理局の情報網を使用したのでは無く、レアスキル稀少技能を使用して知った事なのだが。別に言う必要は無いだろう。

転生者についてはまだ知らないでいるのはが側に居る。

バレてしまったのなら説明をすれば良いだけなのだろうが、今はそんな気は無い。バレたくないのだ。

雄介や志蓮からの話を聞いた限りでは、竜人もまた転生者の1人だ。

ソウルゲッター守護騎士プログラムが転生者という存在を知っており、その強大な力についても気付いているのならば。

もしそうであるなら転生者から募集をするだろう。既にしているかもしれない。

そしてその結果、シエンから聴いた通りこの次元世界が崩壊をしよう可能性が大

きくなる。

前にも思いはしたが、それだけはなんとしても防がなくては駄目なのだ。

「お前も転生者なんだろ？ 実は俺もなんだ」

「……………」

「そんなに警戒するなよ。あの娘の事は他の連中には話してはい無いし、今は特に何かちよつかいを出すつもりも無い」

なのはに聞かれないように、そしてサーチャーに音を拾われ無いように細心の注意を払いながら、出来る限り小さな声で口にする。

「今は、だと……………」

「……………」

が、そのキーワードがいけなかったのか。竜人の声は低くなり、彼を包んでいた魔力は次第に大きくなっていく。

空を力強く蹴り、懐へと拳を潜り込ませて殴りに掛かって来る竜人。

それを焦る事も慌てる事も無く、片手でその拳を握り締めるかたちで受け止める。

思いの外、竜人は力を入れていたのか。

俺は握った手を解いてしまい、体勢を崩して吹き飛ばされてしまう。

「おー、痛てえ……………」

木々がクツションになってくれたのか、それほど強く身体は打ち付けられてはいない。

拳を受け止めた掌が赤くなり、強い痛みを感じるだてにだけだ。

受け止めた方の掌に感じている痛みを和らげる為にもう片方の方で擦っていると、エイミーからの通信が来た。

《ブロン君! フェイトちゃんが! フェイトちゃんが!》

「落ち着け。何かあったのか?」

声から察するに、フェイトに良からぬ事が起きたのだろう。

そう……例えば、誰かによる不意打ちでリンカーコアを抜き取られてしまい、意識を失ったとか。

《フェイトちゃんのところに仮面の男が現れて、リンカーコアが……。さつきそつちの世界に仮面の男が居てた筈なのに……そんな速く次元転移が出来る筈無いのに》

予想外の事であったのか、仮面の男の出現とフェイトが倒れた事に動揺しているエイミー。

次元転移を短時間で出来る程の手練なのか、それとも俺のように瞬間移動が出来るのか。

だが、前世で見たアニメでの知識から、そういった事は無く別の理由がちゃんとする

事を知っている。

彼女を落ち着かせる為にゆっくりと話し掛ける。

「取り敢えず、フェイトとアルフ、なのはの3人をそつちに転移させろ。その後直ぐにフェイトを本局に護送するんだ」

「ブロン君は？」

「こつちの事は気にしなさんな。奴さん、興奮していてな……熱烈なアプローチを貰っているところだ」

迫り来る両の拳を回避しながら、彼女に思い付く限りの事を伝える。

《了解しました、特務執務官補佐殿》

何時も通りとまではいかないだろうが、エイミイはハッキリとハキハキとした声を出すように努めているように感じられる。

《ブロン、そいつはかなりの強敵だ。気を付けて事に当たれよ》

「誰に向かって言ってるんだ？ サイヤ人は戦闘民族だ、舐めんなよ！ 手負いの奴や臆病風に吹かれてる奴が来てもな……」

《なら、見せてくれ。お前の特典の力つてやつを》

「こちらからの仲間に対しての挑発に、雄介は見事に掛かり、志蓮は強く唇を噛んでいた。」

ドゥームの顔色はあまり良いとは言えないものであり、妹であるフェイトを心配している事が見て取れる。

雄介の言葉と同時に通信は切られ、なのはの転移準備が開始される。

「ブロン君!」

「エイミーにも言ったけど、こっちは気にすんな。大丈夫だから」

「でも……」

「フェイトの方に付いて居てやれ。あと、彼奴等に対してのフォロー、宜しく」

「ブロー——」

なのはの返事を聞き終える前に、彼女は強制的に転移された。

彼女の姿が消えるのを確認すると同時に、殴り掛かりに来る竜人に対しての対応の仕方を考える。

だが、それと同時にもう一つ気になる……気に掛かる事がある。

「……どうするかな……（今の雄介じゃ勝てないというのは自分でも知っていただろうから自分から行くとは言わなかったし、エイミーも指名しなかった。志蓮の方は手負いでもあるし……ドゥームはフェイトの方だけを見て動こうとしなかったしな）」

「はやてには手を出させない!」

「（最善策からは判らないけど、前に出たんだ……募集されないように気を付けて戦わな

いと)」

エイミイとなのはの方は大丈夫だろう。

だが、問題は兄であるドウムと使い魔であるアルフの方だ。2人はフェイトを大事に想っているのだから、どのような状態になっているか。

ドウムの方はこうなる事は知っている筈だから、覚悟はしているだろうが。

目の前でこちらへと向けてひたすら攻撃をして来る竜人のように、怒り狂っているかもしれない。

「ブスぺレードブラスターアアアツツ!!」

腰部から伸びている2対の砲身から魔力弾が無数発射される。

その速さは音速を超えており、最早亜光速に近いだろうか。

だが、気と魔力で身体能力の全てを向上させ、相手の気と魔力及び放たれた魔力を追い続けている為に、難無く対処をする事が出来る。

右手だけで、それら全てを弾き飛ばしていく。

魔力弾が弾き飛ばされた先では大きな爆発が起こり、木々や草花は燃え、木々が薙ぎ倒されてしまっている。

「うわあああああああ!!」

その叫びと共に、竜人の姿はパイルドラモン似た姿からインペリアルドラモンファイ

ターモードに似た姿へと変化する。

その身体はかなり大きく、見上げざるを得ない。見上げても全体を視界に収める事は出来ない程だ。

「……仕方無いか。シヨドウフオン、折神大変化!」

それぞれ別々のエンブレムの形をした折神を合計5つ取り出して、その上に大の文字を書く。

すると、その折神はそれぞれ大きくなる。

五角形の形からライオンのようなかたちへ、正六角形の形から龍のようなかたちへ、円形からウミガメのようなかたちへ、正方形の形からクマのようなかたちへ、正三角形の形からサルのようなかたちへとそれぞれ変形する。

「(まだ大丈夫……あと数回は使える筈だ……)」

壊れかけたシヨドウフオンを見遣り、自身に言い聞かせる。

シヨドウフオンの方は水虎に穴を空けられ使え無くなっていたが、もしもの為に修理は済ませていたのだ。

獅子折神の中に入り、刀のモチカラでシンケンマルを出して、それを操縦桿にする。

「——な、何だ!?!」

「侍合体!」

獅子折神の口に当たる部分から炎が吐き出される。

龍人は両手で顔を守るようにし、それによって彼の視界は一瞬だけではあるが奪い去られる。

突然の事に驚きを隠せずにいる龍人を余所にして、合のモチカラが込められている侍デイスクをシンケンマルの柄にして、回転させる。

獅子折神の下半身が開き、後ろ足が収納される。そして、下半身は元に戻り、前足がエンブレム時の場所に。獅子の頭部に当たる部分の下で胴体が折り曲がり。前後に分割されているヒトの頭部似た部分が起き上がる。

次に龍折神だ。胴体後部が上に変形して接合される。尻尾と首部分をエンブレム時同様の場所に戻し、龍の頭部だけが一番上迄反る。

続いて熊折神の前足と後ろ足が収納され、頭部が一番上迄反る。

猿折神は展開していた腕が収納される。

最後に亀折神だ。こちらにもまたシンプルなものであり、ヒレが収納され、胴体を2つに開き、頭部を収納。文字の左側が書かれている方の株が180度回転をして腕が出て来る。

そして獅子は胴体及び頭部、龍は左脚、亀は右腕、熊は右脚、猿は左腕に合体をしていく。龍折神の中から兜が飛び出て、それを両腕で掴み、頭部に装着させ、微調整をす

る。

展開された鍬形の部分は金色であり、キラリと陽の光を反射させている。

ダイシンケンが腰に装備される。

「シンケンオー、天下統一!! 戦場に今ぞ立つてね」

そこには五色の巨人が居た。胴体は赤く、右腕は白銀、左腕は黄色であり、右脚は緑色に、左脚は青色。

龍人と比べると、やや小さいがそれでも大きいという事に変わりは無いだろう。

「自分で動いた方が、戦った方が手っ取り早いし最良だろうけど……こっちの方がモチベーションが上がるかなってなあ!」

腰に下げているダイシンケンを巨大な右手で掴み、左手は秘伝ディスクを巨大化した秘伝シールドを手に行している。

「誰が、何が相手であろうとおお!!」

「熱くなり過ぎるなよ。こっちは話がしたいだけなんだ」

大きな身体でありながら、それに見合わない程の速さで龍人から繰り出される攻撃。

それを左手にある秘伝シールドで確実に防いでいく。

「ガアアアアアアアッ!!」

龍人の爪であるインペリアルクローから光の剣であるスプレンドブレードが発生し、

こちらに斬り掛かってくる。

光の剣という事もあり、それもまた亜光速に近い速さでの攻撃だ。

それをダイシンケンで斬り結び、打ち合いをする。

使用しながらではあるが、光が集まって出来ているスプレンドブレードと斬り合う事が出来るダイシンケンに対して驚きと感動を感じ、覚えていた。

原作と言える侍戦隊シンケンジャーに出て来るものよりも、スペックは上になっている。

「話がしたいから戦鬪行為を今直ぐ止めるなんて……まあ、そんなのは無理だろうな。一度倒して、落ち着いて貰うかな。ダイシンケン侍斬り!!」

言葉に耳を傾け無いのであれば、仕方が無いと自身に言い聞かせる。

シンケンマルを振り翳し、これに連動するかのようにシンケンオーもダイシンケンを龍人へと振り翳す。

斬のモチカラが込められたダイシンケンによって、龍人は斬り裂かれ、変身を解除する。

その筈だった。

「———どういう事だ……? おい!」

暴走しているように見せて、意志があつたのか。龍人がダイシンケンの刀身を掴み攻

撃を阻止して来たのだ。

だが、こちらの呼びかけに反応を返す事も無く沈黙している。

龍人はダイシンケンを強く掴んでおり、振り解く事が出来ない。

「いや……暴走しているな」

綺麗な緑色や赤色、青色だった部分が次第に黒く変色をしていく。

瞳は既に白目になっており、理性を手放している事を理解させた。

「さしずめ、ブラックインペリアルドラモンつか……? 俺を倒そうとする為に暴走してしまいう程に彼女を大切に想っているのか。全く、やれやれだな……」

先程よりも強く荒々しく、荒れ狂う程に激しく速い攻撃をして来る黒く変化した龍人。

その攻撃はとてつもなく速い上に重く、シンケンオーはかなりの距離を飛ばされてしまふ。

吹き飛ばされるシンケンオーは巨体である為に、周囲の草木などを滅茶苦茶にしてしまふ。

龍人の身体の周囲を膨大な魔力が覆い、それはまるで黒いオーラのようになっている。

そしてそれが、彼の能力を上昇させており、盾のようなものにもなっている筈だ。

「流石、恐怖の皇帝竜。しゃーなしだな……」

志蓮の王の財宝ゲイト・オブ・パビロンの中から兜折神と舵木折神、虎折神の3体が次元転移をして来る。

「侍合体!!」

頭部を分離した虎折神を中心に、変形した兜折神と舵木折神の胴体がそれぞれ両翼として合体し、兜折神の両足が兜折神と舵木折神の外側面に、虎折神の頭部を装着した舵木折神の尾鰭が尾羽としてそれぞれ合体し、虎折神の尻尾が変形した円形の前立てを装着した兜折神の上半角が頭部として合体をする。

「ダイテックウ、天下統一!! 超侍合体!!」

超のモチカラが込められている超侍合体ディスクをシンケンマルに装填して、回転させる。

それにより、合体が完了したダイテックウとシンケンオーが更に合体を開始する。

シンケンオーの兜が外れ、背部に一部パーツを分離したダイテックウが背負う様に合体し、胸部に2本の虎ドリルが装着され、頭部に左右に展開したU字形に変形をした尻尾の前立てを装着した虎折神の頭部が新たな兜として合体。

「テックウシンケンオー、天下統一!!」

龍人の攻撃を回避して、上空へと退避するように飛行をしてみせる。

その動きは速く軽やかであり、ダイテックウの素早さをそのまま使用出来ている事を

見せ付けていく。

降下して龍人に斬り掛かり、退避をする。所謂ヒットアンドアウェイの繰り返しだ。だが、音速の斬撃であるにも関わらず龍人のスプレンドブレードによつて全てが斬り払われてしまっている。

理性を手放している為に本能や直感だけで行動している筈なのに、これほどの動きが出来るという事に戦慄を覚えてしまう。

「手数が足りないのか、それとも……。侍武装!!」

ゲート・オブ・パレロン
王の財宝内からもう一つ、折神が飛び出して来る。

恐竜折神だ。濃い赤色をしており、目が付いており、刀身には鋭い歯がある。

他の折神同様に意志はあるが、この恐竜折神は特にそれが強い。

操縦室へと転移をして来た恐竜折神の上に大の文字を書き、その恐竜折神はかたちはそのままにして大きさが変化、28m規模の大きさになる。

そして、その恐竜折神の兜は冠らず、刀であるキョウリユウマルだけを武器として装備する。

「まあ、名付けてキョウリユウテンクウシンケンオー? かな……。なんか言い難いし、変な名前だよなあ……」

「ポジトロンレーザー」

龍人は距離を取って右腕にあるレーザー砲から魔力によるレーザーを連射する。

手にしているキョウリユウマルである恐竜折神が自身の意志で刀身を伸ばして、そのレーザーを次々と斬り裂いていく。

ダイテックウの持つ速さでテックウシンケンオーとしての回避をしながらも、キョウリユウシンケンオーとしてのリーチと攻撃力をもって、龍人からの攻撃などに対応してみせる。

それを目にして気に障ったのか、更に魔力を高めていく龍人。

龍人の胸部にある龍顔の口が開き、砲塔がせり出て来る。次に、右腕に装備しているポジットロンレーザー砲を外して、その龍顔の砲塔へと嵌め込み、その砲身に魔力が集中していく。

その魔力量は膨大という言葉すらも当て嵌まる事は無く、臨界点を超えて暴発し、爆発をしてしまうかと不安に思える程に集まっている。

だが、そんな不安を嘲笑うように、膨れ上がっていく魔力。

「凄い魔力量だな……周辺の星々を巻き込んで破壊しちまいそうな程だ」

その膨大な魔力により、嵐のような凶風が巻き起こる。

その魔力量を感じ取り、思わず冷や汗が背を伝っていく。

インペリアルドラモンファイターモードの放つ最大攻撃の威力は本来、地球型惑星を

破壊出来る程度だった筈だ。

だが、その黒い魔力球からはそれ以上のものを感じさせて来る。

「……ギガデス」

その言葉と同時に、龍人の胸部にある砲口から圧縮魔力によって生み出された超重量級の暗黒物質がキョウリユウテンクウシンケンオーへと向けて発射される。

暗黒物質の周りは強い風が発生しており、その風が暗黒物質の中へと誘うようにして地面に生えている草木を吸い込んで行く。

「全く……おそろしいものを。まるで小さなブラックホールみたいだな……」

斬のモチカラを込める事が出来る分だけ込め、巨大刀であるキョウリユウマルを強く、そして一気に振り下ろす。

恐竜折神はまた自身の意志で刀身を伸ばし、その暗黒物質を容易く斬り裂いてしま
う。

「終わりだ、キョウリユウマル空間一閃!!!」

「!?!」

そのまま伸びた刀身は黒く染まった龍人を斬り裂き、龍人の変身は解除される。

あとは空間ごと抉り取られた大地がクレーターのようにして残っており、そこには安心しているかのように優しい笑顔を浮かべたまま気を失っている少年の姿があった。

「——竜人!？」

「まさか、てめえ!」

倒れている竜人の無事を確認する為に近付こうとすると、背後から聞き覚えのある声が耳に届いた。

振り返るとそこに、転移をした筈のヴィータ、シグナムとザフィーラの3人の姿があった。

「落ち着け、ヴィータ」

「焦っては上手く事を運べない。まずは竜人と彼奴を引き離す」

飛び出ようとするヴィータを止めに掛かる2人。

だが、その低い声や震えている拳が見えるところから必死に耐えているように思わせてくる。

シグナムはレヴァンティンに手を持っていき、ヴィータはグラーフアイゼンを握り締め、ザフィーラは拳をつくりだしている。

「これじゃあ、まるで俺が悪者じゃないか……」

俺はキョウリユウテンクウシンケンオーから降りて、彼等に顔を見せた。

合体を解除したそれぞれの折神は、王の財宝の中へと次元転移をする。
ゲート・オラバピロン

「お前は確か……」

「保和歩栄……数日ぶりといったところかな、シグナム」

知り合いと出会った事に驚きと戸惑いを感じているシグナム。

「俺は別にお前らと事を起こす気はこれっぽちもな——」

俺は言いたい事を言い終える事も出来ず、紅いハンマーであるグラーフアイゼンが此方へと迫り来る。

難無く躲してみせるが、次にレヴァンティンの刃が空気を斬り裂きながらこちらへと近付いてきており、それを躲してもまた蒼い拳が殴りに掛かって来る。

「少しは……話を、聴け!!」

「すまないが、それは出来ない。お前が此処に居るといふ事はテストアロツサ同様に魔導師であり、管理局と関係のある存在だといふ事……」

「まあ、そうだな」

「主に近づくなどまでは言えん……だが、こちらの邪魔は出来ない程度には募集をさせて貰う!」

繰り出される攻撃は避ける事自体は大して難しくは無く、それどころか簡単だと言える程の速さだ。

だが、こちらには戦意が無い事に気が付かないのか。只管に、我武者羅に攻撃を仕掛けてくる3人の守護騎士。

【Explosion】

カートリッジで増加させた魔力を乗せ、こちらへの攻撃がより一層強く速くなる。

「くそっ……何で、何で当たらないんだ!？」

「落ち着け、ヴィータ!」

ただ闇雲に攻撃を仕掛けるヴィータにシグナムは声を掛けるが、それでも一向に攻撃方法などを変えないヴィータ。

そんなヴィータとは対照的に、シグナムは相手である少年に対して疑問を感じ始めていた。

「(何故、攻撃を仕掛けて来ない……どういうつもりなんだ……)。——ヴィータ!」

「無駄使いは避けたいけど、仕方ねえ!」

【Explosion】

グラーフアイゼンから2個の葉莢が飛び出し、大きく形が変化する。

ハンマーヘッドが巨大な角柱状のものに変形し、変形したハンマーヘッドの大きさはそれを持つヴィータの身の丈に等しい大きさだ。

「轟天爆碎!! ギガント——」

「……………」

迫り来る大きな槌が視界を覆い尽くしながら迫って来ているが、別に慌てたり焦った

りといった気持ちにはならなかった。

「こいつ等もまた、大人しくさせた方が良いのかな……」

大きな土煙が巻き起こり、その場に居る者の視界を奪い去る。

「——やったか!？」

「それはフラグという奴だ、ヴィータ」

攻撃が直撃した事は、手の感覚で理解しているヴィータ。だからこそ、その言葉を口にしてしまった。

ザフィーラの言葉を聞き、ヴィータは改めて前を見据え警戒をする。

「意外と軽いものだ……」

煙が晴れていくのと同時に人影が見え、それが無事に立っているのが確認出来る。

それを見て、3人は驚くと同時に身構える。

「良い攻撃だな、威力も申し分無い。……だが俺に対しては無意味だ」

「な!?! あれを喰らってピンピンしてる……嘘だろ?」

俺は、道着に付いた埃を手で払いのけながら3人を視界の中に入れる。

と同時に、その場に存在する空気中の魔力の流れや質が変異していくのが感じ取れた。

「——ッ!!」

「嘘っ!? あれを避けるなんて……」

遠く離れた場所でシグナム等の戦闘を観て、隙を伺っていたシャマルは自身の持つ特殊な魔法である旅の鏡を使用して、目標のリンカーコアを募集しようとした。

が、結果は失敗だ。

攻撃魔法では無い為に、バリアジャケットを着ている相手には使えない。だが、その目的である少年は、そんなものを着用していないのだ。

だから出来る。そう思っていたのに。

『シャマル』

「ごめんなさい、皆……失敗しちゃった」

思念通話でこれからどうするかを話そうとし、顔を上げると、かなりの距離があるはずなのにも関わらず、その少年がこちらを見ているように見えた。

目があったのだ。

「嘘……この距離でこっちが視えてるの?」

なのはがヴィータに対して Divine Buster Extension による砲撃をした際の距離とは比べものにならない程であり、その時の3倍近くは離れた場所だ。

魔力で視力を強化していたとしても、ヒトの身であるのならば、理論上などなら兎も角、実際には出来ないであろう筈の距離だ。

『はじめまして。湖の騎士、風の癒し手よ』

「——!？」

『取り敢えず、こちらに戦闘の意志は無い。これは理解してくれるかな?』

「……ええ」

『ありがとう。それじゃ、こっちに来てくれ。早めに済ませたいだろ? 君達も』

突然の、少年から自身に対しての思念通話が来た事に驚きはしたが、直ぐに気を取り直して対応する。

「(今は皆と合流する事を優先するべき……)」

シグナム等の居る地点へと真つ直ぐに飛行を開始した。

「取り敢えず、落ち着いてくれて嬉しいよ」

「すまなかつたな、そちらの言葉を聴かずに斬り掛かって」

「いえ、こうして向かい合い、話が出来ているんです。それだけで良いですよ」

シグナムとザフィーラの方は、もう戦闘をする気は無いというのが理解出来る。

だが、ヴィータの方は、まだ警戒をしているのかこちらを強く睨んでいる。竜人を守

るようにして立っていて、手にはまだ Hammer form のグラーフアイゼンを手
にしている。

こちらへと合流をしたシャマルの方は、シグナムとザファイラの様子を見て、問題は
無いと判断したのだろう。警戒をしながらも柔らかな表情をしている。

そして、気絶をしている竜人に対して治療の為に魔法を行使していた。

「単刀直入にいこう。俺は、お前達の主の正体と場所を知っている」

その言葉に、シグナム以外の3人はより一層こちらを警戒する。

当然だろう。管理局との繋がりがあがる人物が、主を知っているのであれば直ぐに管理
局が動きだし、主に——少女に何かが起こる可能性があるかもしれないのだから。

そして、その何かとは。彼等はその何かが起こらないようにと、主である少女に黙り、主
である少女との約束を破り行動をしているのだから。

「だが、彼女の事を管理局に話す気は無い」

「どういうつもりだ……いや、何が目的なんだ？」

「俺はお前等に頼みたい事があるんだ」

「頼みたい事だと……？」

「ああ。だが、その前に質問がある」

そうだ。この質問をして、確かめてからではないと駄目だろう。

彼女等が知っているのか、そうでないのか。

「転生者という言葉に聞き覚えはないか?」

「転生者?」

「何だよ、そりゃ?」

竜人からは聴いてはいないという事だろうか。

これで、彼等が進んで転生者から募集をすることも出来ないという不安は解消された。

だが、知らずに募集をしてしまう可能性があるという問題は、まだ残り続けているのだ。

「簡単に言うとき大きな力を持った存在……お前達に理解り易く言うと、いや代表を紹介するととなると、俺やそこで気を失っている竜人がそうだ」

「竜人が?」

「他にも、竜人が今迄戦って来た奴等……滅竜魔導士、額に水晶がある男もそうだな。後は……」

「あの時……テストロッサ達がデバイスを強化して来た時、ヴィータとザファイラの動きを封じた男」

「そう。そいつもまた、転生者の1人だ」

ざっくりと、簡単に紹介を試みる。

一人だけ、その特典である魔法について口にしてしまったが、問題は無いと信じたい。「その、転生者？ がどうしたんだよ？」

「転生者からの募集はしないで欲しいんだ」

ヴィータの質問に対し、簡単に返答をする。

その答に納得がいかないのか、理解が出来ていないのか、もう一度質問をして来るヴィータ。

「何で、転生者から募集したら駄目なんだよ？ そんなに強くて大きな力を持つてるなら、あつという間にページが埋まって、はやてが助か——あつ」

「別に今更、主であるはやての事を隠さなくても良い。既に知っていると言っただろ？

あと、その疑問についてだがな……」

ここに来て答えに窮してしまう。

自身の知っている事がこの世界に於いても当て嵌まっているのか、知識通りのものなのか。

それとも、違う現象などによって闇の書が彼女を苦しめているのか。

それに……話したとして、彼等は信じるのだろうか。

「どうしたんですか？ 急に黙って……もしかして、身体に異常でも？」

「いや、大丈夫だから」

「こちらを気に掛けてくれているのか、シャマルの心配する声に対して笑顔で応える。兎に角、こうして黙っていても進展はしないだろう。」

「はやての病気、原因不明とされている麻痺は闇の書が原因だという事は知っているな？」

「ああ。だがそれがどうかしたのか？」

「信じられないかもしれないが、募集を完了させたとしても……彼女は、はやては救からない」

「……どういふ事だよ!？」

俺の言葉に、食って掛かるように声を荒げるヴィータ。

俺はただ知っている範囲での事を、知り得る限りの事を正直に話すだけだ。

「闇の書のページが全て——666項ものページ全部が埋まると、闇の書内に存在するバグである闇の書の闇が反応、呼応して暴走。主諸共、その主の居る世界を巻き込んで破戒して、転生をする……」

「どういう意味だ? そんな事、信じられる訳無いだろう?」

「事じ——」

「——巫山戯んじやねえ!!」

「竜人?」

説明を捕捉しようとしたところに、まだ声変わりのしていない少年の悲鳴に似た声が聞こえて来る。

「冗談でも笑えねえぞ、それ……転生者だとか、そんなの知るかよ！ ああ。確かに俺は転生者だ。だが、それ以外は何も知らねえ。俺の持つ力と家族の事しか知らねえよ。大体何だよ、闇の書の闇とかって!?! はやてが死ぬ？ 巫山戯るな！ そんな事はさせねえ」

滅茶苦茶だった。

言っている事が全部、態度も。

竜人は荒げた声で、俺の言葉を否定していく。駄々を捏ねる子供のように、それらを否定していく。

大事に想っているのだろう、妹であるはやての事を。家族を。

それだけは感じ取る事が出来た。

だが、今の俺にはそれよりも別の疑問を感じていた。

「(どういう事だ？ 転生者なんだから闇の書とかの知識もある筈だろ……これじゃ、まるで)」

——何も知らない。記憶が無いみたいじゃないだろうか。

言いたい事の全てを吐き出したのか、竜人はその場から地球へと向けて多重転移を開

始する。

ヴィータは、彼の後を追いかけるようにしてこの場を離れようとするが、その前にこちらへと目を向けた。

その瞳は真つ直ぐに、刃のように俺が敵を見遣り、貫いている。

後に残されているのは俺とシグナム、シャマル、ザフィーラの4人だけだ。

シャマルとザフィーラの2人もまた、先に行った2人を追いかけるように転移をする。

「正直に言うと、お前の言っている事は信じられない。嘘だと思えない」

「……だろうな」

そう言い返す事しか出来なかった。今の俺には余裕が無かった。

「例えお前の言う事が正しくても、そうであってもだ……私達に思い付くのはこれだけだ。これしか出来ないのだ」

相棒であるレヴァンティンを握り締め、こちらを真つ直ぐに見詰めるシグナム。

彼女の瞳が揺れているように見えた。

気持ち揺らいでいるのだろう。

不安を感じてしまっているのだろう。

俺の不注意な言葉の所為で。

だが、シヤマルやザフィーラに悟られないようにしていた。

現に、ヴィータと竜人が居る時にこんな事は言わずに、顔を向ける事も無かったのだから。

「これからも、主はやての良き友人であつて欲しい……」

そう言うのと背中を向け、転移をするシグナム。

木々が薙ぎ倒された中心にある大きなクレーターの真ん中で俺はただ一人、ポツンと残されてしまった。

無限書庫での調査 判明する闇の書の呪い

「フェイトさんは、リンカーコアに酷いダメージを受けているけど……生命に別状は無いそうよ」

担当医からの報告を受けたたリンディからの説明を聴き、場の空気は少し軽くなる。

だがそれであっても、未だフェイトは目を覚ます事は無く、暫くの間は魔法を使用する事は出来ないのだ。

あまり良くない流れだと言えるだろうか。

「私の時と同じように、闇の書に吸収されちゃったんですね」

「アースラの稼働中で良かった。なのはの時以上に、救援が早かったから」

「だね」

クロノの言葉に頷くロツテ。

彼女は、アースラ組に所属しているスタッフや魔導師という訳では無いのだが、協力者だという事もあり、会議室での会話に参加をしている。

横を見てみると、ドゥームは目を瞑り大人しく座っており、一言も話さず静かにしている。

だが、彼の膝下へと目を向けてみると拳をつくり強く握り占めているのが見える。爪が喰い込んでいるのか、ほんの少しではあるが血が出ているのが見えた。

表情の方は普段と変わりが無いように見えるが、机の下では激情が現れている。必死に隠そくとしているのだろう。

「2人が出動して暫くして、駐屯所の管制システムがクラッキングで粗方ダウンしちゃって……それで、指揮や連絡が取れなくて……ごめんね、私の責任だ」

「んな事無いよ。エイミーが直ぐシステムを復帰させたから……アースラに直ぐ連絡が出来たんだし。仮面の男の映像だって、ちゃんと残せた」

フエイトが募集され、意識を失っている。その事に大きく責任を感じているのか、エイミーは深く頭を下げた謝罪の言葉を口にする。

「その通りだ。何者かの介入によってシステムはダウンしたという事にお前が責任を感じる必要は一つも無い。それにそう思うのであれば、そういった事をするよりも先に、この先どうするかを考えるべきだ」

そこにロツテや俺がフォローを入れはするが、それでもエイミーは気を重くしている。

「でも、可怪しいわね。向こうの機材は管理局で使っているものと同じシステムなのに、それを外部からクラッキング出来る人間が居るなんて居るものなのかしら」

「そうなんですよ。防壁も警報も全部素通りで、いきなりシステムをダウンさせるなんて……ユニットの組み換えはしてるけど、もっと強力なブロックを考えなきゃ」

リンディの言葉にエイミィは強く反応をして、その不可解な点を述べる。

管理局で使用されている防壁や警報などのシステム。

これらを突破する事が出来る人物は、次元犯罪者の中でもかなり限られてくるだろう。

そして、その防壁や警報を素通りして、ダウンしてから気付かせる程の腕を持つ人物。それ程の人物は知られてはいないのだ。表的には。

そう。この場に居るエリア以外はそれが可能である人物を一人だけ知っている。知り合っているのだ。

だが、彼の存在はトップシークレットのようなものであり、知り合ってから少ししか日数は経過していないが、そういった事をするような人物では無いといった確信を感じている。

「それだけ、凄い技術者が居るって事ですか？」

「うん。もしかして、組織だつてやっつてんのかもね」

なのはの言葉に、推測ではあるだろうがエリアが口を開いて考察を話す。

だが、前世で見たアニメからの知識の所為で、その彼女の言葉はかなり白々しいもの

に聞こえてしまう。

「君の方から聞いた話も、状況や関係が良く判らないな」

「ああ……私が駆け付けた時には、もう仮面の男は居なかった。けど……あいつが、シグナムがフェイトを抱き抱き抱えてて」

——言い訳は出来ないが、すまないと伝えてくれ。

そのシグナムはその時、非常に申し訳無いと言いたいような表情をしてたのだろうか。

彼女も彼女で、優しい人間だ。

募集をし、闇の書を完成するという事が目的である為に、仮面の男が差し出したフェイトのリンカーコアをやむなく募集したのだろう。

不意打ちなどの手などは気に喰わないだろうが、今の彼女等にはそうは言っては出来ない程に切迫した状況なのだろうから。

「それじゃ、次にブロン……君からの報告を聴かせてくれないか」

「わかった。そうだな……なのはと共にヴィータと竜人が居る世界へと転移をして、なのはがヴィータへ魔力砲撃をした。が、仮面の男が現れて、そいつがなのはの砲撃を受け止めて、2人は転移。残ったのは俺となのは、そして竜人だけ。これは聴いただろ？」

「ああ」

「なのも転移をした後、竜人と戦闘は激化した。そして、竜人を無力化した後に、ヴォルケンリッターが転移をして来て……竜人を保護した後に、撤退をしたよ」

「それだけか？」

「ああ……。それだけだ」

そう。話せるのはそれだけだ。

目の前には、この会議室には転生者については何も知らないのはと、知らないであろうアリアが居るのだから。

「(どうして俺は……)」

報告をしていると、彼等の——八神竜人と、ヴォルケンリッターが見せたあの態度と表情、そして言葉を思い出してしまう。

「(もう少し、マシな言い方は無かったのか……？　もう少し優しい言い方が……。何も知らないとは言え、彼等は——)」

考えれば考える程に、少しでも浮かべただけで、押し潰されてしまうと感じる程の重さと苦しさを感じてしまう。

転生をして、特典を得て、サイヤ人や聖王になったところで、そういったところは一つ変わりはない。

そういつた風に自分を責めていると、先程エイミイに対して自分が口にした言葉を思

い出す。

——この先に何を、どうするかを考えるべき。

「(そうだな……くよくよしていても始まらない。まずはどうするかだ)」
 稀少技能レアスキルの1つを使い、意識を集中させていく。

「闇の書の中に巢食っている闇の書の闇をどう取り除くか……。守護騎士であるヴォルケンリッターや管制人格の無事も保証出来る方法は……？」

転生数日後の時のように、手元には白紙の本なんて無い。

だが、頭の中には無数の本棚が存在している。その本はあらゆる可能性や情報が載っている本であり、その中から求めるものを検索していく。

「——!! まだ見付からないのか」

無数に存在する中から見付け出すには、かなりの根気が必要となる。そして、それだけ身体や精神には大きな負担が掛かってしまう。

例えばそれが現実での一瞬の出来事であろうと、かなり辛い作業になるだろう。

「——っ見付けた!! だけど、十全を期して、完璧に、確実に、安全に事を成すとするなら時間が足り無さ過ぎる。やっぱり、アニメ通りの展開に持つていくしかないのか……)」

該当したものの殆どは、どれも現実的なものとは思えないものばかりだ。時間も労力

も技術も足り無い。いや、無いと言っても良い位だろう。

そして何よりも、その全てに運が関係している。

「(つたく……あれがどれだけ奇跡的な事なのか、よく理解出来るぜ。最終的には、フェイトが脱出に成功して、はやてが目醒めるかどうかで決まるんだから……)」

俺が解決策を探している間にも、話はどんどん進んでいく。

「アレックス！ アースラの航行に問題は無いわね？」

「ありません」

「うん。では、予定より少し早いですが……司令部をアースラに戻します。客員は所定の位置に」

リンディの言葉に、この場に居るメンバーの全ては強く頷く。

「なのはさんを始め、雄介君と志蓮君、ブロン君はお家に戻らないとね」

「ああ……はい。でも……」

「フェイトさんの事なら大丈夫。私達でちゃんと見ておくから」

なのはが心配している事を察し、リンディはなのはを諭すように優しく話す。

それでもまだ心配なのか、それともまた別の理由なのか。なのはの顔は暗く沈んでいる。

大事な友達が意識不明になり、居ても立っても居られないだろう。

『まあ……そんなに気になるなら、俺が瞬間移動で連れてってやるから。取り敢えず、家に帰って、皆に無事を知らせようぜ』

『うん、ありがとう』

リンディと俺の言葉に渋々といった感じに頷くのは。

次元転移を1人で行うというのは、それだけで優れた魔導師であるという事を示している。

そして、転移魔法を使用する事が無く、リンカーコアを持た無い者でも次元転移が出来る方法が存在する事が知られてしまう訳にはいかないのだ。

そういった理由などから、アリアには聞かれないように、なのはだけにチャンネルを絞って念話で話した。

「助けて貰った……って事で良いのよね」

「少なくとも、奴が闇の書の完成を望んでいるのは確かだ」

八神家のリビングで、4人の守護騎士達と竜人は先日のお出来事を思い出し、それぞれの考えを話す。

シヤマルの考えに、シグナムは大方そうであろうと判断出来る事を付け足す。

仮面の男の目的はどうかと、その行為で助かった場面は実際にあったのだ。

「完成した闇の書を利用してしようとしているのかもしれない」

「あり得ねえ！ だって、完成した闇の書を奪ったって、マスター以外は使えないじゃん！」

ザフィーラの言葉に、強く否定をいれるヴィータ。

闇の書は666もの真つ白なページが存在し、魔導師を始めとしたリンカーコアを持つ生物から魔力を募集する事で、そのページに文字が刻まれ、埋まっていく。

埋まるページ数には、その生物の持つリンカーコアや力量によって左右される。

そして、その募集作業を助け、行う為に守護騎士プログラムであるヴォルケンリッターが存在しているのだ。

闇の書には無数のプロテクトやシステムが搭載されており、主にしか扱う事は出来ない。極一部ではあるが、管制人格もある程度のシステムの操作は行える。

だが、それだけだ。

「完成した時点で、主は絶対的な力を得る。脅迫や洗脳に効果がある筈も無いしな」

募集をする事で、その募集をした対象が使用出来る魔法などのプログラム構成や術式などもコピーされ、ページに記載される。そして、闇の書の主はその魔法を使用出来るようになるのだ。まあ、使用する際には資質の違いなどで別の効果を持つ魔法になったり、術式の組み直しを行う必要があるのだが。

そういった理由から、シグナムの言う通り、脅迫をされたとしても、それに屈する必要は無い程の力を得る事になるだろう。

「まあ、家の周りには嚴重なセキュリティを張ってるし……方が一にも、はやてちゃんや竜人にも危害が及ぶ事は無いけど……」

シヤマルの言葉通り、この八神家にはセキュリティに似た魔法が張られている。

不審者が接近した時に、それを知らせる魔法。そういった存在を足止めする為の魔法。そういった魔法が張り巡らされている。

「念の為だ。シヤマルは暫く、主の側を離れん方が良いな」

「うん」

ザフィーラの提案に、頷くシヤマル。

はやてを直接守る必要が出て来たのだ。

そう、彼女が闇の書の主である事を知っている人物が居るのだから。

「ねえ。闇の書を完成させてさ、はやてが本当のマスターになってさ……それ、はやてと竜人は幸せになれるんだよね？」

「闇の書の主は、大いなる力を得る。守護者である私達は、それを誰より知ってる筈で

しょっ！」

ヴィータの言葉に、シヤマルは応える。

だが、それでも釈然としないのか、ヴィータは続けて口を開く。

「そうなんだよ、そうなんだけどさ……」

「保和歩栄の言った事を気にしているのか？」

「そういう訳じゃねえよ。でも……わたしは何か、大事な事を忘れてる気がするんだ……」

闇の書の主となった者は、闇の書の全てのページが埋まると同時に、誰にも負けないと言える程に大きく強力な力を得る事が出来る。

だが、その力を得た後にどうするのか。どうなるのか。

「……大事な何かを——っ!？」

そうしていると、2階から何かが倒れる大きな音が鳴り渡る。

「——はやて!!」

「——はやてちゃん!!」

2階にあるはやての部屋へと急ぐと、予想していた通り、倒れている彼女の姿があった。

ベッドの横に置いてあった車椅子も転倒している事から察するに、車椅子に乗ろうとしたところで、気を失ってしまったのだろう。

気を失いながらも胸を抑え、必死に痛みを耐えているはやて。

その姿を見て、限界が近いという事を改めて認識させられた。

「リンデイ……提督……」

フェイトが目を覚ますと同時に、覗き込んできているリンデイの顔が視界に入る。

身体を起こそうとすると、リンデイはそれをし易いようにと、少し手を貸した。

ベッドの上に腕を乗せて、その腕を組み、枕代わりにして寝ているアルフの姿が見えた。

「アルフ……」

「アルフも、昨夜からずっと側に付いてたから」

「——ん？ あれ？ 私……？」

「ここはアースラの艦内。貴女は砂漠での戦闘中に、背後から襲われて、気を失ったの」

リンデイのその言葉を聴いて、シグナムとの戦闘、そしてその前後の事を次第に思い出していくフェイト。

「リンカーコアを吸収されてるけど、直ぐ治るそうよ。心配無いわ」

「私、やられちゃったんですね」

リンカーコアが募集された。

その言葉を聞いて、胸が貫かれ、強制的にリンカーコアを抜き取られた事を思い出す。その時の痛みは既に無くなっている筈のだが、その出来事を思い出すと、痛みもまた、同時に蘇ろうとして来る。

「管理局のサーチャーでも確認出来なかった不意打ちよ。仕方無いわ」

不安を取り除くように優しく手を握ってくれている事に気付き、少し照れてしまうフェイト。

「あー！ ごめんなさい。嫌だった？」

「いえ……嫌だとかは……」

「少し斃されているみたいだったから」

自身の身体を他者の腕が貫く。それを目にし、体験したのだ。そして、リンカーコアを抜き取られるというのは、かなりの痛みが襲い掛かってくる。

斃されるどころか、トラウマになっても可怪しくは無い。

「でも良かったわ。貴女が無事で」

「……すみません。ありがとうございます」

その屈託の無い笑顔を、純粹な笑顔を見て、フェイトは礼を言う。

その、真つ先に謝罪をするところから、彼女の性格がよく出ていると言えるだろうか。「学校には、家の用事でお休みって連絡をしてあるから。もう少し休んでいると良いわ」

「はい」

「お腹減ってるでしょ？ 何か、軽い食事と飲み物持ってくるわ。何が良い？」

「いえ……そんな……」

寝ているところを看っていて貰った事や手を握って貰った事、心配を掛けた事などから、これ以上に、何かをして貰うという事が非常に申し訳なく思えてしまうフェイト。

「良いから」

「えっと……お任せします」

「うん」

フェイトの言葉に、嫌な顔一つせず、それより寧ろ心からの笑顔を見せながら頷くりンディ。

第三者が見ていたとしたら、それはまるで母親が娘の看病をしているかのように感じただろう。

「あの……」

「どうしたの？」

「皆は……兄さんは」

「彼なら訓練をしているわ。家の用事だと連絡したのだし、彼だけ学校に行くのも、ね」
食堂へと向かうリンディを見送り、握って貰っていた手を見る。

アルフの寝言が聞こえ、照れ隠しをするかのように寝ているアルフへと急いで目を向けるフェイト。

そして、自身の名前を呼ぶ彼女を見て、思わず微笑んだ。

「大丈夫みたいね。良かったわ」

「はい。ありがとうございます」

海鳴大学病院の病室にて、はやてはベッドの上に居り、その周りにシグナムとシャマルにヴィータ、そして担当医である石田幸恵が居た。

「せやから、ちよつと目眩がして、胸と手が攣っただけやって言ったやん。もう、皆しておおごと大事にするんやから」

「でも……頭を打ってましたし」

「何かあつては大変ですから」

意識を取戻して、皆へと自身の無事を教えるはやて。

だが、そうであつても、シャマルとシグナムの言う通りに頭を打ち付けていたのだ。何か問題が起きてからでは遅い為に、急いで病院に来たというところだ。

「竜人兄ちゃんもや。皆、心配してくれるのは嬉しいけど、でもおおごと大事にし過ぎ」

「そうは言うがな……」

「はやて、良かった」

無事な様子を観て、安堵した様子を見せるヴィータの頭を撫でるはやて。

「まあ、来て貰ったついでに……ちよつと検査とかしたいから、もう少しゆっくりして
いってね」

「はい」

「さて。シグナムさん、シャマルさん、ちよつと……」

「今回の検査では、何の反応も出てないですが……攀っただけという事は無いと思いま
す」

「はい。かなりの痛がりようでしたから」

今は笑顔を見せてくれているはやて。

だが、家で大きな音が鳴り、駆け付けると、倒れていた。

病院に連れて行くまでの間、胸に手をやりながら必死に痛みを耐えているのが見て取
れた。

かなりの痛みだったのか、汗も流れていたのだ。

「麻痺が広がり始めているのかもしれない。今迄、こういう兆候は無かつたんですよ
ね」

「と思うんですが……はやてちゃん、痛いのか、辛いのか隠しちゃいますから」

「発作が、また起きないとは限りません。用心の為に、少し入院して貰った方が良いでしょう。大丈夫でしょうか？」

闇の書による負荷が原因の麻痺。それが遂に、上半身にある臓器へも広がり、影響が
出始めたという事だろうか。

今回は、家に皆が居たから、直ぐに病院へと連れて来る事が出来た。

だが、はやてにずっと付いていられる訳では無いのだ。今後、こういった出来事が起きたとして、直ぐにどうにか出来る訳では無い。

だから、病院に居続けているという事の方が良いだろう。

「……はい」

「入院!？」

「ええ……そうなんです……」

沈みかけている太陽の陽光が窓から射し込んでくる中、シャマルからの説明を聴き、
驚くはやて。

その言葉に、はやてとヴィータの表情は暗くなる。

その言葉を発したシャマルもまた、同じく暗い表情だ。

「でも、検査とか、年の為とかですから。心配無いですよ。ね？」
「はい」

シヤマルから同意を求められたシグナムは、首肯きながら、新しい水を入れた花瓶を机の上に置く。

「それは良えねんけど……私が入院しとつたら、皆の御飯は誰がつくるんや？」
守護騎士である彼女等は、この時代で、はやてを主とするまでは、そういった経験などは全く無かったと言える。

だからという訳では無いが、少し苦手意識を持っている。

「そ、それはまあ、何とかしますから」

「そうですよ。大丈夫です。多分……」

ほんの少し狼狽えてしまうシグナムに、安心させる為に微笑むシヤマル。だが、自信無気な様子に、はやても苦笑をしてしまう。

「まあ、竜人兄ちゃんが居るから大丈夫かもしれんけど……」

「毎日会いに来るよ！ だから、大丈夫」

寂しい思いをするだろうと察したのか、ヴィータは身を乗り出しながらはやてへ思いを口にする。

「ヴィータは良え娘やな。せやけど、毎日や無くても良えよ。やる事無いし……ヴィー

夕、退屈やん？」

「う……」

「ほんなら私は、3食昼寝付きの休暇をのんびり過ごすわ」

はやてもまた、彼女等を安心させる為に言う。

「——あかん！　　すぐかちゃんにメール来れたりするかも」

「ああ。私が連絡しておきますよ」

「お願い」

病院内での機体電話の使用は極力避けなければ駄目なのだ。

携帯電話から発せられている電波によって、計器類やその他の病院内で必要な機械類に影響があるかもしれないからだ。

特に病室内での使用は控えるべきだろう。

「では、戻って着替えと本を持って来ます」

そう言つて部屋を出て行くシグナムとシャルにヴィータ、そして竜人の4人。

「何しようかな……。——つくう……」

4人が病室を出て、暫く経つとまた、痛みが増して来た。

小さな身体に疾走る大きな傷みを、その小さな手で服を掴み、目を瞑りながら必死に耐えてみせる。

「やつぱり無理をしていたんだな……」

「——竜人兄ちゃん!？」

目を開くと、ベッドの横にある椅子に座っている兄の姿が。

竜人がナースコールのボタンへと手を伸ばすが、はやてがそれを止める。

「待つて、竜人兄ちゃん!」

「だが——」

「大丈夫やから……」

無理に笑ってみせるはやて。

普段であれば、その笑顔を見て大丈夫だと思っただろう。

だが、苦しんでいるところを見てしまったのだから、それが相当に無理をして浮かべているものだという事を理解してしまう。

「ヴィータ達は?」

「先に帰つて貰つた」

はやてがそうするように、竜人もまた、いつも通りに接しようと努力をする。

「俺はお前の兄だ」

「いきなりどうしたん?」

「他の奴等が居る時は別に良い。だけど、俺とお前の2人だけの時くらいは、無理しなく

でも良い。苦しい時は苦しいって……辛い時は辛いって言うてくれて良いんだぞ」

無理をしているのを見てみると、している側もそうだが、見ている側もまた、気付いてしまえば、苦しいと感じてしまう。

「別に、苦しいとか辛いって訳じゃ——」

「痛みは耐えるものじゃ無くて、叫び伝えるもの……訴えるもの」

「え？」

「誰かが、そう言っていたような気がする」

それは何時何処で、誰が言った言葉だろうか。

ハッキリとは覚えていなくて、空覚えの為に、厳密には違うのかもしれない。

だが、確かにそんな感じの言葉を聞いた覚えがあるのだ。

「……痛いよ。苦しいよ。わたし、どうなってしまうん？」

「判らない。だけど、これだけは言える。今年中には、その痛みも無くなっている筈だから、もう少しだけ頑張ってくれ、耐えてくれ」

「……うん」

頷くはやてを見て、心を痛める竜人。

「本当は、竜人兄ちゃんも含めて、皆が何かを隠してやってるのは理解ってるんや……」

「……………」

「でも、言わないって事は、知って欲しく無いって事やと思うし……」
「今の俺から言える事は何も無い。だが、俺は兎も角として……彼奴等の事は信じてやってくれ。信じて待っていてやってくれ」

ただ、家族の幸せを願い、その言葉にするしか竜人には出来なかった。

数冊の本が宙に浮かび、独りでにページが捲れていく。

捲れていくスピードもそれなりに速く、読むだけであるなら速読技術が必要だろう。

読んだ本はまた、独りでに閉じる。そして、元あつた場所へと戻り、別の場所から別の本が向かいゆつくりと飛んで来る。

勿論これは、検索魔法による効果が働いている為に起きている現象だ。

無限書庫に保存されている本は無数と言える程にあり、ただ欲しい情報を選び、調べただけでもかなりの時間が必要になる。運が悪かったりすると、数年間も調べないと駄目になる事もあるのだ。そして、元の場所に戻さないと、どれが何処にあつた本かも判らなくなり、余計に時間が掛かってしまうだろう。

『うん。……迄で分かった事を報告しとく。先ず、闇の書つてのは、本来の名前じゃ無い。古い資料によれば、夜天の魔道書。本来の目的は、各地の偉大な魔導師の技術を収集して、研究する為につくられた……主と共に旅をする魔道書。破壊の力を振るうよう

になったのは……歴代の持ち主の誰かがプログラムを改変したからだと思う』

アースラへと無限書庫内から念話で報告をしているユーノの周囲には、数冊の本が開いた状態で浮かんでおり、調べ物を続けている途中である事を教えてくる。

ユーノは目を瞑りながら、見付けた資料の中から判明した内容を頭の中で纏め上げ、クロノ等に報告をしているのだ。

無重力下であり静かな場所な為に、ユーノと、協力をしているアリアの息遣い、そして紙の捲れる音がやけにハッキリと聞こえて来ているだろう。

『ロストログアを使って、無闇矢鱈に莫大な力を得ようとする輩は……今も昔も居るって事ね』

アリアの言葉通り、夜天の魔道書が闇の書へと改変された事からはそういった思惑があったのではと推測をする事が出来る。

だが、今回の闇の書の主もそうなのかというと、そうだとはハッキリと言えないのだが。

『その改変の所為で……旅をする機能と破損したデータを修復する機能が暴走してるんだ』

《転生と無限再生は、それが原因か》

《古代魔法なら、それくらいはありかもね》

ある程度は予想と推測をしていたのか、クロノとエイミイはあまり驚いた様子を見せない。

ロツテの方もまた、闇の書が遺失技術という事もあつてか、その情報をそのまま受け入れる。

『一番酷いのは、持ち主に対する性質の変化。一定期間収集が無いと……持ち主自身の魔力や資質を侵食し始めるし。完成したら、持ち主の魔力を際限無く使わせる……無差別破壊の為に。だから、これ迄の主は皆、完成して直ぐに……』

厄介と言うよりも、質が悪いという表現の方がしつくりとくるかもしれない。

前回の闇の書の主も、一定期間をしなかつた為に魔力や資質への侵食が始まり、それをどうにかする為に、募集をしたのかもしれない。

そして、今回の主もそうだ。

アルフからの報告であつた、闇の書の守護騎士である守護獣——ザフィーラの言葉。主は募集行動をしている事を知らないでいるという事。

もし守護騎士にも人並みの心や感情があるのなら、主を闇の書の侵食から救う為に募集を始めたのかもしれない。そうクロノやエイミイは考えている。

《ああ……停止や封印方法についての資料は?》

『それは今調べてる。だけど、完成前の停止は難しい』

念話での会話を続けながらも、マルチタスクで意識を小分けして調査を続けている。アースラ内のモニターに映るユーノの瞳は、右に左にと忙しく動き続けている。

《何故？》

『闇の書が真の主と認識した人間でない……システムへの管理者権限が使用出来ない。つまり、プログラムの停止や変更が出来ないんだ。無理に外部からの操作をしようとすれば、主を吸収して転生しちゃう機能も入っちゃってる』

『そうなんだよね……だから、闇の書の永久封印は不可能って言われてる』
《元は健全な資料本が何と言うか、まあ……》

アリアの言葉通り、従来の……と言うよりも、現在の管理局の技術や力では永久封印を行う事は出来ないだろう。

管理局で、ある程度の手続きをして使用が出来るロストログアを用いても、それは無理だろう。

《闇の書……夜天の魔道書も可哀想にね》

《調査は以上か？》

『現時点では……まだいろいろ調べてる。でも、流石無限書庫。探せばちゃんと出て来るのが凄いよ』

『て言うか、私的には君が凄い……すっごい搜索能力』

最初に説明があつた通りに、この無限書庫には、現在管理局が見付け、交流関係のある次元世界に存在する資料や滅亡した世界から流れて来た資料などが存在しており、世界全ての情報があると言つても良い位のものだ。

そして、その中から求めているもの、必要なものをしっかりと見付け出すのだから、そのユーノの能力もまた優れたものである事が理解出来る。

これが、天職ではないかと思わせてくる程のものだ。

《じゃあ、すまんが……もう少し頼む》

『ああ』

《アリアも頼む》

『はいよ。ロツテ、後で交代ね』

《オツケー、アリア》

《頑張つてね》

「ユーノ君、凄いな〜」

「アタシも正直、驚いた」

無限書庫内に居るユーノとロツテとの連絡を終え、通信を切る。

人には、それぞれに向いている事や適材適所などといった事はある。

だが、それを知っていながらも、ユーノの検索能力を実際に目にして、クロノとエイミー、アリアの3人は驚きを隠せないでいた。

「エイミー、仮面の男の映像を」

「はいな」

「何か、考え事？」

何かを思い付いたのか、気になる事でもあるのか。

エイミーはクロノの指示を受けて、キーボードを軽く叩く。

モニターには、先日フェイトがシグナムと戦闘をした砂漠の世界、なのはとヴィータ、ブロンと竜人が戦闘をいていた世界でサーチャーが捉えた映像と画像が映し出される。

そしてその中から、仮面の男が映し出されたものが、選出されて、前に出る。

「この人の能力も凄いと云うか……結構、あり得ない気がするんだよね。この2つの世界……最速で転移しても20分は掛かりそうな距離なんだけど。なのはちゃんの新型バスターの直撃を防御……長距離バインドをあつまり決めて……それから僅か9分後には、フェイトちゃんに気付かれないように後ろから忍び寄って、一撃」

「……かなりの使い手って事になるね」

「そうだな……僕でも無理だ」

今のクロノの実力では、なのはのDivine Buster Extensionを直撃コースであろうとも防ぐ事は出来るだろう。

だが、長距離バインドに、9分という短時間での単独次元転移を行うというのは無理だと言える。

気の操作や波紋の呼吸で行なったとしたら問題無く出来るだろう。転移する事だけを除けば、だが。

「ロツテはどうだ？」

「ああ……無理無理。私、長距離魔法とか苦手だし」

手を横に振りながら、否定をするロツテ。

平均的な魔導師に限らず、優れた魔導師であつても、なのはが繰り出したDivine Buster Extensionは相当の威力があり、それを防御するにはかなり苦労する事になる。

そしてそれだけでは無く、TVアニメ話分程の時間が掛かってしまうその距離を、TVアニメのAパート分の時間だけで転移を完了させてしまう魔導の手腕。

更に、フェイトやシグナムに、実際に攻撃してからでないといふ程の気配遮断能力。

魔導師が単独でそれを成すというのは、可能ではあるだろうが、かなり非現実的なも

のでもある。

「アリアは魔法担当、ロツテはフィジカル担当で、きっちり役割分担してるもんね？」

「そうそう！」

「昔はそれで、酷い目に遭わされたもんだ」

エイミーの言葉に、楽しそうな感じで肯定するロツテ。

そのロツテの言葉を聞いて、クロノは昔の訓練内容などを思い出して、げんなりとした表情へと変わる。

ユーノと彼女等を始めて合わせて、無限書庫での調査の手伝いをお願いした時。そして、今回も同様に、エイミーが言い、ロツテが肯定をする通りに、彼女等はしっかりと役割分担が出来ている。

彼女等は、基本的には一緒に仕事をこなしている。

何か事件などが起きた時、主であるギル・グレアムの仕事の手伝いなどで共に行動をしているのだ。

そして何よりも、彼女等は双子だという事もあってか。念話などを使わずとも、抜群のコンビネーションを誇り、戦闘時には、隙という隙があまり無いのだ。

「その分強くなつたら？ 感謝しろっつーの！」

「体調、大丈夫？」

「魔法、使え無いのはちよつと不安だけど、身体の方はもうすつかり」

12月13日、午前。

冷たい空気が張り詰めている中で、登校をするのはとフェイト。

リンカーコアが抜き取られてから2日が経過し、フェイトは登校出来る状態に戻ったのだ。

だが、病み上がりという事もあり、そして何より、一緒に登校したいという気持ちから、なのはが彼女を迎えに来た。

「あの、ドウームさんの方は？」

「問題は無いよ。好調も好調、校長先生」

「——え？」

「いや……何でも無い……」

少し歩くと、バス停に辿り着き、そこで雄介を始め、志蓮、ブロンが既に到着していた。

「お早う、3人とも」

「「ああ / おう / おはよ」う」

それぞれが思い思いに挨拶を返して、バスが来るのを待つ。

登校時間の為に、他の生徒も集まって来ており、バス停がどんどん賑やかになっていく。

何の穢れも知らないという事は無いだろうが、それでも、大人の疲れたような笑顔とは比べられない程に綺麗に輝いている小さな笑顔が、冷たい空気の中で身体を暖かく照らしてくれている太陽のように眩しく思える。

『当面、呼び出しがある迄は、こっちで静かに暮らしてて、リンディさんが』
『出動待ち……みたいな感じかな？』

『うん。武装局員を増強して、追跡調査の方をメインにするみたい』
『そっか……』

何かをしようとするなら、いろいろと手続きなどが必要であり、それが終わる迄は学生の身分である勉強や友達との交友をするべきだという考え、凶らいのようなものだろうか。

上からの許可が無いと動く事が出来ないというのは、どの組織であろうとも、面倒なものだろう。

「(特務執務官補佐なのに、何もしないで良いなんて……何か申し訳無いな……)」

今頃、リンディやクロノにエイミー、ユーノを始め、アースラスタツフの面々は必死になって行動をしているだろう。

それが何か、何処か申し訳無くあり、何か手伝わなければ駄目じゃないんだろうかなどといった考えが出て来る。

だが、手伝おうとしたところで何も変わりはないだろうし、それどころか邪魔をしてしまいかもしれない。そして、彼等の仕事を奪う事になるのではないだろうか。といった考えが頭の中をグルグルと廻り始める。

「……おっと！」

考え事をしていると、時間と距離はあつという間に進み、バスのドアが開く音が聞こえる。

その音と同時に、考えはぼんやりとしたものになり、そのまま忘れてしまう。

「入院？」

「はやてちゃんか？」

「うん。昨日の夕方に連絡があつたの。そんなに具合は悪く無いそうんだけど……検査とかあつて、暫く掛かるって」

すずかの言葉に、思わず顔を見合わせる俺と雄介に志蓮。

闇の書による麻痺の侵攻が予想通りに進行している事に気付き、安心を覚える。

だがそれ以上に、彼女をどうすれば救ける事が出来るのかを必死に考えていて、心配をしている自分が居る事に気付いてしまう。

「知り合ってしまったからか……生前には物語であるから可哀想程度の気持ちだったけど……友人が死ぬかもしれない状況なんだ。どうにかしてやりたいな……」

検索をした、どの方法も。どのような手段を用いても、運が絡んでいて、確実に事を成すのは難しい。

彼女が絶望を抱き続けずに、生きる事を望むような状況へと持つていくにはどうすれば良いのか。

今となつては、ヴォルケンリッターからの印象が悪くなつた事がかなり響いて来るような気がしてならない。

「じゃあ、放課後、皆でお見舞いとか行く?」

「良いの?」

「すずかの友達なんでしょ? 紹介してくれるって話だったしさ。お見舞いも、どうせなら賑やかな方が良いんじゃない?」

落ち込むすずかに、アリスは「私に良い考えがある」といった風に提案をしてみせる。

入院をしていて、不安な気持ちの中で独り居続けているよりも、誰かと話をして、気を晴らす事などがあると良い。

そういつた考えもありなのかもしれない。

「それはちよつと……どうかと思うけど」

「でも良いと思うよ」

「ね？」

「ありがとう」

病院で騒ぎ立ててしまふのではと心配をするなのは。

だが、ここに居る彼女等は無闇矢鱈に騒ぎたて、迷惑を掛けてしまふ程にはしゃぐという事も無いだろうし、問題は無いだろう。

アリサの意見に賛成の意を示したフエイトに、すずかも顔を綻ばせる。

「あんた達も来るのよ？　良いわね？」

「理解ってるよ……」

念を押すかのようなアリサの言い様に圧倒されながらも、返事を返しておく。

頭の中にあつた心配事は既に、小さくなつていた。

「（ま、なるようにしかならないか……。今出来る最善をつてね）」

八神家の台所で、楽しそうに鼻歌を歌いながら弁当に盛り付けをしていくシャマル。

そこに、はやての携帯電話がピピピツといった感じに鳴り、メールを着信した事を知らせてくる。

「すずかちゃん！」

——シヤマルさんへ。こんにちは。月村すずかです。今日の放課後、友達と一緒にはやてちゃんのお見舞いに行きたいんですが、行っても大丈夫でしょうか？

「すずかちゃん……良い子ね……」

守護騎士としてという立場もあるが、何よりも家族としての立場から見ても、月村すずかとう少女は物腰が柔らかく優しい娘だという印象を、シヤマルは抱いている。

文字であるにも関わらず、そこからも、その優しさを感じると思うのは錯覚だろうか。——もし御都合が悪いようでしたら、この写真を、はやてちゃんに見せてあげて下さい。

携帯電話を操作し画面を下の方へと持っていくと、そこにはすずかとその友達の姿が写った写真が添付されていた。

「——え!？」

だが、すずかと一緒に写っている少年少女等は見覚えのある子等であり、警戒をすべき存在でもあった。

「——何!?! テスタロツサ達がどうしたって?」

『だから……テスタロツサちゃんとなのはちゃん達……管理局魔導師の子達が今日、はやてちゃんに逢いに来ちゃうの! すずかちゃんのお友達だから!』

募集をする為に別次元世界へと出ていたシグナムは、シヤマルからの念話での連絡を受け、それを聴いている。

シヤマルの声とその抑揚から、彼女がかなり慌てているという事が簡単に判り、想像する事が出来た。

『どうしよう』

「いや、落ち着け、シヤマル。大丈夫だ。幸い、主はやての魔法資質は、殆ど闇の書の中だ。詳しく検査されない限り、ばれはしない」

『それは、そうかもしれないけど……』

シグナムの言う通り、はやてのリンカーコアは闇の書のシステムによって蝕まれ、その魔力や資質は、闇の書の機能維持の為に使用され、殆どがその書の中に吸収されている。

リンカーコアがあるという事に変わりは無いが、その魔力量も、無いに等しい程であり、機材を用いて検査をしないと、どういった状況に置かれているかは理解らない程の状態だ。

「つまり、私達と鉢合わせる事が無ければ良いだけだ」

『顔を見られちゃったのが、失敗だったわ。出撃した時、変身魔法でも使っておけば良かった……』

「今更悔いても仕方無い。御友人の御見舞の時は、私達が外そう」
『うん』

「あとは主はやて、それから石田先生に我等の名前を出さないように御願いを」

『はやてちゃん、変に思わないかしら』

「仕方あるまい。頼んだぞ。竜人にはこちらから伝えておく」

『うん』

「はい！ どうぞ！」

ドアを数回ノックして、返事が聞こえて来るのを待つ。

そして、少女の柔らかい感じの声が返ってくるのを確認すると、ドアを開き、中へと入る。

「こんにちは！」

「——え!？」

ぞろぞろと集団で入室をしているからか。それとも見舞いに来るとは思わなかったのか。

はやては驚きの表情を浮かべるが、それは直ぐに嬉しさに溢れたものへと変わる。

「こんにちは！ いらっしやい！」

「お邪魔します。はやてちゃん、大丈夫？」

「うん！ 平気や！ 皆、座って座って」

身体の痛みなどは感じてはいないと言わんばかりに、元気な様子で来客である俺等見事な対応をしてみせるはやて。

「これね、家のケーキなの」

見舞い品として持って来た翠屋のケーキを差し出すのは。

「——っ！」

そうしていると、後ろの方でドアが少し開かれて、誰かが覗き込んでいるのか。視線を感じ取る。

「まあ、気といい、魔力といい、誰かなんて理解ってるけど、さ……」

「それにしても、久し振りやなあ、ブロン君。御見舞に来てくれて嬉しいわ」

「そうか？ 暇をしているだろうと思つてな」

軽く挨拶を済ませ、ドアの方へと近付く。

「どうしたの？ ブロン君？」

「鷹狩とでも言つておこうかな」

そう答えながら、ドアを開いて病室の外へと出る。

彼女の姿は既にドアの近くからは離れており、医師らしき人と話をしているところを

見付ける。

「変な言い方かもしれませんが……はやてちゃんの主治医として、シヤマルさん達には感謝しているんです。皆さんと暮らすようになってから、2人、本当に嬉しそうですから」

2人というのは説明をする迄も無く、はやてと竜人の事であると理解出来るだろう。

守護騎士であるシヤマル等が出て来る迄、はやてと竜人は元気な様子を見せてはいたが、それでも何処か無理をしているようであり、辛そうでもあった。

だが、皆が揃ってからは、自然な笑顔を見せるようになり、心の底から幸せを感じている事が想像出来た。

「はやてちゃんの病気は、正直難しい病気ですが……私達も全力で闘ってます」

「はい……」

「一番辛いのは、はやてちゃんです。でも、皆さんやお友達が支えてあげる事で……勇気や元気が出て来ると思っています。だから、支えてあげてください。はやてちゃんが病気と闘えるように」

「はい……」

幸恵の言葉に思わず涙を流してしまふシヤマル。

守護騎士として、家族として。彼女を想い、救いたいという気持ち。それであっても、

自分に出来る事の少なさと無力さへの痛感など。

それらの気持ちだが、溢れ出、止まらなかつた。

「(皆、頑張っているんだ……俺も、俺も出来る限り……いや……原作以上に良い方向へと持っていけるようにしなくちゃな)」

彼女が来ている事を感じた時は、接触をしようと思つてはいた。

だが、今その気持は一つも無く、皆が待つているであろう病室へと急ぎ、歩を進める。

「お友達のお見舞、どうでした？」

「うん。皆、良え子だったよ。楽しかった。また、時々来てくれるつて」

「それは良かったですね」

すずか達が見舞いを終え、帰宅をした後。シャマルは入れ替わるようにして、病室へと入る。

夕暮れ時でもあり、沈みかけの、オレンジ色の陽の光が窓から射し込んできている。

その陽光は、明るい場所と、暗い場所をハッキリと分けてしまっていた。

「せやけど、もう直ぐクリスマスやなあ。皆とのクリスマスは初めてやから……それ迄に退院して、皆で楽しくパーツと出来たら良えんやけど」

闇の書が覚醒めて、守護騎士等と出会つてからの時間はあつという間だ。

最初の頃と比べると、この次元世界の、この時代の世俗やルールとして知られている事に慣れて来たとは言え、知らない事は沢山ある。

クリスマスについても、知識で知っているだけであり、体験をした事は無い。

それらが楽しみであるというのには、嘘は無いだろう。

だが今は、はやての病状悪化が深刻であり、その事ばかりが頭の中を占めてしまっている。

闇の書が、はやての身体を侵食するスピードが加速している。

そして、最悪の想像ではあるが、最短で、あと一ヶ月しか生きられない可能性もあった。

シャマルにはそれを認識しながらも、どうしようも無かった。

ただただ無力であった。

シグナムとヴィータにザファイラと共にリンカーコアの募集を完了させ、はやてを闇の書の真の主として覚醒出来るようにする。

そして、そうする事で、彼女が救かる。それが未来に繋がると。そう信じて行動するしか出来なかった。

「……そうですね。出来たら、良いですね」

そしてただ、はやての言葉に、彼女に見られない角度で物憂げな表情を浮かべ、はや

ての言葉に肯定の言葉を返す事しか出来なかった。

「(何かが可怪しいんだ……こんな筈じゃ無えって、あたしの記憶が訴えてる。でも……今は、こうするしか無いんだよな)」

暗雲が空を覆い尽くし、紫の雷が落ち続け、マシンガンの弾のような雨が身を打ち続けている。

そんな中で、ヴィータは魔力募集をする為に、単独で行動をしていた。

シグナムも、ザフィーラも単独で、別の次元世界で闘っている。

独り苦しむ、痛みを抱え、耐え続けて、笑ってくれているはやての為に。

「……はやてと竜人が笑わなくなったり、はやてが死んじゃったら……やだもんな！」

【ja】

海面が渦巻き、そこから大きな目を6つもつ巨大な生物が顔を覗かせてくる。

巨体故に、少し顔を出しただけで、無数の大きな水飛沫が宙を舞い、雨と共に再び海へと落ちる。

「やるよ、アイゼン！」

【Explosion!】

「ギガント……」

カートリッジを2個排出し、グラーファイゼンがGiant formへと変形をする。

ハンマーヘッドは彼女の身の丈程の大きさになり、柄の太さと長さもそれに見合ったものへと変化をする。

「ぶっ潰せえええっ!!」

目尻に溜めていた大粒の涙を流して頬を濡らしながら、大好きな優しい少女の為に、泣き叫びながら

思い切り相グラーファイゼン棒を振り翳した。

モニターには、闇の書についてのデータが映し出されている。

「父様。あんまり根を詰めると、躰に毒ですよ」

「そうだよ」

「——ん？ リーゼか。どうだい、様子は？」

「まあ、ボチボチですね」

「クロノ達も頑張ってますけど……闇の書が相手ですから、一筋縄では」

「そうか……」

ロツテの言葉を補足し、付け足すアリア。

「すまん。お前達迄……付き合わせてしまつて」

「何言つてんの、父様？」

「私達は父様の使い魔。父様の願ひは、私達の願ひ」

「大丈夫だよ、父様。『デュランダル』ももう完成してるし」

「闇の書の封印。今度こそ大丈夫ですよ」

感情がリンクしている為に、主である男性の気持ちを感じ取るリーゼ。

物憂げであり、申し訳無さそうな表情をする男性に対し、ロツテとアリアは安心をさせるように言葉を口にす。

2人の少女は笑顔を浮かべてはいるが、男性の方は浮かない顔のままだった。

無慈悲な募集 繰り返された悲劇

12月22日午後4時55分。

海鳴大学病院。

目を覚ましたはやては自身が検査の為に入院をしているという事を改めて認識した。病室には自分が横たわっているベッド、窓、花瓶などを置く事が出来る程度の大きさの机、椅子がある。

カーテンが風によって揺らめいており、夕方特有のやんわりといった陽の光が窓から射し込み、優しく身体を照らし暖めてくれている。

だが、この病室に今は自分1人だけであり、家族であり自身を主と呼び慕ってくれている守護騎士の4人、兄である竜人、友人であるすずか達は居ない。

ただ自分独りだという事を、自ずと強く感じさせてくる。

「……………」

他の誰かが居ない事で、小さな躰からだに疾走る大きく強い痛みからに耐えながらそれを隠し、大丈夫だと安心させる為に無理して笑顔をつくって笑う必要は無い。

だが、そうであっても独りで居るといふ事は寂しいものだ。

ほんの少し前までは竜人がバイトで出掛けて、家には自分一人しか居なかった事もある。そういった経験から慣れている筈なのに。

それなのに、寂しいという気持ちは何時まで経っても消える事は無く、いつになっても感じるものだった。

その気持ちをまた……今もまた同じように感じている。

「皆、どうしてるかな？」

そんな気持ちを感じながらも、やはり大好きな家族の事が気に掛かる。

自然と、ポツリと出た言葉は、狭い病室の中ではやけにはつきりと聞こえ、そして窓の外に消えていった。

「ええ……ここまでは上手くいってるわ」

『ああ。そつちに戻らなくなつた分、管理局もこちらを追いきれていないようだ』

はやての友人である月村すずか。そして保和歩栄。

保和歩栄と、すずかの友人である少年少女達は管理局と関係のある魔導師でもある。

そんな彼女達が主であるはやての見舞いへと来てくれるのだ。

喜びこそすれ、それを拒否したりする事は出来ない。

だが、管理局の魔導師である可能性が多いのだから、守護騎士である自分達が

迂闊にはやての病室に居て彼女達と接触をしてしまうと、はやてが闇の書の主であるという事に気付かれてしまうかもしれない。

そういった理由などもあり、シグナムにヴィータ、ザフィーラの3人は別次元世界での募集行為に専念しているのだ。

ただ幾つかの懸念や不安があるのだとしたら、保和歩栄が管理局にこちらの事——主であるはやての事を報告していかないかという事だ。

だがまあ、管理局が地球で何のアクションも起こしていないところから考えて、それはもう無いだろうと言えるのかもしれない。

『主はやては、寂しがってはいないか?』

「私には、一言も。でも……お友達はよく来てくれてるみたいなの……すずかちゃん達」
『そうか。だが、心配させてもいけない。数日中に、一度戻る』

後は、病院内での接触だ。

もし、シヤマルがはやての世話をしている時に運悪く、なのはとフェイト達が見舞いに来たとしたら。

そういった不安などはあるが、今は目の前の事に集中する事しか出来ない。

「うん。気を付けて」

『ああ』

思念通話を終了し、それぞれの役割を熟す事に専念する。

闇の書の募集もそろそろ終わりが見え始めており、現在埋まっているのは606ページ。残りは丁度60ページという状況だ。

リンカーコアからの魔力の募集についてだが、はやては他人に迷惑を掛けるという事に対して酷く強い抵抗があり、その気持ちを守護騎士等は汲んでいる。

竜人もまた、ヒトには手を出さず、募集対象としているのはリンカーコアを持つ魔法生物だけだ。

唯一の例外としては、ヴィータの先行で募集をした高町なのはのリンカーコア。そして、仮面の男の手で抜き取られたフェイトのリンカーコアだけだ。

だが、魔法生物の戦闘力はかなりのものであり、極力傷付けず、リンカーコアにも損傷を与えずに倒し、募集をするというのは難しいものである。

その為に、苦戦をしてかなりの時間を掛けてしまっていた。

そういった状況などであるにも関わらず、闇の書の主であるはやての兄——八神竜人の働きもあり、空白が埋まりつつある。

12月23日午後18時。

保和家地下にて、俺は修行に集中をしている。

相も変わらず修行室内の空気は、俺から漏れ出ている膨大な気の影響で揺れ動いており、蜃気楼のような環境となつて遠くのものゝがぼやけて見える。

だが、修行をしてはいるが気になる事があり、それが雑念となつてあまり良いと言える動きが出来ていない。

「(……ここ数日の間は外道衆も出て来ていない。奴らは何が目的なんだ……? 仮面の男である猫姉妹の初介入時に、水虎も同時に介入をして来た。だが、それつきりだ……)」

外道衆の目的は、基本的には三途の川の水をこちらの世界に溢れさせ、ここで生活を出来るようにするもの。それを成すには、人々の恐怖などのマイナスの気持ちや感情が必要の筈。

前世での記憶が正しければ、それで合っているだろう。

「だが、ヴォルケンリッターを助けて、一体何になるんだ……? まさか——!」

闇の書は、最終的には大きな破壊を世界へと齎もたらす事になるものだ。少なくとも、この地球が存在している次元世界を崩壊させるだろう。

そして、それは主を吸収してから起きる。

闇の書の主であるはやては、猫姉妹の手によつて絶望を覚え、管制人格が起き、暴走を開始する筈。

「その絶望を利用するつもりか……？　そして、世界の異常に気付いた者が感じた恐怖や絶望もまた利用して、三途の川を氾濫させる……だが」

だが、この次元世界が崩壊してしまえば、奴等ほどの世界に出るのだろうか。

三途の川の水が氾濫する事で、世界の崩壊は防がれる。

なんていう事はあり得ないだろう。

ならば――。

「ミッドチルダとか、か……」

三途の川からはどの次元世界であろうとも、行きたい場所へと隙間を通って移動をする事が出来た筈だ。

そう。

プレシア・テスタロッサに対して、洗脳のような事をしたアカマタがそうであったのと同様に。他の外道衆の面々も、自由に他の世界へと行く事が出来る。

何も、三途の川はこの地球だけに繋がっているという訳では無いのだから。

「だとしたらどうする……闇の書の闇をどうにかするのも大事だけど、これもまた」

「何をそんなに考えているんだ？」

「――へアっ!？」

驚きで変わった声と言葉を発してしまいながら後ろを振り向くと、そこに義兄である

マツドが居た。

いつものように楽しそうな笑顔を浮かべている彼の姿を見て、少しばかり羨ましくもあり、妬ましくもある。

「何をそんなに難しく考え込んでいる？」

「いや……その……」

答に窮してしまう。

何をどう言えば良いのだろうか。何を伝えれば良いのだろうか。

今、自分が気付いている事。そして、それらから推測と憶測ではあるが予測出来、大凡起こり得るであろう最悪の未来。その可能性。おおよそ

それらをどうすれば防ぎ、回避する事が出来るのか。

「もう少し頼ってくれても良いんじゃないのか？ お前がどう思っているのよとも、今の

俺は、お前の義兄であり家族なんだから」

「……………」

「それに……俺じゃ無くても、お前の周りには優秀な奴等が居るじゃないか。もう少し、信じてみたらどうだ？」

何を迷っているのだろうか。何をぐじぐじと、うじうじとしているのだろうか。

考えているだけでは意味が無いという事は、前世での経験で嫌だと言いたい程に感

じ、気付いた筈なのに。

「（考えるのは止めた。サイヤ人はサイヤ人らしくという訳では無いけど……何も考えず壁にぶつかるか。いや、それじゃ、ただの）バカだな」

「どうした？」

「いや、何でも無い」

「そうか」

「他の皆には、まだ話して無いんだけど」

地球の衛星軌道上で、管理局の次元航行艦船であるアースラが待機をしている。

アースラには……いや、管理局の所有する殆どの次元航行艦船には、認識阻害などの機能があり、現在はそれを使用している。

肉眼で捉える事は出来ないが、天体望遠鏡や監視衛星などによつて見付かってしまう可能性はあるからだ。

管理外世界は魔法に関しての知識や技術が無く、管理局の法ではそれらの世界に対しては基本的に不可侵だ。

もしアースラが存在が認識されたりすると、地球で大パニックが起きたりする可能性もある。

そういった事を管理外世界で起こさせない為。そして、秘密裏に行動をして、他者に存在を気付かれないようにする為に、そういった機能が付いている。

「あれ？ どうしたの？ クロノ君？」

「ちよつと調べ物」

「何だ。言ってくれば、やるのに」

キーボードを叩くとピピピといった軽い電子音が鳴り、モニターにはある人物の情報が映し出されていた。

「いや、良いんだ……個人的な事だから」

ある程度の欲しい情報は手に入れる事が出来たのか、部屋から出ていこうとするクロノ。

「ああ。闇の書についてのレポート……なのは達にも送っておいてくれたか？」

「なのはちゃん達も、闇の書の過去については複雑な気持ちみたい」

「そうか」

クロノが部屋を出て行くのを見届けた後、エイミーは彼が調べた事の内容が気になる、ログを開いてみる。

出て来た人物を見て、彼女は少し、驚いてしまった。

12月24日午後4時25分。

海鳴大学病院の病室で、シグナムやヴィータ、シャマルは顔出しと見舞いを兼ねて、はやてに逢いに來ていた。

竜人はいとうとここ最近は募集に出掛ける事は無くなり、シャマル同様にはやての側に居続けている。

「はやて。ごめんね……あんまり逢いに來れなくて」

「ううん。元氣やったか？」

「めっちゃめっちゃ元氣！」

謝るヴィータに対し、笑顔で彼女お頭を優しく撫でるはやて。

ヴィータもまた、それにより次第に笑顔を浮かべ始める。

「——!?!」

そこに、扉をノックする音が聞こえて來る。

「こんにちは」

「あれえ？ すぐかちゃんや。はい、どうぞ！」

その少女の声を聞いて、はやては連絡も無しに來た事に驚きつつも部屋への入室を許可する。

だが、その場に居る3人の守護騎士は、あまり良い感情を感じなかった。なかでも

人が抱えているのは寧ろ敵意に近いものだろうか。

1人はこうなるかもしれないと予想はしていたが、いざ現実になってしまうと、慌ててしまっている。

挨拶をして病室へと入る少女等と少年等。

皆が入ると同時に、3人の抱く気持ちはよりハッキリとしたものへと変わっていく。

だが、肝心の主であるはやて、そしてすずかとアリサは気付かずに明るい笑顔を見せている。

そしてなのはとフェイトの2人は驚き、一瞬ではあるが口を少しばかり開いてしまふ。

雄介と志蓮、ドゥームの3人はこうなる事を知っており、「やはりこうなってしまう」と落ち込むだけ。

「今日は、皆さんお揃いですか?」

「こんにちは。初めまして」

シグナムはこの先どうするかを考え、シャマルはただ戸惑う様子を見せる。

竜人の方は、ただ腕を組み目を閉じている。

「あ! すみません。お邪魔でした?」

だが、そこにアリサは何かが可怪しい事に気付き、様子を伺うようにして尋ねる。

「あ……いえ」

「いらつしやい、皆さん」

「何だ……良かった」

だが、表立つての行動は避けるべきだという事は重々に理解しており、迎え入れる事にしたシグナムとシャマル。

「ところで今日は皆、どないしたん？」

「——サプライズプレゼント！」

はやての疑問に答えるように、すずかとアリサは手にしているものを彼女に見せる。

それは包装されている箱であり、その中にはクリスマスプレゼントにと買ったものが入っている。

それを目にしたはやての顔は予想通り驚きと喜びで一杯になっていた。

「今日はイヴだから、はやてちゃんにクリスマスプレゼント」

「ほんまか？　ありがとうな」

「皆で選んで来たんだよ」

「後で開けてみてね」

抱えているプレゼントの入った箱をはやてに手渡すアリサとすずか。

場の重い空気を感じていないのではと思わせる程に、自然な笑顔をみせる3人の少

女。

なのはとフェイト、そしてシグナムとシャマルはこの状況に未だ戸惑っており、辺りを見渡し、視線を彷徨わせるだけ。

だがそんな状況の中で、なのははベッドの直ぐ側に居る赤髪の少女と目が合う。

ヴィータは敵意を隠すような事はせず、鋭い視線でなのはとフェイトを真っ直ぐに見貫いていた。

そんなヴィータに対してなのはは思わず、身を縮めてしまう。

ヴィータもヴィータで、表立って事を起こしては駄目だと理解をしているのだ。

だからこそ、彼女は精一杯の攻撃を試みさせている。

「なのはちゃん、フェイトちゃん。どないした？」

「あ……ううん。何でも」

何でも無いという訳では無い。寧ろ問題は大きく主張をしているような状況だ。

雄介や志蓮、ドウムもまた、どうすれば良いのかが判断出来ずに居る。

「ちよつと御挨拶を……ですよね？」

「はい」

「ああ、皆……コート、預かるわ」

彼女達からコートを受け取り、ダンスの中へと入れていくシャマル。

そうしている間にも、空気中の魔力の流れが変化していく。

「念話が使えない。通信妨害を？」

「シヤマルはバックアップのエキスパートだ。この距離なら、造作も無い」

他の皆には聞こえないように、小さな声で話すシグナムとフェイト。

話しに花を咲かせているはやてとすずか、アリサの3人を余所に、シグナムとフェイトは互いに警戒し合い、シヤマルは連絡が出来ないように妨害を……そしてヴィータはなのはの方をただ静かに睨み続けていた。

見ようによつては、鬼の形相にも思えてしまう程の迫力と気迫だ。

「えつと……そんなに睨まないで」

「睨んでねえです。こういう目付きなんです」

なのはの言葉に対して否定をしながらも、その態度を一向に変えようとはしないヴィータ。

先程よりも、その鋭さは増しているのではと思えてしまう。

「ヴィータ！ 嘘はあかん！ 悪い娘はこうやで！」

ヴィータにお仕置きだというように、彼女の鼻をつまみながら上下に動かすはやて。

「ブロン君はどないしたん？ 何処にも見当たらんけど」

「何かやらなけりやいけない事があるとか言つて、終業式終了後に走つて行っちゃつて

「や」

重い空気を斬り裂き、和らげるように笑いながら話をするはずかとアリサにはやて。彼女達は敏く、この状況が可怪しいという事には既に気付いているだろう。

だが彼女達3人は、あえていつも通りの自然な感じを見せている。

「お見舞い、しても良いですか？」

「ああ」

フエイトの言葉に、シグナムはただ静かに頷き返すだけだった。

見舞いを終えるとすずかとアリサは帰り、なのは達も途中までは一緒に帰る。

だが、アリサとすずかの2人と別れると同時に再び病院への道へと戻り、守護騎士達と竜人の4人と向かい合う。

今の彼女達は病院とは離れた位置にあるビルの屋上に居り、互いに黙っているからかとしてつもなく静かであり、重苦しい空気になっている。

「はやてちゃんが闇の書の主……」

「悲願は、あと僅かで叶う」

「邪魔をするなら……はやてちゃんのお友達でも……」

はやてが闇の書の主であった事に驚きを隠せないでいるのはとフエイト。

シグナムとシャマルはそんな2人を真っ直ぐに見詰め、言葉の口にする。

それがどれだけの覚悟を持って言っているのか、行動をしているのか……想像に難くない。

「待って！ ちよつと待って！ 話を聴いて下さい！ 駄目なんです！ 闇の書が完成したら、はやてちゃんは……—っ!!」

話を言い終える事も無く、ヴィータによる空からの強襲に対して防御するのは。

火花が散り、耐えはするが、少しと経たずになのはフェンス側まで吹き飛ばされてしまう。

「なのは！——っ!!」

飛ばされ、フェンスへと身体をぶつけたなのはへと目を向けた瞬間。

その瞬間にフェイトもまた、シグナムに斬り掛かれる。

回避をして、バルディッシュを起動させるフェイト。

「管理局に、我等が主の事を伝えられては困るんだ」

「私の通信防衛範囲から出す訳には、いけない」

身体を起こすなのはの方へとゆっくり、グラーフアイゼンを手にしながら近付いていくヴィータ。

「ヴィータ……ちゃん……」

「邪魔、すんなよ……」

赤い騎士甲冑は、この状況、そして今の気持ち的に、紅く、血に濡れたものに見える。主であり、家族である一人の少女の為に、自ら汚れ、血に濡れる事を恐れず、怖れず、厭いとわない心と感情。

「あとちよつとで助けられるんだ……はやてが元気になって、あたし達のところに帰って来るんだ」

ヴィータは溢れ出る涙を目蓋で溜めながら、声を震わせながら必死に口を開く。

「必死に頑張ってきたんだ」

グラーフアイゼンを握っている手も大きく震えており、今にも激情が溢れ出しそうな程だ。

「もうあとちよつとなんだから……邪魔すんなあああああつ!!」

涙が零れ落ち、グラーフアイゼンを強く振り翳かきすヴィータ。

グラーフアイゼンからカートリッジである薬莖が排出される。

夜のビルの屋上で、強い光が起き、爆発した。

その爆発の影響で、屋上は炎を上げて燃えている。

その中から白い服を着た少女が——寸でのところでバリアジャケットを展開したなのはが歩き、姿を現す。

「——悪魔め」

炎の中から出た事もあつてか。彼女達自身の心からの願いを壊そうとしている様に見えるそんななのはの姿は、今のヴィータにとって正しく悪魔と呼べる程のものだった。

「悪魔で、良いよ……悪魔らしいやり方で、話を聴いて貰うから！」

【Accelerate mode. Drive ignition】

Accelerate modeであるレイジングハートがカートリッジがロードして、なのはの魔力が上昇する。

話を聴いて貰えない。話を訊かせて貰えないのであれば、それが出来るまで、必死にぶつかり続けるだけ。

いつも通りだ。

強く心を決め、彼女達の気持ちを受け止める為に、なのはは真つ直ぐにヴィータを見据えた。

「頼む、シエン！ 俺の潜在能力を解放させてくれ！」

界王神界で俺は、シエンに対して土下座をしながら頼み込んでいる。

闇の書の守護騎士達は転生者と渡り合う事が出来る程の力を持っており、その事から

闇の書の闇はそれ以上の力を持っている筈だ。

もしそれを外道衆である水虎が手にしてしまえばどうなってしまうのかは、考えたくもない。

「……………」

「知り合いの女の子のほっかほっかなエッチな写真撮って、その生写真あげっからさ」

「……………」

「ほら、欲しいでしょう?」

「……………」

ここに来てからどれくらいの間が経過したのだろうか。

シエンに必死に頼み込み交渉をしてはいるのだが、一向に首を縦に動かしてはくれない。

そうこうしている間にも、地球で戦闘が開始された事を感じ取る。

なのはとフェイト、雄介、志蓮、ドゥームの気と魔力が大きくなると同時に、結界か何かによって遮られているのか、感じ取り難くなる。

シエンの側に置かれている水晶には、彼女達が守護騎士である3人、竜人と戦闘をしているのが映し出されている。

「私はロリコンではありません」

「誰も幼女の写真とは言っていないだろうに……誰を思い浮かべたんだ？」
「……………」

俺の言葉を耳にし、顔を赤くするシエン。

「頼む！ この通りだ!!」

皆が動き始めた事で俺は焦りを感じ始め、思わず語気を強めてしまう。

「理解りました」

「本当か？」

「ええ。ですが、それなりに時間は掛かりますよ」

何とか承諾を得る事が出来、胸を撫で下ろしそうになる。

だが、事態が良い方向に向いているという訳ではないので踏み留まる。

「ではそこに座って下さい。何があっても気持ちいを乱さないように。出来る限り平静に」

「シヤマル。お前は離れて、通信妨害に集中している」

「うん」

シグナムの言葉に従い、緑色の騎士甲冑を纏って後方へと後退するシヤマル。

「闇の書は悪意ある改変を受けて、壊れてしまっている。今の状態で完成させたら、はや

ては……」

フエイトの言葉にシグナムはただ、レヴァンティンを彼女へと向けるだけだ。

「確か、そんな事を保和歩栄も言っていたか……」

「ブロンが……?」

テストアロツサのリンカーコアを募集して、竜人と保和歩栄の戦闘が終わった後に介入。

その後に聴かされた事を思い出すシグナム。

だが、その時は到底信じられずにいたが、こうも続けて言われると気にはなるものだろう。

「だが、な……我々はある意味で、闇の書の一部だ」

「だから、当たり前だ。私達が一番、闇の書の事を知ってるんだ!」

「ならどうして!」

【Acceler shooter】

ヴィータの攻撃を防御しながら、Acceler shooterを展開。

ヴィータは、それに危険を感じて後方へと退がる。

「どうして闇の書なんて呼ぶの!」

「——え?」

「何で、本当の名前で呼ばないの？」

なのはその言葉により、ヴィータは内に存在し続けていた違和感の正体に一步近付けた気がした。

ここ数日間の事ではあるが……保和歩栄の言葉を聴いてからではあるが、ずっと、何が可怪しいとは感じていたのだ。

「本当の……名前……？」

【Barrier jacket. Sonic form】

金色の魔力、そして紫光を纏いながら、バリアジャケットを展開するフェイト。

だが、そのバリアジャケットは今までのものとは違った。

【Haken】

カートリッジをロードしたバルディッシュは、変形をする。

「薄い装甲を更に薄くしたか」

シグナムの言葉通り、フェイトが纏っているバリアジャケットはかなり薄いものになっている。

簡単に言ってしまうと、殆どレオタードにスパッツといった風であり、手足にはバルディッシュが出している金色の魔力光を放つフィンブレード、なのはの使用するFii

er Finに似た、ソニックセイルがそれぞれ3つずつ生えており、右手の甲には装甲が付いている。

「その分、速く動けます」

「緩い攻撃でも、当たれば死ぬぞ。正気か？ テスタロッサ？」

運動性、機動性、攻撃速度を手にする為に、編み出した換装形態である Sonic form。

だが正直なところ、シグナムの言葉通り、防御能力は手足以外には無いに等しいものだ。

「貴女に勝つ為です。強い貴女に立ち向かうには、これしか無いと思ったから」

フェイトに伝えるように、紫炎を起こしながら騎士甲冑を纏うシグナム。

「こんな出会いをしていなければ……私とお前は、一体どれ程の友になれただろうか……」

「まだ……間に合います！」

「止まれん。我等守護騎士……主の笑顔の為なら、騎士の誇りすら捨てると決めた。もう、止まれんのだ！」

レヴァンティンを構え、顔を上げるシグナムは顔を涙で濡らしている。

それが、どれだけの覚悟での行動なのかを感じさせる。

互いの脚元には、それぞれの魔法体系特有の魔法陣が展開され、魔力が徐々に上昇していく。

「止めます……私とバルディッシュが……」

【Yes, sir】

「やはり邪魔をするんだな」

「邪魔をするつもりなんて、これっぽちも思っちゃ——」

「——煩い！」

【Imperial Dragon fighter mode】

そう叫ぶと同時に、竜人はImperial Dragon fighter modeへと姿を変え、3人の転生者等へと突っ込む。

60mもの巨体が光速で迫り来る様は圧巻とも言える程であり、3人は一瞬だけではあるが後ろへと退がってしまう3人の少年達。

「——やるっきゃねえっ！」

「ああ！」

雄介は自身の魔力と気を上昇させていく。炎が身体の周囲を覆うように燃え盛り、火花がチリチリと飛び散っていく。

ドゥームもまた、魔力と気を上げて、拳をつくりだす。

志蓮は、ゲート・オラ・パピロン王の財宝から、剣の形をした1つの武器を取り出す。

その金色の武器からは、今まで出てきたものとは比べられない程に膨大な魔力が込められており、剣だけでは無く、志蓮の身体を護るオーラのようになっていく。

白銀に光輝く刀身に加え、柄には蒼い宝石が。刀身は常に振動を続けており、かなりの熱を出している。寶石には神代の魔力である真エーテルが大量に込められており、その魔力量は、ジュエルシード21個分すらも遥かに超える程のものだ。

「来るぞー！」

叫び声にも近い雄介の言葉を聞くと同時に、ドゥームが龍人と接触をする。

互いの右拳がぶつかり合い、あたり一面に強烈な衝撃波が起こる。

龍人の手の大きさはかなりのものであり、ヒト1人なんていうのは簡単に握り潰せる程のものだ。

龍人に与えられる、実際のダメージはどれ程のものかは理解らないが、見た目だけで判断をするとするならば、蚊が刺しているだけと言える程度のもだろう。

「——つくー！」

「がああああああつ!!」

周辺のビルや道路の表側が捲れ上がり、吹き飛んでいく。

龍人の拳は、ドウームの予想していたものよりも遙か上の力が込められており、
ドツベルゲンガ変身のフラグメントで身体を補強し、パワー力のフラグメントを使用しているにも関わらず、
 圧倒されてしまう。

「サイコキネシス！」

拳と拳がぶつかった瞬間、サイコキネシスを使って龍人の動きを封じに掛かるドウーム。

だが、龍人は易易と抜けだし、そのままドウームを殴り飛ばそうとする。

「最初から全開だ。イルバーニア！ イルアームズ！ イルアーマー！
デウスエクセス神の騎士！」

デウスコロナ神の王冠！

移動速度、攻撃力、防御力の倍加に、全属性への耐性上昇、全身体能力の上昇をこの
 結界内に居る味方——なのは、フェイト、志蓮、ドウームに、そして自分へと掛ける。

「——斬り裂く！」

震え、熱を放ち続けている刀身に宝石の魔力を乗せ、龍人へと斬り掛かる志蓮。

ドウームが龍人を引きつけており、その龍人にとつての右側から斬り掛かる。

だが、龍人はその右手を軽く動かして、志蓮を吹き飛ばす。

その強さは大きさも相まってか、ブロンが大猿になった時に発生した衝撃波や風などとは比べられない程のもの。

気と魔力、そして雄介の魔法であるイルアーマーで防御力と身体能力を強化し、上昇させていないと、身体はバラバラになっていたかもしれない。

【Spear mode】

「——つしやあらあ！」

志蓮の手にしている剣は、槍の形へと変わる。

先端部はドリルのようなになっており、紅く禍々しい魔力を放っている。柄の部分はただの棒と言える見た目だが、その槍全体からは、やはり高濃度且つ膨大な魔力が漏れ出ている。

「——突き穿つ翔の槍・改ツツ!!」

その槍を志蓮は、龍人へと向けて投げる。

槍は真っ直ぐに、風を物ともせずに向かっていく。

「モード雷炎竜！ 雷炎竜の……」

雄介の口元に膨大な魔力が集まっていく。

口内からは炎と雷が見え隠れしており、口の中で蓄えられている魔力の全ては炎と雷に変換される。

「——咆哮おおおおおっ!!」

少し離れた位置から雄介が。そして、ほぼゼロ距離と言える場所でドゥームが同じ技

を放つ。

投げ放たれた槍と放たれた魔力雷炎は龍人に直撃して、大きな爆発と強力な爆風を巻き起こした。

周辺にヒトが居ない事を確認しながら、寒空の下で、ザフィーラは飛行魔法を使って移動をしていた。

「(誰にも通信が繋がらん。一体何があった?)」

病院付近に存在するビル街を中心にして、封鎖領域である Gef・ngnis de r Magie が展開されているのを、ザフィーラは八神家からでも感じ取る事が出来た。

そして、その封鎖領域が展開されているという事は何かがあったという事だ。

それが何かを確認する為に、他の守護騎士等に思念通話での連絡を取ろうと試みたが、一行に返事が無く、それどころか繋がってすらも無いのだ。

その事から、管理局が関係しているのではと思い、急いで向かっているのだが。

「管理局の魔導師か……」

「久し振りという訳でも無いな。約2週間振りだというところか……なあ、盾の守護獣」飛行を続けていたザフィーラの前に、管理局の魔導師だろうと思える人物が一人浮か

び、立ちはだかるようにして、前に姿を現す。

「確か、あの時の……」

「今、構っている暇は無いとでも言いた気な顔をしているな」

「そう思うなら邪魔をしないで貰おう」

「邪魔はしないさ。ただ、俺も、あの領域に用があつてな。どうだ？ あそこに行く迄は

休戦といこうじゃないか。ここで戦闘をすれば、民間人に姿を見られるかもしれない」

強く睨みつけはするが、かといって攻撃をする気は無い。

「良いだろう」

ゾイルの提案を受け、それを了承するザファイラ。

彼等2人は移動するスピードを上げ、封鎖領域の存在する場所へと急いだ。

「——はあああああつ!!」

「——ふんっ!」

H a k e n f o r m のバルディツシュと S c h w e r t f o r m のレヴァンティンがぶつかり合い、火花が散る。

火花が散るのと同時に、2人は瞬時に離れ、再び斬り結ぶ。

魔導師と騎士の斬り合いはかなり熾烈なものであり、流れるように斬り掛かつては、

離れるという行動を繰り返していく。

「(やっぱり強い……Sonic formで速さを底上げして、気と魔力も使用……雄介のイルバーニアでかなり速さも上がっている筈なのに、もう対応して来てる。イルームズでの攻撃力増加とイルアーマーでの防御力増加もしてくれてるみたいだけ……)」

「(何とか対応してみせたが、驚いたな……予想以上に速い、そして強い。だが、皆の為、そして主はやての為にこの戦い、負けられない)……どうした、テストロッサ? もう終わりか?」

「いえ。まだです!」

「本当の名前があつたでしょ?」

「闇の書の……本当の名前……?」

なのはの言葉、そして自身が感じている違和感と疑問に対して戸惑うヴィータ。

「——!?!」

その瞬間、青色をした魔力縄が拘束輪のようになって、なのはの周囲に展開され、そして彼女を捕縛する。

「バインド!?! また!?!」

「なのはは抜け出そうと必死に藻掻いてはみるが、より強く身を縛り始める拘束輪。
「なのはー!」

なのはを襲う異常に気付き、シグナムとの罅迫り合いから身を引くフェイト。

【Plasma lancer】

主の意を汲み、魔力弾を生み出すバルディッシュ。

フェイトは周囲を見渡し、周辺の空気や魔力の流れの可怪しいところ、目で確認出来る者達以外の気を探る。

「——そー!」

フェイトが攻撃をした空間は、一見何も無いように見える。

だが、Plasma lancerは真つ直ぐに飛んで行くと、何かにぶつかつたのか、爆発を起こす。

「はああああああ!!」

H a k e n f o r mであるバルディッシュを振り翳し、爆発をした空間を魔力刃で斬り裂く。

すると、その空間が揺らぎ始め、仮面の男が姿を現した。

仮面の男の服は、魔力刃によって斬り裂かれた跡が見事に出来ている。

「この間みたい、いけない!」

バルディツシユのコツキングカバーがスライドし、圧縮魔力の残滓が排気熱のようにして排出される。

もう一度切り掛かろうとするフェイトに対し、横から蹴り技が入れられる。

「——うわあああああつ！」

錐揉み回転をしながら落ちていくフェイトに、仮面の男は魔法を発動。フェイトの動きを拘束輪で封じ込める。

「——2人!？」

なのはは、その仮面の男を見て、驚いてしまう。

自身の魔力砲撃を止めた相手。フェイトに不意打ちをして、リンカーコアを抜き出した相手。

単独犯だと思われていたその仮面の男が、彼女の目の前には2人居るのだ。

「……………」

2人の内の1人が、20枚近くものカードを取り出して、魔法を発動する。

魔力で編まれた拘束輪は、雄介と志蓮、ドゥームは勿論、シャマル、シグナム、ヴィータ、龍人の動きも封じ込める。

「おい！ 拘束プレイは良いけど、野郎が拘束されてるのを見て、誰が喜ぶつてんだよ！」

雄介の叫びを無視して、互いに顔を合わせる2人の仮面の男。

「この人数だと……彼等の実力も鑑みて、バインドも通信妨害も、あまり保たん。速く頼む」

「ああー！」

その仮面の男の言葉と同時に、彼の手元に闇の書が転移してくる。

「——な！ いつの間に!?!」

闇の書が開き、それと同時にヴィータ、シグナム、シャマルの3人は苦しみだす。

募集だ。守護騎士から魔力を——リンカーコアを募集しようとしているのだ。

彼女等の身体から、それぞれの魔力光を放ったリンカーコアが飛び出す。

ヴィータからは赤色の、シグナムからは薄めの紫であるラベンダー、シャマルからはミントグリーンに光り輝く小さく膨大な魔力の塊が。

「ヴィータ！ シグナム！ シャマル！」

闇の書から放たれている魔力光はより強く、そして不気味なものへと変貌し、そして飛び出したリンカーコアが引き寄せられていく。

「最後のページは、不要となった守護者自身が差し出す。これまでも幾度か、そうだった

筈だ……」

【Samm lung】

闇の書から出たその音声は何処までも機械的であり、義務的なものだ。

闇の書はその言葉と共に、守護騎士のリンカーコアを募集し始める。

「壊れかけた呪われ^{ロスト}た魔道書^{ロギア}……こんな物で、誰も救える筈が無い」

苦しみながら、断末魔のように悲鳴を上げながら、身体を分解させ、粒となり、幻だ
るかのように消滅していくシャマルとシグナム。

なのはとフェイト、ヴィータ、そして雄介と志蓮、ドウム、龍人達はただ見ている
事しか出来ない。

自身を縛る Bind を破ろうとするが、そういった気配は全く無い。

ただ見る事しか出来ない。

「——シャマル！ シグナム！ 何なんだ……何なんだよ、てめえ等！」

ヴィータは悲痛な声で、仮面の男に向けて泣き叫ぶ。

だが、彼等2人は何も応える事は無く、返事の変わりに闇の書の募集がなされる。

「プログラム風情が、知る必要も無い」

身を反らせながら叫び、意識を失うヴィータ。

「——てやあああああつ!!」

そんな仮面の男へと、上空から蒼い拳が殴りに掛かる。

だが、渾身の拳も、仮面の男はただ静かに、最低限の動きと防御魔法だけで、防いで

しまう。

「はああああああっ!!」

防御魔法は最低限の魔力消費だけで行使されているにも関わらずかなりの硬さを誇っており、殴りに掛かったザフィーラの拳から血が噴き出る。

「そうか……もう一匹居たな」

ザフィーラはリンカーコアが抜き出される強烈な痛みに、歯を食いしばり耐えながら、もう一度拳をつくりだし、殴る。

「奪え……」

【Sammlung】

「——だりやああああああああああっ!!」

血を出しながら振りかざした拳は防がれてしまう。

そしてザフィーラもまた、その身体を崩壊させていく。

「ザフィーラアアアアアツツ!!」

消えていくザフィーラの姿を目にし、龍人は大きく叫び、ワナワナと巨体を震わせた。

海鳴大学病院の一室。

「え? ——っ!?!」

ベッドの上で横になっていたはやては何か予感めいたものを感じ、身体を起こす。そして、突然に、今までに無い程に強烈な、大きな痛みが躰からだを奔はしり抜けた。

「あの子供達は……彼女等は大丈夫か？」

「6重のバインドに、通常よりも強力なCrystal Cageだ。余程の事が無い限り、抜け出すのに数分は掛かる」

なのはを始め、彼女等は半透明な四角錐状の檻の中に閉じ込められていた。

龍人や、その彼に對抗してみせた少年等が居るといふ事もあり、バインドの数も多く、Crystal Cageの大きさもかなりのものだ。

その分だけ魔力消費は大きく、早々に行動を済ませなければと急ぎ動き出す仮面の男2人。

「闇の書の主……覚醒めざめの時だな」

「いいや……因縁の……終焉しゆげんの時だ」

そう言いながら、彼等の姿と声はなのはとフェイトの2人の少女のものへと変わる。

ピルの屋上に、青色の魔法陣が展開される。

するとそこに、病室に居た筈のはやてが転移をし、姿を見せた。

「!?!? なのはちゃん……? フェイトちゃん……?」

空に浮かぶ2人の少女の姿を目にし、驚きを隠せないでいるはやて。

やはり躰からだが蝕まれ、痛みを感じているのか、胸元へと手を持っていており、当然だが声からもあまり元気が感じられない。

「な……何なん、これ……?」

「君は病気なんだよ……闇の書の呪いっていう病気」

「もうね……治らないんだ」

その2人の言葉にただ啞然とし、2人の顔を覗くはやて。

「闇の書が完成しても、助からない」

「君が救われる事は、無いんだ」

その言葉は、有り体に言えば余命宣告、死刑宣告のようなものだ。

「!?!?」

その宣告に、声も出せずに驚くはやて。

覚悟はしていた筈だった。

だが、実際にそれを、他人の口から言われると堪えるものがある。

12月の夜、そしてビルの屋上に居る事もあり、冷たい風が身体を撫で上げ、身体からだの芯、身体からだの底までをも冷たく、重くさせていく。

「そんなん……ええねん……ヴィータを離して。ザファイラに、何したん？」

「このプログラム達ね、もう壊れちゃってるの。私達が、こうする前から」

「とつくに壊された闇の書の機能を……まだ使えると思いい込んで……無駄な努力を続けてた」

「——無駄じゃ無いやん！ シグナムは？ シャマルは？」

「……………」

はやての質問に、言葉では無くて首を動かして応える少女。

その答に、恐る恐る振り返るはやて。

「——!？」

その場に残されているのは、風に靡く服とコートだけだ。

「壊れた機械は、役に立たないよね」

「だから、壊しちゃおう」

「——え!? 止め、止めてええええええつ!!」

「止めて欲しかったら……」

「力尽くで、どうぞ……?」

「何で!? 何でやねん!? 何でこんなん!？」

動かない脚を引き摺り、手を伸ばして、必死にヴィータとザファイラを救けに向かお

「はやてちゃん！ / はやて！」

Crystal Cageを壊し、抜け出す事に成功する皆。

ヴォルケンリッター

だが時は既に遅く、闇の書のページ全て——666ページは守護騎士達4人全員のリンカーコアを募集した事で埋まり、はやてと闇の書から膨大且つ禍々しい魔力が爆発し、天に昇るように放出されていた。

「我は闇の書の主なり……この手に力を」

純粹魔力の柱の中心で、はやては浮かんでいる。

彼女の瞳は宙を彷徨っており、虚ろなものだ。

声は機械的なものであり、ただ何処か文章や文字を読み上げているだけのような感じを与えてくる。

「封印、解放……」

【Freilassung】

手にしている闇の書から膨大な魔力が煙のように出、黒雷がはやての身体の周りを疾走っている。

はやての小さな身体は、魔力の上昇と同時に大きく変化し始めた。

「……くそつ、始まつちまつたよ！ 始まつちまつたよ！」

「……何で裸なの？ とか訊いちやいけないんだよなあ……変身する為なんだから」

「マモレナカッタ……」

小さな肢体は伸びていく。胸も同様に大きくなつていつき、髪は銀色の長髪に。

紅い帯が腕と脚に絡み付き、金色の装飾がなされている黒色の騎士甲冑を身に纏う。

背中には、大きく黒い翼が大小3対生え、頬に紅い線のような痣が浮かび上がる。

開かれた瞳は、血のように紅い。

「お出でなすつたか……」

「……管制人格」

黒い翼を開くと、そこから無数の羽が飛び散る。

「また……また、全てが終わってしまった……一体幾度、こんな悲しみを繰り返せば良い

……？」

「はやてちゃん！」

「はやて……」

その変わりように、驚く事しか出来ないのはとフェイト。

彼女の目からは涙が流れ落ちており、紅い痣を伝うようにして、顔を濡らしている。

「我は闇の書……我が力の全ては……」

【Diabolic emission】

彼女は柔らかな動きで腕を上に向ける。

闇の書が光を放つと同時に、彼女の掌に黒色の魔力が集まる。

「——え!?!」

その魔力量はかなりのものであり、一瞬で彼女自身の身体の10倍程の大きさにまで膨れ上がる。

「……主の願いの、その俥に」

振るわれる闇の書の力 流す涙は主の為に

艦内には触手のようなものが闇の書から発生しており、艦の操舵を不能にし、侵食を始めていた。

そんな状況であってもまだ正常に動き続けているのは、艦内警報であるALERT、艦橋に集中している機能、そして自爆装置だけだった。

「——っうお!?!」

管理局次元航行艦船エステシアの中の殆どは、小規模な爆発を起こし、それは艦橋もまた例外では無かった。

艦内の監視カメラの全ては触手によって壊されており、砂嵐を映し出すだけのモニター群。

砂嵐特有のザザーツという音と、ALERTだけが無情にもけたたましく鳴り響いているだけだ。

「……………こちら、2番艦……………エステシア……………」

電気系などがショートし、ところどころで規模は違えど爆発が起き始めている中で、クライド・ハラオウンは1人、辛うじて生きている通信機能を使って、護衛艦として共

に行動をしていた艦船へと連絡を取ろうと試みる。

彼の額からは血が流れ落ちており、視界も赤く染まりつつある。

「闇の書の暴走……止まりません……既に、ブリッジも奪われました」

彼の周囲には、純粹な魔力で構成されている触手が生い茂っており、エスティアは、その機能を失おうとしていた。

艦橋内に設置されていた計器類を含めた機械群から火花が散り、爆発を起こし始める。

天井からは埃が落ち、今にも崩れ去って自身を押し潰されてしまうのではと恐怖を感じてしまう。

《——操舵システムも……アルカンシエルのコントロールも……》

「——ッ！」

「エスティア、アルカンシエルのチャージ反応！」

「発射軌道上に、本艦隊！」

クライドからの通信での報告通り、艦内の機能のその9割9分は、闇の書によつて奪われてしまったと判断しても良いだろう。

管理局の保有する艦船武装の中でも屈指の——トップクラスの殲滅力と破壊力を誇

るアルカンシエル。

それは、一番艦であるこの艦と2番艦であるエスティアにも搭載されている。

それを起動し、撃つ為には、幾つかの手順を踏む必要があり、魔力をチャージするのにかかなりの時間を要する。

だが、エスティアは闇の書から魔力供給を受け、かなりの速さでアルカンシエルを撃つ為の魔力チャージに入っている。

報告されたその内容は、状況は、絶望的なものだと言えるだろう。

「クライド提督！ 脱出を急げ！ エスティアは……破棄する……」

暴走を続ける闇の書が、中から圧迫し、艦内に存在している機材の爆発もあつてか、映像に映し出されているエスティアのあちこちから、爆発が起き、火災が発生しているのが見て取れる。

こうなつてしまえばもう、コントロールを取り戻す事は出来ない。出来たとしても、艦そのものが限界を迎えているのだから、無駄であり無意味なだけだと言えるだろう。

そしてこのまま放置を続ければ、こちらの艦にまで被害が及ぶ。

あと数分もすれば、エスティアに搭載されているアルカンシエルの準備が完了して、発射される事になるだろう。

この艦が沈めば後は、闇の書が暴走を続け、この世界を含めた周辺に存在する幾つか

の次元世界が崩壊してしまう可能性がある。

こちらでもアルカンシエルを撃ち、沈み掛けているエスティアを破棄。雷撃処分をする他無いだろう。

《先程、全クルーの避難を確認しました》

クライドの言葉通り、エスティアからそう遠くない場所に小型の次元航行船が何隻か確認出来た。

《こちらのアルカンシエルのチャージは、後1分程度で完了してしまっています。こちらのチャージタイムのカウントを出します。発射前に……この船を……墮として下さい》

エスティアの艦橋を映し出していたモニターの画面、そして音が乱れる。

その乱れている映像が映し出したものは、今の状況を変える為に覚悟を決め、敬礼を取るクライドの姿。

砂嵐のような音を立て、通信は途絶し、彼の姿の変わりにチャージまでのタイムカウントが送られて来る。

「——通信がつ!?!」

リーゼロッテの悲痛な叫びが響く。

「エスティア艦……チャージ終了まで、残り68秒。こちらは、チャージ……完了してま
す。何時でも……撃てます」

エスティアから受信したカウントを確認し、報告をするリーゼロッテ。

彼女の声も震えていながらも公私を区別して、しっかりと仕事を熟している。

彼女からのその報告を耳にし、思わずモニターから顔を背けてしまう。

「——父様っ！」

「……………」

リーゼロッテの悲鳴に似た言葉に、黙り込んでしまう。

額には大粒の汗が流れ、その汗は艦橋の床へポタリと落ちる。

映し出され、今にも変動し続けているカウントは、まるで断頭台に登る階段の段数を表しているようで、一刻一刻と減り続けている。

死が、近付いて来ている。

このまま何もせずにいると、エスティアからはアルカンシエルが発射され、この艦は堕ちてしまうだろう。

そして、周囲の次元世界を含め、崩壊及び滅亡。

最悪の結末だ。

だからと言って、クライドを見捨てるという事に対して強い抵抗はある。

「……………」

目を閉じると、クライドが最後に見せた顔と瞳が浮かび上がって来る。

落ち着いた表情と声で、淡々と現状の報告をして来ていた。瞳は、真つ直ぐにこちらを向いて、どうするべきかを教えようとして来てくれていた。

だが、実際のところ、彼はどう思っていたのだろう。

死にたくない筈だ。まだ、生きていたい筈だ。彼には愛する妻と息子がおり、彼女達を残した状態で逝きたくはない筈だ。

それなのに、艦内に居たスタッフを始めとした局員全員を先に避難させ、確認。自身の避難が無理だと悟ると、こちらに状況などの情報を報告した。

このまま何も行動を起こさないでいると、彼の気持ちを、覚悟を裏切り、踏みこむような事と同じだと言えるのでは無いだろうか。

「アルカンシエル、バレル展開……」

緊張が張り詰めている艦橋内はやけに静かなもので、声が響く。

こうしている間にも、表示されている数字は減っている。

「カウント0になる前に……エスティアを墮とす……」

艦橋内の誰のものかは判らないが、唾を呑み込む音や心臓の鼓動音がハッキリと聞こえるように感じさせる。

それはもしかすると、自分のものであるのかもしれない。

艦に存在する2つの先端部の前方に、大きさの違う3つの環状魔法陣が不規則に展開

される。

魔法陣の手前から、最前方に存在する魔法陣の間に魔力が集まっていき、その魔力は白銀の光を放ち始める。

3つの環状魔法陣は回転を続け、魔力を収束、集まったそれを圧縮し、加速させる準備に入った。

2つ目の魔法陣の真ん中で、魔力が集まり、巨大化していく。

その光は、ある程度の処理をしないと、目を灼いてしまう程のものだ。

限界まで大きくなった魔導弾は、真つ直ぐに、静かに、確実にエスティアへと吸い込まれるように向かっていく。

エスティアに直撃、着弾をすると同時に空間が揺らぎ、歪み始める。

エスティアを中心にしてその周囲、直径1000kmの空間が歪曲し、光がリング状に伸び、散る。

3回程瞬き、消滅をした。

クライド・ハラOWN、享年25歳。

彼は、アルカンシエルによる砲撃により、暴走した闇の書と制御を奪われたエスティアと共に、この世界から事実上消え去る。

クライド・ハラOWN殉職をした。

「(私のミスだった。闇の書の暴走が……艦船のコントロールを乗っ取る程のものだとは予想出来なかつた)」

11年前の出来事ではあるが、それでも、今でも鮮明に、あの時の事を思い出す事が出来る。

部下であつたクライドを、この手で殺してしまつた。そう言つても可怪しくは、間違いは無いだろう。

「……………」

書類を手にし、机に置かれてある写真立てに目を向ける。

写真の中のクライドは愛息子であるクロノを肩車しており、愛妻であるリンディは夫である彼に寄り添っている。

映し出されているクライド、リンディ、クロノの3人は眩しい程の笑顔を浮かべていた。

「対象領域の通信妨害、消滅」

「映像、来ます！」

地球の衛星軌道上で待機を続けていたアースラも、海鳴市で起きている異常をしつか

りと感知していた。

だが、何者かの手によって、通信は妨害され、サーチャーを送る事すらも出来ないでいたのだ。

それが、その通信を妨害していた者の意志か、それともその存在に何かが起きたのか。妨害していたものは消え、映像での確認を取る事が出来るようになった。

「――!? クロノとゾイル特務執務官は……?」

「兩名共、既に現地へ飛んでいます」

「よし、結界は張り直せた。デユランダルの準備は?」

「出来ている」

その仮面の男の言葉に従い、カード状のデバイスが出現する。

白を基調としており、青い宝石が真ん中に設置されている。

「それにしても、特務執務官とその補佐の介入、そして八神竜人が暴走が無くて良かった」

「全くだ」

離れた位置に存在するビルの屋上に、黒く大きな魔力球が浮かんでいるのが見えた。

「デアボリック・エミッション」

黒雷を纏った黒く巨大な魔力球がゆったりとした速度で上昇をしていく。

「——！」

「空間攻撃！」

その魔力球を見て、術式を看破。

そして、その特性を知り、驚きを隠せないのはとフェイト。

「闇に、染まれ」

そう唱える銀髪の女性——闇の書の管制人格マスタプログラムの瞳に光は無く、目蓋には涙が溜まっている。

黒い魔力球は、爆弾のように中心部から外周部へといった方向で広がり、その向きへ衝撃が広がっていく。

【Round shield】

なのはが前に出て防御魔法を発動させる。

だが、見ただけでも、威力と衝撃はかなりのものである事が理解出来る。

「さてと……熾ロイ天覆アう七イつの円環スッ!!」

なのはの、更に前に志蓮は出、自身の持つ最高級の盾を展開する。

彼が前に差し出した手に従い、高濃度且つ超圧縮された純粹魔力の塊の7枚の花弁が

展開される。

その7枚の花弁は、それぞれ彼等全員である6人を囲う。

そしてその花弁からもまた、膨大な魔力が放出。その魔力が壁になって、管制人格が放ったDiabolic Emissionによる強力な衝撃を吸収……緩和して、防御を成功させる。

「保つかな、あの子達……?」

「暴走開始のその瞬間迄、保って欲しいな」

離れた位置に存在するビルの屋上から、仮面の男は管制人格の行使した魔法を見ていた。

その威力は、周辺のビルを巻き込んで、崩壊させていき、かなりのものである事を教えてきた。

それを見て、思わず少年少女達の無事を祈る2人。

「——!?!」

魔力の流れが急変する。

彼等の周囲に水色の光を放つ小さな魔力球が多数発生する。異変に気付いたのは、その瞬間だ。

だが既に時は遅く、水色の魔力縄がそれぞれ3つずつ、彼等の脚元に発生している魔法陣から伸びて縛り上げ、動きを封じる。

2人は術式を解析し、解除をしようと足掻いてみるが、強固且つ複雑なものであるのか、なかなか振り解け無い。

「ストラグルバインド」

「——な!？」

「相手を拘束しつつ、強化魔法を無効化する」

上空から声が聞こえ、そちらへと顔を向ける2人。

そこには、黒いバリアジャケットに身を包んでいる少年が——十分過ぎる程に知っている少年の姿があった。

「あまり使い処の無い魔法だけど……こういう時には、役に立つ……」

黒い少年が手にしている杖を屋上の床部分へと叩きつけると同時に、その魔法の真の効果が発揮される。

「……変身魔法も、強制的に解除するからね……」

抵抗しようと試みる仮面の男2人。

だが、その抵抗も虚しく、自身へと掛けていた魔法が——変身魔法が解除されてしま

仮面が外れ、重力に引かれて落ちる。

変身魔法が解けた事で現れたその姿は、彼には馴染み深く見覚えのある2人だった。カランといった軽い音を立てながら、仮面が転がる。

「クロノ！ ……このおっ！」

「こんな魔法、教えて無かったんだがな……」

「1人でも精進しろと教えたのは、君達だろう？ アリア、ロツテ……？」

ロツテとアリアを見て、瞳を揺らすクロノ。

予想はしていたが、やはり信じたくはなかったのだろう。

自身に魔法と格闘技術を教え、親しくしてくれていた、師匠であり師匠っぽく無い2人が仮面の男である事を。

「隠れたか……」

Diabolic Emissionを発動した後、空に少年少女等が浮かんでいない事に気付く管制人格。

だが、1人だけその場に残っていた。

「……………」

八神竜人だ。

Imperial Dragon fighter modeの状態の彼は、頭を垂れながら浮かんでいる。

だが、それだけであり、全く動く事も何かしらの反応を示す事は無い。

「なのは、志蓮……ごめん。……大丈夫？」

「うん、大丈夫」

「ああ、問題無い」

Diabolic Emissionによる広範囲空間攻撃に対しての防御に成功し、避けると同時に、管制人格から姿を隠すようにして、ビルの影に移動をした5人。

「あの娘、広域攻撃型だね。避けるのは難しいかな」

次に、同じ攻撃が来た場合、発動を感知出来れば回避は問題無く出来るだろう。が、今のように視界が遮られている状態では、それも難しいだろう。それどころか、周りを気にする事無く魔法を使える管制人格の方が優位だと言えるか。

「バルデイツシュ」

「Yes, sir. Barrier jacket, Lightning form」

広範囲に対して有効な上に、更に威力も高いであろうあの攻撃は、スピードがあると

は言えどもSonic formの状態では無理があるだろう。

移動出来る距離にも限界があり、それも考慮した範囲魔法を使用される可能性があるのだから。

Sonic formと比べて気持ち程度ではあるが、多少防御力があるLightning formへと形態を換装させる。

「なのは!」

「フェイト!」

「ユーノ君! アルフさん!」

背後から聞こえて来た声に対し、振り向く。

するとそこには、増援として来たのか、ユーノとアルフがそれぞれバリアジャケットを展開して、近付いて来る。

「くっそ……ゾイルとブロンは何やってるんだよ!」

「ブロンの方は判らない。だけど、ゾイル……ゾイル特務執務官の方は、外道衆の相手を」

「奴等も来てるのか?」

「うん」

気と魔力を探ってみると、確かにゾイルとクロノの持つ気と魔力を感じ取る。

それと同時に、禍々しくも澄んだ気のある存在を感じ取った。

「これって……ゾイルと水虎……？」

「多分、そう。水虎とナナシ連中を独りで引き付けてくれてる。だから」
「闇の書の管制人格は、俺達がつてか……」

「主よ……貴女の望みを叶えます」

目を閉じ、胸に手を当てる管制人格。

脚元に黒い古代ベルカ式魔法陣を展開し、魔力を上昇させていく。

「愛おしき守護者達よ……傷付けた者達よ……今、破壊します」

【G e f · n g n i s d e r M a g i e】

闇の書に記載されている文字が光り、魔法が発動される。

彼女を中心にして、封鎖領域が展開。仮面の男——リーゼ姉妹が展開していた封鎖結界を上書きするかのよう展開される。

結界内は、先程よりも暗くなり、上空は黒いものなる。

「——何!？」

「前と同じ、閉じ込める結界だ」

「やっぱり……私達を狙ってるんだ!」

ビルの陰に隠れているにも関わらず、結界展開時に起きる衝撃波が襲って来る。驚くなのは、アルフは今の魔法についての解析を口にする。

フェイトは今のその状況を知り、管制人格の行動を受けて、彼女の真意を感じ取る。

Crystal Cage内に閉じ込められている間に、リーゼ姉妹はなのはとフェイトに姿を変え、八神はやてに対して、闇の書の主としての覚醒を促した。

それが関係しているのか。それとも、別の理由があるのか。

管制人格は、自分達が外に出れ無いようにする結界魔法を行使したのだ。

「今……クロノが解決法を探してる。援護も向かっているんだけど、まだ時間が」「それまで、私達で何とかするしか無いか……」

その瞬間、離れた位置で大きな爆発が起きる。

「水虎、だったか……すまないが、俺と遊んでくれないか？ いや、実験台になってくれ」

「はて……どういう意味でしょうか？ ——がああっ!？」

ザフィーラと別れた後、水虎とナナシ連中が隙間を通って出て来るのを目にし、こちらの相手をする事にしたゾイル。

ゾイルは話し掛けると同時に、水虎が吹き飛ばされる。

「ふむ……成功といったところか……」

「どういう事でしょうか？」
究極生命体であるのは知っていましたが、モチカラを持た

アルティミット・サイング

ない貴方が——」

「これ、どう思う？」

水虎の言葉を遮るかたちで喋り、手にしている携帯電話に似たものを見せる。

「——それは？」

それには、対外道といった文字が記載されている。

そこからは確かに、モチカラと呼べる力の波動が出ていた。

「漸く理解したか？ ならば次は、撲滅される、消し飛ばされる、塵芥と化し消滅しろ」

そのゾイルの言葉と同時に、再び殴り飛ばされる水虎。

周りに居たナナシ連中も、同様に殴られ、吹き飛ばされていく。

「どう、いう事だ!? 何をしているんだ、貴様!」

ゾイル自身は何も手を出さず、動かずにいる。

だが、次々と殴られる感触を感じ、吹き飛ばされていく。

ナナシ連中もまたそうであるのが確認出来、それが現実である事を教えて来る。

驚き、大声を上げる水虎に対し、ゾイルはただ静かに立っているだけだ。

「見えないか？ 見えないだろうなあ……そうだろうなあ。当然だ！ だが、知らない

のか？ お前等は、今まで見た事も体験した事も無かったのか？」

もし、この場に波紋の呼吸を使える者が、もしくは資格あるものが居れば、それを目にする事が出来ただろう。

その場には、ヒト型の存在が3体程居り、ナナシ連中を吹き飛ばしていた。

1体は、身体の表面にベルギーワツフルのような凸凹のある幽波紋スタンド——キング・クリムゾン・アルティメツトだ。

もう1体は、三角形のマスクを被ったよう顔をしており、背中にはタンクのような物が付いている上、手の甲にその能力を象徴するかのような時計のマークある幽波紋スタンド——ザ・ワールド・アルティメツト真なる世界だ。

そして、最後の1体。他2体とは違って頭髮があり、青い肌をしたよりヒトに似た姿を持つ幽波紋スタンド——スタープラチナ輝・アルティメツト星だ。

その全てがパワータイプであり、力強い拳はナナシ連中を潰し、殴り飛ばしていく。かなりの速さと攻撃力を誇り、ブンブンと空気を切り裂く音が鳴り続けている。

スタンドを認識する事が出来ない者からすると、それはただの自然現象であり、純粹に恐怖を感じるだけだろう。

「成る程な……見えはしないが、空气中に存在する水素の動きが可怪しい。何か、居るな……」

「感付いたか……言わない方が良かったかもしれない」

スタンドを使用している事に気付いた水虎の言動に対し、ゾイルは少し後悔をする
 が、即座に切り替える。

「だがまあ、気付いたところで——」

その瞬間、3体の幽波紋スタンドは水虎に対して殴りに掛かるが、その全ての攻撃はすり抜け
 てしまう。

「——なっ!?!」

今度は、ゾイルが驚く番だった。

水虎は、自身の身体を、殴られる箇所を水へと変え、物理攻撃である殴打は無意味に
 なってしまっていた。

「ほう……」

試しに、キング・クリムゾン・アルティメット《燃え盛る深紅の王》が殴るが、もの
 の見事に、水虎の身体を素通りしてしまう。

「何かが通った気はしますが、相変わらず見えませんね。どこか気味が悪い……」

「水か……」

キング燃え盛る・クリム深ゾン紅・アル王ティメットが殴った事で、飛び散った水滴を見て、そう眩
 くゾイル。

その小さな変化を見過ごす事も無く、ゾイルは気付いて、その先にどうするかを考え

出す。

「膨大な熱量で蒸発させる……気温を低下させて凍らせ、跡形も無く砕く……どちらも絶対に倒せるという訳では無いだろうが……」先ずは……」

「——がああつ!？」

熱の流法で、体内で流れ続けている血液を1000000℃にまで加温沸騰させていく。グツグツと煮え滾った血液が流れる身体は、通常時よりも少し熱を感じる程度のもの。

水であれば蒸発どころでは済まないだろうが、ゾイルの身体を流れる血液は特殊であり、何も異常と言える変化は起きない。

ジュエルシード事件時に転生者同士での模擬戦をした時と比べ、加温沸騰可能な温度は遥かに上昇している。

マジシヤンズ^熱ブレッド^練・アルテイメツト^師から1000000℃も誇る熱を発生させる。

そして、手にしたデバイスからの熱のモチカラの効果で更に、増大していく。

それは、一瞬の出来事だった筈だ。そこは瞬間的、爆発的に気温が上昇する。

それによって、水虎の身体は酸素原子核と陽子、電子にまで電離してしまった。

その結果、ゾイルとマジシヤンズ^熱ブレッド^練・アルテイメツト^師から発せられている熱量は更に増大する。

ただ只管に壊れた場所を、溶けた場所を、抉れている場所を殴り続けるクレイジー・ダイヤモンド・アルティメット。

その幽波紋特有の効果が起きたのか、見るも無残だった空間が、変化する前のものへと戻っていく。

元に戻らないのは、倒し、消滅させた水虎とナナシ連中だけだった。

「爆発が収まった……この魔力は……究極生命体アルティメット・サイングが居るのか……スレイプニール……羽搏はばたいて」

【Sleipnir】

爆発と、その地点から大きな魔力の存在を感知する管制人格。

結界内に、化物染みた力を持つ存在を入れてしまった事に気付き、入れないように調整をしなかった事に後悔するが、気持ちを切り替える。

呟く言葉に従うかのように背中の黒い6つの翼がはためき、空へと飛び上がる。

「リーゼ達の行動は、貴方の指示ですね？ グレアム提督？」

「違う、クロノ！」

「あたし達の独断だ。父様には関係無い！」

「ロッテ、アリア。良いんだ」

時空管理局本局のグレアムに与えられている執務用の部屋で、クロノは3人に対して、事情聴取を執り行っていた。

確認をするクロノに対し、庇うようにして否定をするロッテとアリア。

グレアムは、全てを諦めたのか。全てを潔く認め、受け入れようとしているのか、クロノの言葉を、確認の為の質問に肯定をする。

「クロノはもう、粗方の事は掴んでる。違うかい？」

「……一年前の、闇の書事件以降……提督は、独自に闇の書の転生先を捜していましたね？　そして、発見した……闇の書の在り処と現在の主、八神はやてを」

空間モニターに、闇の書とはやての写真が映し出される。

「しかし、完成前に闇の書と主を押さえても……余り意味が無い。主を捕らえようと、闇の書を破壊しようと……直ぐに転生してしまうから」

ユーノが無制限書庫で調べあげ、見付けた資料にもあつた通り、闇の書には転生機能が搭載されている。

主を捕らえ、募集行為を出来ないようにしていても、主の寿命が尽きれば、死んでしまえば、別の、新しい主を探し、その主の元へと転生をする。

破壊しようと試みても、その全てが壊される前に、闇の書は転移をして、新しい主の

元へと転生をしてしまう。

「だから、監視をしながら、闇の書の完成を待った。……見付けたんですね？　闇の書の、永久封印の方法を？」

「両親に死なれ、身体を悪くしているあの娘を見て……心が痛んだが……運命だと思っ
た」

「あの娘の父の友人を騙って、生活の援助をしているのも……提督ですね？」

写真を取り出し、グレアムとリーゼ姉妹に見えるように、机の上に置くクロノ。

写真には、楽しそうな笑顔を浮かべている八神家の住人が写し出されていた。

「永遠の眠りにつく前くらい、幸せにしてやりたかった……偽善だな」

「封印の方法は……？」

自嘲するグレアムに対し、ただ静かに、淡々と質問をするクロノ。

グレアムの気持ちも理解出来ない事は無いが、今のクロノは執務官だ。

そして、今も最前線で戦い続けている仲間が居て、待っていてくれるのだ。

「……闇の書を主ごと凍結させて……次元の狭間か、氷結世界に閉じ込める……そんなところですね？」

「そう。それならば、闇の書の転生機能は働かない。あの娘だけじゃ無く、兄であるあの少年も一緒に封印をしてやろうと思っていた……」

クロノの言葉に否定をする事無く、そのまま自身の考えていたプランを話すグレアム。

「これまでの闇の書の主だつて、アルカンシエルで蒸発させたりしてるんだ！ それと何にも変わらない！」

ロツテの言葉通り、それは今まで管理局が闇の書の主に対して行なつて来た事と何も変わりはない。それどころか、転生機能を働かせないようにする点から見て、betterな方法だと言えるのかもしれない。

「クロノ、今からでも遅くない。私達を解放して。凍結が掛けられるのは、暴走が始まる数分の瞬間だけなんだ！」

「その時点ではまだ、闇の書の主は……永久凍結をされるような犯罪者じゃ無い。違法だ」

「その所為で！ ……そんな決まりの所為で悲劇が繰り返されてんだ。クライド君だつて……あなたの父さんだつて、それで——」

「——ロツテ……」

アリアの提案を聴き、それを否定するクロノ。

ロツテは、そんなクロノに対して思いの丈をぶつけようとするが、グレアムに諫められ、開いていた口を閉じる。

「法以外にも、提督のプランには問題があります。先ず、凍結の解除は、そう難しく無い筈です。何処に隠そうと、どんなに守ろうと……何時かは誰かが手にして、使おうとする。怒りや悲しみ、欲望や切望。そんな願いが導いてしまう。封じられた力へと」

「……………」

クロノの尤もだと思える意見と考察、推測に対し、言葉を返せないグレアムとリーゼ姉妹。

「現場が心配なので、すみません、一旦、失礼します」

「クロノ」

「はい？」

部屋を退出しようとするクロノに、グレアムは意を決したのか声を掛ける。

「デュランダルを、彼に」

「父様……………」

「そんな……………」

「私達に、もうチャンスは無いよ。持っていたって、役に立たん」

グレアムの言葉に顔を伏せるリーゼ。

クロノがこの部屋から出たとしても、部屋の外には局員が監視をするかのように立っている。

ここから次元転移をしたとしても、罪状が余計に増えてしまうだけだ。使うチャンスも機会も無いのであれば、ならば……と。

「どう使うかは、君に任せる。『氷結の杖デユランダル』だ」

アリアが差し出したそれは、一枚の白いカード型デバイスだった。

真ん中にある青い宝石がキラリと輝く。

上空で、フェイトと闇の書の管制人格がぶつかり、離れる。

そして、その管制人格が後退した場所に雄介とドウムが殴りに掛かり、あしらわれると同時に、志蓮が斬り掛かる。

それらが避けられると、なのはが砲撃をして管制人格の行動を阻害する。

これを、一連の行動及びコンビネーションによる攻撃をどれだけ繰り返しているだろうか。

何度も何度も試してはいるが、その全てを避けられ、防御され、当たったとしても、大きなダメージにはならず、掠り傷程度のものしか与えられてはいない。

「碎け」

【Breakup】

ユーノとアルフによる2人掛かりのバインドできえも、管制人格軽々と解除し、抜け

だしてしまおう。

攻撃と妨害の全てに魔力だけでは無く、気を込める。

防御と回避にも、魔力と気を同時運用していく。

だが、魔力だけでの行動をしているであろう管制人格は、表情を変える事もせず簡単に対応して来るのだ。

【Plasma smasher】

【Divine buster, extension】

「——ファイアツ！」

「——シューツツ！」

フェイトの左掌の前方に、魔法陣が展開し、魔力弾が発射される。

レイジングハートから、バリア貫通能力を付与されたDivine Buster

Extensionが発射される。

「盾」

【Panzer schild】

管制人格から見て、右上空からはPlasma Smasherが、左下方からはDivine Buster Extensionが迫り来る。

だが、たった一言だけで、左右両掌を面にして、強固な三角形の盾が出現し、彼女

等の攻撃が断たれてしまう。

「——白竜の鉤爪っ!!」

なのはとフェイトの放った、それぞれの魔力砲撃による光の中から、雄介とドゥームは飛び出して、Panzerchildが展開されていない上空へと移動し、光を纏わせた拳で殴りに掛かる。

【Pferde】

管制人格両足元に、魔力の渦が発生し、その彼等2人の攻撃を避けてみせる。

「刃を以って、血に染めよ」

【Blutiger Dolch】

「——!!」

「穿て、ブラッドデイダガー」

回避を成功させると同時に、管制人格はなのはとフェイト、雄介にドゥーム、ユーノ、アルフ、志蓮の全員をロックオンし、血のように紅い鋼の短剣を飛ばす。

その短剣は、純粹魔力を物質化したものであり、自動誘導型の魔法だ。

気で強化しているにも関わらず、視認する事が敵わず、直撃、炸裂する。

「——くそっ、涼しい顔しやがって……」

爆発で発生した煙から脱出をするが、その瞬間にまた、回避行動に入る。

「咎人達に、滅びの光を……」

「「「「「「!?」」」」」」

管制人格の右掌前方に、魔法陣が展開される。

その魔法陣へと目掛けて、空气中に存在する魔力と皆の体内に存在していたが、漏れ
 でた、もしくは魔法使用時にロスとして発生した魔力が収束されていく。

「星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

「スターライト、ブレイカー？」

自身の持つ最大級の魔法が発動されようとしている様を見て、驚きを隠せないでいる
 なのは。

集まっていく魔力は、見る見るうちに大きく肥大化していく。

幸いだと言えるのか、闇の書の管制人格にはなのは程の魔力収束技術を持っていない
 からか、撃つまでのチャージタイムにやけに時間を掛けている。

「なのはの魔法を使うなんて！」

「なのはは1度、収集されてる。その時にコピーされたんだ」

「——全く、だから嫌なんだ！」

回避行動をする為に、距離を取ろうと全速力で管制人格から離れていく。

闇の書の特性により、なのはの魔法はコピーされている。

おそらく、フェイトの魔法も使えるだろう。

「フェイトちゃん！ こんなに離れなくても」

「至近で喰らったら、防御の上からでも墮とされる！ 回避距離を取らなきゃ」

必死に離れようとする皆を、不思議そうに見ながら付いていくのは。

だが、フェイトは実際にそれを喰らった事があり、推測ではあるが、闇の書の膨大な魔力量によって、なのはものよりも遙かに強力なものに変化している筈だ。

自身の技であるにも関わらず、喰らったフェイトがその特性をよく理解しているというのはどういう事だろうか。

経験者は語るとい事なのか。

【Sir, there are noncombatants on the battlefield at three hundred yards】

「——え!？」

だが、回避距離を取る為に移動をしていると、バルディッシュから予想だにしていなかった言葉が発せられ、なのはとフェイトは驚く。

「やっぱり誰も居ないよお！ 急にヒトが居無くなっちゃった……」

「……………」

「辺りは暗くなるし……なんか、光ってるし……一体何が起きてるの!？」

誰の、ヒトや犬や猫などといった他の動物の気配すらも感じ無い程に、静かで、不気味だと思える空間。

そんな境界空間に、アリサとすずかは、何の手違いか閉じ込められてしまった。

何回か大きな爆発音が聞こえ、そして空では激しい光の明滅が繰り返されている。

そして、それらが止んだかと思うと、上空には大きな光の弾が浮かんでいるのを目にしてしまう。

これを異常と言わず、何を異常だと言えるのだろうか。

魔法という技術体系などを知らない彼女等からしたら、不気味や異常だといったそんなありきたりな言葉しか浮かんで来なかった。

「取り敢えず逃げよう! 成る可く遠くへ!」

「う、うん!」

だが、そんな状況でも自身というものを失わず、アリサは戸惑うすずかの腕を掴む。

そんなアリサを見て、すずかもまた同様に自身を失う事無く、提案されたその言葉に強く頷く。

【Distance, Seventy, sixty, fifty……】

「なのは、この辺！」

「うん！」

安全且つ確実に回避と防御が出来る距離へ、そして紛れ込んでしまった民間人を保護する為に、フェイトとなのはは高速で移動を続ける。

背後からは、強く圧倒的な魔力が背中を撫でて来ているように思え、思わず唾を呑み込んでしまう。

バルデイツシユによつて報告され続ける民間人との距離、レイジングハートによる発射されるまでの予想時間のカウンtdown、そして管制人格が集めていく魔力量が大きくなる度に、相棒デバイスを掴んでいる手に、汗が出て来る。

なのはは、飛び降りると同時に、道路に着地する。

かなりの速さがあつたのか、道路と足が擦れ、煙と誇りが舞い上がる。

フェイトは、抱き抱えていたなのはと離れ、近い場所にあつた信号機の上へと着地を成功させる。

〔Twenty, eighteen〕

舞い上がる煙と埃が舞い上がる中、周囲を見渡すなのはとフェイト。

「——あ……すみません！ 危ないですから、そこでじつとして下さい！」

煙が晴れると同時に、その場から離れようとしている2人の少女を見付けるなのは。

「——え!?!」

「今の声って……」

聞き覚えのある声が耳に届き、脚を止めて振り向くアリサとすずか。

「なのは?」

「フェイトちゃん?」

煙が完全に晴れると同時に、互いの顔をはつきりと確認し、驚いてしまう。

「貫け! 閃光! スターライト、ブレイカー」

「——!?!」

チャージが完了したのか、爆音と共に管制人格から放たれた膨大な魔力の塊である光が迫り来る。

「——熾^{ロー}天覆^{アイ}う七つの円環^スツ!!」

迫り来る光の壁を、7枚の魔力花卉が防ぐ。

「こなくそつ!」

なのはの放つスターライトブレイカーよりは威力が低く、貫通能力などは無いが、それでも膨大な魔力量に任せた勢いなどもあって、志蓮は押され始める。

7枚の花卉を一つに重ねて防御をするが、それでもジリジリと後ろへ追いやられていく。

【Defenser plus】

【Wide area protection】

フェイトとなのはは後ろに居るアリサとすずかを護る為に、防御魔法を発動させる。アリサとすずかの周りには金色のドーム状のバリアが展開され、なのはとフェイトはそれぞれ、自身の身を護る為の防御魔法を発動させる。

【Explosion】

志蓮の持つ剣型のデバイスがカートリッジをロードし、熾^ロ天覆[!]う七^アつの円環^アによる護りはより強固なものになる。

だが、それはほんの一瞬の悪足掻きのようなものだ。

『なのは？ なのは？ 大丈夫!?!』

『フェイト!?!』

『大丈夫、だけど……』

『アリサとすずかが、結界内に取り残されてるんだ……』

スターライトブレイカーによる衝撃などを防ごうと努力する一方で、ユーノとアルフからの念話に応えるなのはとフェイト。

その2人の返事に驚きつつも、ユーノは落ち着いてエイミイへと報告する。

『エイミイさん!』

《余波が収まり次第……直ぐ避難させる！ 何とか堪えて！》

『——はい！』

『——あいよおおっ!!』

アースラ内に存在するモニターは、闇の書の管制人格がスターライトブレイカーを放つところも、しつかりと捉えていた。

管制人格のものか、主であるはやてのものなのか。

彼女の資質がスターライトブレイカーに影響を与え、その魔力砲撃は広域攻撃型へと変貌していた。

その為に、防御を成功させた3人と残りの6人は無事ではあったが、街が被った被害はかなりのものとなった。結界を張っていなければ、大惨事と呼べるものだっただろう。

「もう大丈夫だ」

「直ぐ安全な場所に運んで貰うから……もう少し、じっとしててね！」

抱き合い、身を寄せあつて震えているアリサとすずかの2人に、声を掛けるフェイトなのは。

2人は自身と、友人の無事を確認すると同時に安堵の息を吐き出す。

「あの……なのはちゃん……フェイトちゃん……それに、雄介君に志蓮君、ドウムさん

も……」

「ねえ、ちよつと……」

不安に瞳を揺らしながら、質問を投げ掛けようとするはずかとアリサ。

「——え!？」

だが、その質問を言葉にする前に、彼女等は脚元に出現した魔法陣の効果で、アースラ内へと強制転移させられる。

「見られちゃったね……」

「うん……」

「まあ、何時かは教えようと思ってたんだろ？　なら、良い機会じゃないか」

落ち込むのはとフェイトに、雄介志蓮は自身の考えを口にする。

『ユーノ君、ごめん。エイミィさん達は忙しいだろうし、2人に説明をしてあげてくれるかな?』

『アルフも、御願い』

『でも……フェイト!』

『行こう、アルフ』

『でもさ……』

『気掛かりがあると、2人が思い切り戦えないから……』

なのはとフェイトの頼みに対し、渋るアルフ。

ユーノの言葉に洗々ながらも理解と納得をしたのか、2人はアースラへの転移を開始する。

《皆！ クロノ君から連絡。闇の書の主に、はやてちゃんに投降と停止を呼び掛けてっ
て！》

『はい！』

エイミーからの連絡を通して、クロノからの命令を受ける。

なのはとフェイトは互いに頷き合い、彼女等へとチャンネルを合わせ、念話を開始する。

『はやてちゃん！ それに、闇の書さん……止まって下さい！ ヴィータちゃん達を傷付けたの、私達じゃ無いんです！』

『シグナム達と……私達は……』

『話が主は……この世界が——自分の愛する者達を奪った世界が、悪い夢であつて欲しいと願った。我はただ、それを叶えるのみ』

なのはとフェイトの呼び掛けに、抑揚も無くただ静かに応える管制人格。

『主には……穏やかな夢の内、永久とわの眠りを』

『——！』

『そして……愛する騎士達を奪った者には……永久とわの闇を』

その言葉と共に、管制人格の脚元には魔法陣が展開される。

「——闇の書さん！」

「お前も……私を、その名前で呼ぶのだな。それでも良い」

突如として道路が裂け、そこから地球とは違う世界での生物が姿を現す。

「こいつ、確か……！」

ヴィータやシグナムが、リンカーコアを募集する為に獲物として選んだ生物。

その生物の持っていたリンカーコアから身体構造などのデータを読み込み、再現をしたという事だろうか。

その生物に生えている無数の触手が、なのはとフェイト、そして彼女等2人だけでなく、雄介と志蓮、ドゥームの3人にも同じように絡み付き、拘束をする。

やはりと言うか、藻搔けば藻搔く程に、足搔けば足搔く程により強くキツく締め付けてくる触手。

幼い少女の身体に巻き付き動きを阻害するそれは、何処か犯罪臭を匂わせてくる。

「だからあああああつ、野郎の触手プレイなんて一体誰得なんだああああああつ!!

——っう!?!」

身体を強く振り動かしてみせる雄介。

だが、強く大きく動きすぎた為に、触手もまたその分だけ強く締め付けて来る。

「私は、主の願いを叶えるだけだ」

「願いを叶えるだけ？ そんな願いを叶えて……それで、はやてちゃんは本当に喜ぶの!?! 心を閉ざして……何も考えずに……主の願いを叶える道具で居て……貴女は、それで良いの!?!」

なのは心からの疑問と意思を、感情を以って、管制人格へと言葉を放つ。

「我は魔道書、ただの道具だ」

「だけど……言葉を使えるでしょ？ 心があるでしょ!?! そうでなきや可怪しいよ！ 本心に心が無いんなら……泣いたりなんか、しないよ!」

そのなのはから出た訴え掛けるかのような叫び声を聞き、自身から涙が溢れ、流れ落ちていく事に気付く。

「この涙は、主の涙。私は道具だ。悲しみなど……無い」

だが、それでも管制人格は否定をする。

はやての身体を依代にしているのだから、涙を流すした事は自然だろう。

だが、流し続けているという事は、はやてだけが悲しみを感じている訳では無い事を教えて来る。

「バリアジャケット、ページ」

【S o n i c f o r m】

バリアジャケットを構成している魔力の全てを瞬間的ではあるが、全面解放し、自身等を拘束している触手の全てを破壊するフェイト。

そして、また瞬時にバリアジャケットであるS o n i c f o r mを纏い、なのはとドウーム、雄介に志蓮と共に後ろへ退がる。

「悲しみなど無い？ その言葉を……そんな悲しい顔で言っただって、誰が信じるもんか！」

「貴女にも心があるんだよ！ 悲しいって言って良いんだよ！ 貴女のマスターは……はやてちゃん……きつとそれに応えてくれる、優しい娘だよ！」

「だから、はやてを解放して！ 武装を解いて！ お願ひ！」
フェイトとなのはは必死に説得を試みるが、管制人格の意志は堅く硬い。強固なものだ。

涙を流しながらも、静かに見下ろして来るだけ。

地面が割れ、裂かれていく。

そこから、マグマに似た高エネルギーの奔流が吹き出て、地面と空気を揺らし始める。「早いな。もう崩壊が始まったか。私もじき、意識を失くす。そうなれば、直ぐに暴走が始まる」

彼女の言っている事は正しいのだろう。

管制人格である彼女が起きているという事は、コントロールが出来ている。管制がさ
れている事を表している。

だが、その彼女の人格や意志が失われれば。

「意識のある内に、主の望みを叶えたい」

自身の手を見詰めながら、涙を流し続ける管制人格。

[Blutiger Dolch]

闇の書に記載されている文字と、開かれているページ全体が光り始める。

「……な？」

管制人格が手を前に振り翳すと同時に、なのはやフェイト、そして全員の周囲、それ
ぞれを囲うようにして16発分ずつのBlutiger Dolchが出現する。

「闇に、沈め……」

静かに告げられた言葉に反応し、Blutiger Dolchが向かって来る。

「……………」

だが、2回目という事もあり、回避を成功させせる。

Blutiger Dolch同士がぶつかった事で発生した爆炎から、俺達は抜け
出す。

「この……駄々っ娘！」

【Sonic drive】

「言う事を、聴けええええっ!!」

【Ignition】

フィンブレードとソニックセイルを展開し、空を蹴るフェイト。

その勢いのまま、バルディッシュを振り翳しながら、闇の書の管制人格へと突っ込んで行く。

「お前も、我が内で眠ると良い」

「はああああああああああああっ!!」

斬り掛かるフェイトに対し、黒い三角形の魔法陣型シールドで防ぐ管制人格。

そして、シールドとバルディッシュから出ている魔力刃がぶつかると同時に、フェイトの身体は、小さな金色の魔力光へと分解されていく。

「——なっ!?!」

「——フェイトちゃん!?!」

自身に掛かる異常と異変に気付き、後退をしようとするフェイト。

だが、時既に遅く、彼女は分解されながら落ちていく。

【Absorption】

フェイトの身体は完全にデータに変換及び分解され、闇の書の中に閉じ込められてしまった。

「総ては、安らかな眠りの内に……」

管制人格が目を閉じると同時に、開かれていた闇の書は無情にも閉じられる。

闇からの脱出 祝福の風を起こせ

「あれ……ここは？」

「ようこそ、アースラへ」

アースラ内に存在する転送ポート。

そこにアリサとすずかは転移をしていた。

瞬きをする程のその一瞬の間に、先程までとは別の場所に移動した事に驚きを隠せないでいる2人。

「えつと……貴方は？」

「俺の名前はゾイル……」

「ゾイ、ル……？」

「そうだ！ ここは何処!? それになのはとフェイト達は!? 一体どうなってるの!？」

「ちよ、ちよつと……アリサちゃん」

転移した事を素直に受け入れ、それと同時に思い出したように質問を一気に投げ掛けるアリサ。

「別に構わない。まあ、順番に説明をするけど、歩きながらで良いか？」

「何処へ行くんですか?」

「行けば理解するさ」

アリサとすずかの質問に対し、ゾイルははぐらかしたかのような解答をして歩き始める。

彼女達も、どうすれば良いのかは理解らないが、ここでじつとしていただけでは何も変わらず、意味が無い事を理解し、後を追い掛ける。

「先ず一つ。説明の順番が合っているかは兎も角として、ここは管理局という大きな組織が保有する艦——アースラの中。そして、この艦は今、地球の衛星軌道上にある」

「衛星軌道上!?!」

「その通り。そして、君達の友人である高町なのは、フェイト・テストタロツサ、上条雄介、神威志蓮、保和歩栄、フェイトの兄であるドウム・テストタロツサは俗に言う魔法使い。そして、管理局で仕事をしている。ここまではOK?」

「——ちよつと待つて下さい! 魔法使いだつて事は兎も角、なのは達が働いてる!?! それ、どういう事よ!」

ゾイルの説明に、噛み付くように問い掛けるアリサ。

最初は敬語だったが興奮のあまり口調が碎けてしまい、語気を強めてしまうアリサ。

魔法使いという事は突飛な事であるが、働くというのは余つ程の事が無い限りこの世

界でもよくある事。

その働いているというキーワードに強く反応をする。

「詳しい事は、彼女等自身から聴いてくれとしか言えない」

「複雑な事情があるって事ですか？」

「その通り。そして今、彼女等は、地球にある恐い魔法のアイテムをどうにかしようとして頑張っていてくれている。着いた」

「——あれ、ゾイル特務執務官!？」

自動ドアが開くとそこには、通信インカムを頭に付けなのは等の行動を観て、アドバイスを出していたエイミイが居た。

彼女は入ってきた3人を見て驚くが、それ以上にアリサとすずかの2人は驚愕に包まれていた。

「なのはにフェイト……雄介達も!」

「えつと……これは?」

「サーチャーというものを使って、中継している映像だ」

「ちよつと、どういうつもりですか!?! ゾイル特務執務官!」

「彼女等は巻き込まれた。そして高町なのは等と親友関係にある。そして、何故か結界内に居た。これがどういう事か理解るか?」

「えっと……理解りません」

アリサとすずかを入室させ、そして魔法技術などについて説明をしている事に対し、驚きを覚えながらも、ゾイルに対して質問をするエイミー。

逆に戻ってきた質問に対し、頭の中を回転させてみるが、その答は思い付かない。

「闇の書の管制人格が展開した結界の中に、彼女等は居たんだ。その事を鑑みて闇の書の管制人格が彼女等を狙う可能性があるから、アースラに転移して貰った。そして、これらの説明をしているのは、もう既に巻き込まれ、無関係では無いからだ」

「それはそうですが……」

「彼女等の住む地球が危険に襲われており、高町なのは等はそれを救おうとしている。そして、そこに住む者の代表として聴き、観てもらおう」

「闇の書……?」

「あの。なのは達と戦っている人は誰ですか?」

「あれは——」

「フェイト!? / フェイトちゃん!」

「——エイミーさん!」

《状況確認……フェイトちゃんのバイタル、まだ健在!》

なのはの悲鳴に似た言葉を受け、驚愕と戸惑い、焦りなどの気持ちを抱えながらも、キーボードを叩いていくエイミー。

モニターには、なのは等の姿が映し出されているものの他、彼女等のバイタルを、状態を表示しているものもあつた。

表示されているバイタルの内、フエイトのバイタルを、まだしつかりと記録を続けている。

もう少しだけ弄ってみると、フエイトが今どうなっているかが判明した。

《闇の書の内部空間に閉じ込められたみたい。救ける方法、現在検討中！》

通信からでも判る程に物凄い速さでタイピングをしていくエイミー。

「我が主も、あの娘も醒める事無い眠りの内に、終わり無き夢を見る。生と死の……狭間の夢……それは、永遠だ」

闇の書の中で眠り、夢を見る2人の少女。

彼女達は、いつ終わるとも知れない夢を——胸の内に秘めている願いがかたちになった幻を、その寿命が尽きるその時迄見続ける事になる。その死は一瞬の出来事だが、夢を見続けている彼女達は、自身の死を認識する事は無いだろう。

「永遠なんて、無いよ。皆、変わってく……変わっていかなきゃいけないんだ！ わたしも……貴女も！」

「その通りだ、なのは！ 眠り続けている姫様方を叩き起こしてやろうぜ！」

「まあ、眠り姫が目醒めるのは王子様のキスと相場が決まっている」

「必ず救い出す……フェイト！」

湖の存在する森の中。

その湖の真ん中に、建築物が建っている。緑が生い茂っているそれは、自然に溶け込めるように、苔などを人工的に生やしているようだ。

「——え!？」

そんな建物の一室で、フェイトは目を覚ます。

目を開き、身体を起こしてみるが、何処をどう見ても見覚えの無い部屋だ。

そして、横からは誰かの——幼く可愛らしい少女によるものか、スウスウといった寝息が聞こえて来る。

フェイトはその声の主である少女の方へと目を向け、その姿を見ると同時に驚いてしまふ。

「此処は……?！」

天井は、アーチ状になっており、青色に塗られたそれに、小さな白や黄色の点が無数存在している。夜空を表しているのだろうか。

「フェイト、アリシア、アルフ……朝ですよ！」

数回のノックの後、聞き覚えのある——もう聞く事が出来ない筈の女性の声が耳に届いてくる。

「——まさかつ……！」

戸惑いと驚き、そしてその正体は判らないが、確信を心に秘めて横に目を向ける。

そして、ドアの向こうに居るであろう彼女の呼び声に反応し、横に居た少女——アリシア・テスタロツサと、子犬フォームで布団に潜り込んでいたアルフが目を覚まし、もぞもぞと動きながら身を起こす。

「お早う……フェイト」

寝ぼけ眼を右手で擦りながら、アリシアはフェイトに向けて朝の挨拶をする。

「皆、ちゃんと起きてますか？」

ガチャリと音を立てながら、ドアの向こう側から女性が部屋の中へと入って来る。

「はい——！」

「うん、眠い——」

アリシアの元気な返事とは反対に、アルフは正直に自身の状態を述べる。

「2人共、また夜更かししてたんでしょ——」

そう言いながら、女性はカーテンを開いていく。

「ちよつとただけだよ！」

「ねー!!」

アリシアの言葉に同意するアルフ。

「早寝早起きのフェイトを見習って欲しいですね。アリシアはお姉さんなんですから！」

その女性の言葉に、頬を膨らませて剥れるアリシア。

「あの……リニス……?」

フェイトはまだ、今がどういう状況でどういった状態にあるのか、理解と判断が出来ていない。

フェイトは、まだ夢を見ているような気持ちなのだ。

「はい? 何ですか、フェイト?」

フェイトの言葉に、しっかりと返事をするリニス。

「アリシア……」

「——ん?」

自身が今居るこの場所は、本当に現実なのだろうか。これは夢なのだろうか。

それとも、先程までの世界が夢現なのだろうか。

「前言を撤回します。今朝は、フェイトも寝惚けやさんのようです」

フェイトを見たリニスの言葉、そしてフェイト自身の様子を見て、面白く感じたのかアリシアは声を上げて笑う。

「さあ、着替えて。プレシアは、もう食堂ですよ」

「はい」

「かあ、さん……」

そのリニスの放った言葉を聞き、フェイトは目を大きく開いて、身体を震わせた。気になる事はまだあるが、震える身体を抑えて着替るフェイト。

アルフは人間形態に、そしてアリシアが着替え終えると、4人は部屋から出る。

廊下に出ると、そこは見覚えのあるところで、フェイトはここが時の庭園だということに気付く。

「お母様！ お早う！」

「お早う、プレシア！」

「アリシア、アルフ、お早う」

少し歩くと開けた空間へ出、そこでかあさん^{プレシア}がお茶を飲みながら座っているのが見える。

机にはいろいろな料理が置かれており、その場所が食堂である事が理解出来る。

お茶の入ったカップを皿に乗せ、朝の挨拶をする2人に返事をするプレシア。

その3人の様子を見て、フェイトはより一層困惑してしまう。

フェイト自身の記憶では、アルフとプレシアの仲は嫌悪——と言うよりも、アルフが一方的に敵意を出し、プレシアは基本的には無視をするといったふうだった。

だが、目の前の彼女等はそのような素振りを見せる事も無く、楽しそうに会話を弾ませている。

プレシアの笑顔は、自分の中に存在しているアリシアの記憶と同じと言える程の綺麗で柔らかなものだった。

「プレシア……困りましたよ。今日は嵐か雪になるかもしれません」

「……………?」

「ほら、フェイト」

自身の覚えているプレシアと今日の前に居るプレシアの、あまりの違いように驚くしか出来ないでいるフェイト。

そんなフェイトに、陰で隠れて様子を伺っている事に気付いたプレシアは不思議そうな表情を浮かべ、リニスを出て来るように声を掛ける。

恐る恐る動き、柱の陰から出るフェイト。

「フェイト、どうしたの?」

「どうも、怖い夢か何かを見たらしくて……今が、夢か幻だと思ってるみたいですよ」

笑顔を見せて、心配そうに声を掛けるプレシア。

「フェイト、勉強のし過ぎとか？」

「あり得る！」

誂うアリシアの言葉に対して否定をする余裕も無く、ただ立ち竦むフェイト。

「フェイト、いらつしやい」

プレシアの言葉に、フェイトはゆっくりと歩み寄る。

「……………——っ!？」

顔を伏せるフェイトに、プレシアは笑顔を浮かべ、両手をフェイトの顔へと持つていく。

それに対してフェイトは、ビクツと小さく身体を震わせ、半歩分だけ後ろへ退がってしまう。

「怖い夢を見たのね、でももう大丈夫よ。母さんもリニスもアリシアも、皆貴女の側に居るわ」

プレシアの顔と声は優しく、夜泣きをする赤ん坊をあやすようにフェイトへと話し、触れる。

「プレシア、あたしも！」

「そう、アルフもね」

抗議するアルフに、微笑みながらその言葉を肯定するプレシア。

「まあ……朝食を食べ終える頃には、悪い夢も覚めるでしょう」

リニスの言う通りに先程迄のものが、夢であるのだとしたら。

なのは達と出会い、友達になった事も夢だという事なのだろうか。

「さあ、席に着いて、頂きましょう？」

「えつと……兄さんは？」

「兄さん？ 貴女に兄は居ないでしょう？」

「そうだよ。兄じゃ無くて姉は居るけどね」

そのプレシアとアリシアの言葉に、愕然とするフェイト。

アルフも、リニスも気にした素振り無く、それが当たり前——ドウム・テストロツサという少年は存在しないといった様子だ。

「……………」

皆が食事を始める中で、フェイトは目の前にある料理を見るだけだ。

食事が喉を通らず、食欲が湧いて来ない。

「(違う……これは、夢だ。かあさんは……私にこんな風に笑い掛けてくれた事は、一度も無かった)」

自身の中にある違和感は次第に大きく強くなるのに気付き、そしてその正体をハッキリ

リと知る。

与えられたアリシア・テストタロツサの記憶の中でなら兎も角、ブレシア・テストタロツサかあさんは、失敗作自分に対しての笑顔を浮かべる事は無く、それどころかキツく当たっていた。

「(アリシアも、リニスも……今はもう居ない……)」

フエイト・テストタロツサ私 はアリシア・テストタロツサのクローン体であり、失敗作と判断された存在だった。

クローン私が居るからには、アリシア・テストタロツサは居る事は出来ない筈。

ブレシアかあさんの使い魔であるリニスも、フエイト・テストタロツサ私の教育とバルディッシュをつくり終え、それとほぼ同じ時期に消えた。

「(でも……これは……)」

これはこれで良いのかもしれない。

母親であるかあさんはアリシア・テストタロツサ同様に自分に対しても笑い掛けられて、優しく接してくれる。

リニスも消える事は無く、居てくれる。

アリシア・テストタロツサも、死んではいない。

ただ一つ、アダム・プロジェクトとプロジェクトF・A・T・Eの結果生まれたドウーム・テストタロツサが居ない事を除いて。

このまま、ここに居続けても良いのではないのだろうか。だけど……。

「ねえ、今日は皆で街に出ましようか？」

「ああ！ 良いですねえ！」

食事を終え、庭園内を5人で歩く。

足取りの軽いプレシア、リニス、アルフ、アリシアに対し、フェイトのものは重い。

「フェイトには、新しい靴を買ってあげないとね！」

「……………」

「ああっ！ フェイトばかりズルい！」

「魔導試験満点のご褒美ですよ。アリシアも頑張らないとー！」

プレシアの言葉に抗議をするアリシアだが、リニスの説明にむくれながらも口を閉じる。

「フェイト！ 今度の試験までに、補習お願い！」

「う、うん……………う……………」

「フェイト？」

心配そうに顔を覗かせて、声を掛けるアリシアとアルフ。

フェイトは思わず泣き出してしまう。

「これは……私はずっと……欲しかった時間だ……何度も、何度も夢に見た時間だ……」

皆が、家族が仲良く出来る、笑い合っている時間と空間。ただ一人が居ない事を除いては。その通りのものだった。

「眠い……眠い……」

ここは何処だろうか。

ゆつくりと瞳を開き、辺りへと軽く視線を動かそうとする。

薄ぼんやりとした視界に、目の前には紅い瞳で、綺麗な銀髪をした、スレンダーで大きくふくよかな胸を持っている。

「そのままお休みを、我が主。貴女の望みは……全て私が叶えます。目を閉じて、心静かに夢を見て下さい」

何処までも広く、静かな空間で、女性の声は反響し、頭の中に直接語り掛けて来るかのような感じだ。

目蓋も重く、その女性の言葉通りに、はやては目を閉じようとする。

拳と桃色の魔力防壁がぶつかり合う。

火花とスパークが飛び散り、周辺の魔力と空気が大きく震える。

「!?!」

砕かれたバリアは、ガラスのように四散。

急いでその場を離れるのはを追いかけようとする闇の書の管制人格だが、その間に雄介が割り込む。

「——なのは!」

【Schwarze Wirkung】

「——きゃあつ! / ぐあああつ!」

右拳に黒い魔力を纏わせ、管制人格は雄介ごとなのはを殴り飛ばす。

殴り飛ばされた2人は、荒れ狂う海の中へと落ち、海面は大きな水飛沫を立てながら波を起こす。

「この野郎っ!」

「女性だから、野郎じゃ無くて女郎と言うところだなあ!」

力と速、炎のフラグメントを使用して殴る体勢に入っているドウム。

金色に光り輝く双剣で斬りかかろうと試みる志蓮。

その2人の攻撃すらも受け止め、攻撃を返す管制人格。

「——これも駄目かよ!」

【Divine Buster】

両手からそれぞれに放出された高威力の黒い砲撃魔法によって、2人は吹き飛ばされる。

「……………」

そこに、海中からなのはと雄介が飛び出して来る。

この場に居る管制人格以外は皆、肩で息をしており、かなりの力を消費してしまっていた。

『リンディさん、エイミィさん、戦闘位置を海の上に移しました！ 市街地の火災をお願いします』

《大丈夫。今、災害担当の局員が向かっているわ》

結界魔法は、通常空間から特定の、指定した範囲の空間を切り取り、時間信号をズラす魔法だ、この魔法によって、結界内を視認及び認識したり、結界内に侵入出来るのは魔法を使用出来る者だけで、結界内で何が起きているかは理解らない。

だがこの結界が解けてしまえば、結界内で破壊されたものなどはそのまま。通常空間へと上書きされてしまう。

そういった事にならないようにするのが、災害担当の局員だ。

火災が起きているのであれば、消火行動に入る。

瓦礫が存在しているのであれば、それを除去する。

『それから闇の書さんは、駄々っ娘ですが、何とか話は通じそうです！ もう少しやらせて下さい！』

『まあ、そういう事です。唯一気になるのは、あの龍人ですね。あいつ、ずっとあそこでじっとしているだけだし……』

『妹を、フェイトも助けないと駄目だしな！』

言葉が通じ、会話をする事が出来る。

そして言葉では否定をしているが、涙を流し、痛みを感じている。

何よりも、主であるはやてを想い、彼女の意志や気持ちを、瞬間的に生まれてしまったものを叶えようとしている。

主を想い、涙を流すヒトが人で無い筈が無い。

自身の想いをぶつければ、彼女もまた同様に返してくれる。

そう信じて。

「行くよ、レイジングハート！」

〔Yes, my master. Reload〕

空になったマガジンを取り外し、カートリッジの入っている新しいマガジンを装填するなのは。

「マガジンも残り3本、カートリッジ18発……スターライトブレイカー、撃てるチャンスあるかな？」

「I have a method. Call me. Exelion mode」

そのレイジングハートの提案に、危惧をし、息をのむなのは。

「駄目だよ！ あれは本体の補強をするまで、使っちゃ駄目だつて！ 私がコントロールに失敗したら、レイジングハート、壊れちゃうんだよ！」

カートリッジシステムは、その瞬時に、そして爆発的に魔力を増大させる事が出来るものだ。

だが、その分反動は大きく、制御は難しい。

1つ間違つてしまえば大事故——デバイスは大破し、術者も大きなダメージを負う事になる。

そして「エクセリオンモード」だ。

カートリッジをロードする事でその形態へと変形させる事が出来、その分高出力となる。

だが、機体であるレイジングハートにも、なのにも耐えられる限界が存在し、その限界に達してしまうかもしれない。

その限界に達してしまうと、レイジングハートは誤爆し、自壊する可能性が著しく高い。

だからこそ、エイミーからは使用を禁止されている。

【Call me. Call me, my master】

それを理解しているからか、理解しているからこそなのか。

尚も、なのはへとレイジングハートは進言をする。

デバイスは、機械である為に、計算をして導き出された最適だと思われる解答を、提案をマスターへとする。

だからそれは、レイジングハートが導き出した勝利への道筋なのか。

機械であるにも関わらず、レイジングハートの言葉には心があるかのように熱があり、強いものが感じられた。

「何をしている、八神竜人？」

「俺は……」

発生した火災を消化している局員等とは離れたビルの屋上。

そこには、八神竜人とゾイルは居た。

家族であるシグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラが傷付けられ、募集する迄の

間、ただ見ている事しか出来なかった。

苦しみ藻掻く彼女達を……必死に抵抗しようと、一矢報いろうとしていた家族を、ただ見ているだけしか出来なかった。

「何時までそうしているつもりだ……？」

「何も……出来なかった……俺は——」

「そうだな」

「——ツク」

「だが、それがどうした？」

「——え？」

齒と唇を噛み締め、涙を流して悔しがる竜人に対して、ゾイルはあつけらかんとした態度を取る。

「何も出来なかった……。確かにそうかもしれないな。だが、それは今からの時間とは関係が無い。大事なのは、これから先だ」

「——だけどつ！ だけど、皆は……もう……」

「こういう言い方はあまり好かないが、奴等は所謂データの塊だ。なら、闇の書が無事であるなら……その守護騎士等のデータの入っている闇の書が無事であるなら、何とかなる。そうは思わんか？」

「……………!?!」

ゾイルのその言葉に、伏せていた顔を上げる竜人。

彼にとって、その言葉は暗闇に差し込んだ一筋の光のようなものなのか。

「先ずは、はやてを覚醒叩き起こすさせる必要がある。お前には辛いかもしれないが……………先ずは、あの管制人格に強烈な攻撃を与えないと駄目だ、星を揺るがす程のものを」

「管制人格……………!?!」

ゾイルが指し示すその先には、黒い翼を生やし、少年少女達と舞うように戦い続けている銀髪の女性が居る。

一瞬、ほんの一瞬だが、竜人はその女性に目を奪われた。いや、奪われてしまったよ
うな気がした。

「あれも家族だろ?」

「家族……………」

「そうだ。闇の書の管制人格なんだから、守護騎士等と同じように家族である筈だ。お前の」

「……………」

「話を戻すぞ。あの管制人格に強烈なダメージを与える。そうする事で、その衝撃ではやてを起こす事が出来る。その後は……………言わなくても、理解するな?」

「私は……何を……望んでたんやつけ？」

暗く静かな空間で、はやては思考をずる。

意識がハッキリとはしていないのか、頭の中はぼんやりとしている状態だ。

「夢を見る事。悲しい現実は、全て夢となる。安らかな眠りを」

「そう、なんか？」

ぼんやりとする意識の中で聞こえる女性の声は、赤ん坊に子守唄を唄って、寝かし付けようとしているかのように、酷く優しいものだ。

もう一度、はやては瞳を閉じ、意識が深い闇に沈みそうになる。

「私の……本当の……望みは……あたしが……欲しかった幸せ……」

街には、膨大な魔力の奔流が柱のようになり、空へ向けて昇っていく。

なのはに雄介、志蓮にドウームの4人の少年少女等と、涙で頬を濡らしている管制人格は静かに向き合っている。

「お前達も、もう、眠れ」

「何時かは眠るよ。だけどそれは、今じゃ無い。今は……はやてちゃんとフェイトちゃんを救ける……それから……貴女も！」

レイジングハートからカートリッジが排莢される。

「レイジングハート……エクセリオンモード！ ドライヴ！」

【Ignition】

なのはの掛け声と同時に、レイジングハートが変形をする。

手に握っている柄部分はそのままで、カートリッジマガジンの装填分が下部へと移動。そして先端部が白と金色の槍先となり、桃色に光り輝く翼のようなものが3枚2対の計6枚噴き出る。

「繰り返される悲しみも……悪い夢も……きつと、終わらせられる……」

【Photon lancer, genocide shift】

なのはの言葉に対し、管制人格は静かに右手を水平に上げ、魔法を使用する。

管制人格の背後に、無数のスフィアが形成される。

その数は、かなりのものでフォトンスフィア数は76基……フェイトの使用するPhoton Lancer Phalanx Shiftの倍近い数だ。

「マジかよ……」

「……何て数だ」

その圧倒的な数を誇るスフィアで、視界の殆どは奪われてしまったと言える程のもの。

静かな、とても静かでのどかだと言える空間。

鳥の囀りが、鳴き声が聞こえる中で、アリシアは草原に横たわり、フェイトは木陰で身体を休ませていた。

「——あれ？ 雨になりそうだね。フェイト、帰ろう」

流れ行く雲が白から黒いものへと変わり、空からゴロゴロといった雷らしき音が聞こえて来る。

立ち上がり、帰宅の提案をするアリシア。

「フェイトってば！」

「ごめん、アリシア……私はもう少しここに居る」

「そうなの？ じゃ、私も！」

雷の音が大きくなる。

フェイトの言葉に不思議がるアリシアだが、雨が降って来た事もあり、木陰に居るフェイトの横に座り込む。

「一緒に……雨、宿、り」

雨は盛大に振り続け、どんよりとした黒い雲が流れていく。

今の天気同様に、フェイトの気持ちも深く沈んだものだった。

「ねえ……アリシア……これは、夢、何だよね？」

「……………」

雨が振り続ける中で、フェイトの質問に対して黙るアリシア。

先程まで、疲れを知ら無いかのように元気な様子で年齢相応に笑い続けていた少女とは思えない変わりようだ。

そして、その無言は肯定と言えるだろう。

それにより、確かな確信を得る。これは闇の書が、自身に対して見せている心の中にある願望の一端なのだ。

「私と貴女は……同じ世界には、居ない。貴女が生きてたら、私は……生まれなかった」

「そう、だね」

「母さんも、私にもあんなに優しくは……」

「優しい人だったんだよ。優しくかったから……壊れたんだ……死んじやった私を、生き返らせる為に」

「うん……」

プレシア・テストロッサは一人娘であるアリシア・テストロッサを愛していた。心の底から、愛していたのだ。幸せな生活を送っていた。アリシアと飼猫のリニスの2人と一匹だけの暮らしだが、それでも十分に満ち足りていた。

だが、ヒュードラの暴走で全てが反転してしまったのだ。

暴走したヒュードラから発せられたエネルギーは想像以上のもので、アリシアとリニスの居る部屋——自宅に張っていた結界は意味も無く、中に居た一人の愛娘と愛猫は窒息死をってしまった。

発生したエネルギーは微粒子レベルの少粒であり、空気中に存在する酸素と結合し、全く別のものに変貌してしまう。

その変貌したものは有毒であり、研究所の外へと排出されたエネルギーにより酸素の無くなった部屋の中で、アリシアとリニスは窒息したのだ。幼く小さな身体では、大人であろうとも当然それに耐える事は出来ない。どれ程の苦痛だっただろうか。幸いなのかは判らないが、睡眠を取っている時だったのか、安らかな笑顔を浮かべての死だった。

愛する一人娘を無くし、唯一地獄に降りてきた蜘蛛の糸のように、自身が務めていた会社に告訴をする。が、結果は惨敗であり、逆に自身が失敗の原因という形で敗訴。そう記録を残されてしまう。

そしてそこに、外道の住人であるアカマタに浸け込まれてしまったのだ。

「ねえ、フェイト……夢でも良いじゃない？」

アリシアの提案は、耳に心地が良いものだ。

ち消した。

一時的に、彼等の目の前は白く、黒く、金色に包まれる。

「1つ覚えの砲撃、通ると思つてか？」

4つの魔力砲撃と無数の魔力弾による爆発で発生した煙が晴れると、無傷の管制人格が姿を現す。

「通す！ レイジングハートが力をくれてる！ 皆が力を貸してくれてる！ 力を合わせてくれてる！ 生命と心を掛けて、応えてくれてる！」

レイジングハートが葉莖を排莖し、なのはの魔力と気が増大及び上昇をする。

「——泣いてる娘を救つてあげてつて！」

【A, C, S, stand by】

叫ぶなのはの足元に大きな魔法陣が展開され、レイジングハートにある翼が大きくなり、広がる。

「……………」

「アクセルチャージャー、起動…… ストライクフレーム！」

【Open】

レイジングハートの先端部が開き、魔力刃が構成される。

なのはの魔力変動に対し、目を見開く管制人格。

きものだ！ 転生者である自分が言う資格は無いかもしれない……だが、他者が与える夢は、夢であつて、夢じゃ無い！ 例えそれがどんな結末であろうと、自分で動くからこそ、掴みとろうとするからこそ意味がある！ お前の言う夢は、俺の求める夢なんかじゃ無い！ 断じてだ！」

竜人の口から出て来る言葉は支離滅裂ではあるが、彼の瞳は真つ直ぐであり、真剣そのものだ。

【master】

「うん！ 行こう、レイジングハート！」

【Of course, my master】

「エクセリオンバスター、A, C, S, !」

レイジングハートから出ている6枚もの魔力翼が大きくなり、翼を構成している光は炎のように震え、揺らめく。

「——ドライブッ！」

その掛け声と同時に、管制人格へと文字通りに突っ込んで行くのは。

「させる訳、無いだろう？」

「当然だ。嫁のサポートをするのは、夫の務めだからな」

「まだ、続けているのかよ」

避けようとする管制人格の腕と脚、それぞれに鎖が巻き付き、動きを阻害している。その鎖にも、信じられ無い程に膨大な魔力が内包されている。魔法によって出されたものでは無く、この鎖も『神話型デバイス』の1つである為に、解析は出来ても、解除は出来ない。

そして、サイコネシスによって身体はその場に固定されている。

が、魔力で自身の身体を無理矢理動かしたのか。管制人格は、なのはの突撃を生み出した障壁で防ぐ。

「……！ 無茶すんな！ はやての身体だぞ！」

それを見た竜人が叫ぶ中で、なのはと管制人格はぶつかり続けている。

管制人格の障壁と、なのはとレイジングハートによるA, C, S, の魔力刃の衝突で、火花が散る。

レイジングハートから、連続で4発ものカートリッジがロードされる。

魔力翼が更に巨大化し、威力や貫通力が増加する。

「ブレイク……！」

「——まさかっ!？」

「——シューウウウウウットオオオオオオッ!!」

暫くは防ぎ続けていたが、障壁が揺らぎ始め、A, C, S, の魔力刃が障壁を通過。そ

して、管制人格に攻撃を当てる事に成功する。

魔力刃であるストライクフレームが当たると同時に、砲撃をするのはとレイジングハート。

大きな爆発が起き、なのははその爆風に従って後退をする。

「……つう……つ……（ほぼ零距离……バリアを抜いてのエクセリオンバスター直撃……これで、駄目なら）」

「無事か？　なのは？」

「うん、大丈夫なの」

レイジングハートから、膨大な魔力残滓が熱となり排出される。

至近距離での——零距离射撃であった為に、闇の書の管制人格にも相当なダメージを与えた筈だが、なのは自身もかなりの負担とダメージを受けてしまった。

痛みに顔を顰めるが、必死に耐えてみせるなのは。

レイジングハートもフレームにダメージがいつているだろうが、まだ壊れる程のものでは無く、無事だ。

【Master!】

「——!?!」

レイジングハートの警告に、顔を上げるなのはと雄介。

そこにはまだ、健在だと言える状態の管制人格の姿があった。

「もう少し、頑張らないとだね！」

【Yes】

「つたく……帰りたくなりますよ」

【Please Good luck a little more, Yusuke】

「はあ……まあ、そうだけどさ」

「あたしが……欲しかった幸せ……」

「健康な身体……愛する者達とのずっと続いていく暮らし。眠って下さい。そうすれば、夢の中で貴女はずっと、そんな世界に居られます」

目の前の女性の言葉は、どこまでも優しいものだ。

彼女の言葉通りに、眠ってしまいたい。

だが、心の中で、自分の中で何かが違うと。それは違うと言い続けている、訴え続けているのか、はやては数回程、首を横に振る。

「せやけど、それは……それは、ただの夢や……私、こんな望んで無い。貴女も同じ筈や！ 違うか？」

「私の心は、騎士達の感情と深くリンクしています。だから騎士達と同じように、私も貴

女を愛おしく想います。だからこそ、貴女を殺してしまう、自分自身が赦せない」

「——え!?!」

銀色の女性が闇の書に深く関係している人物、管制人格である事。そして、彼女の話す言葉の意味を、はやては自然と理解出来ていた。

「自分では、どうにもなら無い力の暴走。貴女も侵食する事も、暴走して貴女を喰らい尽くしてしまう事も、止められ無い」

彼女の感じている悲しみと無力感を強く共感するはやて。

はやては話す彼女を見て、瞳を揺らし下へと顔を伏せた。

「覚醒の時に、今迄の事、少しは理解つたよ。望むように生きられへん哀しさ……私にも、少しは理解る! シグナム達と同じや! ずっと哀しい想い……寂しい想いして来た……」

「……………」

「せやけど、忘れたらあかん。貴女のマスターは、今は私や! マスターの言う事は、ちゃんと聞かなあかん!」

管制人格の方へと身を乗り出し、彼女の左頬に自身の右手で優しくそつと触れるはやて。

驚きつつも拒否する事は無く、受け入れる彼女に、はやては諭すように話し掛ける。

それと同時に、はやての足元に白く綺麗に光り輝く、古代ベルカ式特有の三角形の形をした魔法陣が展開される。

「フェイトが欲しかった幸せ、みんな上げるよ」ここに繋ぎとめようと、逗らせようとしているのか。アリシアは必死に言葉を出していく。

それはとても嬉しいと思えるような事だった。

だが、ここにはドウム兄・テスタロツサんが居ない。

なのはが居ない。

皆が居ない。

「ごめんね、アリシア。だけど、私は行かなくちゃ」

「……………」

「!?!」

そのフェイトの言葉に、静かに小さな手を差し出して、開くアリシア。

その手の中には、フェイトの知る大事な相バルディッシュ棒が居た。

寂し気に、そして優しい笑顔を浮かべるアリシア。

彼女とバルディッシュを見て、必死に耐えていた筈の涙が溢れ落ちる。

フェイトがバルディッシュを受け取ると同時に、アリシアは抱きつき、それを受け入

れるフェイト。

それは抱擁と呼べるものであり、包容でもあった。

「ありがとう……ごめんね……アリシア」

「良いよ。私は、フェイトのお姉さんだもん」

確かな感触と熱を感じる。

小さな身体で精一杯に、優しく抱きしめる。

それは、今をこの瞬間を強く感じる為のもの。

この瞬間を覚え、忘れないようにする為のもの。

「待ってるんでしょ？ 優しくして強い子達が？」

「うん……」

「じゃあ、行つてらっしゃい、フェイト」

「うん……」

「現実でも、こんな風に居たかつたなあ」

その言葉を最後にして、アリシアの身体が光輝き、消えていく。

小さな身体が消失すると同時に、その熱や感触も失われる。

おそらく、この空間に居たアルフも、リニスも、フレシア・テストタロツサかあさんも同時に消えているだろ

う。

「名前をあげる。もう闇の書とか『呪いの魔道書』なんて言わせへん……私が呼ばせへん！」

はやての言葉に、覚悟に、想いの決壊が切れ、崩れたかのように涙を流し始める管制人格。

「私は管理者や、私には、それが出来る！」

「無理です。自動防御プログラムが止まりません……管理局の魔導師と竜人が戦っていますが、それでも……」

「——止まって……」

たった一言。

はやてのその一言で、外で動いていた闇の書の管制人格が——『融合事故』を起こしている八神はやての身体の動きがピタリと止まる。

「——え!？」

『外の方! えつと……管理局の方!』

その言葉に、声を聞き、なのはを始め、戦闘をしている皆がはやてが目を醒ました事に気付く。

『えつと……そこに居る娘の保護者、八神はやてです』

「はやてちゃん!」

「——はやて! 良かった……」

『なのはちゃん!?! それに、竜人兄ちゃん?!? ほんまに!?!』

「なのはだよ! 竜人さんも。いろいろあつて、闇の書さんと戦つてるの!」

『ごめん、なのはちゃん……何とか、その娘、止めてあげてくれる?』

目を醒ましたはやてと会話をしている間も、管制人格のかたちと力を奮う事の出来るはやての身体は、管理者である八神はやての命令を無視し、今にも動き出そうとしている。

『魔道書本体からはコントロールを切り離れたんやけど……その娘が走つてると、暴れとると管理者権限が使える! 今そっちに出てるのは、自動防御のプログラムだけやから!』

はやての放つたその言葉に対し、なのはは驚きのあまり目を大きく開き、瞬きをする。「(闇の書の完成後に、管理者が覚醒めてる? これなら……)」

その様子や情報はなのはやその周辺に居る者だけでは無く、未だ結界内の離れた場所に居るユーノとアルフ、そしてアースラ内の局員等にも知り渡る。

『理解り易く伝えるよ……今から言う事をなのは達が出来れば、はやてちゃんもフェイトも、外に出られる!』

「うん！」

『どんな方法でも良い、魔力ダメージでぶっ飛ばして！ 全力全開！ 手加減無しで！』
「さっすが、ユーノ君！ わっかり易い！」

ユーノからの言葉に大きく首肯しながら、なのははエクセリオンモード状態のレイジングハートを目標へと向ける。

〔It, s so〕

「シンプルイズベストってか？」

それぞれに、魔力と気を高めていき、魔力ダメージを与える準備に入る。

「エクセリオンバスター、バレル展開！ 中距離砲撃モード！」

〔All right. Barrel shot〕

カートリッジがレイジングハートによって4発ロードされる。

柄の部分が伸び、大きな魔力翼が発生し、砲撃の為の桃色の魔力がレイジングハート先端に集まっていく。

薄い魔力の渦が発生し、それが引き寄せられるようにレイジングハートの先端部に集まる。

集まっていた魔力渦が風のようになり、目標へと吹き荒れ、一時的ではあるが十字架に張り付けるかのように四肢の動きを封じる。

「夜天の主の名に於いて、汝に新たな名を送る」

暗い空間に居る2人、管制人格の濡れている頬に優しく触れながら、知識を総動員して相応しいだろうと思える言葉を思い浮かべる。

「強く支える者」

今回に於いて、最後の最後迄姿を現す事無く、陰で家族を想い、忍び耐え、力となり、支え続けてくれていた。

「幸運の追い風……」

そしてこの先、呪いの魔道書では無く、幸運を呼び寄せ、それに対して皆と彼女自身に幸運への追い風を生み出す存在となつて欲しい。

「祝福のメール——リインフォース」

願わくは、彼女に祝福を——。

かつて何度も目にし、行動をした時の庭園。

自身の記憶を読み込み、闇の書が再現したその空間の中に1人と1機。

「バルディッシュ、ここから出るよ。ザンバーフォーム、いける？」

【Yes, sir】

「エクセリオンバスター、フォースバースト！」

レイジングハートの柄最後部に小さな、次いで中位の、先端部には大きなリング状の環状魔法陣が計3つ展開される。

先端部には膨大な量と質で圧縮された魔力球が次第に大きくなり、同様に環状魔法陣が魔力球を囲うように展開する。

目標は、ユーノとアルフのチエーンバインド、ドゥームのサイコキネシスとカンダタストリング、そして志蓮の天の鎖エルキドゥによって四肢は完全に拘束され、動け無い状態だ。

「その糸は、神にしか切れない！」

「そして、その鎖は神を封じ込めるものだ！ 頑張れ、エルキドゥー！」

「あれ？ 俺何もして無くてね？」

最大まで高まりつつある桃色の魔力球。

「——ブレイクシユウウウウウオオオオオオオツツ!!」

なのはが放った下方からの砲撃、そして上空からは空間を超えて、フェイトの斬撃らしきものが動け無い目標へと直撃をする。

「——あっ!? フェイト！」

空を見ると、闇の書から脱出をしたフェイトの姿が、そこにあつた。

「新名称——リインフォース、認識。管理者権限の使用が可能になります。ですが、防衛プログラムの暴走は止まりません。管理から外された膨大な力が、じき暴れ出します」
「うん。まあ、何とかしよう」

管制人格改め、リインフォースは主である八神はやてへと現状を報告する。

取り敢えずとは言えるが、問題が解消された訳でも、無くなった訳でも無い。

何とかしよう。そう言葉にするしかない程度ものだ。

きつと2人なら、この場に居る皆で力を合わせれば何とかなる。そう思えるのだから不思議なものだ。

「行こか、リインフォース」

「はい、我が主」

闇の書——暴走プログラムである闇の書の闇を分離させた事で闇から夜天へとその機能を取り戻した魔道書を抱き、告げるはやて。

《皆、気を付けて！ 闇の書の反応、まだ消えて無いよ！》

《さて、ここからが本番よ。クロノ、準備は良い？》

『はい、もう現場に着きます』

《アルカンシエル……使わずに、済めば良いけど……》

闇の書の闇を破壊しろ　喰らえつとりブルブレイカー!!

大地が、空が、大気が大きく震え、揺れ動いている。

脱出に成功したフェイトを迎え、なのはとユーノ、アルフ、雄介、志蓮、ドウム、竜人、ゾイルの9人は、ある一点を真っ直ぐに見据えている。

そこには、黒いドームのようなものが海から浮き出ており、その全てが膨大な魔力の塊である事を理解出来た。

その魔力量はかなりのもので、リンディやエイミー、アリサとすずか達を含めたアースラ内から観ている者にもモニター越しですら威圧感と恐怖を与えてくる。

《闇の書の主、防衛プログラムとの分離、完全にしました!》

《皆……黒い淀みが、暴走が始まる場所になる。クロノ君が近付くまで、無闇に近付きゃ駄目だよ!》

「う……はい!」

エイミーからの言葉に、目の前に対して尻込みをしながらも大きな声で応えるのは。

「あれが、闇の書の闇の部分か……映像で見たものとはやはり違うな」

黒いドーム状になっている淀みを見下ろしながら、ゾイルは静かに腕を組み、考えていた。

ゾイルには、クロノやリンディよりも強く上の権限を持つてはいるが、エイミイの言葉を聞くまでも無く、動く気は全く無かった。

「(彼奴は何をしているんだ……? かなり離れた場所に居る事は理解するが、一体何をしている……いや、何を気にしているんだ……?)」

それよりも、この場に保和歩栄が居ない事を気にしていた。

「管理者権限発動……」

「防衛プログラムの進行に、割り込みを掛けました。数分程度ですが、暴走開始を遅延出来ませぬ」

闇の書の闇である暴走プログラムは、改変というよりも改悪を受けすぎた為に、管制人格や管理者権限では、最早止める事が出来ない程の状態になっていた。出来たとしても、動きなどを少し制限掛けるだけだ。

そして、今彼女達自身に出来る事は、闇の書から切り離して、その暴走するプログラムを——ウイルスと化したそれを破壊及び消去する事だけ。

「うん。それだけあったら、十分や」

ラインフォースからの報告に、頷くはやて。

この場に居るのは何人で誰が居るのかは判らないが、それでも自分やリインフォー、そして彼女等と、外に居る皆が力を合わせれば何とかなるといふ確信を、はやては何故か自然と確信のように感じていた。

「リンカーコア送還、守護騎士システム破損修復……おいで、私の騎士達」

はやての言葉に従い、彼女を囲うようにして周りに4色の小さな光が現れる。

その光が強くなり、なのは達とは離れた場所にあるビルの屋上に4つの魔法陣が展開する。

その魔法陣から、浮き出るようにして4人の守護騎士達が甲冑を纏った状態で姿を現した。

「——!?!」

なのは達の居る空中付近で、爆発に似た閃光が疾走り、そこにはやてとリインフォー、そして守護騎士達が転移をして来る。

4人の守護騎士は外側を向いており、主である八神はやてを護るようにして待機している。

「我等、夜天の主の元に集いし騎士」

「主ある限り、我等の魂、尽きる事無し」

「この身に生命ある限り、我等は御身の元にあり」

「我等が主、夜天の王——八神はやての名の元に」

姿を見せたシグナムにシヤマル、ザフィーラ、ヴィータを見て、顔を綻ばせるフェイトとなのは、そして竜人。

「リインフォース、私の杖と甲冑を」

「はい」

はやての身体を白い光が覆う。

それは、白や金の装飾が成されている黒いインナーとなり、光が弾ける。

そして、白と青の柄を持つ黒色と金色をした剣十字型の魔導杖が出現、それを掴み取る。

場を覆っていた光の壁がガラスのように砕け、弾け飛び、中からはやてが姿を現す。

「——はやてちゃん！／＼ はやて！」

はやて！／＼ はやてちゃん！

なのはと竜人の声に、すずかとアリサからの通信による音声に応えるようにして、はやては笑顔を浮かべた。

「夜天の光よ、我が手に集え！ 祝福の風——リインフォース、セエエエツトアツ

プーーツツ！」

腰に掛かるようにスカート状のローブが、上半身に白を基調としたジャケットが展開

され、それを纏うはやて。

彼女の髪の毛の色が白に、瞳の色も青へと変色をし、白色の帽子を冠る。

その全てに、黒と金色の装飾がなされている。

背中には、純粹に魔力だけで構成された黒い翼が3つ生える。

髪の色、そして瞳などは変化したが、それ以外には変化は無く、融合事故を起こして
いない事が理解出来る。

「はやて……」

「すみません……」

「あの……はやてちゃん……私達……」

「ええよ……みんな理解ってる。ラインフォースが教えてくれた。そやけど、細かい事は後や。今は……お帰り、皆……」

申し訳無さそうにするヴィータとシヤマル、謝罪をするシグナム、そしてザフィーラに心から言葉を述べるはやて。

「はやて！ はやて！」

今までの分も含め涙を流しながら抱き着くヴィータを、優しく受け止めるはやて。

「なのはちゃんとフェイトちゃん、雄介君等もごめん……家の子達がいろいろと迷惑掛けても……」

「ううん……」

「平気……」

「あ、俺等は省略すつか……」

家族の代表として、謝罪をするはやて。

そんな彼女達を受け入れ、笑顔で迎え入れる。

「竜人兄ちゃん……ただいま」

「ああ……お帰り」

互いに笑顔を浮かべるはやてと竜人。

今の竜人は Imperial Dragon fighter mode の状態ではあるが、リインフォースから聞いている為に、はやては驚く事も気にする事も無かった。

「Zustand erreicht worden ist. Es wird
ie Verriegelung zu lösen」

「——え!？」

その機械音声と共に、竜人の身体が白く輝く。

黒かった身体、そして赤く大きな翼が白く変色し、輝く。

手には、白の大剣握られている。

その総ては白銀だと言えるものであり、神々しさを感じさせる。

ただただ綺麗だという言葉が浮かび上がり、巨体であるにも関わらず味方には威圧感などといったものは微塵も感じさせなかった。

「すまない……水を差してしまうんだが……時空管理局執務官クロノ・ハラオウんだ。時間が無いんで簡潔に説明する。あそこの黒い淀み……闇の書の防衛プログラムが、あと数分で暴走を開始する。僕等はそれを、何らかの方法で止めないといけない。停止のプランが、現在2つある」

到着を済ませたクロノが、上空から降下し、合流を果たす。

「1つ……極めて強力な氷結魔法で停止させる。2つ……軌道上に待機している艦船アースラの魔導砲——アルカンシエルで消滅させる。これ以外に、他に良い手が無いか？ 闇の書の主とその守護騎士達に訊きたい……」

皆を見渡しながら自身の持つプランを提案し、他に何か無いか尋ねるクロノ。

「ええと……最初のは多分、難しいと思います。主の無い防衛プログラムは、魔力の塊みたいなものですから」

「凍結させても、コアがある限り再生機能は止まらん」

シヤマルとシグナムの説明は正しく、効果は薄い。いや、無いと言っても良いだろう。

膨大な魔力だけを凍結させるのは無理な話であり、空間を切り取って凍結させる事も

難しい。

出来たととしても、中に存在する魔力が内側から無理矢理にでも溢れ出し、凍結魔法が解除。再び暴走を開始する。それまでの時間は、数分と無いだろう。

「アルカンシエルも絶対駄目! こんなところでアルカンシエル撃つたら、はやてと竜人の家までぶっ飛んじやうじやんか!」

破損していたデータを修復した為なのか、過去に見た記憶があるのか。

腕で? 印をつくり、大きく強く否定の意志を示すヴィータ。

「そ、そんなに凄いの……?」

「発動地点を中心に……直径で1,000km規模の空間を歪曲させながら……反応消滅を起こさせる魔導砲……て言う大体理解る?」

「えつと……空間を歪曲? 反応消滅? 1,000kmつていうのもよく理解らないし……」

《反応消滅つてのはね——》

「——ア、アリサちゃん!」

ユーノからの説明に難しい言葉が出て来て、困惑をするなのは、通信で説明をするアリサ。

《ええと……1,000kmは、日本列島の半分近くかな……》

「ありがとう、さすが……」

日本列島の北端から南端迄の距離が、大体で約2,500kmとされている。その半分が挟らえたように消滅したらどうなるだろう。

そして何よりも、皆が住んでいる場所なのだ。想像だけであつてもしたくはない。

「私もそれ反対!」

「同じく! 絶対反対!」

「僕も艦長も使いたく無いよ。でも……あれの暴走が始まったら、被害はそれより、遥かに大きくなる」

反対するなのはとフェイトに対し、沈鬱な表情で言葉を返すクロノ。

「暴走が始まると、触れたものを侵食して、無限に広がっていくから……最悪の場合、この世界自体が……」

《はい、皆! 暴走臨界点まで、あと15分切ったよ! 会議結論は、お早めに!》

ユーノによる捕捉説明、そしてエイミイからの報告によつて、場の空気がより重くなる。

だが、そんな皆とは正反対に、雄介、志蓮、ドウム、ゾイルの4人はニヤニヤとした笑顔を浮かべている。

「——な、何だ君達はさつきから……何か手があるなら」

「別に……何でも無いですよ」

竜人を除いた雄介達転生者組のおちやらけた雰囲気とは反対に、必死に頭を悩ませる皆。

「——ああつ、何かごちゃごちゃ鬱陶しいなあ！ 皆でズバツとぶつ飛ばしちやう訳にはいかないの!？」

「あ、アルフ……これは、そんなに単純な話じゃ……」

意を決したというより、イライラを爆発させるかのように叫び出すアルフの言葉に、この場の空気が一変をしようとしていた。

「ズバツと……ぶつ飛ばす……」

「ここで撃つたら、被害が大きいから撃てへん……」

「でも、ここじゃ無ければ……」

頭を悩ませていた3人の少女は、妙案が思い付いたのか、顔を綻ばせる。

「クロノ君！ アルカンシエルって、何処でも撃てるの?」

「何処でもって? 例えば?」

「今、アースラに居る場所」

「軌道上……宇宙空間で!」

戸惑うクロノ等を余所に、なのはとフェイト、はやては自信満々といった風に、口に

して、宇宙へと指を向ける。

《管理局のテクノロジー、舐めて貰っちゃあ困りますなあ！ 宇宙だろうが！ 何処だろうが！》

「おい……ちよつと待て、君等……まさか……」

「これで、正解だよね？ 雄介君？」

「——ああ！ 大正解だつ！」

なのは達3人とエイミイの言葉に驚くクロノ。

場に居る守護騎士達は呆然としてしまっていた。

《何ともまあ……相変わらず、物凄いと云うか……》

《計算上では、また実現可能つてのが、怖いですね。でも……これも、彼等転生者の世界での作品に登場人物として出てる私達が成し遂げた事なんでしょうか？》

《そうかもしれないわね……》

何度も何度も計算をし直してみるが、実現可能という結果になる事に対し、ただ素直に驚嘆と感心をするしか無いリンディとエイミイ。

《クロノ君、こつちのスタンバイ、OK！ 暴走臨界点まで、あと10分！》

「実に個人の能力頼りで、ギャンブル性の高いプランだが……まあ、やってみる価値はある！ と言うよりも、これがベストなのかもしれない……異論はあるか？ ゾイル特

務執務官?」

「無い」

エイミーの報告を受け、ゾイルへと質問をするクロノ。

計算結果から出た実現可能な数字、そしてこの案を雄介達が大正解だと言った事から、クロノはこのプランの実行を決める。

「防衛プログラムのバリアは、魔力と物理の26層式。まずは、それを破る」

「バリアを抜いたら本体に向けて……私達の一齐砲撃で、コアを露出」

「そしてら、ユーノ君達の強制転移魔法で、アースラの前に転送!」

《あとは、アルカンシエルで蒸発、と……》

《上手くいけば、これがベストですね》

はやてとフェイト、なのはにリンデイがプランのお濠いをする。

先程クロノが言った言葉でもあるが、エイミーの言う通り、上手く事が運べば大丈夫だろう。

「(だが、何かが引つ掛かる……ブロンが居無いからか、それとも……)」

これだけの戦力があれば、ギャンブル性などは無く、防衛プログラムを消し去る事などは簡単に出来てしまうだろう。

だが、ゾイルの胸からは不安という2文字は消え失せなかった。

「提督、見えますか？」

《ああ、良く見えるよ》

クロノはグレアムに通信を繋げ、その様子をサーチャーを通して観えるようにする。

「闇の書は、呪われた魔道書でした。その呪いは、幾つもの人生を喰らい……それに関わった多くの人生を狂わせて来しました。あれのお陰で、僕も……母さんも……他の被害者遺族も、こんな筈じゃ無い人生を進まなくちゃいけなくなりました。それはきつと、貴方も……リーゼ達も……」

クロノの声は暗く重いものだ。

だが、クロノの瞳は、目は確かに真っ直ぐに前を見ている。見据え続けている。

「失くしてしまった過去は、変える事が出来ない」

【Start up】

「だから今を闘って、未来を変えます！」

グレアム達から受け取ったカードが、青と白の杖になり、それをしっかりと掴み取るクロノ。

《アルカンシエル、チャージ開始！》

はい！

衛星軌道上で待機をしているアースラに搭載されている大型魔力炉が唸りを上げて、

魔力を上昇させていく。

《暴走開始まで、あと2分!》

「あ……なのはちゃん、フェイトちゃん。竜人兄ちゃんに雄介君、志蓮君、ドウムさん、ゾイルさん。シャマル」

「はい、7人の治療ですね。クラールヴィント、本領発揮よ」

【Ja】

はやての言おうとしている事を察し、前に出るシャマル。

シャマルがクラールヴィントに口吻をすると同時に、魔法が発動する。

「静かな風よ、癒やしの恵みを運んで」

緑の魔法陣が展開され、なのは達7人を緑色の光が包み込んだ。

見る見るうちに、擦り傷や掠り傷、僅かではあるが流血をしていた箇所が塞がっていき。

「湖の騎士、シャマルと風のリング、クラールヴィント。癒しと補助が本領です」

「凄いです!」

「ありがとうございます、シャマルさん!」

静かな癒しの効果で、負傷した箇所は完治し、体力と魔力が回復。そして、バリアジャケットが修復された。

部分をトカゲの尻尾のように切り離す闇の書の闇。

「縛れ！ 鋼の軛！ つていやあああああああああああつ!!」

本来の鋼の軛は拘束魔法ではあるが、応用して、闇の書の闇にある触手部分を薙ぎ、斬り裂いていく。

スパッと触手が斬れはするが、再生をして、新しい触手も顔を出す。

「ちゃんと合わせろよ、高町なのは！」

「ヴィータちゃんもね！」

ヴィータの呼び掛けに、応えるなのは顔は真っ直ぐに目標を見据えながらも、嬉しそうな表情をしている。

「鉄槌の騎士、ヴィータと鉄の伯爵グラーファイゼン！」

【G i g a n t f o r m】

カートリッジが排莖され、通常の Hammer form から G i g a n t f o r m へと形を変えるグラーファイゼン。

ヴィータの魔力が増大し、鉄の伯爵がそれに応える。

「轟天、爆砕っ！」

振り上げると同時に、ハンマーヘッドがヴィータ自身の10倍近くになり、それに合わせて柄も伸びる。

その際に、なのはへと向かって来ていた多数の触手は、衝撃波に飛ばされる。

「――ブレイク……シユウウウウウウウウウウウウウウウウトオオオオオオオオオオオオーツツツツ!!」

魔力の塊である光球にチャージされた魔力が臨界に達し、4発のBusterが同時発射される。

その後に、中央にある魔力球が4発のBusterに追い付く程のスピードで発射され、合計4発もの砲撃が闇の書の闇にぶつかる。

爆発と閃光、それによる衝撃と共に闇の書の闇のバリアがまた1枚砕かれる。

「剣の騎士、シグナムが魂、炎の魔剣レヴァンティン。刃と連結刃に続くもう1つの姿」
レヴァンティンの柄頭に、鞘が引っ付き、連結をする。

光を纏い、その剣と鞘は大弓へと姿を変えた。

【Bogennform】

魔力で出来た弦を掴み、矢もまた魔力で構成する。

「掛けよ、隼!」

【Sturmfalken】

狙いを定め、真っ直ぐに放たれたそれはバリアに直撃し、爆発を起こす。

爆発と同時にバリアの1枚が粉々に粉碎した。

「出かした事は地の理では生温いかもしれんな——」

手にした三層の円柱型の剣——乖離剣を手にし、闇の書の闇を見下ろす志蓮。その3層の筒がゆっくりと回転を始める。

「——ならば、天の理しかあるまいて」

その回転は次第に速くなり、魔力を内包した疾く強力な風を起こし始める。

空气中に浮遊している魔力の大部分を巻き込んで、異常だと言える程にまで圧縮されていく。

「原初を語る。元素は混ざり、固まり……万象を織りなす星を生む——」

この剣が生み出すそれは、あらゆる生命が存在しなかつた頃の原初の地球が記録されたものだ。

地球を識るこれは、この場にいる者に遺伝子に刻み込まれている記憶から恐怖と畏怖を与える。だが、味方である皆には同時に、絶対の信頼と安心感も感じさせた。

「フハハハハハハハ！ 原初の理を知り、死して拝せよ！」

巻き起こされる殺人的な凶風と、魔力と畝る大気によつて構成されているものの余剰エネルギーである赤い帯が大きくなっていく。

「——天地乖離す開闢の星ツツ！」

放たれたそれは、膨大な現代の魔力、そして神代の魔力を含んだ真空波だ。

その姿は、最早言葉で表現をする事は出来ない。動物の継ぎ接ぎだらけ、ただの集合体と言えるような有様だ。

「何だか……凄い事に……」

《やっぱり、並の攻撃じゃ通じない！ ダメージを与えたそばから再生されちゃう！》
「だが、攻撃は通ってる！ プラン変更は無しだ！」

クロノの言葉通り、闇の書の闇を護るバリアの全ては壊し、その本体に与えようと放った攻撃は確かに通っていた。

「これなら、ブロンが来る頃には決着が着いてるだろうな！」

闇の書の様子や攻撃の通りようを見て喜ぶ雄介。

「行くぞ、デュランダル！」

【OK, Boss】

「悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて、永遠の眠りを与えよ」

クロノの足元に魔法陣が展開され、その直下から闇の書へと向けて海の水が凍っていく。

「熱吸収……」

ドゥームの足下にある海水もクロノの足下にある海水と同じように凍り始める。

辺りには氷や霰といったものが降り、低かった気温がより低く。氷点下へと一気に下

がる。

「——凍てつけ！」

【Eternal Coffin】

結界内にある海全てと闇の書の闇本体を氷漬けにする。

「——第四波動おおおおおおおおお——っつっつっつ!!!」

だが、ドゥームの放った第四波動が氷を砕くのと同時にそれらも全て解除され、大きく身体を震わせる闇の書の闇。

「行くよ、フェイトちゃん！ はやてちゃん！」

「——うん！」

なのはの言葉に、大きく、強く首肯く2人。

【Starlight Breaker】

自身の中に存在する魔力と、皆が使い終わった事で空気中に浮遊している魔力の残滓となったものを魔力へと戻し、杖であるレイジングハートの先端部へと収束させていく。

魔力と魔力は、彗星や流星のように尾を引きながら引き寄せられ、その桃色の光球は一瞬で、なのはの身体を隠す程に大きくなる。

なのはは、自身の中にあるリンカーコアをフルに廻転させて、魔力を高め、収束から

なのはからは Starlight Breaker Ex が、フェイトからは雷光を伴った強力な一撃である Plasma Zamber Breaker が、そしてはやてからはそれぞれ効果の異なる3連の魔力砲撃が放たれた。

この一瞬が、歴史が、幾つもの過去を超えて、未来の地図である神話の1ページに変わる。

絆を胸に抱き、星光の紋章を掲げ、未来に繋がる焔を振り翳して、聖なる力が放たれる。

時空を超えて刻まれて来たであろう悲しみの記憶が今、解き、砕かれた。

視界の全てを奪い去り、目を灼く程の強烈な閃光。

耳を劈く程の轟音が鳴り響く。

3人の少女から放たれたトリプルブレイカーによって、結界を壊しかねないと危惧する程の衝撃が疾走り抜ける。

これが、ゾイルでは無く、局員が張った結界であつたら、簡単に壊れてしまっていただろう。

虹色に輝く魔力の柱と輪が発生させ、大きく爆発をする闇の書の闇。

海面は大きく揺れ、海底から海水は上昇して、大きな津波となる。

[E t e r n a l C o f f i n]

海面と、波となつた海水だけが凍り付き、砕け、元の海となる。

「本体コア、露出……捕ま、えた！」

大きな爆発を起こす中で、Pendelformに変形したクラールヴィントの円形状となっている紐の間が空間を繋ぐ鏡となり、そこに闇の書の闇のコアが映し出された。

「——長距離転送っ！」

「——目標、軌道上！」

シャマルが、コアを捕まえている間、ユーノとアルフがアースラが待機をしている空の直ぐ近くへと強制的に転移させる。

ユーノとアルフの魔法陣が、シャマルの旅の鏡である鏡内にある闇の書の闇のコアを挟む形で展開され、転移が開始される。

「——転送っ!!」

《コアの転送、来ます！ 転送されながら、生体部分を修復中！ 凄い速さです！》
《アルカンシエル、バレル展開！》

アースラの下部に搭載されているアルカンシエルの先端部に、3つの環状魔法陣が展開される。

それは次第に大きくなり、前方へと移動をしていく。

真ん中に存在する一番大きな魔法陣の真ん中に、大きな魔力球が発生する。

《ファイアリングロックシステム……オープン!》

空中に、火器管制機構が浮遊するように出現する。

《命中確認後、反応前に回避します! 準備を!》

——了解!

リンディの命令を受け、チャージを続けるアルカンシエル。

アースラの大型魔力炉で生み出されるエネルギーの一部も、アルカンシエルへと流れていく。

確実に当て、忌まわしき過去の払拭。そして、未来へと向かう為に。

転移をし、地上から衛星軌道上まで上昇をし続ける途中でさえも、再生を続ける闇の書の闇のコア。

コアを覆う生体部分は、畝りながら、動きながら、巨大化し、分裂し、増殖し、巨大化し、分裂し、新しい生体部分を造り出し、巨大化し、分裂し、増殖し、増殖し。

それを何度も何度も繰り返し返していく。

火器管制機構の中にある鍵穴に、専用の鍵を差し込と、それは赤く光る。

転移を完了した闇の書の闇のコアは、既に大きさを30m近く迄取り戻している。

《——アルカンシエル、発射!》

差し込んでいる鍵を撚ると同時に、アースラ下部の管理局最大級の魔導砲であるアルカンシエルから超巨大な魔導球が発射される。

最後の抵抗だと言わんばかりに再生をし続けている闇の書の闇へと真つ直ぐに向かつて行き。

大きな爆発を起こす。

地上からも、その爆発は目視する事が出来た。

大きな爆発を起こし、爆発地点からリング状の光が4度放たれる。

《効果空間内の物体、完全消滅……》

そのエイミーからの報告を受け、皆が喜びと安堵を感じようとしていた時、異変は起きた。

《——嘘っ!?!》

《どうしたの? エイミー?》

《目標の消滅は、確認しました。しかし……ヒトのような存在が。いえ、ヒトとは全く違う存在が、突如出現!》

その報告に、祝砲を上げても可怪しくは無かった空気が一変をする。

《映像を!》

リンディに従い、アースラ内のモニターに、グレアム達の居る部屋のモニターに、そ

して、なのは等の居る場所に空間モニターが展開され、その様子が映像となって映し出される。

そこには鼠が居た。

銀色の鉄で出来た鎧を纏った、二足歩行の鼠が。

身長は5mといったところだろうか。

その鼠からは、かなりの気と魔力が放たれている。

その禍々しい気と魔力から、信じたくは無いが……信じざるを得ないが、その場に居る鼠が闇の書の闇のコアを吸収したであろう事は簡単に想像出来た。理解出来た。理解するしかなかった。

「御馳走様でした。美味しかったですよ。でも、ちょっと寂しいものですね。闇の書の魔力を得た変わりに、身体は変質して、あつちに戻れないようになってしまふなんて……これでは、三途の川の水を溢れ返させても、生きていけるかどうか……」

人語を解す鼠。

そして、三途の川の水という言葉。

その鼠が放った言葉から、はやてと竜人、そしてヴォルケンリッター等以外の皆は理解出来た。

《いけない！ 直ぐに回避運動をつ！》

そのリンディの放った言葉と同時に、ヒト型の鼠の瞳が怪しく紅く光る。そして、その鼠の掌から大きなエネルギーの塊が奔流となってアースラへと放たれる。

《——急いで!》

《——そんな、間に合わない!》

悲鳴に似たリンディとエイミイの言葉を裏切るようにして、アースラの前に大きな赤い壁が立ちはだかる。

「——アースラは墮とさせんっ!」

豪炎を壁のようにして放ち、鼠から出たエネルギーの奔流を防ぐゾイル。

だが、咄嗟の事でモチカラを使用してはい無い為に、その壁はあつという間に碎かれ、その身が奔流に呑み込まれてしまう。

「——ぐわあああああああああああああああああああああああああああああああああつっつ!!!!」

身を削り取り、焦がしていくそのエネルギーの直撃を受けて、悲鳴を上げる事しか出来ないゾイル。

「やりますね。その身で艦を守り切るとは……」

感心する鼠の視線の先には、宙に力無く浮かび、漂っているゾイルの姿があった。彼の身体は灼け溶け、見るに堪えない程のものだ。

《——直ぐに、収容を！》

「そう言えば……自己紹介がまだ、でしたね。外道衆12呪皇が1人、鉄鼠。闇の書の闇のコアの露出……お疲れ様でした」

ニヤニヤとした笑顔を浮かべているのか。顔にある髭が上へと向いて、口元が歪んでいるのが観える。

「艦を沈めるのは簡単ですが、それではつまらない。どうでしょう？ 今から、地球全体に、三途の川の水を流し込みます。私は月で待つていますので、月に来るか、それとも溢れ出した三途の川と無数のナナシ連中の相手をするか……」

その言葉と同時に、姿を消す鉄鼠。

その数秒後に、地球の彼方此方から紅い水が溢れ出て来て、そこから数え切れ無い程のナナシ連中が顔を出し始める。

《ゾイル特務執務官の収容、完了しました！》

「——艦長！」

《何かしら？ クロノ執務官？》

溢れ出した三途の川の水は止まらず、世界中を覆うようにして広がり始めている。

数時間も経てば、地球は現生物の住める環境では無くなり、外道衆等の住む死の星となってしまうだろう。

だが、今の皆には戦うだけの力が無い。

闇の書の闇のコアを露出させ、衛星軌道上に転移させた事で、力を使い果たしたと言つても言い状態なのだ。

あつたとしても、モチカラが扱えない以上、ダメージを与える事は出来無のだ。

「エリクサーだ。これを飲め」

志蓮が、ゲイト・オブ・パピロン 王の財宝から無色透明の液体の入った小瓶を人数分取り出す。

《——志蓮君!?!》

「おい! これ出したら、不味いんじゃないか? グレாம்提督達も見てるし……」

ゲイト・オブ・パピロン 王の財宝の中には、管理局が黙っている事が出来無くなるようなものが無数、収められている。

このエリクサーもそうだ。

体力と魔力オド、そして身体に出来ている傷がどのようなものであるとも、その全てを完全回復させてしまう効果を持っている。

知つてしまえば、どうなる事か。

「そんな事は、どうだって良い! 俺達にしか出来ないだろ!? これを止める事が……」

飲む事に抵抗を感じている皆に、イライラしながら叫ぶ志蓮。

「——えいつー！」

はやては、その瓶を口元に持っていき、思い切り良くその液体を口に含む。

ゴクリと喉を鳴らし、動かして流れていくそれは、食堂を通過した直後に効果を発揮した。

「——あつ、美味しい！ て言うか、凄っ！ さっきまであんなに疲れてたのに、一瞬で回復してもうた……」

はやての行動に釣られるように、竜人が、ヴォルケンリッター等がそれを飲み干す。

それと同時に、彼等が消費した魔力オドと体力の全てが回復し、顔から疲れが吹き飛んだ。

だが、シャマルは「私の役割が……ポジションが……」といった風に、少し落ち込んでいるようにも見える。

「つたく、こんな時に何やってんだ!? ブロンの奴は……」

「この場に居ない奴の事をとやかく言っても仕方無いだろ？ 今は、この状況をどうするかだ……」

この絶望的な状況に対し、体力と魔力オドを回復させたところで、世界存亡の危機的状況に変化は無い。

『——聞こえるか？ 皆？』

「——おい！　今、何処で油売ってるんだ？」

突如、皆の頭の中に直接声が響き渡る。

その声に対し、雄介はしびれを切らしたように、溜まっていたものを吐き出すように物凄い剣幕で叫び出す。

「お、ま、え、なああつ！　こんな大変な時に、何をやってやがるんですかあ、この野郎！　こつちは大ピンチだつてのに——」

『大体の状況は理解してる。今俺は、シエン……いや、界王神様んとこに居んだ。あとちよつとで儀式が終わるから、それまでの間、皆でどうにかしてくれねえか？』

「——それが出来ないから、こう言っ——」

『天照達にも救援は出してあるから、後は頼む！』

その言葉を最後にして、念話が切れた。

地球と月での同時戦闘 鉄の鼠は予想以上に強かった

「先ずは状況の整理からいこう。僕たちは闇の書の闇を撃破する事に成功した。そして衛星軌道上でのアルカンシエルを使用しての消滅を決行した直後に奴が——鉄鼠が現れて、闇の書の闇のコアを吸収して、この星を支配しようとしている」

クロノがこれまでに起きた出来事と今の状況をなどを纏めて、可能な限り分かる範囲で説明していく。

その説明に穴は無いと判断したのか、皆は静かに聴いている。

だがそこに、はやてが質問を投げかけた。

「えっと……鉄鼠がやったっけ？ その、鉄鼠が言ってたけど、外道衆って何なん？」

はやてや竜人を始め、八神家の一員、アースラにいるアリサとすずかの2人、管理局本局から観ているグレラムとリーゼ姉妹の2人は知らなくて当然だろう。

プレシア・テスタロッサ事件で初めて管理局が知った存在であり、その存在については情報統制されているのだから。

「簡単に説明をすると、ヒトならざるもの……三途の川と呼ばれている異空間で過ごして、人間界であるこちらにある隙間を通って出て来るらしいんだ。三途の川とから

離れ続けると水切れという現象を起こして、身体が干上がって、消滅するとかしないとか……」

「なら、その水切れが起きるまで待てば——」

ユーノの説明に、雄介は口を開きながら周囲を見渡してみる。

周りは、隙間という隙間から不思議なくらいに水が溢れ出てきており、紅一色だと言えるような状況になっている。

この状況で、水切れを誘うというのには無理があるだろう。

「他にも情報があるんだけど……三途の川は僕等人間が苦しんだり、不幸になると水かさが増す。彼等は昔から——古代ベルカよりも遙か昔から活動しているらしいんだ。そして、倒したりダメージを与えるには、モチカラが扱えないと……。まあ、ゾイルに頼まれてから手に入れた情報はこれくらいかな」

ユーノの言葉に、ユーノ自身も含め皆一気消沈してしまう。

自分達ではモチカラを扱うことが出来ないのだから。

ブロンやゾイルといったモチカラを扱える存在が2人も欠けてるのだ。

絶望的な状況だろうか。

「そーいや鉄鼠は今、月にいるんだろ？　なら、水切れが起こるんじゃないのか？」

「それは難しいだろう。もし水切れを起こす可能性があるのであれば、こちらへと向け

て降りてきた筈だ。だが、そうしなかった……」

闇の書の闇を吸収した事による変化なのか、鉄鼠は水切れを起こさなくなったと判断するべきだろう。

志蓮の推測を否定するシグナムの言葉に、またもや皆の心が深く沈む。

その沈んだ心の影響か、より激しく隙間から紅い水が噴出されていく。

溢れ出ている三途の川の水からは、ナナシ連中が顔を出してくる。

その中には大ナナシ連中なども存在しており、状況がより厳しいものへと変化していき。

「三途の川の水と一緒に出て来たナナシ連中をどうにかするのが先か……」

「でも、鉄鼠の方も放ってはおけないよ！」

雄介の言った通り、ナナシ連中は三途の川の水と共に世界中に出現し、人々を殺し回っている筈だ。

だが、なのはの言い分も尤もであり、鉄鼠を倒さない限り、三途の川の水は溢れ続け、ナナシ連中が暴れるだけだろう。

力の無い者は、抵抗をする暇も無く殺される。

力のある者も、抵抗虚しく、殺される。

愛する者を護る為に、前に出た者達も無惨に殺される。

必死に逃げる者も、その無防備な背中を攻撃を受け、容赦無く殺される。

この世界で生きとし生ける者達全員は、モチカラを持つてはいるのだが、扱う事が出来無い。いや……遙か昔に、扱ひ方を忘れてしまっているのだ。

その使い方を覚えていた志葉家を始めたとしたシンケンジャー達は、既にあの世にいる。

その為に、この世に生きる者達は抵抗と言える抵抗をする事が出来ずにただただ殺されるしかない。

警察や自衛隊、軍隊なども必死に抵抗しているだろうが、意味は無く、市民を守りに行く事が出来ず、それどころか自身の身すらも守るので精一杯だろう。

いや、守れずに死んでいっているかもしれない。

「確か、天照とかいう奴等が助けてくれるんだろ？　なら、そいつに鉄鼠とやりあつて貰つて、ナナシ連中を俺らがどうにかするってのはどうだ？」

「——ええ。それで良いわ」

竜人の提案をこの場に居る誰かでは無く、皆の上に居る存在が了承した。

「——あ、天照さん!?　それに、オーティンさんも!」

「やつほー、なのはちゃん!　フェイトちゃん!　元氣してた?」

絶望的状况下であろうと、天照は元氣な態度を見せ、大きな声を上げる。

大ナナシ連中達が吼える中でも、ハッキリと聞こえる程に大きく澄んだ声だ。

「オーディンの爺さん、一体どうして——」

「ブロンに頼まれて、な……」

「頼まれたって、それだけで!？」

「ああ。地球が地球が大ピンチだろ？ それに……ここで動かないと北歐神話の主神としての名が泣いてしまう」

「フェンリルに呑み込まれて死んでしまう主神様は帰って寝てろ」

「そんな、酷い……」

志蓮の言葉を聞いて、大きく長い髭も手を持つていきつて今にも泣きそうな表情になるオーディン。

「地上に居る人々や動物達は、異空間に転移させてあるわ……勿論、眠って貰ってね。だから、安心して戦いなさい。建物が壊れてしまったら、戻せば良いだけだし、ね」

「——そんな、馬鹿な……」

地球全土に居る動物達を一瞬で転移させたその魔導技術に目を見開き、驚く事しか出来ないクロノ。

それは、アースラ内に居る局員全員も同じだった。

「鉄鼠の方は、私達に任せておきなさい」

その言葉と同時に、月へと真っ直ぐに上昇していく天照とオーデイン。彼女等の姿は、一瞬で地上に居る見なの視界から消えた。

「仕方無い……皆、準備は良いな？」

クロノの確認に、首肯く現地組。覚悟は既に出来ているといった風だ。やるしか無いのだ。今動けるのは自分達だけなのだから。

「はやて、シグナム、これを」

「カートリッジ？　これがどないしたん？」

「ブロンから貰ったんだけど、これにはモヂカラが入ってるらしいから」
「私も渡しておくね」

フェイトからモヂカラの込められているカートリッジを受け取るはやてとシグナム。なのはからはヴィータが、竜人には志蓮が手渡す。

それと同時に、レイジングハートとバルディッシュから、それぞれのデバイスにモヂカラを操作する為のプログラムが送られる。

〔Ich habe fertig Laden des Programms〕
「行くうー！」

月に到着をすると同時に、鉄鼠を睨み付ける天照とオーデインの2人。

鉄鼠の方はというと月の石などを積み上げて作り上げた椅子に座り、ふんぞり返っていた。

まるで、「地球を見下ろす事が出来る自分は王なのだ」といったような態度だ。

「あの子供達が来るものかと思つてはいたが、くくつ……神様直々に顔を出してくれるとはねえ……」

「外道衆の一人、鉄鼠よ……三途の川の水を引かせ、今直ぐ自身の居るべき場所に戻りなさい」

「戻る？直に地球が戻る場所になるだろうさ」

鉄鼠の返答に、顔を顰める天照。

未だ大きな態度を取っている鉄鼠に、2人は強い敵意をぶつけざるを得ない。

「三途の川の水を、私を止めに来たのだろう？では、始めようか……神々と外道の鼠が繰り広げる神話の1ページを！神話の焼き直しを！神話の再現を！新たな神話の創造を！」

その言葉と共に鉄鼠の身体から、膨大な魔力が放出される。

膨大な魔力は黒く淀んだオーラのようであり、この月には最初から空気の無いにも関わらず、大気が震えているかのような錯覚を2人に与えて来る。

威圧感はかなりのものであり、敵意を通り越して殺意というものを明確に感じさせ

た。

「どうした？ 構え無いか？」

「私達は、最初は1人だった」

立っているだけの2人を訝しみ、構えていた拳を下ろす鉄鼠。

だが、警戒と殺意の波動はそのままであり、場を震わせる程に強い威圧感も発し続けている。

構える代わりに、天照が口を開いた。

「幾つもの人格や身体に別れたとしても、それは変わらない」

「何時までも、何処までも、我々は私だ」

「私は、我々だ」

最早意味をなさないであろう言葉を呟く2人。

そんな2人の背後に、地球から光のアーチが掛かる。

いや、アーチでは無く、光となった神々が集まって来ているのだ。

「かなりの数だな……318……2, 600……7, 708……」

増え続ける数に、数えるのを諦める鉄鼠。

それでも尚、地球から神々が集まって来る。

「私はここに居る」

数え切れない程のそれら——八百万の神々が、天照とオーディンを包み込み、一人のヒト型へと姿を変えていく。

「ほう……」

光が放たれ、それが晴れると同時に、一人の神が腕を組んだ状態でそこに立っていた。長く、燃え盛る炎のように鮮烈な印象を与えてくる綺麗な赤髪。黒と青のオツドアイ。顔の彫りが深く、かなり端正な顔立ちだ。

身体には無駄な部分だと思えるような箇所は無く、程良いと言える筋肉の付き方。黄金比に肉体、天性の肉体だと言えるだろう。

スラリとした長身であり、10mもの巨体。鉄鼠の2倍もの身長だ。

肌は白く、透き通っていると見える。

白金に神々しく光り輝く服を着込んでいる。

「誰だ？ 貴様は？」

そんなありきたりな質問をお約束のようにして放つ鉄鼠。

赤髪の男は閉じていた瞳を開き、ゆっくりと口を開く。

「俺はかつて……ヤハウエと呼ばれていた……アツラーフとも呼ばれていた……地上に降りた際にはキリストと呼ばれていた事もあった」

「……………」

「だが、俺自身に俺の名前に関する記憶などは無い。強いて言えば、それら全てを繋げてヤハウエ・キリスト・アツラーフと言ったところか」

無数に存在していた神々が一人に戻った事もあり、放たれる魔力と気の総量はかなりのもの。

闇の書の闇のコアを取り込んだ今の鉄鼠と並び立つ程のものだ。

「行くぞっ!」

「!?!」

月の大地を蹴り、一瞬で鉄鼠の側に移動をするヤハウエ。

身体の大きさの違いにより、鉄鼠が見上げるかたちになる。

「フンッ!」

右手に拳をつくり、軽く鉄鼠にぶつけるヤハウエ。

光の速さで放たれた拳は、鉄鼠の頬を抉るようにして当たり、顔を凹ませた状態の鉄鼠を吹き飛ばした。

凹んだ顔の状態で飛ばされる鉄鼠の身体は錐揉み回転を起こし、月の地面から砂を巻き起こし、大地を割りながら吹き飛んでいく。

鉄鼠が自身で身体を止める前にヤハウエは一足で追い付き、左脚で高く蹴り上げる。

無重力では無く月にも僅かだが重力は存在している。

地球とは違う環境であり、重力は弱い為に、鉄鼠の身体が落ち切るのには時間が掛かる。

「俺は地球の神だ……なら、地球で生まれ育った者等の力が扱えるのは道理であろう？」

その言葉と同時に、ヤハウエの両腕に魔力が収束されていく。

ヤハウエの身体にはリンカーコアが108も存在しており、その全てがフル廻転をしている。

掌へと向けて移動し、1つの魔力球として収束をしていくそれはかなりの魔力量を誇るが、かなりの密度に圧縮をされているのか、両方共野球ボール程の大きさだ。

「……スターライトブレイカー」

小さな2つの魔力球から極太の魔力砲撃が放たれ、鉄鼠に直撃をする。

108ものリンカーコアが生み出したその魔力砲撃の威力は、なのはが放つStarlight Breakerの318倍もの威力を叩き出す。

白銀に光り輝く砲撃は、鉄鼠の身体を押し潰すように上へと進んでいく。

空気が存在しない為か、音や爆発などといった現象が起きる事は無い。

魔力砲撃が次第に線のように細くなり、消えていく。

消えていく魔力砲撃を見ながら、ヤハウエは再び人の抱える煩惱の数と同等数のリンカーコアを廻転させる。

「スターライトブレイカー・ディフジョン」

落ちて来る鉄鼠の身体へと向けて、もう一度掌へと収束させた砲撃を放つヤハウエ。今度は拡散するように指向性を持たせており、先程とは違って鉄鼠の頭や両腕、両脚に確実に命中をする。

細く集中させた魔力砲撃によって、鉄鼠の身体に幾つもの穴が穿ち、出来上がる。

「ドラゴンフォース……」

白かった肌が鱗状になり、歯が龍牙のように鋭くなる。

背中、手首、足首には魔力で構成された薄い紫色の小さな翼が。

鱗状となった肌に、白と黒のコントラストの模様が浮き出る。

ヤハウエの身体の底から、神代の魔力であるエーテルが湧き出て来る。

「……………」

その魔力を拳に纏わせ、無言の俣、鉄鼠の身体をもう一度高く舞い上がらせる。
エーテル

それを数度と無く繰り返し、鉄鼠の身体を強く殴打していく。

殴られる度に鉄鼠の身体は大きく震え、殴られた箇所が凹んでいく。

「——何っ!？」

もう一度、殴ろうと拳を振り上げたヤハウエだが、その拳は空を切るかのように、鉄鼠の身体を通過してしまう。

「残像拳だったか……」

「ふう……治るとは言え、痛いものは痛いんですよ？ 殴られる身にもなつて下さいよ」

首を左右に動かしながら話す鉄鼠を、貫くように目を細めて見遣るヤハウエ。

鉄鼠の身体は、吸収した闇の書の闇の特性なのか。膨大な魔力がなせる技なのか。

見る見るうちに、空いていた穴が塞がり、凹んでいた部位が出っ張り、元に戻つていく。

身体を修復させれば、その分だけの膨大な魔力が消費される筈だ。

だが、鉄鼠からはそんな様子は一つも見られない。

それどころか、上昇しているような気さえ感じさせる。

「んっんうっ……馴染んで来たぞ。ああ、馴染んで来た……馴染んで来た」

「馴染むだと……？」

「そうだと……まだ取り込んでからそれ程の時間は経過していないんだぞ。それよりも、だ。見てみるよ、ヤハウエとやら。地上では、子供達が血反吐を吐きながら、頑張っているぞ！ 愉しいじゃないか！ 無理な事を必死に頑張る姿を見る事は！ 最高じゃないか！ 足掻く姿を見られるというものは！」

「……………」

「無様に泣き叫んだりするのを見るのも良いが、こういうものも良い物だなあ、ヤハウエ

！」

あからさまな挑発をする鉄鼠に対し、齒噛みして睨みながらも応えるヤハウエ。

「そうか……そうだな……完全に同意をする事は出来無いが、少し似通った考えを持っているのかもしれないな」

「んん〜？」

「必死に頑張っている姿を見るのは俺も好きだ。そして、その結果成功して、達成感に満ちている顔を見るのが好きなんだ、俺は」

だからだろうか。

何度も何度も天啓というかたちで、リンカーコアを持つヒトに対して念話で言葉を送っていた理由は。

だからなのだろうか。

無数の神々に分裂してからも、人々に無理難題を提示してやってみせろと言ったりとといった行動を取っていたのは。

「んん〜？ あんまり共感は出来無いなあ〜……まあ良い。どうした？ 掛かって来たらどうだあ？ ヤハウエ〜？」

「ならば、いかせて貰う。丁度、俺も身体が温まってきた。感を取り戻し始めてきたと言ったところだからな……」

再び大地を蹴り、鉄鼠の元へ光速で向かうヤハウエ。

だが、今回は既に鉄鼠が拳を掲げて待っていた。

「——つおらああ!!」

「——ほらほらっ!」

その1つ1つの拳や脚には魔力や気が乗せられており、無闇な破壊がなされないように、一点集中されている。

離れると同時に、ヤハウエは空間を歪めワームホールのようなものを創り出す。そこに拳だけを通過させて鉄鼠の直ぐ右に転移させ、そのまま殴り掛かる。

が、鉄鼠は空間の歪みを感じしていたのか難無く避け、ヤハウエが繰り出したその拳に自身の拳をぶつける。

ぶつかり合う拳と拳によって真空下にも関わらず強烈な衝撃波が発生する。

その波は、月の裏側で行われている戦闘の様子を観測しようとしていたアースラを揺らし、地球の大地や海、大気を震わせていた。

「——きやあああつ!」

「——何?! 何なの!?! 何が起こってるのよおおおつ!?!」

大きく艦体を揺らし続けるアースラの中で、保護されていたはずかとアリサは抱き合
い、叫ぶ。

リンデイやエイミィを始め、他のスタッフも揺れに対して、必死に身体を転ばさないように気を付けていた。

「月からの衝撃波、止まりません!」

「耐えて、としか言え無いわね……これじゃあまるで、神話の再現ね。アースラが壊れて無い事の方が驚きかしら……」

ブリッジのモニターには地上で戦い続けているクロノ等のそれぞれの姿が、そして月で戦闘の様子が映し出されている。

月で行われている神の戦いは光の速度を超えており、最早サーチャーで捕捉する事が出来ないでいる。

地上での戦闘は映し出されてはいるが、その映像の殆どが真っ赤だ。深紅に染まっている。

「——ああ、もうっ! 数が多過ぎる!」

龍人が手にしているオメガブレードは、オリジナルである Imperial Dragon Paladin Modeの持っているものとは違った点が存在している。

柄と刀身の間であるの部分に、コッキングで覆われたリボルバーユニットが搭載されているのだ。

神々しさもあり、綺麗だった白い身体と翼、オメガブレードは三途の川の水によって、
 紅く汚れてしまっている。

「Ich werde die Patrone, die die Modjika
 rafillte laden」

オメガブレードから、モジカラの込められたカートリッジがロードされる。

このカートリッジは押し潰したり、握り潰したりする事でも、込められたモジカラが
 解放され、使用する事が可能だ。

血のように紅い三途の川から無限とも思える程に出続けるナナシ連中。

出て来るのは何も、雑兵であるナナシ連中だけでは無い。

上級兵扱いであるノサカマタも同様に出て来る。

そして、それらの巨大版である大ナナシ連中や大ノサカマタもだ。

ノサカマタはシャチのような大顎を持ち、2本脚といった特徴を持っている。

「斬っても、斬っても切りが無い！」

対外道のモジカラが込められているオメガブレードを大きく振り翳す。

龍人は大ノサカマタから放たれた巨大な火炎弾を斬り裂き、そのまま大ノサカマタと
 大ナナシ連中に斬り掛かる。

その衝撃波で、ヒト同様の大きさであるナナシ連中やノサカマタは吹き飛ばされてい

月の大地を削り取り、砂を巻き起こしながら接近するそれを避けようともせず、防ごうともせず、そのまま受ける鉄鼠。

身体が上下真つ二つになってしまいが、直ぐに引き合うようにして引つ付き、傷を修復してみせる鉄鼠。

見せ付けているのだろうか。

「ちっ……」

戦闘開始から2分と経過していない。

かなりの数のやり取りを繰り返しており、その全てを当てる事には成功をしている。

だが、それらは鉄鼠に当たりはしても、明確なダメージに繋がっている訳では無く、ヤハウエの体力と気、魔力が消費をするだけだ。

鉄鼠は、そんなヤハウエを見て、嘲笑うかのように口元を大きく歪め、紅い目と長く細い髭を震わせ、腹を抱えて笑っている。

「貴様の攻撃は無意味だ」と。「貴様は無力なんだ」といった風に。

「モヂカラ……神！」

その細い指で、神の文字を空中に書くヤハウエ。

神特有のクリアな質を持つ気が、その文字の効果によって高められていく。

「やはり、貴様もモヂカラを使えるんだな」

力に溺れている訳では無く、鉄鼠はただ無邪気に、そして探究心や好奇心の俣に力を振るい続ける。

手にした力が、手にする事で大きくなった力がどれ程のものなのか。どれ位使えば、どれ位消耗するのか。

そういった疑問を解消する為に。

ヤハウエの身体に穴が空き、そこから血が噴水のように出る。

中にある内蔵はぐちゃぐちゃであり、最早機能してい無いと言える程の状態だ。だが、それは一般的なヒトであればの話だが。

「——この、野郎っ!!」

ヤハウエは地球の唯一神だ。

各地で言い伝えられ、知られている神々の全ての力を稀少技能^{レアスキル}として持っている。

例えそれが、神話で語られている程のものでは無くても、人々によつて誇張され伝わったもので無くても。

それに近いものを持っている。

「——つぐはつ……つ……う……うう……げほつ……」

鉄鼠を気合砲で吹き飛ばし、自身の身体を修復させていく。

「(流石に、分が悪いかな……体力と魔力も、気もかなり損耗した、し……)」

元々減ってしまっていた体力と気が、傷付いた身体の修復によってごっそりと減少していく事を感じ取るヤハウエ。

肩で息をしながらも、それでもヤハウエの瞳は死んでおらず、真っ直ぐ鉄鼠を睨み付けている。

「さて、どうするか……」

ヤハウエは目の前に居る鉄鼠の様子を伺い、思考する。

月の裏側である為に、太陽の陽光は届か無い。

が、月であるという事は太陽系の中。自身の力を振るう事が出来る空間だ。

天空神ホルスの力が、内には存在している。

書記の守護者であり、時の管理者でもある……知恵を司る創造神であるトトの力が、内には存在している。

愛と美と豊穰、幸運を司る女神であるハトホルの力が、内には存在している。

月と魔術、幽霊に豊穰、清めと贖罪、出産を司るヘカテーの力が、内には存在している。

狩猟と貞節を司る月の女神であるディアナの力が、内には存在している。

創造神の1人であるコニラヤの力が、内には存在している。

至高神であるイガルクの力が、内には存在している。

戦争や収穫を司る神であるヤリー口の力が、内には存在している。

それ以外にも、無数の月の力を持つ神々の力を持っている。

「だから、大丈夫……」

「ごちゃごちゃと、何を言ってるのかなあ？ ヤハウエ〜？」

「それに何よりも、神である自分が、負ける訳にはいかないんだあああつっ!!」

口元から血を流しながら、大きく強く叫ぶヤハウエ。

一度は無数に分かれた、唯一神としての誇りがある。

地球の神としての誇りが、プライドがある。

そして、愛する子供達を守らなければという義務感、使命感。言葉では表しきれない程の気持ち、激情となって身体を駆け巡る。

力を振り絞り、立ち上がる。

未来で英雄と呼ばれる事になった人々がそうであったのと同様に、目の前に存在している超えられそうに無い壁に挑みに掛かる。

「……………」

見下ろすと、見渡すと、自分の血で濡れてしまっている月面があった。

月の破片が無数も、砕かれた事で浮かび上がっている。

クレーターは、ここに来るまでと比べて倍以上の数となり、大きなものばかりだ。

「死ぬ覚悟は出来たか？ ヤハウエく？ 命乞いしても、助けはしないし、助けは来ない……まあ、救いたくても救けられないからなあ……力の差で！」

鉄鼠の言う通り、この場で鉄鼠と戦うだけの力を持っているのはヤハウエ一人だけだ。

地球上で戦い続けている子供達やアースラ内の局員等では、文字通りに手も足も出ないだろう。瞬きをするその瞬間に、殺されてしまうだろう。

「貴様は、ここで死ぬんだ！ 誰にも救けられず、誰も救けられず！ 自分の無力さを感じ、嘆き、苦しみながら！ 孤独な仮に！」

徹底的に精神を折り、砕きたいのか、鉄鼠はヤハウエへと言葉を紡ぎ続けていく。

だが、そんな鉄鼠の言葉を聞いて、ヤハウエは笑顔を浮かべてしまう。

「——ああっ!? 何で笑ってられるんだ？」

「いや別に……御託は良いから来い！ それとも、怖いのか？ 恐いのか？ 言葉だけ達者であって、向かって来ないのは恐怖を抱いているからか？」

挑発をする鉄鼠に、挑発で返してみせるヤハウエ。

だが、強がつているだけであり、ヤハウエの脚は小刻みにガクガクと震え、唇は青い。流し過ぎた血液に、消費し過ぎた体力と魔力。

限界が来ているのだ。

それでも尚、意地だけで立ち続ける地球ヤハウエの神。

「ホームグランドで負けるなんて、みっともないよな……」

ヤハウエは震える脚に活を入れ、月の大地を踏み占める。

深く深呼吸をするように、胸や肩を動かして、呼吸を整える。

気や魔力の操作によって、月面ツキでの活動をする事が出来てはいるが、それも何時迄続

くのかは理解らない。

「死ぬ覚悟は出来ているかな？ ヤハウエ？」

「死ぬ覚悟なんてしていないし、死ぬつもりは全く無い。生きて勝つ。勝って、地球に帰

る。それだけだ」

口を開くと同時に小さな気を発する。

それが、電波のようになって相手に届き、自分なりの言葉での解釈をする事になる。

鉄鼠からの言葉を受け、ヤハウエは改めて拳を握り締めて構える。

「……………」

「……………」

互いに沈黙が続く。

空気が存在していないのに、鉄鼠の身体にある鉄がぶつかり合う音が聞こえて来るよ

うな気がする。

「——ツシツ！」

「——くそつ！」

先に動いたのは、鉄鼠の方だ。

元からある能力や戦闘力に加え、闇の書の闇のコアを吸収した事で、その禍々しい迄の気が上昇し、膨大な魔力を手にした。

その結果手にした力を使い、鉄鼠はヤハウエに攻撃を仕掛ける。

「——脆い！ 柔い！ 弱い！」

ヤハウエは魔力障壁を張るが、魔力残量が少ない為に、張った壁はかなり薄いものとなった。

鉄鼠の腕は、その障壁を障子に張られた紙のように易易と貫き、ヤハウエの身体を殴り飛ばす。

「（最初は勝てると思ってたんだがな……やっぱり、私じゃ勝てないかな……せめてブロン君が到着をする迄に——）」

「——戦闘中に考え事ですか？ ……随分と余裕なんですねぇ？」

鉄鼠のその表情は、弱者を甚振るそれに近いものを感じさせる。

鉄鼠から繰り出されるその攻撃は、一撃一撃が必殺そのものであり、ヤハウエの意識を刈り取っていく。

殴り飛ばされ、月の大地を砕きながら飛んでいくヤハウエ。

最早、体勢を立て直すという力すらも湧いて出て来無い。

月面の、岩の残骸の上で力無く倒れる。

視界には満天の星空、吸い込まれそうな程に暗く黒い宇宙の闇。そして、覗き込んで来ている鉄鼠の顔だ。

「抵抗と呼べる抵抗すらもして貰え無いのですか……残念です」

鉄鼠の拳が、ヤハウエへと向けて無慈悲かつ無造作に振り下ろされた。

月の裏側での激闘 叫び覚醒する力

「漸くお出ましですか、サイヤ人……いや、転生者」

「セーフ……と言えるような状況じゃあ無いな。生きてるか？ ええつと……」

振り下ろされた鉄鼠の拳を掴み、ヤハウエへの攻撃を防ぐ事に成功する。

ヤハウエはというと、顔と唇の色は真つ青と言えるレベルであり、胸が上下する速さも尋常なものでは無い。

最早死に体、瀕死とでも言えるような状態だ。

肺と喉などがやられているのか、コヒューといったような空気の抜けていく音が聞こえないでもない。

だが、流石は神様と言うべきなのだろう。

ヤハウエの身体に出来ていた傷の全ては一瞬で塞がり、顔と唇の色は元の健康的なものに。

呼吸をする速さも、健康なヒトと大して変わらないものになる。

「好きに呼んでくれて構わない、ブロン」

「じゃあ、えつと……ヤハウエ？」

こちらの呼び掛けに、ニコリと笑顔を浮かべて応えてくれるヤハウエ。だが、直ぐに彼の表情は暗いものになる。

「すまない……どうやら俺では、私では鉄鼠に勝つ事も、止める事も出来そうにない。界王神様のところから見ていたのだろうか？」

「ああ……」

界王神界でシエンと共に居た俺は水晶からなのは達が奮闘している様子を、そしてヤハウエと鉄鼠の戦闘も観ていた。

アリサとすずかの2人が巻き込まれ、今はアースラヴォルケンリッターにおり、保護されている事。

はやてが覚醒し、募集されて消えてしまった守護騎士の4人が復活、それが何かに反応したのか竜人が強くなった事。

そして、ゾイルが戦闘不能の状態になっているという事も理解している。

地球の1神である天照やオーデインも、単体の状態であつてもかなりの力を感じさせていた。

そして、全ての神が1人に戻った事で、桁違いの力となった。取り戻したのだ。

だが、そんなヤハウエでも鉄鼠には勝てないでいる。

正しくは、闇の書の闇を吸収した鉄鼠に、だが。

古代ベルカで造り出された夜天の書は、主を変える度に改変を受け続けた。

その改変時に発生したエラーが積もり積もってバグとなり、夜天の書は闇の書になってしまったらしい。

闇の書は、無数の魔導師や他の生命の持つリンカーコアから魔力を募集し、力を暴走させて来た。

その力は、闇の書が居るその次元世界そのものを崩壊させて来たのだ。

その力の原因は、十中八九転生者の存在によるものだろう。

何らかの方法で転生者の持つリンカーコアが募集され、その次元世界が耐えられ無い程の力を何度と無く暴発して来たのだ。

そんな力を持つている鉄鼠に、どのようにして勝てば良いのだろうか。

「ハッキリ言って絶望的、だよな……」

目の前に居る鉄鼠は、動かないでいるこちらの様子を見ているだけだ。

そうであっても、鉄鼠からは常に膨大な魔力と気が放たれており、月面上の空間を歪め掛けている。

「ブロン……逃げるんだ」

「え？」

「アースラで、皆を連れて逃げるんだ……正直、恥ずかしくも申し訳無さもあるが、この際、そんなのもう意味を持たない。彼奴は桁違いだ。勝てる訳が無い。だから——」

「——だから逃げる、と。だが、断る……ってね」

この太陽系で生命が住んでいる星はこの地球だけだ。

その地球で、神様をしているヤハウエにも相当な実力がある。

そのヤハウエが弱気になっているのが見ていられなかった。

放つてはおけなかった。

「正直に言おうと、俺もブルって来てるんだよなあ……かなりの実力差だろ？ でもさあ、皆が、なのは達が頑張ってるんだ。俺も動かねえとなあ」

「ですが」

「世界を救うだなんて、御大層なセリフや目標なんていうのはねえ……でも、さ……泣きそうになってる奴とか、頑張ってる奴を放っておける訳が無いよな？」

真っ直ぐに鉄鼠を睨み付け、変身魔法を使用して20代前半同様の姿となってゆつくりと歩を進ませる。

「別れの話は……遺言は残せたか？ 転生者あ？」

「ああ。話は済ませた……後はお前を」

正直に言ってしまうと脚も内心もガクガクと、ブルブルと震えている。

恐怖を感じているからだろう。

目の前に居る奴は、今まで何度も何度も銀河系どころでは無く、世界そのものを破壊

し続けて来た存在の力を持っているのだから。

恐怖を感じていない方がどうかしているかもしれない。

だが、やはりと言うか何とか言うのだろうか。

闘志も湧き上がっているような気がしてならなかった。

戦闘民族であるサイヤ人の血が沸々と湧き上がり、ワクワクしているのだ。

「俺を倒す気か？」

「——違う。お前を殺す気だ」

鉄鼠の言葉を一蹴し、それ以上の言葉を投げ返す。

気を悪くしたのか、鉄鼠の表情は歪む。

「面白い冗談だ。お前も……いや、俺達と同じ外道の者が冗談を言うなんてなあ……い

や、だからこそか……」

「同じ外道だと？」

「そうだろ？」

鉄鼠が言ったその言葉に、今度はこちらの表情が大きく歪んでしまう。

外道と言ったのだ、此奴は。

何故、どういった理由から、どういった観点で、どういった思考で外道だと言つてのけたのか。

「確か、本来は仏教用語で、悟りを得る内道に対する言葉だったか……だが、今では道に外れた人全般をも意味するようじゃないか」

「それが、どうした……」

鉄鼠が口を開く度に、汗が出て、流れ始める。

心臓の鼓動数が倍以上に多くなり、速くなっていくかのように感じられる。

「お前達転生者は、前世だったか……今のお前達になる前に、脛齧りだったらしいじゃないか？」

「……………」

「親などの家族、親族に大きな負担を掛けて生き続ける毎日。さぞや、食事も旨く感じたのだろうなあ」

喉がカラカラと乾き始める。水分を求め、口内で発生した唾をゴクリと飲み込む。

息が苦しくなり始め、肩を上下に揺らして呼吸が大きく乱れる。

流れている血液が、冷たい水のように思えてくる。

「社会人や文明人などの枠組みや道から外れているのだ……これを外道と呼んで、他に何を外道と呼ぶんだ？」

視界が一瞬、暗転をする。

倒れ掛かけてしまうその身体を、誰かが受け止めてくれる。

「落ち着け、ブロン……奴の言葉に耳を傾けるな。必要以上に、自身を追い込む事になつてしまふぞ」

「……うあ……あ……あ……」

何時の間にか近くに来ていたヤハウエに、身体を支えて貰う。

乱れた呼吸を必死に戻そうと、努力をし、目の前の鉄鼠を睨み付ける。

「おおッ！ 怖い、怖い！ そんなに睨み付けないでくれ。でない……無性に殺したくなる……今直ぐ殺してしまうかもしれない」

場の空気が一変をする。

身体が鉛のように重く、胃や腸、口には高温で溶かされた液状の鉄が流し込まれたかのように、強烈な痛みに似た熱を感じる。

いや、熱を通り越して、冷たいという感じだろうか。

上手く言葉に出来無い。

「まあ、最初からゆっくりと捌り殺してやるつもりなんですけどね」

冗談を言ってみせたかのように、クツクツと笑う鉄鼠。

呼吸を整え終えた俺は、手を貸してくれたヤハウエに礼を言うと同時に、拳をつくり、握り締める。

「では、始めましょうか？ こちらには、闇の書の募集機能も残っているんです。貴方を

瀕死にして、そこからリンカーコアを抜き取りましょうか」

「出来ると思うか？」

「出来ますとも……先程の事を思い返して御覧なさい……貴方達転生者は皆、精神が未熟というか、子供というか……精神攻撃に弱いですからねえ」

腹を動かして嗤う鉄鼠に、思わず怒りを込めた視線を向ける。

そんな視線を感じてもいないといったふうには、鉄鼠はニヤリと目を細めた。

「そちらから、どうぞ？」

その言葉を聞くと同時に、俺は鉄鼠を殴り飛ばす。

飛んでいく鉄鼠を追い掛ける事はせず、ボロボロになったシヨドウフォンで火の文字を書く。

「参る……」

腰に下げているシンケンマルを手にして、ベルト内部に収めている秘伝ディスクを装填する。

鉄鼠へと向かって斬り掛かる。

一つ目の太刀は最速なる風の如く稲光よりも速く、二つ目の太刀は林の如く無の境地で振り翳す。

「火炎の舞！」

鐔として装填している秘伝ディスクを廻す事で火のモチカラが解放され、刀身が炎を纏う。

三つ目の太刀は、今にも世界を滅ぼさんとしている鉄鼠へと向けた永久に消えぬ烈火の如く怒りの焔を込めて

四つ目の太刀は、雄山の如く心を落ち着かせた上で強く振り下ろす。

シンケンマルに鐔として装填している秘伝ディスクを廻して、烈火大斬刀へと変える。

刀モードの烈火大斬刀に双ディスクを装填し、廻す。

「烈火大斬刀……」

自身の倍もの大きさを誇る烈火大斬刀を2振り——二刀流として持ち、構える。

魔力と気、波紋の呼吸によって生み出されるエネルギー、モチカラの4つの力で自身を強化している為、それ程苦痛を感じる事は無い。

「ほう……シンケンレッドですか」

「行くぞっ」

螺旋を描くように身体を回転させ、その勢いを利用し、烈火大斬刀で鉄鼠に斬り付ける。

鉄鼠の身体にある鉄とぶつかり合い、大きく火花とスパークを周囲に散らす。

空いている両腕で、鉄鼠はこちらを掴みに掛かろうとする。

「——ンガツ!？」

が、2振りの烈火大斬刀を地面に突き立て、両足で鉄鼠の顎を強く蹴る。

蹴り上げられた鉄鼠は、空中で姿勢を整え、こちらへと鉄の針を飛ばし始める。

「——無駄だ」

烈火大斬刀を盾にして、飛んで来る無数の鉄針を防ぐ。

烈火大斬刀の大きさは身体の倍以上もあるので、完全に防ぐ事が出来た。

だが、上に持ち上げている為に、視界が塞がってしまう。

「隙ありっ!」

視界が塞がっている事を隙だと判断したのか、鉄鼠は光速で背後を取ろうと移動をして来る。

だが、放ち続けられている膨大な魔力オドと気は簡単に感知が出来、烈火大斬刀を背後へと振り回して対応してみせる。

避けた鉄鼠が、身体を上下に回転させて、足にある鋭い鉄で斬り掛かる。

「——っちい!」

烈火大斬刀を、もう一度盾にして防ぐ。

勢い良く叩き付けられた鉄鼠の鉄足と、烈火大斬刀がぶつかり合い、月面が大きく沈

み削れる。

沈むと同時に、クレーターが出来上がり、そこに大きなヒビが入り始める。

「——おらああっ！」

力任せに烈火大斬刀を動かし、鉄鼠を振り払う。

離れた場所を着地をした鉄鼠は、余裕の笑みでこちらを覗いている。

「くそつたれ……やっぱ自分が最初から持つてるこつちの方が性にあてつるか？」

変身を解除すると同時に、手にしたシヨドウフオンで気の文字を書く。

書かれた気の文字は、身体に吸い込まれていき、気の本音が隅々に広がっていく。

「——はあ、あああああああああ——っつ!!」

自身の中の気を解放し、高める。

身体の外に白く透明なオーラが展開され、空気が張り詰める。

「おやまあ……シンケンレッドでの戦いは、もう終わりですか」

「ああ。俺にはこつちの方が向いている。いや、こつちの方が好きだからな」

言葉を交わしたその刹那、相対的に重なる幾つもの光が炸裂する。

一瞬で、ヤハウエの前から両者の姿が消え失せる。

「……み、見えん。この神の目にも……彼奴はまだ、本気じゃ無かったというのか」

拳と拳のぶつかり合う衝撃が、戦っている事を彼に教えて来るだけだ。

握り締めた拳同士がぶつかり合う度に、身体の中に激しく強い電流が疾走り抜けるような感覚に襲われ、顔を顰めてしまう。

生まれる衝撃波が月と地球を削り取っていく。

高速だった戦闘が亜音速に。亜音速から音速。亜光速から光速へと次第にエスカレートしていく。

放たれる攻撃の1つ1つも、スピードが増していく度にその速さが上乘せされて、威力は途方も無いレベルになっていく。

「なかなかやるじゃないですか……転生者」

「俺もそうだが、お前も借り物の力でよくここ迄やれるもんだな、って思えるぜ」

口元に付いている血を、拳で拭き取る鉄鼠。

俺は呼吸を整えると同時に、出来たばかりの擦り傷と掠り傷を波紋の呼吸の副次効果を使い塞いでいく。

「気付いているか？ 転生者あ？ 地球や月から離れている事に……」

「——何!?!」

鉄鼠の言葉を聞いて周囲を見渡してみると、月からかなり離れた場所に居る事に気付く。

どうやら、戦いながら移動をし、それに気付かない仮続けたいたようだ。

青い筈の地球は、三途の川の水の影響でその殆どが紅く染まり始めていた。

「見てみる。地球が赤くなつていくぞ。早く俺を倒さないと、地球は、俺達外道衆のものになる……ふふっ」

地球に三途の川の水が溢れ出るように仕向けているのは、目の前で嗤っている鉄鼠本人だ。

闇の書の闇の力を得た事で、増強されたその力を振るつて、水かさを増加させ続けている。

「参つたな。このままじゃ、何時まで経つても、勝てやしない。時間切れになつちまう」地球ではなのはが、フェイトが、はやてが、皆が頑張つてくれている。

が、ナナシ連中達を倒しているだけじゃ焼け石に水を掛けていているだけのようなもの。と言うよりも、全くの無意味であり無駄だと言えるだろう。

何とかしようと思つたら、目の前の鉄鼠を倒す他無いのだ。

「俺は、宇宙空間でも活動が出来るようになった……だがお前はどうか？ 数十分も経てば、呼吸を停止してしまうんじゃないのか？」

「（このバリアジャケットを展開している限りは、そんな心配は無いんだ）……余計なお世話だ」

道着のかたちをしたバリアジャケットを着ている自分の胸を軽く叩いてみせる。

バリアジャケットは魔力によって作成された強化服であり、魔法攻撃や衝撃や温度変化などから守ってくれる

そういった機能が働き、過酷な環境である宇宙空間でも活動出来るように調整してくれているのだ。

魔力で構成されているのだから、自身の魔力が尽きるまでは保つ。

つまり、それまでに決着を着ければ良いという話。

「はああああああああああああああっ!!」

高めた気を昇華させていく。

真つ暗だった宇宙空間の一点だけが、太陽の陽光が射し込んで来ない暗闇であるこの月の裏側から離れた場所に、光が発生する。

髪の毛が金色に変色して逆立ち、目の色は碧色になる。

身体の周囲には、青白い電撃が迸っている。

「超サイヤ人だったか……力は出して変わら無いんですね。そんな程度のパワーでは話になりませんよ」

「(潜在能力の解放をして貰ったけど……あれだけじゃ足り無いしな。使わないって決めた筈なのに、また頼っちゃったよ)……」

界王神による潜在能力の解放は本来、それだけで超サイヤ人への変身以上の力を得る

事が出来る。

そして、超サイヤ人と同じように変身しているのと同じように力を解放しているのだ。

潜在能力を開放している状態で、超サイヤ人には変身出来無い。

だが、創り出したスキルの効果で、潜在能力を解放した状態から更に超サイヤ人へ変身出来るようにした。

潜在能力を解放する事で得られる力の倍率はよくは判らないが、通常時の4万倍くらいだろうか。

超サイヤ人2に変身すると通常時の100倍の戦闘力を得る事が出来る。

つまり、通常時の400万倍の戦闘力を得ている事になる。

かなり戦闘力が上昇した筈だ。

「でも……これでも足り無いのか……鉄鼠の言葉を信じるなら、まだ……」

鉄鼠の言った通りなのか、鉄鼠から放たれている気と魔力は今の俺では勝てないと思える程に強力なものだ。

思わず握った拳に、必要以上の力を込めてしまう。

爪が食い込み、血が流れ出る。

流れ出た血液が球形になり、浮遊、移動していく。

「これでも足り無いと言ったな？ 話にならないって……ならこれはどうだ？ 真・四身の拳っ、超界王拳200倍だあああああああああああああああああああああああああああああつっ!!」

3人の分身を創り出し、4人共が超界王拳を発動する。

赤いオーラが身体に纏い付き、身体中の筋肉が大きく膨れ上がり、血管が浮き出る。

「なかなかどうして、上昇したじゃないですか……」

4に同時に、光速で移動をして鉄鼠へと向かって行く。

1人は、真正面から。

1人は、左側から。

1人は、右側から。

1人は、背後に。

4方向からほぼ同時に殴り掛かる。

「——ですが、まだ足りませんね……」

全ての拳や脚による攻撃を、ヒラリヒラリと躲し続ける鉄鼠。

突き出していた拳や脚は虚しく空を穿ち、切り裂いていく。

鉄鼠は表情を一つも変える事無く、俺の放ったその拳全てに拳をぶつけ返してくる。

そして鉄鼠は、気合砲に似た攻撃で4人の俺を吹き飛ばした。

「そして、忘れてませんか？」

一瞬で、分身の俺の1人に下から上へと向けて現れる鉄鼠。

鉄鼠は、分身の俺の腹に拳を喰らわせ、回し蹴りをしてみせた。

「ここでの戦闘をするなら、全方向に気を配らないと……敵である貴方に忠告をするなんて、俺も甘くなつたなあ」

「——ぐはっ!?!」

蹴り飛ばされた分身体はもう一体の分身体に勢い良く激突をして、口から血を吐き出してしまう。

3人の分身体が消え失せ、再びオリジナルである俺1人になる。

それと同時に超サイヤ人2状態と変身魔法が解けて、聖王としての姿を現してしまつた。

「……はあ……はあはあ……はあ……っ……うう……」

身体中が「これ以上は無理だ」と、「止めてくれ」といったふうに悲鳴を上げている。当然だろう。

身体に負担を掛ける超サイヤ人2と界王拳を両方同時に使つたのだから。しかも、界王拳の方は200倍だ。

戦闘力の差に愕然とする余裕も無く、ただただ力無く笑う事しか出来そうにない。

新しいスキルを創り出せば良いのだろうが、それだけの気力が湧いて来ない。ハッキリと言うと、諦めかけているのだ。

「そろそろ地球も、我々外道衆のものになってしまいますよ……良いんですか？」
「ぐっ……」

ここからでは、地球の様子を目にする事は出来無い。

だが、地上に居る皆が必死に抵抗をしている事だけは理解出来た。

なのは達全員の気と魔力が動いているのが感じ取れた。

「っ……だ……」

「おや？ まだやりますか？」

身体は動く。

ピクリとも動か無いのであれば兎も角、まだ力を込める事が出来、動かす事が出来る。目を閉じれば、必死に戦っている皆の様子がイメージとして頭の中に浮かび上がって来る。

モチカラの込めたカートリッジを使い果たしながらも、自身の魔力と気でナナシ連中を吹き飛ばしていくのはとフェイト、雄介、志蓮、ドウム、クロノ。

覚醒めたばかりで慣れていない筈なのに、それでも明日の為に、家族の為に戦っているはやて。

そんなはやてを護りながら、戦っているヴォルケンリッターと竜人。

彼等をサポートしながら、戦っているユーノとアルフ。

壊れてしまうのではと思える程に揺れ続け、ALERTが鳴るアースラの中で必死に祈り、応援をしているリンディ、エイミイ、アリサ、すずか、局員達。

そして、神としてのプライドをかなぐり捨て、今にも泣き出しそうな顔で、逃げるように言ったヤハウエの顔が浮かび上がる。

「へへっ……一人で戦ってる訳じゃないんだ……一人で……闘っている訳じゃ」

身体が悲鳴を上げて動か無いのであれば、波紋の呼吸によって生まれるエネルギーで痛みを和らげて、気と魔力で操作すれば良い。

気と魔力が足り無いのであれば、明日の分を捻り出せば良い。

それでも足りなければ、明後日、明々後日の分。

そのつもりで動けば良い。

寿命が縮まろうがどうという事は無いだろう。

前世で動けなかった分を今動かなく、ていつ動くというのだろうか。

「ぐっ……ぐっ……ぐっ……」

気と魔力を身体の隅々に行き渡らせ、無理矢理操縦の真似事をする。

今の俺の動きはきつと、切れかけた糸に引かれて動く操り人形のようにだろう。

「ぐがっ……がががっ……ぎい……」

サイヤ人という特典を望んでいた時から、選んだ時から……サイヤ人として転生を済ませた時からこうなる事は理解していたのかもしれない。

身体を無理矢理動かす度に、喉元を上がって口から血が出ようとするとする。

重力下であれば喉元で溜まって呼吸困難になっていただろうが、無重力である為にそうなる事は無い。

あるのは、ただの違和感と痛み、気味の悪さに加えた苦い鉄の味だけだ。

「はああ……はああ……」

「頑張りますね。諦めたらどうです?」

諦める。

その言葉を聞いて、ピクリと反応をしてしまう。

前世で何度と無く繰り返して来た行為であり、自分自身を象徴するかのような言葉だ。

そうだ、鉄鼠の言う通りだ。

諦めてしまえば良いのだろう。

地球を護る事を止めて。友達を護る事を止めて。泣き出しそうな顔をしていた人物を放置して。

太陽系に存在する全ての星に大きく影響を与え、乱れさせる。

衛星軌道上で揺れ動いていたアースラでも、その変化は感知していた。

「——な、何が起きてるの?」

「理解りません! ただこのままだと、次元断層が起こってしまう可能性がっ! ——
きやああっ!」

リンデイの叫びに似た状況確認に、エイミイも答えようとはするが、理解る筈も無く、その場にあるものに必死にしがみつく。

けたたましくALERTが鳴り続け、計器類が小規模ではあるが爆発を起こす。

「判っている事は、月の裏側で起きているものが、この事態の原因としかっ!」

「もう! 何が何なのよおっ!!」

「……………」

アリスは自身の理解の外にある状況に対してただ叫び、皆の無事を神に祈る。

激しく揺れ続けている艦体の中ですずかはずかしく立ち、祈るようにして静かにモニターを見続けている。

艦体が軋む中で、アースラ内の医務室で眠り続けていたゾイルの目が開かれる。

「ん、これは……!?」

ナナシ連中達を吹き飛ばすと同時に、月の裏側で消え掛かっていた筈の見知った気と魔力が、今度は逆に爆発的に膨れ上がるのを感じ取るクロノ。

紅色をした海面は揺れ、津波を起こす。

「地球全体が震えているようだ……一体、月の裏側で何が起こっているんだ？」

揺れ続けているのは、何もアースラや地球だけでは無い。

この次元世界そのものが揺れていると言っても良いだろう。

閻魔界でも、界王界でも。そして、界王神界でも。

「流石です、ブロンさん。この界王神界にまで、エナジーを届かせるなんて。いえ、他の人達のエナジーも届いてはいたのですが、ここまででは無かったですね……」

界王神界では、大きな揺れは起きていないが、それでも空気の流れなどは少し変わってしまっていた。

シエンの手にしている水晶には、ブロンと鉄鼠による戦闘の様子が映し出されている。

「ですが、このままでは……戦場をここに変える必要があるかもしれませんね」

だが、身体の内から不思議な位に力が湧き上がって来ている。

「（どうやら、シエンにして貰った潜在能力解放は、完全にものに出来たみたいだな……
その上で超サイヤ人3になれてるみたいだ）」

試しに、掌に気弾をつくり出して、鉄鼠へと向けて発射をする。

先程までとは比べられない程の速さで向かい命中をした。

「——この、糞猿がああああつ!!」

「おっと」

光の速度を超えた拳が飛んで来るが、それを難無く受け止める事に成功する。

止められた事に気付くと同時に、鉄鼠は距離を取り、魔力と気を混合させたエネルギー弾を発射して来る。

身体を少し撚るだけで、回避を成功させてしまった。

「……!?!」

「来いよ」

それに対して驚く鉄鼠の前に、思わず挑発をしてしまった。

悪い癖だという事は理解しているが、なかなかどうしてやってしまう。

サイヤ人の本能に根付いているのだろうかと思わせる程だ。

まあ、してしまった事はしてしまった事だ。

気を取り直して、鉄鼠へと視線を向ける。

その瞬間に、鉄鼠から先程と同様の技ではあるが連続で、先程のそれよりも速いものを発射して来る。

「――よ、避けた、だと……!? そんな筈は……」

「当ててみるよ」

もう一度、力を込めたエネルギー弾を発射して来る鉄鼠。

それが大した脅威と感ずる事が出来ず、直撃コースであるにも関わらず、じつとして待ち構える。

「……………」

「――なあ……あつ……!?」

微動だにしなかった事もあつて額に受けはしたが、予想通り大きなダメージにはならなかった。

と言うよりも、全く痛く無かった。

「世界は壊せても、たった一人の人間は壊せないようだな……」

「ふ、ふんっ……貴様の精神が脆弱である事に変わりはないんだ。そして、俺はまだ、マックスパワーを出しちやいない……今までは、ほんの3割程度でしか無いんだからな」

「例えそうであっても、俺は貴様を倒す。それだけだ」

握った拳を振り翳し、鉄鼠を殴り飛ばす。

「——うがぁ!？」

飛ばされた鉄鼠の身体は、かなりの速度を保ちながら飛び続け、月の表側へと、地球へと向かって飛んで行く。

「まだ、終わりじゃ無い!」

両手を一つの拳として握り締め、その拳で地球に向けて叩き付ける。

大気圏を突入しながら、鉄鼠の身体は堕ちて行く。

加熱されながら堕ちて行く鉄鼠は必死に体勢を整えようとするが、速さとダメージが原因なのか、そのまま大地に激突をする。

俺は上昇して落ちる速度に我が身を任せて、鉄鼠を追いかけるように大気圏を突破する。

「理解っているぞ! この程度では消滅もしないし、気も失わない筈だ! さっさと起きたらどうだ!」

「——ハハハハハハッ!!」

「——な、何!？」

倒れている鉄鼠の元へと移動を完了させ、起き上がるように口を開くと突然、鉄鼠が

嗤い出す。

「馬鹿めつ！ 三途の川の水がある場所へ落としやがったな！ お陰様で、力が回復したわ！」

「——し、しまったあ！」

「身体が変質した所為で、三途の川で回復が出来なくなっているかと思つていましたが……そんな事は無かったようですね」

鉄鼠の身体からは、最初の頃よりもより大きな気と魔力が放たれ始める。

その暴大な力の大きさに反応をしたのか空が裂け、そこから7色の光を放つ空間が見え始める。

「——く、空間が!？」

「あ、ああ……異空間が顔を出したのか。全く、焦りすぎだ」

驚き焦る俺に対して、鉄鼠はとても落ち着いている。

鉄鼠が放ち続けていたエネルギーを抑えると同時に、異空間に繋がる裂け目が閉じていく。

あのまま異空間が顔を出し続けて空に入っていた亀裂が広がっていったら、世界は崩壊していただろう。

「さて、と……続きを始めようじゃないか、転生者」

「くっ……」

倒せ、鉄鼠を！ 初めての元氣玉

両者の拳がぶつかる度に、空間が大きく揺らぎ、激しい光の明滅と音が繰り返されていく。

滑空をしていると、それに従うかのように紅い水が割れて大きな波を起こす。

「ブロン君！ 本当にブロン君なの!？」

「——お、お前等！ 逃げろっ！ 此奴は、お前等が束になっても勝てやしない!」

驚くなのは達の声が耳に届き、そちらの方へと顔を向ける。

何時の間にか、皆が同じ場所におり、俺もまたそこに引き寄せられるように移動をしてしまっていた。

後ろからは、鉄鼠が迫って来ている。

つまり、仲間である皆のところへと誘導してしまつた事になる。

「お前、その髪……」

「話は後にしろ！ 奴が来るっ!」

俺の変化に気付いて驚きを隠せないでいる皆だが、俺の方は皆を構っていられる程の余裕は一つも無い。

背後からは、化物と呼べるレベルの力を持つ存在が両手に凶器を持ちながら迫って来ているのだから。

「——うぐあ!？」

「——きやああつ!？」

一瞬で、皆が吹き飛ばされていく。

皆を飛ばしている鉄鼠の動きを、完全に捉える事が出来ていない。

「くそつ、俺の判断ミスだ……はあああああああああああああ——つ
!!」

俺は気を開放して、皆を攻撃し続けている鉄鼠へと向かっていく。

鉄鼠の方もこちらに気付いたのか、俺へと拳を向ける。

気と魔力オドの両方、そしてモヂカラを込めた拳と魔力が込められた拳がぶつかり合い、衝撃が身体を疾走り抜けていく。

痛みに耐えながらももう片方の拳で殴り、鉄鼠の方も同じように行動を取って殴り返してくる。

脚や膝をぶつけ合い、それらを拳や腕で防御するといった事を何度も何度も繰り返す。

「(一々気にはいられない、つていうかそんな余裕が無いな……気を配るのは、皆と

地球に対してだけだ)。かああ、めええ……」

「大ナナシ連中！」

「——な、何?!？」

両掌に気を溜めていると、鉄鼠が叫ぶのと同時に海中から大ナナシ連中が姿を現す。大ナナシ連中だけでは無く、大ノサカマタも顔を出して来た。

こちらの気を溜めさせないつもりだろうか。

虚を突かれてしまった事で、チャージしていた気は霧散し、鉄鼠の拳を真正面から真つ直ぐに、腹に受けてしまう。

「——ぐはっ!？」

吐血しながらも、何とか鉄鼠を視界に納め続け、気功波を放つ。

「痒い……」

たった1回手を振り払うだけで、鉄鼠はこちらの気功波を打ち消してしまう。

「も、もう1度やるつきやねえ……かああああ、めえええええ、はあああああ——」

「そんな時間は与える訳が——な、何をする?!？」

こちらが気を溜めているところに、邪魔をしようとする鉄鼠。

だが、鉄鼠の動きは皆が発動している拘束魔法で封じ込められている。

「こんなバインド、直ぐに……」

鉄鼠がそう呟くと同時に、俺の放ったかめはめ波は鉄鼠の腕の中に吸い込まれてしま
う。

「俺と同じような事を!?!」

「別に驚く事は無いだろ? 俺は闇の書の闇の力も持っているんだ……当然、募集機能
もある」

驚く雄介を目にし、嗤いながら応える鉄鼠。

リンカーコアからの魔力募集では無く、かめはめ波に込めた魔力を吸収したのだろ
う。

「Sammlung」

やけに綺麗な発音をした鉄鼠のその言葉と同時に、ユーノ、クロノ、アルフ、はやて
とリンフオース、雄介、志蓮、ドウム、竜人のリンカーコアが身体の中から飛び出
してしまふ。

それは勿論、俺も例外では無く、身体から虹色に光り輝くリンカーコアが無理矢理摘
出されてしまふ。

「……う……つう……き……貴、様……」

「言っただろう? 闇の書の機能を持っていると。Sammlung」

2度目のその言葉に従って、外に出ていたリンカーコアが鉄鼠の身体に吸い込まれて

いく。

10の光が吸い込まれていくのと同時に、その光が飛び出た時と同様の強烈な痛みが身体を疾走り抜ける。

「く、くそっ……たれ……」

リンカーコアから魔力が募集された事で、痛みが引くのと同時に大きな疲労感が押し寄せて来る。

舞空術で飛行をしているから、浮き続ける事は出来ている。

だが、彼女達2人だけは違った。

夜天の書の主として覚醒をして直後だという事、先程までずっと闇の書の闇に身を蝕まれていたはやては、今行われた募集を機に、気を失ってしまう。

ユニゾンをしていたリインフォースも同様に、魔力が限界近くまで抜き取られた事で飛行魔法が使用不可になり、1人だった状態から元の2人へと戻ったと同時に紅い海へとその身体を墮としていく。

「——はやて!?!」

助けに行こうとするヴィータ達ヴォルケンリッターだが、大ナナシ連中がそれを邪魔する。

「邪魔、すんなああああああああっ!!」

ありつただけのカートリッジを消費し、Gigant formであるグラーファイゼンで、大ナナシ連中を力の限り吹き飛ばす。

明確なダメージを与える事は出来ないが、堕ちて行くはやてとリインフォースから遠ざける事には成功した。

「——はやてちゃん！」

シヤマルがはやてを、シグナムがリインフォースを抱え、保護する事に無事成功する。が、それと同時に竜人と雄介、クロノとユーノも同様に海へ堕ち掛けるが、何とか踏み留まる。

「やはり、闇の書が1度募集した者には無意味ですか……」

残念そうな表情を浮かべてなのはとフェイトに目を向ける鉄鼠に対して、俺等は疲労困憊になりながらも、強く睨み付ける。

「お前等は、アースラへ退避しているろ」

「けどよ……」

「さっさと行け！ 俺を困らせるな！」

皆には申し訳無いが、怒鳴るようにして言葉を口にする。

近くに居て貰えたら、一緒に闘ってくれたらどれだけ心強いだろうか。

だが、そうは言っていられない程の状況だ。

そんな事は出来無い程に、強力な相手なのだ。

ハッキリと言ってしまえば、今の自分でも勝てないという事は理解が出来る。

「行くぞ、皆……シヤマル」

「だけど——」

「——私達では、役に立てない……ハッキリ言うとは足枷になってしまおうだろう」

「また……なんだね……」

シグナムの言葉を聴き、転移魔法の準備に入るシヤマル。

なのはとフェイトの2人は、非常に申し訳無さそうな、そして悔しそうな表情を浮かべている。

それは彼女達2人だけではなく、ユーノとクロノも、他の皆も同じだ。

アースラへの次元転送が開始される。

魔法陣が展開され、俺以外の皆がその魔法陣の中に居た。

「そのまま、行かせると思うか？」

だが、鉄鼠の放った言葉と魔法によってそれは妨害されてしまう。

「——なのは!!? 雄介!!?」

なのはと雄介の左胸に、大きな穴が開かれる。

2人は驚愕の表情を浮かべた俣、海中へと没した。

紅い色をしている海水だからなのか、2人の血が昇って来ている様子が見え無い。

「……よ、くも……よく、も……」

目の前が真っ赤に染まる。

肩が震え、息が激しくなり、鼓動が速くなる。

周りから発せられている声も、音も……その全てが遠くへ、聞こえなくなってしまう。

「——うわああああああああああああああああああ——つつつ！！！！」

【S i r】

真っ先に動いたのはフェイトだった。

制止しようとする相バルディッシュ棒の声は、届いていないのか、悲鳴のような叫びを上げながら鉄

鼠へと向かっていく。

だが当然、鉄鼠との実力差もあり、フェイトの攻撃は届かず、彼女は鉄鼠の攻撃を真

正面から受けてしまう。

「ごめん……なのは……」

「——フェイトオオオオオオオオオオツツ！！！」

「——テストアロツサ!!」

冷静さを失っていた事もあり、2人と同じようにして海に沈んでいくフェイト。

「——ブ、ブロン……？」

「う、うう……うわあああああああああああああああつっ
切れた。!!!!!!」

俺の体の中で、なにかが切れた……決定的な何かがブチッと切れてしまったような気がした。

真っ赤に、そして真っ暗な視界の中で、自身の身体が変異していく事だけは理解出来た。

全身から、目を灼いてしまうのではと思える程に眩い緑色の閃光が迸る。

身体に存在する内蔵以外の筋肉という筋肉が、限界近く迄肥大化及び膨れ上がっていき

く。翠色だった目は真っ白と言うよりも白目と言えるような状態になり、髪の毛もまた、金色から緑色へと変色をする。

先程までも世界を壊しかねない程に強力且つ強大な力を放っていたが、この変身に
よって更に凶悪なものに変化した。

変化に気付いたのは、志蓮と竜人、ヴォルケンリッター、鉄鼠だった。

「——な、何だ……あの変化は……？ まさか……」

驚愕と動揺の言葉を口にする鉄鼠。

鉄鼠の声は心なしか震えており、怯えているかと思えるような様子だ。

自身を制止しようとしている存在も……そして何よりも、5人を墮とした存在を壊し
たくて、破壊したくて堪らないと言った気持ちで一杯になる。

「止めろ、ブロン！ 落ち着けええっ！」

「——うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お——っつっつ！！！！」

思わず、暴走する自分を止めに来たであろう存在を殴り飛ばしてしまう。

その存在は痛みによる悲鳴を上げて、紅い海面を割りながらかなりの距離を吹き飛ば
されていく。

「……は、退がるべきなのか……？」

5人を墮とした存在の放っているであろう音は、しっかりと聴き取って判別する事は
出来無い。

だが、それがどういった意味であり、どういったつもりで口になっているのかは何故か
理解する事が出来た。

「逃が、さない……」

「——ケイジングサークル」

逃げようとする存在が、魔法を発動させ、魔力輪が俺の動きを封じ込めるように展開
される。

「こんなもので、この俺を止める事は出来ぬう!!」

力尽くでそれを破り、逃げている存在へと向けて掌から連続で魔力を込めた気弾を放ち攻撃をする。

放たれた虹色の気弾は撃ちだされると同時に散弾銃の弾のように変化し、その存在の四肢へと喰い付くように向かっていく。

「——うぐあああああ!!」

それでも尚、その存在は身体を引き裂かれるような痛みながら逃げていく。

「逃がさないよ、言った筈だあああああああああああああああ」

「——天の鎖よっ!!」

だが、金色に歪んだ空間から鎖が飛び出し、俺と俺から逃げる存在の動きを止める。

引き千切ろうと必死に身体を動かしてみるのが、千切れるどころか、ダメージが入っている様子は無い。

逆に、より一層強く締め付け、こちらの力を奪いに来ているかのように感じられる。それが癪に触り、俺はただひたすらに叫びながら身体を動かす事しか出来無い。

「落ち着け、ブロン……つつう……」

「……からは、私に任せて貰おうか」

何処から、何時現れたのだろうか。

の腹を通過する。

腕には、真つ赤な血が付着しており、その存在から流れ出る血が、海の底へと落ちていく。

「……頭を冷やせ、ブロン……お前の力は……お前の持つ力は、そんな事をする為のものじゃあ無い筈だ……お前の欲しかった力は……お前の求める力は、そんなものじゃ無いだろう？」

その存在から聴こえて来る音が、次第に小さくなつていく。

その存在が持っていた熱が急速に失われていき、冷たいものになつていく。

「お前の怒りや悲しみは尤もだ。だから、私がそれを引き受けよう……俺が持つて行く……だから」

「……………」

何時の間にか涙が頬を伝い、濡らしていた。

朱く歪んでいた視界は、何時も通り綺麗とは言えないが、鮮明なものへと戻る。耳に届いている音は、ハッキリとした声に戻り始める。

「一人で抱え込むな……家族なんだから、兄である私を少しは頼つてくれ」

「……………ま、つど……………」

「ああ……………」

掠れた声で、消えかけている声で、応えてくれるゾイル。

彼の身体を通っている俺の腕を、ゆっくりと、これ以上のダメージを与えないようにそつと彼の身体から抜き取る。

「俺、は……」

「何も言うな……大体は理解しているつもりだから」

「でも……さ……」

「確かこの世界には、あの世がちゃんとあるんだよな？ なら、そこで好きなお前の

様子を観て、笑わせて貰おう。お前から、好きなだけデータを取らせて貰おう……」

「ごふっ!？」

マツドの口から、大量の血液が吐き出される。

バリアジャケットである山吹色の道着の一部が、彼の血液で赤黒く染まる。

「感情で拳を振るうのは良い……だけど……感情に振り回されるのだけは止める……気を付けるんだ……良いな？ ブロン……」

瞳を閉じ、上下していた身体の動きは止まる。

冷たくなっていた身体は、完全に冷えきってしまい、重くなる。

発せられていた微弱な気は完全にこの世から消え去り、あの世へと瞬時に移動した事を感じ取る。

「ブロン……」

俺の身体を縛っていた天の鎖は粒子になり、ゲイト・オブ・パピロン王の財宝内部へと戻る。

声を掛けてくる志蓮に顔を向け、力無く笑顔を見せて応える。

マッドの遺体を、真つ紅に染まっている海の中へと送る。

ゆつくりと沈んでいく家族の遺体を見送り、涙を拳で拭い取る。

海が紅一色だという事もあつてか、少しと経たず、堕ちて行く身体は見えなくなる。

「ありがとう、マッド……お陰で目が醒めたよ」

ヒトを殺したのは、これで3度目だ。

1度目と2度目は、転生後に目覚めてからだ。

そして今回。

家族をこの手に掛けてしまったのだ。

ハッキリと言ってしまえば、自分を責め続けてしまいそうになる程に、罪悪感とそれによる重圧感を感じてしまう。

「転生者が1人死んだか……いや、殺したんですね」

「そうだな……」

鬱ぎ込んだまましていると、あの世から観ているであろうマッドに申し訳がたたない。

と言うよりも、笑われてしまうだろう。

嗤う鉄鼠へと目を向けて、一睨みする。

「さて、と……覚悟は良いか？ 俺は、今さつき出来た」

「Il va commencer le dispositif. Knuckle
forme」

マッドから貫っていた指輪型のデバイスが光り輝き、腕先から拳までを覆うガントレットへと変形をする。

そのガントレットには回転式のカートリッジ弾倉が備えられており、自動的に魔力と気、モチカラ、GN粒子がそれぞれ100発ずつがカートリッジに込められていき、それを読み込む。

「Toute l'énergie que je mis fin à la car
touché. Lumières saintes Saiyan, il a
t. commença à terminer」

「ルミエド・セイント・サイヤン……聖なるサイヤの光か……」

膨れ上がっていた筋肉や白目は元に戻っており、先程と見比べた場合、かなりスマー
トな印象を受けてしまうだろう。

だが、ガントレット型のデバイスを装備しているからか、腕の辺りが太く見える。
だからと言って、アンバランスだという事も無い。

肩や膝、肘部分にはプロテクターのようなものが装備されている。

「Bonjour, ma・tre. Qu'en est-il de l'humour?」

「悪く無いな……不思議だ。ピッタリと、自分の身体の一部のようだ……最初からそうであるかのように……」

縛り付けられている鉄鼠へと目を向けて、拳をつくり、構えを取る。

「デバイスからは、GN粒子だろう緑色の粒が放出され続けている。」

「開き直りですか？ 全く、これだから転生者は……」

「お前の言う通り、俺達転生者は外道なのかもしれない……」

「——何!？」

「前世では穀潰しだったし、ついさつき家族を手に掛けたからな……だが俺は今、これ以上外道に堕ちる訳にはいかない。堕ちるつもりは無い!」

鉄鼠が、自身を縛り付けていた天の鎖を無理矢理引き千切る。

千切れた鎖は粒子状になり、王の財宝の中へと転送される。^{ゲット・オブ・ハピロン}

「もし、外道に堕ち掛けようとも……外道に堕ちたとしても、きつと何とかなる……皆が止めてくれる。そこから救い上げてくれる……俺なら、そうする。だから……信じる

!」

なり、増殖していく。

身体の内側から飛び出て来るかのようにして、鉄が飛び出して、鉄鼠の身体を変えていく。

「——ド、ドウイウ事ダ？ コレハ一体!？」

鉄鼠の身体が変化を続け、内包されている禍々しい魔力が、邪悪な気が暴走を始める。それに呼応するようにして空間が歪められていき、空が割れ、虹色の異空間が再び多数の雲の間から顔を覗かせる。

「暴走……？ 自爆みたいなものか……俺の、モチカラを込めたかめはめ波を吸収したからな。まあ、当然か……」

「どうするつもりだ？ て言うかこの空、これどうなってるんだ？」

「——この気……ゾイルか」

今起きている現象の説明しようとしたその瞬間、アースラから知っている気と魔力が転移をして来るのが感じ取れる。

ゾイルだ。

「身体は大丈夫なのか？」

《そうだよ！ あんなにポロポロだったんだから、もう少し休まないと——》

「——気にする事は無い。見ての通り、傷はもう一つも無い」

こちらの質問に、エイミーも同意をする。

だが、自身の傷一つ無い身体を見せるゾイル。

ゾイルの身体は鉄鼠の攻撃を受けて、焼け爛れていたと言える状態だった筈なのだ。そんな状況から直ぐに回復をしたという事は驚きを隠せずにいられない。

だが、そんな事が無かったかのような健康体と呼べる身体状態になっている。

寧ろ、それまでと比べてより強固と言うよりもガツシリとした身体になり、放たれている気は比べ物にならない程に上昇しているように感じさせる。

「それよりも、だ……この裂けた空から見えている異空間、と言うより亜空間をどうにかしないと……」

「また、同じ事を繰り返す必要があるのか……?」

大きく溜め息を吐きながら、志蓮は金色の剣の形をした神話型デバイスを手にする。

鉄鼠から放たれている膨大且つ強力、暴力的な程に強大な魔力と気の大きさと量によつて空間が歪められた故に出て来たものだ。

それを、顔を覗かせている亜空間に繋がる箇所を塞ぐには、鉄鼠に理性を取り戻させるか、鉄鼠の放ち続けているそれらよりも大きな力を放つ必要がある。

「ぼ、僕達も手伝おう」

「いや、お前達はアースラに、なのはと雄介、フェイト、ドゥーム、はやてとリインフォー

ス、竜人の7人を連れてアースラに戻ってくれ」

「これは、俺達転生者が招いた結果だ……だから」

予想ではあるが、転生者の誰かが侍戦隊シンケンジャーに出て来るモチカラを特典として手にして、この世界に外道衆が出現したのだろう。

もしこの考えが合っているなら、俺達も例外では無いだろう。

現に、この世界には界王神達が存在しているのだから。

「だが……」

魔力が募集され、消耗した状態での戦闘は避けるべきだろうが、相手や状況がそれを許しはしないだろう。

募集されずに居たゾイルと、魔力などの供給可能なデバイスを持つ志蓮と俺の3人なら問題無く戦闘出来る。

そういった考えからクロノの言葉を一蹴しようとしてしまいそうになるが、その言葉を呑み込む。

「5人をアースラへと連れて行った後に、手伝ってくれ」

「理解った」

こちらの言葉を理解と了承をしたのか……クロノとユーノ、そして^{ヴォルケンリッター}守護騎士の計10人は、アースラへ転移をした。

裂けている空から、目の前で未だに姿を歪なものへと変え続けている鉄鼠に視線を向ける。

地獄に存在している針の山のような姿に変わり果てた鉄鼠を目にして、思わず哀れみと憐憫のような気持ちを抱いてしまう。

「さてと……やりますか」

「ああ……アルティミット・バインド」

「I am the bone of my sword」

ギシギシと音を立てながら動き続ける鉄鼠の身体に生えている無数の鉄柱。

鉄鼠の身体に生えている鉄柱に、バインドから動きを封じ込める為に縛と束というモヂカラが流れ込む。

それによって、全ての鉄柱が1つに纏め上げられる。

内側からそのバインドを破ろうとしているのだろうか、大きな音が鳴り響くだけであり、全く破れる気配は無い。

「Steel is my body, and fire is my blood.

I have created over a thousand blades.

Unknown to Death. Nor known to Life.

Have withstood pain to create many wea

pon's. Yet, those hands will never hold anything]

辺り一面が——空間が歪み始め、切り取られていく。

王ゲット・オプ・バビロンの財宝内に貯蔵されている神話型デバイスの魔力が同時且つ一気に解放され、志蓮オドの魔力を底上げしていく。

一定の座標間を捕捉し、そこに王ゲット・オプ・バビロンの財宝の宝物庫とは違う空間へと塗り替えていく。

「So as I pray, Unlimited Blade Works」

志蓮のその言葉が——詠唱が終了すると同時に、一定範囲の空間が別のものへと完全に化する。

その空間は、燃え盛る炎と、無数もの剣が大地に突き立っている荒野であり、空には巨大な歯車が浮かび回転している。

突き立てられている無数の剣からはジュエルシード21個分の魔力が赤子にすら思える程の魔力が発せられている。

見方によってはとても寂しい空間であり、面白い空間でもある。

「王ゲット・オプ・バビロンの財宝……」

志蓮の背後の空間が歪み、金色の光が周囲をより一層明るく照らす。

その光からは、剣や槍、斧などの神話型デバイスが顔を覗かせている。

そしてその光は、鉄鼠の身体を囲うように移動をする。

固有結界を展開するのには、膨大な魔力オドが消費されてしまう。

空気中に浮遊している魔力マナを吸収して、リンカーコア内で魔力オドと一緒に方向性を持たせて放出しようが、それだけでは展開すらも出来無い程だ。

志蓮個人の持つ総魔力量は平均値の7倍と多い部類に入るが、それでも足り無い。リンカーコアから魔力が募集されてしまった状態なら、尚更だ。

だが、宝物庫内に存在しているデバイスから魔力供給を受ける事が出来、それによって固有結界を展開出来るようになるのだ。

「――射出っ」

顔を覗かせていた武器の全てが、無限アンリミテッドブレイドワークスの剣製内の刀剣類全てが鉄鼠へと向けて光速で放たれる。

鉄鼠の身体は鉄で構成されてはいるが、射出された武器の全ては膨大な神代エーデルの魔力が込められており、気と魔力マナ、魔力オド、モチカラが込められており、簡単にその身体を斬り裂き、貫いて傷付ける。

「あーら、バインドが切れてしまったか……すまない……すまない……バインドを斬ってしまったって、すまない……」

「2の目か何か、か……？」

「やっぱ、そう簡単にはいかないよな」

ヒト型の鼠だった姿から、針の山へ。そして、そこからも大きく姿を変える。

鉄鼠の姿はヒト型へ戻る。

身体の骨組みが丸見えであり、その全てが金属で構成されている。1つ1つの金属は常に流動しており、その全てに生命があるかのようだ。

身体の大きさはそう……目測で大体160cmと小さくなっている。

「助かりましたよ。貴様達のお陰で、俺はこうして意識を取り戻す事が出来た。ほんの少し力が小さくなったが、気にする事は無い程度……お礼に殺してやろう」

その言葉と同時に、鉄鼠の腕がゾイルの方へと向かって伸びていく。

鉄で出来ている身体の筈なのに、それが伸びている事に驚きを隠せない。

「成る程……かなりの速さだ。だが」

ゾイルの生命エネルギーが、彼の背後にヒト型となって現れる。

「パワーアップをしたのは、何もお前だけじゃ無い」

その幽波紋が、鉄鼠の腕を殴り飛ばして、攻撃方向を逸らす。

その黄金の幽波紋から繰り出された拳には、それ程の力は込められてはいない。

どちらかと言うと、鉄鼠が繰り出した腕による攻撃を逸らしたというべきなのだろう

か。

悪意や敵意そのものを、ゾイルに対して働くそういったものを完全に無効化しているのではと言える様子だ。

その現象を目にし、「信じられない」といった風とまではいかないが、訝しむ鉄鼠。

「貴様達外道衆に、幽波紋^{スタント}の効果はそれ程働かない……無意味だという事は理解している。だが、俺が出している幽波紋^{スタント}は、貴様を攻撃した訳では無い」

不思議がる鉄鼠に対し、静かに応えるゾイル。

瞳の方もまた、彼の放つ言葉と同じく静かなものだ。

「お前のターンは終わったよな？ なら、次はこちらのターンだ！ その心臓、貰い受けるっ！ —— 刺し穿つ^イ死棘^ホの槍^グツツ!!」

背後の空間を金色の光で歪ませ、その中から朱色の魔槍を手にする志蓮。

その真名を解放すると同時に、神話型デバイスである刺し穿つ^イ死棘^ホの槍^グが、鉄鼠の心臓に当たる部分の座標を探し当てる。

槍先だけが鉄鼠の心臓の中に転移すると同時に、残された槍の柄部分が槍先の場所に引つ張られるように移動をし、槍先と柄が再び引つ付けて元の槍になる。

三途の川の水と同じ赭色の血を流しながらも、その槍を自身の手で抜き取る鉄鼠。

「——ちっ……コアを破壊しても駄目か」

その志蓮の言葉通り、貫かれた筈の鉄鼠の心臓は即座に修復する。

鉄鼠の身体を構成しているコアは、心臓では無いようだ。

「——ンバツ!!」

鉄鼠の鉄掌から、放射状に漆黒のエネルギー波が放たれる。

その中には無数の鉄破片が紛れており、避けようとするゾイルを除いた俺達2人の身体に無数の傷を付けていく。

「——暗弱！」

あんじやく

「闇弱！」

あんじやく

「怯弱！」

きようじやく

「虚弱！」

きよじやく

「孤弱！」

こじやく

「柔弱！」

じゆうじやく

「惰弱！」

だじやく

「軟弱！」

なんじやく

「薄弱！」

はくじやく

「貧弱！」

ひんじやく

「羸弱！」 るいじやく 劣弱！ れつじやく 弱い、弱い、弱ああああああ

「い————ツツツ!!!」

骨にヒビが入る。骨が割れる。骨が碎かれる。

内蔵に傷が付く。内蔵に穴が空く。内蔵が破裂する。

鉄鼠によって身体中が、これでもかと言わんばかりに殴り付けられていく。

『ゾイル、志蓮……時間を稼いでくれないか?』

『どういいうつもりだ?』

『元気玉を使う』

その一言だけで十分だった。

ゾイルと志蓮の2人は、鉄鼠へと向けて攻撃を開始する。

俺は両腕を空へと高く上げ、周りに居る気を持つ存在へと語り掛ける。

「(この地球でまだ生き残っている者達よ、海よ、大地よ、空よ、空気よ……地球外に居る生命ある皆……頼む。ちよつとずつだけで良いから、元気を、気を分けてくれ)」

目を閉じ意識を集中させる事で、太陽系に存在している生物達の気を強く感じ取る。

サーチャーも固有結界内に存在しているお陰なのか、アースラからでもその様子を観る事が出来た。

モニターには、腕を上げ続けながらじっとしているブロンの姿が映し出されている。

「な、何をしているのかしら?」

「じっとしてたら、唯の的になっちゃうよ」

「志蓮とゾイル、さん? の方はどうなってるのかも理解らないし……」

モニターに映し出されているのはブロンだけであり、その映像を観ている皆は心配し、祈る事しか出来ない。

自分出来る事を探してみるが、今のところ——現状では何も出来ない事が悔しく、歯噛みして。

「(良いぞ……その調子だ。ドンドン増えろ……もう少しだから頼む……)」

微量な、雀の涙と呼べる程のものだが、気がゆつくりと両掌へと集まっていく。

その集まって来る気は、温かく、生命の証である事を教えて来る。

集まって来る気は次第に大きくなっていき、固有結界を強く照らし始める。

「ゴールド・エクスペリエンス・アルティメット・レクイエム」

長つたらしく言い難い名前をしたゾイルの幽波紋（スタンド）——黄金の風が奏でる鎮魂歌は鉄鼠が放つ攻撃を無力化して、本体であるゾイルを、そして俺を同時に護ってくれている。だがそれでも、全ての攻撃を防げているという訳ではない。

【GN field】

GN粒子を消費し、張り続けているGNフィールドが、ゴールド・エクスペリエンス・アルティメット・レクイエムが対処仕切れないでいる攻撃から俺の身体を護ってくれており、辛うじてダメージを負わずに済んでいる。

「（まだ足り無い……）カートリッジ、ロード!!!」

【Il va li re l'ense mble de la cartouche.
Cartouche magie, la cartouche de gaz,
mod·le cartouche Djikara, ondule cartou
che, cartouche de particules GN …… 100
tirs vautre li re·taite!!!】

俺の叫びに応えて、搭載されている全てのカートリッジをロードする。

無茶な事であり、無理をしている事は理解出来るが、必要な分が足りず、スキルを創り出す余裕も無い。

「……王律鍵バヴール」

その光の中から、金色に光り輝く巨大な鍵のようなものを取り出す。

それは独りずに動き、何かの鍵が解除される音が鳴る。

その音と同時に、志蓮の背後は、金色の光の変わりに赤色の光が浮かび上がり、模様を描いていく。

志蓮は刺し穿つ死棘の槍を王の財宝の中に入れ、背後の空間を金色の光で歪める。

そしてもう一度空間が黄金に歪み、折神の全てが姿を現して、鉄鼠を攻撃していく。

折神は、モチカラの塊だと言える存在であり、外道衆である鉄鼠の身体に明確なダメージを少しずつだが、確実に与えていく。

「……つつう……もう、沢山だあああつつ!!! お前等を相手するには飽きたし、これ以上やり続けるとこの星が壊れてしまう。いつその事、壊してやろう!! そうだ! この訳の理解らない空間ごと地球を破壊してやるっ!! 何もこの星や世界に拘り、固執する必要は無いのだからなああああつつ!!!」

攻撃を続けながら上空へと飛翔し、背中から新しく別の鉄腕を創り出す鉄鼠。

「おいおい、こんな状況にも関わらず……」

「マジかよ……元氣玉は悪の気を持っているような奴は触れない筈だろ」

「……………」

驚きを禁じ得ないでいる雄介と俺。

そんな2人に対し、内心の方は理解らないが、冷静な様子を見せるゾイル。

元氣玉の攻撃を耐えながら、鉄鼠は鉄爪を俺達3人それぞれへと向けて伸ばしていき。

だが、鉄鼠の身体は元氣玉に呑み込まれるのと同時に、溶けるように鉄爪も消失する。

「——な、何だ!? 何だ、それはああああああ!?」

鉄鼠が驚愕に表情を歪め、こちらを睨んで来ている。

それと同時に力が抜けたように鉄鼠の身体が地面へと深く沈み、元氣玉に呑み込まれていく。

爆風と共に閃光が疾走り、それに耐え切れ無かったのか、固有結界が崩壊を始める。

強烈な風と光が治まると同時に、鉄鼠が姿を現す。

「——、これでも、駄目なのか……?」

「こや……」

無駄に終わってしまったのではと思えたが、元氣玉は、確かに鉄鼠にダメージを与え

ており、鉄の身体は誘拐し、ボロボロになっていた。

赤く、白く変色をさせて融解を続けている身体を動かして、鉄鼠は赫の瞳でこちらを射抜くように観ている。

「やって……くれました、ね……」

「お別れだ、鉄鼠」

鉄鼠の身体は、その機能を確実に停止仕掛けている。

放たれ続けていた膨大且つ強力で禍々しく歪な魔力と気は、既に消えかけている。

「まあ、良いでしょう……最後に、1つ……」

溶け、そして崩れ続けている身体で、途切れ途切れに言葉を口にする鉄鼠。

その言葉は呪詛のようだ。

「——自分というものを失う恐怖を味わいながら、仮初の平和の中で暮らし続けていくと良い」

盛大に、呪うようにして大きく口を開きながら嗤い続ける鉄鼠。

鉄鼠の身体と魔力や気の全て、そして魂が消滅をしても、その嗤い声だけは少しの間、耳の中を反響し、こびり付くように残り続けた。

夜天の書に残されたバグを消去しろ 戻る平和と未来への不安

「やはり……破損は致命的な部分にまで至っている」

鉄鼠を倒す事に、そして消滅させる事に成功した俺達はアリサとすずかの2人を乗せたまま、アースラで管理局本部へと次元航行を開始。

到着後に、意識を失っているはやてを本局にある医務室へと連れて行った。

なのはとフェイト、雄介の3人はあれから直ぐ、ドゥームがフラグメントであるドツベルゲンガ変身の使用をする事で、傷を回復。その少し後に、意識を取り戻した。

後に残されたのは、眠り続けているはやてと疲れきった状態にある俺達だけだった。

「防御プログラムは停止したが、歪められた基礎構造はそのままだ」

今、医務室に居るのははやてと童人、守護騎士である4人と管制人格であったリインフォース。八神家全員が集まっている。

「私は……夜天の魔導書本体は……遠からず新たな防御プログラムを生成し、また暴走を始めるだろう」

静かに、落ち着いた口調で自身と魔導書の状態を話すリインフォース。

その言葉には、何処か諦めのようなものが感じられた。

「やはりか」

「修復は出来ないの？」

「無理だ。管制プログラムである私の中から……夜天の書本来の姿は、消されてしまっている」

「元の姿が判らなければ、戻しようも無いという事か？」

「そういう事だ」

その事を予想はしていたのか、取り乱すという事はない。

シャマルの質問に力無く否定し、ザフィーラの言葉を肯定するリインフォース。

「主はやては……大丈夫なのか？」

「何も問題は無い。私からの侵食も完全に止まっているし、リンカーコアも正常作動している。不自由な脚も、時を置けば自然に治癒するだろう」

「そう、それならまあ……良しとしましょうか」

リインフォースから聴かされたはやての身体的状況が良くなっているという言葉に、守護騎士である4人が胸を落ち着かせ、口を開く。

「ああ、心残りは無いな」

「防御プログラムが無い今……夜天の書の完全破壊は簡単だ。破壊しちゃえば、暴走す

る事も2度と無い。変わりに、あたし等も消滅するけど……」

「すまないな、ヴィータ」

「——巫山戯るなよ……それなら、はやてはどうするんだ？ お前らが消えちまつたら」

「こうなる可能性があつた事くらい、皆知つてたじゃんか……」

消える事を認め、諦めかけている4人の守護騎士に声を荒げそうになる竜人。

そんな竜人に対して、諭すように落ち着いた声でヴィータは話す。

そう……皆、こうなる事は予想していた筈なのだ。理解をしていた筈だったのだ。

だがやはり、いざこうなつてしまふとその覚悟も殆ど意味を成さなくなる。出来たばかりの家族を失うという恐怖に、強く怯えてしまふ。

「——いいや、違う。お前達は残る」

だがそこに、竜人とは別の理由で、違う考えを持っている存在が——リインフォースが口を開く。

その言葉に皆、彼女へと顔を思わず向け、その言葉を耳にする。

「——逝くのは……私だけだ」

「——巫山戯んじゃねえ……それこそ、巫山戯んじゃねえよ。お前だけが逝くなんて、許せる訳がねえだろ」

また大きく荒げた声を出しそうになるが、はやてへの気持ちで踏み留まる。

いや。声の大きさや語調はそうだが、愛する妹の為に、そして自分の為に口を開く竜人。

「だが、私の身体はもう……」

「諦めるな、とは言わねえよ。でもな……それは最後まで足掻いてからだ」

「足掻くだと……?」

竜人の言葉に、皆が眉間に皺を寄せる。

「俺の手に行っている力は少し特殊でな、データの海に潜る事が出来るんだ……」

「データの海に?」

「そう。だから、リインフォース……お前の身体の中に潜り込んで、データの残骸を集める。邪魔をする悪性プログラムなんて、ぶっ飛ばしてやるよ」

竜人の放ったその言葉は、僅かな光明となった。

だがそれでも、ほんの少しというだけだ。かなり小さな光であり、今にも消え入りそうなもの。

そんな光だが、それでも守護騎士の4人とリインフォースには、地獄に自分に向けて空から降りてきた蜘蛛の糸ヴォルケンリッターのようなものだ。

「そうか……なら、駄目元で頼む。もし、無理だったなら……」

「理解ってるよ。だが、ちゃんとはやてに話せよ……もう隠し事はしないでおうぜ」

消える覚悟は完了してはいるが、それでも命への執着、生きたいという気持ちはあるものだ。

竜人の提案に、リインフォースは乗る事にした。

12月25日早朝。午前6時30分過ぎくらいだ。

地球とは離れた次元世界になのはとフェイト、はやて、ユーノ、クロノ、アルフ、シグナム、シヤマル、ヴィータ、ザフィーラ、リインフォース、雄介、志蓮、ドウム、竜人、そして俺の16人は居る。

はやての意識が回復すると同時にしっかりと事情を説明して、同意を得る。

管理局員であるクロノやリンディ、エイミイの3人とゾイルと俺達にも了承を求めて来たので、それを了承したのだ。

その了承をしたリンディはというと今管理局本局に居り、ゾイルとは何故連絡が取れないでいる。

「という訳で、始めようか……」

地面に古代ベルカ式の魔法陣を描いてある。

その中に、ゆつくりとした足取りで入っていくリインフォース。

やはり、怖いのであろう。

大きく強い緊張感を抱いたまま、魔法陣の真ん中へと進む彼女。

「なあ、俺にも考えがあるんだけどさ」

「何だ？」

「俺の、いや神達の宝物庫にある神話型デバイスの1つを使ってみたいんだ」

そう言いながら、志蓮は金色の光の中から変わったかたちをした杖を1つ取り出す。

その杖からはやはり、かなりの魔力マジックが発せられているのが理解する。だがそれは別に暴力的なものでは無く、逆に優しいものだ。

「この杖は、な……あらゆる呪いや魔法、魔術によつて生まれた損傷を零に戻せるんだ」

「なら、試してみようか？ リインフォース」

「はい」

折角の提案という事もあり、それを承諾する八神家。

「それじゃ、いくぞ。修補ベインプリイカーすべき全ての疵」

リインフォースから差し出された夜天の魔道書と、彼女本人を対象にして志蓮は真名を解放してその杖で魔法を発動させる。

優しさと温かさを感じさせる光を放ちながら、本来あるべき姿、元々の姿を算定し、その状態へと戻すように働き掛ける。

だが――。

「何かが邪魔をしている……？ 一体何が？」

神代エーデルの魔力を使用しての力の行使が成されず、夜天の魔道書とリインフォースの身体の中には未だ、バグと呼べる悪性プログラムが存在し続けている。

それは、極小なものだが、僅かながら気による感知でも気付く事が出来た。

「やはり、中に入るしか無いのか……」

他に手段は無いのだろうか。

リインフォース 彼女彼女の身体の中に巣食っている病巣に似たプログラムを撃退し、消滅させる手は、他に無いのだろうか。

「じゃ、中に入るわ」

俺が考えようとした際に、竜人は Imperial Dragon Paladin Mode となり、その身体をバースコード状へと変化させていく。

そのまま、リインフォースの身体の中に消えるようにして、60mもの巨体は入っていった。

「リインフォース？ 身体に異常は無いか？」

「いえ、今のところは大丈夫です」

「何かあったら、言うんやで」

「はい、有難うございます。我が主」

身体の中に自分では無い何か、異物が入るといふのはどういふ感覚であり、どういふ気持ちなのだろうか。

取り敢えず、竜人が悪性プログラムを消去して、バラバラの残骸となつてしまつてゐる夜天の書に関するデータを拾ひ集めるのが完了するのを待つしかないだろう。

「……は一体……？」

リインフォースの身体を構成しているデータの中に潜り込んだ竜人は今、はつきりと言う道に迷つてゐる状態だ。

データが光のようになつており、その光が道を生み出している。

だが、その道は入り組んでおり、迷路のようになつてゐる。

そしてその道の外には、深い深淵のような暗い闇が存在しているのだ。

「……………」

落ちてしまえばどうなるのか。考えるまでもないだろう。

背中に存在しないはずの汗が流れるような感覚を味わいながら、ゴクリと唾に似たなにかを呑み込む竜人。

「さ、先を急ぐか……」

前に目を向けるとそこには、悪性プログラムが生み出したものだろうか。データで構

成されているモンスターとしか呼べないもの達が存在していた。

その数は尋常じゃ無く、無数に存在している道で、壁のように点在している。

そして、その奥には4つの膨大なデータ——かなりの巨体を誇るモンスターが3体存在しているのが見える。

「アルカディモンに、アルゴモン、ディアポロモンだと……待て、俺は何故知っている……?」 前世の記憶か?」

3体ともかなり強力なデジタルモンスターだ。

その3体は究極体であり、超究極体と呼べる程の力を持っている。

この3体が、闇の書の闇としての力の原因なのだろうか。

「——だとしても、やるしかない!」

周囲に存在している繭のような身体を持つモンスター——インフェルモンに似たバグの塊を吹き飛ばしていき、その3体の巨大なデジモンへと向かっていく。

今、悪性プログラムと雑介2つの力がぶつかる。

もう戸惑う暇は、残されてないだろう。

手にしているオメガソードには初期化の効果があり、触れると同時に多数のインフェルモンを消去していく。

そのまま前進を続けていくが、ディアポロモン似た存在の胸部にあるほうとうから無

数のエネルギー弾であるカタストロフィーカノンが放たれる。

「この程度でっ！」

白い翼をはためかせて、回避。移動をするが、その先にはアルゴモンが待ち構えている。

急制動をかけて、その場から急いで離脱をする。

だが、また別の存在であるアルカデイモンが邪魔を仕掛けてくる。

3体共かなりの速さと力を持っており、ギリギリで対処出来ているだけだ。

「——ッ!？」

アルカデイモンの胸から、膨大なデータ量を持つエネルギーが放たれる。

その攻撃を何とか回避。いや、放たれる前に、危険を感じ取り、何とか避ける事に成功させる竜人。

避ける事に成功はしたが、その一部がオメガブレードに触れる。

アルカデイモンが放つゴッドマトリックスは、触れた対象を0と1の分解し、自身へと吸収してしまう恐ろしい技だ。

だが、それほど恐ろしい技であるにも関わらず、オメガブレードは、そのゴッドマトリックスによるエネルギーすらも逆に、0と1の状態に分解し返し、初期化してみた。

「成る程な……これならっ——!!」

での3体同時撃破は難しい。

「——レイジ・オブ・ワイバーンツツ!!」

何処からとも無く龍のかたちをしたエネルギーが飛来し、そのエネルギーの奔流が3体の悪性プログラムへとぶつかり、爆発する。

「な、何だ……？ 新手か？」

顔を向けると、そこには赤と銀の鎧を纏った騎士がいた。

甲冑には綺羅びやかな印象を与える金の装飾が施されており、赤のマント、そして額と甲冑の胸部には緑色の宝石が埋め込まれているのが見える。

手には、ラブリュス両刃斧に似た槍が握られている。その槍は、途方も無い量のデータで構成されており、魔力に似た波動を放ち続けている。

「……幻想の騎士……」

「この戦い、旋風将メデイーバルデュークモンが力を貸そう。共に行くぞ、インペリアルドラモンパラディンモードよ!」

その言葉と同時に、メデイーバルデュークモンの姿は消え去るが、その姿を表すと同じ時にアルゴモンに斬り掛かっていた。

メデイーバルデュークモンの持つ最強魔槍デユナスは、アルゴモンの腕を容易く斬り裂いてみせた。

今の竜人の頭の中は、ただ、目の前に存在している存在を——家族の身を脅かす存在を吹き飛ばす事だけで一杯だ。

竜人の想いに応えるようにして、オメガブレイドの刀身が白銀の光となって伸びる。

渾身の力と速さを込めて、それが威力へと変換されていく。

伸びた光刀身は、3体の大きな悪性プログラムを見事に斬り裂き、そのデータを初期化してみせる。

ロイヤルナイツという組織の始祖の力が、闇の書の闇であるコアを砕いてみせた。

それと同時に、竜人のいる空間が大きく揺らぐ。

「不味いな、崩壊が始まっているのか……速く、見付け出さないと——!？」

探しに行こうと身体を振り向かせると同時に、3体の悪性プログラムだったものの残骸が1つに纏まっていく。

そしてそのデータは、探そうとしていた夜天の魔道書のデータだった。

だが……。

「——これじゃあ、意味が無いな……」

データの方は完全では無いが、その殆どは修復出来ない程に壊れてしまっている。見付けて、夜天の魔道書の頃のデータだと理解する程度になった事は奇跡にも近いだろう。

「くそ……助けてくれて感謝する、メディーバルデュークモ——!？」

歯噛みしながらも、そのデータを回収する。

そして振り返りはしたが、そこには既に、メデイーバルデュークモンの姿は影も形も無かった。

「悪い、結局駄目だった……データは見付かったけど、破損していて、元に戻りそうには……」

「いや、謝る必要は、無い……」

謝る竜人に対して、リインフォースは慰めの言葉を掛ける。

だが、当のリインフォースの方が辛く、苦しい思いをしているだろうに。

「主はやて」

「どうしたん？ リインフォース？」

「私の身体はあまり長く保ちません。ですが……」

言葉を詰まらせるリインフォースに対し、静かな瞳で見詰めるはやて。

俺達もまた、彼女達の会話に割って入る気は無く、静かにしている。

どれだけ保つのだろうか。

リインフォースの身体の中には、悪性プログラムの塊は殆ど存在していない。削除出来たと言って良いだろう。

だが、その身体は既に原型を留めては居らず、戻す為の希望も失われた。

存在し続けているのが奇跡的な事もあり、長くても今年度末には逝ってしまうだろう。

「ですが、私は……主はやてや皆に救つて貰つた事、感謝しています。短い間ですが、精一杯生きていきます。宜しくお願いします、主はやて」

「(こちら)そよろしゆうな、リインフォース」

「さてと、それじゃあクリスマスパークティードああああああつっ!!!」

身体に出来ていた傷も完治させた雄介は、大きな声で元気に叫ぶ。

その声に、この場に居る俺と志蓮、ドウム、ゾイル、竜人が応えるようにして叫び返す。

はやてもまた元気に応え、シャマルは周りの勢いに押され、誘われるようにして小さく応える。

ヴォルケンリッター

他の守護騎士のメンバーは戸惑いを見せはしたが、シグナムとザフィーラ、リインフォースは直ぐに柔らかな笑顔を見せ、ヴィータは興奮し始めたのか強い期待を抱いている笑顔を見せる。

クロノの方は呆れながらも、後始末だったりとといった事に頭を悩ませる。

「アースラスタッフも、アースラの修理が終わったら、好きなようにして良いぞー！」

《《《——うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつっ!!》》》

俺の言葉を聴いた事で、通信による音声ではあるが局員の皆が盛り上がっているのが聞こえて来る。大き過ぎる声が重なっている為に、音割れを起こしているような感じだ。

エイミイも同様に声をあげており、クロノの方は「仕方無いか」といった風な感じだ。「提督はどうなさいますか？　リーゼも」

《辞めておこう……》

《私達もちよつと……》

クロノの誘いを、やんわりと断る3人。

グレアム達3人は声だけをクロノにだけ伝えており、他の皆には気付かれないでいる。

《まあ、パーティーをする前に、休む必要があるし、家に帰らないとね》

エイミイのその言葉と同時に、俺達の足下に大きな魔法陣が発生。

そして、その魔法陣が光り、俺達全員はアースラ内部へと転移をした。

「そう……うん。理解した……報告、有り難う。今日は、家でゆっくり休みなさい。私も、明日には帰るから」

管理局本局に存在する通路を歩きながら、携帯機器を使用してフェイトからの報告を受けるリンディ。

横には、リンディの同僚であり同期のレティ・ロウランが並び歩いている。

2人の横には、中庭のような空間が設けられており、草木が植えられていて、人工に光によって明るく照らされている。

「フェイトちゃんから？」

「うん。魔導書本体の消滅は今は大丈夫だけど、遠からず起きるかもって……それでも、はやてちゃん達と半年は一緒に居られるんですって……」

「そう……」

暫く通路を歩いているとエレベーターに辿り着き、上に行くようにボタンを押す。

「グレアム提督の件は、提督の希望辞職って事で手打ちみたいね。故郷に帰るそうよ」

「まあ、具体的なのはクラッキングと捜査妨害くらいだし、それくらいよね……」

上からの命令であるなら仕方は無いが、辞職をする程の事でも無いと思っっているのか、リンディはレティに問い掛けるように話す。

「はやてさんの事はどうなるのかしら？」

「今まで通りに援助を続けるって……あの娘が一人で羽撃ける歳になったら、真実を告げる事になるだろうって」

「……そう」

はやての事を気に掛けるリンディに、グラム本人から聴いていたのかレティは説明をする。

その説明を聴いて、少し物憂げな表情を浮かべながら応えるリンディ。

「貴女もこれで、御主人への報告に行けるわね。何時行くの？」

「来週、クロノとフェイトさんとドウムさん、アルフも連れて5人で」

「何て報告する予定？」

「そうね……」

レティの質問に、少し考え込むリンディ。

だが、リンディは直ぐに笑顔を浮かべて応える。

「多分、何時もと同じよ……相変わらずの慌ただしい日々だけど、元気にやっていますよっ
て」

「そっか」

そんなリンディに連られるようにして笑顔を浮かべ、レティは頷いた。

アースラで次元間移動をし、地球の衛星軌道上へと転移をする。

そこから観える景色は、既に赤いものでは無かった。

緑と青の2色。三途の川が溢れ出る前の地球へと、その時の状態へと戻っているのだ。

戦闘の余波で壊れてしまっていたビル街やヒビ割れ削れてしまっていた大地も含め、その全てが時を戻されたかのように修復されている。

「綺麗……」

感嘆の言葉が発せられる。

誰が呟いたのかは判らないが、皆同じ気持ちだという事が表情から察する事が出来た。

「俺達がこの地球ほしを、世界を護ったんだ」

今地球で活動しているヒトや他の動物達はいつもと変わらない日常を送り続けている。

ほんの少し前まで眠らされていたというのに。そして、その間に何があったのかなんていうのは知らない。理解らないだろう。

少し寂しいというか、哀しいというのか。何とも言葉として表現し辛い感情が胸に渦巻く。

「それじゃ、元いた場所に転送するよ」

エイミイの言葉と同時に、転送ポートが光りだす。

光がその場を支配し、一瞬で消え去る。

目を開くとそこは、はやてにあてがわれている病室だった。

早朝という事もあり窓からはほんのりと明るい陽光が射し込み始めている。

廊下の方からは、もう目を覚ましている人達や看護師のものなのか、声などが聞こえて来る。

「それでは、主はやて……一旦、家に戻ります」

「私達も帰らないとね」

「それじゃあ、また後でな」

ヴォルケンリッター

ラインフォースを入れた守護騎士と竜人は八神家へといったふうに、はやてと一時の別れを告げて皆それぞれの家へと足を向かわせる。仕事をしている看護師に見付からないように、隠密に、静かに病院の外へと出る。

八神一家と別れ、アリサとすずかの2人とも別れる。

残されてるのは8人だ。

「事件、終了かな……」

「うん」

「でも……ちよつと寂しいかな」

雪が道路に降り積もっていく中で、俺達8人はゆつくりと歩いていく。

ほんのちよつとの間の出来事である筈なのに、身体は酷く疲れているのか重く感じられる。

足を進める度に、積もっている雪にくつきりとした足跡が出来上がる。

なのはとフェイトの2人は俺達6人の先を歩いており、耳に届いてくるなのはの声はどこか疲れと言うよりも物悲しさを感じさせた。

そんななのはに、フェイトは静かに手を差し出して、そつと握る。

「クロノが言つてた。ロストログア関連の事件はいつもこんな感じだつて。大きな力に惹かれて、哀しい事が連鎖していく」

「うん」

そんなフェイトの言葉を、俺は流す事が出来ず、胸を貫いてくるような錯覚に陥る。

大きな力に惹かれたというのは自分もそうだろう。特典という力を、サイヤ人などの力を望んだのだから。

そしてその望み力を手にした結果、この世界は大きくかたちを歪め始めている。

「私、局の仕事を続けようと思うんだ。執務官になりたいから……母さんみたいな人とか、今回みたいな事とか……少しでも止められるように。なのはは？ なのはは、何か考えてる？ これからの事」

「私は、執務官は無理だと思うけど、方向は多分、フェイトちゃんと一緒……ちゃんと使

いたいんだ。自分の魔法」

既に考えていたのか、なのははフェイトの言葉を受けて笑顔で応える。

それに対してフェイトもまた、なのはへと笑顔で返す。

目指す地点は同じだが、その過程や方法は違うとう事だろう。

雄介も志蓮もドウムも少女等2人と気持ちは同じなのか、言葉は不要だった。

皆必死に今を生きている。生きているんだ。

俺もそうするべきなのではないのだろうか。

原作通りの展開に無理矢理持つて行くこうとする必要はなく、今を必死に変えるように、生きるとう事を努力すべきなのは。

「ユーノ君、折角戻ってきてくれたのに、殆ど一緒に居られなかったね」

「全くその通りだ」

「ずっと調べ物だったからね」

フェイトとアルフ、ドウム、志蓮の4人と別れ、なのはと雄介、ユーノ、俺の4人は家へと向かい歩いている。

「なのはの言葉に雄介が肯定し、それに対してユーノは苦笑しながら応えた。

「ユーノ君、この後は？」

「うん……局の人から、無限書庫の司書をしないか？　って、誘われてるんだ。本局に、寮も用意して貰えるみたいだし……発掘も続けて良いって話だから、決めちゃおうかなって」

無限書庫での闇の書についての調査がどれだけ手際良く、効率良く行われていたのだろうか。

探索魔法と読書魔法の両方を同時に使える人材が欲しいという理由もあるだろう。

実力を認めて貰い、そして職に困らないというのは幸せな事かもしれない。

「本局だとミッドチルダよりは近いから、私は嬉しいかな」

「本当？」

「うん！」

なのはのその言葉を聴いて、ユーノの顔が綻ぶ。

家に帰るとそこは、暗く静かなものだった。

例えばどんな時間になろうとも、帰宅時間が遅くても顔を出して煩いくらいに喋り出す人物がいないのだ。

そう。もう、ここにはいないのだ。

「……………」

【Ma・tre】

「大丈夫だ……」

誰もいない静かな廊下を歩き、2階にある自分の部屋へと向かう。

照明は点いておらず、机の上に置いてある携帯電話のメール着信を教える光が小さく主張しているだけだ。

「今日、ちよつと時間あるかな？ 午前中、アリサちゃんと一緒にはやてちゃんのお見舞に行つて……それから、家でクリスマス会をしようかなつて思つてます。来てくれると嬉しいな」

「すずかからのメールだった。」

今日は既に12月25日。世間もクリスマス気分で賑わつているだろうか。

メールの文面にはなのはやフェイト、雄介達も誘つている事が記載されている。それぞれ個別に送つたようだ。

「これまでの事や転生者について、ちゃんと説明しないとだな……」

自身の右手へと目を向けて、そつと呟く。

「すずかとアリサの2人は、此方側に巻き込んでしまったのだ。」

「まあ、最終的には話すつもりだったのだから、丁度良い機会だと自身に言い聞かせる。」

「——くそっ」

一瞬の事だが、その右手が血塗られているように真つ赤に見えた。

まだ、未だにマッドの身体を貫いてしまった感触などがこの手に残っている。

「すごいや鉄鼠の奴……」

あれだけの力を誇っていた鉄鼠の最期、そして消える直前に吐いた言葉。それもまた、同時に胸を悩ませる。

——自分というものを失う恐怖を味わいながら、仮初の平和の中で暮らし続けていくと良い。

それがどういう意味なのか、なんとなくだが理解出来るような気がしている。

「特典……」

映像で観た志蓮の一瞬の変貌。時々感じる暴力的な感情。昨日から今日に掛けている伝説の超サイヤ人としての暴走。

大き過ぎる力である特典からの影響を受けているのではないのか。

まだ情報などは足りなく、確証というものは無い。

だが、そうなのかもしれないという考えが浮かび上がって来る。

「……やめよう。これ以上は考えたところで」

振り解き、払い除けるようにして首を左右に強く振る。

時計を見ると、時刻は8時過ぎだ。まだ、時間はある。

すずかに誘いを受けるといふ返事を送った後に、階段を降りて1階へ。そしてそこから、エレベーターで地下26階へと向かう。

エレベーターの扉が開くと同時に、身を乗り出してみる。

初めて来た時と同じように真っ暗で、機械が作動している音が耳に届いてくる。

「……………」

真っ直ぐに歩いて行き、GNドライブが置かれている場所へと到着する。

緑色の粒子が舞い、空間を照らしている。

その光で、周囲に置かれている機械群の姿がハッキリと見えた。

どれが何でどのようなようにして使うものなのかは、初見では理解らないだろう。

だが、希少^{レアスキル}技能の効果でそれを理解出来る。

複数の機械を見渡していると、1つの計器と機械に釘付けになってしまう。

「記録データ……？」

そこに表示されているのは、何かを記録したものだった。

「12月25日、複数回の次元震……」

どうやらこの機械は、次元震を観測するものらしい。

そして12月25日、今日観測されているという事は、鉄鼠との戦闘によって発生したものを記録したのだろう。

「12月8日……確かこの時」

レイジングハートとバルディッシュが新たなシステムであるカートリッジシステムなどを搭載し、なのはとフェイトの元へと戻った。そして、ヴィータやシグナム達との2度目の戦闘をした日だ。

この戦闘時に、マッドが何かを言っていた事を思い出す。

——何か、結界外で大きな魔力と空間の歪みが起きたみたいだが……。

「5月、27日……」

プレシア・テストロッサが、ジュエルシードを暴走させた時。

「4月26日、4月3日……」

ジュエルシードが地球へと落ち、ユーノがそれを追ってきた時期。そして、ジュエルシードの暴発で、レイジングハートとバルディッシュが破損した時期でもある。

データを遡っていくと、無数の記録が残されている事に気付く。

「9年……前……」

この時点で、かなりの数の次元震がほぼ同時に起きていたという情報が出ている。次元断層が起きたり、世界が崩壊をしなかったとう事が奇跡だろう。

「確か、なのは達が誕生した時……」

前世から持ち越している知識と記憶から出て来る情報は、なのはとユーノ、アリサと

すずか、はやてが誕生した年代だ。

そして雄介と志蓮がこの世界で第二の生を受けて、誕生した年でもある。

「11年前……」

ドゥームが生まれた年だ。

「まだデータが足りないけど、これではほぼ確定なのか……」

9年前に起きただろう無数の次元震は、転生者が誕生した事で起きたという事。

特典を所持し、この世界に転生をする度に次元震は起きてしまう。

「頭が痛くなるな……」

病気になる筈のない身体を持っているにも関わらず、脳内の血管が広がり痛みを感じる。

【Ma・tre】

デバイスからの呼び声に意識が強制的に戻される。

ポケットに入れている携帯電話は、メールを着信したのか光を明滅させている。

「ありがとう、えつと……」

【S, il vous pla・t appelez comme vous vous
lez】

「それじゃあ、リュミエール……」

【Qu'est-ce?】

「出掛けるか?」

【Oui, nous allons le faire】

携帯電話を開くとさすがからの返事を着信しており、そろそろ集合の時間だという事を教えてくれている。

再びエレベーターに乗り、地上へと足を向けた。

「ヤハ、ウエ……?」

集合場所に向かう前に、俺は神殿へと舞空術で移動をしていた。

神殿に着陸すると同時に、中に入るがそこにはヤハウエの姿が無かった。

「やつほー、ブロン!」

「お疲れさん」

そこに居たのは見覚えのある2人。

天照は、こちらに向かってジャンプをして抱きついてくる。

その様子を目にしたオーディンは「やれやれ」といった風な表情を浮かべている。

「離れてくれないかな?」

「ええ? 良いじゃん、別に……役得でしょう? 神様とこんなに親密になれるヒト

なんてそんなに居ないよ？」

天照の憤まじやかな胸が顔に当たり、息が苦しい。

だが、何処か安心感を感じさせるものがあつた。

「本当にお疲れ様……よく頑張つたね、有り難う……」

天照の華奢な身体は心なしか震えているように思える。

「お前等も頑張つたじゃねえか……その言葉、そのまま返すぜ」

「うん……だけど、本当に心配したんだよ」

「……………」

「弄り甲斐のある子が居なくなるんじゃないかって」

「……………」

その言葉を耳にして、思わず天照を突き飛ばしそうになる。

「まあ、良いか……」

口ではこういつた事を言っているが、内心では先に述べた言葉の方を強く感じている筈だ。

俺の存在を感じるように、離さないようにしているみたいに抱きしめている力は強くなっているのだから。

「オーデインもお疲れ様」

「いや、俺は……」

「取り敢えずの脅威は去ったけど、まだ幾つかの脅威は残っているだろうからさ……お疲れ様っていう言葉は違うかもしれないけど……この言葉しか思い浮かばないな」

フゴフゴといった風な感じでしか喋れないが、俺の言葉を理解したのか、オーデインは照れているのか頬をポリポリと搔いている。

天照は、少し名残惜しそうな態度を取りながらも俺から離れる。

苦笑いをしながら俺は言葉を口にした。

「いずれかの家でクリスマス会をするんだけどさ、来ないか？」

「私達は、辞めておくよ。まだ、力の方が完全に回復してないし……さっきの言葉……まだ何かが起きるんでしょ？」

「……………」

天照の言葉に、俺は黙り込んでしまう。

沈黙は是。

これを肯定と受け取ったのか、天照とオーデインの顔に少し翳りが見えた。

「まあ、君は楽しんできなよ！ 今度機会があるなら、また誘ってね」

「ああ……」

神殿から出、地上である下界へと降り立つ。

時間が時間なので誰かに見付からないように、Mirage Hideを使用して空間に溶け込む迷彩を発生させ姿を消して舞空術で集合場所へと移動する。

「おはようございます」

「——あつ！　なのはちゃん！　フェイトちゃん！」

海鳴大学附属病院にバスで移動し、なのはとフェイト、雄介と志蓮、ドウム、俺の6人ははやてのいるであろう病室へと足を向ける。

挨拶をして部屋に入室すると同時に目に入ってきたのは、シグナムに抱きかかえられながら車椅子に乘ろうとしているのはやての姿だった。

ヴィータとシャマルは、それぞれ荷物を持ちながら準備が出来るのを待っている。

ラインフォースとザフィーラ、竜人は八神家から直行するのだろうか。

「どうしたの？　もう退院？」

「残念。もう暫くは入院患者さんやよ」

「そうなんだ……」

フェイトの質問に笑いながら応えるはやて。

闇の書の闇を除去した翌日、直ぐに足の麻痺がどうにかなるといふ訳ではないのだから当然だろう。

「まあ、もうすっかり元気やし、すずかちゃん達にお見舞いはお断りしたよ。クリスマス会直行や！」

「そう」

外に出る事が出来る程には回復した事に対し思わず笑顔になる。

はやてが何気なく口にした言葉通り、皆でクリスマス会を過ごす事が出来るようになった。家族揃って、友達やその家族と元気に過ごせるという事がどれだけ幸せな事なのか。

「昨日はいろいろあったけど、最初から最期までほんまありがとう」

「ううん」

「気にしないで……」

はやての感謝と謝罪の言葉に、なのはとフェイトの2人は笑顔で応える。

「そうそう、気にする必要なんて無いさ……持ちつつ持たれつ。困った時はお互い様で、助け合うものだろう？」

なのはとフェイトの言葉、そして雄介の言葉を聴いて、はやてや守護騎士の3人は笑顔を浮かべる。

「魔導師を続けるのか？ いや、なるつもりなのか？」

「うん。リインフォースも精一杯生きるって言ってくれたし、あの娘や皆がくれた力や

から……」

志蓮の質問に対し力強く、笑顔で応えるはやて。

「それに、今回の件で、私とシグナム達が、管理局から保護観察受ける事になったし」

「そうなの？」

「まあな……」

「管理局任務への従事とうかたちでの、罪の償いも含んできます」

「クロノ執務官やリンディ提督、ゾイル特務執務官達がそう取り計らってくれた」

なのはの質問にヴィータが応え、それに対してシャマルとシグナムが補足をする。

俺が家にいる間に、皆頑張ってくれていたという事に感謝せざるを得ない。

「(全く、特務執務官補佐の自分が動かないでどうするんだよ……)」

「任期は結構長いんですが……はやてちゃんと竜人と離れずにいられる、多分、唯一の方

法だって」

現在の管理局法などで、どうにかしようとする方法に限られてくる。況してや、家族全員が一緒にいられるようにするのであれば。

だが、管理局は慢性の人手、人材不足という事もある為にこういった手段を取る事が出来たのだろう。

「私は囑託扱いやから、なのはちゃん達の、後輩やね」

はやての言葉に、2人の少女は笑顔で浮かべる。

これで、この事件は収束を迎えた……闇の書事件は取り敢えずの解決をしたという事になるのだろう。

だがまだ、闇の書の闇が生むであろう事件が残ってる筈だが。

「はやてちゃん！ 今日はやちゃんと帰って来てね！ 約束よ！」

「はい！ 約束です！」

準備を終え、部屋を出ると同時に、はやての担当医である石田幸恵に外出の許可を求めた。

少し離れた場所から2人の会話をしている様子が見る事が出来る。

「今朝、大変だった？」

「ああ。遅くに外に出ていた事がバレて、シグナムとシャマルが滅茶苦茶怒られてた」

なのはの質問に応えるヴィータ。

早朝でのアースラからの転移後、病院の外に出る時に俺達の姿が視られたという事だろうか。

「怖い先生なんだ……」

はやてとシグナム、シャマルに対して念を押すようにキツク言い聞かせている幸恵の姿を目にし、フェイトは思わず眩く。

「でも……良い先生だ」

ヴィータの言葉通り、その幸恵は良い先生であり、優しい人物なのだろう。

幸恵がはやてを医者だからという訳では無く、一人の人間として心配をしている事が理解出来た。

「お待たせ」

車椅子に座るはやての言葉を聞いて、出入り口へと向かう。

だが、フェイトとシグナムの2人は静かに向かい合い、動かないでいる。

「……………」

「……………」

両者の瞳は鋭くそれぞれを真つ直ぐに貫いている。

だが、そこからは敵意といったものを微塵も感じさせはしなかった。

「テストロッサ」

「はい、シグナム」

「預けた勝負……「何へいず」れ決着をつけるとしよう」

「はい、正々堂々。これから何度でも」

フェイトの言葉を受けて表情は和らげ、その綺麗な金髪を優しく撫でるシグナム。

フェイトの方もまた、それを笑顔で受け入れた。

「なのはとフェイト達、はやて達ともう直ぐ到着だって。はやて達も含めて、皆で打ち明けたい事があるってさ」

「うん」

携帯電話に届いているメールを見て、アリサはさすがへとその文面を軽く読み上げる。

「ま、なのは達が秘密にしたい事なら、別に秘密のままでも良いんだけどね。教えてくれるってんなら、ちゃんと聴きましょう」

アースラ内で、ゾイルから説明を受けたという事もある。

だが何よりも、彼女達が自身の意志で話そうと思つた時に聴こうという考えが浮かぶだけの余裕が出来たのだろうか。

そこには、半年前に話してくれない事に対してやきもきしていた姿はもう無い。

あるのは友達を信じているとう気持ちの表れだけだ。

「うん。フェイトちゃん達との出会いの話から聴かせてもらえると、嬉しいかな」

そんなすずかの言葉に同意を示すかのように、笑顔で首肯くアリサ。

「全部聴かせてくれたら、なのはちゃん達ともつともつと仲良くなれるような気がするから」

「うん。そうだね」

笑顔を浮かべながら、皆を待ち続けるアリサとすずかの2人。

「えつと……それで、なのはちゃんとフェイトちゃんはこういう風に逢ったの？」

「えつとね……」

今の今まで黙り続けていた事に罪悪感や申し訳無さを感じてはいるが、それ以上にこれ以降は隠し続ける必要の無い事や大好きで仲良しな友達と一緒に笑い合える事に感謝を感じずにいられない。

すずかの質問に対し、なのはとフェイトは照れながら説明をしていく。

どのようにして出会ったのか。

どのようにぶつかり合ったのか。

どのようにして理解し合う事が出来たのか。

「そっか……」

プレシアとアリシアの話になると同時に、空気が少し重くなる。

だが、フェイト自身は割り切る事が出来たのか……優しい笑顔を浮かべている。

それにつられるようにして、この場に居る皆が同様に笑顔となる。

「……魔法についても説明しないとな」

それぞれの魔法との出会い、そしてそれがどんな力なのかをザックリと簡単に説明してみせる。

フェイトとアルフはミッドチルダの魔法について、シグナムとシャマルは古代ベルカ式について。

「古代つて事は、近代もあるつて事？」

「ええ。私達は、まだその魔法体系を使用する者達と出会った事は無いですが」

アリサの疑問に、笑顔でシャマルは応える。

近代ベルカ式の魔法技術は存在しており、それは古代ベルカとミッドチルダの技術のハイブリッド。ミッドチルダ式の魔法技術をベースにして、古代ベルカ式の魔法をエミュレートし、再現した魔法体系。魔法陣は古代ベルカ式のものと同じだ。

「で……あんだ、じゃなくて……貴女はフェイトの使い魔つと」

「アルフで構わないよ」

「道理でねえ……見付けた時は大怪我をしていて、なのはが知り合いの犬だからと言って一緒に行ったし……フェイトがここに引越して来た時は子犬フォーム？ だったし……見覚えのある訳だわ」

アリサの言葉に、苦笑いを浮かべざるをいないでいるアルフ。

「で、本題なんやけど……」

「転生者について教えて欲しいなって」

はやてとなのはの言葉に同意をするように、フェイトとアリサ、すずか、アルフ、守護騎士の3人は転生者組へと目を向ける。

「えつとだな……俺達には前世での記憶があるんだ」

「俺には無いけどな」

思い付く限りで説明をしていく。

推測だったりする事もあるからか、チグハグとしており可怪しな部分があるだろう。そして、すっかりとした根拠が無い事や知らないでいる事もあるだろうから、話せない事もある。

出来得る限りで、転生者について解説をする。

「ここは、俺達にとってはアニメや漫画、ゲームの世界だったんだ。だけど、この世界に転生をした」

雄介の言葉に、皆は余計な茶々を入れるという事はせず聴き入っている。

自分達いる世界がアニメなどに出て来る世界だったという事に驚きを隠せないではいるが、それ程取り乱す様子も無い事に驚きと安堵を俺は覚える。

「前世の記憶を持ったまま、もしくは手放した状態で輪廻転生じみた事をした、と」

「そう。前世では創作物だったが、ここはそれに限りなく近い……似た世界だと思うん

だよ、俺は」

アリサの確認するかのような言葉を肯定し、自分の考えを少し話す志蓮。

「そして転生をする際に、特典と呼べる特殊な力を手にする事が出来るんだ」

「雄介君の場合だと、その特典が滅竜魔法って事？」

「そう。この世界ではどう風に生まれたかは判らないけど、俺の前世での世界では、F A

I R Y T A I L という漫画、アニメに出て来た魔法なんだ」

なのはの言葉に、笑顔を見せながら応える雄介。

「志蓮君のは？」

「俺か？ 俺のは、王の財宝と無限の剣製ゲート・オブ・バビロン アンリミテッドブレイドワークス、憑依経験……そのどれもがF a t e /

シリーズに出て来るものだけ」

「俺はN E E D L E S S という作品に出てくる超能力に似た力」

「俺はデジタルモンスターに出て来るデジモンという存在が持つ力……だった筈……」

「さすがの質問に対して志蓮は応え、ドゥームも竜人も自身の特典について話す。

「つちゆう事は、皆アニメか何かに出て来た力を特典として持つてると……」

「まあ、そうだな……大抵の奴等は、既存の作品から欲しいものを選ぶだろうさ」

「はやての言葉には、否定をするような要素は全く無いと言えるだろう。」

「竜人は、ポンポンといった風に軽くはやての頭を叩きながら口を開いた。」

4人が自身の持つ特典についての説明を終えると同時に、皆は俺の方へ目を向ける。「サイヤ人だ……ドラゴンボールシリーズに出て来る」

自分だけが黙っているという事は出来ない気がして、簡単に説明をする。説明を始めると同時に、自身に掛けている変身魔法を解除する。

「変身、魔法？」

「姿が変わった……？」

「ブ、ブロン君が不良に!？」

鉄鼠との戦闘時に、不可抗力で見せてしまったこの姿。

金髪、右目が翡翠クリューンに左目が紅玉ロートといったオツドアイ、そして猿の尻尾。

「使い魔でも無いのに尻尾があるなんてねえ……そう言えば、アカマタン時にも見せてたっけ？」

「……ああ」

アルフの言葉に苦笑しながら同意する。

「ええと……ブロン君？ 触っても良いかな？」

「構わないぞ」

ユラユラと揺らしている尻尾が気になるのか、なのは達少女組が俺の尻尾に群がり始める。

サワサワといった風に触れる感触は、こそばゆいと言うのかくすぐったいというのか。

自身が、手入れのようにして洗っている時には感じられないような感触を暫くの間、味わう事になった。

何だかんだと言いながら、時間は経過していく。

時間はあつという間に夕方となり、はやては病院に戻らないといけない時間が迫る。

皆と別れ、帰る道の途中で俺は皆に話さずに居た事で頭を悩ませていた。

鉄鼠の放った「自分というものを失う恐怖を味わいながら、仮初の平和の中で暮らし続けていくと良い」という言葉。

特典によって魂などが何らかの影響を受けてしまうという危険性。

マツドの残したデータに載っていた次元震などのデータ。

これらを話せずに帰路に着いている。

「どうすれば良いんだ……？」

話せば自分は楽になるかもしれない。だが、皆に必要な以上の不安や負担を掛ける事になるかもしれない。

話すべきだったのか、話さないでいた事が正解だったのか。

答という答が存在しないであろう疑問、そして悩みを抱えながら、誰も居ないであろう家へとトボトボと足を動かした。

THE BATTLE OF ACES 編

魔導騎士を目指して はやての魔法特訓

「今日もええお天気やなあ、リインフォース」

「はい……我が主」

はやての言葉に、微笑みながら返すリインフォース。

闇の書の闇のコア部分を吸収した鉄鼠を倒した事で終了した事件——管理局の方では闇の書事件と呼称されているその事件が取り敢えずの解決が済んでから一週間が経過しようとしていた。

それらが生み出したであろう大きな被害や傷跡などといった痕跡は、何処をどう見ても全くと言ってても良いくらいに見当たらない。

地球上の生物が絶滅しかけ、青い惑星^{ほし}が真っ赤に染まっていたとは思えないほどの平和な時間が流れている。

そして今は12月下旬であり、今年もそろそろ——西暦2005年も終了しようとしている。

新しい年を、2006年である来年を迎えるための準備の殆ども既に終わっている。

12月という事は冬であり、昼であろうとも本来は少しばかり肌寒い季節の筈ではあるが、空には雲が殆どなく、太陽の陽射しがしっかりと八神家の庭へと降り注いでいる。「お昼の下拵えも済んでるし、洗濯物はシャマルが干してくれてるし。お昼時まではのんびりや」

「はい」

もう一度、はやての言葉に微笑を浮かべながら応えるラインフォース。

はやての目の前には洗濯物を手にしたシャマルがいる。彼女は、洗濯籠から濡れている下着などを手に取り、それらを次々と物干し竿へと掛けていく。その動きは軽やかなものであり、慣れたものだと言える。

そんなシャマルとは反対に、手伝うラインフォースの動きはぎこちがないものだ。が、不器用ながらも彼女は一生懸命に手伝っており、それを見遣るはやての頬を緩ませる。

そんな3人を暖めるようにして、太陽はポカポカとした陽光を発し続けている。

「さ、今年最後のお洗濯物干し、お終い！」

洗濯籠は空になり、入っていた洗濯物の全ては竿に掛けられている。

手をパンパンと叩きながら、シャマルは元気に言葉を口にした。

「お疲れや。シャマル、ラインフォース」

「いえ」

はやての劳いの言葉に対して応えるリインフォースだが、不慣れな事をした所為か、少し疲れた様子を見せている。

「リインフォース、家事も覚えが早くて助かるわ。シグナムは家事とか全然ダメだし」
シヤマルの方ははやての方に振り向きながら、リインフォースの事を褒め、シグナムの事に対して少し愚痴のようなものを零す。

小さな子供のように頬を膨らませており、その様子からは日頃の苦労が推し量れる。
「いや、あれでけっこう、手伝ってくれるよ?」

そんなシヤマルの言葉を聞いて隙かさずフォローを入れようとするはやてだが……
あまり上手だと言えないものなのか、フォローの筈のその言葉は疑問形になってしまっている。

「ヴィータちゃんの子供だし、ザフィーラは家では狼だし」

「それはその、仕方がないのでは」

シヤマルの言葉を聞き、リインフォースもフォローを入れようと試みるが、上手く出来ない。

守護騎士プログラムである彼女達は、それぞれ設定年齢というものがある。その年齢に沿った体格や性格及び人格を持っており、ヴィータはその見た目同様に基本的には子

供そのものなのだ。

ザフィーラは、はやてのお願いもあつてか普段狼の姿を取っているが、手伝いを頼めば、ヒト型の姿へと変身して手伝つてくれるだろう。

「さー、お家入つて、お茶淹れよ。リインフォースも、身体冷やすとあかんから」

「はい……有り難う御座います」

シャマルの愚痴に対しそれを聴きながら相槌をうつたりフォローを入れたりしているリインフォース。そして、そんな彼女達を思いやるはやて。

はやてのその言葉に、シャマルとリインフォースの2人は笑顔を浮かべ首肯いた。

家に戻り、シャマルの手伝いを受けて再び車椅子に座るはやて。

はやては車椅子を自力で動かして、お茶の準備に入る。

「私が！」

「ええよ。シャマルは洗濯物を干してくれたし。リインフォースと一緒に座つといて」
手伝いに入るシャマルの言葉を聞き、待つようにと言うはやて。

氣遣いに対し、申し訳無さと有り難さの混じつたような表情を浮かべ、シャマルはソファに座っているリインフォースの隣に腰を下ろす。

はやては膝の上にお盆を乗せ、その上にお茶の入ったコップが3つ。そのコップからは湯気が上がっており、温かい事を教えて来る。

「有難う御座います」

受け取り、お礼を述べるリインフォースとシャマル。

お盆を机の上に置き、自分のコップを手に取るはやて。

手にしているだけでも、その温かさは十分に伝わって来る。

家の外という寒い中で濡れた洗濯物などの冷たい物を触っていた事もあり、身体は冷えている。だが、十分に温められたお茶を飲む事で、その身体は次第にポカポカとした温かさに変わり、満ちていく。

「何処かお散歩でも行きましょうか？」

「あ、ほんならまたちよつと、魔法教えて欲しいな」

「ああ、良いですね」

一息吐いて、お茶を飲んだ事で身体が十分に温められて来た事もあってか、シャマルからはやてとリインフォースの2人へと顔を向けて、ちよつとした提案を上げる。

はやてはリインフォースを見ながら、その散歩とは別の提案を上げ、その代案を聞いたシャマルは同意を示す。

「では、執務官達に許可を頂いて、今からと……機能同様に夕方頃に空へ上がりましょうか」

はやての提案とシャマルの同意を受け、リインフォースはクロノやリンディへと念話

で連絡を取る。

闇の書事件が終了し少ししてから、「魔法を使えるんだから、折角なら模擬戦でもどうだ？」という転生者組の提案を受け、はやてはラインフォースと一緒にそれに向けてこの数日は夕方頃に練習をしているのだ。

「では、行きましようか」

許可を貰う為の連絡を取ると直ぐに、認可され、その言葉を受けると同時に3人はそれぞれ騎士甲冑を身に纏う。

着ていた衣服は量子変換され、デバイス内へと収納される。

ラインフォースは、自身のストレージ内に。はやては今、デバイスを所持していない為、その衣服は、ラインフォースが受け取り収納する。

「スレイプニール、^{はばた}羽博いて」

完全に着替え——バリアジャケットの展開及び着用品が終了すると同時に、3人は飛行魔法を使用して一気に空へと飛翔する。

はやてとラインフォースの背中には翼が生えており、その翼を利用した魔法である Sleipnir を使用して、^{はばた}羽博く。

グングンと上昇し、雲の上にまで昇る。

周囲に飛行機などが飛行していないのを確認し、それと同時に小規模ながらも封鎖領

域を展開する。

「リインフォース、準備良い？」

「ああ。こちらはいつでも」

シヤマルの確認に対し、強く首肯くりインフォース。

身体中と言えるくらいに使用する為の魔力は行き渡っており、直ぐにでも模擬戦を開始する事が出来るほどだ。

「はやてちゃん、見えてますかー？」

「うん。ばつちり、見えてるよ」

はやては空に飛翔すると同時にシヤマルとリインフォースの2人から離れ、その2人がしっかりと見える地点で飛行魔法による浮遊をしている。

魔力を消費して視力を上げる事で、より一層ハッキリと鮮明に見る事が出来ている。

「主はやての魔法資質は、後衛広域型だ。やはり私とお前の魔法戦が1番参考にして頂ける」

「うん。勉強して貰えるように、はりきって模擬戦、やっちゃいましょう」

リインフォースからの言葉に対して首肯しながら、シヤマルの方も同様に魔力を身体に行き渡らせていつている。

普段のおっとりとした様子からは想像はし難いが、今のシヤマルは戦士の目をしてい

ると言っても良いだろう。

「でも、まだ体調も本調子じゃないんだから、無理はしないのよ」

「大丈夫だ。まあお前も程良く手加減してくれ」

そんなシャマルではあるが、やはり優しいところは隠せないでいるのか。リインフォースに対し、その身体を心配して言葉を掛ける。

そんなシャマルに笑顔で応え、魔力を解放するリインフォース。

放たれている魔力量は闇の書事件時の闇の書の管制人格だった頃と比べると小さいものではあるが、それでも十分に厄介な、平均的な実力の魔導師からすると敵わないと思えるほどに驚異的な力を感じさせて来る。

模擬戦である為殺気は込められてはいないが、両者共にやる気に満ちた瞳をしている。

「うん。じゃあはやてちゃん、開始コール、お願いしまーす」

「はい、ほんなら、シャマル対リインフォース、試合、開始ー！ー！」

シャマルからのお願いの言葉を聞いて、大きな声で試合開始のコールを口にするはやて。

はやてが言葉を口にすると同時に、シャマルとリインフォースの2人は動き出した。

「風よー！」

「穿て、ブラッディダガー」

互いに距離を取り、それぞれの攻撃魔法を行使する。

シャマルは魔力で3つの竜巻を発生させ、それらをリインフォースへと向かわせる。対するリインフォースは、血のように真つ赤な鋼の短剣を26本自身の前に創り出し、それら全てをシャマルへと放つ。

26本のBloody Daggerは3つの竜巻を切り裂きながら、シャマルへと真つ直ぐに飛んで行く。

【Pferde】

両足に魔力で生み出した渦巻状の小さな竜巻を纏わせ、赤い短剣を右に移動する事で回避してみせるシャマル。

だが、Bloody Daggerはシャマルを完全にロックしており、誘導されるように、回避したシャマルを追い掛け、付け狙う。

「……このっ！」

回避を断念して、シャマルは自分の眼前に暴風と言える強さの風を起こし、その風は盾となつて26本の短剣のうちの半分を防ぎ、爆発させる。

シャマルは、もう一度風の盾を生み出して残りの短剣からの攻撃を防ぎきる。

「闇に、染まれ」

ポツリと、ラインフォースは掛け声のような詠唱を口にし、自身を中心にして球形の広域空間攻撃魔法である *Diaabolic Emulsion* を使用する。

「——えええー！?!? ちよつと、ラインフォース?」

隙を与えないようにといった感じに放たれたその攻撃に、驚きながらも、もう一度風で盾をつくりだす。

だが、その防御範囲はかなり狭く、硬さとうものがなく脆い。

折角発動させた防御魔法ではあるが、その風の盾は純粹魔力による空間攻撃魔法に呑み込まれ、シャマルもまた同じようにその攻撃を喰らってしまう。

「なかなか上手く飛べた。私もまだまだ、捨てたものではないな」

「うう、酷いわー。手加減しろとか言っついて」

試合は拮抗し、実力のほどは互角。そして引き分けといった具合だろうか。

だが、シャマルの方は納得がいていないのか、涙目になりながら少し愚痴を零す。

まあ、魔法を1つ2つ使用しただけであり、実際にその攻撃魔法を喰らったのはシャマルだけなのだが。

直撃を受けたと言っても過言ではないが、ラインフォースも模擬戦だという事を理解しており、シャマルの騎士甲冑には大きなダメージがない。

スライドをするように浮遊状態で移動し、近付いて来るはやてを見遣るラインフォー

スとシャマル。

「いやいや、勉強になったよー。2人とも、おおきにな」

「いえ……」

はやてからの賞賛の言葉を耳にして、思わず照れてしまうリインフォース。

顔を背け影になっている為に判り難いが、心なしか彼女の顔は赤くなっているように見える。

シャマルもまた、不平不満はあるものの、本来の目的が達せられ、そのはやてからの言葉を聞いて、素直に賞賛の言葉を受ける。

「やっぱ、広域攻撃は先読みと戦術やなー。その辺はクロノ君にも教わらな」

「はい」

はやての言葉に首肯くりインフォース。

戦闘時の立ち回り方などといった戦い方は見稽古じみた事で覚える事が出来るが、既存の戦術や戦略などは勉強していかないかと身に付かないだろう。

況してや広域攻撃ともなると周囲の者達や物などの配置なども考慮して使うものだ。そういった知識は、余計に必要になって来るだろう。

『リインフォース……体調、良いみたいね?』

『あまり極端に魔力を消費しなければな。とは言え、今ので限界に近いよ』

『うん……』

シヤマルからの念話による確認に対して苦笑を浮かべながら応えるリインフォース。肩で息をするほどになるとまではならないものの、それでも今のリインフォースにとつてはかなりの疲労を感じさせるものであった。

この先もこの模擬戦以上の事を行い、魔力を消費する事はあるだろう。それらに対して、不安はある。

だが、主である八神はやてやその兄の八神竜人、そして守護騎士達4人がいる事で、そんな不安をあまり感じさせないほどに強く大きな気持ちがりインフォースの胸の中にはあった。

「ほんなら、家に戻るか」

「はい」

「そうですね」

ゆっくりと下降し、封鎖結界を解除する。降り続けると次第に自宅——八神家が視界に入ってくる。

人に見られないようにと細心の注意を払いながら近付き、八神家の庭へと着地をする。

家の中を覗くと、リビングのソファには竜人とウィータが座っており、その足下には

狼形態のザフィーラがいた。

ヴィータと竜人はテレビ番組を見ており、ザフィーラは床に伏せ目を閉じている。

「お帰り」

「ただいま、竜人兄ちゃん」

引き戸をスライドさせて庭から家の中に移動するはやてとリインフォース、シャマルの3人。

中に入ると同時に、2人と1匹——中の3人は帰宅してきた3人へと顔を向ける。

靴を脱ぎ、その3人分の靴を玄関の方へと持つていくシャマルとリインフォース。

はやては飛行魔法で移動し、自身の使用している車椅子に腰を下ろす。

「いつまで甲冑を着ているんだ？　と言うか、魔法使つて、車椅子につて……」

はやてのその行動に、思わず溜め息混じりに言葉を口にする竜人。

騎士甲冑を解除すると同時に、玄関にいるであろうリインフォースの中から模擬戦前まで着ていた私服のデータが外に出て、本来の物質へと戻り、はやての身体を包み込み再構築される。

「そうやな……なんや、魔法つて使いようによつては便利やから」

「それは理解するが……」

はやてのリンカーコアが闇の書の侵食から解放されて、まだそれほど日数は経過して

いない。

本来ならば、何ヶ月も何年も経過観察をしたり、無駄に魔法を使用しては駄目だと言えるくらいだ。それほどダメージを負っていたのだ。

「そや！ ヴィータ、お腹空いてないか？ 久し振りにお菓子作ってみよかなって思うんやけど」

説教をしかける竜人から逃げるように、話を逸らすはやて。

そんな苦し紛れのはやての言葉に、ヴィータは思わず目を輝かせてしまう。

「食べたい！ はやての作るお菓子、食べたい！」

「じゃあ、作ろか」

喰い付くようなヴィータの反応に、笑顔を浮かべながら応え、台所へと向かうはやて。

ヴィータもまた、笑顔を浮かべ、はやての後ろを付いて行く。

「……まあ、いつか」

小言を言いそうになつてはいたが、はやてとヴィータの様子を目にし、そういった気持ちは失せてしまった竜人。

竜人は苦笑を浮かべながら、愛する妹達のいる台所へと向かった。

「あ、私も！」

後学の為にといったような事を口にしながら、慌てたようにして台所へと向かうシャ

マル。

ザフィーラも、狼形態のままではあるが、その後をゆっくりとした足取りで追う。後に残されたのはちょうど戻って来たばかりのリインフォースだけだ。

「ただ今戻りました」

「お帰りなさい、将」

暇を持て余し外に出るリインフォースだが、家の外に出ると同時に帰宅して来たシグナムと顔を合わせる。

剣道場での非常勤講師としての仕事を済ませて来たのだろう。

「主はやては？」

「今はヴィータやシャマルと一緒にだよ。おやつを作ってくれるそうだ」

「そうか」

シグナムの質問に、笑顔で応えるリインフォース。

2人の髪を、冷たい風が靡かせていく。

「幸せそうで何よりだ。主はやても、お前もな」

「そうだな」

リインフォースの言葉を否定する事もなく、目を閉じ、静かに首肯くシグナム。

寡黙という訳ではないのだが、出て来る言葉は短く簡素なものばかりだ。だが、それ

だけで十分に気持ちは伝わっている。

「今まで仕えてきた歴代の主とは正反対と言えるくらいの性格をした今回の主——八神はやて、そしてその兄である八神竜人。

性格や人格だけではなく、待遇も信じられないほどに良いものだと言える。

プログラム生命体である自分達を家族として接し扱ってくる2人。

ラインフォースの記憶の中では、これほどの優しさなどを示してくれた人物は、夜天の書が闇の書へと変貌する遙か昔——夜天の書が製作された時、その製作者であり主であつた少女しかいなかった。

「お前も、あの娘と試合の約束をしているのだろう。楽しみなのではないか？」

転生者組から提案された模擬戦。

闇の書事件解決した当日にシグナムとフェイトが交わした約束は、その試合で果たす事になつてゐる。

「テストタロツサの事か？ あれは事件の最中、預けておいた決着を試合でつけるといふだけだ。楽しみも何もないさ」

ラインフォースの質問に対し、シグナムにとって思い当たる人物——少女は一人しかいなかった。

ラインフォースの返答を待たずに、言葉を出し続けるシグナム。

そんな否定にならないような否定をするシグナムではあるが、話す彼女の様子とはとても楽しそうなものであり、口元が緩みきっている。

「そうか……では、そういう事にしておこう」

ラインフォースは、シグナムに気付かれないうように微笑みながら、その事を指摘せず、静かに頷いた。

「お前もまだ、当分は大丈夫なのだろう？」

「大丈夫……と言いたいところだが……そう長くもないだろうな。半年保てば良い方だろう」

「短いな」

シグナムの言葉に返すラインフォースの言葉は何か、何処か悟ったような感じを感じさせる。

先ほどまでの暖かな日常的な雰囲気は消え去り、重い空気に変わってしまった。

「私を構成していたシステムの殆どは、闇の書の闇と共に……鉄鼠と共に消し飛んだ。竜人達のお陰もあり、防衛プログラムが再構築される心配はないが、その分、私も活動システムの再生を行えん」

闇の書の闇を分離し、なのはとフェイト、はやての3人によるトリプルブレイカーによつてコアを剥き出しにする事が出来た。だが、そのコアを鉄鼠が吸収し、その鉄鼠を

倒す事で、同時に闇の書の闇を完全にとまではいかないものの消し去る事には成功した。

だが、防衛プログラムである闇の書の闇を破壊すれば、別の防衛プログラムが構築されるといったバグに似たもの——呪いとまで言えるようなものがリインフォースの身体を構成しているデータに含まれていたのだ。

そして、その呪いと言える悪性プログラムを駆逐する事にも成功はした。成功した筈なのだ。

だがそれでも、これまでの闇の書の主や闇の書の闇から受けたデータ改竄やそれらから副次的に生まれたバグの影響によって、リインフォースの身体を構築しているデータと魔力、そして何よりも大事なバックアップデータと言えるものは修復不可能な状態と言えるほどにボロボロなものになってしまっている。

「お前が消えるとなれば、我等が主も、竜人も悲しまれるな」

「それを想うと胸が痛いが……主とその兄上であられる竜人は聡く、強いお方達だ。私の消滅も、御身の糧として下さるさ」

「ああ……」

リインフォースの浮かべる物悲しい笑顔を目にし、シグナムの胸に張り裂けそうなほどの痛みが疾走る。

「元より今が、片時の夢のような時間なんだ」

最初——身体の中にあつた悪性プログラムを除去した直後は、半年から1年間は保つ筈だとは考えてはいた。

その筈だったが、想像以上に酷い破損状況の為に、今存在しつけているだけでも奇跡的なものだ。

「与えられた時間を、主の為、お前達の為、家族の為……闇の書の償いの為に、どう使えるか。それを考えれば、憂いている時間などはないさ」

「ああ……」

ラインフォースの強い言葉に対してシグナムは、ただただ静かに首肯した。

「この件については、以上で良いな」

アースラの代わりとして用意された海鳴市にある臨時本部——地球でのハラオウン家とも言えるように馴染みとなった家。その中の一室でクロノは自身に課された資料などを纏めている。

その量は半端なものではなく、かなりのものである。だが、データとして纏められている為に、実際に目で見える事は出来ないのだが。

「うん。後はあたしが纏めとくよ。お疲れ、クロノ君。一休みしたら？」

「いや、はやてや竜人、騎士達の諸々の手続きもあるし、リインフォースの件も、いろいろ取次がなきゃいけない……」

自身を案じて休憩するようにといったエイミーからの提案を聞き、笑顔を浮かべながらも作業を続けていくクロノ。

昼食を食べた後から熟している作業も取り敢えずはこれでやつと一段落と言えるところだ。

闇の書事件についての資料の殆どは既に提出は終えているが、だがそれでもまだ残っているもの——鉄鼠などといった外道衆といった存在やそれらが生み出した傷や損害などについての隠蔽、そしてリインフォースについての報告書を纏める必要が残念ながら残っている。

「まあ、そうなんだけど」

「……それに……というか今日はこの後、なのはの訓練に付き合う約束だ」

「ああ、そりや大変だ」

来年にある模擬戦——試合に向けてなのか、「二対一の模擬戦と魔法訓練をして欲しい」といった頼みがなのはから来ている。

普段のなのはは雄介達と訓練をしているが、「他の人とも訓練をしたい」といったなのはの要望を受け、それを了承したのだ。

「合間にフェイトちゃんのお勉強も見てあげているでしょ？ 暇が全然ないじゃない」

「別に、それほどでもない。やりくりは幾らでも出来るさ」

そんな感じに多忙だと言えるほどのスケジュールのようなものに追い回されているように見えるクロノだが、彼は彼なりに考え、決めて行動をしている。

無理せず無茶せず、自分の出来る範囲での行動。

そういった事もあってか、クロノは苦しいなどといった事を感じた事はなく、余裕と
いった体を見せている。

スケジュールを自身で決め、それを苦もなく熟す事がどれだけ凄いなのか。

「そうねえ。でもま、なのはちゃんやフェイトちゃんとの魔法練習なら、デスクワークの気分転換に丁度良いか」

「そういう事だ」

エイミィとクロノは互いに笑顔を浮かべながら、自分がするべきだと判断した作業を熟し続けていく。

本日中にしなければいけない事は粗方片付き、後はゆっくりと残った作業を熟しながら2人からの連絡を待つだけだ。

《もしもし、なのはです！》

「ああ。準備は出来たか？」

《うん！ フェイトちゃんと一緒に、もう現場にいるよー！》

「分かった、直ぐに行く」

「そうこう考えながら作業をしていると、なのはからの連絡が届き、それに応えるクロノ。」

自身の相棒であるS2Uとデュランダルを手に取り、転送ポートへと向かおうとするクロノ。

「じゃ、頑張つて」

「ああ」

そんなクロノに対し声を掛けるエイミー。

クロノはエイミーの言葉に短くもハッキリと応え、転送ポートでなのはとフェイトがいる地球から少し離れた次元世界へと転移を開始する。

「——あ、クロノ君！」

「ああ。待たせたな、なのは」

「転移が完了したと同時に、なのはとフェイトの2人の魔力のある地点ポイントへと向かうクロノ。」

そんなクロノが来た事を察知し、その姿を見付けたのか、大きな声を出して呼び掛け

るなのは。

「ん？ フェイトは一緒じゃないのか？」

『いるよー。南側上空。2人の戦いが、良く見える場所』

「そうか」

フェイトの気を感じる事は出来るが、姿が見えない事に気付き、それをなのはに尋ねると同時に、その本人から念話が届く。

フェイトからの念話による言葉を聴き、彼女の言葉に従って南側上空へと顔を向けるクロノ。

そこには、しっかりとバリジャケットを展開し、観戦体勢に入っているフェイトの姿があった。

大きく手を上に上げてブンブンと振っている彼女の様子が見て取れる。

「そう言えば君とフェイトは、普段雄介達と練習をしているらしいが……どうして僕と？」

「えつと……雄介君達は、レベルが違い過ぎるっていうか……フェイトちゃんと模擬戦をするのも良いんだけど、いろんなタイプの魔導師と戦った方が戦術の幅も広がるかなって？」

〔I think so〕

可愛らしく小首を傾げて自身の考えを口にするなのは。

そんなのには対し、クロノは「なるほど」と小さな声で吹き頷く。

雄介を始め、転生者組は特典を手にしてこの世界に生まれており、その殆どが世界を揺るがしかねない——滅ぼす事が容易だと言えるほどの実力者だ。

そんな転生者達の持つ力の一端である技術や技能などの提供といった恩恵に似たものを受けはしたが、それでもやはり、彼もしくは彼女達転生者は圧倒的な強さを誇っている。

そして、そんな転生者も実力の向上に向けた練習である修行をするのだが、追い付く事は難しい。

実際に、目の前で行われるそれらを見て、何かを悟ったのか。

「じゃあ、トレーニング、宜しくお願いします」

「ああ。じゃあ早速、軽く模擬戦といくか」

クロノは気持ちを切り替え、思考を中断し、なのはへと真っ直ぐに目を向ける。

「うんっ！ 行くよ、レイジングハート！」

【Stand by ready】

元から距離は離れていたが、更に距離を取るようにして離れ、飛行魔法を使用して移動するのはとクロノ。

【Stinger Ray】

魔力で構成された光の弾丸が高速でなのはへと向かっていく。

その速さは、気も込められている事もあつてかかなりのものであり、最早目視では対応出来ないほどのもの。

【Flash Move】

だが、レイジングハートがなのはから自身に流れてきている魔力をなのはの靴に生えている光の羽であるAccelerate Finに注ぎ込み、なのはは向かつて来るその魔力弾を軽々と回避する。

「今度はこっちの番だよ、クロノ君！」

【Accelerate Shooter】

なのはの周囲に26個もの魔力弾が同時に生成され、その全てがホーミングレーザーのようにクロノへと迫っていく。

速度も数も相当なものであり、回避する事は難しいものだ。

だが、クロノは慌てる事もなく、落ち着いた様子を見せている。

爆発が起こる。

26個の魔力弾が一気に標的にぶつかり、その全てが炸裂したのだ。

煙がモウモウと昇っていき、ゆっくりと晴れていく。

「レイジングハート……」

手にしているレイジングハートを強く握り、目の前——煙の中にいるであろう黒色の少年を警戒するなのは。

クロノの魔力も発せられている気の量も言葉に出来るほど減少はしていない。

「——す、凄い……」

煙が晴れると同時に、クロノの姿が現れる。

だが、そのクロノの姿をハッキリと直視する事は出来なかった。

氷だ。

大きな氷が盾のようにしてクロノの前に出現しており、浮かんでいる。

その氷の盾には、傷はあっても凹み一つすらもなく、砕く事が出来ないでいた。

「クロノ君、氷の魔力変換資質持ちだったっけ？」

「いや。これはデュランダルの性能のお陰だよ」

全くの無傷とも言えるクロノとなのは。

まだ、模擬戦は始まったばかりだ。

氷の盾は、ゆっくりと水へと変化し、そして地上へと落ちて行く。地上では、局所的な雨が降っているような状況だろう。

「これで終わりか？」

「ううん。まだまだよ、クロノ君」

徐々に魔力と気を高めていくのは。

なのはは高めた魔力と気を同時運用し、一瞬で距離を詰める。

「——ッ!？」

【Flash Impact】

なのはは魔力と気の両方を込め、クロノに身体ごとぶつかる。

「——な、な!？」

ぶつかるのと同時に強烈な閃光が疾走り抜け、クロノは痛みに耐えながらも思わず目を閉じてしまう。

その一瞬の間に、なのはは再びFlash Moveを使用して距離を取る。

その距離は、模擬戦開始時に取った距離の2倍以上であり、魔力と気による補正がないと互いの姿を目視出来ないほどの距離だ。

【Load Carttridge. Excellion Mode】

レイジングハートがカートリッジをロードし、Accel ModeからExcellion Modeへと一瞬で変形を済ませる。

排莖された葉莖が地上へと落ちると同時に、環状魔法陣が発生してレイジングハートを取り巻く。

【Excellention Buster. Forth Burst】

更に4回もカートリッジが読み込まれ、5つの魔力光球が発生する。真ん中に1つ、周囲に4つの魔力球だ。

魔力が十二分にチャージされると同時に、4つの魔力球から魔力砲撃が放たれる。

【Protection Powered】

クロノを守るように、S2Uとデュランダルの2機が同時に防衛魔法を発動させる。

そのお陰か、魔力障壁に阻まれ、4本の魔力砲による攻撃は防ぎきる事に成功した。

だが、1番防がなければ駄目なのは、この後に来るであろう砲撃だ。

それを理解しているのか、クロノ、そしてS2UとデュランダルはProtecti on Poweredを展開し続けている。

「ブレイク、シューーートツツ!!」

「——S2U、デュランダルツツ!!」

撃ち放たれた魔力砲撃には、気も込められている。

それに気付いたクロノは、更に魔力を解放して、その魔力障壁に、なのは同様に気を込める。

ぶつかり、大きな閃光と衝撃波を生み出す。

上空でゆつたりと流れていた雲の流れは逆転し、かなりの速度で動き始める。

上空での戦闘であるにも関わらず、地上では大地にヒビが入り、隆起などといった現象が起きる。

「——くッ」

二重の Protection Powered による防御は成功し、耐えてはいる。だが、なのはから放たれる魔力砲撃の速度と威力はクロノの予想よりも上であったのか、防御の体勢に入ったままジリジリと押され始めていく。

シールドである Protection Powered を張りながら身体を上へと動かし、その魔力砲撃を回避するクロノ。

だが、それと同時にクロノの身体は Bind で止められてしまい、身動きが出来なくなる。

「——ディレイバインド!?!」

自身の動きを封じた事に驚きつつも、それを行なったのはに対して感心と賞賛の気持ちを感じるクロノ。

「参った……僕の負けだ」

素直に負けを認め、その言葉を耳にしたのはは Bind 魔法を解除する。

「は……クロノ君、有難う御座いました!」

「凄いな、君は。また威力が上がってる」

模擬戦時の緊張が一気に解けた為か、なのはは大きく息を吐き出し、思わず脱力しかけてしまう。

お礼の言葉を述べるなのに対し、クロノは感想を言葉に出す。

そんなクロノからの賞賛の言葉を受けて、なのはは満面の笑みを浮かべた。

「えへへ……」

頬を掻きながら、その顔を少しばかり赤くして照れるなのは。

その様子を目にし、クロノは思わず顔を背けかけてしまう。

「クロノ、次は私とー!」

「ああ、待て待て、ちょっと休ませてくれ」

フェイトの言葉に、肩で息をしながら返すクロノ。

「(段々相手にするのがキツくなって来るな……)」

クロノは、息を整えながらフェイトの方を見遣る。

フェイトは、なのはとクロノの模擬戦を見て気持ち昂ぶったのか。今直ぐに模擬戦がしたい、したくて堪らないといった様子を見せている。

決して戦闘狂という訳ではないのだが、それでも彼女の興奮した様子から、そういった言葉が思わず頭の中に浮かび上がってくるほどだ。

「まあ、成長してくるのは喜ばしい事だが……」

なのはとフェイト、彼女達2人の実力——戦闘力はかなりの速度で上昇を続けており、今のクロノでは圧倒する事は出来なくなっていた。

いや、正直に言うとな回のようには負ける事が多くなってきた。

それに対し、クロノは喜ばしいという気持ちを感じながらも、何処か寂しいといった気持ちも感じていた。

「(僕もうかうかしてられないな……雄介やブロン達と同じレベルとまではいかなかったも、それでも今よりも力を付けたい)」

「はー。ザファイラのお腹は、もふもふやー」

狼形態であるザファイラに凭れ掛かりながら、その毛皮を触るはやてとヴィータ。

触り心地はなかなかのものであり、毛並みも良く、中途半端に安いソファよりも安らかな気持ちになる。言わば、人を駄目にする狼だろうか。

「昔っから、寝心地はなかなか最高なんだ」

ヴィータは自身の口にした言葉を訝しむが、それも一瞬の事で、直ぐに蕩けた表情になる。

昔——歴代の主の元での活動時のデータがほんの少し残っており、それが朧気な記憶となったのだろうか。

ザフィーラの方は、されるがままといった風であり、リインフォースはそれを見て微笑んでいる。

「そーやーねー。あつたかいしー」

「有難う御座います」

ヴィータの言葉に同意を示したはやてに対し、ザフィーラは感謝の言葉を述べる。

迷惑といった風でもなく、ただされるがまま、少し照れているのか顔を少し下に向けているザフィーラ。

「主はやて……楽しそうにしていらっしやる」

「そうだな。ザフィーラもあれで楽しいのだと思うが」

「ほんとにね……」

リインフォースとシグナム、シャマルの3人は彼女達の姿を見て、自然と微笑みを浮かべる。

されるがままにいるザフィーラは、まるでただただ気性の大人しい大型犬そのものと言える。

今は、夜になったばかりといった時間であり、先ほど夕食——夜ご飯を食べ終えたばかりだ。

台所からは水音が聞こえ、竜人が皿などの食器類を洗っているであろう事を理解させ

て来る。

シャマルはお風呂場へと向かい、入れていたお湯を止める。

「あ、はやてちゃん、ヴィータちゃん。お風呂の準備出来ましたよー」

「はーいっ!」

「じゃあな、ザフィーラ」

「ああ」

シャマルが風呂場からリビングへと戻って来、はやてとヴィータへと声を掛ける。

そのシャマルの言葉に応え、彼女に抱きかかえながらはやては風呂場へと移動をする。

ヴィータもシャマルとはやてに付いて行き、はやてと一緒にお風呂に入る準備を始める。

「さて、では私も……」

「ザフィーラ、今夜もか?」

「ああ。日課にしているのにな」

自身の側にいた2人の少女が離れ風呂場へと向かったのを見届けるのと同時に、ザフィーラはヒト型へと姿を変え、ラインフォースから投げ掛けられた質問に対して肯定の意を示す。

そのまま家の外に出て、ランニングを始めた。

「はあ……今年も、もう終わりなんだよね」

「うん……お正月は平和に過ごせそうで、何よりだね」

クロノとの模擬戦も終了し、なのはとフェイトの2人は海鳴市を軽く散策していたが、時間ももう遅いので帰宅をする事に。

夜になる時間である為に、空は暗く、街灯が灯り始める。

冬の冷たい空気は夜になる事でより冷たくなり、吐き出す息は白くハッキリと見える。

「皆で旅行も、楽しみ！」

「凄いいよね、3家族合同旅行なんて」

なのはとフェイトの言う通り、正月辺りに3家族と数名が旅行に行く予定なのだ。

年末と新年の始めである正月を迎えるための準備だけではなく、その旅行に行くための準備をする必要もあつたので、事件終了後はとても忙しいものだった。

「高町家とリンディさん御一家、すずかちゃんと忍さん達。それから……」

「私とお兄ちゃん、アルフ、アリサ！」

「雄介君、志蓮君、ブロン君！」

数名が連れて行って貰えるとは言うが、その数は7人であり、それなりに多い。いや、一家族分よりも多いと言えるだろう。

「全部で20人の大旅行！ ……はやてちゃん達も、一緒に行けたら良かったんだけど」
「ん……事件の事とかあったし……リインフォースも静養中だし」

今回の大企画とでも言える旅行ではあるが、はやてを始め八神家の皆、そしてゾイルは不参加となっている。

その事を、なのはとフェイトは残念に感じているのか、表情が少し陰る。

「春休みとかは一緒に行きたいね」

「うん……きつと」

なのはもフェイトも、リインフォースの寿命が短いものだという事は理解している。だがそれでも、口にせざるを得なかった。

日本には言霊というものが信じられており、今口にした言葉が実現するようにと祈るだけだ。

「あ、じゃあなのは、送ってくれて有り難う」

「ううん、フェイトちゃん。また明日ね」

「うん」

話しながら歩いていると、見慣れたビルが視界に入ってきて来る。

フェイトを無事、ハラオウン家が所持している家——闇の書事件時の臨時作戦本部だった場所へと送り届け、別れの挨拶を済ませ帰宅するなのは。

浮かんでいる月は綺麗なものであり、雲はその姿を隠す事も、光を遮る事もなかった。

「ヴィータ……その……今日も、良い天気だな……？」

「ああ」

ヴィータとはやてが入浴を済ませ、ザフィーラが日課のランニングを完了し帰宅してから少しの時間が経過していた。

「……………」

「……………」

2人しかいないリビングのソファで、リインフォースとヴィータは座りながら、テレビ番組を観ている。

「……………ええと……………」

何か話す事はないかと思考を巡らせるリインフォースではあるのだが、思い浮かぶ会話のネタはなく、口を開けば取り留めもない事ばかりが出て来る。

そして、先ほどの「良い天気だな……？」だ。既に夜であり、外は真っ暗。それにも関わらず、良い天気だと言ってしまう辺り、リインフォースがテンパってしまったている

事が理解出来てしまう。まあ、雨が振らず、雲が月を隠したりといった事をしていない事もあり、良い天気だというのは間違っではないのだが。

「良いよ。話す事ねーんなら、無理して喋んなくて」

「……すまない」

逆に気を使われたと感じたのか、リインフォースは思わず謝罪の言葉を口にする。

そんなリインフォースに対し、ヴィータ自身もまた、どういった風にして接すれば良いのか理解らず、無意識のうちに顔を背けてしまう。

そんな2人ではあるが、その様子を5人は別の部屋から伺っていた。

ミッドチルダ式でいうところのサーチャーを使用し、それに気付かれないように偽装するといった手の込みよう。テンパリ焦ってしまったている為か、リインフォースはその魔法に気付いてはいない。

「ヴィータとリインフォース、どう？」

「駄目です、まだまるつきり、ぎくしゃくしてます」

「何とかなるとええんやけどなー」

リビングでの2人の様子を見る事が出来るのは、魔法を使用しているシャマルだけだ。

はやてはそんなシャマルに訊いてはみるのだが、リインフォースとヴィータの仲の進

展はあまり良いと言えるようなものではないようだ。

「ヴィータは昔からああですの……互いにどうして良いのか理解らぬかと」

「すみません、面倒な連中で」

ザフィーラはそんな2人の事をしつかりと見ているのか、ヴィータとリンフォースの心情を推測し、それを言葉にする。その言葉からは冷静さを感じさせ、なるようになるだろうといった風な考えを持っているからなのだろうか。

シグナムは、そんなリンフォースとヴィータの様子を聞いて思わず、主であるはやてに謝罪してしまう。その謝罪の言葉は、問題の2人だけの事なのか、それとも自分も含めて守護騎士と管制人格全員の事についてなのか。

「いやいや、まあ、仲良くしてくれたら嬉しいんやけど」

謝罪をするシグナムの言葉を聞き、苦笑を浮かべながら否定をするはやて。

笑いながら時計を見遣ると、予定している時間が迫って来ている事に、はやては気付く。

「そろそろ時間やな……リンフォースとちよつと出掛けて来る。折角、お風呂入ったんやけどな」

「帰って来て、もう一度入れれば良い。しつかりと温めておくよ」

「そうやな。ほな、頼むな」

少し悩むはやてに対し、適当に応える竜人。

はやてが応えると同時に、竜人はお風呂場へとゆっくりとした歩みで向かった。

「主ははやて」

竜人が開きっぱなしにした扉からリインフォースが顔を覗かせて来る。

リインフォースも時間に気付いたようだ。

「行ってくるな」

「はい。どうかお気を付けて」

シグナムやシャマル、ザフィーラからの言葉に頷き、外へと出るはやてとリインフォースの2人。

時間も時間であり、外は真つ暗で、人通りは全く無いと言える。

念の為に封鎖領域を展開して、騎士甲冑を身に纏う2人。

2人同時に背中の翼を動かして一気に空へと昇り、リインフォースを監督とした魔法の練習が始まった。

「闇の書事件の事後処理も、もう殆ど終わりだねえ」

「そーだねえー」

エイミイの言葉に同意をするアルフ。

空間モニターにはその闇の書事件に関する資料が映し出されており、リインフォースなどに関する事の報告用の資料内容を再確認しているところだ。

「ただ、あれだけの大魔力を……次元世界を滅ぼしてしまう力を消し飛ばしたからな。少なくとも年内一杯……いや、2年3年の間警戒を続けないと」

夜天の書を闇の書足らしめていた闇の書の闇。その力は次元世界を1つ崩壊させる力だ。そして、それを完全とは言えないものの、ほぼ消滅と言えるレベルまで追い遣り、闇の書を夜天の書に戻した転生者達の力。

それら2つの力がぶつかり合う事で、この地球を中心にした世界には大きな歪みが出てしまっている。

その歪みと闇の書の闇が残した魔力が相互作用してしまうと、どうなってしまうのだろうか。

更に、彼等転生者と闇の書の闇を吸収した鉄鼠がぶつかった事で、短時間の間で次元震が何度起こっただろうか。次元断層が発生して、この次元世界が消滅していたかもしれない。

「このまま何も年が開けて、観測チームに引き続けると良いんだけどね」

「だよねー。旅行行きたいもん」

クロノからの心配する言葉に対して応えるフェイトとエイミイの声は、やはり来年の

旅行が楽しみなのか弾んだものになっている。待ち切れないといった気持ちが声だけではなく、2人の表情にも表れている。

だが、クロノの方はそんな2人の少女とは反対とも言える不安な気持ちで一杯だった。それは、フェイトとエイミイによる言葉がフラグになるかもしれないと考えたからか。だが、それを指摘すると、更にそのフラグが強化される事も知っており、口に出す事はしなかった。

「まあ、大丈夫よ、きつと」

「何かがあつても、細かい案件なら、僕とランディ達が残れば良い。フェイトやエイミイ達の旅行は動かないさ」

ランディの3人を安心させるかのような言葉に、クロノは書類整理をしながら母親の言葉に軽く補足を入れる。その熱心さからは、仕事の虫だといった言葉を思い浮かべせる。

「えー。クロノも一緒に良いよ。折角の合同旅行なんだから」

「ね」

「そーだよ」

自身は行かないといったその旅行は他人事だといったように話すクロノを聞いて、フェイトは彼の言葉を否定する。

そんなフェイトに強く同意をするエイミーとアルフの2人。

「そう言えば、あの娘……リインフォースは元気なのかしら？」

「うん。元気ではあるみたいだよ」

ザフィーラから訊いていたのか、アルフはリンデイの疑問の言葉に対して応える。

「流石にまだ体調は戻らないみたいで……はやての家で静養してます」

「そう。はやてさんや竜人さん、騎士達が一緒なら、回復もきつと早いよね」

「うん」

「旅行、はやてさん達も一緒に行けたら良かったんだけどね」

フェイトの言葉にリンデイは首肯き、そしてまたフェイトも首肯き返す。

希望的観測ではある事を理解してはいるが、皆が同様にリインフォースの回復を願わずにはいられなかった。

体調が回復したように見えたとしても、それは元に戻ったという事にはならない。崩壊寸前の身体から起きる痛みなどを麻痺が起きたように感じなくなるだけなのだ。緩やかではあるが、確実に消滅への一步一步を歩み続けているのだから。

だが、今日の昼に「主はやての魔法の練習に付き合いたい」といった連絡が来て、実際にその魔法の練習を行なっていたのだから、少なくとも今は大丈夫だという事だろう。

「さて。今日も食事の前に……」

「あ、練習?! 私もやる!」

「ああ、観測の次いでに少し遠出するんだが、それでも良いか?」

夕食を済ませた事で、席を立ち、外出の準備に入るクロノへと声を掛けるフェイト。

「うん、勿論!」

そしてフェイトは、クロノからの確認の声に元気良く応えてみせる。

「よし……じゃあフェイト、準備は良いか?」

「ばっちり!」

昼も魔法の練習をしたが、それでも足り無いか。フェイトはやる気に満ちた瞳をクロノに見せる。

「2人とも、気を付けてな」

「はあい。それじゃあ……バルディッシュ・アサルト、セーリットアープ!!」

【Get set】

アルフからの見送りの言葉に応えながら外に出るフェイト、そして後続くようにして出るクロノ。

バルディッシュは宝石部分をキラリと光らせ、フェイトの掛け声に従って変形、バリアジャケツトを展開した。

「うん！ 今日も絶好調！ 魔法の練習、頑張ろう！」

「スレイプニール正常起動。慣性コントロール問題無し。ラインフォース、これで平気かな？」

「はい、我が主……もうお独りでも充分に飛べていらつしやいますね」

星明かりしかない真つ暗な夜空の下で、はやてとラインフォースは飛行魔法である Sleipnir を使用している。

2人はユニゾンをする事なく、はやては独力で飛行を続けている。

ラインフォースとシヤマルが昼に行なつた模擬戦時に観戦をしていた時もそうではあったが、その時と比べると動きの方も少しマシになっており、空戦魔導師の平均的な飛行技術よりは上だと言えるくらいレベルになっていた。

「いやいや。なのはちゃんやフェイトちゃん達は、もつとビュンビュン飛んでるやん」

「あの娘達も、鍛錬と研鑽を積んで来た故です……主はまだ、修練始めてから一週間足らず。この調子で鍛錬を続けて頂ければ必ず、誰よりも立派な魔導騎士になられます」

なのはやフェイト達は舞空術を使用している事もあり、その速度は計り知れないものになりつつある。

そしてその舞空術であるが、飛行魔法だけでなくある程度の魔法を取得すれば、舞空

術などのその技術を教えて貰うといった約束になっている。

「そやな……リインフォースに教えて貰って、立派な主になってかな」

リインフォースからの言葉に首肯き、笑顔を見せるはやて。

魔法を知ったのは去年の誕生日、そしてその魔法を意識して使ったのはつい一週間前。なのは同様に出会って直ぐだという事もあり、その技術はまだ拙い。

なの場合はその直後からずつと魔法を使い続けているが、はやての方は闇の書の闇による影響やそのリンカーコアや身体を酷使する必要はないといった考えからゆつくりと学んでいつている。

それであっても、一週間で平均以上の魔導師レベルになるのだから、おそろしいものだ。

そして、そこまでのものを手にするのにははやてなりの気持ちと覚悟、考えがあった。「最後の夜天の主が魔法を扱えないというのは如何なものか」といった考え、そして家族や友人である皆の期待に応え、負担を減らす為に。

「この身に賭けて……我が魔導の全て、お伝え致します」

「ん……！　ほんなら今日も、トレーニングやってみよか！」

「はい……我が主」

気合は十分であり、余りあると感じるほどに元気な声を出すはやて。

はやては剣十字の魔導杖を握り締め、模擬戦を開始する為に戦闘態勢に入る。

そんなはやてに対し、ラインフォースは笑顔を見せ、その直後キリツとした風に表情を研ぎ澄ませ、意識を切り替える。彼女もまた、主であるはやてに応える為に、模擬戦開始と同時に魔力を解放する。

最初に攻撃を放ったのはラインフォースの方だ。距離を取ると同時に、Blood y Daggerを26本出現させ、それを放つ。

両足に魔力の渦を出現させ、飛来する26本もの短剣を回避しようと試みるはやて。

だがやはり、その短剣は既にはやてをロックオンしている為に回避し切る事は出来ず、追尾をして来る。

「それならっ!!」

叫ぶように声を上げながら、魔法を発動させるはやて。

それと同時に大きく爆発が起き、煙が発生する。

「あ……」

思わず声を掛け、無事を確認しようとしそうになるラインフォース。だが、寸でこのころでそれを自制し、煙が晴れるのを、警戒しながら待つ。

「あいたたた……」

「流石です、主はやて。Bloody Dagger同士をぶつけ合わせるとは……」

「いや……でも、少し喰らってもうたよ」

煙が晴れると同時に、はやての姿が現れる。

はやて自身に傷は無いが、彼女の着用しているバリアジャケットには、少しばかりの傷と汚れが付いている。

「では、再開します」

その言葉と同時に、再び攻撃魔法を発動するリインフォース。

今度の攻撃魔法は、スファイアから魔力弾を発射するだけのもの。だが、その数は半端なものではなく、スファイアの数だけでも7708個も存在している。目視だけで確認する事は難しい。そしてそこから発射される魔力弾の数は毎秒318個。

Photon Lancer Genocide Shiftよりも遥かに強力かつ凶悪な魔法だと言えるだろう。

「流石にこれは、避けるのは……」

その膨大な数を前にして、思わず冷や汗を流し、呟くはやて。

魔力弾がはやてへと向かって行き、爆発が起きる。

Panzerhinderisを使用して全方位に対しての防御を成功させるはやて。そのバリアの魔力光は、ヴィータの赤色とは違い、はやてのものは白色をしている。

防御に成功はしたが、その張ったPanzerhinder nisには無数の大きなヒビが入っており、今にも砕け散りそうだ。

「——っ!？」

そのPanzerhinder nisが砕け散ると同時に、リインフォースの周囲にBloody Daggerが展開される。

驚きを隠せないでいるリインフォースに、その隙を逃さずにはやてはその26本の短剣を発射する。

「やった……！ 結構、上手く出来たんとちゃう?」

そしてまた、3度目の爆発が起き、煙が晴れていく。

中からは、傷一つないリインフォースが姿を見せる。

いや、傷がないように見えたリインフォースだが、その黒い翼には少しばかりの傷と埃が付いている。

魔力を注ぎ込む事で再生させて戦闘を続ける事は出来るが、はやてがリインフォースに一撃を入れた事で、この魔法の練習である模擬戦は終了となる。

「はい……素晴らしいです」

魔法を使用し始めたのがつい一週間前とは思えないほどの力を見せるはやてに対し、素直な賞賛の言葉を送るリインフォース。

「やっぱり魔法の練習は楽しいな。リインフォースに教えて貰ってるから、余計にや
「はい……（先の防衛システム切り離しの際……我が魔導の殆どは、闇の書の闇に持って
行かれた分を除けば、主はやてにお預けしてしまった）」

リインフォースの表情は、喜ぶはやて同様に笑顔が浮かんでいる。そんなリイン
フォースではあるが、内心の方は少しばかり落ち込んだものとなっていた。

だがそれ以上にやはり、主であるはやてに対して明るい気持ちと感情を感じ、抱えて
いる。

「私が弱くなっているというものあるとはいえ……我が主も本当に、魔法の扱いが上手
になられた）」

「放出制御がもうちよい、上手く出来たらなあー。ここう……こーかな？」

「何より、才に溺れる事なく勉強熱心でいらっしやる。何れ本^{いす}当に偉大な魔導騎士にな
られるだろう。それを最後まで見届けられないのは……少しばかり、寂しくはあるか
……）」

リインフォースから教わった知識やそれに伴って伝授された技術を総動員し、自力で
のコントロールの調整を試みるはやて。

向き不向きなどがあるとはいえ、自身の不足を補おうとする姿勢は良いものだと言え
る。

リインフォースの感じた通り、この先、目の前にいるはやては力に溺れる事なく、転生者達が観てきたというアニメに出て来たはやて同様に、強く優しい魔導騎士になるだろう。

「——あれ？ 誰か、こっちに向かつて来てるような……」

「……？」

周辺に浮遊している魔力素の流れが変容した事に気付くはやて。

近付いて来る魔力を感知して、そちらの方角へと顔を向けるはやてとリインフォースの2人。

模擬戦に集中していた為に、誰かが接近して来た事に気付くのが遅れてしまったようだ。

「——!! この気配、騎士達ではない……何者だ?！」

接近して来る魔力は、家族である守護騎士達のものに酷似している。そのものだと宣言するくらいに。

だが、近づいて来るその魔力は、彼女の持っている魔力とはまた違った質の魔力であり、大きな違和感と警戒心を否応無しに与えて来る。

「我が主、どうかお隠れ下さい」

「まだ体調が戻ってないやん。私が行くよ」

そう言うと同時鬼反応のある場所へと向かおうとするリインフォースだが、それを制止するはやて。

体調——というよりもリインフォースが力を殆ど失くしてしまっている事に気が付いているのか、心配するはやて。

近付いて来る魔力の大きさはそれほど脅威に感じられるものではないが、それでもその実力を隠している可能性もある。

「ですが……」

「私が行くから、サポートしいて。戦うんは私がやる。リインフォースは少し離れたところから見てて。ええか？」

模擬戦は何度も熟しているが、はやてはまだ、実戦の方は一度しか経験していない。まだ、魔法の行使、そして戦闘というものに不慣れなはやてのことを案ずるリインフォースだが、当のはやての方は前にも出るつもりでいる。

「……は、……」

そんなはやての瞳は真剣そのものであり、その言動を受けて、リインフォースの方は洩々といった風に主であるはやてのその決意を受け、少しずつ後退していく。

そうこうしている間にも、魔力反応は段々と接近して来る。

視界に入るまで近付いて来ると同時に、視認出来たその姿は見知った守護騎士の一人

であり、癒しと補助が本職ともいえるほど得意な湖の騎士だった。

「あれ？ シヤマル？」

「……………」

『我が主、御注意を。様子が妙です』

リインフォースからの念話を受けて、注意を払いながらシヤマルらしき存在に対して声を掛けてみるはやて。

だが、そのシヤマルらしき存在は近くにいはあるはやてと遠くにいはあるリインフォースの2人を訝しむかのような様子を見せており、その瞳には2人同様に警戒の色がに染まっていた。

「小さな騎士と、融合騎。貴女達が何故、闇の書を持つてるの？」

「……………はい？」

その言葉に——シヤマルらしき存在から放たれたその言葉を受けて、もわず目を大きく見開き、素つ頓狂な声を上げてしまうはやて。

「いややな。シヤマル、どないしたん？」

「何処の何方かは存じませんが……………ひとの名を、気安く呼ばないで貰いましょう」

「……………え……………!？」

「闇の書は私達守護騎士が、命に代えても護るべきもの」

「リインフォース……これ、一体!？」

『理解りません……ですが、あれは我等の知る風の癒し手、シヤマルではありません』
「そやけど……」

シヤマルらしき存在から放たれているのは、紛れもない敵意であり、そこから吐き出される言葉。

それら全てに対して戸惑いを隠せないでいるはやてに対し、リインフォースの方も戸惑いながらも主であるはやてに警告を促す。

「さあ……! 返して頂きますよ!」

『——襲つて来ます……! ここは私が制圧を!』

「あー……何や判らんけど、取り敢えず2人とも、落ち着こう!」

シヤマルらしき存在は、宣言をすると同時にはやてに対してB i n dらしき魔法で拘束をしに掛かる。

回避する事に成功させると同時に、リインフォースからの念話とシヤマルらしき存在に対して言葉を返すはやて。

魔力で起こした風を使い、攻撃をするシヤマルらしき存在。

その攻撃を回避しながらB l o o d y D a g g e rを26本つくりだし、発射する。

その26本の紅い短剣は真つ直ぐにシャマルらしき存在へと向かい飛んで行く。
直撃コースだ。

「嘘……!?! 私の攻撃が、まるで……」

「あかん……ちよう、やり過ぎた?」

誘導制御型の魔法であるBloddy Daggerでシャマルらしき存在に攻撃を当て、距離を置くはやて。

攻撃を受けたシャマルらしき存在の着用している騎士甲冑は、ボロボロになってい
る。

「うう……この力、確かに闇の書のもの……く……ああ……っ!」

「——シャマル……ッ!」

『——コア構築が崩壊していく……やはり、これは……!』

ダメージを受けていたシャマルらしき存在は、突然苦しみ出し、その身体を崩壊させ
ていく。

それを目にして、思わず飛び寄るはやて。

それまでのシャマルらしき存在が放った言葉もあつてか、目の前で起きている現象を
目にして確信を得たリインフォース。

「リインフォース、シャマルが……」

「落ち着いて下さい、我が主。これはシャマルではありません。偽物です」

苦しんでいるシャマルらしき存在を目にして狼狽えずにはいられないでいるはやてに対し、リインフォースは接近をすると同時にそんなはやてを落ち着かせるようにして推測を話す。

「……………」

「……………消えてもーた……………」

苦しんでいたシャマルらしき存在の身体は一気に崩壊し、光となつて完全に消滅をする。そのシャマルらしき存在を構築していたコアなどが、分解されると同時に魔力素^ナになつたのだろう。

地球から少し離れた次元世界への転移を完了させ、向き合うクロノとフェイト。

互いに気合いは十二分にあり、魔力^{オト}と気が充実している。

いつでも模擬戦を開始する事が出来る臨戦態勢のような状態であり、2人は笑顔を浮かべながら口を開く。

「君も随分強くなつて来ているが、年長者の意地として、僕も早々簡単に負ける訳にもいかないからな」

「私だつて頑張るよ。なのはやアルフ達とも、ずっと練習してるんだから」

自信満々といった風に笑顔を浮かべ、バルディッシュを構えるフェイト。

クロノの方も当然な自信はあり、手にはそれぞれ2本のデバイス——S2Uとデュランダルを握っている。

デバイスであるバルディッシュ・アサルト、S2Uとデュランダルの方も準備は万端であり、それぞれの宝石部分をキラリと光らせる。

「まあ、先ずは軽く一本だ。始めるか？」

「うん、お願いします！」

そんな2人の言葉と同時に、場の空気は戦場のそれへと一変した。

互いの間に実戦と言えるものに似た緊張が疾走る。

睨み合うクロノとフェイトだが、一瞬の間だけと言えるが長時間睨み合っているようにも感じられる。

最初に動いたのはクロノだ。

即座に距離を取ろうとするクロノに対し、フェイトはそれよりも速いスピードでの接近を試みる。

「!？」

だが、そんなフェイトの動きは予想されていたのか、クロノが仕掛けていたDeal a yed Bindによって彼女の四肢は拘束されてしまう。

模擬戦が開始する前に準備していたかと思えてしまうが、S2Uとデュランダルの2機を同時に運用している為だと言えるだろうか。

生み出したその隙を利用して、すっかり十分だと思える程度の距離を取る事に成功させるクロノ。

【Stinger Ray】

動きが止まってしまったフェイトに対し、デュランダルから水色の魔力弾が発射される。

真つ直ぐに近づいていくそれはかなりの速さを誇っており、空気を切り裂きながらフェイトへと向かっていく。

Bindを解除する事に成功し、回避運動に入るフェイト。

【Load Carttridge. Haken form】

その回避をすると同時に、バルディッシュが排莢を行い変形する。

【Haken Saber】

「ハーケン、セイバーーツツ!!」

Haken formへの変形を完了させたバルディッシュを力強く振るい、金色の魔力刃をクロノへと向けて飛ばすフェイト。

魔力刃は三日月の形から円形型へと回転をしながら次第に変形していき、クロノへと

向かっていく。

回避を選択しようとするクロノだが、自動誘導性能を持つHaken formはそんな彼を追尾する。

〔Stinger Snipe〕

「ステインガースナイプッ！」

デュランダルとS2Uそれぞれから合計26もの魔力光弾が発生と同時に発射され、半数が自身に向かつて来るHaken Saberへ、もう半数は術者であるフェイトへと向かっていく。

螺旋を描きつつ進んでいく13発分のStinger SnipeはHaken Saberとぶつかり、大きく爆発を起こす。

残ったもう半数の方のStinger SnipeをS2Uが処理及びコントロールしており、デュランダルは別の魔法の準備に入る。

「——スナイプショットッ！」

13発分のStinger Snipeは、クロノの言葉キープワードに反応して加速しながらフェイトへと向かっていくが、彼女はそれを易々といった風に回避を成功させてみせた。

〔Stinger Blade Execution Shift〕

発生速度はそれまでの魔法と比べて遅いと言えるが、その *Stinger Blade* の数は比べ物にならないほどに多い魔力刃が生み出される。

318もの魔力刃は、平均的な魔導師からすると *Execution* という名前通りに処刑宣告のようなものに感じるだろう。

「……………」

これら全ての魔力刃には気も込められており、かなりの速度で飛来して来る事が想像出来、それに対してフェイトは少し焦りを感じてしまう。

「ステインガーブレイド・エクスキューションシフト!!」

水色をした318の魔力刃は、フェイトの予想以上の速さで彼女へと向かって飛んで行く。

その魔力刃は、驚愕の表情を浮かべたままのフェイトを素通りして行く。

「——な、何?！」

その光景を目にし、驚きを隠せないでいるクロノ。

そんなクロノの背後に、信じられない数の魔力刃に貫かれた筈のフェイトが、無傷の状態で彼に迫ろうとしていた。

「……………バルディッシュ」

【*Blitz Rush*】

フェイトの呼び掛けに対してバルディッシュの宝石部分が応えるようにしてキラリと光り、彼女のスピードが増し、クロノに攻撃を仕掛ける。

「——っ!!」

近付いて来るフェイトに気が付いたのか、クロノは身体を反転させて対応しようと試みるのだが、彼女の行動の方は速かったのか、間に合わない。

H a k e n f r o m 状態のバルディッシュから発生している金色の魔力刃が、クロノの首元で寸止めされた。

クロノが手にしているデュランダルの先端部分もフェイトへと向けて前に突き出されているが、彼女には届いていない。

リーチの差とフェイトの持ち味である速さが生かされた結果だろうか。

S t i n g e r B l a d e に貫かれた方のフェイトは、幻だつたかのようにその姿を歪ませ、消滅する。

「あ……危なかつたあ……」

「つとと……しまった。今回も取られてしまったか」

互いのデバイスを引つ込め、息を整えようとするクロノとフェイトの2人。

「一本取れたのは嬉しいな」

クロノから一本を取る事が出来た事で、フェイトのその声は何処か燥はしゃいでいるかのよ

うに感じさせて来る。

「そうだな。良い動きだった」

喜ぶフェイトに対して、笑顔で賞賛の言葉を送るクロノ。

だが、心からの笑顔を浮かべているフェイトとは違い、クロノの表情は笑顔のそれだが、内心は少しばかり焦りなどの気持ちを感じていた。

「じゃあクロノ、もう一回！」

「待て待て、ちよつと休憩させてくれ。取り敢えず、次は……」

笑顔を浮かべ続けているフェイトに対して、クロノの方は肩で息をしており、疲れた様子を見せている。

純粹な疲れから来ているものなのか、それとも首元で止められた魔力刃に対しての恐怖から来ているのか、クロノの息は平時と比べると少しばかり速く荒いものになっている。

少し時間を置き、クロノの息が整うのを待つ。

「それにしても驚いたな……残像拳を使うなんて」

「うん。飛行魔法も便利だけど、気を使用すると、魔力以上の速さで動く事が出来るみただし……ブロンや兄さんが組手をしている時に見て、参考にさせて貰ったんだ」

「（やはりまだ、目だけで追う癖が抜けていないか……気を追う事が出来ていれば、簡単

に対応出来ただろうが。次からは気を付けよう)」

ゾイルから教わった波紋の呼吸法を使用する事で、あっという間にクロノの息は整い、顔色も良くなる。

模擬戦を再開しようとするクロノとフェイトの2人だが、そこに通信が入った。

《クロノ君、フェイトちゃん、一緒にいる?》

「エイミー?」

「一緒にいるぞ。どうかしたか?」

エイミーからの通信を受けて応えるフェイトとクロノだが、クロノは嫌な予感を感じた。

《さつき、市内で結界が……正体不明の結界が発生したの。なのはちゃんとアルフが調査に出てくれたけど、通信が途切れがちで……》

「そんな……」

エイミーからのその報告を受けて、改めてなのはとアルフの2人が発しているであろう魔力と気を探りに入るクロノとフェイト。

結界によって遮られて入ろうとも感じ取る事が出来る筈ではあるのだが、何かに邪魔をされているのか、上手く感じ取る事が出来ない。

感じ取れないという訳ではないが、彼女達2人の魔力と気は不鮮明になっているよう

に思え、感じ取る事が難しい。

魔力を使用した念話や気を使用したテレパシーで通話及び通信を試みるのだが、なのはとアルフの2人に繋がらない。

《それに、2人が今いる世界でも、結界が現れてるの》

通信によるリンディからの言葉を聴き、辺りをサーチしてみると、確かに結界が張られている事に気が付くクロノとフェイトの2人。

模擬戦の方に集中し過ぎていたのか、その指摘を受けるまで気が付かなかつた。

「理解った。フェイト、手分けをしよう。僕はこちらの結界を確認しに」

「私は戻って、なのはとアルフに合流する。必要があれば助ける！」

「そうだ」

互いにそれぞれの役割を決め、確認をするクロノとフェイト。

クロノは結界が張られている地点へと向かい、フェイトは地球へと単独での転移を行った。

「……………」

自分以外誰も存在しないであろう家の中で1人、俺は何かから逃げるようにして一心不乱に修行をしている。

地下24階にある修行用の空間内に存在している魔力や空気などの流れは乱気流などとは比べられないほどに激しく、この空間を壊しかねないと思えてしまうと、もうほ暴力的なものだ。

その暴力的な流れを持った魔力と空気の流れは、次第に身体を傷付けていき、擦り傷を増やし続けていく。

が、波紋の呼吸の副次的効果が働きて、出来たばかりの傷は即座に修復されていき、最初から無かったかのように綺麗な肌へと戻る。

波紋の呼吸が仙豆の代わりとなり、消費した気と魔力はほんの少しではあるが、それが回復したのを感じ取る。

【Milliard doubler】

指輪の形をしたデバイスであるリユミエールは、発生させている重力を更に倍加させていく。

その倍加した重力は最終的に10億倍になり、身体に大きな負担が掛かる事で、思わず両手を床につけて膝を落としそうになる。

「まだ、だ……はあああああ……っっっ!!」

気を充実させて、身体に力を入れる。

屈しそうになった四肢に再び力が入った事で、倒れそうな状況から立ち直る。

「かー、めー、はー、めー……」

両掌に気を集中させて、圧縮していく。

魔力を込めている事もあり、両掌の間には虹色に光り輝く魔力気弾が発生し、それを限界まで小さくしていく。

その虹色の光は明滅を繰り返しており、空間内は名状しがたいものになってしまっている。

「——波あああああああああ——————っつ!!」

限界かと思えるくらいまで圧縮させた気と魔力の塊を一気に解放し、目の前に放つ。

放ったかめはめ波は空間内の壁際を疾走り、光の壁とも言える膨大なエネルギーの奔流が自身の元へと戻って来る。

後ろへと振り返り、両手を前に向けてかめはめ波を受け止める。

ジリジリと後ろに退がってしまうが、脚に力を込め、踏ん張りを利かせる。

大きな爆発と煙を起こし、空間が一瞬だけではあるが大きく歪んでしまう。

そこで予め設定していた時間が来たのか、アラーム音が室内に鳴り響く。

鳴り続けるそのアラームを切るのと同時に、リユミエールは発生と倍加させていた重力を解除する。

[Est exclamations pour un bon travail]

「ああ、ありがとう」

高めていた気を抑え、平時のそれへと落としていく。

あれだけ暴力的だった空間内は静かなものになり、一気に落ち着きを取り戻している。

〔Venez pour penser • elle, Qu'arrive-t-
Konosaki?〕

「そうだな……」

リユミエールからの唐突な質問を受け、どう返すか悩む。

この先に何が待ち受けているのか。どういった事件が起きるのか。

魔法少女リリカルなのはシリーズにおいては、ジュエルシード事件、闇の書事件、ジェイル・スカリエッティ事件といった大きな出来事が存在している。

そしてその期間の間にも、何かしらの事件が幾つか起きていた筈だ。

「そう、確か……闇の——ッ!？」

リユミエールへの解答を考えながら、地上にある2階の自室へと向かう途中で、歩きながら自身の腕——手へと何となしに目を向けてみる。

一瞬、一瞬ではあるが、その手が血で真っ赤に濡れているように見えてしまった。

「……………」

改めて見てみると、そんな事はなく、肌色をしたただの手だ。

だが、それを見続けていると、やはりあの時の感触を思い出してしまう。マッドの身体を貫いてしまった時の感触を。

「tes—vous d, accord?」

「ああ……大丈夫だ」

戸惑いながらも、心配をしてくれるリユミエールに応える。

あれから数日が経過したが、毎夜の如くその時の事、転生から意識を醒ました数日後にした事を——悪夢を見て、魘うなされてしまっている。

トラウマになっているのだろうか。

稀少技能レアスキルでそのトラウマをどうにかしたり誤魔化したり記憶を改竄したりすれば、幾らかましになるのだろう。

だが、そんな事をしようという気はあまり起こらない。

「I l e s t u n e c o n t i n u a t i o n d e l a q u e s t i o n , s , i l l v o u s p l a t r p o n d r e」

「ああ。闇の欠片事件……この時期に起こる筈だ。闇の書事件が解決して暫くといった時間軸の話だった筈——!?!」

闇の欠片事件とはどのような事件だったのかを臆おぼろげ気になった記憶の中から引っぱり

出して思い出そうとした時、見知った気が移動し、それらが感じ取り難いようになったのに気付く。

[Ma・tre, il·la·t·d·tect·, com·me·la·magi·e·an·ormale·Barri·re·magique·ont·t·l·l·argis]

『ブロン……こちらクロノだ！』

『ブロン君、聞こえるっ?!』

リュミエールからの報告と同時に、クロノとエイミイからの通信が入った。

空間モニターは展開されず、念話による音声だけがこちらに届いて来ている。

『どうした?』

大体の予想及び予測は出来るが、確認の為に2人に対して質問を投げ掛けてみた。

『まちなか街中に結界が発生してるんだ』

『アースラススタッフや皆に調査出勤を掛けたんだけど……そっちの方も、注意して』

2人が口にした情報は、リュミエールの報告と殆ど変わらないものだ。

どうやら闇の欠片事件が開始した、起きてしまったようだ。

『(成る程……先ほどから感じていた魔力と気の移動、そして感じ取り難いようになったのはそういう事か)……了解した……どうやら、俺が今いる場所の近くにもあるよう

だから、行って確認をして来る』

『なのは達もその結界に向かっている。すまないが、頼めるか?』

『ああ。だが、どうしてこう事件が立て続けに起こるんだろうな?』

『……わからない……』

俺からの質問に似た言葉に対し、答を出さないでいるクロノとエイミー。

神代ならば兎も角として、今の地球の動物では先祖返りをする事でしかリンカーコアを発現させる事は出来ない。先祖返りをする者もかなりの少数であり、そういった存在は何故かここ海鳴市に集中している。

そしてジュルシード事件や闇の書事件、外道衆の襲来などといった異常事態も頻繁に起こっている。

こういった事が起こり続ける海鳴市は、最早、特異点と呼んで良いだろう。

そういった出来事が起こる原因の1つは、簡単に想像する事が出来る。転生者だ。転生者という存在が、そういったものを引き寄せているのではないだろうか。

それを配慮してなのか、無言を貫くクロノとエイミーに対して感謝の気持ちを抱かずにはいられない。

「まあ、そんな事はどうでも良いさ……今は、目の前の事に専念するだけだ」
クロノとエイミーからの通信は終了し、戸締まりを済ませる。

誰かに見られないようにと細心の注意を払いながら、住宅街の家々の屋根の上を疾走する。音を立てないように、家の中にいる誰かが異変に気付かないようにひっそりと、それでありながら速く。

だが、誰かに見られないようにとは言うが、光の速さに匹敵する速度で動いている為に、気付くというのは無理だと言えるだろう。まあ、気付いたとしても、それは大きな音が鳴っているように思えるだけの事。

周囲にいる人々は、いつも通りの日常を過ごしており、今ここで行われている非日常的な魔法のやり取りには気付いていない。

路地裏へと移動し、展開されている結界魔法の術式プログラムを解析し、その結界内への侵入を試みる。

「……彼奴等」

最寄りの結界の中へと入ると、見覚えのある少女2人がデバイスを起動した状態で空に浮遊し、向き合っているのが見えた。

片方の少女は敵意を隠そうとする事もせず睨みを利かせ、もう片方の少女はそれに対して戸惑った様子を見せている。

「ヴィータちゃん！」

「……………」

「丁度良かった！ 一体何が起きてるの？」

「……………」

「こんな結界、一体誰が……………」

片方の白い少女——なのはの質問に対して、無言を貫き通すヴィータらしき存在。

そんなヴィータらしき存在はなのはへと確かな敵意を向けてはいるのだが、その瞳には光が無かった。その瞳は何処か空虚だと言えるものであり魂が抜けている、と言うよりも人形のように作り物のような印象を与えて来る。

「誰だ、てめエは？」

「誰って？ なのはだよ……………高町なのは!!」

口を開いたヴィータらしき存在ではあるが、やはりその様子は可怪しいと言える。

ヴィータらしき存在から放たれるその声は低く、変わらず敵意を曝け出してさらしている。なのはの事を忘れたかのように。いや、最初から知らないでいるかのようだ。

そんなヴィータらしき存在に対し、何かの冗談かと思ったのか笑いながら名乗るなどは。

「どつかで会ったか？ 悪イが、いちいち覚えちゃいねえ」

「ヴィータちゃん……………」

そんなヴィータらしき存在の言葉を聞いて、漸く訝しみ、警戒を始めるなのは。

「うるせーな……あたしには、やらなかなやらねー事があるんだ」

「ちよ……ちよつと待って、どういう事!?!」

「うるせーつつつてんだ! 邪魔する奴は、ブツ潰す!!」

狼狽え、戸惑いの様子を見せているのはへと向けて、喚きながら飛び掛かるようにして攻撃をしようとするヴィータらしき存在。

記憶を失ったかのような言動を取り攻撃をするヴィータらしき存在に戸惑いながら、回避をするなのは。

「ど、どうしちゃったの!?! ヴィータちゃん!?!」

「——なのは! そいつはヴィータじゃねえ!!」

今直ぐ介入をしようと考えた俺だが、別の場所から聞き覚えのある少年の声が聞こえて来る。

雄介だ。

なのはの側に辿り着くと同時に、彼女を護るようにして前に出る雄介。

雄介の視線はヴィータらしき存在へと向けられている。

それに対し、ヴィータらしき存在の瞳は空虚であり、視線が定まっていないうように虚ろかつ不安定なように見える。

「どういう意味なの？ 雄介君!？」

「話は後だ……来るぞっ!」

もう一度、グラーファイゼンらしきものを振り翳し、攻撃を仕掛けて来るヴィータらしき存在。

だがその動きはこちらに対して、何か違和感のようなものを感じさせて来る。

その違和感の正体は直ぐに理解出来た。

闇の書事件時に戦った時の動きと比べると、明らかにぎこちがなく、遅いのだ。

【Acceler Shooter】

なのはの周囲に桃色の魔力弾が展開され、それがヴィータらしき存在へと真つ直ぐ飛んで行く。

放たれたAcceler Shooterの直撃を受けてしまうヴィータらしき存在。

無理はないだろう。

ヴィータらしき存在は闇の書事件時のヴィータよりも遥かに弱い力であり、なのはの方は魔力と気を同時に使用しており、更になのはは修行した事でその時よりも強くなっているのだから。

【Suppression is completed】

「うん………だけど………!」

Acceler Shooterは、ヴィータらしき存在の小さな身体を見事に貫通し、穴が空いたその身体は四角い光の欠片になって、消えようとし始める。

「う……うあああつ!?!」

悲鳴を上げながら、その身体を崩壊させていくヴィータらしき存在。

驚愕の方が勝っているのか、そのヴィータらしき存在が浮かべている表情は痛みによるものではないように見える。

「——あ……ヴィータちゃん!? ……き……消えちゃった……う!」

ヴィータらしき存在が身体を完全に崩壊させ消え去るのとほぼ同時に、なのはと雄介、そして離れた場所にいる俺に向けての通信が届く。

《なのは!?! こちらユーノ!》

「ユーノ君!?!」

《雄介も、ブロンもいるんだね。丁度良かった!》

結界内にいるこちらの魔力を感知しているのか、ユーノは通信でこの場にいる3人を確かめた。

なのはと雄介の2人は、ユーノのその言葉を聞いて始めてこちらに気付いたのか、ピルの屋上で立っている俺の方へと視線を向ける。

《今起こってる事の確認が出来た。街の中に発生している結界は、闇の書の闇の残滓な

んだ。消えずに残った小さな欠片が、記憶や魔力を集めて再生しようとしている」

闇の書の闇は、闇の書だった夜天の書から分離させ、それを吸収した鉄鼠を撃破した事で消滅させる事に成功したと言える。

だが、闇の書の闇のコアは、トリプルブレイカーを受けてコアが剥き出しになる際に、その物理的データを構成していた魔力は四散した。そして、その魔力が周囲——海鳴市全域で漂う事になり、かつての闇の書の闇としてのプログラムを頼りにして、修復しようとしているのだろうか。

リインフォースの体内に巣食っていた悪性プログラムの除去も成功はしたが、それでも足り無いのだろうか。

「じゃ……じゃあ、今戦ったヴィータちゃんは……」

《そう。闇の書の闇から生まれた……言わば、闇の欠片。本物じゃない、ニセモノだ》

ユーノの言葉を聴いて、ホツといったように胸を撫で下ろし、安堵の表情を浮かべるのは。

《やっぱりこれも、知っていたの？ 雄介、ブロン？》

「ああ」

ユーノからの確認のような質問に対し、首肯く雄介。

だが、俺の方はハッキリと首肯き、応える事に抵抗があつた。

話すべき事なのかもしれないのだが、この先起こるであろう未来の事を話して良いのかどうか。その結果起こるであろう事に責任を持つ事が出来そうにないのだから、話さないでいる事の方が良いのだろうか。

そんな考えが浮かびはしたが、ついこの前感じた事——今を生きるという考えが再度浮かび上がる。

「……ああ」

雄介の返答から少し遅れて、俺も首肯く。

ウジウジと悩む事はいつでも出来、それは前世で諦めるのと同じくらいに嫌というほど繰り返して来た事だ。

この世界はアニメや漫画などの中の世界という訳ではない。

話す事で自分の知る未来とは違う結果になるかもしれないという恐怖や不安を感じはするが、どのようになるかが解らないというのが本来のものではないだろうか。

という事は、未来について話すべきではないだろうか。

などという無限ループに似た思考の迷路に迷い込んでしまい掛ける。

「……………」

「どうしたの？ ブロン君？」

「何でもない。そのうち、お前達にこの先起こるかもしれないであろう事件についてを

話さないとな、なんて思ってな」

心配だといったような表情を浮かべながら顔を覗かせて来るのには対し、俺はぎこちない笑顔を浮かべながら応える。

雄介の方をチラリと見てみると、彼も同じ事を考えたのか表現し難い顔になっていた。

だが、そんな表情も一瞬の事であり、真面目な表情へと切り替わる。

《なのはさん？ リンディです》

「はいっ！」

リンディから通信が入り、なのはは驚きながら応える。

浮かび上がっている空間モニターに映るリンディの背後には見覚えのある家具などが置かれており、彼女が地球での自宅で待機している事が出来た。

《さつき、本物のヴィータと連絡が取れたわ……偽物が出たって聞いて怒ってた。それから、なのはは無事かって》

「はい……バツチリ無事です！」

リンディからの報告とその話の中のヴィータの言動を耳にして、なのはは元氣一杯に応えた。

『高町なのは、フェイト・テストロッサ、上条雄介、保和歩栄……聞こえるか？ 私だ』

覚えのある気と魔力が地球に転移して来るのを感じるのと同時に、リインフォースからの念話が届く。

フェイトの名前も呼んだあたり、彼女も近くにいるのだろう。

「リインフォースさん」

『闇の書の残滓が迷惑を掛けているとの事で……本当にすまない……形になって現れているのは、この街で戦った魔導師や騎士達の、記憶と願いだ。燃え残った願い、苦しんでいた記憶。そんな負の感情が形を取っている』

「だったら……助けてあげなきゃいけないですね」

リインフォースによる説明を受けて、なのはは優しい表情を浮かべながらも、その瞳は真つ直ぐとしたものになっている。

『頼めた義理では無いのだが……それでも頼む。闇の欠片達を……眠らせてやって欲しい』

闇の欠片が出て来てしまった事に、そういった現象が起きてしまっている事態に対して強い責任を感じているのか、リインフォースの声は酷く落ち込んでるように低い。そして、その彼女の言葉は震えており、懇願しているかのように感じさせた。

「大丈夫です……任せて下さい！」

そんなリインフォースに対し、なのはは元氣良く、そして力強く応えてみせる。

「そうだな。俺達が眠らせてやろうぜ……いや、悪い夢から醒まさせてやると言うべきか……」

なのはと雄介の2人の言葉を聞いたラインフォースは、安心したといったように大きく溜め息を吐き、それと同時に通信と念話が終了した。

『はやてちゃん。はやてちゃん、聞こえる?』

『なのはちゃん!? うん、聞こえます!』

なのはからの念話に驚きながらも、慌てる事はせず応えるはやて。

『何だか妙な事態が起こってるの。海鳴市内を中心に、いろんなところでヘンな反応が……』

『不安定で不定形の魔力反応……闇の欠片が、幾つも……』

『うん。ラインフォースから聴いとるよ』

フェイトからも念話が届き、そんななのはとフェイトの2人の言葉に応えるはやて。

『闇の書事件の事後処理……クロノや私達の仕事だ』

『うん。私もやるよ』

『はやてちゃん!?!』

フェイトの言葉に応えるはやてだが、それに対して驚くなのは。

フエイトの方も、言葉に出してはいないが、驚いているのが判る。

『闇の書の後始末なら、夜天の主の成すべき事や』

『理解った。クロノ達にも連絡するよ』

今は夜天の書であるが、闇の書の主としての責任を感じ、はやては強く宣言をした。

そんなはやての強い気持ちを汲み取ったのか、なのはとフエイトの2人はそれを承諾した。

『気を付けてね。ピンチの時はいつでも連絡を！』

『うん。』

なのはからの言葉に感謝の気持ちを示し、はやてはリインフォースの方に顔を向ける。

「竜人兄ちゃんやシグナム達にも手伝ってもらお。それからリインフォース、付いて来てくれるか？」

「はい……何処まででも。(闇の書の呪いは、やはりそう簡単には消えてくれないか……それに、壊れたこの身では、主にお力を貸す事も……)」

命令ではなく頼み込むといったかたちで話すはやてを前に、リインフォースは笑顔でそれに応える。

だが、リインフォースの内心は自身の無力さを強く悔み、齒噛みするものであった。